

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (18)

# 後 迫 遺 跡

2001

大分県教育委員会

ウシロ  
後 迫 遺 跡

ザコ  
迫

遺 跡





後迫遺跡全景





小型仿製鏡



勾玉・投弾

# 序 文

大分県教育委員会では、昭和 58 年度以来、日本道路公団の委託を受け、九州横断自動車道(大分自動車道)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。当事業に係る発掘調査は平成 7 年度に完了しましたが、発掘調査の成果につきましては資料等の整理を継続して実施しており、逐次その調査報告を刊行しているところです。本書はその第 18 集にあたります。

本書に記載された日田市所在の後迫遺跡からは、弥生時代中期から後期の遺構・遺物が発見されています。これは日田地方の優れた弥生文化の人たちの営みの一端を示すものであり、この地域の歴史を考察する上でも重要な資料となるものと思われます。今後、本書が地域の貴重な文化遺産の保護・啓発並びに学術研究に役立てば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御協力いただきました関係各位及び地元の方々に対し、深く感謝の意を表しますとともに厚くお礼を申し上げます。

平成 13 年 3 月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

# 例 言

1. 本書は九州横断自動車道建設（日田～玖珠間）に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成3年度から、平成5年度に調査した日田市の後迫遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は日本道路公団の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、日田市教育委員会並びに地元の方々のご助力を得た。
5. 本書に使用した座標系は、昭和43年建設省告示3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
6. 出土遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室で保管・管理している。
7. 本書の執筆・編集は友岡信彦が行った。

# 本文目次

序文

例言

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の成果	7
1. 遺跡の概要	7
2. 遺構番号の変更	8
3. 調査の成果	11
A. 弥生・古墳時代	11
a) 竪穴住居跡	11
b) 土坑	179
c) 粘土採掘坑	211
d) 埋甕遺構	222
e) 石棺・石蓋土坑墓	223
f) 土坑墓	228
g) 甕棺（壺棺）墓	233
B. 古代	258
a) 土坑	258
b) 掘立柱建物跡	260
C. 中世	268
a) 土坑	268
b) 中世墓	270
c) 中世遺物	271
D. 一括遺物	271
IV. まとめ	281

# 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	1
第2図	日田市主要遺跡分布図及び遺跡名	5~6
第3図	後迫遺跡路線内位置図	7
第4図	後迫遺跡周辺地形図	8
第5図	後迫遺跡遺構配置図	9~10
第6図	1・2号住居跡実測図	11
第7図	1号住居跡出土遺物実測図	12
第8図	2号住居跡出土遺物実測図	13
第9図	3号住居跡出土遺物実測図	15
第10図	3号住居跡実測図	15
第11図	4号住居跡実測図	16
第12図	4号住居跡出土遺物実測図1	17
第13図	4号住居跡出土遺物実測図2	18
第14図	5~7号住居跡実測図	21
第15図	5・6号住居跡出土遺物実測図	21
第16図	8号住居跡実測図	22
第17図	8号住居跡出土遺物実測図1	23
第18図	8号住居跡出土遺物実測図2	24
第19図	9号住居跡実測図	26
第20図	9号住居跡出土遺物実測図	27
第21図	10号住居跡実測図	28
第22図	10号住居跡出土遺物実測図	29
第23図	11号住居跡実測図	31
第24図	11号住居跡出土遺物実測図	32
第25図	12号住居跡実測図	34
第26図	12号住居跡出土遺物実測図	35
第27図	13号住居跡実測図	36
第28図	14号住居跡実測図	36
第29図	14号住居跡出土遺物実測図	37
第30図	15号住居跡実測図	38
第31図	15号住居跡出土遺物実測図	39
第32図	16号住居跡実測図	40
第33図	16号住居跡出土遺物実測図1	41
第34図	16号住居跡出土遺物実測図2	42
第35図	16号住居跡出土遺物実測図3	43
第36図	17号住居跡実測図	46
第37図	17号住居跡出土遺物実測図	47
第38図	18号住居跡実測図	49
第39図	18号住居跡出土遺物実測図	50
第40図	19号住居跡実測図	52
第41図	19号住居跡出土遺物実測図	52
第42図	20号住居跡実測図	53
第43図	20号住居跡出土遺物実測図1	54
第44図	20号住居跡出土遺物実測図2	55
第45図	21~23号住居跡実測図	57~58
第46図	22号住居跡出土遺物実測図	59
第47図	24・25号住居跡実測図及び出土遺物実測図	60
第48図	26号住居跡実測図	62

第49回	26号住居跡出土遺物実測図	62
第50回	27号住居跡出土遺物実測図	63
第51回	27号住居跡実測図	64
第52回	28号住居跡実測図	65
第53回	28号住居跡出土遺物実測図	66
第54回	29号住居跡実測図	68
第55回	29号住居跡出土遺物実測図	69
第56回	30号住居跡実測図	70
第57回	31～33号住居跡実測図	71
第58回	31号住居跡出土遺物実測図 1	72
第59回	31号住居跡出土遺物実測図 2	73
第60回	32号住居跡出土遺物実測図	74
第61回	34～36号住居跡実測図	77～78
第62回	34号住居跡出土遺物実測図 1	79
第63回	34号住居跡出土遺物実測図 2	80
第64回	36号住居跡出土遺物実測図	80
第65回	37・38号住居跡実測図	83～84
第66回	37・38号住居跡出土遺物実測図	85
第67回	39号住居跡実測図	87
第68回	40号住居跡実測図	88
第69回	41～43号住居跡実測図	89～90
第70回	41・42号住居跡出土遺物実測図	92
第71回	44号住居跡実測図	93
第72回	44号住居跡出土遺物実測図	94
第73回	45号住居跡実測図	95
第74回	46・47号住居跡実測図	96
第75回	46・47号住居跡出土遺物実測図	97
第76回	48号住居跡実測図	98
第77回	48号住居跡出土遺物実測図	98
第78回	49号住居跡実測図	100
第79回	49号住居跡出土遺物実測図	100
第80回	50号住居跡出土遺物実測図	101
第81回	50号住居跡実測図	101
第82回	51号住居跡実測図	102
第83回	52号住居跡実測図	103
第84回	52号住居跡出土遺物実測図	103
第85回	53号住居跡実測図	104
第86回	53号住居跡出土遺物実測図	105
第87回	54号住居跡実測図	105
第88回	55号住居跡実測図	106
第89回	55号住居跡出土遺物実測図	107
第90回	56号住居跡実測図	108
第91回	57号住居跡実測図	109
第92回	57号住居跡出土遺物実測図	110
第93回	58号住居跡出土遺物実測図	111
第94回	58号住居跡実測図	111
第95回	59号住居跡実測図	112
第96回	59号住居跡出土遺物実測図	113
第97回	60号住居跡出土遺物実測図	113
第98回	60号住居跡実測図	114
第99回	61号住居跡実測図	115

第100図	61号住居跡出土遺物実測図	116
第101図	61号住居跡南側遺構及び出土遺物実測図	117
第102図	62・63号住居跡実測図	118
第103図	62号住居跡出土遺物実測図	119
第104図	63号住居跡出土遺物実測図	120
第105図	64号住居跡実測図	122
第106図	64号住居跡出土遺物実測図	123
第107図	65号住居跡実測図	124
第108図	65号住居跡出土遺物実測図	125
第109図	66号住居跡実測図	126
第110図	66号住居跡出土遺物実測図 1	127
第111図	66号住居跡出土遺物実測図 2	128
第112図	67～69号住居跡実測図	130
第113図	68号住居跡カマ下実測図	131
第114図	67号住居跡出土遺物実測図 1	132
第115図	67号住居跡出土遺物実測図 2	133
第116図	67号住居跡出土遺物実測図 3	134
第117図	67号住居跡出土遺物実測図 4	135
第118図	68・69号住居跡出土遺物実測図	136
第119図	70号住居跡出土遺物実測図	139
第120図	70・71号住居跡実測図	139
第121図	72号住居跡実測図	140
第122図	73号住居跡実測図	141～142
第123図	73号住居跡出土遺物実測図 1	144
第124図	73号住居跡出土遺物実測図 2	145
第125図	74～76号住居跡実測図	147～148
第126図	74～76号住居跡出土遺物実測図	149
第127図	77号住居跡実測図	151
第128図	78号住居跡実測図	152
第129図	78号住居跡出土遺物実測図	153
第130図	79号住居跡及び出土遺物実測図	154
第131図	80号住居跡及び出土遺物実測図	155
第132図	81～83号住居跡実測図	157～158
第133図	81～83号住居跡出土遺物実測図	159
第134図	84・85号住居跡実測図	161
第135図	84・85号住居跡出土遺物実測図	162
第136図	86・87号住居跡実測図	164
第137図	86・87号住居跡出土遺物実測図	166
第138図	88号住居跡出土遺物実測図	167
第139図	88号住居跡実測図	168
第140図	89号住居跡及び出土遺物実測図	169
第141図	90号住居跡実測図	170
第142図	90号住居跡出土遺物実測図	171
第143図	91号住居跡実測図	172
第144図	91号住居跡出土遺物実測図	172
第145図	92号住居跡実測図	173
第146図	92号住居跡出土遺物実測図	174
第147図	93号住居跡出土遺物実測図	176
第148図	93号住居跡実測図	176
第149図	94号住居跡実測図	177
第150図	95号住居跡出土遺物実測図	177



第151図	95号住居跡実測図	178
第152図	1～3号土坑実測図	180
第153図	4～6号土坑実測図	181
第154図	7号土坑実測図	182
第155図	7号土坑出土遺物実測図1	183
第156図	7号土坑出土遺物実測図2	184
第157図	8～11号土坑実測図	186
第158図	12号土坑及び出土遺物実測図	187
第159図	13～15号土坑実測図	189
第160図	16・17号土坑実測図	191
第161図	18・19号土坑実測図	192
第162図	20・21号土坑実測図	193
第163図	22号土坑及び出土遺物実測図	194
第164図	23号土坑及び出土遺物実測図	195
第165図	24・25号土坑実測図	196
第166図	26～28号土坑実測図	197
第167図	29号土坑及び出土遺物実測図	198
第168図	30～32号土坑実測図	200
第169図	33・34号土坑実測図	201
第170図	35号土坑実測図	202
第171図	36号土坑出土遺物実測図	202
第172図	42号土坑出土遺物実測図	202
第173図	36号土坑実測図	203
第174図	37～42号土坑実測図	204
第175図	43・44号土坑実測図	206
第176図	43・44号土坑出土遺物実測図1	207
第177図	43・44号土坑出土遺物実測図2	208
第178図	45・46号土坑実測図	210
第179図	51号採掘坑実測図	211
第180図	52号採掘坑実測図	212
第181図	53号採掘坑実測図	213
第182図	54号採掘坑及び出土遺物実測図	214
第183図	55号採掘坑及び出土遺物実測図	216
第184図	56号採掘坑及び出土遺物実測図	217
第185図	57号採掘坑及び出土遺物実測図	218
第186図	57号採掘坑実測図	219～220
第187図	58号採掘坑実測図	221
第188図	59号採掘坑実測図	222
第189図	埋甕遺構及び出土遺物実測図	222
第190図	1号墓実測図	223
第191図	2号墓実測図	224
第192図	2号墓出土遺物実測図	224
第193図	3号墓実測図	225
第194図	4号墓実測図	225
第195図	5号墓実測図	226
第196図	6号墓実測図	227
第197図	11号墓実測図	228
第198図	12号墓実測図	228
第199図	13・14号墓実測図	229
第200図	15号墓実測図	229
第201図	16号墓実測図	230

第202図	17号墓実測図	230
第203図	18号墓実測図	230
第204図	19号墓実測図	231
第205図	20号墓実測図	231
第206図	21号墓実測図	231
第207図	22号墓実測図	232
第208図	23号墓実測図	232
第209図	24号墓実測図	232
第210図	1号甕棺墓実測図	233
第211図	1号甕棺墓出土遺物実測図	233
第212図	2号甕棺墓実測図	235
第213図	2号甕棺墓出土遺物実測図	236
第214図	3号甕棺墓実測図	237
第215図	4号甕棺墓実測図	238
第216図	3号甕棺墓出土遺物実測図	239
第217図	4号甕棺墓出土遺物実測図	239
第218図	5号甕棺墓実測図	240
第219図	5号甕棺墓出土遺物実測図	240
第220図	6号甕棺墓出土遺物実測図	241
第221図	6号甕棺墓実測図	241
第222図	7号甕棺墓実測図	242
第223図	7号甕棺墓出土遺物実測図	243
第224図	8号甕棺墓実測図	244
第225図	8号甕棺墓出土遺物実測図	245
第226図	9号甕棺墓実測図	246
第227図	9号甕棺墓出土遺物実測図	246
第228図	10号甕棺墓実測図	247
第229図	10号甕棺墓出土遺物実測図	248
第230図	11号甕棺墓実測図	249
第231図	12号甕棺墓実測図	249
第232図	11号甕棺墓出土遺物実測図	250
第233図	12号甕棺墓出土遺物実測図	251
第234図	13号甕棺墓実測図	252
第235図	13号甕棺墓出土遺物実測図	253
第236図	14号甕棺墓実測図	254
第237図	14号甕棺墓出土遺物実測図	255
第238図	15号甕棺墓実測図	256
第239図	15号甕棺墓出土遺物実測図	257
第240図	61号土坑及び出土遺物実測図	258
第241図	62号土坑及び出土遺物実測図	259
第242図	建物1実測図	260
第243図	建物2実測図	261
第244図	建物3実測図	261
第245図	建物4実測図	262
第246図	建物5実測図	263
第247図	建物6実測図	264
第248図	建物7実測図	265
第249図	建物8実測図	266
第250図	建物9実測図	267
第251図	71号土坑実測図	268
第252図	72号土坑及び出土遺物実測図	269

第253図	31号墓及び出土遺物実測図	270
第254図	中世遺物実測図	271
第255図	石器実測図1	272
第256図	石器実測図2	273
第257図	石器実測図3	274
第258図	石斧実測図	275
第259図	石包丁実測図1	276
第260図	石包丁実測図2	277
第261図	砥石実測図1	278
第262図	砥石実測図2	279
第263図	石・鉄器、玉類実測図	280

## 表 目 次

表1	1号住居跡出土土器観察表	14
表2	2号住居跡出土土器観察表	14
表3	2号住居跡出土石器計測表	14
表4	3号住居跡出土土器観察表	16
表5	4号住居跡出土土器観察表	19~20
表6	4号住居跡出土石器計測表	20
表7	5・6号住居跡出土土器観察表	20
表8	8号住居跡出土土器観察表	25
表9	8号住居跡出土鉄器計測表	25
表10	8号住居跡出土石器計測表	25
表11	9号住居跡出土土器観察表	27~28
表12	10号住居跡出土土器観察表	30
表13	11号住居跡出土土器観察表	33
表14	11号住居跡出土石製品計測表	33
表15	11号住居跡出土鉄器計測表	33
表16	11号住居跡出土石器計測表	33
表17	12号住居跡出土土器観察表	35
表18	12号住居跡出土鉄器計測表	35
表19	12号住居跡出土石器計測表	35
表20	14号住居跡出土土器観察表	37
表21	14号住居跡出土石器計測表	37
表22	15号住居跡出土土器観察表	39
表23	15号住居跡出土石器計測表	39
表24	16号住居跡出土土器観察表	44~45
表25	16号住居跡出土石器計測表	45
表26	16号住居跡出土鉄器計測表	45
表27	17号住居跡出土土器観察表	48
表28	17号住居跡出土鉄器計測表	48
表29	17号住居跡出土石器計測表	48
表30	18号住居跡出土土器観察表	51
表31	18号住居跡出土石器計測表	51
表32	18号住居跡出土鉄器計測表	51
表33	19号住居跡出土石器計測表	51
表34	19号住居跡出土鉄器計測表	51
表35	20号住居跡出土石器計測表	55

表36	20号住居跡出土土器觀察表	56
表37	22号住居跡出土土器觀察表	59
表38	24・25号住居跡出土土器觀察表	61
表39	26号住居跡出土土器觀察表	61
表40	27号住居跡出土土器觀察表	63
表41	27号住居跡出土石器計測表	63
表42	28号住居跡出土土器觀察表	67
表43	29号住居跡出土土器觀察表	68・70
表44	29号住居跡出土石器計測表	70
表45	31号住居跡出土土器觀察表	75
表46	32号住居跡出土土器觀察表	75
表47	32号住居跡出土鉄器計測表	76
表48	34号住居跡出土土器觀察表	81
表49	34号住居跡出土石器計測表	82
表50	36号住居跡出土土器觀察表	82
表51	36号住居跡出土石器計測表	82
表52	37号住居跡出土土器觀察表	86
表53	37号住居跡出土石器計測表	86
表54	38号住居跡出土土器觀察表	86
表55	38号住居跡出土石器計測表	86
表56	41・42号住居跡出土土器觀察表	91
表57	44号住居跡出土土器觀察表	94
表58	46・47号住居跡出土土器觀察表	97
表59	46号住居跡出土石器計測表	97
表60	48号住居跡出土土器觀察表	99
表61	49号住居跡出土石器計測表	100
表62	50号住居跡出土石器計測表	101
表63	52号住居跡出土土器觀察表	103
表64	53号住居跡出土石器計測表	104
表65	55号住居跡出土土器觀察表	107
表66	55号住居跡出土石器計測表	107
表67	55号住居跡出土鉄器計測表	107
表68	57号住居跡出土土器觀察表	109
表69	57号住居跡出土土製品計測表	110
表70	58号住居跡出土土器觀察表	111
表71	59号住居跡出土土器觀察表	113
表72	59号住居跡出土石器計測表	113
表73	60号住居跡出土土器觀察表	114
表74	61号住居跡出土石器計測表	115
表75	61号住居跡出土土器觀察表	117
表76	61号住居跡南側遺構出土土器觀察表	117
表77	62号住居跡出土土器觀察表	121
表78	63号住居跡出土土器觀察表	121
表79	63号住居跡出土石器計測表	121
表80	64号住居跡出土土器觀察表	123
表81	65号住居跡出土石器計測表	124
表82	65号住居跡出土土器觀察表	125
表83	66号住居跡出土土器觀察表	128~129
表84	66号住居跡出土石器計測表	129
表85	67号住居跡出土土器觀察表	136~137
表86	67号住居跡出土石器計測表	138

表 87	68号住居跡出土土器觀察表	138
表 88	68号住居跡出土石器計測表	138
表 89	69号住居跡出土土器觀察表	138
表 90	70号住居跡出土土器觀察表	140
表 91	73号住居跡出土土器觀察表	143
表 92	73号住居跡出土土製品計測表	146
表 93	73号住居跡出土玉類計測表	146
表 94	74号住居跡出土石器計測表	150
表 95	75号住居跡出土土器觀察表	150
表 96	75号住居跡出土石器計測表	150
表 97	75号住居跡出土玉類計測表	150
表 98	76号住居跡出土土器觀察表	150
表 99	76号住居跡出土石器計測表	150
表100	77号住居跡出土土器觀察表	151
表101	78号住居跡出土土器觀察表	153
表102	78号住居跡出土玉類計測表	153
表103	78号住居跡出土石器計測表	153
表104	79号住居跡出土土器觀察表	154
表105	80号住居跡出土土器觀察表	155
表106	81号住居跡出土土器觀察表	160
表107	81号住居跡出土石器計測表	160
表108	82号住居跡出土石器計測表	160
表109	82号住居跡出土鉄器計測表	160
表110	83号住居跡出土土器觀察表	160
表111	83号住居跡出土石器計測表	160
表112	84号住居跡出土土器觀察表	163
表113	84号住居跡出土石器計測表	163
表114	85号住居跡出土土器觀察表	163
表115	85号住居跡出土石器計測表	163
表116	85号住居跡出土鉄器計測表	163
表117	86号住居跡出土土器觀察表	165
表118	86号住居跡出土石器計測表	167
表119	87号住居跡出土土器觀察表	167
表120	87号住居跡出土石器計測表	167
表121	88号住居跡出土土器觀察表	168
表122	89号住居跡出土土器觀察表	168
表123	90号住居跡出土土器觀察表	171
表124	91号住居跡出土土器觀察表	172
表125	92号住居跡出土土器觀察表	175
表126	92号住居跡出土鉄器計測表	175
表127	92号住居跡出土石器計測表	175
表128	93号住居跡出土土器觀察表	176
表129	95号住居跡出土土器觀察表	178
表130	95号住居跡出土石器計測表	178
表131	7号土坑出土土器觀察表	185
表132	12号土坑出土土器觀察表	188
表133	22号土坑出土石器計測表	194
表134	22号土坑出土土器觀察表	195
表135	23号土坑出土土器觀察表	196
表136	29号土坑出土土器觀察表	198
表137	36号土坑出土石器計測表	202

表138	42号土坑出土土器觀察表	202
表139	43·44号土坑出土土器觀察表	209
表140	43号土坑出土鉄器計測表	209
表141	44号土坑出土石器計測表	209
表142	54号採掘坑出土石器計測表	214
表143	55号採掘坑出土土器觀察表	215
表144	55号採掘坑出土石器計測表	215
表145	56号採掘坑出土土器觀察表	215
表146	57号採掘坑出土土器觀察表	218
表147	57号採掘坑出土石器計測表	218
表148	埋甕遺構出土土器觀察表	223
表149	1号甕棺墓出土土器觀察表	234
表150	2号甕棺墓出土土器觀察表	234
表151	3号甕棺墓出土土器觀察表	237
表152	4号甕棺墓出土土器觀察表	239
表153	5号甕棺墓出土土器觀察表	240
表154	6号甕棺墓出土土器觀察表	241
表155	7号甕棺墓出土土器觀察表	242
表156	8号甕棺墓出土土器觀察表	246
表157	9号甕棺墓出土土器觀察表	246
表158	10号甕棺墓出土土器觀察表	248
表159	11号甕棺墓出土土器觀察表	250
表160	12号甕棺墓出土土器觀察表	250
表161	13号甕棺墓出土土器觀察表	253
表162	14号甕棺墓出土土器觀察表	254
表163	15号甕棺墓出土土器觀察表	256
表164	61号土坑出土土器觀察表	258
表165	62号土坑出土土器觀察表	259
表166	72号土坑出土土器觀察表	270
表167	31号墓出土土器觀察表	270
表168	中世土器觀察表	271
表169	石器計測表	271
表170	石斧計測表	271
表171	石包丁計測表	277
表172	砥石計測表	279
表173	石鍋計測表	279
表174	紡錘車計測表	279
表175	土製勾玉觀察表	280
表176	玉類計測表	280
表177	鉄器計測表	280

# 写真図版目次

- 図版 1 全景
- 図版 2 全景
- 図版 3 B-1・2区全景
- 図版 4 B-3・4区全景
- 図版 5 1・2号住居跡、4号住居跡、5～7号住居跡
- 図版 6 8・9号住居跡・2号土坑、10号住居跡、11号住居跡
- 図版 7 12号住居跡、13号住居跡、15号住居跡
- 図版 8 16号住居跡、17号住居跡、18号住居跡
- 図版 9 19号住居跡、20号住居跡、21号住居跡
- 図版10 23号住居跡・7号土坑、26・27号住居跡、28号住居跡・54・55号採掘坑
- 図版11 31～33号住居跡・56号採掘坑、34～38号住居跡、37号住居跡
- 図版12 39号住居跡、40号住居跡、41～43号住居跡
- 図版13 44号住居跡、45号住居跡、46・47号住居跡
- 図版14 48号住居跡、49号住居跡、50号住居跡
- 図版15 51号住居跡、53・54号住居跡、55号住居跡
- 図版16 58号住居跡、59号住居跡、60号住居跡
- 図版17 61号住居跡、61号住居跡南側遺構、63号住居跡
- 図版18 63号住居跡遺物出土状況、64号住居跡、65号住居跡
- 図版19 66号住居跡、67・68号住居跡、69号住居跡
- 図版20 70号住居跡、73号住居跡、74号住居跡
- 図版21 75・76号住居跡、77号住居跡・60号土坑、78号住居跡
- 図版22 81・82号住居跡、82号住居跡炉跡検出状況、85号住居跡
- 図版23 84・85号住居跡、86・87号住居跡、88号住居跡
- 図版24 89号住居跡、90号住居跡、91号住居跡
- 図版25 92号住居跡・61号土坑、93号住居跡、95号住居跡
- 図版26 1号土坑、2号土坑、3号土坑
- 図版27 7号土坑、8・9号土坑、12号土坑遺物出土状況
- 図版28 12号土坑、16号土坑、18号土坑
- 図版29 19号土坑、20号土坑、21号土坑
- 図版30 22号土坑、24号土坑、29号土坑
- 図版31 36号土坑、37号土坑、43・44号土坑
- 図版32 51号採掘坑、52号採掘坑、53号採掘坑
- 図版33 54号採掘坑、55号採掘坑、56号採掘坑
- 図版34 57号採掘坑、58号採掘坑、59号採掘坑
- 図版35 59号採掘坑、埋甕遺構、1号墓
- 図版36 2号墓、2号墓仿製鏡出土状況、3号墓
- 図版37 5号墓
- 図版38 6号墓、11号墓
- 図版39 13～16号墓、17号墓、19号墓
- 図版40 20号墓、21号墓、22号墓
- 図版41 23号墓、24号墓、1号甕棺墓
- 図版42 1号甕棺墓、2号甕棺墓、3号甕棺墓
- 図版43 4号甕棺墓、5号甕棺墓、6号甕棺墓
- 図版44 7号甕棺墓、8号甕棺墓、10号甕棺墓
- 図版45 11号甕棺墓、12号甕棺墓、13号甕棺墓
- 図版46 15号甕棺墓、62号土坑、建物 1
- 図版47 建物 2、建物 3、建物 4
- 図版48 建物 5、建物 6、建物 8

- 図版49 建物9、71号土坑、31号墓  
図版50 1・2号住居跡出土遺物  
図版51 3・4号住居跡出土遺物  
図版52 4号住居跡出土遺物  
図版53 5・6・8号住居跡出土遺物  
図版54 8・9号住居跡出土遺物  
図版55 9・10号住居跡出土遺物  
図版56 11号住居跡出土遺物  
図版57 12・14・15号住居跡出土遺物  
図版58 16号住居跡出土遺物  
図版59 16号住居跡出土遺物  
図版60 16～18号住居跡出土遺物  
図版61 19・22号住居跡出土遺物  
図版62 22・24～28号住居跡出土遺物  
図版63 28・29号住居跡出土遺物  
図版64 29・31号住居跡出土遺物  
図版65 31・32号住居跡出土遺物  
図版66 34号住居跡出土遺物  
図版67 34・36～38・41号住居跡出土遺物  
図版68 42・44・46～48号住居跡出土遺物  
図版69 52・55・57号住居跡出土遺物  
図版70 58・60～62号住居跡出土遺物、61号住居跡南側遺構出土遺物  
図版71 62・63号住居跡出土遺物  
図版72 64～66号住居跡出土遺物  
図版73 66・67号住居跡出土遺物  
図版74 67号住居跡出土遺物  
図版75 67号住居跡出土遺物  
図版76 67～69号住居跡出土遺物  
図版77 73号住居跡出土遺物  
図版78 75～79号住居跡出土遺物  
図版79 80・83～85号住居跡出土遺物  
図版80 86・87号住居跡出土遺物  
図版81 89～93・95号住居跡出土遺物  
図版82 7・12号土坑出土遺物  
図版83 22・23・29・36・43・44号土坑出土遺物  
図版84 43・44号土坑出土遺物、55・56号採掘坑出土遺物、埋甕遺構出土遺物  
図版85 1～4号甕棺墓  
図版86 5～9号甕棺墓  
図版87 10～15号甕棺墓  
図版88 61・62・72号土坑出土遺物、31号墓出土遺物、2号墓出土小型仿製鏡  
図版89 石器類  
図版90 磨製・打製石斧  
図版91 石包丁  
図版92 石包丁  
図版93 石包丁・石戈・紡錘車・分銅型石器  
図版94 砥石  
図版95 砥石  
図版96 砥石  
図版97 砥石  
図版98 石皿・敲石・石鍋・磨石・勾玉・投弾  
図版99 鉄器類



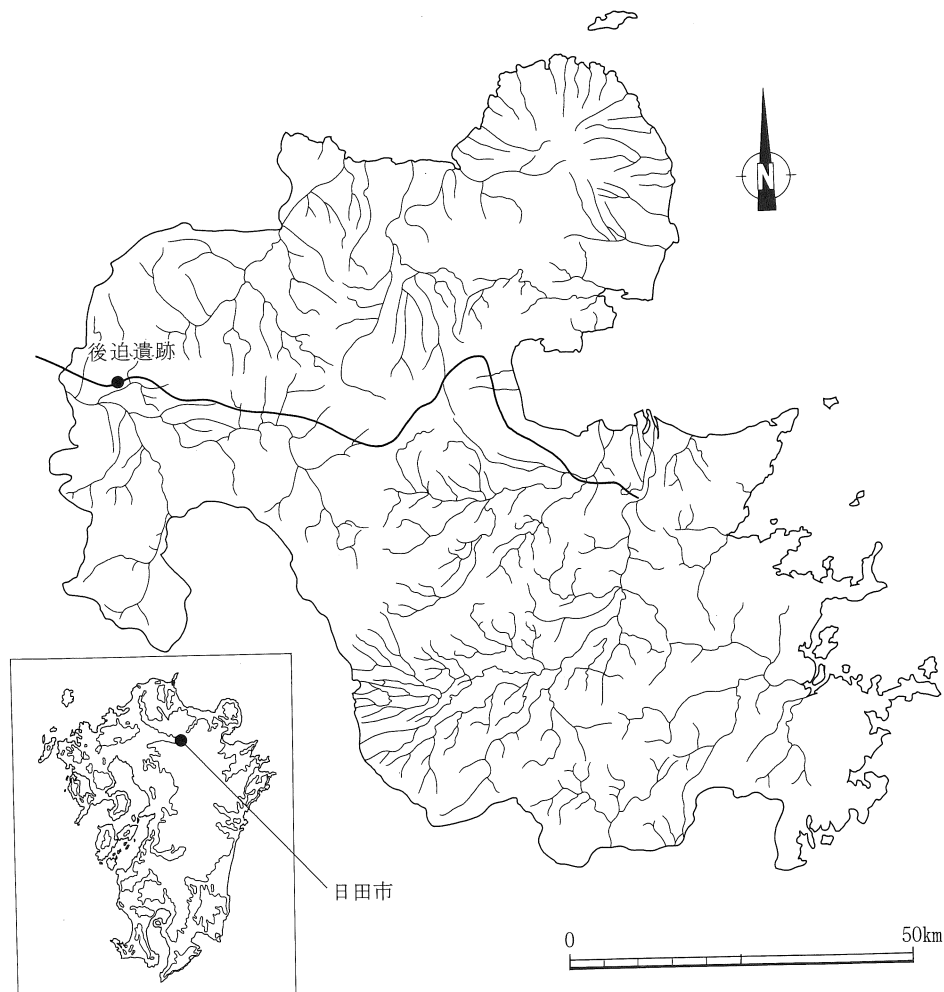
# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

九州横断自動車道は長崎市を起点とし、途中、鳥栖ジャンクションで九州縦貫自動車道と直交して、大分市に至る約 252km（大分県内約 103km）の高速自動車道である。大分県関係では、県境～日田間が昭和 44 年 1 月 22 日に、日田～大分間が昭和 47 年 6 月 30 日に基本計画決定された。整備計画決定及び施工命令は県境～日田間が昭和 48 年 10 月 19 日に、日田～玖珠間が昭和 53 年 11 月 21 日に出された。大分県教育委員会では日本道路公団の委託を受け、昭和 58～63 年度にかけて日田～玖珠間の道路建設予定地の分布調査を行った。その結果、遺跡及び遺跡推定地は 28ヶ所にのぼった。

日田～玖珠間の発掘調査は、昭和 63 年度より用地買収の終了した地域から順に実施し、平成 5 年度末で路線内 24.1km の全調査を終えた。この間新たに発見された遺跡もあり、調査した遺跡数は試掘・立会調査も含めると都合 34 遺跡で、本調査に至った遺跡数は 17 遺跡であった。

今回報告する後迫遺跡は、平成 3～5 年度に本調査を行なった遺跡である。後迫遺跡は周知の遺跡として既に認知されていたため、遺構の範囲・密度等を確認する目的で、平成 3 年 6 月に試掘調査を行った。この結果、調査区西側の墓地を含む一段高い地区は削平を受けており、遺構・遺物は確認されなかった。中央から東側の標高 123m 前後の平坦な地区はほぼ全面で柱穴・住居跡等の遺構が確認されたため、この部分を発掘対象地域とし、全面調査を行った。また、調査区北側約 20m 付近の斜面に添って走る里道の付け替え地区の調査もあわせて行った。



第 1 図 後迫遺跡位置図

## 2. 調査の組織

調査の組織は次の通りである。

平成3年度

総括 宮本 高志（大分県教育委員会教育長）  
秋葉 正嗣（大分県教育庁文化課長）  
徳丸 欽也（大分県教育庁文化課参事）  
林 英輝（大分県教育庁文化課課長補佐）  
調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
調査主任 渋谷 忠章（県文化課埋蔵文化財第二係長）  
調査員 友岡 信彦（同主任）、橋本 一彦（同嘱託）、山本健太郎（同嘱託）

平成4年度

総括 宮本 高志（大分県教育委員会教育長）  
秋葉 正嗣（大分県教育庁文化課長）  
衛藤 伸一（大分県教育庁文化課課長補佐）  
調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
調査主任 渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長）  
調査員 友岡 信彦（同主任）、橋本 一彦（同嘱託）、須原 緑（同嘱託）  
神崎 哲也（同嘱託）、岩尾 和佳（同嘱託）

平成5年度

総括 宮本 高志（大分県教育委員会教育長）  
末広 利人（大分県教育庁文化課長）  
岡 忠夫（大分県教育庁文化課課長補佐）  
調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議委員）  
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）  
後藤 宗俊（別府大学教授）  
調査主任 渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長）  
調査員 五十川孝正（同主任）、友岡 信彦（同主任）、橋本 一彦（同嘱託）  
神崎 哲也（同嘱託）、岩尾 和佳（同嘱託）、志満 紀郎（同嘱託）

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

日田市は大分県の北西部に位置し、福岡県と県境をなしている。周囲を一尺八寸山・五条殿・月出山等の標高700m前後の山々に取り囲まれた盆地を形成している。これらの山々は、新第3紀層を基盤とする筑紫溶岩により形成され、その内側には龍体山・西の山等の標高200～600mの耶馬溪溶岩を基底とする溶岩台地が形成されている。さらに内側には原(はる)と呼ばれる山田原・吹上原・葛原・佐寺原・町野原等の阿蘇溶結凝灰岩を基底とする標高150m前後の溶岩台地が段丘状に日田盆地を取り囲んでいる。

盆地中心部を西流する三隈川(筑後川)は、玖珠川や大山川(筑後川本流)、花月川などと合流し、福岡県へと入り、九州最大の河川である筑後川となる。日田市はこの三隈川の周囲に開けた平野部を中心に発展した町で、水系的には北部九州との関係が深く、古来より西からの文化の影響を強く受けて発展してきた地域である。

後迫遺跡は、日田盆地北部に位置する山田原台地の南東側先端に位置する。この台地は龍体山の南側山麓から派生し、台地上には弥生時代前期～古墳時代前期の集落跡や古墳時代前期の豪族居館跡等が確認された小迫辻原遺跡<sup>註1</sup>、弥生時代後期～古墳時代中期の埋葬遺跡として知られる草場第二遺跡<sup>註2</sup>、弥生時代中期～後期の集落跡や中世墓等が確認された朝日宮ノ原遺跡等<sup>註3</sup>、重要な遺跡が多数存在している。当該地域は日田の先史から中世に至る歴史の解明に大きく寄与する地域である。

### 2. 歴史的環境

日田市は、県下でも有数の遺跡密集地として知られているが、遺跡の大多数は盆地を囲む丘陵やその周辺の台地上に集中している。

歴史的には旧石器・縄文時代の遺跡は台地上に点々と存在している。弥生時代になると台地上や河川段丘に沿って多くの遺跡が形成されはじめる。なかでも吹上原台地上の吹上遺跡<sup>註4</sup>や、山田原台地上の小迫辻原遺跡、朝日宮ノ原遺跡等の大集落遺跡が出現するようになる。古墳時代も引き続き台地や微高地上に集落跡や古墳等の墓地群、丘陵斜面や崖面には大規模な横穴墓群が群集する。

また、日田市は筑後川の上流域に位置していることから、筑後地域・北部九州との関係も色濃く反映されている。弥生時代においては、前期後半頃から北部九州的な土器・石器が出土し、中期～後期には、後漢時代の方格規矩鏡片等の出土や、大型成人用甕棺墓等が検出されるが、これらは明らかに筑後地方や豊前南部地域との交流を示すものである。古墳時代においては、円文や同心円文の装飾を施した横穴石室墳が築かれるなど、弥生時代同様、筑後地方を介して北部九州の文化圏の影響を受けた地域であった証であろう。

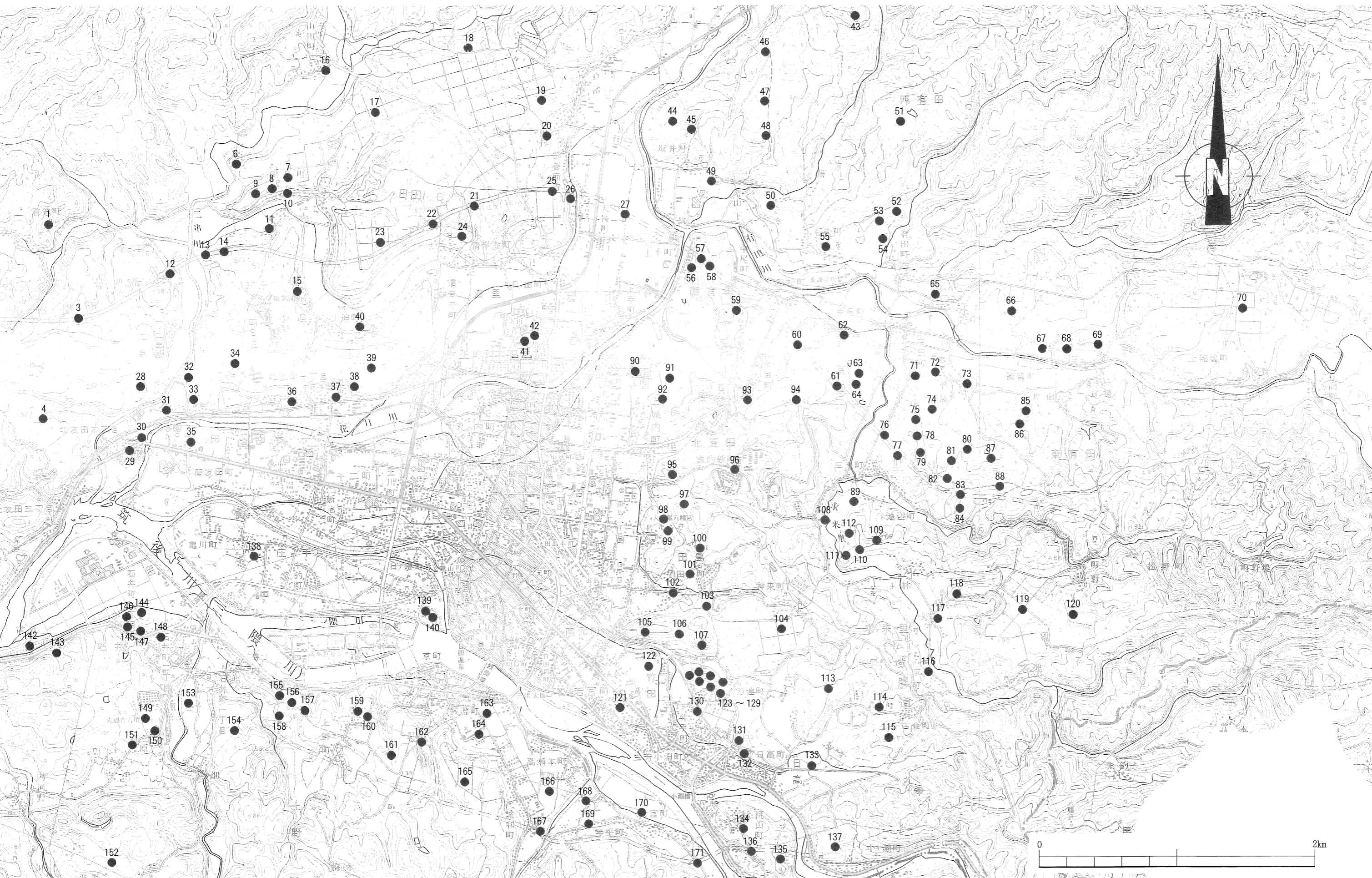
古代・中世になると、律令国家によって一括して日田郡に編成されている。郡内には『豊後国風土記』・『和名類聚抄』から在田・夜開・日理・又連・石井の5郷の存在が記載されており、当遺跡周辺は日理郷の地域にあたる。また、この時期に整備したと思われる条里跡の遺構も当遺跡の対岸一帯に展開していたと考えられ、現在でもおおよその様相は残しているが、花月川・有田川の氾濫原にあたり、当時代の遺構は現在のところまだ確認出来ていない。

- 註1. 田中裕介他『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 大分県教育委員会 1999  
 註2. 高橋徹他『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1989  
 註3. 土居和幸・友岡信彦「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壌墓」『おおいた考古』2 大分県考古学会 1989  
 土居和幸「朝日宮ノ原遺跡(D地区)」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ 日田市教育委員会 1989  
 註4. 村上久和編『吹上遺跡』Ⅰ・Ⅱ 日田市教育委員会 1980・1981  
 土居和幸「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ 日田市教育委員会 1986・1987・1991  
 土居和幸他『吹上遺跡-6次調査の概要-』日田市教育委員会 1995

参考文献

- 『日田市史』日田市 1990  
 『大分県の地名』日本歴史地名体系45 平凡社 1995

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	君迫遺跡	44	縫ノ迫1号墳	87	平島横穴群	130	上井手遺跡
2	萩尾遺跡	45	縫ノ迫2号墳	88	片山原遺跡	131	平松遺跡
3	二串西原遺跡	46	葛原古墳	89	森ノ元遺跡	132	東寺横穴群
4	穴原遺跡	47	有田葛原遺跡	90	慈眼山瀬戸口遺跡	133	日高遺跡
5	大見取遺跡	48	寺坂古墳	91	大蔵古城跡	134	千人塚1号墳
6	中ノ前遺跡	49	峰崎遺跡	92	丸山古墳	135	千人塚2号墳
7	朝日宮ノ原遺跡	50	大行司遺跡	93	水目横穴群	136	大部遺跡
8	天満1号墳	51	西有田赤ハゲ遺跡	94	中尾原遺跡	137	小ヶ瀬遺跡
9	天満2号墳	52	有田1号墳	95	塚原遺跡	138	徳瀬遺跡
10	天神山横穴群	53	有田古墳	96	湯尻遺跡	139	日隈古墳
11	尾部田遺跡	54	上柳遺跡	97	赤迫遺跡	140	日隈城跡
12	山ノ神(二串)遺跡	55	京田遺跡	98	大波羅遺跡	141	落久保遺跡
13	小迫古墳	56	夕田遺跡	99	薬師堂山遺跡	142	津辻1号墳
14	小迫横穴群	57	夕田横穴墓群	100	丸尾神社古墳	143	津辻2号墳
15	森本遺跡	58	夕田古墳群	101	丸尾古墳	144	隈山遺跡
16	岩崎遺跡	59	佐寺原遺跡	102	会所宮古墳	145	ガランドヤ1号墳
17	山田原遺跡	60	堂園遺跡	103	田島(後山)古墳	146	ガランドヤ2号墳
18	谷ノ久保遺跡	61	大迫遺跡	104	元宮遺跡	147	ガランドヤ3号墳
19	用松原遺跡	62	宮ノ下遺跡	105	鳥羽塚古墳	148	尾園遺跡
20	用松中村古墳	63	中尾1号墳	106	会所山遺跡	149	穴観音古墳
21	草場第一遺跡	64	中尾2号墳	107	会所山古墳	150	倉園古墳
22	草場第二遺跡	65	小寒水遺跡	108	馬形遺跡	151	長者原遺跡
23	小迫辻原遺跡	66	須ノ原遺跡	109	倉迫遺跡	152	平野遺跡
24	本村遺跡	67	世尊寺遺跡	110	ガニタ1号墳	153	尾坪遺跡
25	後迫遺跡	68	城山遺跡	111	ガニタ2号墳	154	上野赤塚遺跡
26	羽野横穴群	69	城山古墳	112	ガニタ3号墳	155	護願寺1号墳
27	日田条里遺跡群	70	ハル遺跡	113	東寺原遺跡	156	護願寺2号墳
28	友田坂本遺跡	71	塔ノ本古墳	114	古金遺跡	157	護願寺3号墳
29	三郎丸遺跡	72	平島古墳	115	株手遺跡	158	寺内(護願寺)遺跡
30	三郎丸古墳	73	平島遺跡	116	着来遺跡	159	上野姥塚古墳
31	大内田遺跡	74	祇園原遺跡	117	求来里平島遺跡	160	上野カクネ塚古墳
32	鳥越古墳	75	長迫遺跡	118	亀ノ甲遺跡	161	上野遺跡
33	片山石棺	76	尾漕遺跡	119	町野原遺跡	162	上野横穴群
34	向原遺跡	77	尾漕古墳	120	奥ノ迫遺跡	163	姫塚古墳
35	萩鶴遺跡	78	尾漕2号墳	121	柳ノ本遺跡	164	銭淵遺跡
36	今泉遺跡	79	狐迫遺跡	122	鬼塚古墳	165	陣が原辻原遺跡
37	岳林寺遺跡	80	石ヶ迫遺跡	123	法恩寺1号墳	166	条里跡
38	北友田・吹上横穴群	81	クビリ遺跡	124	法恩寺2号墳	167	高瀬遺跡
39	吹上遺跡	82	有田塚ヶ原遺跡	125	法恩寺3号墳	168	惣田塚古墳
40	鍛冶屋廻り遺跡	83	有田塚ヶ原1号墳	126	法恩寺4号墳	169	惣田遺跡
41	月隈城跡	84	有田塚ヶ原2号墳	127	法恩寺5号墳	170	大宮遺跡
42	月隈横穴群	85	クエト1号墳	128	法恩寺6号墳	171	手崎遺跡
43	柴尾遺跡	86	クエト2号墳	129	法恩寺7号墳		

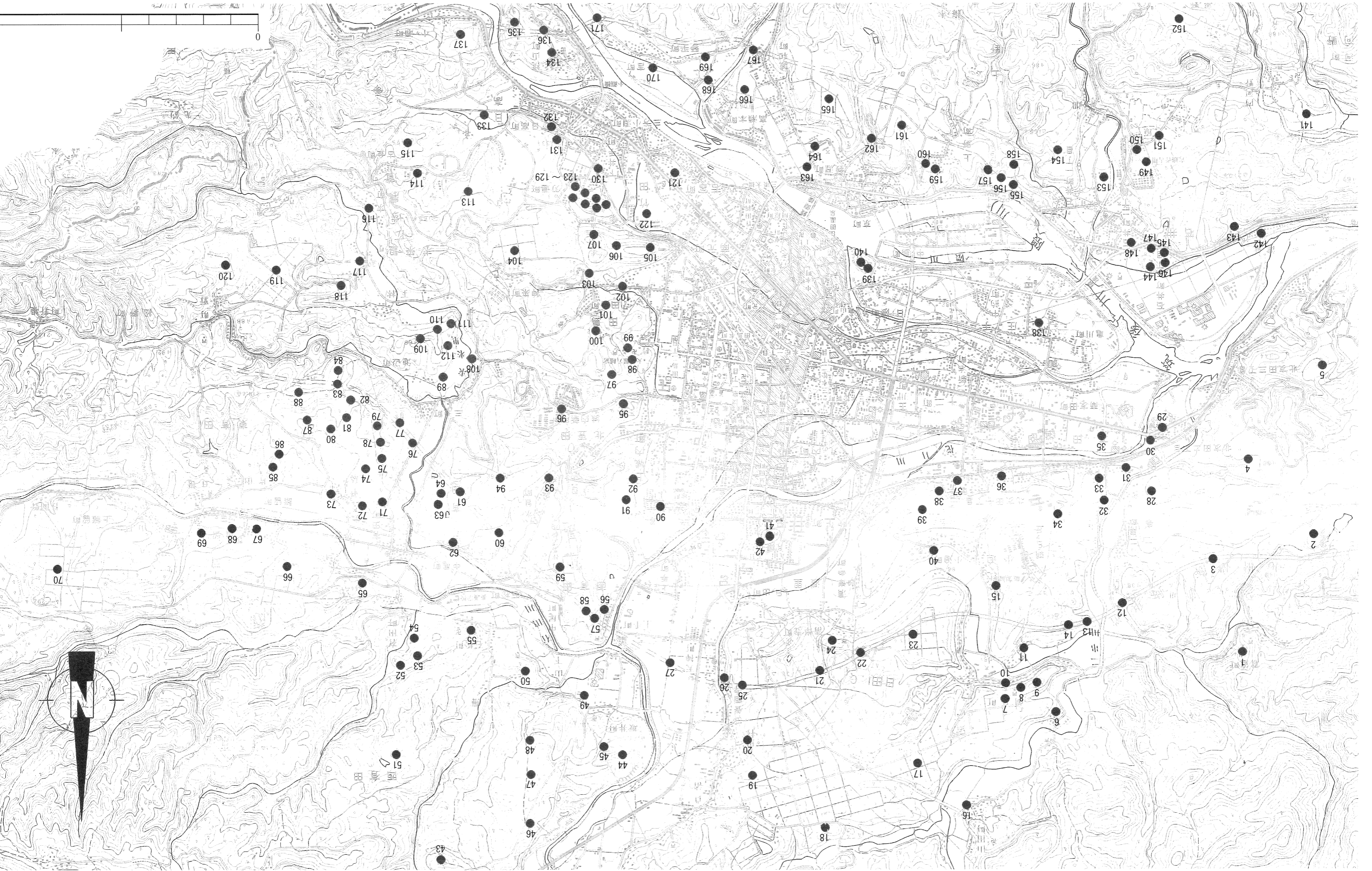


第2図 日田市主要遺跡分布図及び遺跡名

〔平成7年3月 日田市役所発行『日田市全図1：25,000』より転載〕



第2図 日田市主要遺跡分布図及び遺跡名



### Ⅲ. 調査の成果

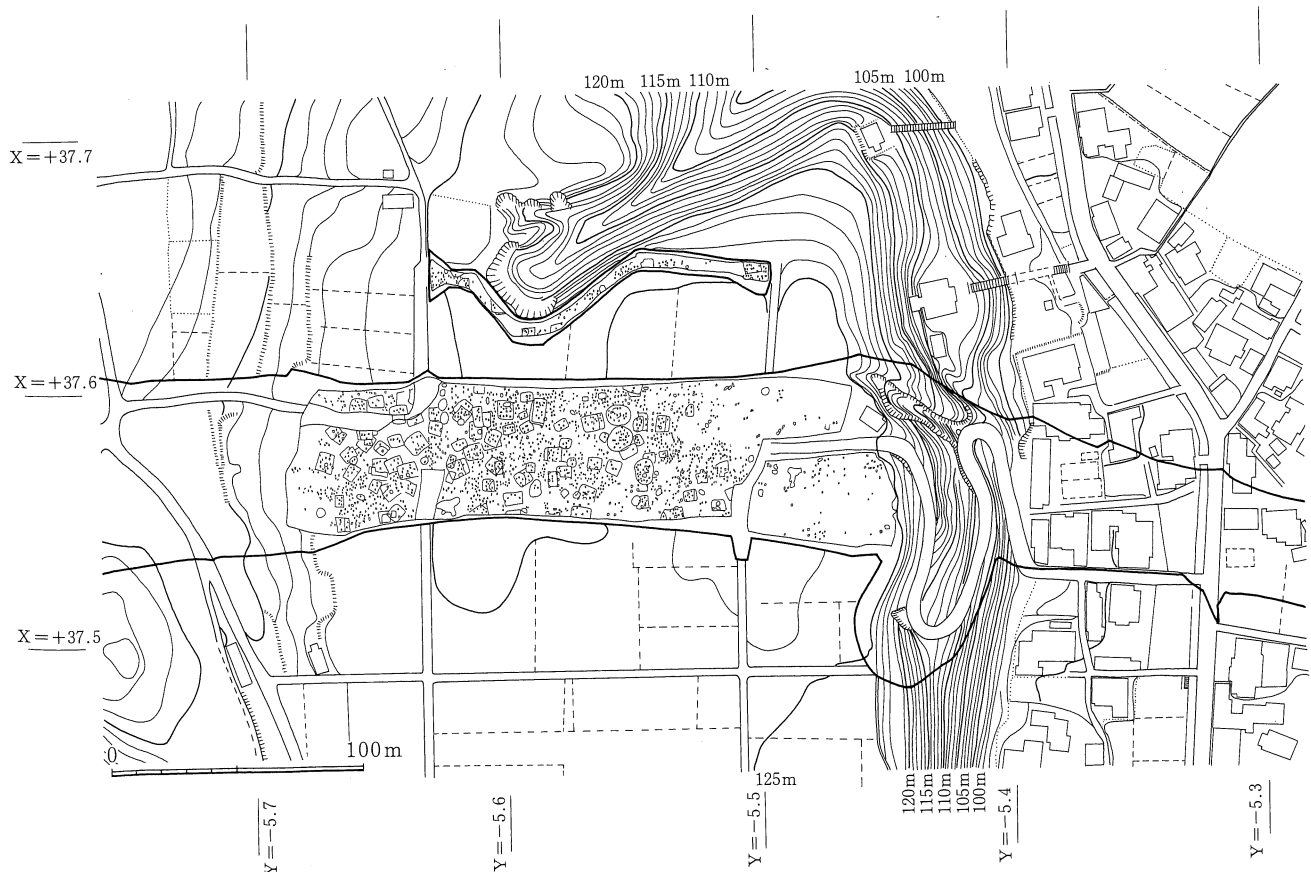
#### 1. 遺跡の概要

後迫遺跡は、日田盆地北部、標高 125m 前後の山田原台地南東部分に位置し、盆地との比高差は約 30m である。この台地上には草場第二遺跡、小迫辻原遺跡、朝日宮ノ原遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての大集落・墓地群がみられる。しかし、この山田原台地をはじめとする日田市内のほとんどの台地上は昭和 40 年代の土地区画改良事業や、昭和 60 年代前半の地力増進事業（天地返し）によって、地形の変化や遺跡の攪乱・消滅がかなり進行している地域でもある。

今回の調査区は後迫遺跡北東部の日田市大字三和字原地・慶徳・小原地区にあたる。調査区東側斜面には羽野横穴墓群が、沖積地を挟んで東側正面には夕田遺跡群や佐寺原遺跡が所在する佐寺原台地が望める。調査予定地は県道大鶴熊取線から羽野横穴墓群の所在する東側斜面までの長さ約 300m であった。試掘調査の結果、西側の高台からは遺構・遺物の検出はなかったため、当地区と墓地群を本調査地区から除外した。残りの地区約 250m については一部天地返しの攪乱はあるものの遺存状態はおおむね良好であった。

検出した遺構は弥生時代中期～後期にかけての住居跡、土坑、粘土採掘坑、甕・壺棺墓、石棺墓、土坑墓等や、奈良時代と思われる掘立柱建物跡、中世の土坑、土坑墓であった。この他多数の柱穴を検出した。

当遺跡では、石棺・土坑墓等の墓は調査区の東端（崖寄り）に集中、住居跡等はこれより西側に構築されていて、集落と墓域の住み分けできている遺跡である。ただ、甕棺墓は全て小児用で、東端に集中しているわけではなく、比較的住居跡の周辺に構築されている。



第3図 後迫遺跡路線内位置図 (1 / 3000)

## 2. 遺構番号の変更

後迫遺跡は、80000m<sup>2</sup>以上の面積を有し、今回調査を行ったのは約15000m<sup>2</sup>（東西約250m、南北約60m）であった。さらに現調査区の北約20m付近に農道の付け替え工事が行われることとなり、この部分の調査（約1000m<sup>2</sup>）も並行して行ったため、調査面積は約16000m<sup>2</sup>であった。

調査は当初、南西方向から始め、検出遺構順に遺構番号を振っていた。その後調査区を東西に走る市道用松羽野原線の付け替え工事にもとない、迂回路が調査区の南端を走ることとなったため、急遽迂回路部分の調査を優先して行った。また、農道取付部分の調査も重なり、遺構番号がランダムになりはじめた。今回の報告にあたり、調査区内の遺構の全体像がほぼ掴めたため、西方向から順に新たに遺構番号を振った。

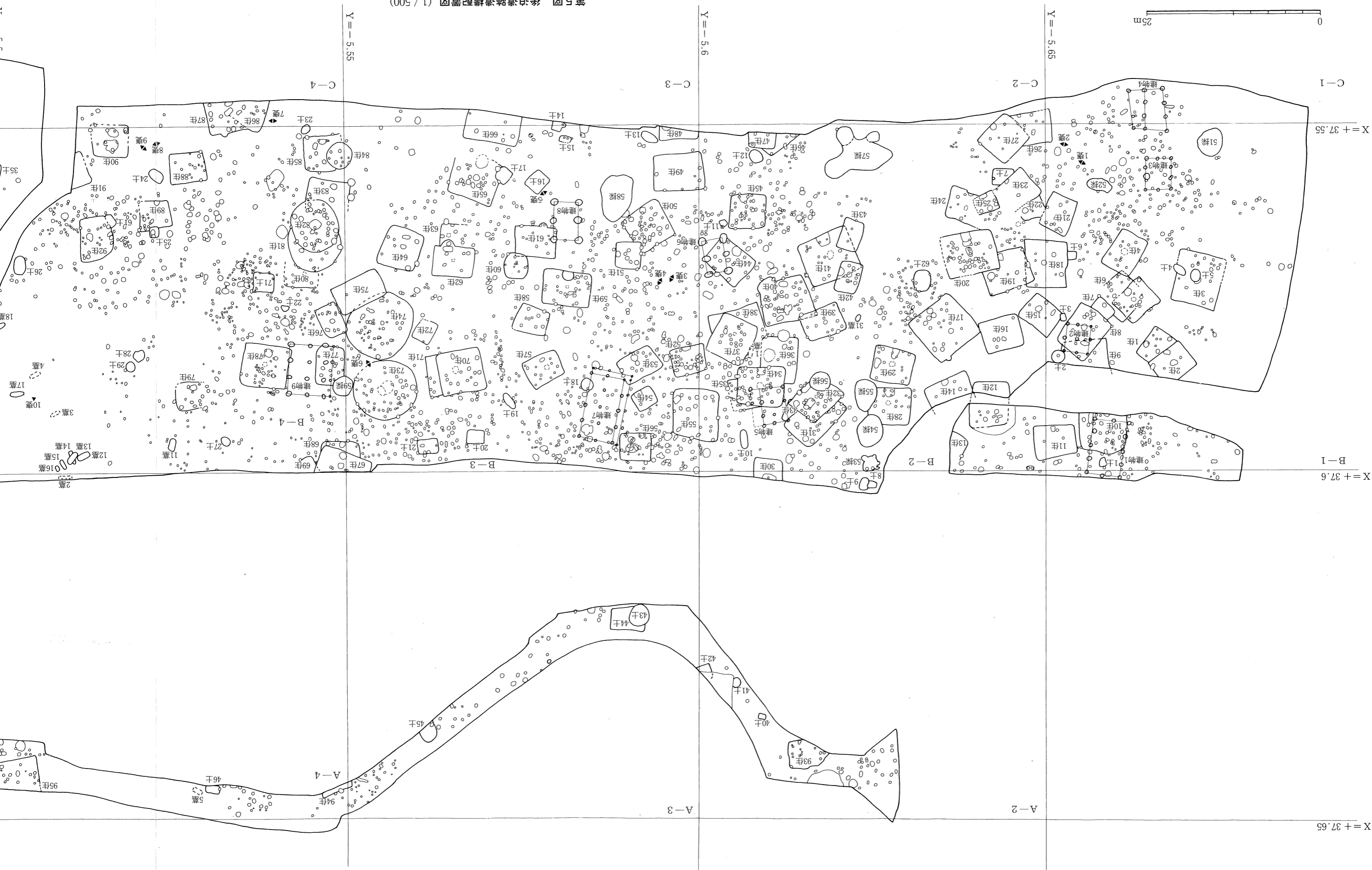


第4図 後迫遺跡周辺地形図（1 / 5000）





第5図 後迫遺跡遺構配置図 (1/500)



X = + 37.65

B-1

X = + 37.55

C-1

0 25m

### 3. 調査の成果

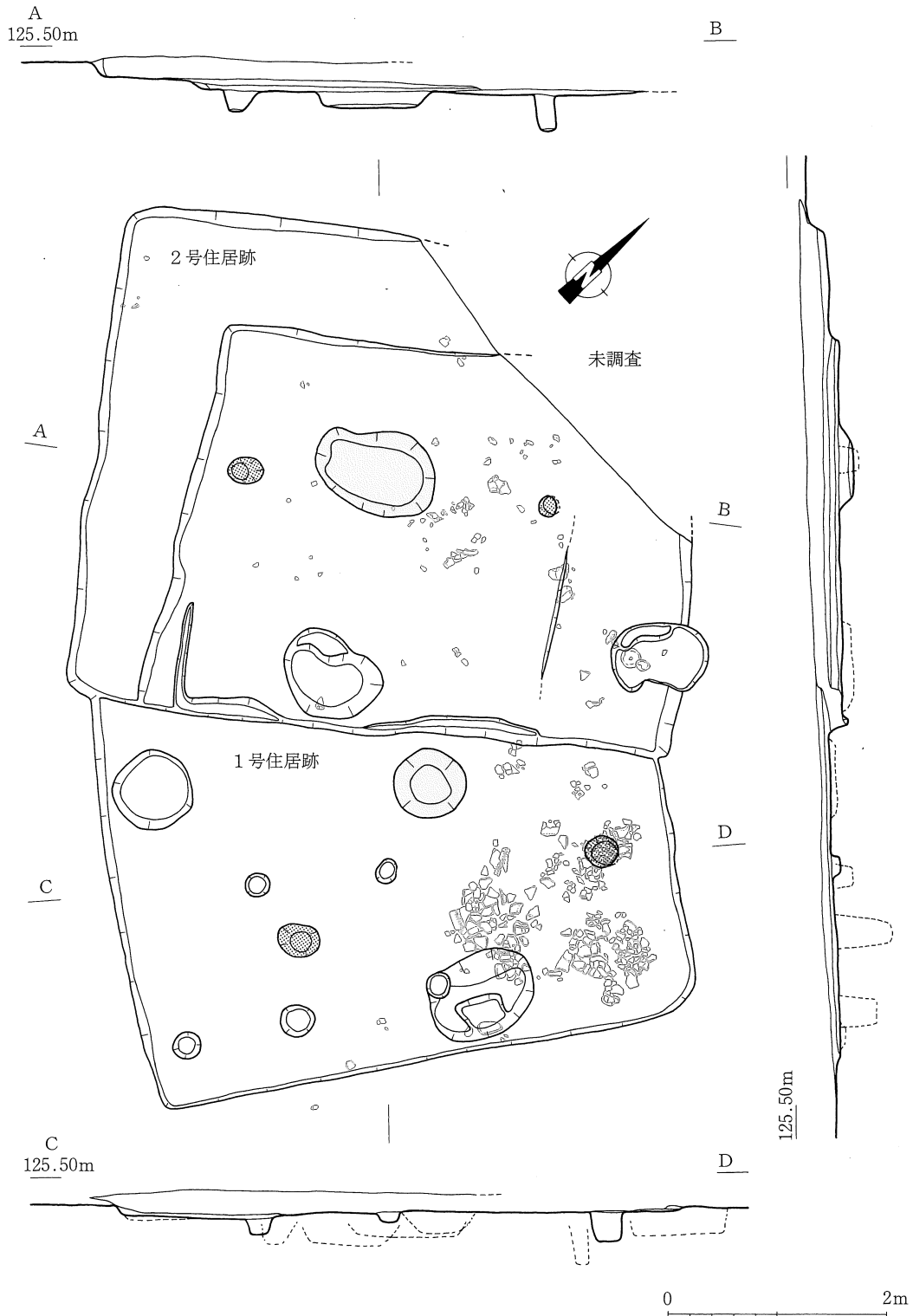
#### A. 弥生・古墳時代

##### a) 竪穴住居跡

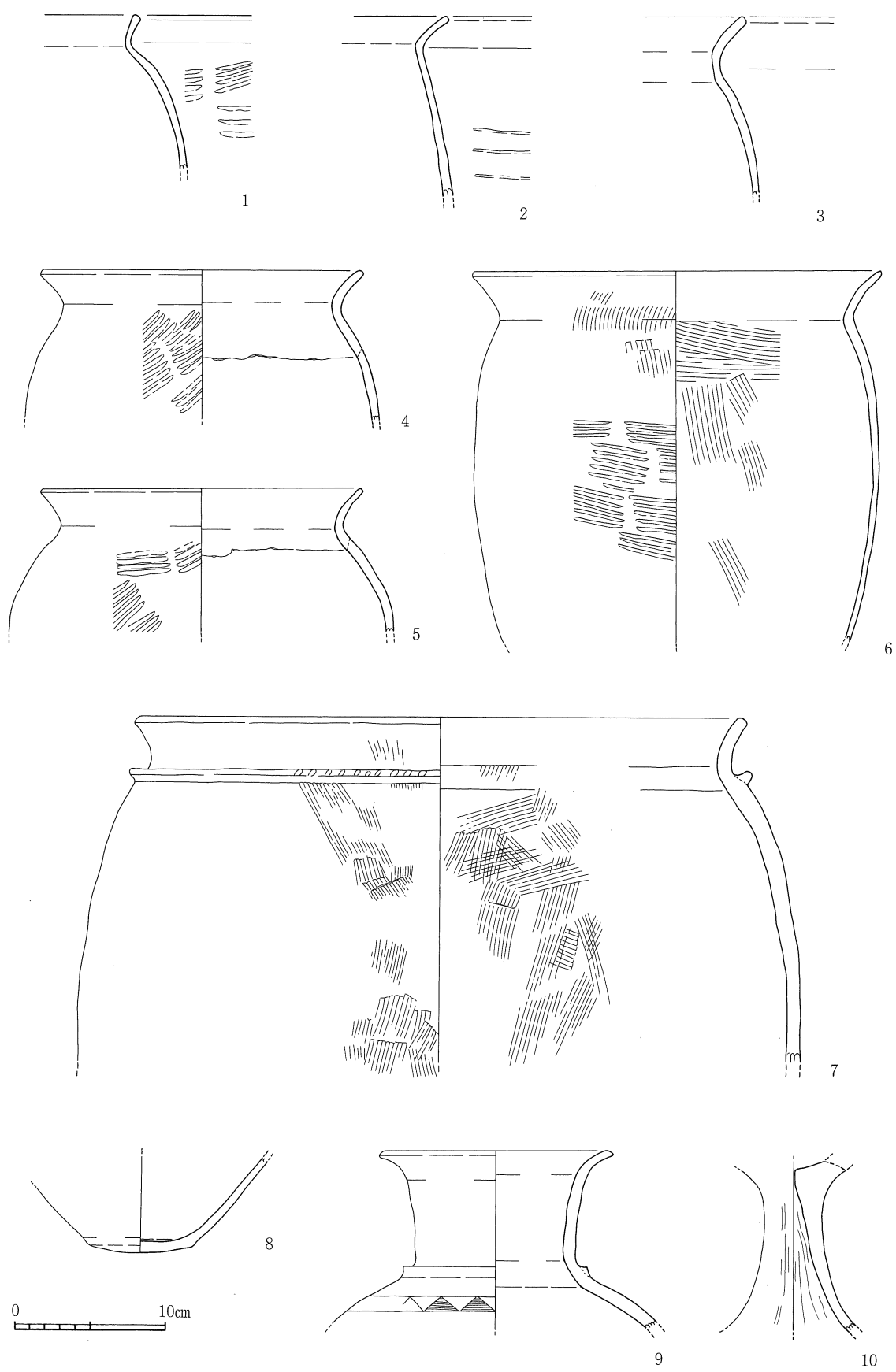
今回の調査では多数の柱穴と、弥生時代中期～古墳時代初頭の住居跡と考えられる竪穴 95 軒を検出した。

##### 1・2号住居跡 (第6図)

1・2号住居跡は調査区の西端B-1区に位置し、1号住居跡が先行する。



第6図 1・2号住居跡実測図 (1/60)



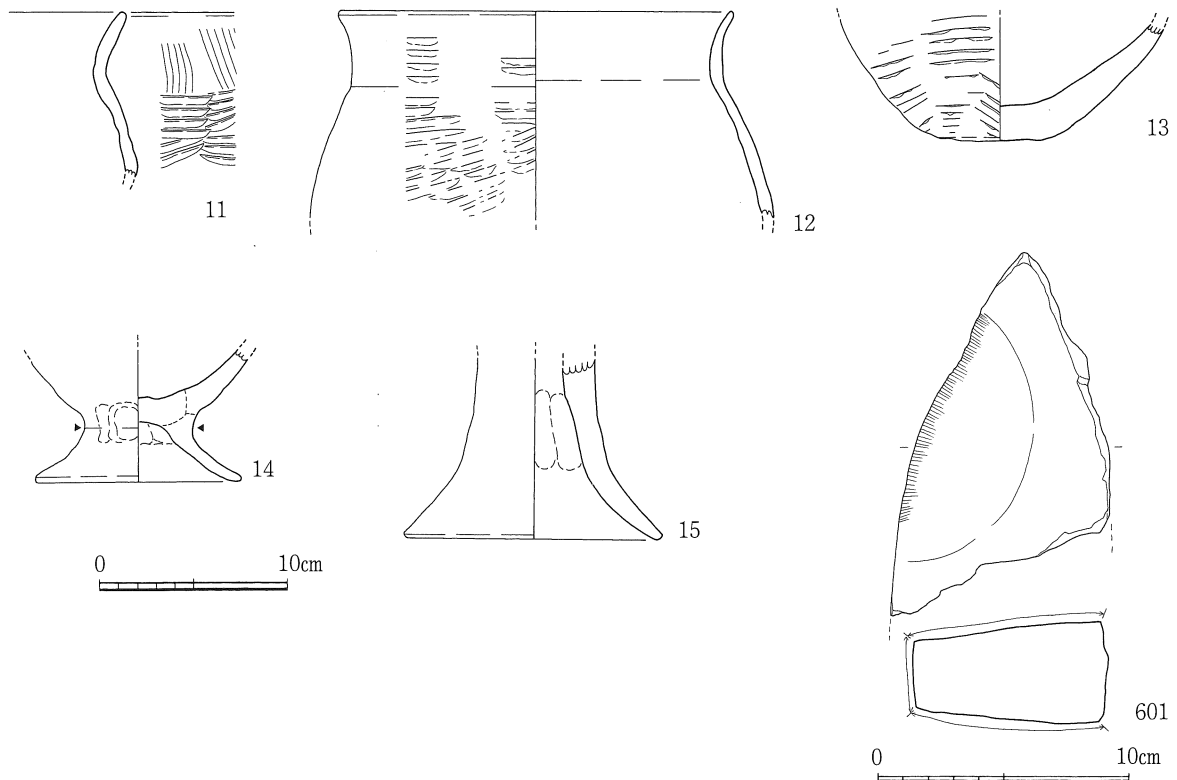
第7图 1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

1号住居跡は2号住居跡に切られ、西半は消滅している。規模は南北5.07m、東西は不明、検出面からの深さは5～8cmで、平面形は方形か長方形を呈していると考ええる。主軸方位はN-35°-Eを示す。住居跡内中央に径約70cm、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は4本と考えられるが、消滅部分の柱穴は不明である。径20cm前後、主柱穴間は3.2mである。

遺物は北西コーナー一帯から集中して出土した。1～7は甕の口縁から胴部の一部で外面にタタキがみられる。8は甕の底部で、やや丸底である。9は壺の口縁から胴部の一部で、頸部に断面三角形の突帯をもつ。10は高坏の脚部で内面シボリ痕がみられる。出土遺物からみて当住居跡の時期は弥生時代後期後半～終末頃と考えたい。

2号住居跡は1号住居跡の北西に構築されている。規模は長軸5.52m、短軸4.58m、検出面からの深さは10～25cmで、北西コーナー部分が道路下のため一部未調査である。平面形は長方形を呈している。南東コーナーから北西コーナー付近まで幅約0.9m、高さ7cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡るが、北東コーナー付近にも一部高まりがみられるため、ベッド状遺構は南東壁を除く三壁面に添って存在したと思われる。主軸方位はN-45°-Eを示す。住居跡内中央に1.1×0.8m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡と、南東壁中程に径90cm、深さ20cm前後の土坑をもつ。主柱穴は2本で、径20cm、深さ20～30cm、主柱穴間は2.8mである。

遺物は炉跡の周辺に分布しているが、ほとんどが小破片であった。また、土坑内から砥石1点が出土した。11・12は甕の口縁から胴部の一部で、13は底部である。いずれも外面にタタキがみられる。14は脚付き鉢の脚部と思われ、土師器の可能性をもつ。15は器台の体部下半である。601は砥石の一部で、3面の使用痕が認められる。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期終末～古墳時代初頭頃と考えたい。



第8図 2号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

表1 1号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
1	甕	—	—	角閃石、 長石、 赤色粒子 多	淡黄色	不良	タタキ成形	平行タタキ	不明		
		—	—								
		—	—								
2	甕	—	—	角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子、小礫	淡黄色	不良	タタキ成形	平行タタキ	平滑ナデ?		
		—	—								
		—	—								
3	甕	—	—	角閃石、 石英、小礫、 長石 多、 赤色粒子 多	淡黄色	不良		不明	不明		
		—	—								
		—	—								
4	甕	(21.4)	—	角閃石 少、 赤色粒子	褐色	不良	タタキ成形	平行タタキ	ナデ?		内面に接合 痕残る。
		—	—								
		—	—								
5	甕	(11.4)	—	角閃石、 長石 多、 白色粒子	淡黄色	不良	タタキ成形	平行タタキ	ナデ?		
		—	—								
		—	—								
6	甕	(27.4)	—	角閃石、 長石、 白色粒子、 赤色粒子	外面 橙色 内面 黄橙色	良好	タタキ成形	平行タタキ タテハケ	タテハケ ヨコハケ	すず付着— 二次加熱あり	
		—	—								
		—	—								
7	甕	(41.4)	—	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	暗褐色	良好	粘土積上げ	タタキ後ハケ	ケズリ後ハケ		頸部に突帯 あり
		—	—								
		—	—								
8	甕	—	—	角閃石、 長石 少、 小礫	外面 明赤褐色 ~橙色 内面 褐色	やや不良		不明	不明		
		—	—								
		7.0	—								
9	壺	(15.0)	—	角閃石、 小礫 多	外面 明赤褐色 ~橙色 内面 灰色			不明	不明		頸部に突帯 あり
		—	—								
		—	—								
10	高坏	—	—	角閃石、 小礫 多	黄橙色	やや不良 黒斑		タテハケ	不明		しぼり痕あり 坏底部から 脚内面に細 い穴あり
		—	—								
		—	—								

表2 2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
11	甕	—	—	砂粒 多、 赤色粒子 多	淡黄褐色	不良	タタキ成形	平行タタキ	不明		
		—	—								
		—	—								
12	甕	—	—	砂粒 多、 角閃石	淡黄褐色	やや不良	タタキ成形	平行タタキ	不明		
		(21.1)	—								
		—	—								
13	甕	—	—	砂粒 多、 赤色粒子 多 角閃石、	淡黄褐色	やや不良	タタキ成形	平行タタキ	不明		
		—	—								
		5.5~6.0	—								
14	脚付き鉢	—	—	砂粒 多、 赤色粒子 多 角閃石、	外面 明赤褐色 内面 淡黄褐色	やや不良	分割成形	不明	不明		接合痕 あり
		—	—								
		11.0	—								
15	器台	—	—	白色粒子 多、 赤色粒子 多、 砂粒 非常に少	外面 淡黄褐色 内面 黒褐色	やや不良		不明	不明		
		—	—								
		(13.6)	—								

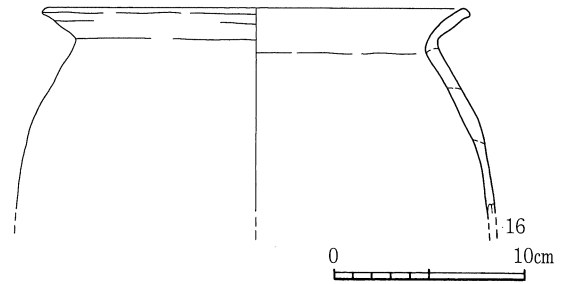
表3 2号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
601	砥石	硬質頁岩	(121)	78	39	(438.7)	

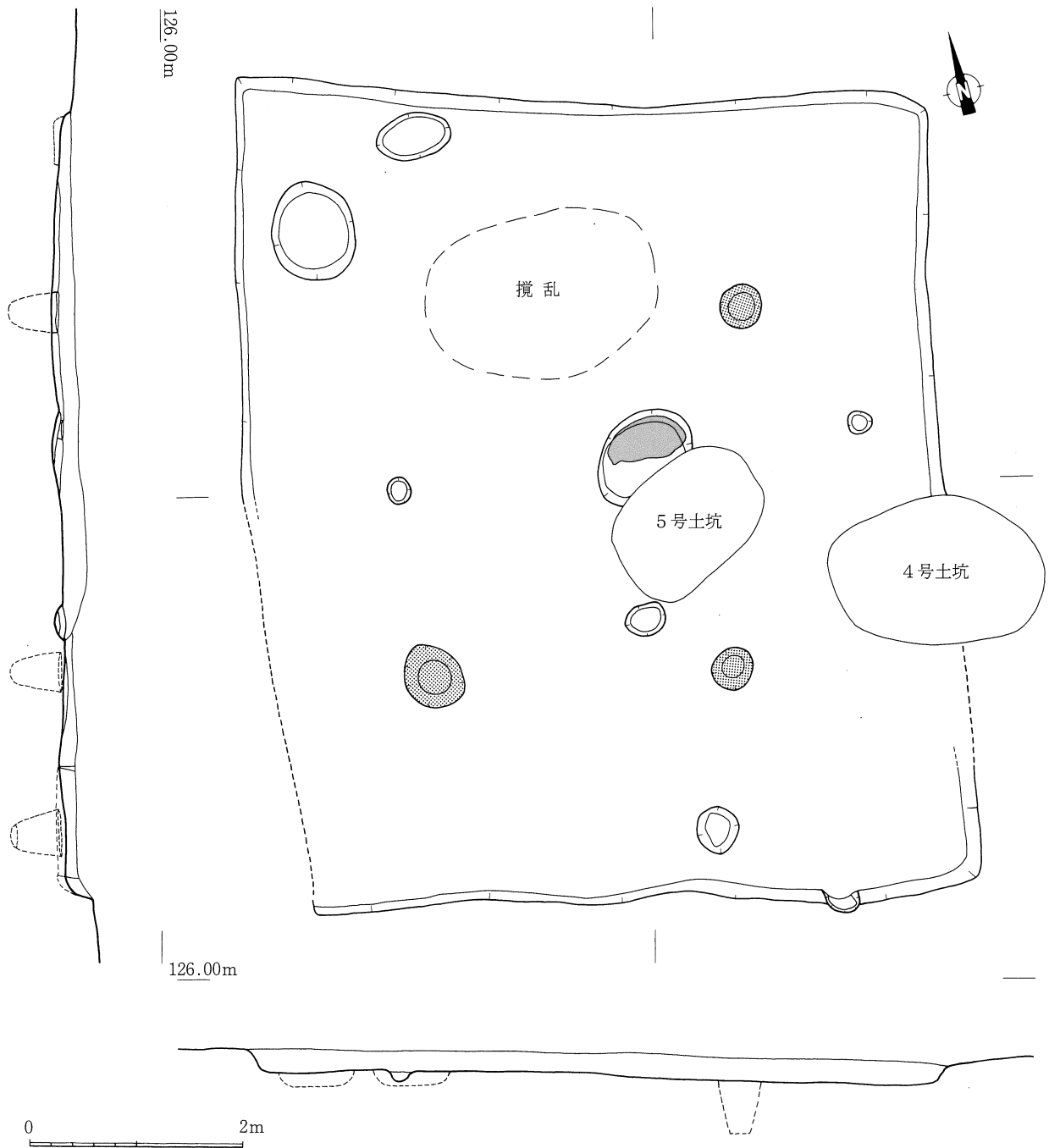
3号住居跡 (第10図)

3号住居跡は調査区の西端B-1区に位置する。4・5号土坑によって切られている。規模は東西7.5m、南北6.6m、検出面からの深さは10~20cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Eを示す。住居跡内中央に径約80cm、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもつが、5号土坑により南側が消滅している。支柱穴は4本で、1本が攪乱で消滅している。柱穴は径40~50cm前後、深さ50~60cmで、支柱穴間は東西2.8m、南北3.3mである。

遺物は南西支柱穴周辺で土器片数点が出土した。出土遺物から時期は弥生時代後期初頭前後頃と考える。



第9図 3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



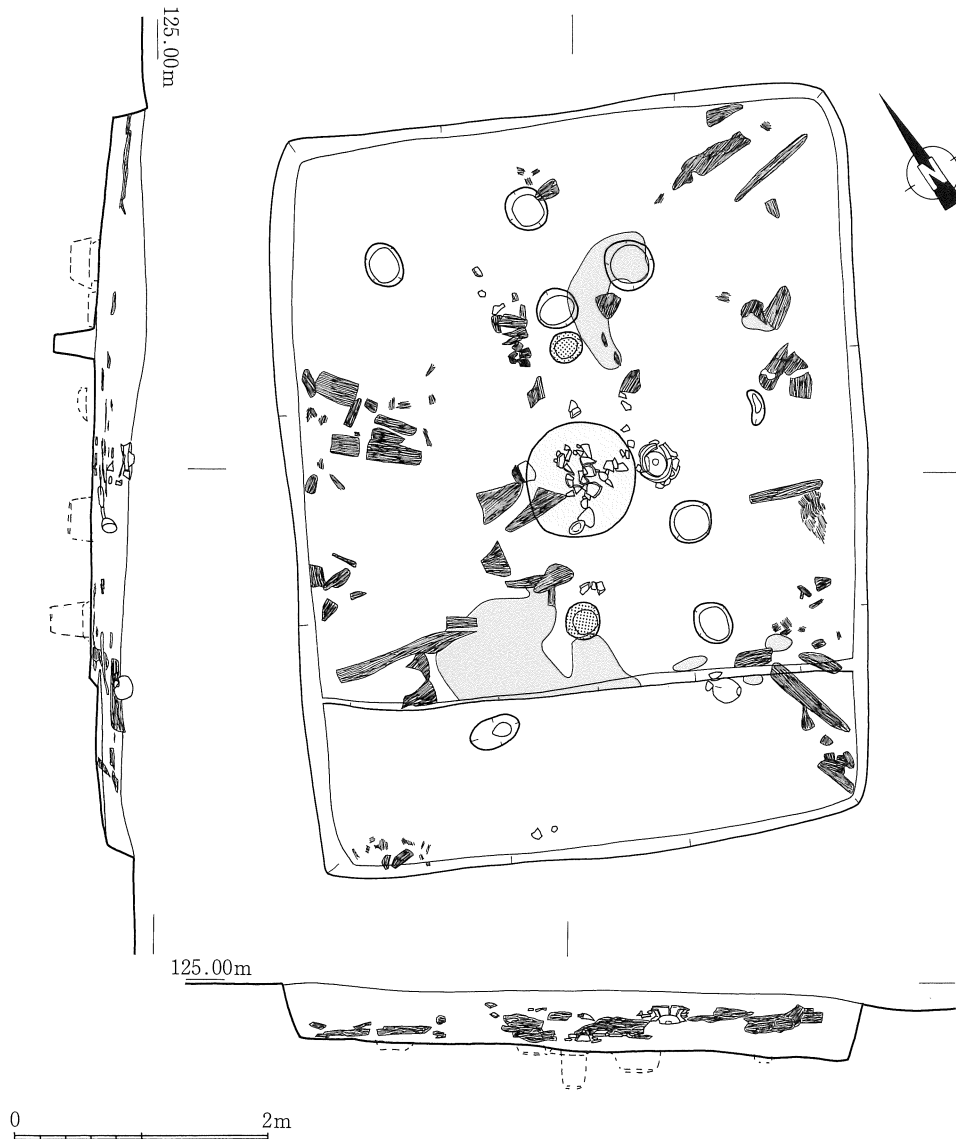
第10図 3号住居跡実測図 (1/60)

表4 3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
16	甕	(22.2)		角閃石多、 石英多、 白色粒子多	暗褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—									
		—									

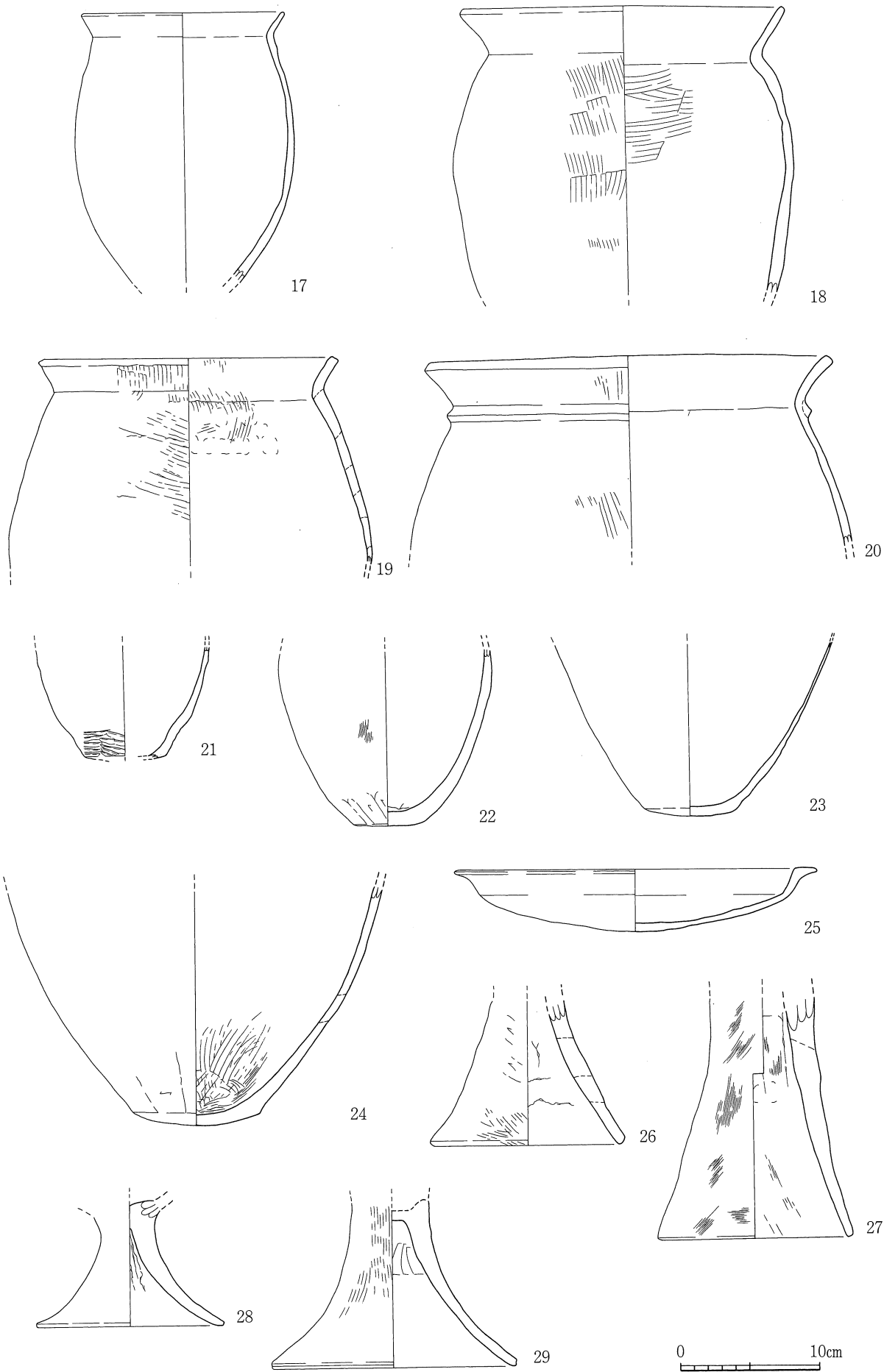
4号住居跡（第11図）

4号住居跡はB-1区、3号住居跡の東5mに位置する。規模は長軸5.95m、短軸4.5m、検出面からの深さは30～40cmで、平面形は長方形を呈している。残りはよく、北西コーナー部分が6号住居跡を切っている。南西壁と並行して幅約1.2m、高さ8cm前後のベッド状遺構をもつ。主軸方位はN-34°-Eを示す。住居跡内中央に径90cm、深さ5cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は2本で、径30cm、深さ30cm前後、主柱穴間は2.2mである。また、住居跡内のほぼ全面に炭・焼土が堆積していたため、焼失住居の可能性も考えられる。

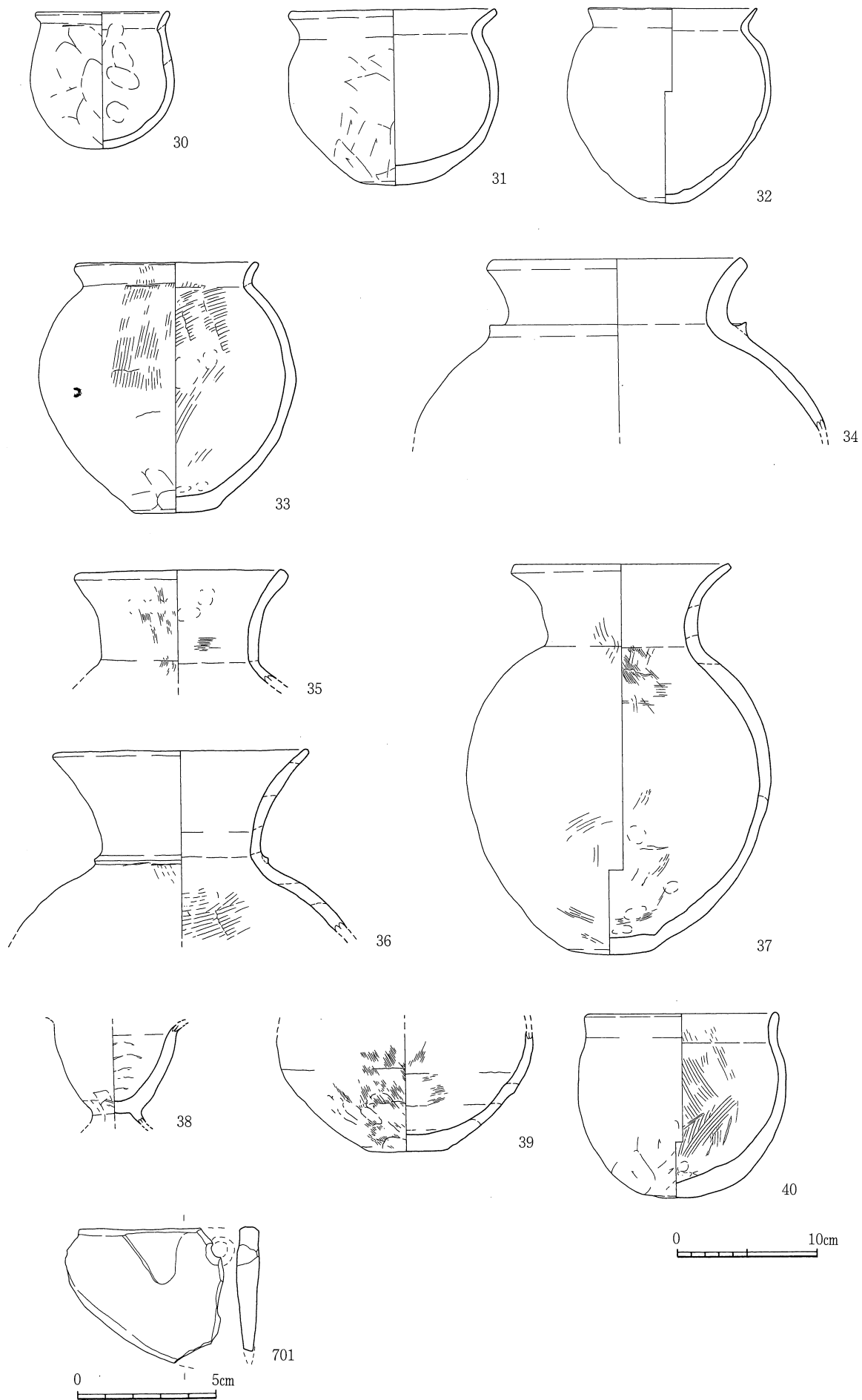


第11図 4号住居跡実測図 (1/60)





第12图 4号住居跡出土遺物実測图1 (1/4)



第13图 4号住居跡出土遺物実測図2 (1/4・1/2)

遺物は炉跡上とその周辺から土器の一群が、北東壁周辺から多量の石と土器の一群が出土した。  
出土遺物からみて、当住居跡の時期は弥生時代後期中葉～後半前後と思われる。

表5 4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
17	甕	(14.8)	角閃石 多、 赤色粒子 多、 砂粒 非常に多	明黄褐色	良好、 黒斑	粘土積上げ	不明	不明	すす付着、 赤変一二次 加熱あり	
		—								
		—								
18	甕	23.7	砂粒 多、 黒曜石 少、 赤色粒子 少、 角閃石 少	黒茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ	口縁 ヨコナデ 体部 ヨコハケ	赤変一二次 加熱あり	
		—								
		—								
19	甕	20.6	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	橙色	普通	粘土積上げ	ハケナデ	指おさえのち ハケ目		
		—								
		—								
20	甕	28.8	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	浅黄色、橙色、 三角突帯部 灰色	普通	粘土積上げ	ハケ	不明		一条三角突 帯あり
		—								
		—								
21	甕	—	砂粒 多、長石 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 石英 少	黒茶褐色	良好、 黒斑	タタキ成形	平行タタキ	不明		
		—								
		6.0								
22	甕	—	白色粒子 多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 石英 多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		47								
23	甕	—	砂粒 少、 角閃石 少、 黒色粒子 少	黒茶褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		6.6~7.2								
24	甕	—	角閃石 多、 白色粒子 多、 石英 やや多	外面 橙色 内面 明褐色	普通	粘土積上げ	ハケ	ハケ目		
		—								
		9.3								
25	皿	(26.4)	砂粒 多、長石 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 石英 少	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明		
		—								
		—								
26	器台	—	赤色粒子 多、 角閃石 多、 白色粒子 多	橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		内面に しぼり痕
		—								
		14.3								
27	器台	—	白色粒子 多、 赤色粒子 やや多、 角閃石 やや多	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		
		—								
		14.2								
28	高坏	—	角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多、 石英 多	橙色	良好		不明	不明		
		—								
		13.8								
29	高坏	—	砂粒 多、長石 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	明黄褐色	良好		タテハケ目	ナデ		
		—								
		18.0								
30	壺	5.5	角閃石 少、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	明黄褐色	良好	粘土積上げ	ナデ	指ナデ		
		—								
		9.95								
31	壺	14.5	白色粒子 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多	外面 明褐灰 色 内面 橙色	普通	粘土積上げ	ケズリ	不明		
		12.6~12.7								
		5.3								
32	壺	(12.2)	砂粒 少、 長石 多、 角閃石 少、 黒色粒子 少	明黄褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明		
		—								
		14.0								
33	壺	—	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 やや多	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ、 ケズリ目	ハケ目		
		—								
		12.8								
34	壺	—	砂粒 非常に多、 灰色粒子 多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、長石 少	明黄褐色	良好、 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明		一条三角突 帯あり
		—								
		19.0								
35	壺	14.3	角閃石 やや多、 赤色粒子 少	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
36	壺	17.8	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 角閃石 多	黄橙色、 黒褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明		頸部に突帯 あり
		—								
		—								
37	壺	15.4	白色粒子 多、 赤色粒子 多、 石英 少、 角閃石 少	橙色	普通	粘土積上げ	ハケ？	ハケ痕 強い指圧		
		—								
		28.15								
38	脚付き鉢	—	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多	橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
39	壺	—	白色粒子 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 石英 多	明褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目、 ケズリ後ナデ			
		—								
		5.6								
40	壺	13.2	角閃石 多、 石英 多、 長石 多	明褐色	普通	粘土積上げ	不明	ハケ目		
		—								
		13.3								
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

表6 4号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石 材	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考
701	石包丁	千枚岩	(56)	(48)	(8)	—	

5～7号住居跡 (第14図)

5～7号住居跡はB-1区、中央付近に位置する。6号住居跡は4・5・7号住居跡と、さらに7号住居跡は8号住居跡と切り合っている。前後関係は、4・5号住→6号住→7号住→8号住の順と思われる。

5号住居跡は3軒中では西端に位置し、住居跡の東側半分を6号住居跡に切られているが、6号住居跡が浅かったため、比較的残りは良い。規模は長軸5.47m、短軸4.67m、検出面からの深さは25cm前後で、平面形は長方形を呈している。南西壁から北西壁にかけて幅15cm、深さ6～8cm前後の壁溝が巡る。主軸方位はN-43°-Eを示す。住居跡内中央に径60cm、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、南東壁中程には115×90cm、深さ20cm前後の土坑をもつ。明確な支柱穴の位置は確認できなかった。

遺物は住居跡西側から甕の破片数点(41・42)が出土した。いずれも口縁から胴部にかけての一部で、内外面とも摩滅していて、残りは悪い。当住居跡の時期は、土器の形態から弥生時代後期初頭～中葉頃と考える。

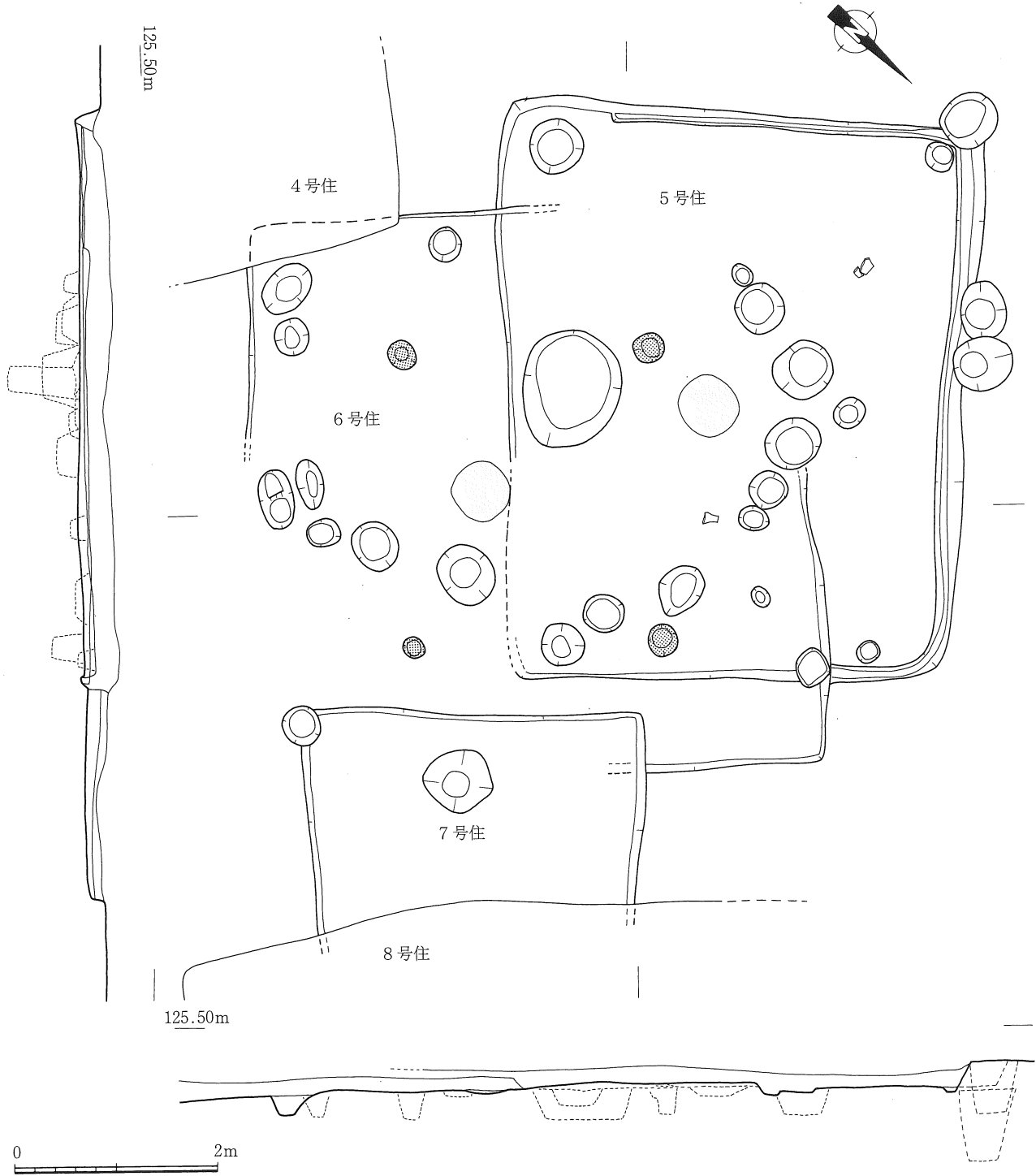
6号住居跡の規模は長軸5.56m、短軸5.44m、検出面からの深さは中央付近で5cm前後と残りは悪く、西側と東側コーナー付近は検出できなかった。主軸方位はN-41°-Eを示す。住居跡内中央に径60cm、深さ5cm前後のレンズ状の炉跡をもち、支柱穴は4本で、径30cm、深さ30cm前後、支柱穴間は南北間2.4m、東西間2.9mである。

遺物は住居跡西寄りが高坏の脚部1点(43)が出土した。残りは悪く脚の中央部だけで、内外面とも摩滅している。当住居跡の時期は、5号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期中葉以降と考える。

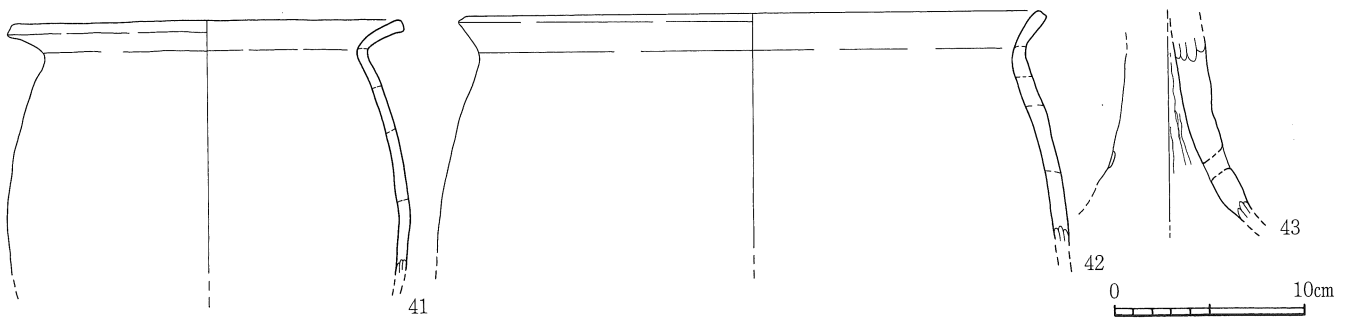
7号住居跡は8号住居跡に切られ北東部分が半分以上消滅している。このため規模は北西～南東間3.38m、南西～北東間不明、検出面からの深さは10cm前後で、平面形は方形或いは長方形を呈していたと考える。主軸方位はN-44°-Eを示す。住居跡内では炉跡・支柱穴は確認できなかった。当住居跡の時期は、切り合い関係から弥生時代後期中葉以降と考える。

表7 5・6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎 土	色 調	焼 成	成 形	調 整		使用痕	備 考
		法量	器高					外 面	内 面		
41	甕	(20.6)	石英 やや多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明			5号住居跡出土
		—									
		—									
42	甕	(30.2)	赤色粒子、 白色粒子 多、 角閃石 多、 石英 多	褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明			5号住居跡出土
		—									
		—									
43	高坏(脚)	—	角閃石 少、 赤色粒子 多	灰褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明			6号住居跡出土
		—									
		—									



第14图 5~7号住居跡実測図 (1/60)

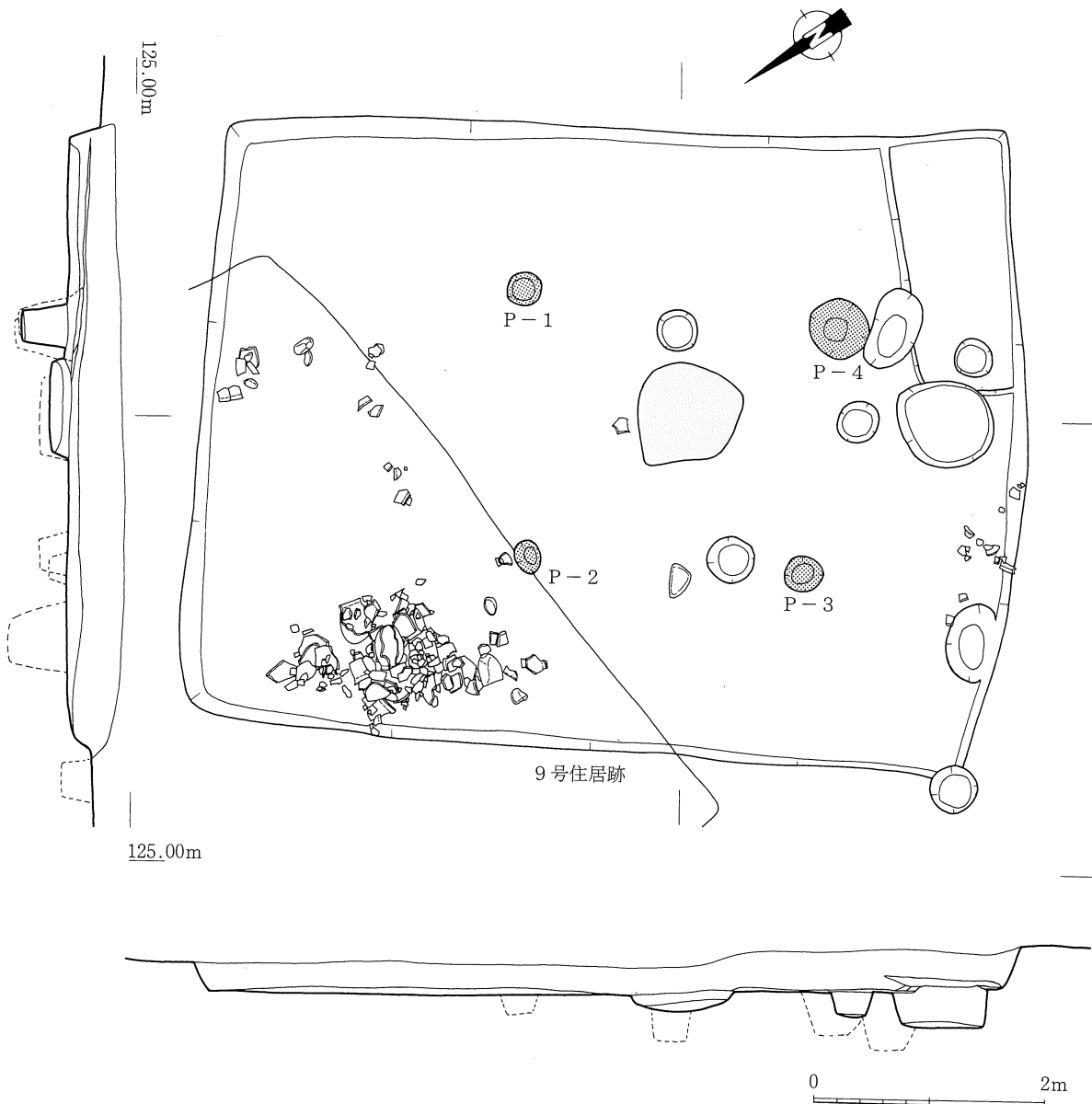


第15图 5・6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

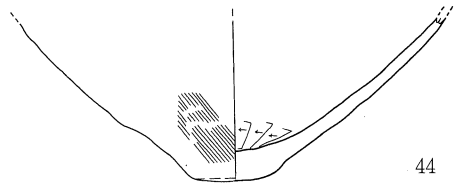
### 8号住居跡（第16図）

8号住居跡はB-1区東端方向に位置し、南は7号住居跡、北は9号住居跡を切って構築されている。また住居跡上面からは奈良時代と思われる掘立柱建物跡が検出されている。規模は長軸6.80m、短軸5.36m、検出面からの深さは20～30cmで、比較的残りがよく、平面形は長方形を呈している。南側コーナー部分に東西2.2m、南北0.9m、高さ約10cmのベッド状遺構が付されている。主軸方位はN-34°-Eを示す。住居跡内中央に径80cm、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は4本で、径30～50cm、深さ20～50cmである。主柱穴間はP-1・2、P-2・3、P-3・4間が2.3m前後、P-1・4間が2.7mである。

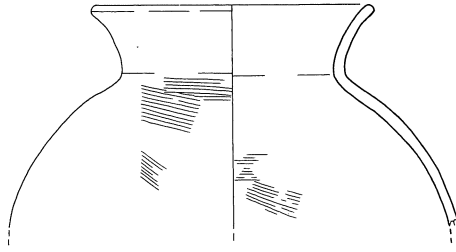
遺物は住居跡北側コーナー一帯で甕や壺が多量に出土（45～61・602・603）したが当住居跡に伴う物ではなく、住居跡廃絶後に捨てられた遺物である。当住居跡に伴う遺物は2点である。44は壺の胴部から底部の一部で、炉跡のそばから出土した。901は鉄鎌で先端部は折れている。ベッド状遺構上からの出土である。当住居跡の時期は、44の壺から弥生時代後期末頃と考える。



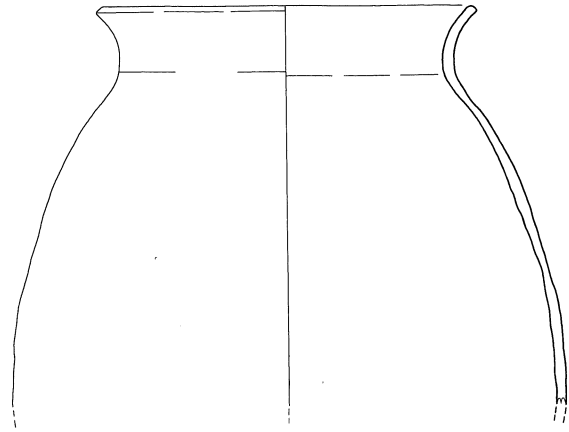
第16図 8号住居跡実測図（1/60）



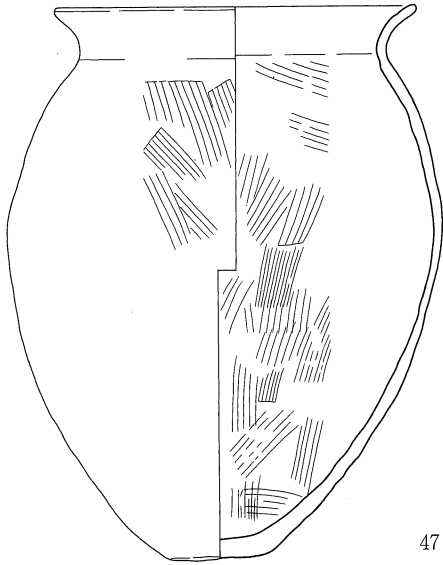
44



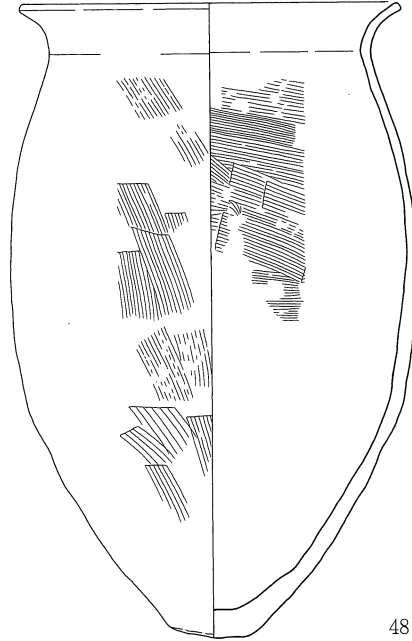
45



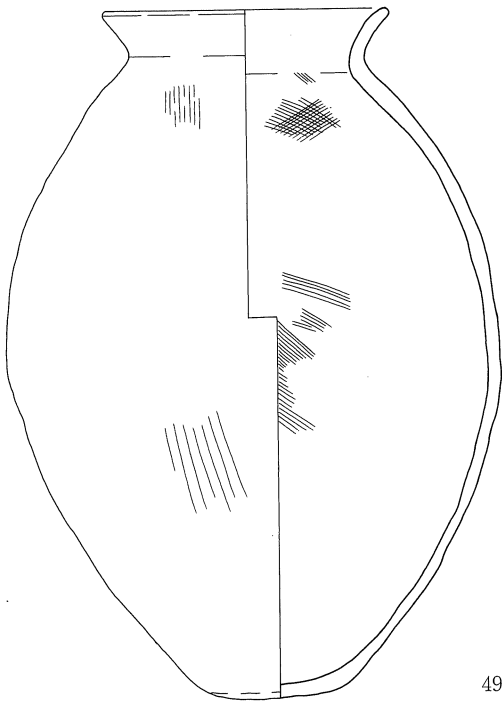
46



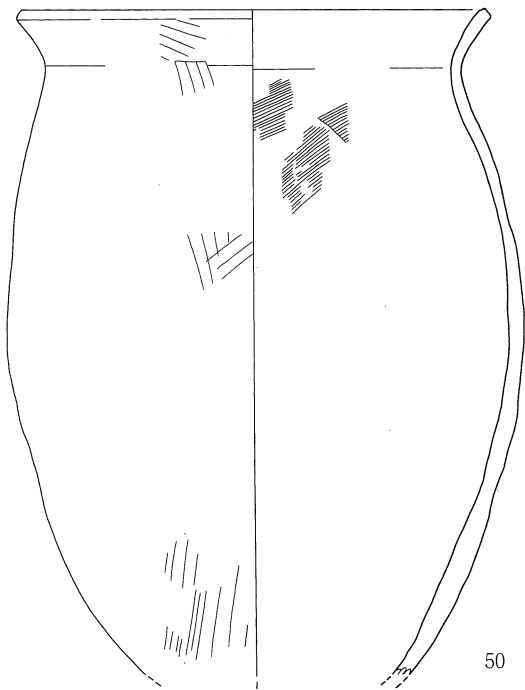
47



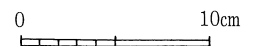
48



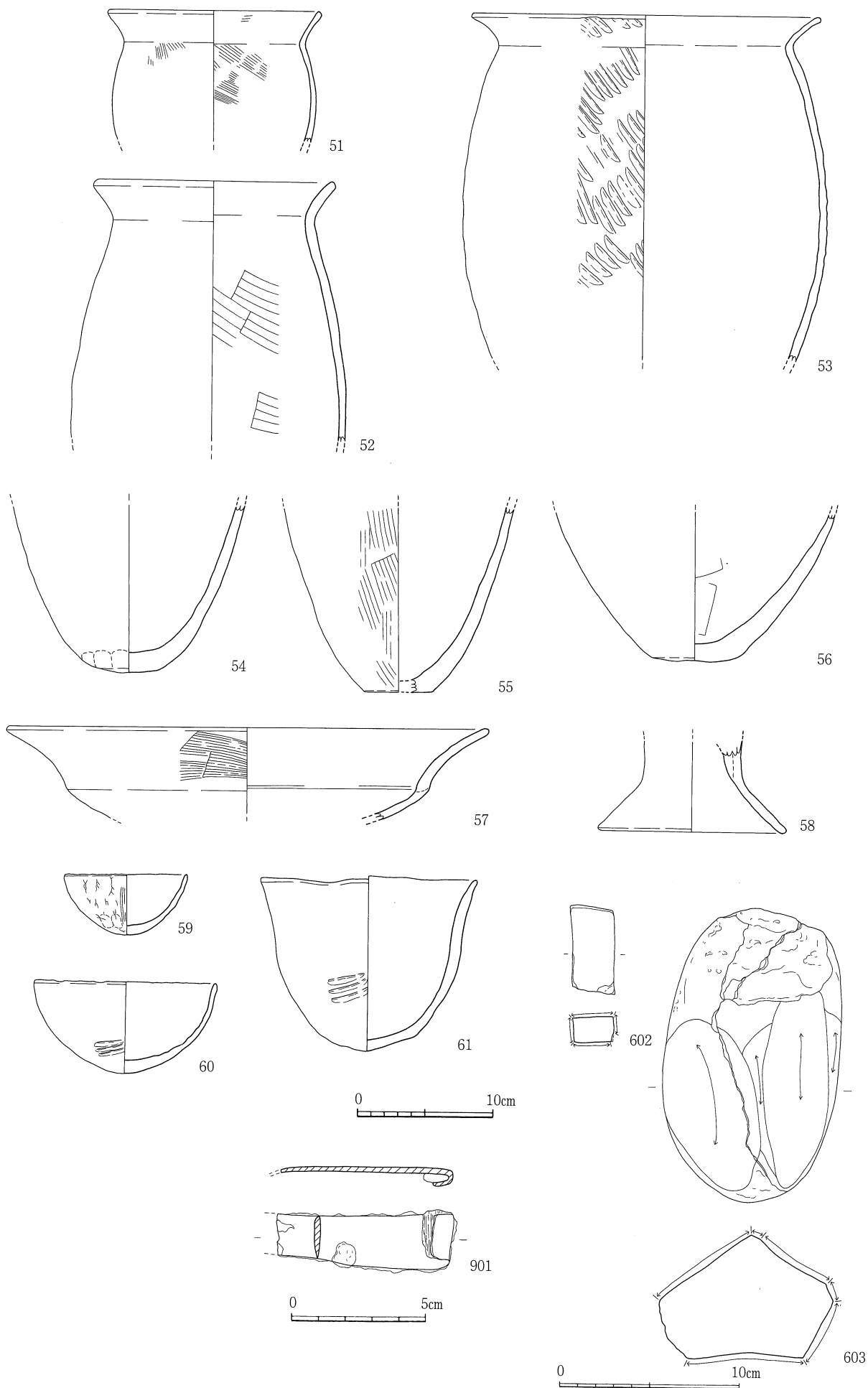
49



50



第17图 8号住居跡出土遺物実測图1 (1/4)



第 18 图 8 号住居跡出土遺物実測図 2 (1/4 · 1/2 · 1/3)



表8 8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
44	壺	—	砂粒 非常に多、 角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	暗褐色	不良	粘土積上げ	ハケ目	ヘラナデ		
		4.4~4.5								
45	壺	(15.2)	砂粒 少、角閃石 多、 灰色粒子 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 少、 長石 少	淡黄色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 ハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 ハケ目		
		—								
46	甕	(20.4)	砂粒 多、角閃石 多、 赤色粒子 多、 石英 非常に多、 白色粒子 多	外面 淡黄褐色 内面 淡黄赤褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明	赤変~黒変 一二次加工	
		—								
47	甕	(19.4)	砂粒 多、 白色粒子 多、 石英 少、 赤色粒子 多、 角閃石 少	淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	タテハケ目	ハケ目		内外とも剥離 している部分 が多い。
		5.0								
48	甕	(20.4)	砂粒 少、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 少	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	赤変一 二次加工	
		4.0~4.5								
49	甕	(15.4)	砂粒 非常に多、 赤色粒子 非常に多、 角閃石 多、 長石 少	外面 淡黄褐色 内面 灰白色	やや不良	粘土積上げ	タテハケ目	ヨコハケ目		
		6.0~6.7								
50	甕	(25.2)	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 非常に多	赤黄色	良好 黒斑	粘土積上げ	ハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 ハケ目	赤変一 二次加工	
		—								
51	甕	(16.0)	砂粒 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	淡黄白色~ 灰白色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 ヨコハケ目	部分的に赤変 (内面に多)一 二次加工?	
		—								
52	甕	(18.0)	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 多、 長石 少	外面 淡黄褐色 内面 暗褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	不明(剥離)	ハケ目		
		—								
53	甕	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	外面 淡黄褐色 内面 淡黄赤褐色	やや不良	タタキ成形	平行タタキ	不明(剥離)	赤変一 二次加工	
		—								
54	甕	—	砂粒 非常に多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 長石 少	淡黄褐色	不良 黒斑	粘土積上げ	不明	不明		
		4.5~4.7								
55	甕	—	赤色粒子、 角閃石 少、 長石 少、 砂粒 非常に多	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	ハケ目	不明	赤変+黒変 一二次加工	
		(5.0)								
56	甕	—	角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子 多、 砂粒 非常に多	外面 赤褐色 内面 淡赤褐色・ 底部黒変	やや不良	粘土積上げ	不明	ヘラナデ?	赤変一 二次加工	
		6.0								
57	高坏	36.0	角閃石 少、 砂粒 少、 赤色粒子 少	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 ハケ目		
		—								
58	器台	—	角閃石 多、 石英、長石 少、 黒色粒子 多、 砂粒 非常に多	淡黄褐色	やや不良	連続成形	ナデのち ヨコナデ	ナデ	赤変一 二次加工	
		—								
59	埴	—	赤色粒子 少、 角閃石 少、 砂粒 少	淡黄褐色	やや不良		タテハケ指圧	丁寧なナデ		外面にひび 割れあり
		—								
60	埴	13.6	砂粒 多、 角閃石 少、 赤色粒子 多	淡黄褐色	不良 黒斑	タタキ成 形?	タタキのよう な痕跡 ヨコナデ	ヨコハケ		
		—								
61	鉢	(15.5~18.0)	黒色粒子 少、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 長石 少、 白色粒子 多、 砂粒 非常に多	黒灰色~ 灰白色	不良	タタキ成形	一部 平行タタキ 不明	不明		
		—								

表9 8号住居跡出土鉄器計測表

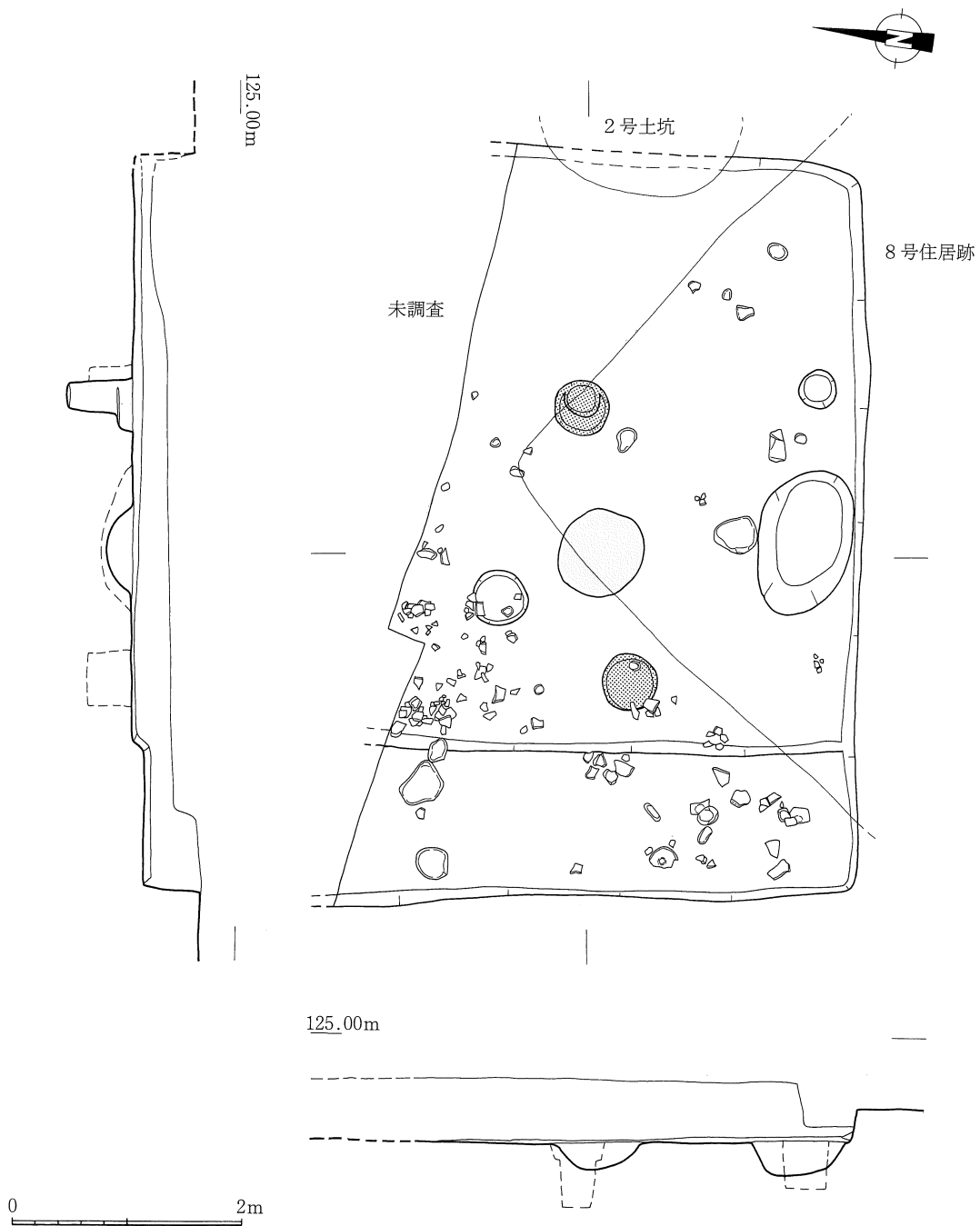
番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
901	鎌	(6.5)	—	—	—	0.2	柄の木質が残る

表10 8号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
602	砥石	硬質頁岩	47	23	16	33.3	
603	砥石	頁岩質砂岩	163	9.6	65	1365.0	

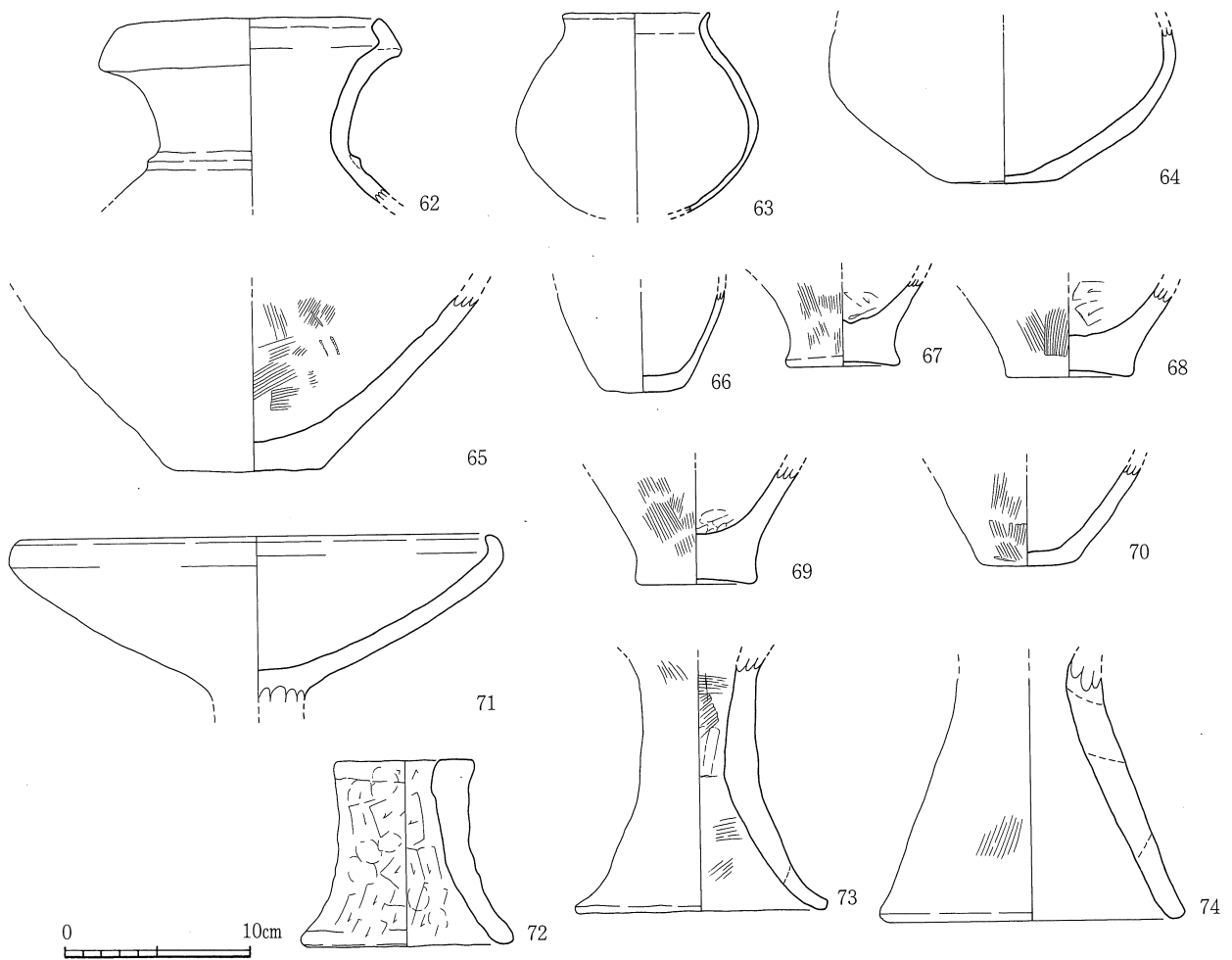
9号住居跡（第19図）

9号住居跡はB-1区東端方向に位置し、北半分は道路下のため未調査である。南は8号住居跡に切られているが、当住居跡は深度があるため下部の残りは比較的良い。東壁中央部は2号土坑によって切られている。また住居跡上面からは奈良時代と思われる掘立柱建物跡が検出されている。規模は東西6.4m、南北4.5 +  $\alpha$  m、検出面からの深さは約60cmで、平面形は方形か長方形を呈していると考えられる。西壁に添って、幅1.2m、高さ約10cmのベッド状遺構が付されている。主軸方位はN-6°-Eを示す。住居跡内中央に径80cm、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。南壁中央付近に1.2 × 1.8m、深さ40cm前後の楕円形の土坑をもつ。支柱穴は2本と考えられ、径50cm、深さ40 ~ 60cm、支柱穴間は2.5mである。



第19図 9号住居跡実測図 (1/60)

遺物は住居跡南側を中心に出土した。63・64・71・72はベッド状遺構からの出土であるが、71の高坏は床から浮いて出土した。67～70の甕底部は一括遺物で、流込みと考える。当住居跡の時期は、弥生時代後期中葉を中心とした時期と考える。

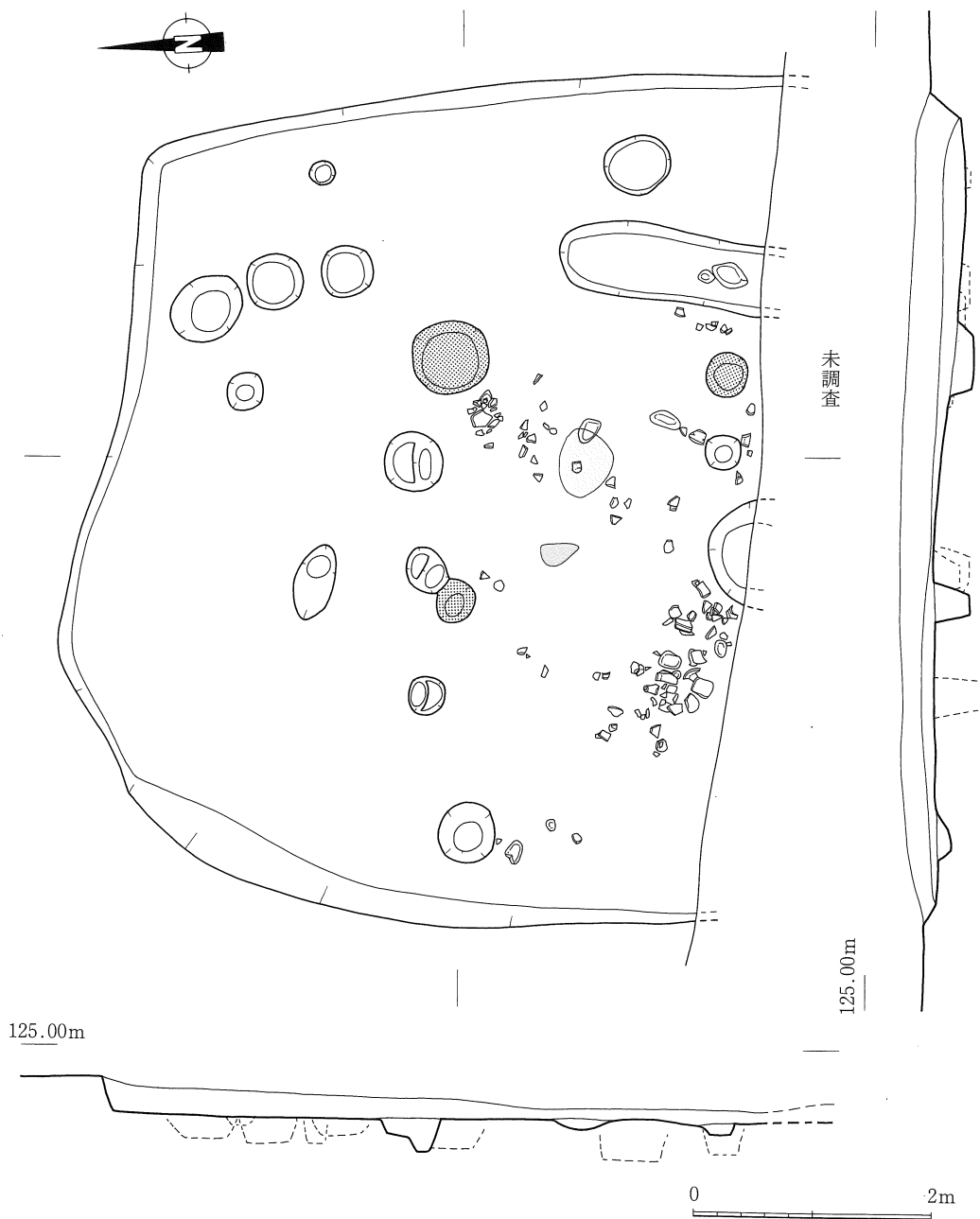


第20図 9号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

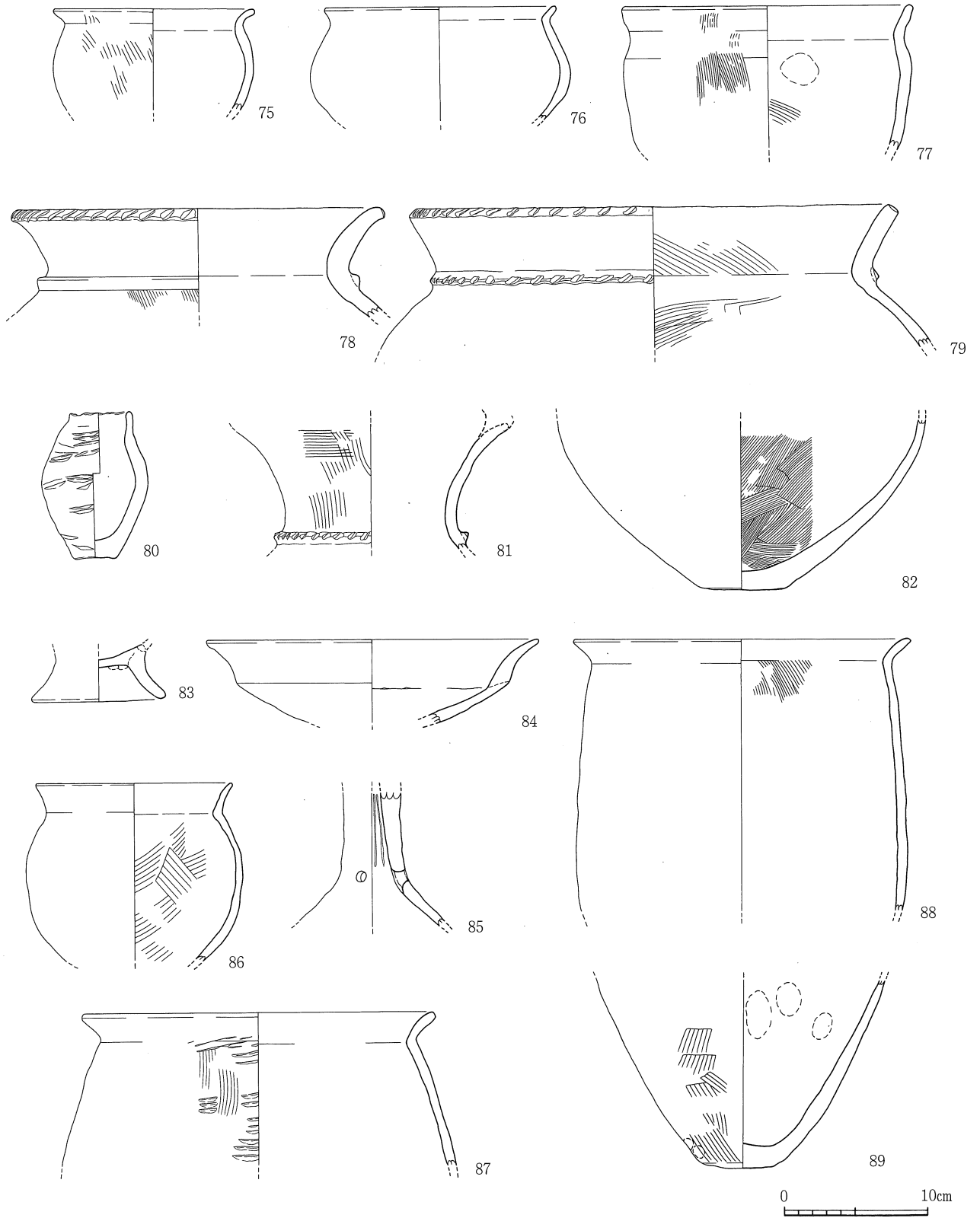
表11 9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
62	壺	14.4	角閃石多、石英多、 白色粒子多、 赤色粒子少	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		9.5									
		—									
63	壺	(8.0)	白色粒子多、 赤色粒子少、 角閃石やや多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		10.8									
		—									
64	壺	8.3	白色粒子多、 赤色粒子少、 角閃石やや多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		5.7									
		—									
65	壺	—	角閃石多、 石英多	外面 橙色 内面 橙色	良好	粘土積上げ	不明	ハケ			
		—									
		7.8									
66	甕	—	角閃石多、 白色粒子多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		5.5									
		4.3									
67	甕	—	角閃石多、 石英やや多	外面 褐灰色 内面 黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	不明			
		4.5									
		6.2									
68	甕	—	角閃石多、 石英多	外面 明黄褐色 内面 黒褐色	良好	粘土積上げ	ハケ	ケズリ			
		4.4									
		6.9~7.0									
69	甕	—	角閃石多、 白色粒子多、 赤色粒子多	外面 褐色 内面 浅黄橙色	良好		ハケ ヨコナデ	ケズリ 指ナデ			
		5.8									
		6.6									

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
70	甕	—	角閃石多、 石英多	黄褐色	良好	粘土積上げ	ハケ	不明		
		4.9 4.8								
71	高坏	(25.4)	角閃石多、 赤色粒子多、 石英多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		8.8 —								
72	支脚	—	角閃石多、 石英多、 赤色粒子多、 白色粒子やや多	黄橙色 赤橙色 混合	良好		ケズリ 指ナデ	ケズリ		
		10.0 —								
73	器台	—	角閃石やや多、 石英やや多、 長石やや多、 赤色粒子やや多	明黄褐色	良好	粘土積上げ	ハケ	ハケ ケズリ		
		13.7 13.8								
74	器台	—	角閃石少、 白色粒子多	橙色	良好	粘土積上げ	不明(剥離)	不明(剥離)		
		13.2 16.6								



第 21 図 10号住居跡実測図 (1 / 60)



第22图 10号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

10号住居跡（第21図）

10号住居跡はB-1区北東隅に位置し、南側1/3は道路下のため未調査である。規模は東西6.4m、南北5.0+αm、検出面からの深さは約20cmで、西壁から北壁にかけての壁面はほとんど残っていない。平面形は方形か長方形を呈していると考え。主軸方位はほぼ磁北を示す。住居跡内中央に径50cm、深さ8cm前後のやや楕円形をしたレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は4本で、南西の主柱穴は未調査区に位置するため、確認できていない。径40～65cm、深さ20cm前後で、主柱穴間は東西間2.0m、南北間2.3mである。

遺物は住居跡中央付近から出土したが、いずれも検出床面から10～20cm以上上面からの出土であり、当住居跡の埋没後に破棄された遺物と考える。破棄遺物の時期は弥生時代後期後葉～終末であるため、当住居跡は破棄遺物と同時代か若干早まる時期であろう。

表12 10号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外 面	内 面		
75	壺	(14.2)	砂粒 少、 角閃石 少、 石英 少、 赤色粒子 多	外面 淡黄褐色 内面 黒茶褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
76	壺	(16.2)	砂粒 多、 角閃石 少、 灰色粒子 少、 黒色粒子 少、 石英 少	淡黄赤褐色	やや不良	タタキ成形	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
77	鉢	(20.6)	砂粒 多、 赤色粒子 多、 石英 少、 角閃石 少	淡黄茶褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目			
		—									
		—									
78	壺	(26.2)	砂粒 多、 角閃石 多、 長石 少、石英 少、 赤色粒子 少	外面 淡黄灰色 内面 黒灰色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 不明		口縁に斜めの 刻目 頸部に一条三角 突帯	
		—									
		—									
79	壺	(34.4)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 石英 少、 角閃石 少	黒茶褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	不明	ハケ目		口縁部に刻目 頸部に刻目の 一条突帯あり	
		—									
		—									
80	壺	—	砂粒 多、 角閃石 多、 石英 非常に多、 赤色粒子 少	黄褐色	良好 黒斑	タタキ成形	平行タタキ	ナデ			
		10.2									
		3.0									
81	壺	(19.0)	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 黒曜石 少、 長石 少	外面 淡黄灰色 内面 灰茶色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
82	壺	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 石英 少、 長石 少	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ (内傾接合)	不明	ハケ目			
		—									
		5.8									
83	台付 鉢?	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 石英 多	淡黄赤褐色上 部は黒茶色	やや不良	連続成形+ 円盤充填	ヨコナデ	口縁 ヨコナデ 体部 ナデ 指圧痕		赤変～黒変一 二次加熱あり	
		—									
		9.4～9.8									
84	高坏	(23.4)	砂粒 少、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 黒色粒子 多	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
85	高坏	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 黒色粒子 少、 長石 少	淡黄色	やや不良	粘土積上げ	不明	タテナデ ヨコナデ		3ヶ所に穿孔 あり しぼり痕あり	
		—									
		—									
86	甕	(13.8)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 黒色粒子 少	外面 淡黄白色 内面 黒灰色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
87	甕	(22.8)	砂粒 多、 角閃石 少	淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 タタキか らのハケ目	口縁 ヨコナデ 体部 不明			
		—									
		—									
88	甕	(23.8)	砂粒 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	淡黄白色	やや不良	粘土積上げ (内傾接合)	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 タテハケ 目、ナデ			
		—									
		—									
89	甕	—	角閃石 少、 砂粒 非常に多	淡黄赤褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	不明	赤変一2次 加工あり		
		—									
		5.4～6.0									

11号住居跡（第23図）

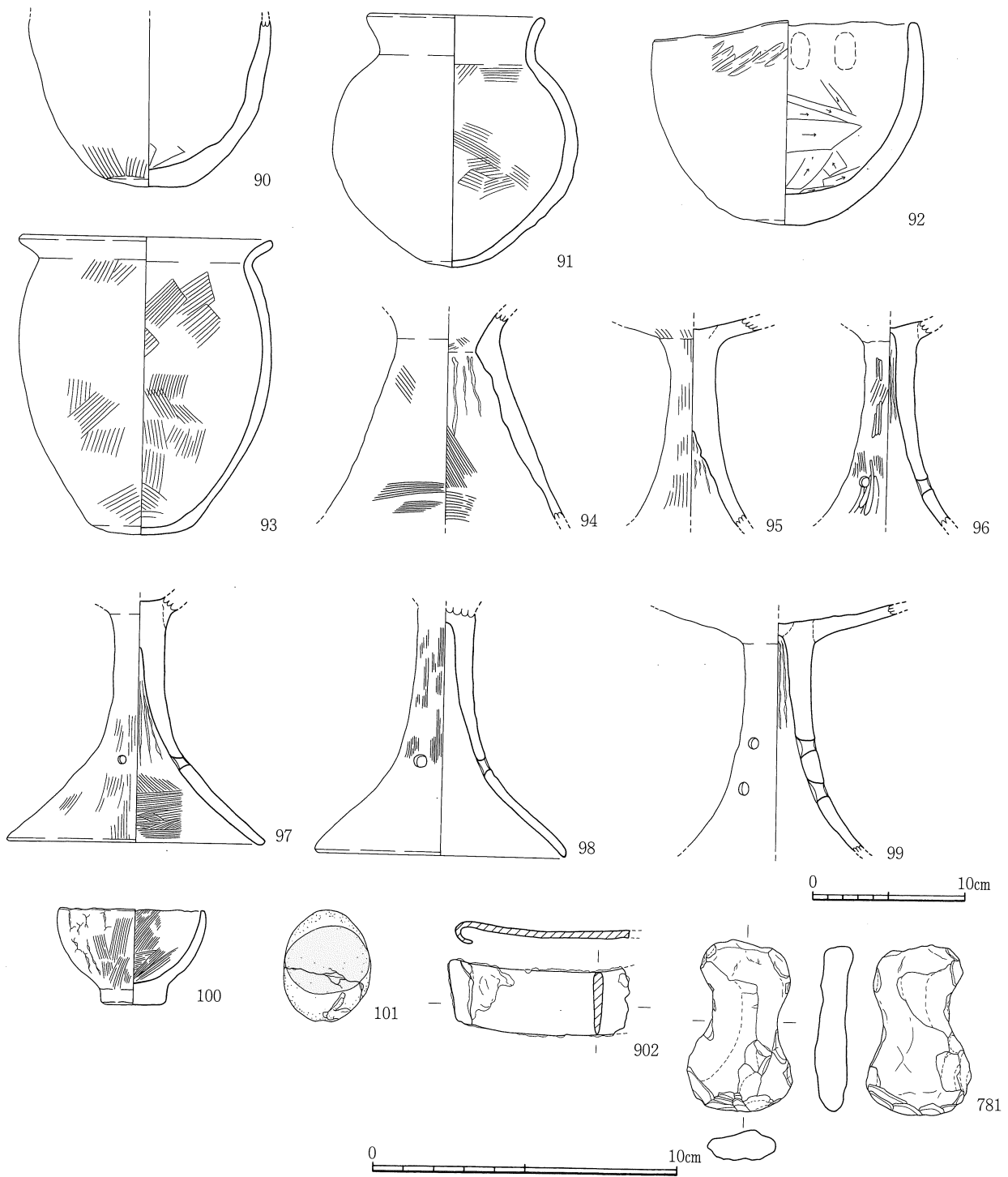
11号住居跡はB-1区北東コーナー、10号住居跡の東に位置する。規模は東西6.0m、南北4.3m、検出面からの深さは10～20cm前後で、平面形は長方形を呈している。北壁に添って、幅90cm、高さ約5cmのベッド状遺構が付されている。主軸方位はN-6°-Wを示す。住居跡内中央に径70cm、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、南壁中程には0.75×0.55m、深さ20cm前後の隅丸方形の土坑をもつ。主柱穴は2本で、径30cm、深さ45cm前後、主柱穴間は3.0mである。



第23図 11号住居跡実測図 (1/60)



遺物はベッド状遺構を除く床面全域から出土している。91～93・100は完形で、91の壺は西支柱穴の西側、92の鉢は炉跡北側、100の碗は東支柱穴北側から出土した。当住居跡の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉前後であろう。



第24図 11号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

表 13 11号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量 器高 底径	胎 土	色 調	焼 成	成 形	調 整		使用痕	備 考
							外 面	内 面		
90	壺	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 黒曜石 少	茶褐色	やや不良 黒斑	タタキ成形	ハケ	不明		底部に回転状 のヘラナデあり
		5.2~5.8								
		—								
91	壺	11.6	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 石英 少、 長石 多	淡黄灰色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 ハケ目		
		16.6								
		—								
92	鉢	16.9~17.5	砂粒 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 少、 角閃石 多、 石英 非常に多	明黄褐色	良好 黒斑	タタキ成形	口縁 ヨコナデ 体部 平行タタキ	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラナデ		
		11.9~13.4								
		—								
93	甕	16.4~16.8	砂粒 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少、 角閃石 多、 石英 多、 長石 非常に多	黒茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ナデ 体部 タテハケ目	口縁 ナデ 体部 タテハケ目	すず付着 内石間一黒変 ↓ 二次加工	
		19.6								
		6.0~6.7								
94	器台	—	赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 多、 砂粒 非常に多	灰褐色	やや不良	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		
		—								
		—								
95	高坏	—	砂粒 少—精粘土 使用 角閃石 少、 長石 少	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	タテハケ目	不明 (剥離)		
		—								
		—								
96	高坏	—	砂粒 少—精粘土 使用 赤色粒子 少、 角閃石 少、 石英 少、 長石 多	赤褐色	良好	連続成形+ 円盤充填	ミガキ ハケ目	ナデ		3ヶ所に穿孔 あり
		—								
		—								
97	高坏	—	砂粒 少—精粘土 使用 角閃石 少、 黒曜石 少	淡黄褐色	やや不良	連続成形+ 円盤充填	タテハケ目	ヨコハケ目		3ヶ所に穿孔 あり
		—								
		17.0								
98	高坏	—	砂粒 少—精粘土 使用 角閃石 少、 石英 少、 長石 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	タテハケ目	底部 ヨコナデ ナデ		3ヶ所に穿孔 あり
		—								
		16.1~16.6								
99	高坏	—	砂粒 多、 石英 多、 金雲母 非常に多	灰褐色	良好	連続成形+ 円盤充填	不明	ナデ		しぼり痕あり 3ヶ所に縦2 個の穿孔あり
		—								
		—								
100	壺	9.5	砂粒 比較的精良 な粘土を使用 赤色粒子 多、 角閃石 少、 石英 少	明黄褐色 黒茶色	やや不良	手づくね技 法? 型作り?	口縁 ナデ 体部 タテハケ目	口縁 ナデ 体部 タテハケ目		比較的精良な 粘土を使用、 外面にひび割 れあり—特別 な祭祀用品 か?
		6.3								
		4.2~4.4								

表 14 11号住居跡出土石製品計測表

番号	器種	石 材	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備 考
101	投弾	安山岩	3.7	2.8	34.8	ほぼ完形

表 15 11号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備 考
902	鎌	(5.9)	—	—	—	0.3	

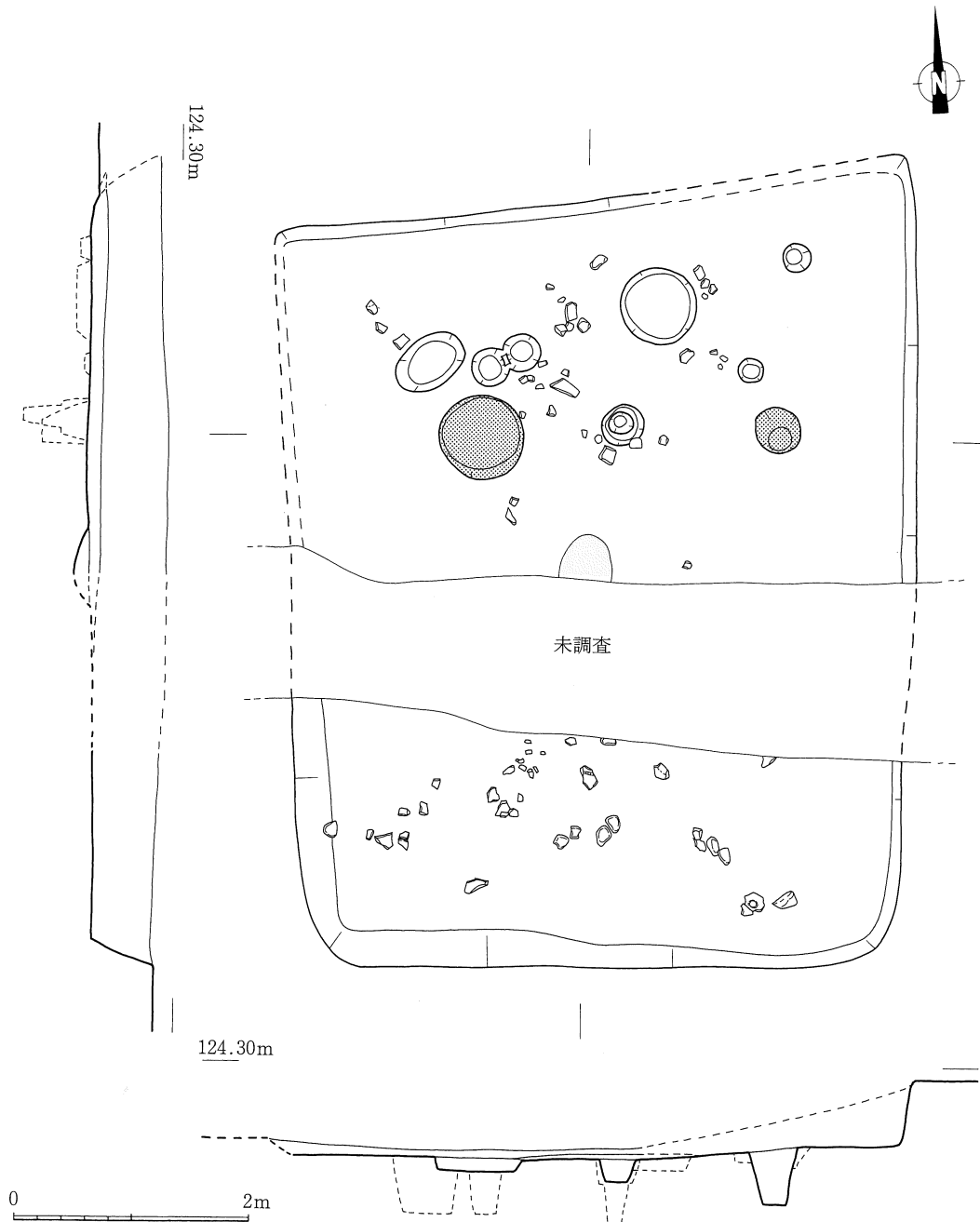
表 16 11号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
781	打製石斧	安山岩	62	35	12	26.0	

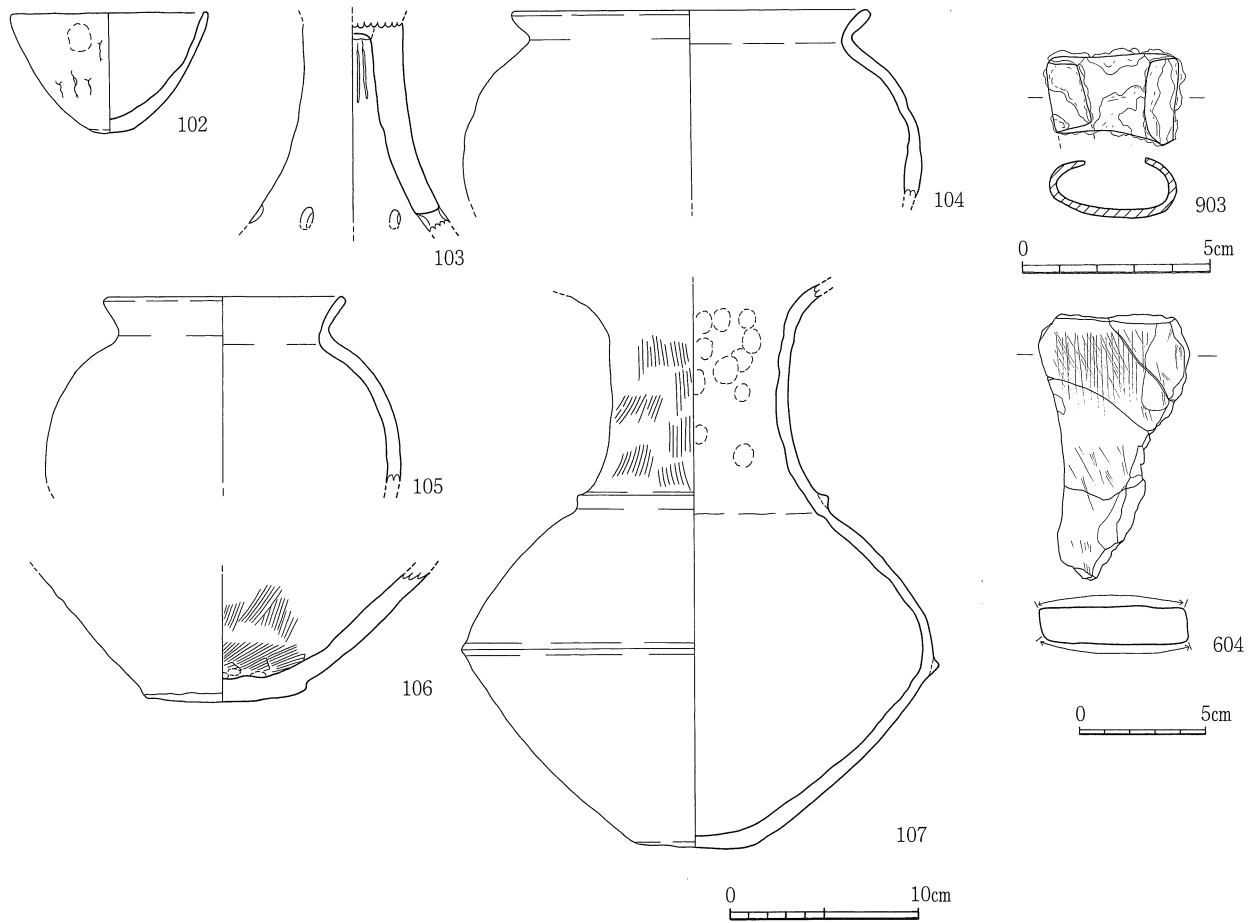
12号住居跡（第25図）

12号住居跡はB-2区北西端に位置し、中央部分は道路下のため未調査である。北半分は残りが悪く、壁面の残りは10cm程度である。規模は東西5.3m、南北6.3m、検出面からの深さは北側で10cm、南側で60cm前後である。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居跡内中央に楕円形で東西40cm、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は4本で、南側の2本は未調査区に位置すると考える。検出された2本の主柱穴の径は40cmと70cm、深さ40cm前後で、主柱穴間は南北2.5mである。

遺物はかなりの量が出土したが、そのほとんどが床から15cm以上浮いて出土していて、床面付近から出土した遺物は106の壺底部だけである。



第25図 12号住居跡実測図（1/60）



第 26 図 12 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2・1/3)

表 17 12 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
102	埴	(10.6)	—	砂粒 精粘土使用 角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子 少	淡黄褐色	やや不良 黒斑	型打ち or 手づくね 手法?	不明 (剥離)	不明		底部外面に 四条の剥離
		—	—								
		—	—								
103	高坏	—	—	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 少、 長石 非常に多	赤褐色	良好	円盤充填	不明 (剥離)	ミガキ 後 ヨコナデ	赤変一 二次加熱あり	8ヶ所に穿孔 あり
		—	—								
		—	—								
104	壺	(19.2)	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少	黒茶褐色	やや不良	粘土積上げ	不明 (剥離)	不明 (剥離)		
		—	—								
		—	—								
105	壺	(13.0)	—	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 少、 長石 非常に多	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	不明 (剥離)	不明		
		—	—								
		—	—								
106	壺	—	—	砂粒 多、 石英 多、 角閃石 少、 長石 少	明黄褐色	良好	粘土積上げ	不明 (剥離)	タテハケ目		
		8.6~8.8	—								
		—	—								
107	壺	—	—	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 長石 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	タテハケ目	不明	底部に赤変 一二次加熱 あり?	
		—	—								
		6.5~6.7	—								

表 18 12 号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎幅 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
903	鉄斧	(2.4)	—	—	—	—	

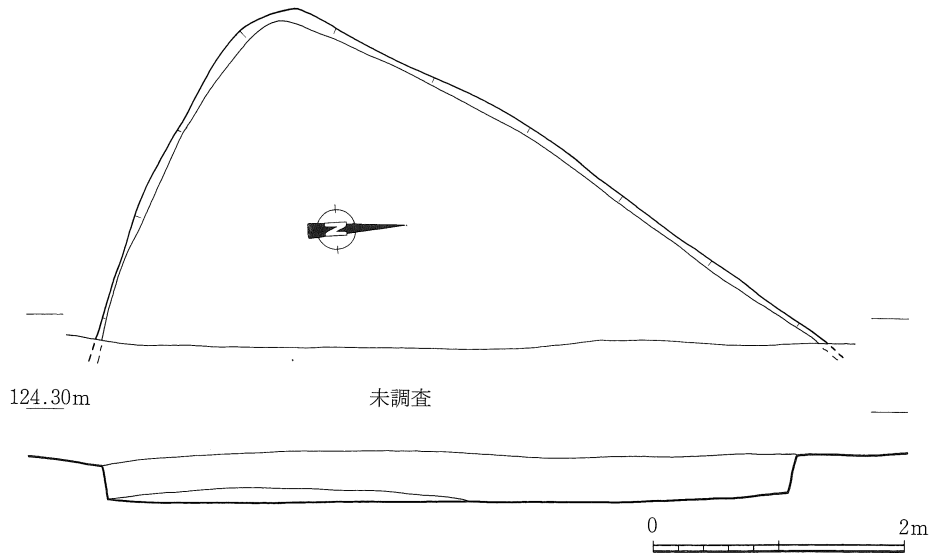
表 19 12 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
604	砥石	硬質頁岩	104	59	15	114.1	

### 13号住居跡（第27図）

13号住居跡はB-2区北西端、12号住居跡の北東1mに位置する。遺構の大半は道路下のため未調査であり、調査を行ったのは西側コーナー付近だけであった。規模は不明、検出面からの深さは10cm前後で、平面形は方形あるいは長方形を呈していると考える。主軸方位はN-35°-Eを示す。住居跡内からは柱穴は検出されなかった。

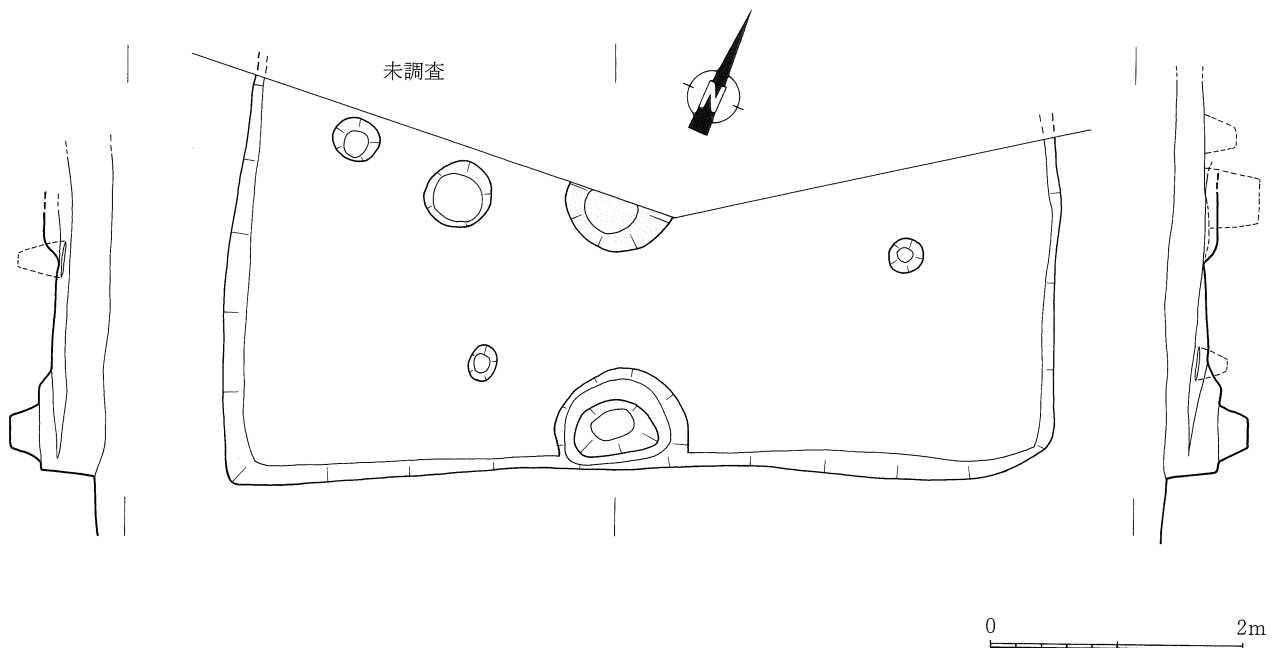
遺物の検出はなかった。このため当住居跡の時期は不明であるが、弥生時代後期頃と考える。



第27図 13号住居跡実測図（1/60）

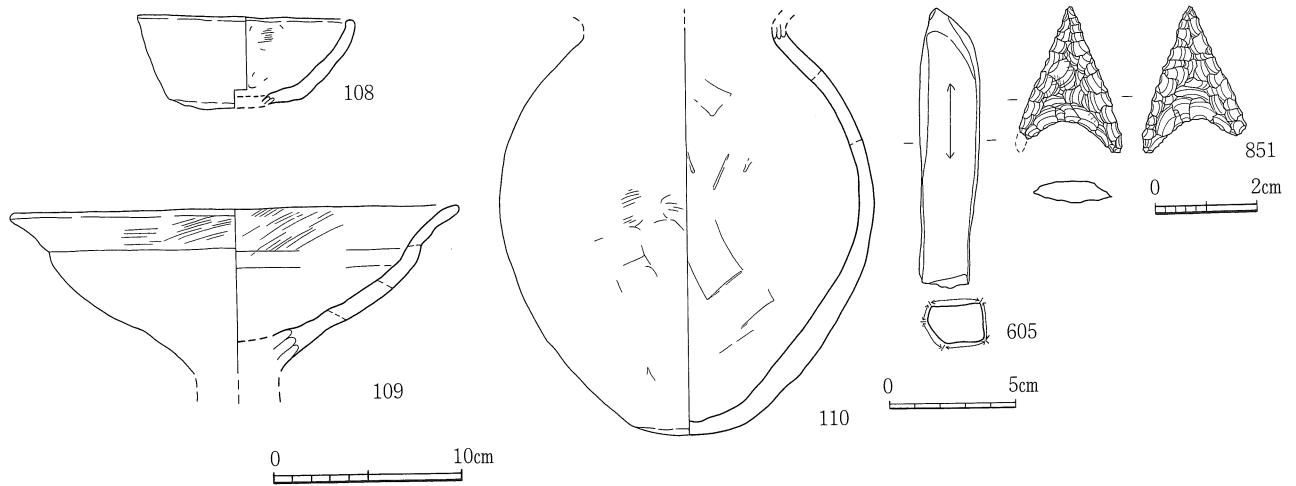
### 14号住居跡（第28図）

14号住居跡はB-2区北西、12号住居跡と切り合っている。切り合い部分は道路下のため未調査であり、新旧は不明である。規模は東西6.6m、南北は不明、検出面からの深さは30cm前後で、平面形は方形あるいは長方形を呈していると考える。主軸方位はN-25°-Wを示す。住居跡内中央と思われる位置に径80cm前後、深さ10cmの炉跡の一部を検出した。南壁中程には径115×80cm、深さ30cm前後の土坑をもつ。主柱穴は2本と考えられるが、確定はできていない。



第28図 14号住居跡実測図（1/60）

遺物は床面のほぼ全域から出土したが、いずれも小破片であり実測できたのは土器3点(108～110)、砥石1点(605)であった。石鏃(851)は上層からの一括出土である。出土遺物から、当住居跡の時期は弥生時代後期後葉～終末と考える。



第 29 図 14 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3・2/3)

表 20 14 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
108	碗	10.8	角閃石 少、 白色粒子 多	黒褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		4.4~5.0									
		6.8									
109	高坏	23.5	角閃石 やや多、 赤色粒子 やや多	黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									
110	壺	—	角閃石、 赤色粒子、 白色粒子	褐灰色 暗褐色	普通	粘土積上げ	ほとんど不明 ケズリ	ほとんど不明 ハケ工具痕			
		21.3									
		5.8~6.0									

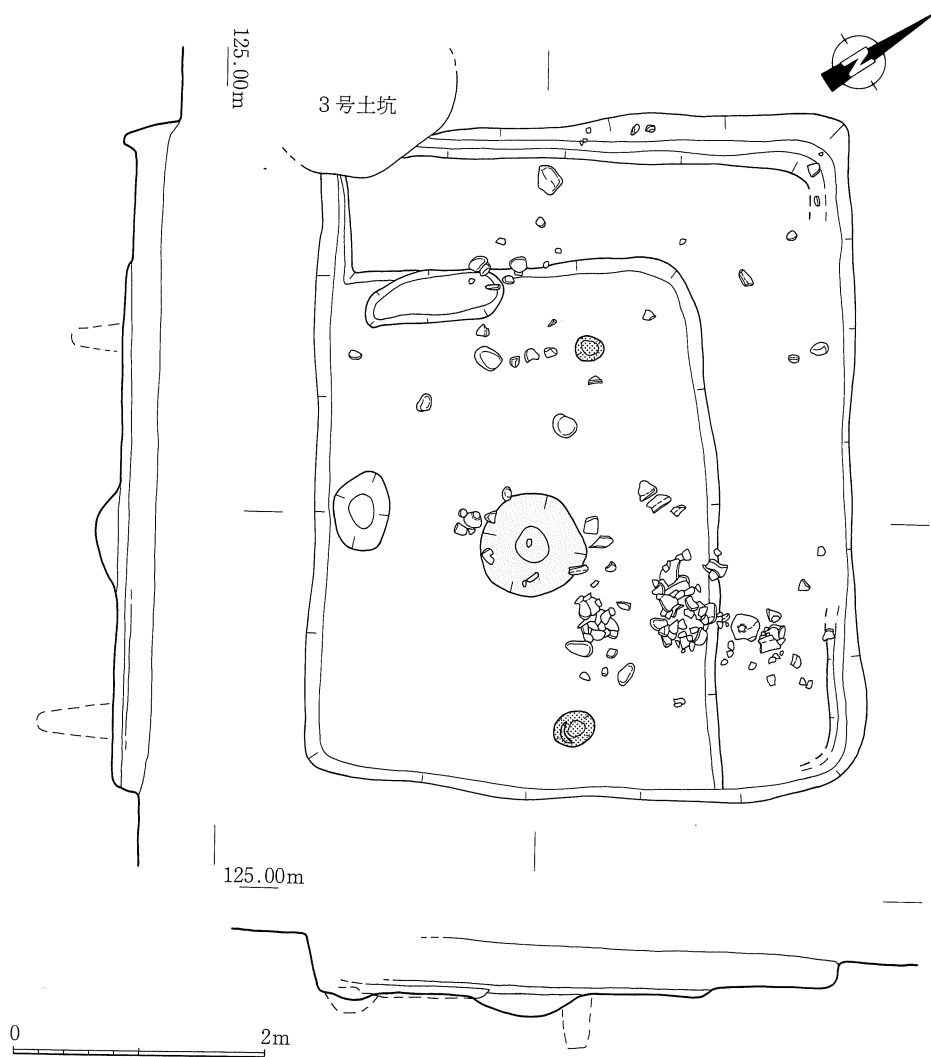
表 21 14 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
605	砥石	頁岩質砂岩	110	23	15	47.3	
851	石鏃	姫島産黒曜石	29	21	4	—	片脚欠損

15号住居跡（第30図）

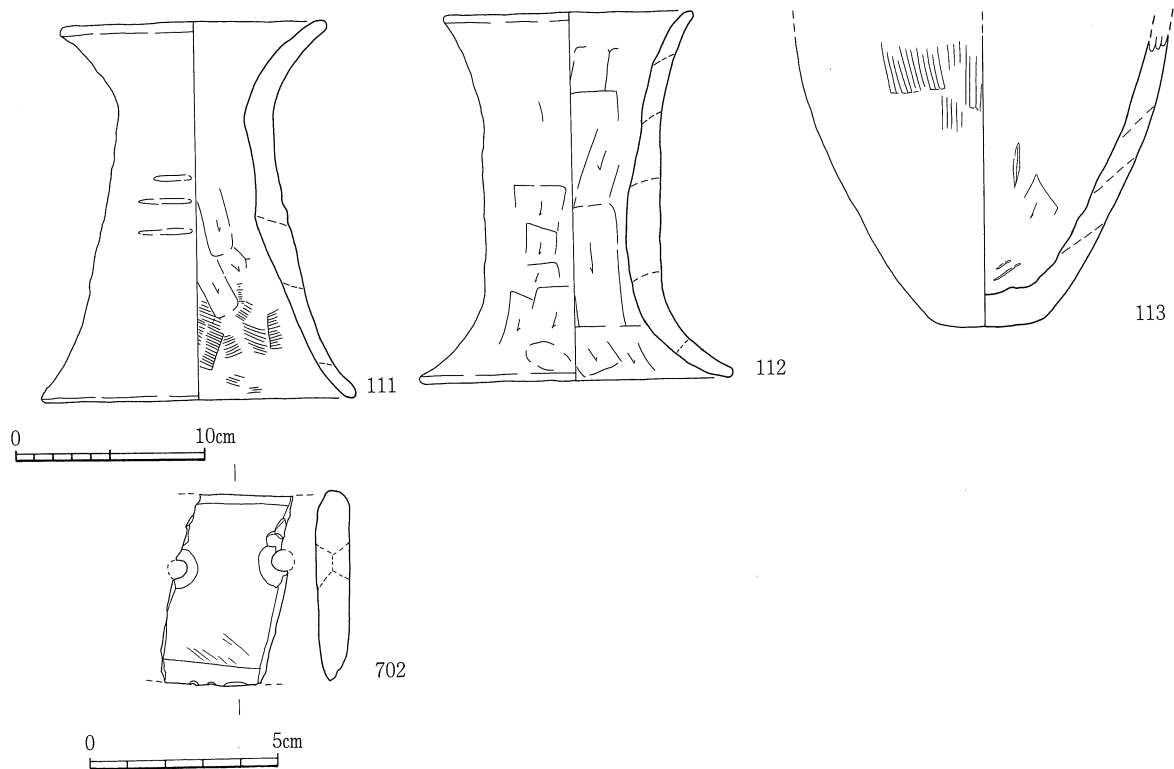
15号住居跡はB-1区とB-2区のほぼ中央に位置し、西側は8号住居跡に隣接している。また、西コーナーは3号土坑に切られている。規模は長軸5.3m、短軸4.25m、検出面からの深さは20cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-38°-Eを示す。西コーナーから北コーナーさらには東コーナーまで幅約0.8m、高さ8cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡り、壁面とベッド状遺構の間には約30cm、床からの深さ約8cmの壁溝が巡る。住居跡内中央に径80cm、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡と、南西壁中程に径50cm、深さ20cm前後の楕円形の土坑をもつ。主柱穴は2本で、径30cm、深さ40～60cm前後の柱穴が検出された。主柱穴間は3.0mである。

遺物は上層から住居跡廃絶後の投げ込みと考えられる甕・壺各1個体分が出土した。当住居跡に伴うと考えられる遺物は器台2点（111・112）と甕の体部（113）である。石包丁（702）は一括出土である。遺物からみた住居跡の時期は弥生時代後期中葉～後葉と考える。



第30図 15号住居跡実測図（1/60）





第 31 図 15 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

表 22 15 号住居跡出土土器観察表

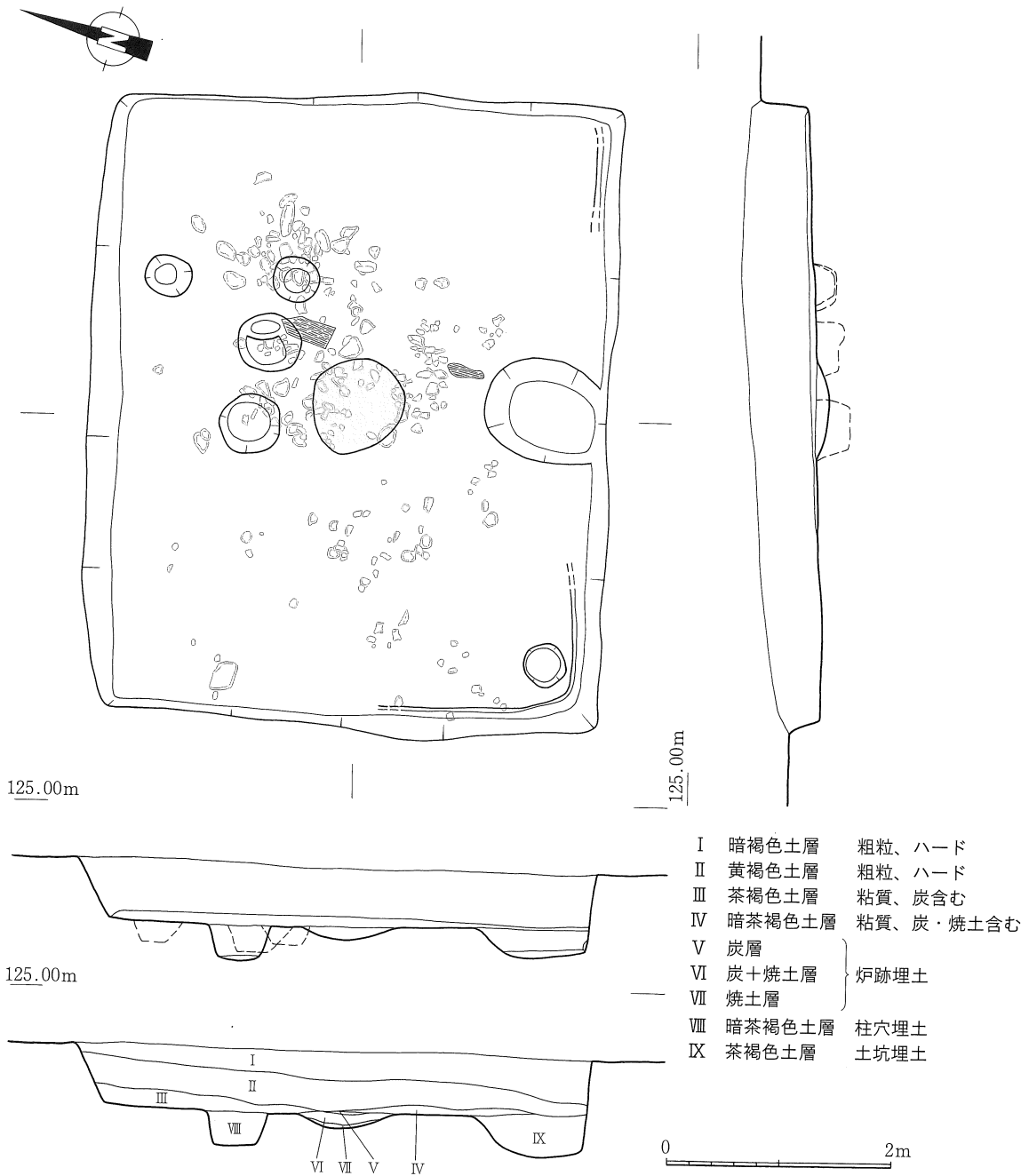
番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
111	器台	14.2	角閃石多、 石英多、 白色粒子多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	ケズリ ハケ		
		19.8~20.5 (16.8)								
112	器台	(13.4)	角閃石少、 石英少、 赤色粒子多	明黄褐色	良好	粘土積上げ	ケズリ	ケズリ		
		(19.4) (16.6)								
113	甕	—	角閃石少、 石英少、 白色粒子多	外面 橙色 暗褐色 内面 明黄褐色 暗褐色 混合	良好	粘土積上げ	ハケ	ケズリ		
		(5.2)								

表 23 15 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
702	石包丁	粘板岩	(31)	50	9	—	

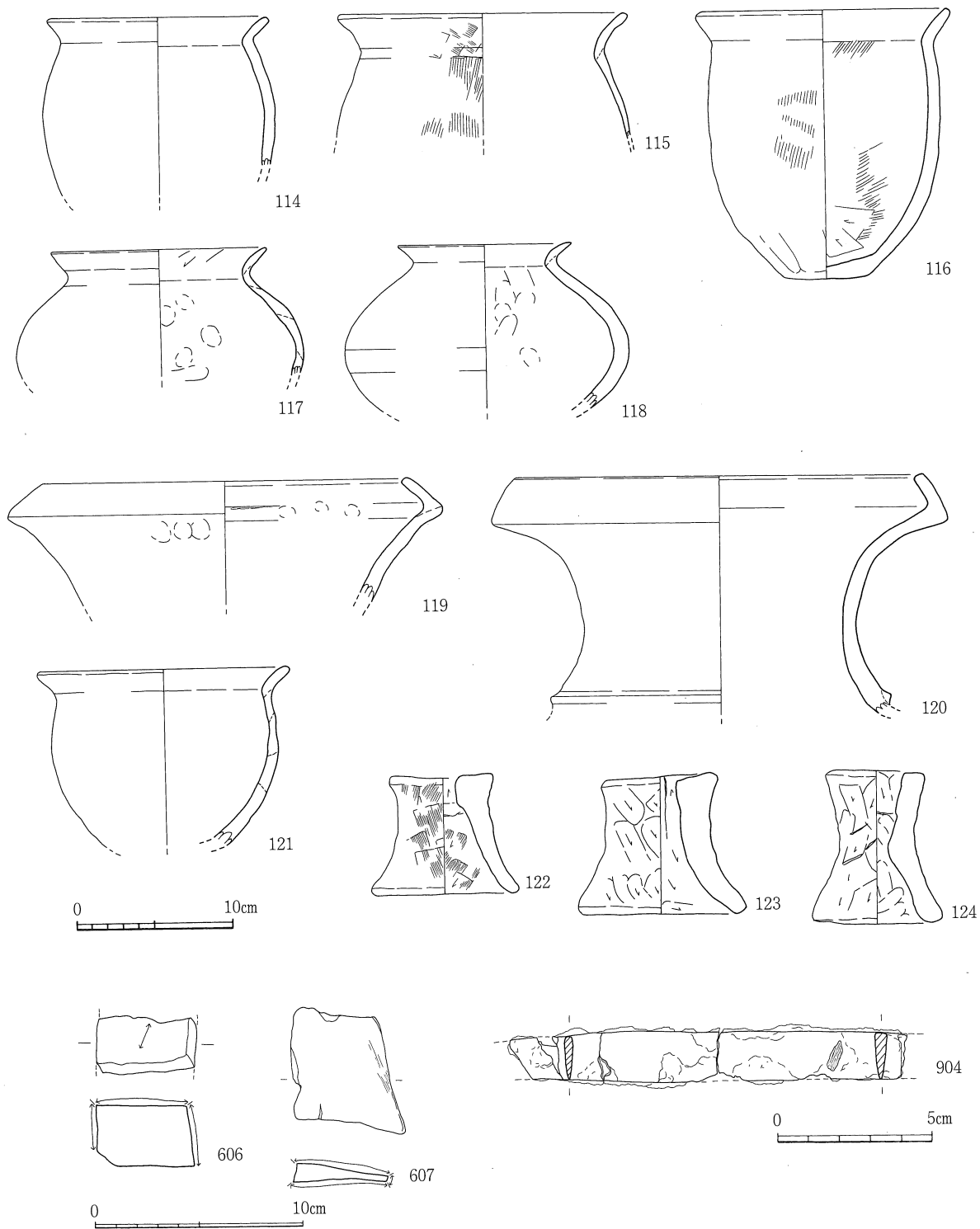
16号住居跡（第32図）

16号住居跡はB-2区に位置し、西側は15号住居跡に隣接している。規模は東西5.6m、南北4.6m、検出面からの深さは約60cmで、残りはよい。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-17°-Wを示す。南西コーナーと南東コーナー部分に幅20cm、深さ6~8cm前後の壁溝が残っている。住居跡内中央には径80cm前後、深さ30cm前後のレンズ状の炉跡をもち、上面は多量の炭で覆われていた。南壁中程には径1m、深さ30cm前後の土坑をもつが、遺物の出土はなかった。柱穴は数個検出されたが、主柱穴となる柱穴は確認できなかった。

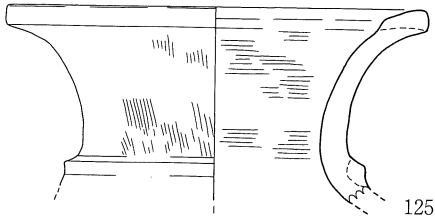


第32図 16号住居跡実測図 (1/60)

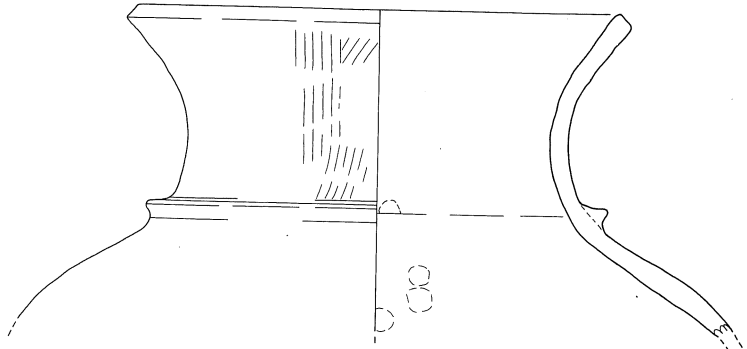
遺物は多量に出土したが、そのほとんどがⅡ層からの出土（第34・35図）で、住居跡埋没後の一括破棄遺物であった。当住居跡に伴うと思われるものは第33図の遺物で、炉跡を中心にほぼ住居跡の全面から出土している。出土遺物からみた住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後であろうと考える。



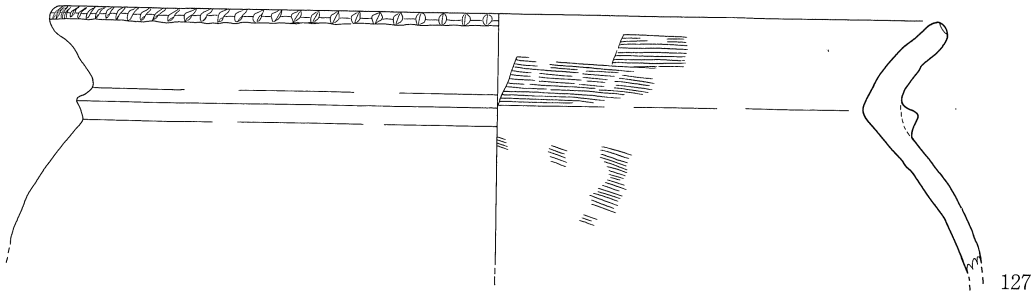
第33図 16号住居跡出土遺物実測図1 (1/4・1/3・1/2)



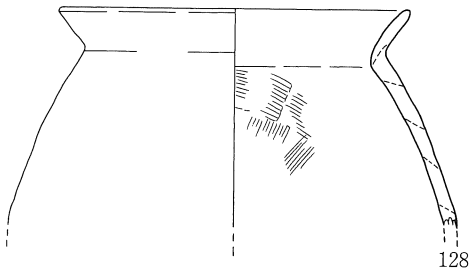
125



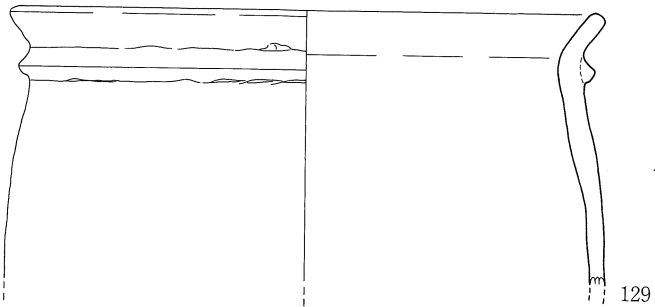
126



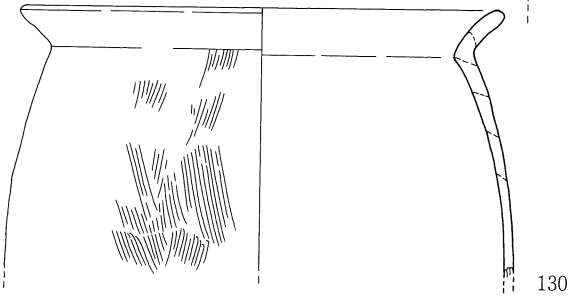
127



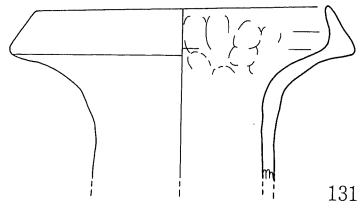
128



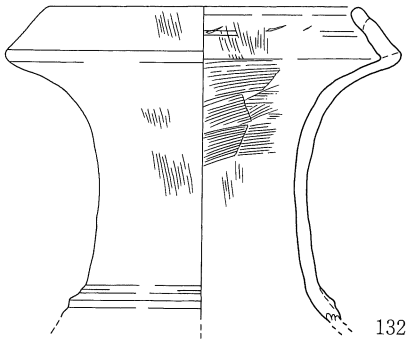
129



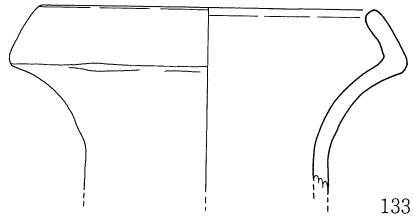
130



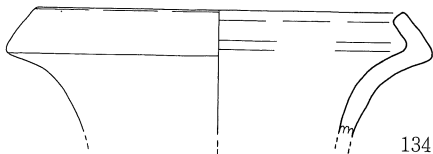
131



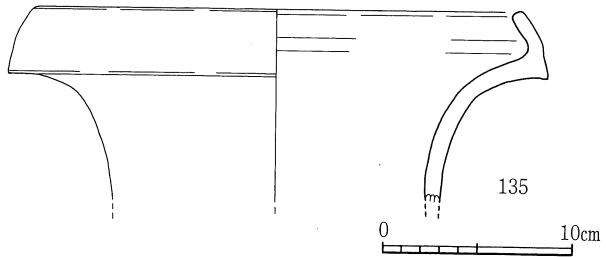
132



133



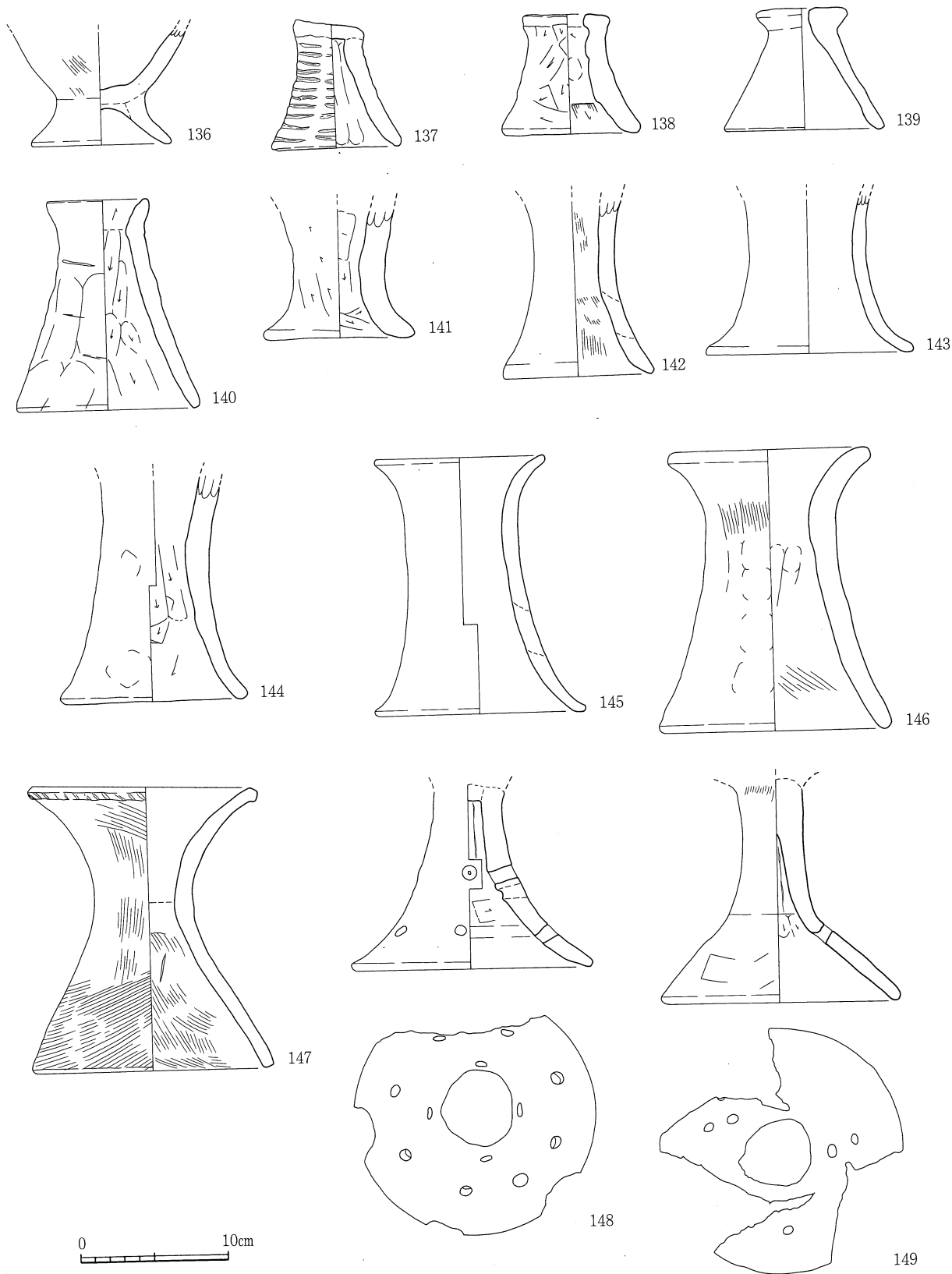
134



135

0 10cm

第 34 图 16 号住居跡出土遺物実測图 2 (1/4)



第 35 图 16 号住居跡出土遺物実測図 3 (1 / 4)

表 24 16号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎 土	色 調	焼 成	成 形	調 整		使用痕	備 考
		法量	器高					外 面	内 面		
114	甕	14.5	長石 少、 角閃石 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		11.5									
		—									
115	甕	(18.8)	石英 多、 角閃石 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明			
		7.9									
		—									
116	甕	(16.6)	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	黄褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目			
		17.4									
		(5.6)									
117	壺	(14.0)	石英 多、 角閃石 多	浅黄橙色		粘土積上げ	不明	ハケ 指おさえ			
		8.1									
		—									
118	壺	(11.2)	角閃石 少、 白色粒子 多	黄橙色	指おさえ	粘土積上げ	不明	指おさえ			
		10.7									
		—									
119	壺	23.6	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									
120	壺	(16.2)	砂粒 多、 閃石 多、 赤色粒子 多、 長石 多、 白色粒子 多	黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明			
		—									
		—									
121	鉢	(16.5)	角閃石 多、 石英 やや多、 白色粒子 多	橙色	良好		不明	不明			
		11.5									
		—									
122	支脚	—	角閃石 やや多、 赤色粒子 やや多、 石英 やや多	橙色	良好						
		7.7~7.8									
		9.6									
123	支脚	7.5~7.8	角閃石 少、 石英 少、 白色粒子 多	橙色	良好		ケズリ後ナデ 指ナデ	ケズリ後ナデ		内面にタテ方向の 接合痕または 絞り痕？ 表面風化著しい	
		8.7~9.1									
		10.8~11.3									
124	支脚	6.2~6.6	角閃石 多、 長石 微、 石英 多	明黄褐色	良好		ケズリ	ケズリ後ナデ			
		9.8~10.0									
		7.9~8.4									
125	壺	—	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	明黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ タテハケ目			
		(22.6)									
		—									
126	壺	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 長石 多、 白色粒子 少、 角閃石 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケナデ		一条三角突帯 あり	
		(27.0)									
		—									
127	壺	(48.0)	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 長石 多、 白色粒子 少	黄褐色	良好	粘土積上げ	不明	ヨコハケ目			
		—									
		—									
128	甕	(18.8)	赤色粒子 少、 白色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目？	口縁 ヨコナデ ハケ目			
		11.7									
		—									
129	甕	(31.8)	砂粒 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 長石 多、 白色粒子 少	黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明			
		—									
		—									
130	甕	(23.2)	角閃石 少、 石英 少、 白色粒子 多	黄橙色 黒褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	不明			
		—									
		—									
131	壺	15.6	角閃石 少、 石英 多、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		8.9~9.4									
		—									
132	壺	21.2	砂粒 多、 角閃石 多	黄橙色	良好	粘土積上げ	タテ方向ハケ	ハケ目		三角突帯あり 風化著しい	
		—									
		—									

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
133	壺	(17.8)	砂粒多、 赤色粒子多、 角閃石少、 長石少	黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明			
		—									
		—									
134	壺	(19.6)	砂粒多、 赤色粒子多、 角閃石少、 白色粒子少	明黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明			
		—									
		—									
135	壺	(26.0)	砂粒多、 赤色粒子多、 角閃石少、 長石少、 白色粒子少	赤褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ナデ	口縁 ヨコナデ ナデ			
		—									
		—									
136	脚付き鉢	(9.6)	角閃石少、 白色粒子多	黄橙色	良好	ハケ残 ほとんど 不明	不明				
		—									
		—									
137	支脚	8.9	角閃石少、 石英多、 白色粒子多、 赤色粒子多	明黄褐色	良好	タタキ成形	タタキ	絞り痕 指ナデ			
		8.9									
		—									
138	支脚	5.9~6.3	角閃石多、 石英多、 白色粒子少	浅黄橙色	普通		ケズリ後ナデ	ケズリ 指ナデ		表面風化著しい	
		7.8~8.3									
		9.3~9.6									
139	支脚	8.3~8.5	角閃石、 石英	浅黄橙色	普通		不明	不明			
		11.0									
		—									
140	器台	12.6	角閃石少、 白色粒子少	浅黄橙色	良好		タタキ ナデ	指ナデ ケズリ			
		—									
		—									
141	器台	6.8	角閃石多、 石英少、 赤色粒子少、 白色粒子多	橙色	良好		ケズリ後ナデ 指おさえ	ケズリ後ナデ			
		10.3									
		—									
142	器台	11.9	角閃石少、 石英多、 白色粒子少	淡黄灰白色			不明	不明			
		10.4									
		—									
143	器台	14.2	角閃石少、 石英多、 白色粒子少	明黄褐色	良好		不明	不明			
		—									
		—									
144	器台	15.2	角閃石多、 石英多、 白色粒子多	橙色	良好		不明	ケズリ		表面風化著しい	
		12.2~13.0									
		—									
145	器台	17.7	角閃石多、 赤色粒子少、 白色粒子少、 石英多	明褐色	良好		不明	不明		風化・全部剥離している	
		(14.4)									
		—									
146	器台	(19.3)	角閃石多、 石英やや多、 赤色粒子多、 白色粒子多	黄橙色	良好		ハケ痕 ケズリ痕残る	指ナデ		全面剥離している	
		(16.0)									
		—									
147	器台	19.2~19.8	角閃石多、 白色粒子多、 赤色粒子多、 石英少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		刻目突帯あり	
		(16.6)									
		—									
148	高坏	12.7	角閃石少、 石英多、 白色粒子少	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	ケズリ ナデ?		穿孔 上-4個 下-8個あり	
		16.6									
		—									
149	高坏	14.9	角閃石多、 赤色粒子多	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	絞り ケズリ		穿孔あり 風化著しい	
		16.6									
		—									

表 25 16号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
606	砥石	硬質頁岩	(23)	44	30	(57.8)	
607	砥石	硬質頁岩	54	51	9	35.8	

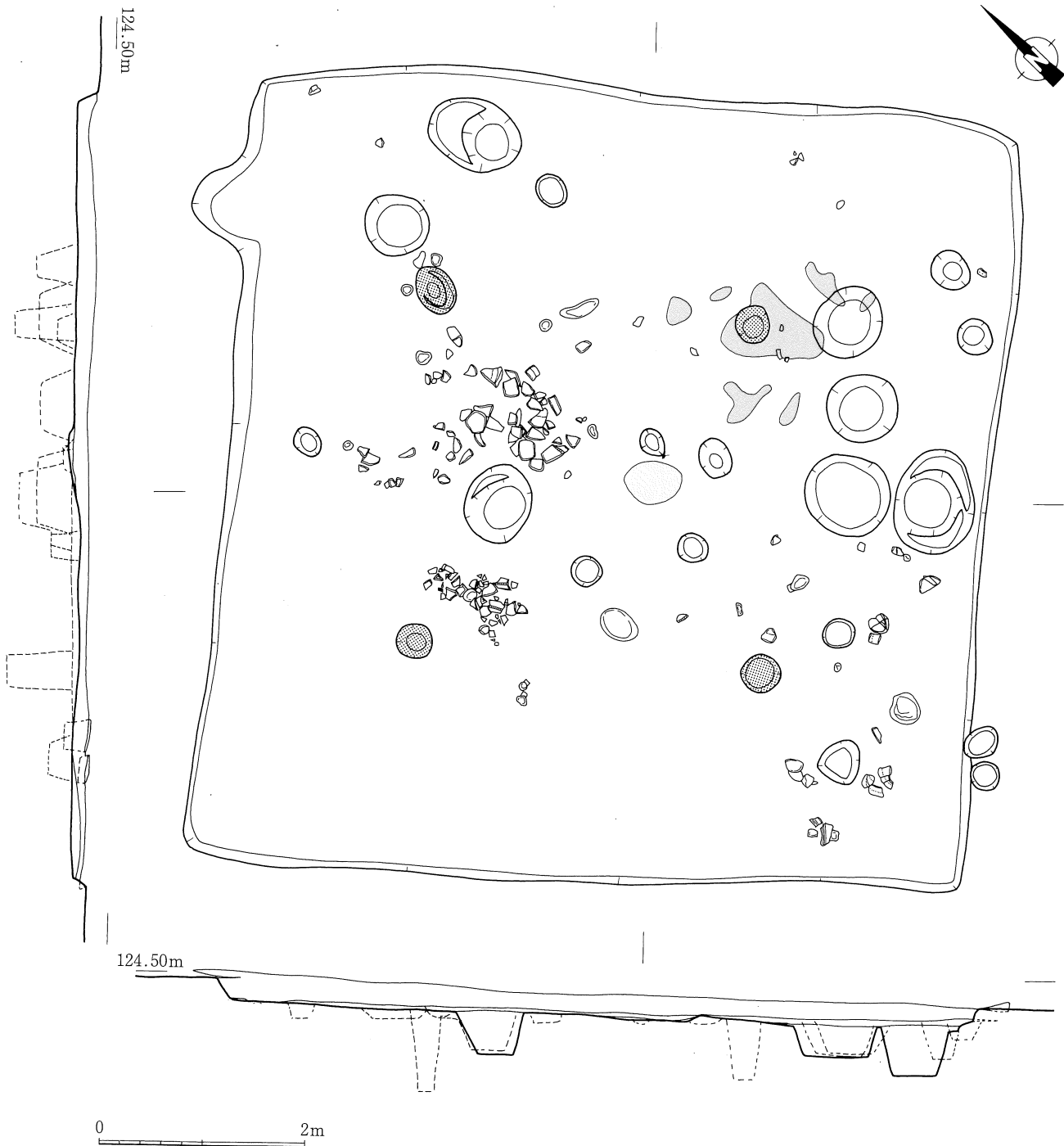
表 26 16号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
904	刀子	(12.8)	—	1.6	—	—	



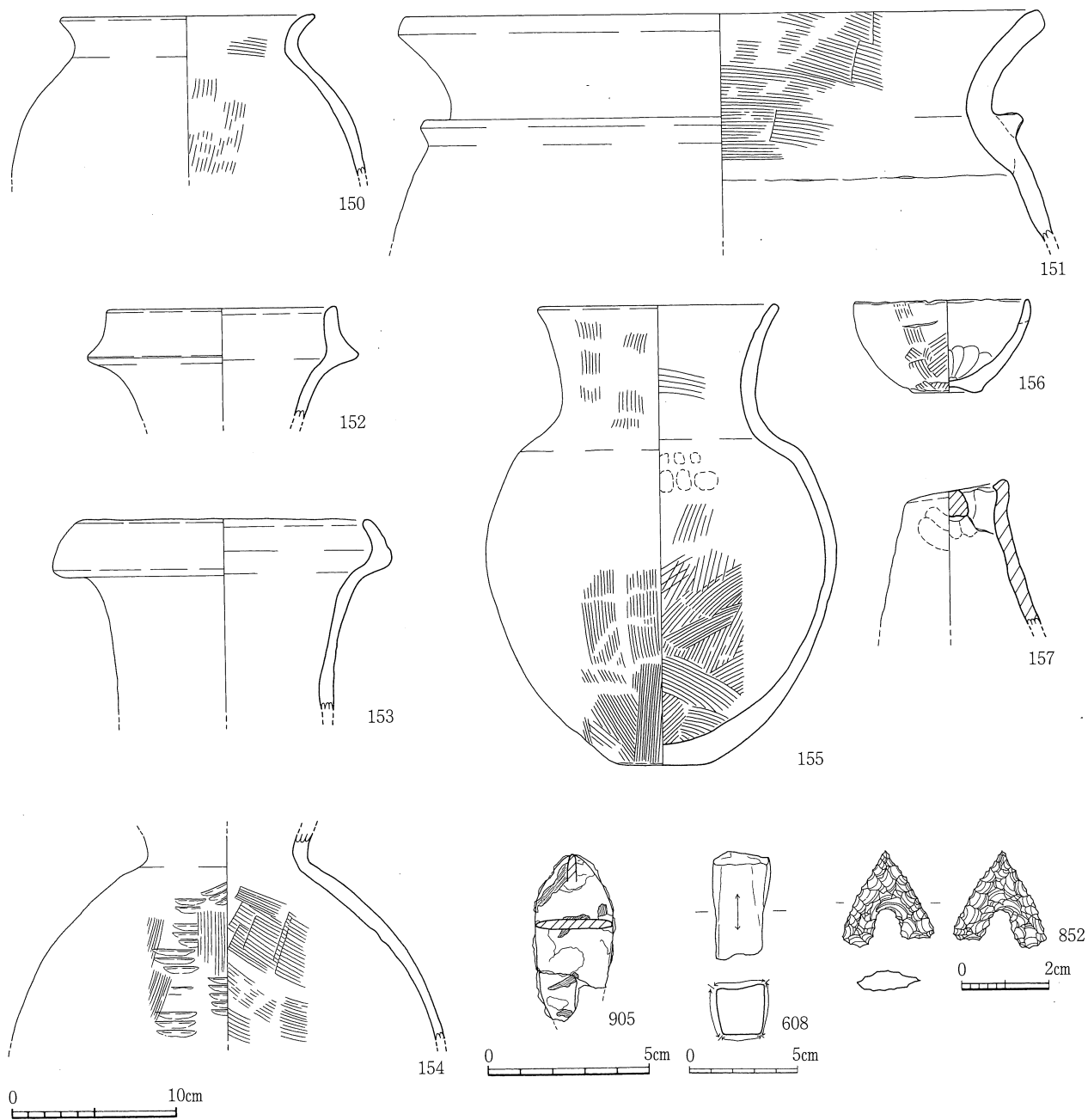
17号住居跡（第36図）

17号住居跡はB-2区のはぼ中央、16号住居跡の東に隣接して構築されている。規模は長軸7.68m、短軸7.36m、検出面からの深さは10～20cmで、比較的大型の住居跡である。平面形はやや歪な方形を呈している。主軸方位はN-46°-Eを示す。住居跡内床面からはベッド状遺構や壁溝等は検出されなかった。住居跡内中央には径50cm、深さ5cm前後のレンズ状の炉跡がわずかに残っている。主柱穴は4本で、径40cm、深さ50cm前後、主柱穴間は約3.4mである。



第36図 17号住居跡実測図（1/60）

遺物は住居跡の全域から出土しているが、当住居跡に伴うと考えられる遺物は比較的少なく、中央付近からは一括して破棄遺物が出土している。150の甕は中央付近、151～156は南東壁周辺からである。また、埋土中からは鉄鏝（905）、砥石（608）が出土している。遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後と考える。



第37図 17号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2・1/3・2/3)

表 27 17号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
150	甕	—	—	砂粒多、赤色粒子多、長石少、角閃石少、白色粒子	淡黄灰褐色	不良	粘土積上げ	不明	ハケ目		
		—	—								
		—	—								
151	甕	—	—	砂粒少、赤色粒子多、角閃石少、黒曜石少、石英少	淡黄黒灰色	やや不良	粘土積上げ	不明	不明		一条三角突帯あり
		—	—								
		—	—								
152	壺	(14.4)	—	赤色粒子多、石英少、角閃石少、黒曜石少	明茶褐色	良好	粘土積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ		
		—	—								
		—	—								
153	壺	17.6	—	砂粒多、赤色粒子多、角閃石少、黒曜石少	淡黄灰褐色	不良黒斑	粘土積上げ	口縁ヨコナデ不明	口縁ヨコナデ不明		
		—	—								
		—	—								
154	壺	—	—	砂粒少、赤色粒子多、灰色粒子少、長石少、角閃石少	淡黄黒灰色	やや不良	タタキ成形	タタキハケ目	ヨコハケ目		
		—	—								
		—	—								
155	壺	—	—	砂粒少、黒曜石多、角閃石少、赤色粒子少、石英多	茶褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁ヨコナデタテハケ目	口縁ヨコナデタテハケ目		
		—	—								
		6.0~6.4	—								
156	埴	10.4~11.0	—	砂粒多、角閃石少、長石少、赤色粒子多、黒色粒子多	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	ヨコナデハケ目	ヨコナデナデ		V様式の技法でつくる
		—	—								
		4.2~4.6	—								
157	支脚	—	—	砂粒多、石英少、角閃石少、赤色粒子少、黒曜石少	淡黄赤褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	ナデ指圧	黒変~橙変~赤変 一二次加熱あり	全面剥離している
		—	—								
		—	—								

表 28 17号住居跡出土鉄器計測表

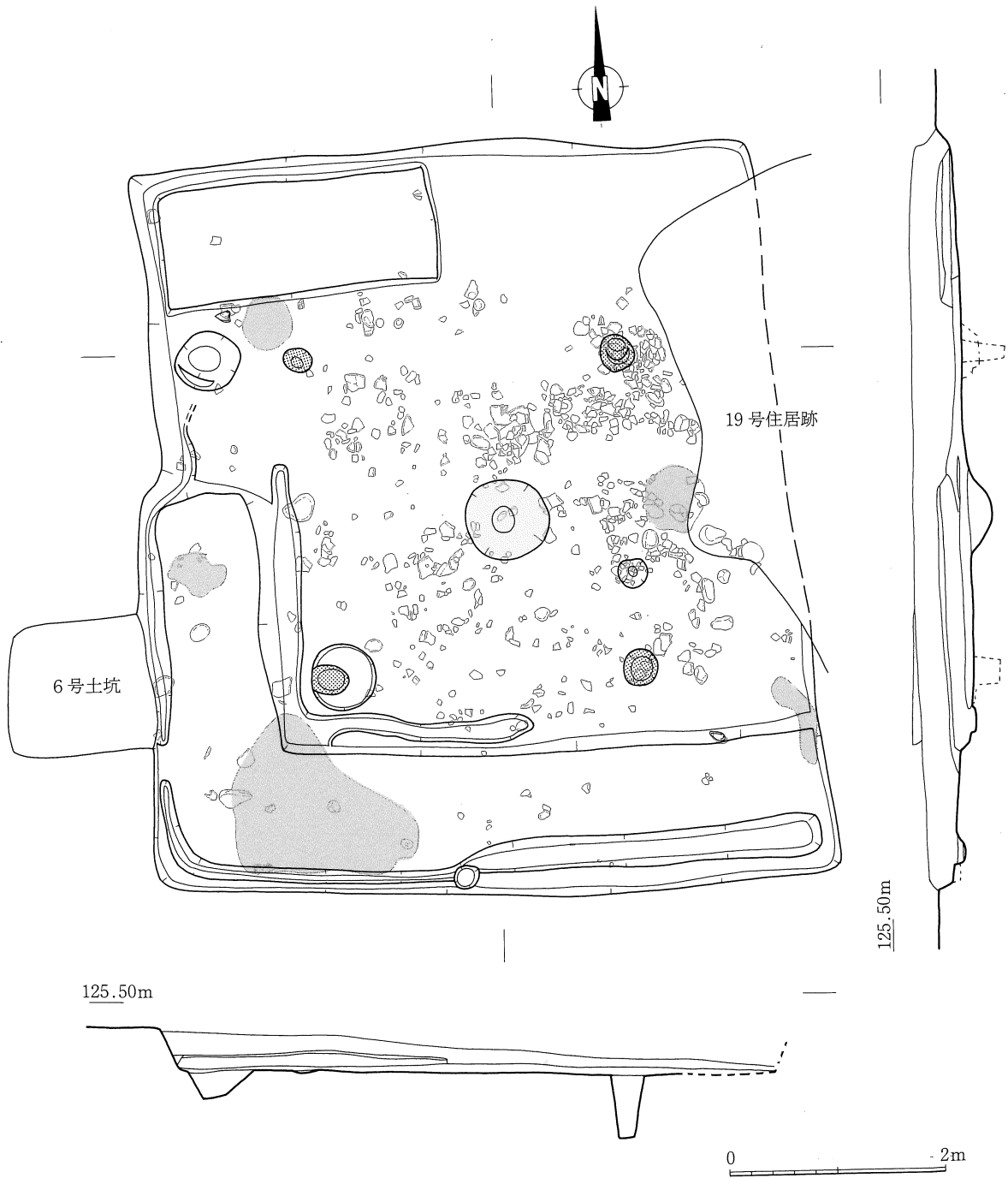
番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
905	鉄鏃	(5.1)	—	2.4	—	0.3	木質(片)が両面に付着している

表 29 17号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
608	砥石	硬質頁岩	48	26	23	33.8	
852	石鏃	黒色黒曜石	22	22	5	—	完形

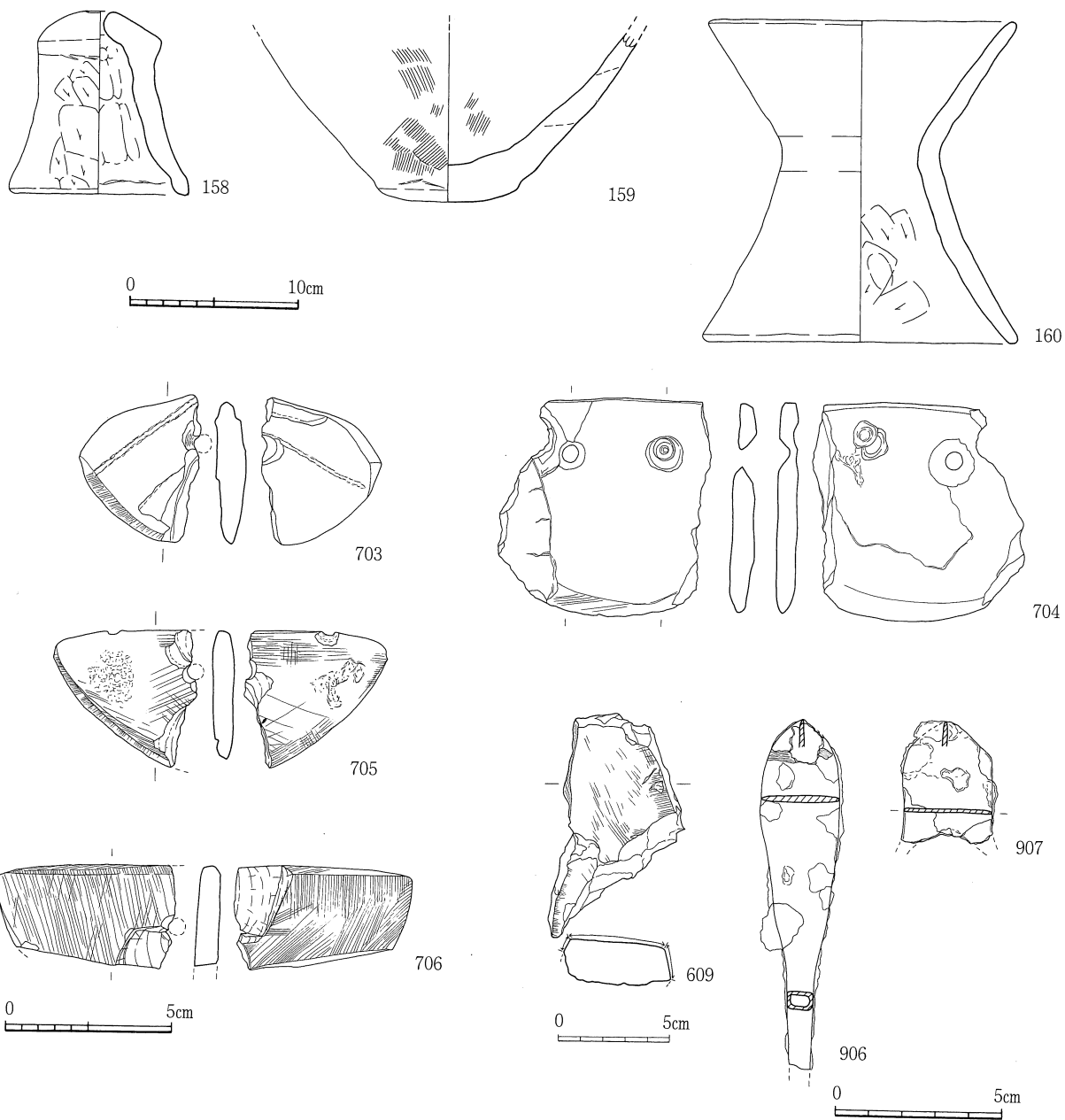
18号住居跡（第38図）

18号住居跡はB-1区とB-2区のほぼ中央に位置し、東壁の一部を19号住居跡に、西壁の一部を6号土坑に切られている。規模は東西6.0m、南北6.91m、検出面からの深さは20～30cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。南東コーナーから南西コーナーを経て西壁中央までと、北壁に添って幅約1.0m、高さ10cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡るが、北壁添いのベッド状遺構の東半は消滅している。また、ベッド状遺構と壁面間には幅約20cm、深さ3～6cm前後の壁溝が巡る。住居跡内中央に径75cm、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は4本で、径30cm、深さ30～50cm前後、主柱穴間は2.9mである。住居跡床面からは焼土層や炭が多量に検出された。



第38図 18号住居跡実測図（1/60）

遺物は住居跡中央付近から多量に出土したが、そのほとんどが住居跡埋没後の破棄遺物で、当住居跡に伴うと思われる土器は少なく、実測できた土器は数点（158～160）である。また、埋土中からは石包丁（703～706）、砥石（609）、鉄鏃（905・907）が出土している。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後と考える。



第 39 図 18 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2・1/3)

表 30 18号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
158	支脚	—	角閃石、 砂粒多	浅黄橙色	良好		ケズリ	指ナデ			
		11.0									
		10.8									
159	壺	—	角閃石多、 赤色粒子多、 金雲母微量	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	不明			
		9.7									
		8.4									
160	器台	—	角閃石少、 赤色粒子多	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	ケズリ			
		19.4									
		19.4									

表 31 18号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
703	石包丁	結晶片岩	(36)	43	9	18.1	
704	石包丁	結晶片岩	(60)	65	7	44.5	
705	石包丁	結晶片岩	(41)	41	6	10.5	
706	石包丁	結晶片岩	(52)	(31)	7	16.6	
609	砥石	珪質岩	90	50	(20)	(119.8)	

表 32 18号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
906	鉄鏃	(10.4)	7.3	2.4	0.8	0.2	刃部に木質片付着
907	鉄鏃	(3.6)	—	2.7	—	0.1	

19号住居跡(第40図)

19号住居跡はB-2区西寄り、18号住居跡と20号住居跡に挟まれて構築されている。西は18号住居跡を切り、南東コーナーは20号住居跡に切られている。規模は東西6.77m、南北5.5m、検出面からの深さは5~40cmで、南側は残りがよく、北東側の壁はほとんど残っていない。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-18°-Wを示す。ベッド状遺構、壁溝等は検出されなかった。住居跡内中央から北東寄りに径40cm、深さ5cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。明確な支柱穴は確認できなかった。

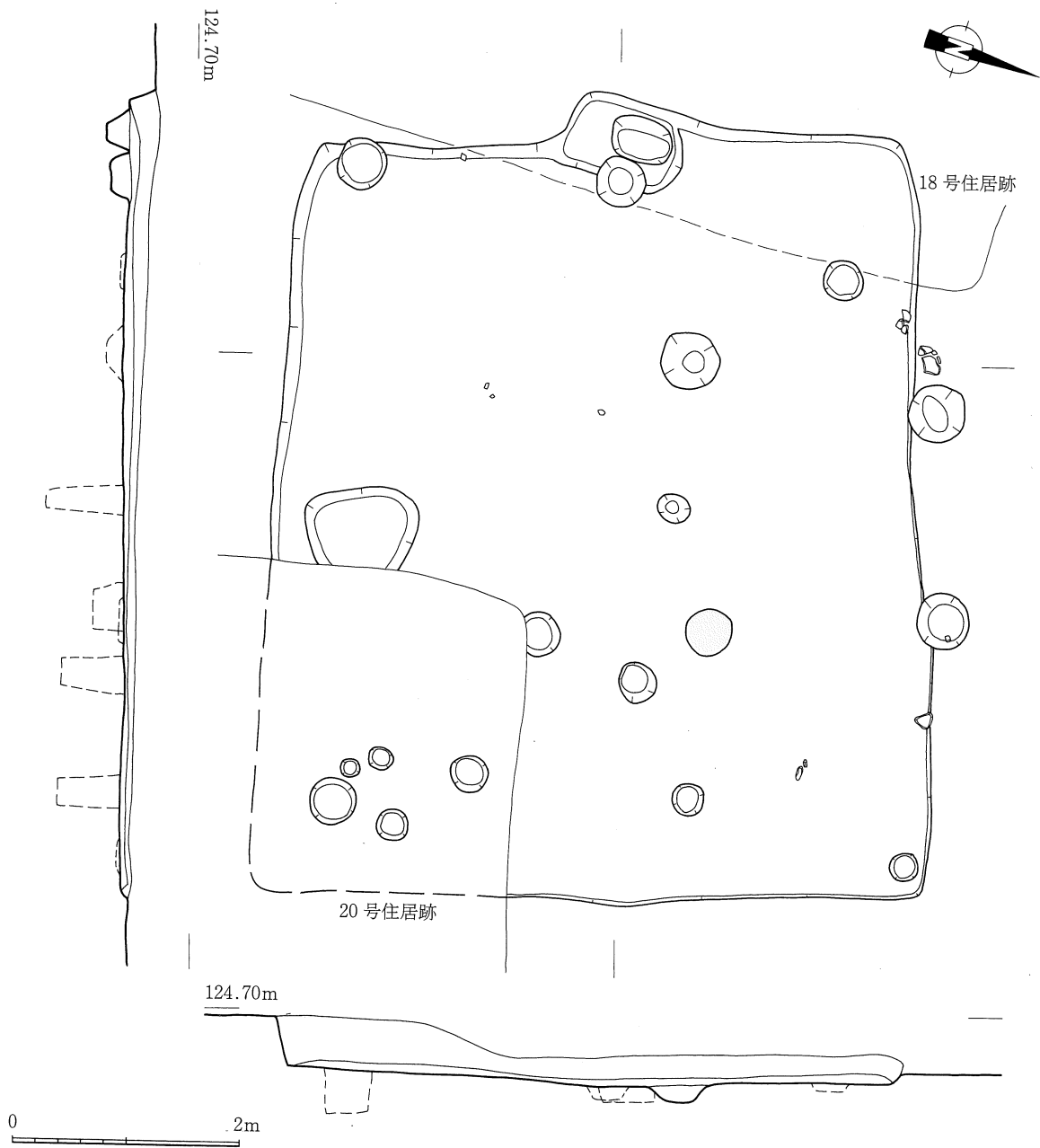
遺物は土器片数点と、砥石(782)がほぼ中央で、鉄鏃2点(908・909)が北東コーナー付近で出土した。当住居跡の時期は不明であるが、切り合いからみて弥生時代後期中葉以降であろう。

表 33 19号住居跡出土石器計測表

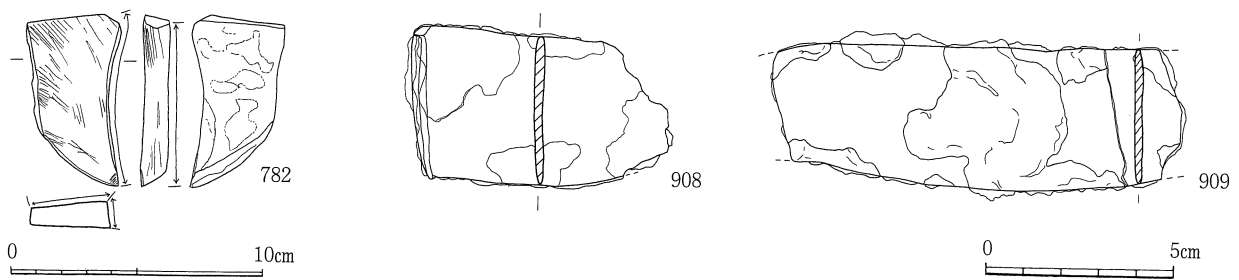
番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
782	不明	硬質頁岩	66	36	10	39.4	

表 34 19号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
908	鏃	(6.7)	—	3.9	—	0.2	
909	鏃	(10.7)	—	3.8	—	0.2	



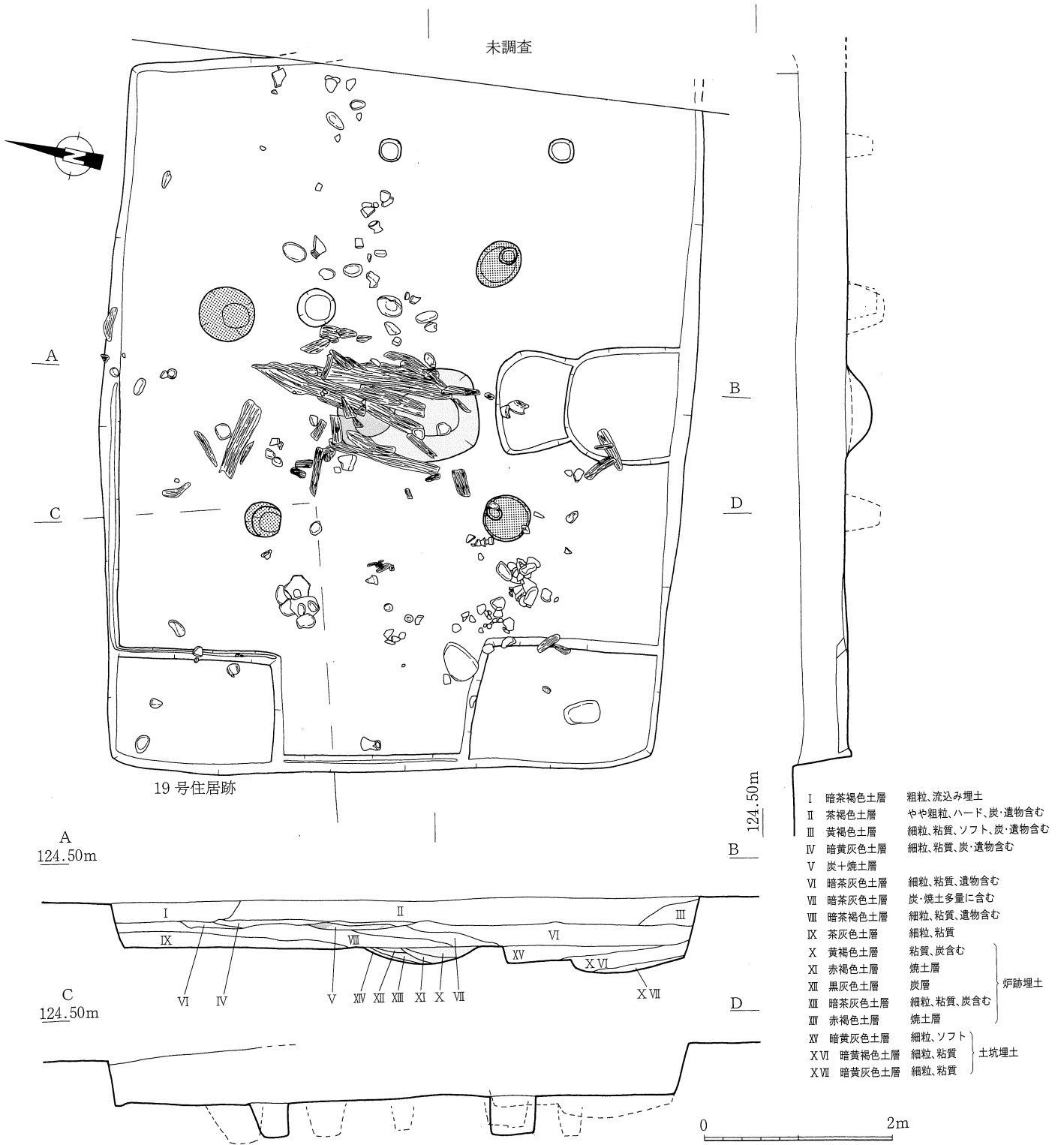
第40图 19号住居跡実測図 (1/60)



第41图 19号住居跡出土遺物実測図 (1/3·1/2)

20号住居跡 (第42図)

20号住居跡はB-2区の中程、やや西寄りに位置し、19号住居跡の南東コーナーを切っている。規模は東西7.51m、南北5.8~6.1m、検出面からの深さは50~60cmで、比較的残りがよいが南東コーナーと東壁の一部が道路下のため未調査である。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Wを示す。西壁両隅に長さ1.6~1.8m、幅1.2m、高さ約10cmのベッド状遺構を設け、西壁中央と北壁西半部に幅15~20cm、深さ5cm前後の壁溝が巡る。住居跡内中央には1.5×1.0mの隅

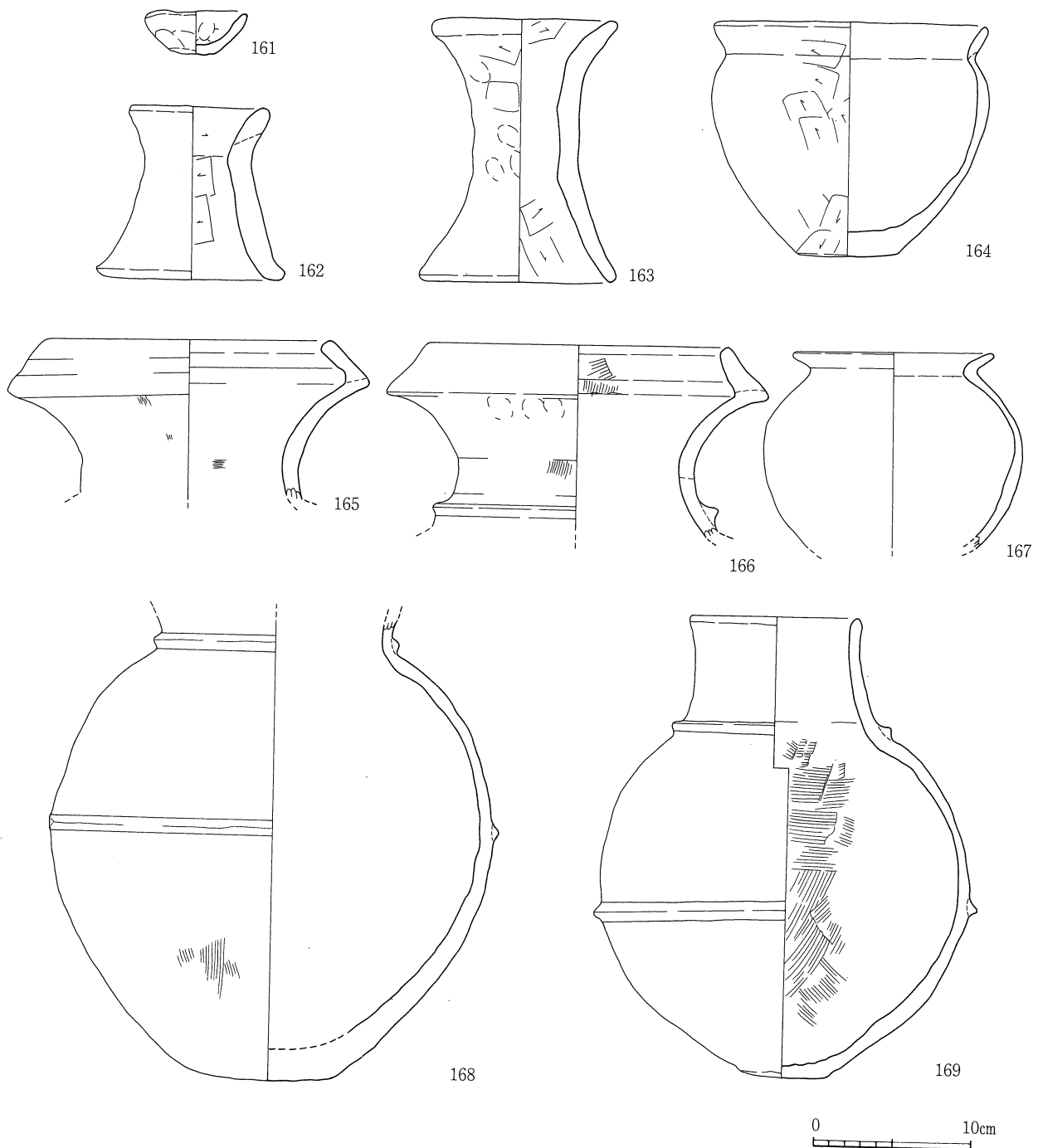


第42図 20号住居跡実測図 (1/60)

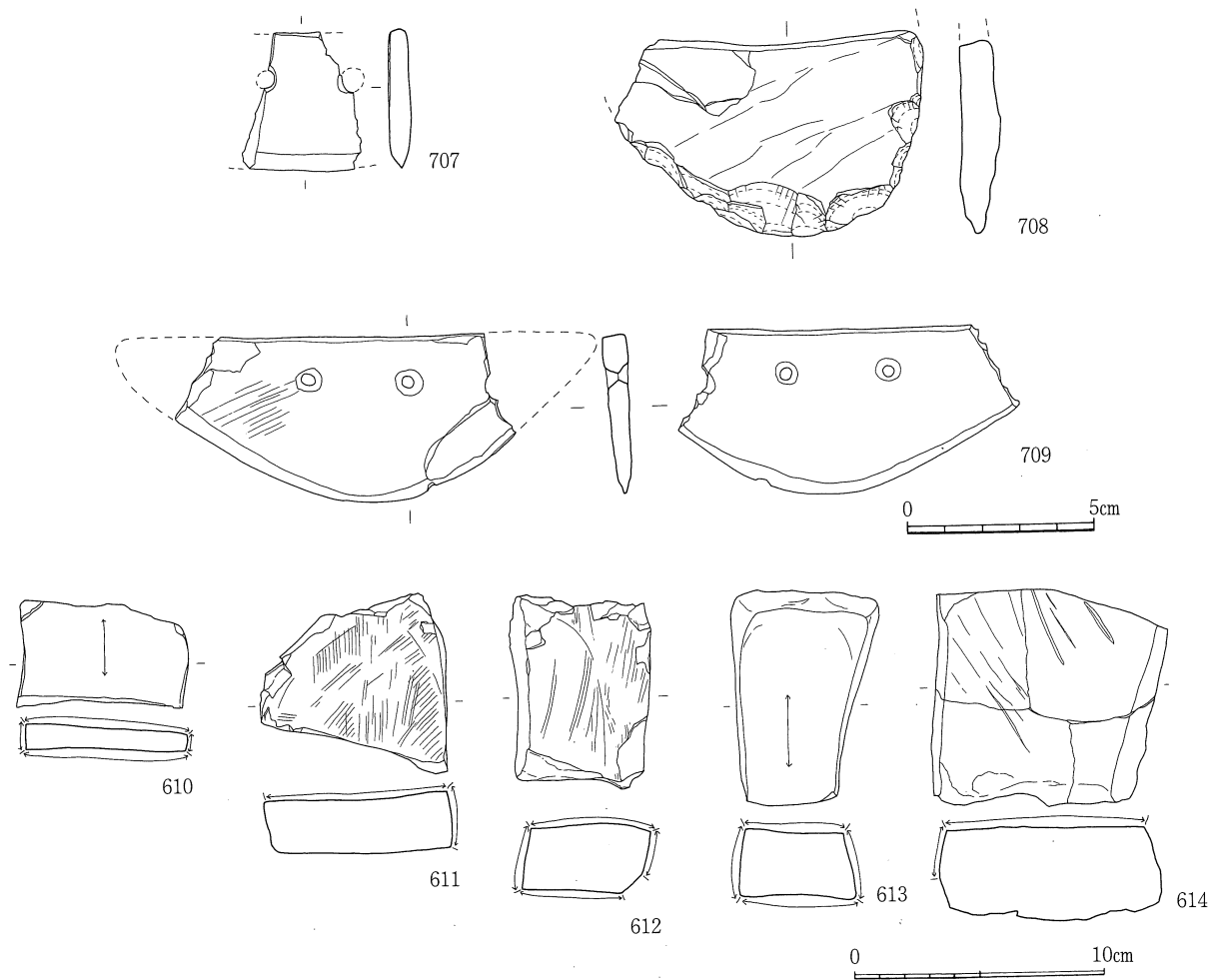


丸長方形をした炉跡掘り方をもち、内部にそれぞれ径40cmと50cm、深さ10cmと25cm前後のレンズ状の窪みをもつ。この炉跡上には長さ1.5m前後の炭化木数本が出土した。また、炉跡周辺には多量の炭が堆積していた。南壁中程には1辺1.2m、深さ20cmの隅丸方形をした土坑をもち、さらにこの土坑の北側には1.1×0.8m、深さ10cm程の1段浅い土坑を設けている。支柱穴は4本で、径40～60cm、深さ40cm前後、支柱穴間は2.3～2.8mでやや歪な方形である。

遺物はベッド状遺構周辺と東側支柱穴間から比較的多く出土した。出土した土器は壺形土器が中心で169は上層一括遺物である。当住居跡も18・19号住居跡と同様に石包丁(707～709)・砥石(610～614)等の石製品が多く出土している。708は石包丁の未成品である。遺物からみた住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後であろうと考える。



第43図 20号住居跡出土遺物実測図1 (1/4)



第44図 20号住居跡出土遺物実測図2 (1/2・1/3)

表35 20号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
707	石包丁	粘板岩	(25)	37	6	9.0	
708	石包丁	安山岩	81	(51)	10	47.0	
709	石包丁	硬質砂岩	(87)	43	7	33.8	
610	砥石	硬質頁岩	39	65	8	52.0	
611	砥石	硬質頁岩	68	75	21	150.1	
612	砥石	硬質頁岩	72	53	27	193.4	
613	砥石	硬質頁岩	85	56	25	252.8	
614	砥石	泥岩	86	89	36	41.3	

表 36 20 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
161	埴	6.3~6.6		外面 淡黄色 + 褐灰色 内面 淡黄色	不明	指成形	ケズリ or ナデ?	ケズリ or ナデ?		
		2.85								
		2.2								
162	器台	8.9~9.0 11.0~11.2	角閃石 多、 石英 多、 砂粒 多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
163	器台	12.0 16.9 12.7	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	褐灰色	良?	粘土積上げ	ケズリ 指ナデ	ケズリ 指ナデ		
		17.6								
		15.1 6.4								
164	壺	17.6 15.1 6.4	赤色粒子、 石英、 角閃石	淡黄色	不良	粘土積上げ	ケズリ	不明		
		18.3								
165	壺	10.3 —	角閃石 少、 赤色粒子 多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		19.4								
166	壺	13.9 —	角閃石 多、 長石 少、 赤色粒子 多	褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明		三角突帯あり
		(12.8)								
167	壺	12.6 —		淡黄色	不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
168	壺	29.8 29.8	赤色粒子 多、 角 閃石 少	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ (ほとんど不明)	不明		一条三角突帯あり
		10.9								
		29.7 5.5								
169	壺	10.9 29.7 5.5	角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多、 石英 少	橙色	良好	粘土積上げ	不明	ハケ		二ヶ所に一 条三角突帯 あり

21 ~ 23 号住居跡 (第 45 図)

21 ~ 23 号住居跡は B-1 区と B-2 区の両方にまたがり、互いに切り合って構築されている。前後関係は 22 号住居跡が一番古く、21・23 号住居跡は 22 号住居跡を切っている。また、7 号土坑は 23 号住居跡に切られている。

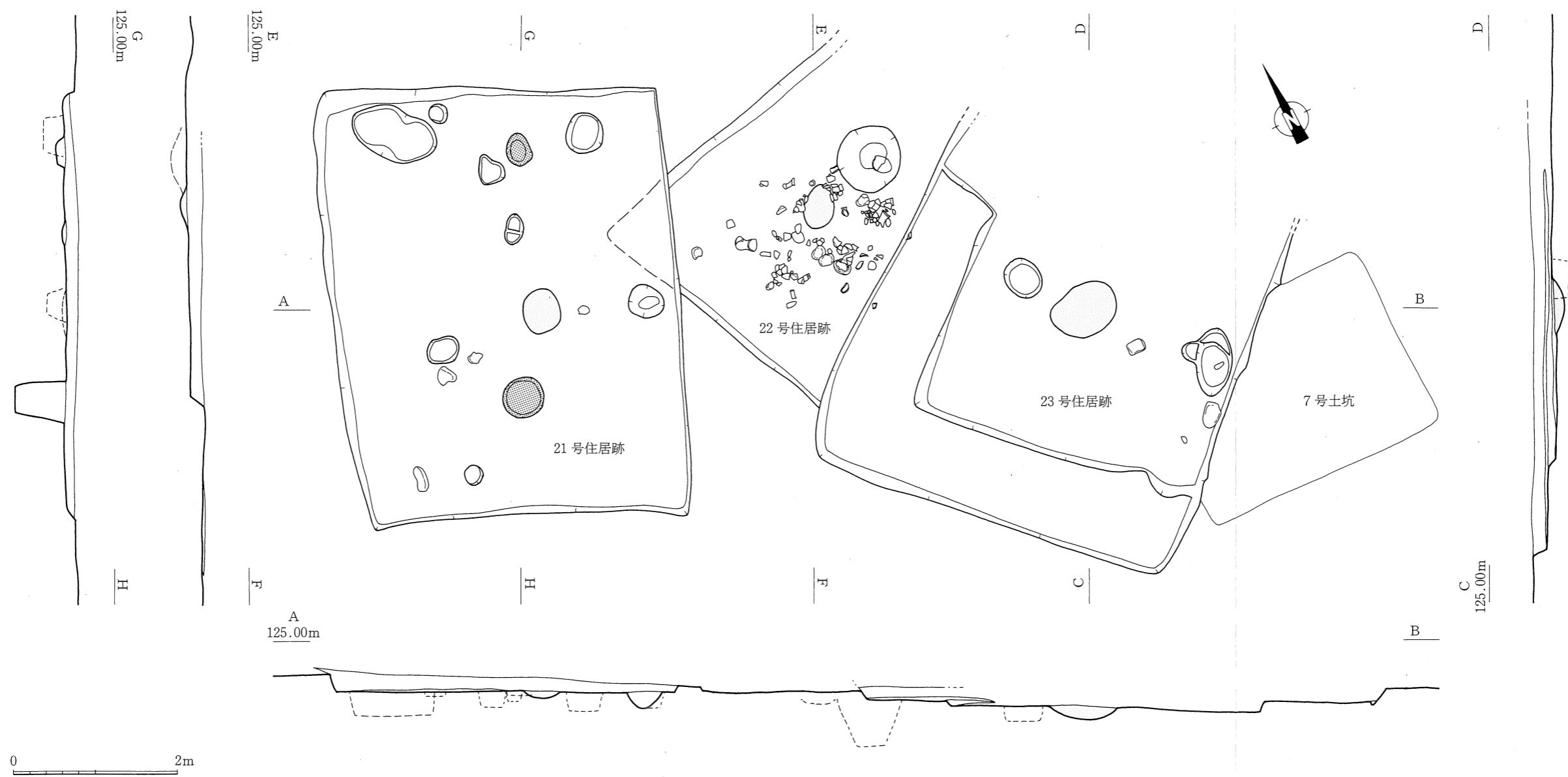
21 号住居跡は西端に位置し、規模は東西 4.2m、南北 5.1m、検出面からの深さは 10 ~ 20cm である。平面形は長方形を呈している。主軸方位は N-23°-E を示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。住居跡内中央やや東側に径 50cm、深さ 8cm 前後のレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は 2 本で、径 30cm、深さ 20 ~ 30cm 前後、主柱穴間は 2.9m である。

遺物は土器小破片数点が出土しただけで、出土遺物からみた住居跡の明確な時期は不明であるが、切り合いからみて、弥生時代後期終末以降の時期であろう。

22 号住居跡は 21・23 号住居跡に切られていて、全体の 1/4 前後の残存である。規模は不明、検出面からの深さは 5cm 前後と残りはよくない。平面形は方形か長方形を呈すと考える。主軸方位は N-11°-W を示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。住居跡内中央付近と思われる位置に、0.35 × 0.55m、深さ 6cm 前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡をもつ。主柱穴は不明である。

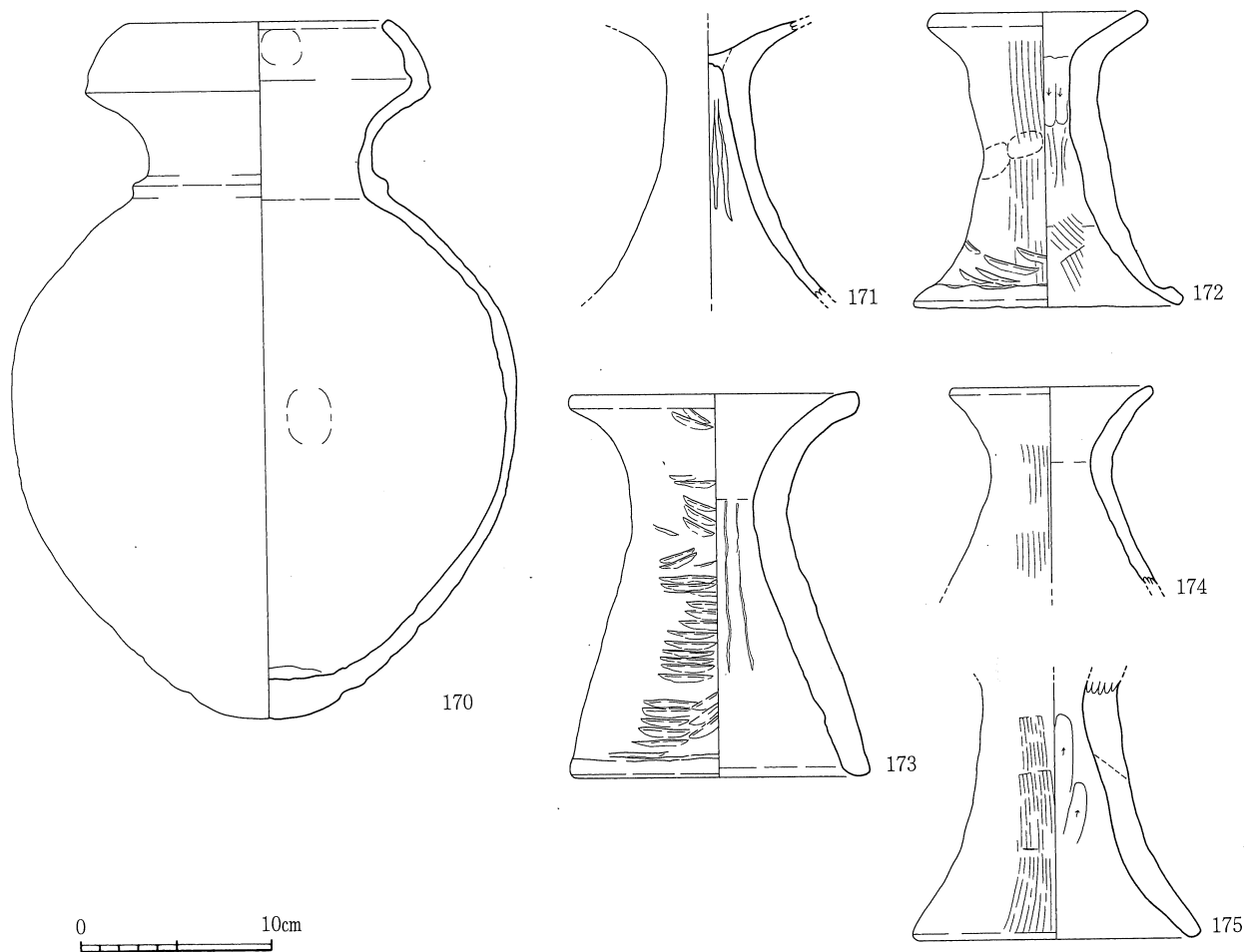
遺物は炉跡の東側から一括して出土した。170 は複合口縁壺で立ち上がりが高く、胴部は球状に張っている。171 は高坏の脚部で在地系である。172 ~ 175 は器台で 172・173 の外面にはタタキ調整がみられる。出土遺物からみた住居跡の時期は弥生時代後期終末 ~ 古墳時代初頭頃と考える。

23 号住居跡は 22 号住居跡の西に位置し、北東側は消滅している。規模は北西 ~ 南東間が 4.75m で、南西 ~ 北東間は 4.2 + α である。検出面からの深さは南側で 20cm 前後である。平面形は方形か長方形を呈すと考える。主軸方位は N-43°-W を示す。南コーナーから北コーナー付近まで幅 0.9m、高さ 8cm 前後のベッド状遺構を施している。住居跡内中央付近に、径 0.7m、深さ 10cm 前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡と、南東壁中程には 0.8 × 0.4m、深さ 20cm 前後の楕円形の土坑をもつ。主柱穴は不明である。



第 45 图 21 ~ 23 号住居跡実測图 (1 / 60)

遺物は複合口縁壺の口縁の一部と小破片数点が出土したが実測不能であった。出土遺物からみた住居跡の時期は、明確ではないが弥生時代後期終末以降の時期であろう。



第46図 22号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

表37 22号住居跡出土土器観察表

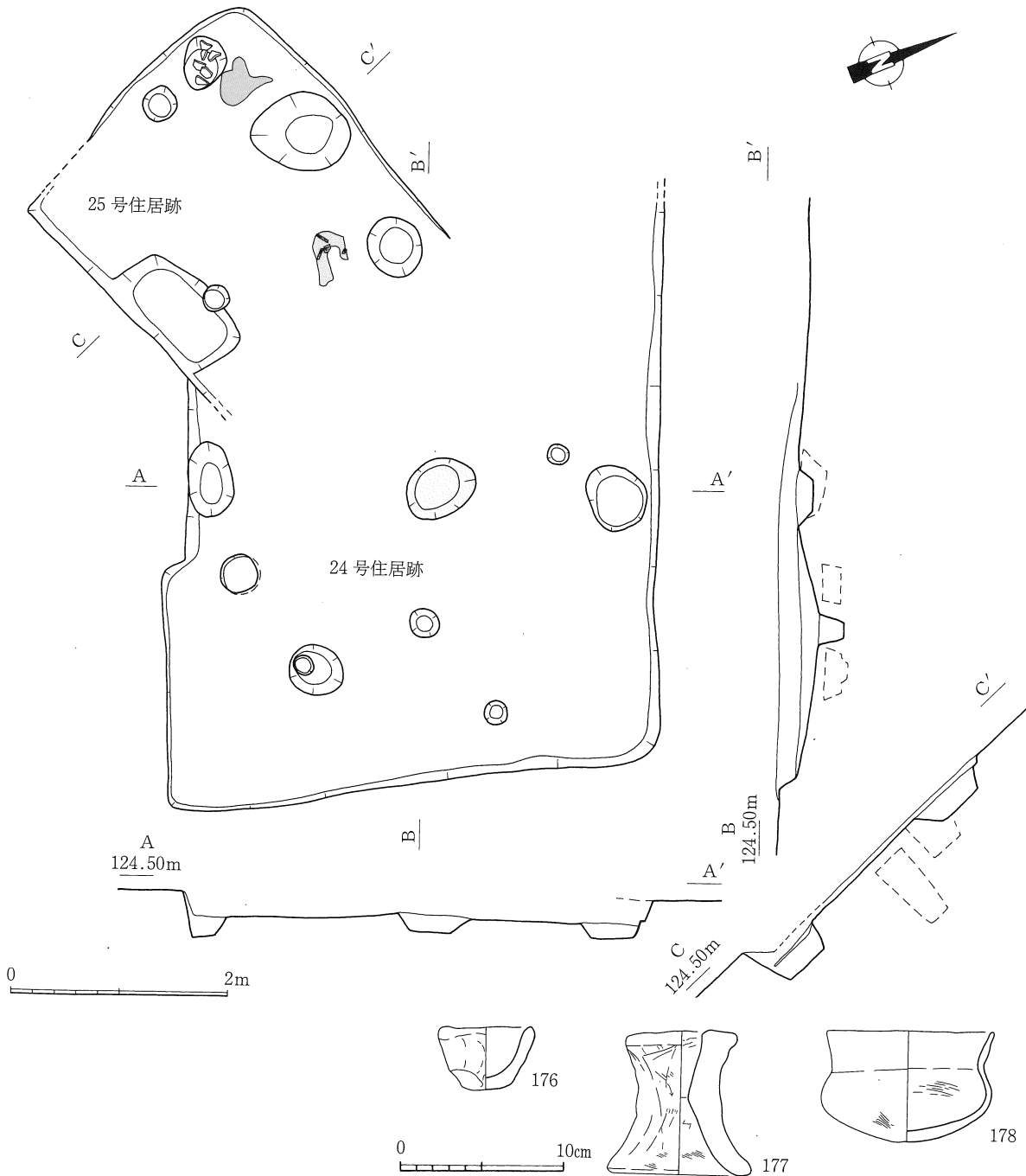
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
170	壺	13.6~14.2	砂粒多、 角閃石少、 長石少、 赤色粒子	淡黄灰色	やや不良	粘土積上げ	ナデ ヨコナデ	指おさえ	黒変一 二次加熱	全面剥離し ている	
		37.3									
		4.5~5.0									
171	高坏	—	砂粒多、 角閃石少、 石英少、 黒曜石多	黄茶褐色	やや不良	連続成形一 円盤充填	不明	ナデ 絞り痕あり	橙変~赤変 一二次加熱 あり		
		—									
		—									
172	器台	—	砂粒多、 赤色粒子多、 白色粒子少、 金雲母少、 石英少	淡黄灰白色	やや不良	粘土積上げ +タタキ 成形	タテハケ目 タタキ	タテハケ目 ナデ	橙変 一二次加熱 あり?		
		15.7									
173	器台	13.7~14.4	砂粒多、 長石多、 角閃石少、 石英少、 黒曜石少	淡黄茶褐色	やや不良	タタキ成形	平行タタキ	ナデ・ヨコナデ 絞り痕あり	橙変 一二次加熱 あり?		
		15.2									
		(16.0)									
174	器台	(11.0)	砂粒少、 黒色粒子少、 角閃石少、 赤色粒子多、 石英少、 灰色粒子微量	淡黄茶褐色	やや不良	粘土積上げ	タテハケ目	口縁ヨコナデ ナデ			
		—									
		—									
175	器台	—	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 赤色粒子少、 白色粒子少	淡黄褐色	良好	内傾接合 上下逆にし て成形	タテハケ目	ナデ	橙変 一二次加熱 あり?		
		(15.4)									

24・25号住居跡（第47図）

24・25号住居跡はB-2区、23号住居跡の東に位置し、25号住居跡が先行する。当住居跡の周辺は20～25号住居跡が絡み合い、複雑な様相を呈していた。

24号住居跡は25号住居跡に南西を切られ、西壁付近は消滅している。規模は東西5m前後、南北4.5m、検出面からの深さは東側で20cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-24°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。住居跡内中央に径50cm、深さ15cm前後のやや楕円形をしたレンズ状の炉跡をもつ。支柱穴は不明である。

遺物は、埋土中から手捏ねの埴（176）と支脚（177）が出土したが、流れ込みの可能性もある。時期は断定できない。



第47図 24・25号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1/60・1/4)

25号住居跡は24号住居跡の西に位置し、東側は消滅している。規模は東西3m前後、南北2.7m、検出面からの深さは最深で20cmと小型の竪穴である。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-18°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。炉跡の痕跡は認められないが、床面の一部に焼土や炭の堆積している箇所がみられる。南壁中程に1.2×0.7m、深さ10cm前後の方形の土坑をもつ。支柱穴は不明である。

遺物は西コーナー付近に位置する柱穴の中から鉢(178)が出土した。摩滅が激しく一部調整が残っている程度である。

表 38 24・25号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
176	埴	4.9~5.3	角閃石 多、 赤色粒子 やや多、 白色粒子 やや多	灰色	良好	手づくね	ケズリ後ナデ	ナデ		24号住居跡
		3.7~3.8								
		2.5~2.7								
177	支脚	2.9	角閃石、 赤色粒子	橙色	良好		ケズリ ハケ			24号住居跡
		8.9								
		—								
178	鉢	9.8	石英、 赤色粒子 少、 角閃石 やや多	淡黄色	普通	粘土積上げ	ミガキ?	ハケ		25号住居跡
		6.9								
		—								

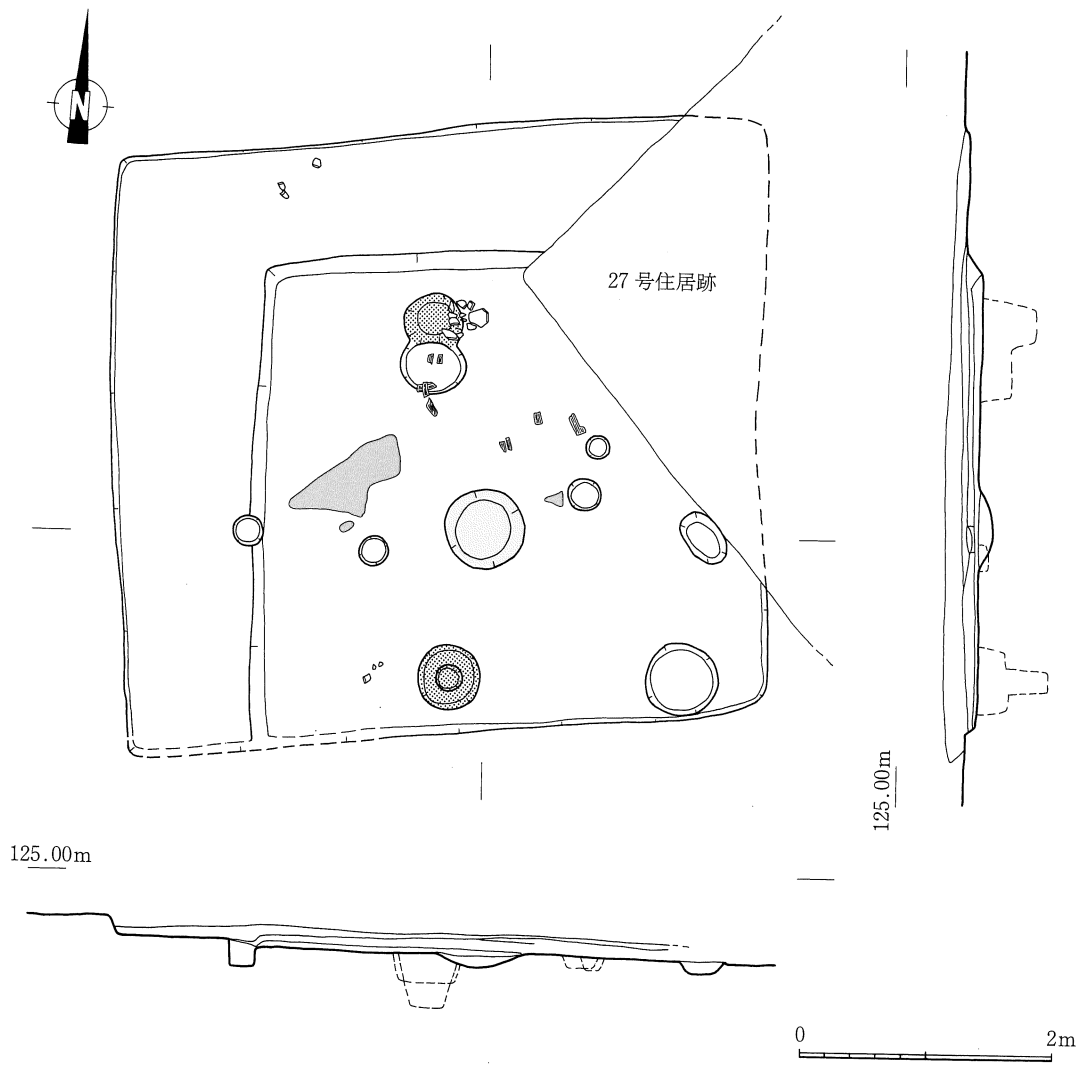
26号住居跡 (第48図)

26号住居跡はB-2区の南西隅、調査区南壁沿いに位置する。東側の一部を27号住居跡に切られている。規模は東西5.1m、南北4.75m、検出面からの深さは5~10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Wを示す。西壁と北壁に沿って幅約0.9m、高さ5cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡る。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.6m、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化し、上面に焼土層と炭層が堆積していた。支柱穴は2本で、径50cm、深さ40~50cm前後、支柱穴間は2.8mである。

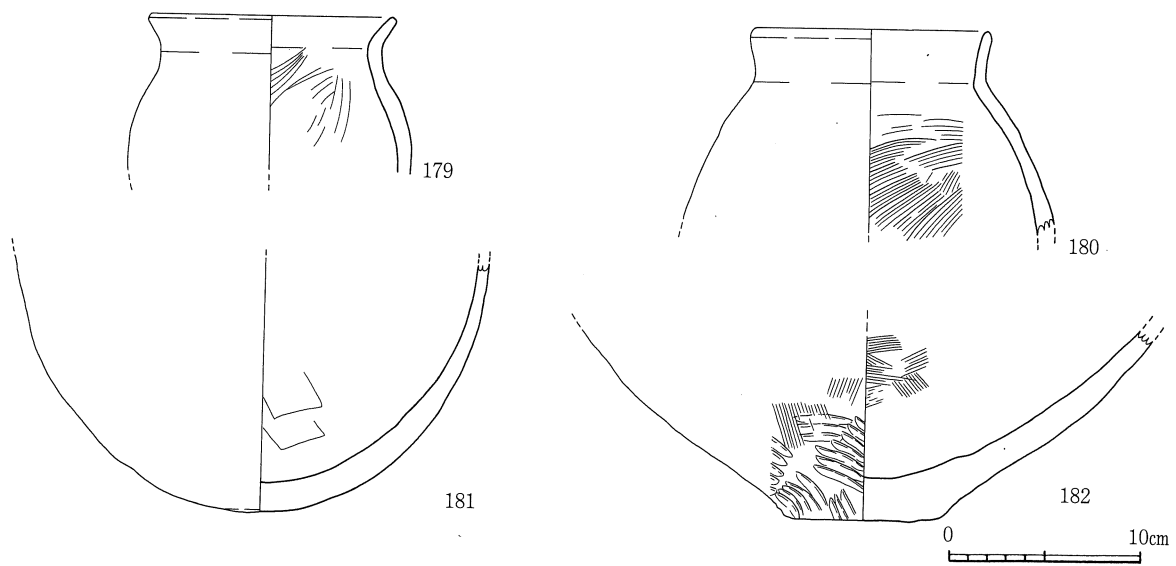
遺物は北支柱穴の側で壺の底部(182)が、北壁沿いのベッド状遺構上から土師器と思われる壺の底部(181)が出土した。179の小型甕と180の壺は埋土からの一括遺物である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期後葉~古墳時代初頭頃と思われる。

表 39 26号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
179	甕	—	砂粒 多、 長石 少、 黒曜石、 角閃石 少	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
180	壺	(12.8)	砂粒 多、 赤色粒子 多	外面 黒茶褐色 内面 淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	不明	ヨコハケ目		
		—								
		—								
181	壺	—	砂粒 多、 石英 少、 角閃石 少、 赤色粒子 少	黒茶褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	不明	ヘラナデ?		丸底
		—								
		3.7								
182	壺	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 黒曜石 多、 石英 多	暗茶褐色	やや不良	タタキ成形	平行タタキ後 タテハケ目	ヨコハケ目		
		—								
		(8.0)								



第 48 图 26 号住居跡実測图 (1 / 60)



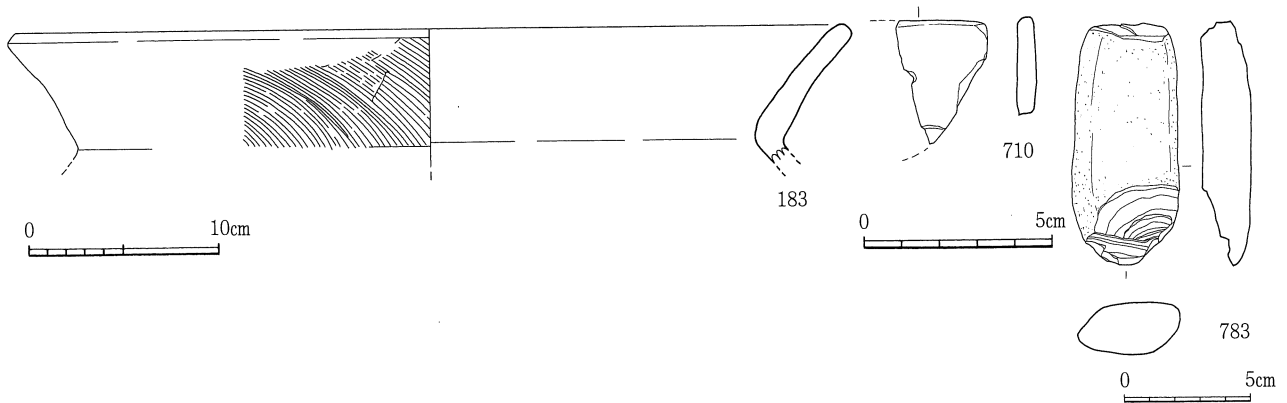
第 49 图 26 号住居跡出土遺物実測图 (1 / 4)



27号住居跡（第51図）

27号住居跡はB-2区の南西隅、調査区南壁沿いに位置し、26号住居跡を切っている。規模は長軸5.8m、短軸5.15m、検出面からの深さは20～30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-44°-Eを示す。南西壁に沿って幅約0.9m、高さ5cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡る。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.9×0.7m、深さ10cm前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡が付設されている。この炉跡には造り替えを行っていたために、中央に2カ所の燃焼部をもつ。炉跡北側には掻き出したと考えられる多量の焼土が堆積している。南東壁中程に径0.9m、深さ20cm前後の土坑をもつ。支柱穴は4本で、径30cm、深さ50cm前後、支柱穴間は南北間が2.9m、東西間が2.3mである。

遺物は埋土中から数点出土したが、いずれもⅡ層からの出土で流れ込みと考える。このため、当住居跡の時期は明確ではないが、切り合い関係からみて弥生時代後期後葉～古墳時代初頭頃と思われる。



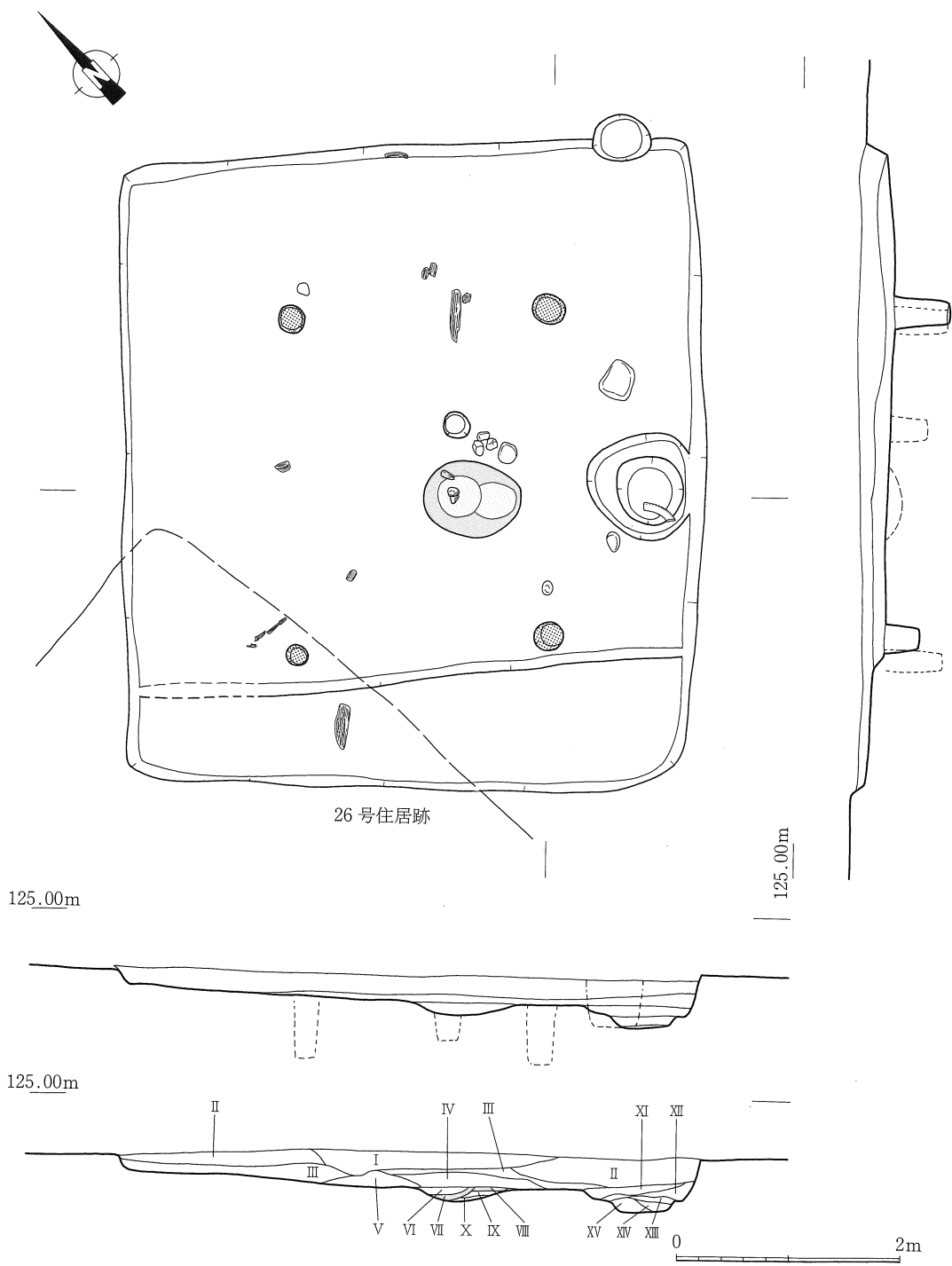
第50図 27号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2・1/3)

表40 27号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
183	甕	(45.0)		砂粒少、 白色粒子少、 赤色粒子少、 閃石少、 石英少	茶褐色	やや不良	粘土積上げ	ハケ目	ヨコナデ		
		—									
		—									

表41 27号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
710	石包丁	結晶片岩	33	(24)	5	4.1	
783	不明石器	千枚岩	94	41	19	111.4	



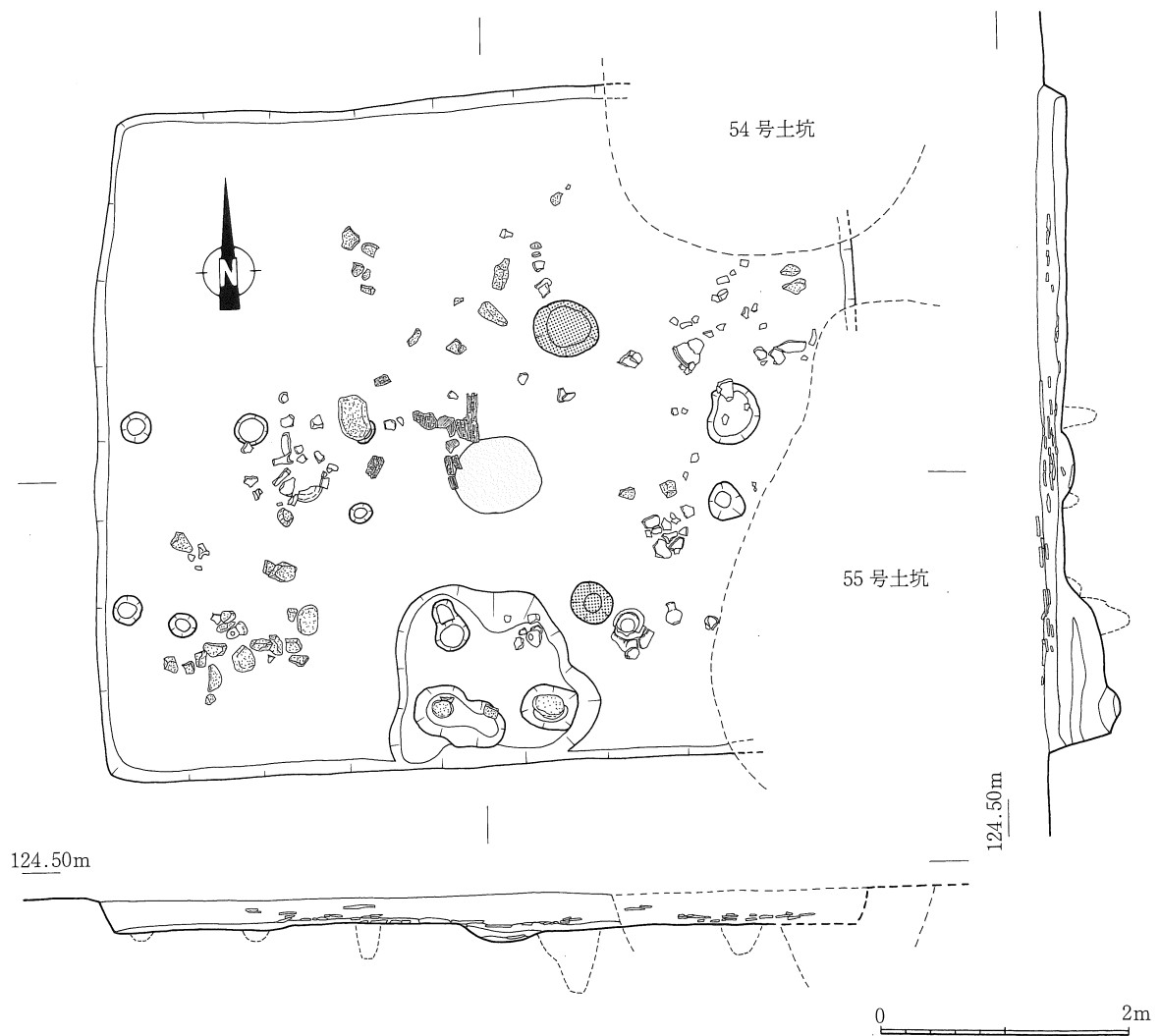
- |            |           |            |        |
|------------|-----------|------------|--------|
| I 黒褐色土層    | 粗粒、炭・焼土含む | II 暗茶褐色土層  | 粗粒、炭含む |
| III 暗黄褐色土層 | 粗粒、粘質     | IV 黄褐色土層   | 粗粒     |
| V 赤褐色土層    | 焼土層       | VI 暗黒灰色土層  | 炭層     |
| VII 赤褐色土層  | 焼土        | VIII 黄灰色土層 | 粘質     |
| IX 黒灰色窓層   | 炭層        | X 赤褐色土層    | 焼土     |
| XI 暗茶褐色土層  | 炭含む       | XII 暗褐色土層  | やや粘質   |
| XIII 黄褐色土層 | 粘質、焼土含む   | XIV 暗黄褐色土層 | 粘質     |
| XV 黒褐色土層   | 細粒、粘質     |            |        |

第 51 図 27 号住居跡実測図 (1 / 60)

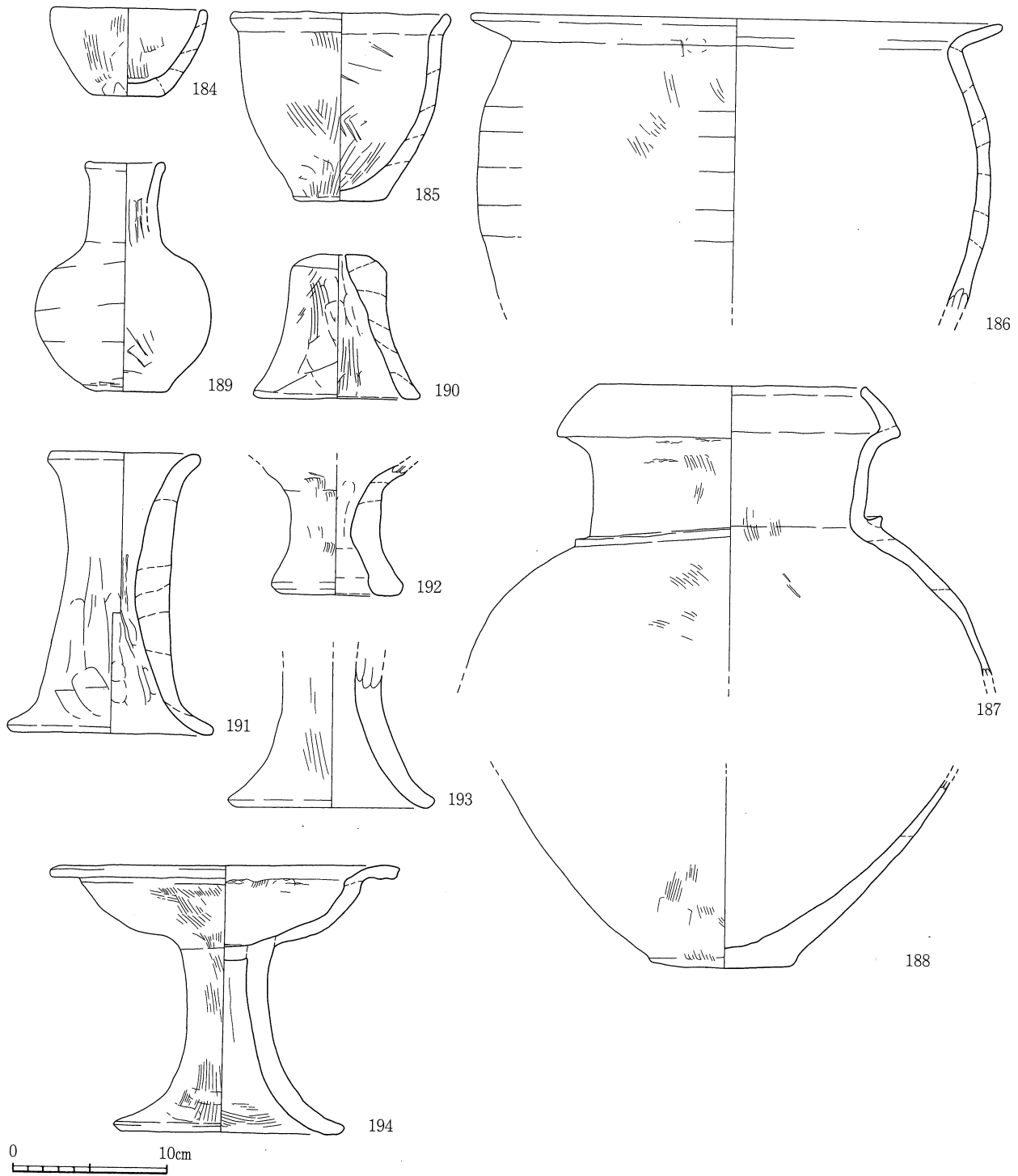
28号住居跡（第52図）

28号住居跡はB-2区の北方向中央に位置し、北東コーナーを54号土坑に、南東コーナーを55号土坑に切られている。54・55号土坑はいずれも粘土採掘坑である。規模は東西6.1m、南北5.4m、検出面からの深さは20～25cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。住居跡内中央には径0.7m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、炉を中心に0.5～1.0mの範囲に厚さ2cm前後の黄色ロームを張っている。また、炉跡の縁から炭化木が出土しており、炉の使用痕跡がうかがえる。南壁中程には1.6×1.3m、深さ40cm前後の不定形の土坑をもつ。主柱穴は炉跡を中心に4本と考えられる。東側の2本は検出できたが、西側2本は確認できなかった。2本の主柱穴は径40cm、深さ30cm前後、主柱穴間は2.2mである。

遺物は住居跡床面のほぼ全面から出土している。また、南西コーナー付近では被熱した礫が多量に検出された。土器は礫間や東壁周辺を中心に出土している。187と188は同一個体の可能性もある。遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後の時期と考える。



第52図 28号住居跡実測図（1/60）



第 53 图 28 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 4)

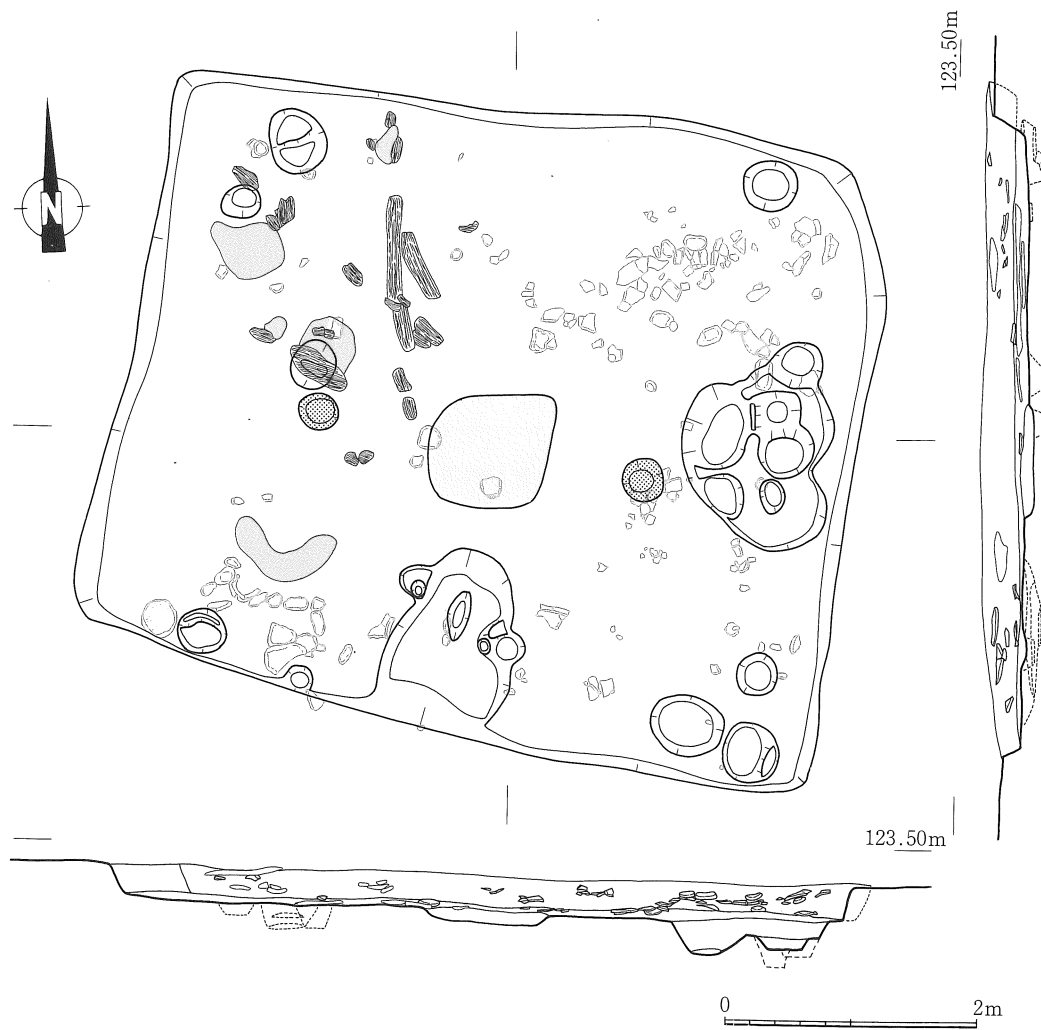
表 42 28号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
184	埴	(9.4)	角閃石、 石英	黒色 黒褐色	普通	粘土積上げ	ハケ ケズリ	ハケ ケズリ			
		5.75									
		(4.4)									
185	甕	(13.7)	角閃石 少 石英 やや多、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ ケズリ	強い工具痕			
		12.4									
		5.6~6.2									
186	甕	34.6	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 角閃石 少、 砂粒 粗	黄橙色 橙色	普通	粘土積上げ	ハケ	不明	すす付着		
		—									
		—									
187	壺	17.6	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 角閃石 少	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ	ハケ		三角突帯あり	
		—									
		—									
188	壺	—	角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	不明			
		—									
		8.2~9.3									
189	壺	4.4~4.9	赤色粒子 多、 石英 やや多、 角閃石 やや多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		15.1~15.2									
		5.2~5.4									
190	支脚	—	赤色粒子 多、 石英 多、 角閃石 やや多	灰白色	普通	粘土積上げ	ケズリ ハケ	指ナデ ケズリ後ナデ			
		9.5									
		11.0~11.2									
191	器台	(9.6)	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ケズリ	指ナデ		絞り痕	
		18.5									
		13.6									
192	器台	—	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 角閃石 少、 石英 少	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		8.4~9.0									
193	器台	—	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 砂粒 粗	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ	不明			
		—									
		12.4									
194	高坏	23.1	赤色粒子 やや多、 白色粒子 多、 角閃石 やや多	黄橙色	良好	連続成形 円盤充填	ハケ	ハケ	すす付着		
		17.2~17.9									
		15.3									

29号住居跡 (第54図)

29号住居跡はB-2区の中央やや北寄りに位置し、28号住居跡の南にはほぼ並行して構築している。規模は東西5.8m、南北5.0m、検出面からの深さは15~20cm、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。住居跡内中央には径0.9m、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、上面には灰層が堆積していた。南壁中程には1.5×1.0m、深さ15cm前後の不定形の土坑をもつ。また、床面の西側からは部分的に焼土層や炭層、炭化木等が検出された。主柱穴は2本で、径30cm、深さ20cm前後、主柱穴間は2.6mである。

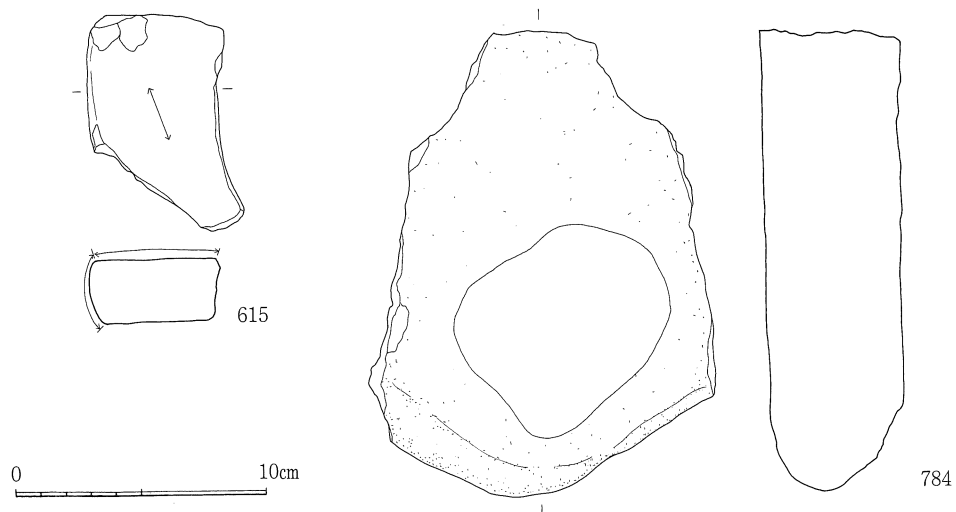
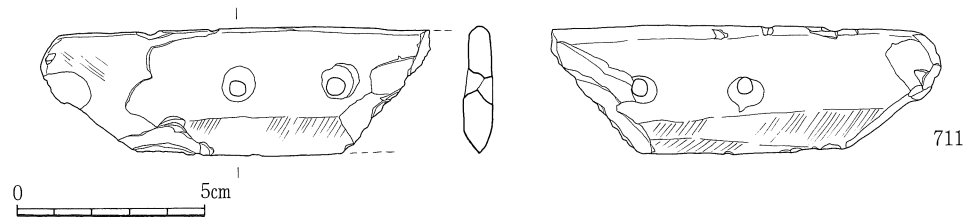
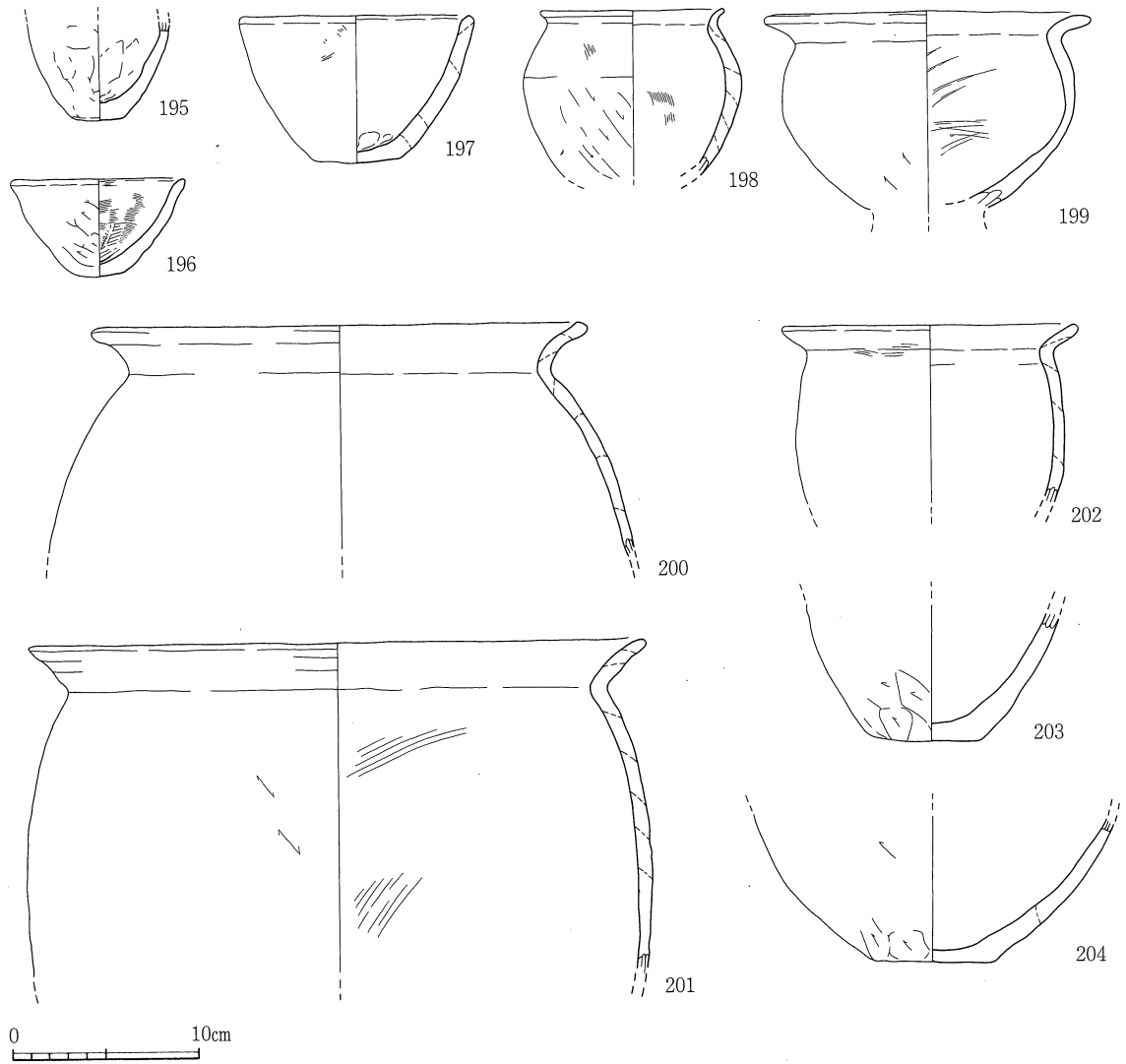
遺物は住居跡内のほぼ全域から出土しているが、そのほとんどが住居跡破棄後の流れ込み遺物であり、床面直上から出土した遺物は200の甕と711の石包丁である。このため、当住居跡の詳しい時期は推定できないが弥生時代後期中頃前後であろう。



第 54 図 29 号住居跡実測図 (1 / 60)

表 43 29 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
195	埴	—	—	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多	黄橙色	普通	手づくね	指ナデ ケズリ後ハケ	不明		
		2.4~3.0	—								
		—	—								
196	埴	9.2	—	角閃石 少、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	手づくね	不明 ケズリ痕	横方向ハケ		
		5.3	—								
		3.2	—								
197	埴	(12.2)	—	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		8.0	—								
		(4.8)	—								
198	壺	(9.6)	—	石英 多、 雲母 多	橙色	普通	粘土積上げ	ハケ ケズリ	ハケ痕		
		—	—								
		—	—								
199	脚付き壺	17.4	—	砂粒 粗、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 石英 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—	—								
		—	—								
200	甗	(26.0)	—	赤色粒子 多、 角閃石 やや多、 白色粒子 やや多	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明	赤変あり	
		—	—								
		—	—								
201	甗	(33.0)	—	白色粒子 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	暗褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—	—								
		—	—								



第 55 图 29 号住居跡出土遺物実測図 (1/4 · 1/2 · 1/3)

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
202	甕	(13.8)	角閃石少、 石英少、 赤色粒子少	黄橙色 黒褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
203	甕	—	角閃石少、 石英少、 白色粒子多	赤橙色 黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		6.1								
204	壺	—	角閃石多、 赤色粒子多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		6.6~6.9								

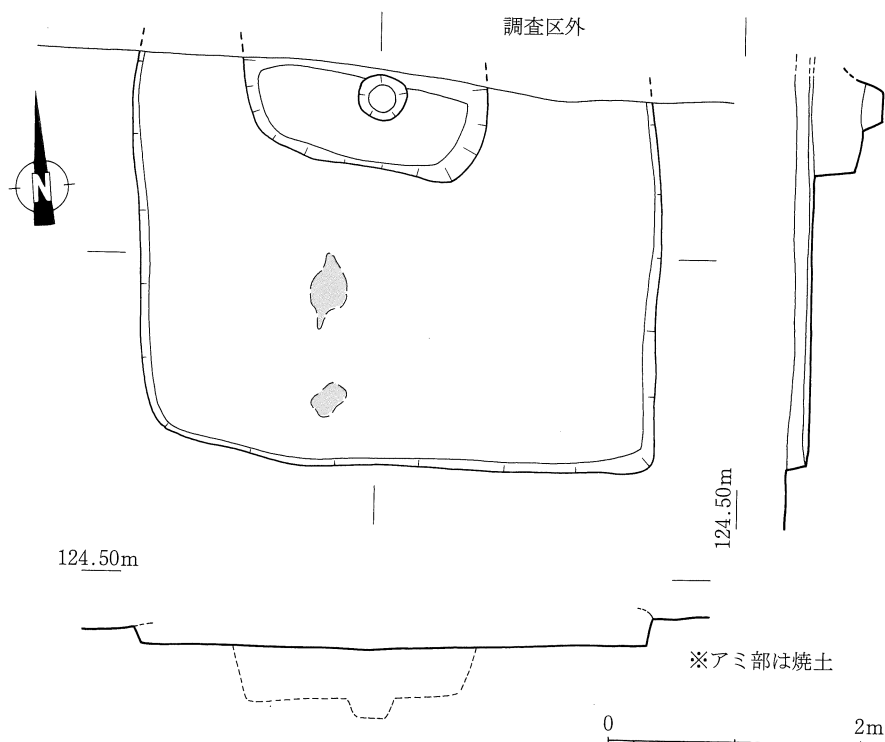
表 44 29号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
711	石包丁	結晶片岩	(104)	34	8	35.6	
615	砥石	硬質頁岩	82	52	25	166.2	
784	台石	安山岩	181	134	54	2438.1	

30号住居跡 (第56図)

30号住居跡はB-2区、北東端に位置し、北側半分は調査区外である。規模は東西4.1m、南北は不明である。検出面からの深さは10~20cmで、平面形は方形あるいは長方形を呈していると思われる。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝・炉跡等の施設は検出されなかった。主柱穴と思われる柱痕の検出もなかった。

遺物は埋土中から土器片数点が出土したが、時期決定できるものではなく、さらに流れ込みのため、当住居跡の時期は不明である。

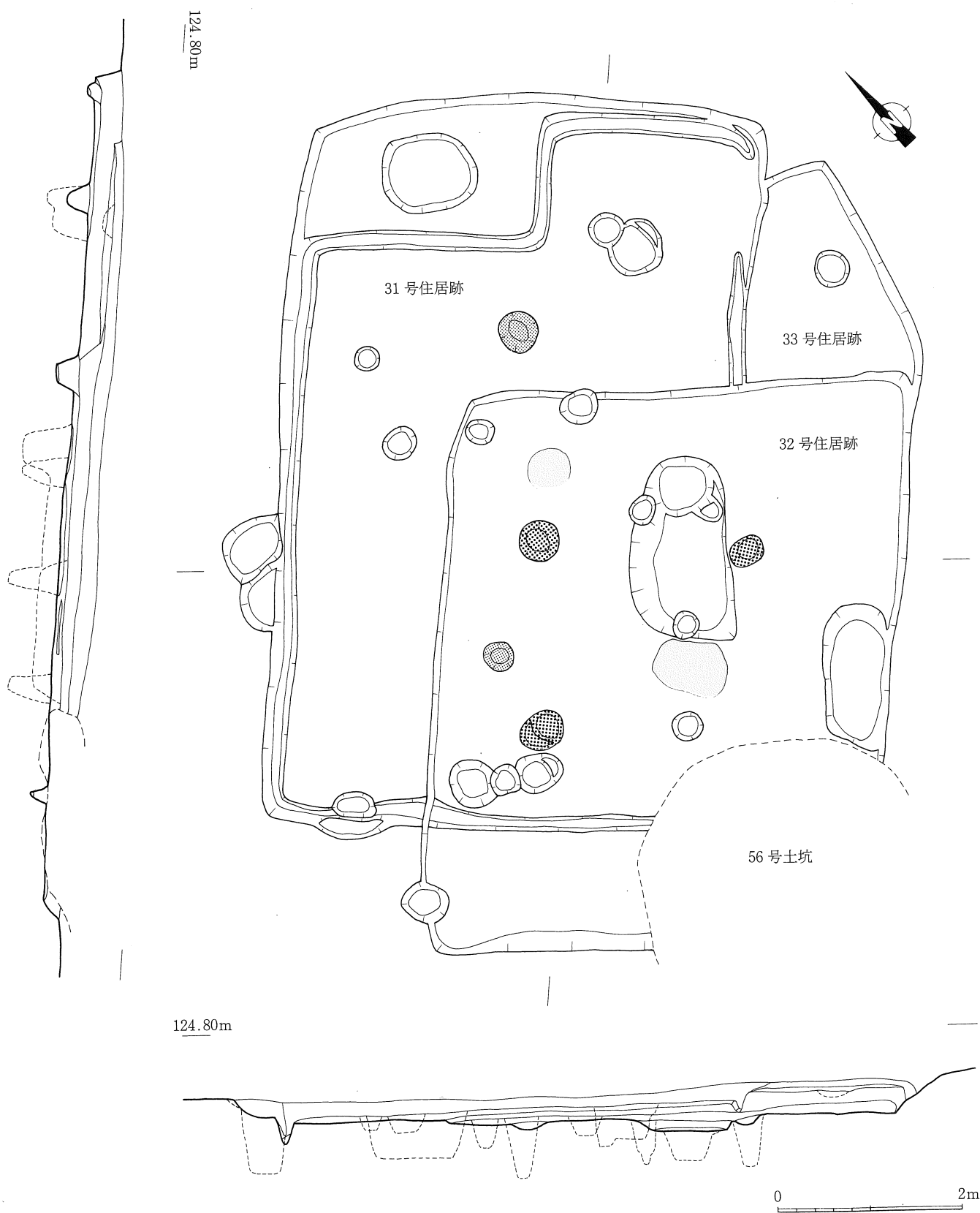


第56図 30号住居跡実測図 (1/60)

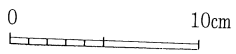
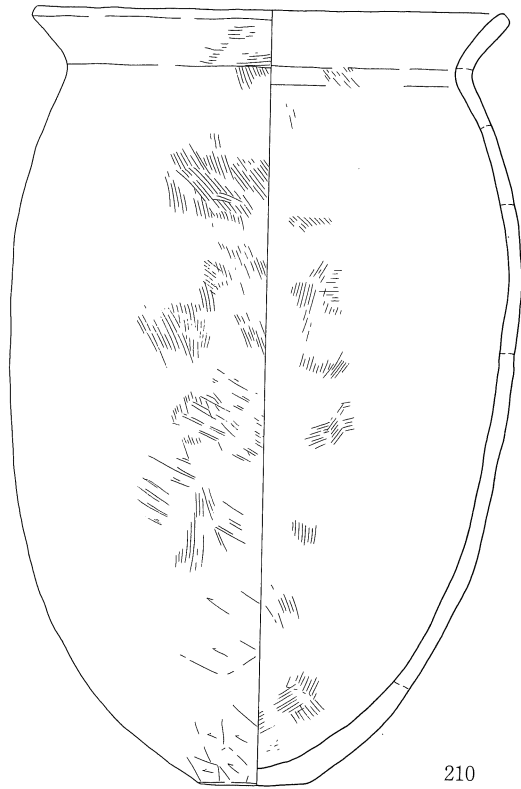
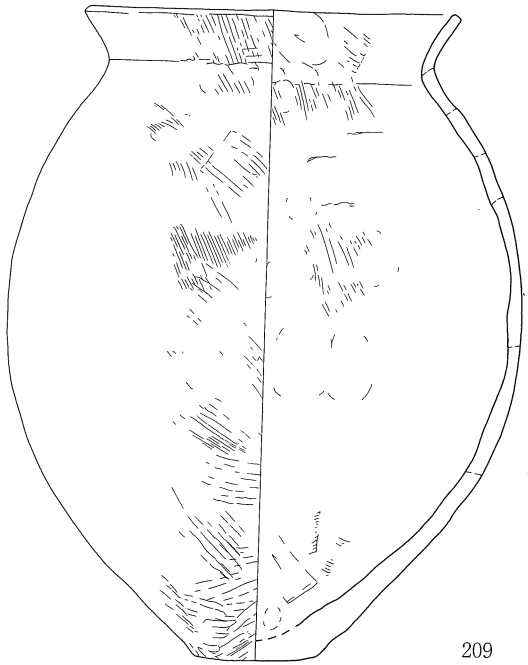
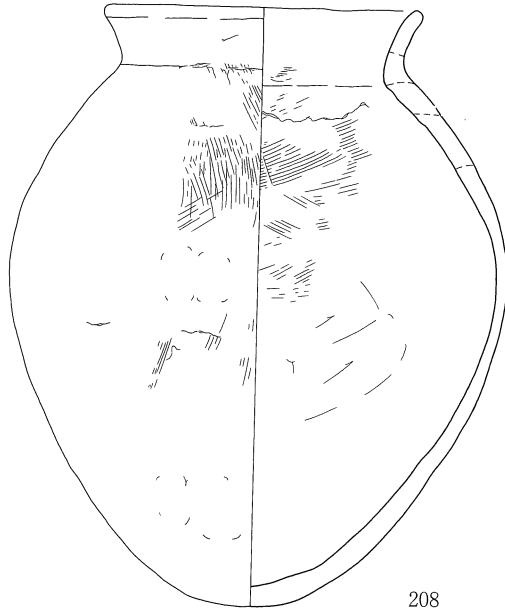
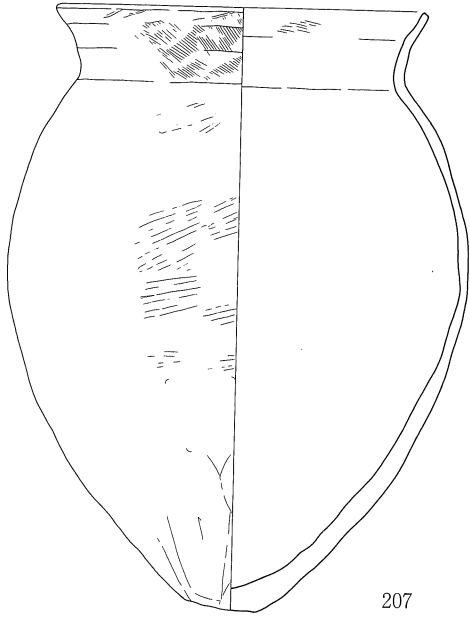
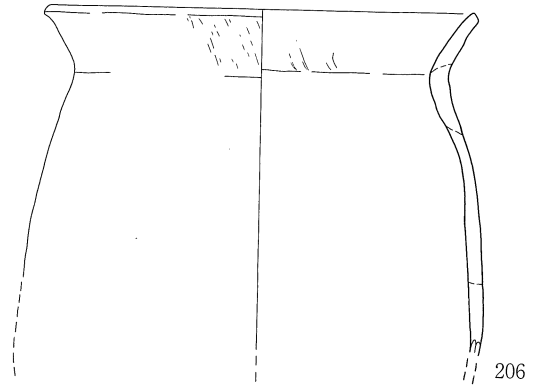
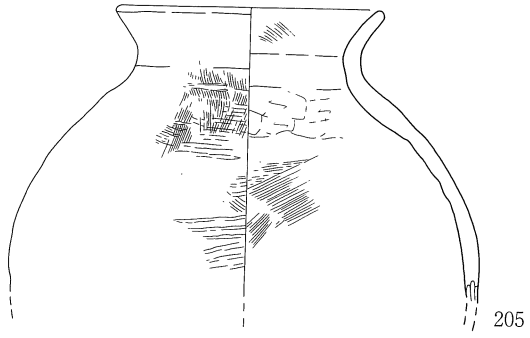


31～33号住居跡（第57図）

31～33号住居跡はB-2区の北東方向に位置する。3軒の前後関係は、まず33号住居跡が先行し、その後、31・32号住居跡と続く。



第57図 31～33号住居跡実測図 (1/60)



第 58 图 31 号住居跡出土遺物実測图 1 (1 / 4)

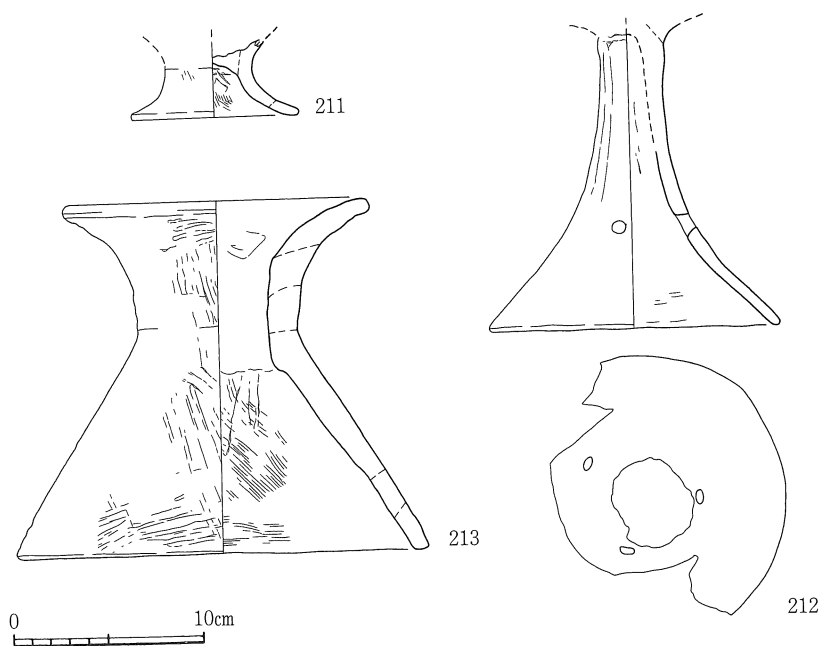
31号住居跡は32号住居跡に南側コーナ―帯を切られている。規模は長軸7.8m、短軸5.1m、検出面からの深さは20cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-45°-Eを示す。北側コーナ―部分に2.4×1.4m、高さ10cm前後のベッド状遺構を、また、壁およびベッド状遺構の内側に壁溝を設けている。この31号住居跡南西壁の壁溝は32号住居跡内でも確認された。炉跡は32号住居跡内から僅かながら残存が検出された。径40cm、深さ3cm前後でレンズ状を呈している。支柱穴は2本で、径30～40cm、深さ30cm前後である。

遺物は、東側コーナ―付近一帯で甕数個体分の土器が出土した。外面の一部にタタキ痕がみられる。当住居跡の時期は出土遺物からみて、弥生時代後期後葉頃と考える。

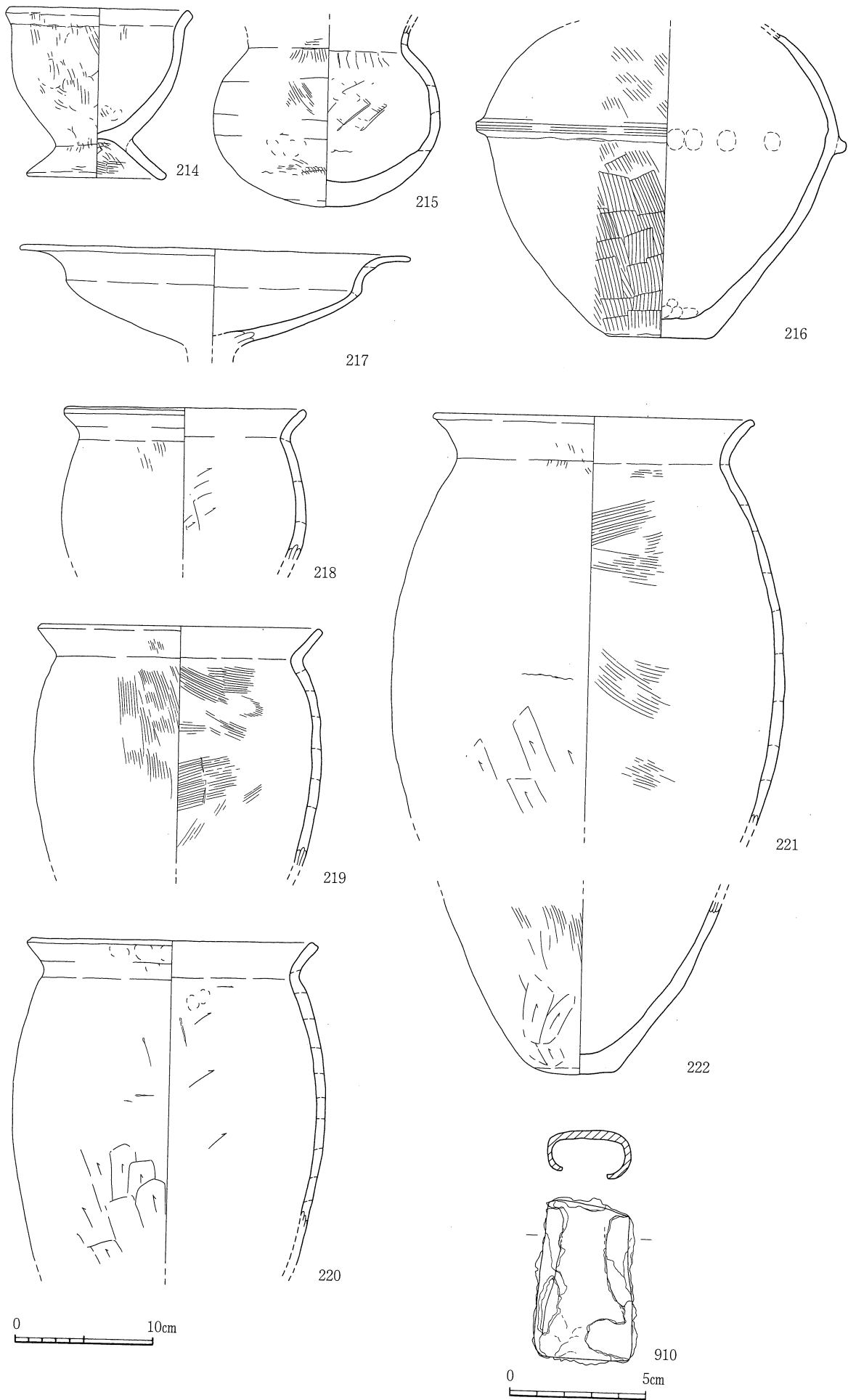
32号住居跡は31号住居跡の西側に位置し、31・33号住居跡を切り、南側コーナ―は56号土坑に切られている。規模は長軸6.1m、短軸5.6m、検出面からの深さは5～10cmである。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN-45°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝等の施設はみられない。炉跡は住居跡内中央に位置し、0.5×0.7m前後の隅丸長方形をしたレンズ状の掘り込みがみられ、内部は赤褐色化していた。また、炉跡の西側には焼土・炭・炭化木が堆積しており、この付近が焚口と思われる。南壁中程に0.7×1.5m、深さ30cm前後の方形の土坑をもつ。炉跡北側にも1.0×2.0m前後の隅丸長方形をした土坑が検出されたが、当住居跡に伴うものではない。支柱穴は4本で、南側支柱穴は56号土坑によって消滅している。径30～40cm、深さ50cm前後、支柱穴間は東西間2.3m、南北間2.0mである。

遺物は炉跡の周囲を中心に出土している。216は中央の土坑からの出土遺物で当住居跡に伴う遺物ではない。当住居跡の時期は、弥生時代後期後葉頃と考える。

33号住居跡は31・32号住居跡に切られ、ほとんど残っていない。規模も不明で深さは10cm前後である。柱穴・炉跡等の施設も不明である。遺物の出土もなく、当住居跡の時期は不明である。



第59図 31号住居跡出土遺物実測図2 (1/4)



第60图 32号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

表 45 31号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
205	壺	(14.0)	角閃石多、 赤色粒子多、 白色粒子多、 砂粒粗	黒色 浅黄橙色 混合	普通	粘土積上げ	タタキ後 ハケ目	ケズリ後 ハケ目		
		—								
		—								
206	甕	22.8	角閃石多、 赤色粒子多、 白色粒子多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
207	甕	(19.4)	石英多、 角閃石少	灰白色 橙色	普通	粘土積上げ	タタキ	不明		
		31.8~32.3								
		3.7								
208	甕	(16.4)	角閃石少、 赤色粒子多、 白色粒子多	褐色	普通	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目 タタキ痕	ハケ目 ケズリ		
		32.0								
		—								
209	甕	(19.4)	角閃石少、 赤色粒子多、 白色粒子多	灰白色 橙色	普通	粘土積上げ タタキ成形?	タタキ	ハケ	すず付着	
		34.8								
		(6.6)								
210	甕	(24.8)	角閃石、 石英、 白色粒子	暗褐色 灰白色 混合	普通	粘土積上げ	タタキ ハケ目	ハケ目		
		41.4								
		5.7								
211	脚付 き鉢?	—	角閃石 やや多、 赤色粒子 やや多	淡黄色	普通	連続成形	ハケ ケズリ	ハケ ケズリ		
		—								
		8.9								
212	高坏	—	角閃石 やや多、 石英 やや多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		穿孔あり
		—								
		15.4								
213	器台	(15.8)	石英多、 角閃石少、 白色粒子多	橙色	普通	粘土積上げ	タタキ ハケ	タタキ ハケ		
		18.8								
		(22.0)								

表 46 32号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径 法量器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
214	脚付 き壺	(13.0)	角閃石多、 石英多	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	ハケ		
		12.4								
		10.3								
215	壺	—	赤色粒子 やや多、 角閃石多、 白色粒子多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ	ハケ		
		—								
		—								
216	壺	—	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 赤色粒子少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	タテハケ目	ハケナデ		M字突帯あり
		—								
		7.6~8.0								
217	高坏	(28.6)	石英多、 角閃石多、 赤色粒子多	淡黄色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
218	甕	(17.4)	角閃石多、 赤色粒子多	明灰褐色	普通	積上粘土	不明	不明		
		—								
		—								
219	甕	(20.4)	角閃石 やや多、 赤色粒子少、 白色粒子 やや多	粘土細積上げ	ハケ目	ハケ目				
		—								
		—								
220	甕	(20.6)	角閃石少、 赤色粒子少、 砂粒粗、 白色粒子多	明褐色	良好	粘土積上げ	ナデ	ケズリ後ナデ		
		—								
		—								
221	甕	(23.2)	角閃石多、 赤色粒子多	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ケズリ後ハケ	すず付着	
		—								
		—								
222	甕	—	角閃石多、 赤色粒子多、 白色粒子多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ ケズリ	ケズリ後ナデ		
		—								
		5.6								

表 47 32 号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備 考
910	鉄斧	(5.8)	—	—	—	—	

34～36号住居跡（第61図）

34～36号住居跡はB-2区の北東、31～33号住居跡の南東2m付近に位置する。住居跡上面からは4号掘立柱建物跡が検出された。当住居跡群中では34号住居跡が一番新しく、35・36号住居跡の前後関係は不明である。

34号住居跡は3軒の中央に位置し、35・36号住居跡の上に構築されている。規模は東西6.8m、南北5.6m、検出面からの深さは10～30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はほぼ磁北を示す。東壁に沿って幅約1.0m、高さ10cm前後のベッド状遺構を施す。また、壁面に沿って幅約30cm、深さ10cm前後の壁溝を施す。住居跡内中央には径1.0m程度の範囲に灰層が堆積しており、中央に径60cm、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色している。炉跡北側には掻き出したと考えられる多量の焼土・炭が堆積していて、この付近が焚口と思われる。南壁中程に径1.2m、深さ10cm前後の方形土坑をもつ。この土坑の東・西壁中程にそれぞれ1本ずつの柱穴をもつ。柱穴は径30cm、深さ30cm前後である。主柱穴は4本で、径30～40cm、深さ30～50cm前後、主柱穴間は2.3～2.5mである。

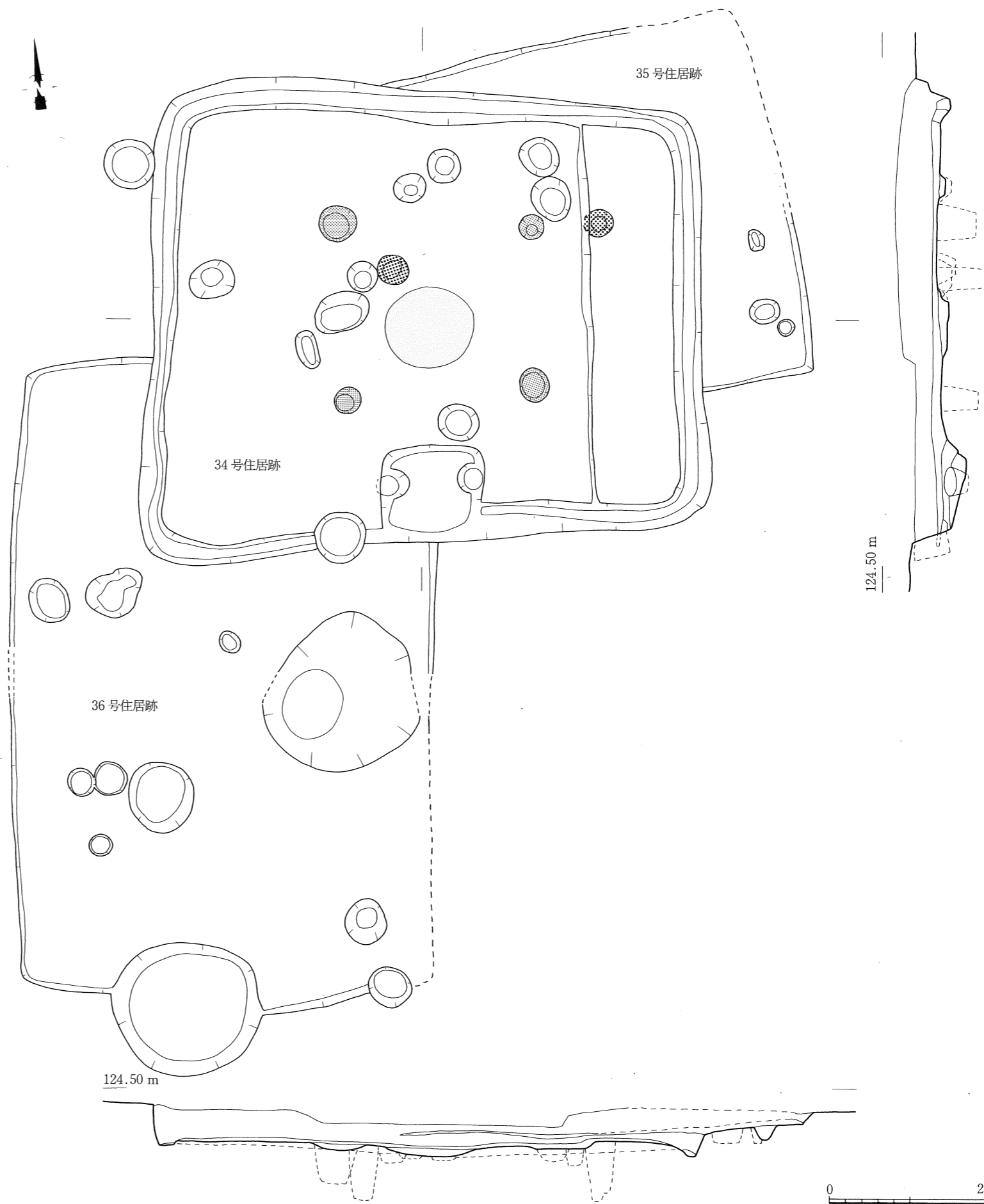
遺物は炉跡の周辺から多量の遺物が出土した。小型碗や支脚等はほぼ完形品であり、また、石包丁・砥石等も比較的少量に出土している。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉頃と思われる。

35号住居跡は34号住居跡の東に位置し、ほとんどを34号住居跡に切られている。規模は東西長が不明、南北4.6m、検出面からの深さは10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-10°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝等は現状ではみられない。炉跡も既に消滅している。主柱穴は2本と思われ、34号住居跡の床面から検出された。径40cm、深さ30cm前後、主柱穴間は2.3～2.5mである。

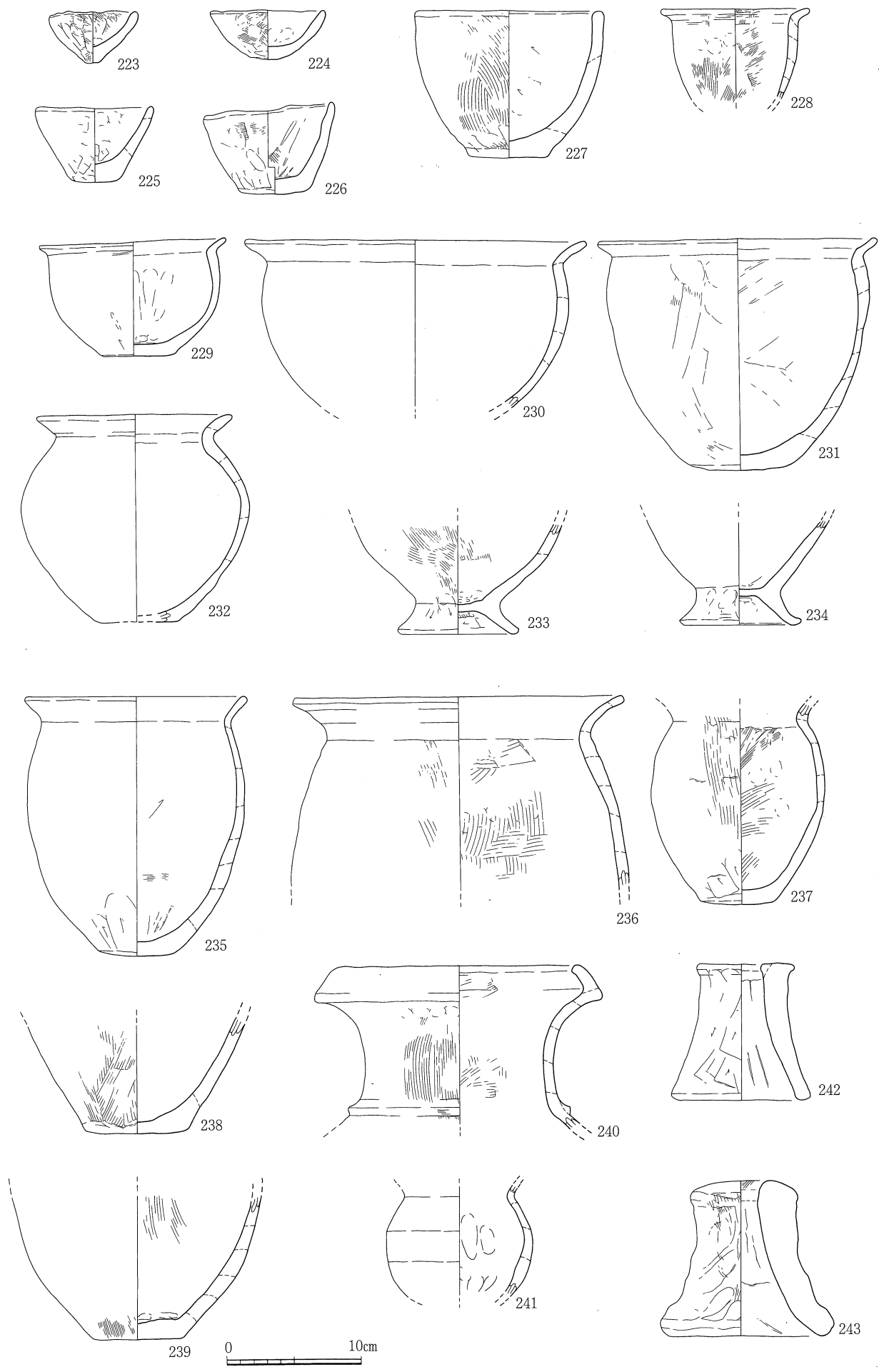
遺物は埋土中から土器片数点が出土したが、いずれも小破片であり流れ込み遺物である。このため、当住居跡の時期は不明である。

36号住居跡は34号住居跡の南西に位置し、北東コーナーを切られている。規模は東西5.3m、南北7.9m、検出面からの深さは5～10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はほぼ磁北を示す。ベッド状遺構・壁溝等はみられない。東壁中程に径2.0m、深さ40cm程の土坑が位置するが、当住居跡に伴うかは不明である。土坑内からは甕(244)1点がほぼ完形の状態で出土した。炉跡・主柱穴は確認できなかった。

遺物は35号住居跡と同様、埋土中から土器片数点が出土したが、いずれも小破片である。土坑内遺物は当住居跡に伴うかは不明のため、出土遺物による当住居跡の時期は特定できない。

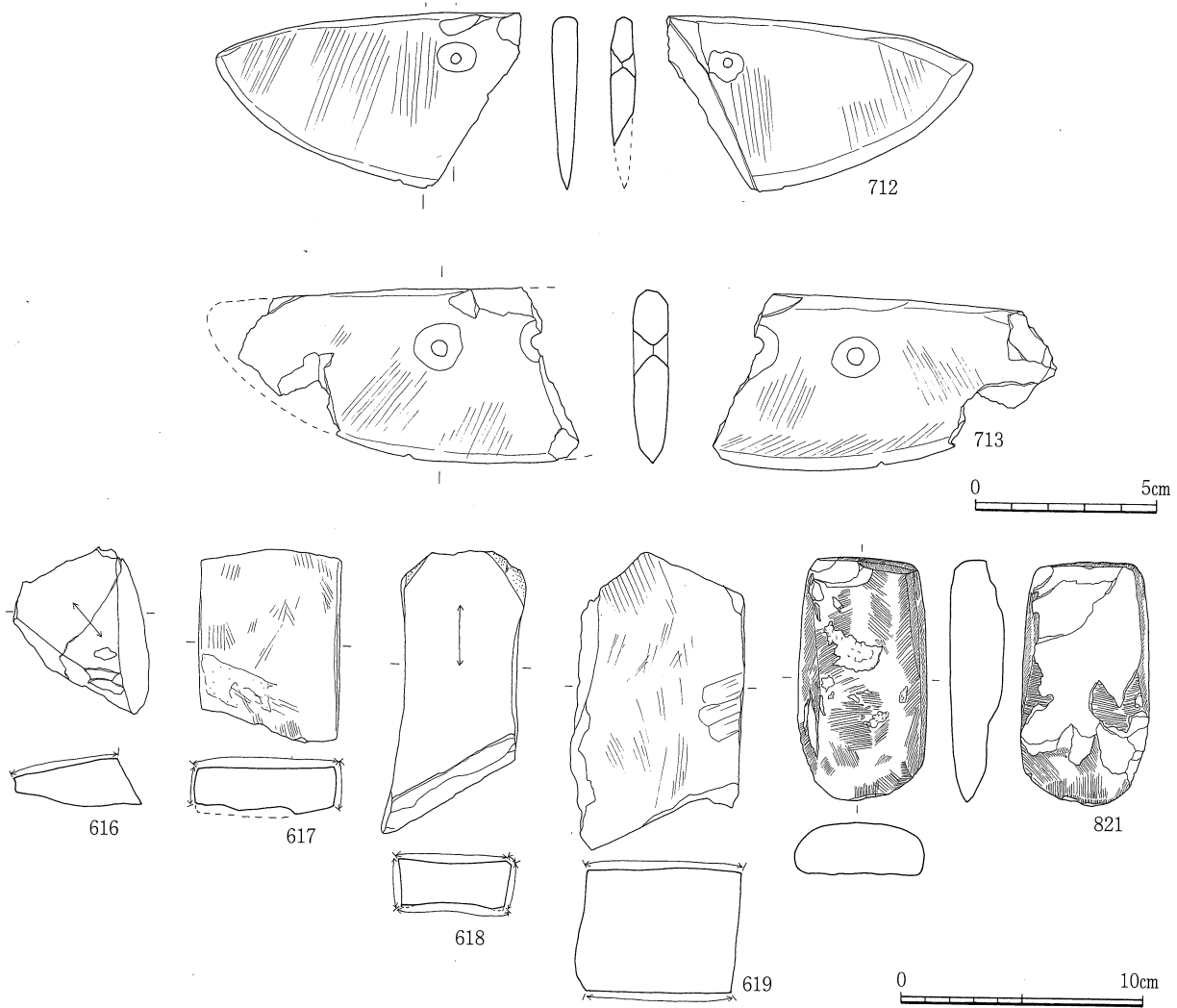


第 61 图 34 ~ 36 号住居跡実測图 (1 / 60)

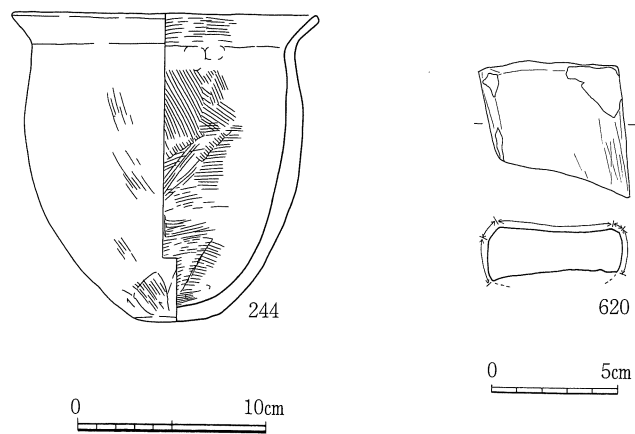


第 62 图 34 号住居跡出土遺物実測図 1 (1 / 4)





第 63 图 34 号住居跡出土遺物実測図 2 (1/2 · 1/3)



第 64 图 36 号住居跡出土遺物実測図 (1/4 · 1/3)

表 48 34号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
223	埴	5.7~6.3	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 やや多、 白色粒子 やや多	黄橙色	普通	手づくね	指ナデ ハケ目	指ナデ ハケ目			
		3.8									
		1.1~1.8									
224	埴	8.1	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	橙色	良好	手づくね	ハケ目	ナデ			
		3.6									
		—									
225	埴	(7.8)	角閃石、 石英、 赤色粒子	黄橙色		手づくね	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	すす付着		
		5.6									
		2.8									
226	埴	9.2	雲母 微、 白色粒子 少	外面 黒褐色 内面 黄橙色	良好	粘土積上げ	指ナデ ケズリ	ケズリ ハケ痕			
		5.9~6.8									
		5.1									
227	鉢	(12.4)	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 少	灰白色 黄灰色 混合	普通	粘土積上げ	ハケ目	ケズリ後ハケ			
		10.9									
		5.8									
228	鉢	10.8	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多、 金雲母 微	橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目			
		—									
		—									
229	鉢	13.7	白色粒子 多、 石英 多、 角閃石 やや多	橙色	普通	粘土積上げ	不明	指ナデ			
		8.3~8.8									
		5.1									
230	鉢	(25.2)	角閃石 少、 赤色粒子 少	灰白色		粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									
231	壺	(20.6)	白色粒子 多、 赤色粒子 少、 石英 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		17.2									
		8.0									
232	壺	(14.2)	角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		15.5									
		—									
233	脚付き鉢	—	角閃石 多、 赤色粒子 多、 石英 多、 金雲母 微	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ハケ痕	すす付着		
		—									
		9.0									
234	脚付き鉢	—	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	外面 淡黄色 内面 黄灰色 底部内 橙混	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		9.1									
235	壺	(16.0)	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	灰白色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		19.4									
		5.7									
236	甕	(24.2)	白色粒子 多、 赤色粒子 多、 石英 微	褐色	普通	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケ目			
		—									
		—									
237	甕	—	角閃石 やや多、 白色粒子 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ	ハケ目			
		—									
		5.5									
238	甕	—	角閃石 少、 白色粒子 多	橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	不明			
		—									
		7.1~7.6									
239	甕	—	角閃石 多、 白色粒子、 金雲母 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ ケズリ	ハケ目			
		—									
		6.6									
240	壺	17.4	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明	一条三角突 帯あり		
		—									
		—									
241	壺	—	角閃石 少、 赤色粒子 少	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									
242	支脚	—	角閃石 少、 石英 多、 白色粒子 多	橙色	良好		指ナデ ケズリ	指ナデ ケズリ			
		10.2									
		10.4									
243	支脚	—	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	浅黄橙色	良好		指ナデ	指ナデ		しぼり痕 あり	
		11.6									
		12.95									

表 49 34号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
712	石包丁	粘板岩	(84)	(48)	8	28.6	
713	石包丁	粘板岩	(84)	(47)	10	53.4	
616	砥石	硬質頁岩	60	53	19	(54.7)	
617	砥石	硬質頁岩	77	59	19	(142.1)	
618	砥石	硬質頁岩	115	46	18	(203.4)	
619	砥石	硬質頁岩	111	68	51	(565.9)	
821	蛤刃石斧	蛇紋岩	100	53	22	225.2	

表 50 36号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
244	甕	15.8	角閃石 普通、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目	すず付着		
		16.4									
		4.6～8.0									

表 51 36号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
620	砥石	硬質頁岩	50	54	21	(86.2)	

## 37・38号住居跡(第64図)

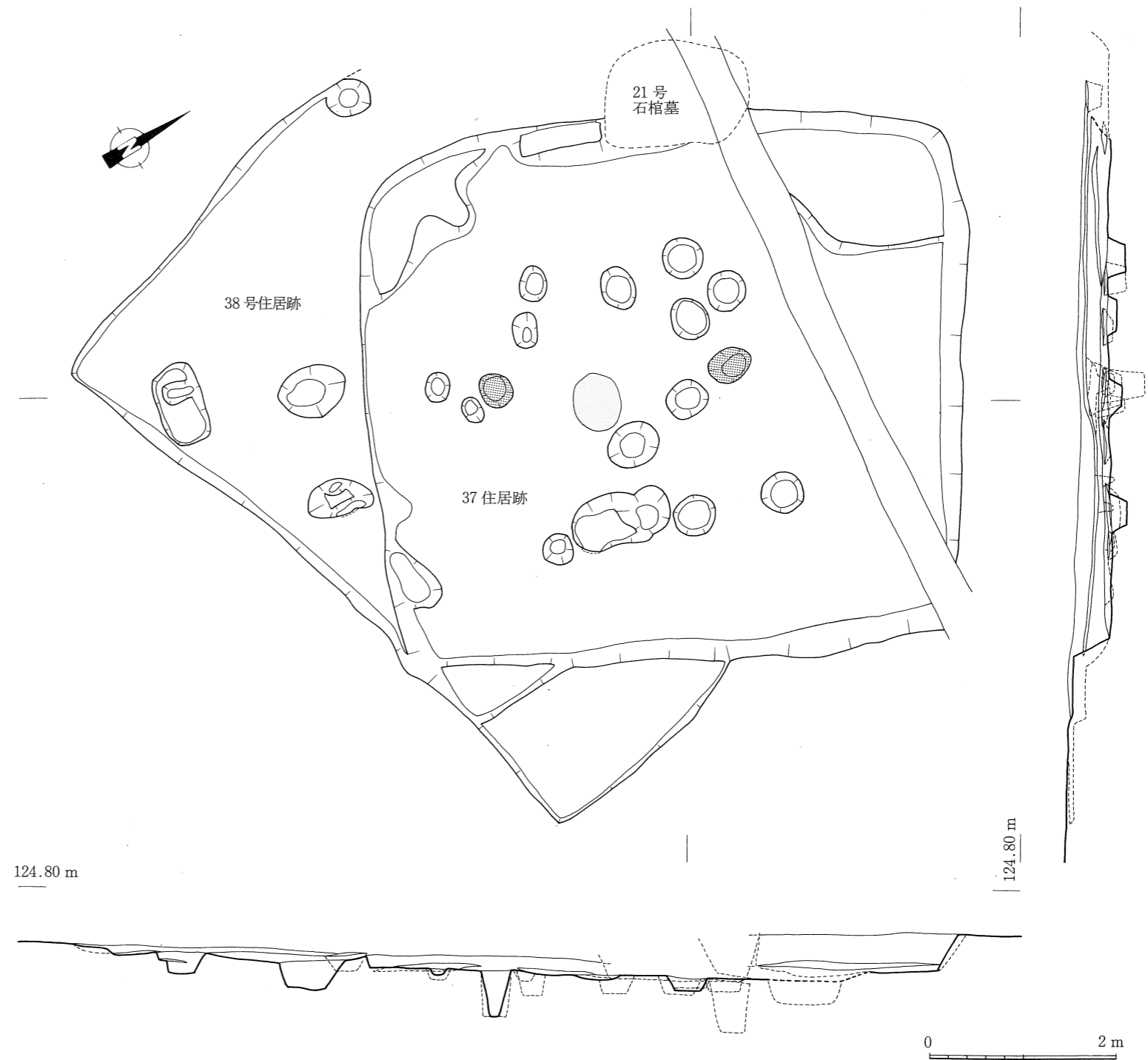
37・38号住居跡はB-2区の東側中央付近に位置し、36・40号住居跡とほぼ接する。

37号住居跡は38号住居跡の廃絶後に構築されている。規模は東西5.9m、南北6.3m、検出面からの深さは20～40cm、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-31°-Eを示す。西壁に沿って幅約1.2m、高さ5cm前後のベッド状遺構を施しているが、中央付近はすでに消滅している。壁溝は検出されなかった。住居跡内中央には径0.5m、高さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化している。主柱穴は2本で、径40cm、高さ50cm前後、主柱穴間は2.5mである。

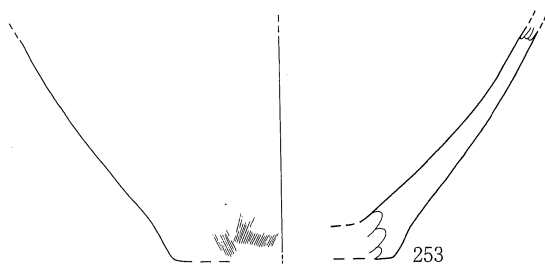
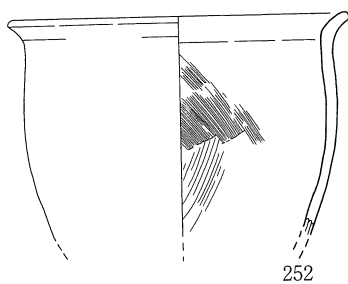
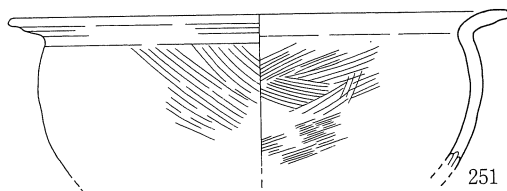
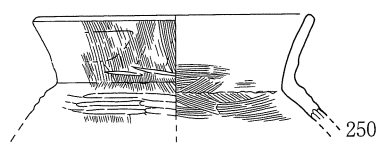
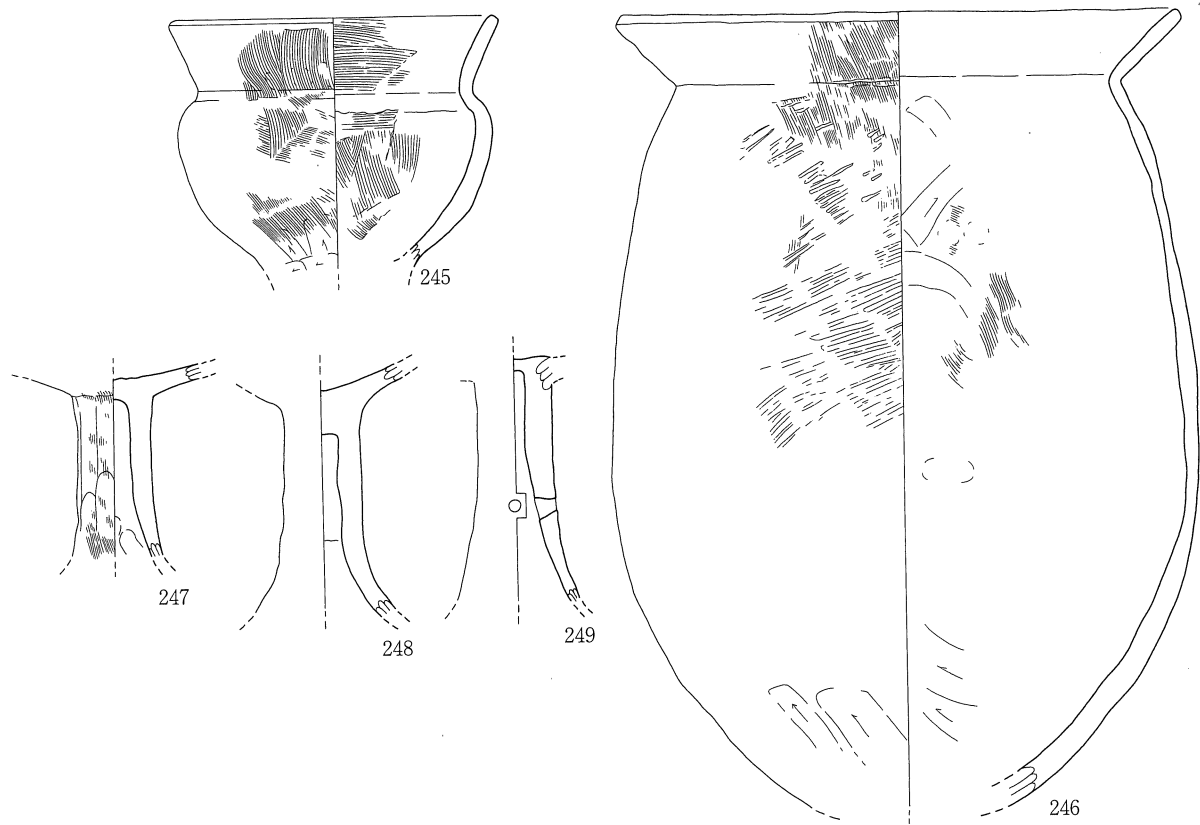
遺物は住居跡の東側を中心に出土した。出土遺物は245～249・621である。出土遺物からみた当住居跡の時期は、弥生時代後期後葉を中心とした時期と思われる。

38号住居跡は残りが悪く、中央を37号住居跡に切られ、北側は消滅している。規模は東西7.5m、南北は不明、検出面からの深さは5cm程度である。平面形は長方形を呈していると考えられ、主軸方位はN-14°-Wを示す。東壁に沿って幅約1.2m、高さ8cm前後のベッド状遺構の一部を確認できたが、壁溝は検出されなかった。炉跡は既に消滅している。主柱穴は断定できなかった。

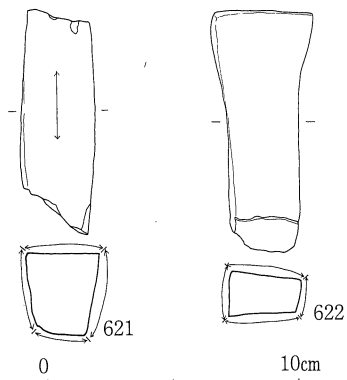
遺物は住居跡の残りの部分から少量出土した。出土遺物は250～253・622・714である。出土遺物からみた当住居跡の時期は、37号住居跡とほぼ同時期の弥生時代後期後葉を中心とした時期と思われる。



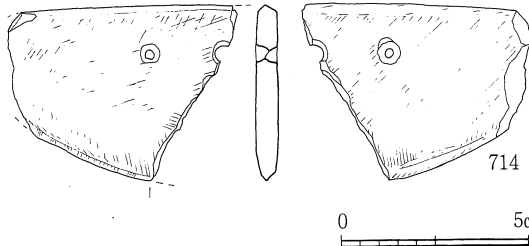
第 65 図 37・38 号住居跡実測図 (1 / 60)



0 10cm



0 10cm



0 5cm

第66图 37·38号住居跡出土遺物実測図 (1/4·1/3·1/2)

表 52 37号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
245	脚付き壺	(16.8)	角閃石 やや多、 白色粒子 多、 赤色粒子 やや多	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目 ケズリ後ハケ目	ヨコハケ ハケ目			
		—									
		—									
246	甕	(29.6)	角閃石 やや多、 石英 やや多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	褐色 黒褐色	良好	粘土積上げ	タタキ ハケ	ケズリ後ハケ	すず付着		
		42.2									
		—									
247	高坏	—	角閃石 やや多、 赤色粒子 やや多、 白色粒子 多	灰白色	普通	分割成形?	ハケ	指ナデ			
		10.2									
		—									
248	高坏	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多	黄橙色	普通		不明	不明 ヘラケズリ			
		13.3									
		—									
249	高坏	—	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	褐灰色	普通	?	不明	不明		3ヶ所穿孔あり	
		12.9									
		—									

表 53 37号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
622	砥石	硬質頁岩	95	(40)	17	(78.9)	

表 54 38号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
250	壺	(14.2)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	明褐色	良好	粘土積上げ	ハケ タタキ	ハケ後ナデ			
		—									
		—									
251	壺	24.8	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多、 石英 多	外面 黄橙色 内面 暗褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケ目			
		—									
		—									
252	壺	(17.8)	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	橙色	良好	粘土積上げ	不明	ハケ目			
		—									
		—									
253	甕	—	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	褐色	良好	粘土積上げ	ほとんど不明 一部ハケ目痕	不明			
		—									
		—									

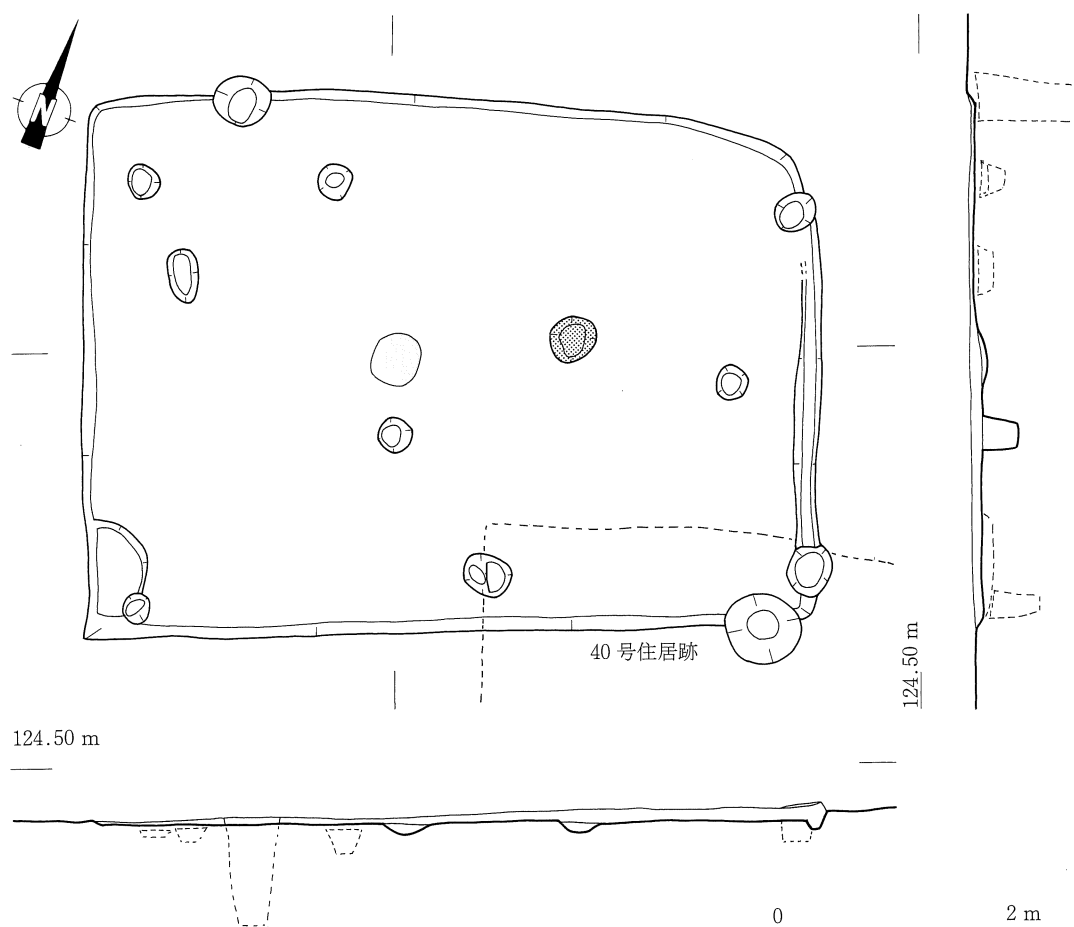
表 55 38号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
621	砥石	硬質頁岩	85	29	32	122.6	
714	石包丁	粘板岩	47	(58)	6	26.3	

39号住居跡（第67図）

39号住居跡はB-2区の中央からやや東側に位置する。東側コーナー付近は40号住居跡を切っている。規模は東西5.8m、南北4.2m、検出面からの深さは5~10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-21°-Wを示す。東壁の一部に幅0.2m、深さ5cm前後の壁溝が検出された。ベッド状遺構は検出されなかった。住居跡内中央には径0.4m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、上面に焼土層と炭層が堆積していた。支柱穴は2本と思われるが、西側の支柱穴は不明である。

遺物の出土は無く、当住居跡の時期は不明である。

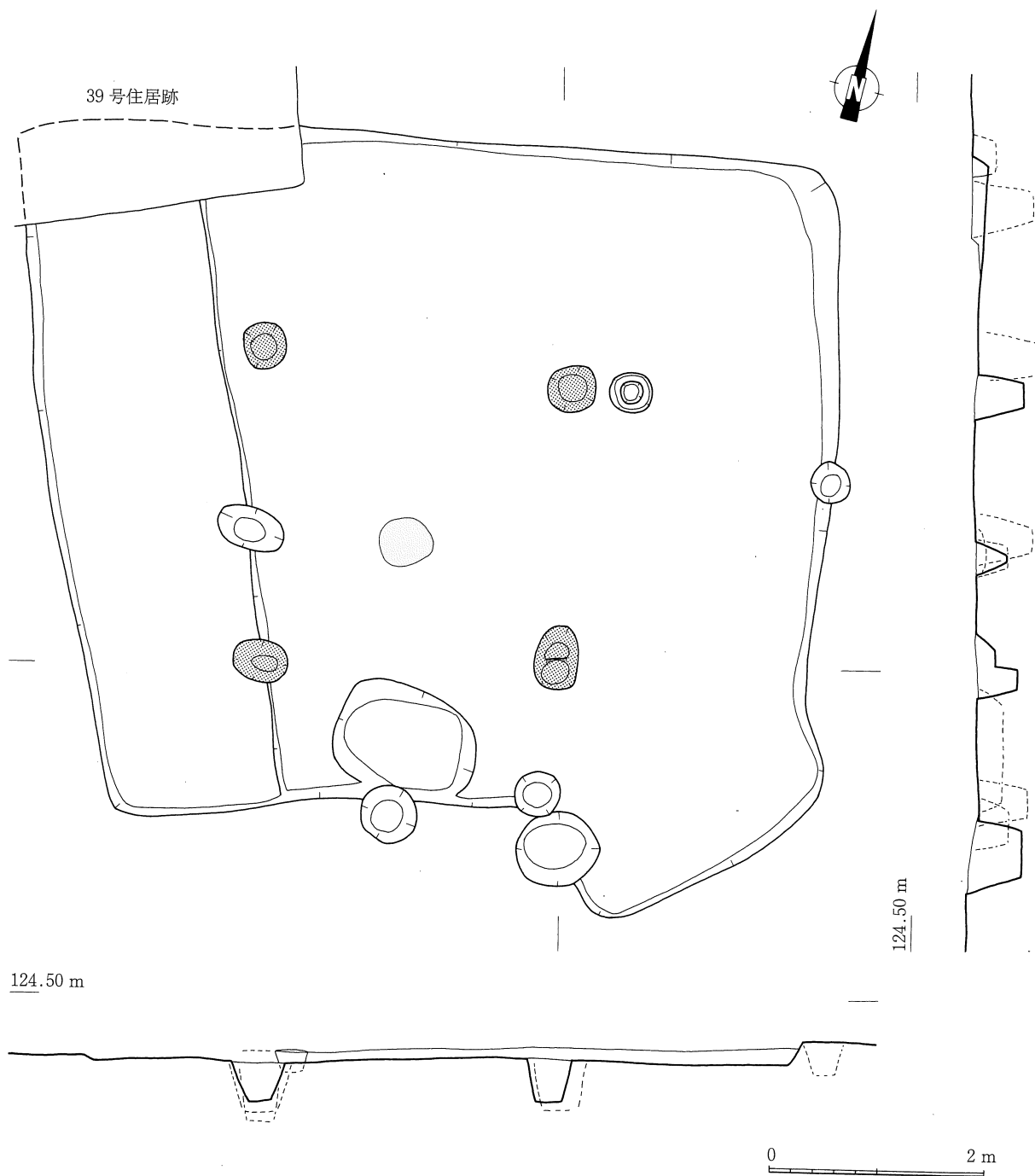


第67図 39号住居跡実測図（1/60）

40号住居跡（第68図）

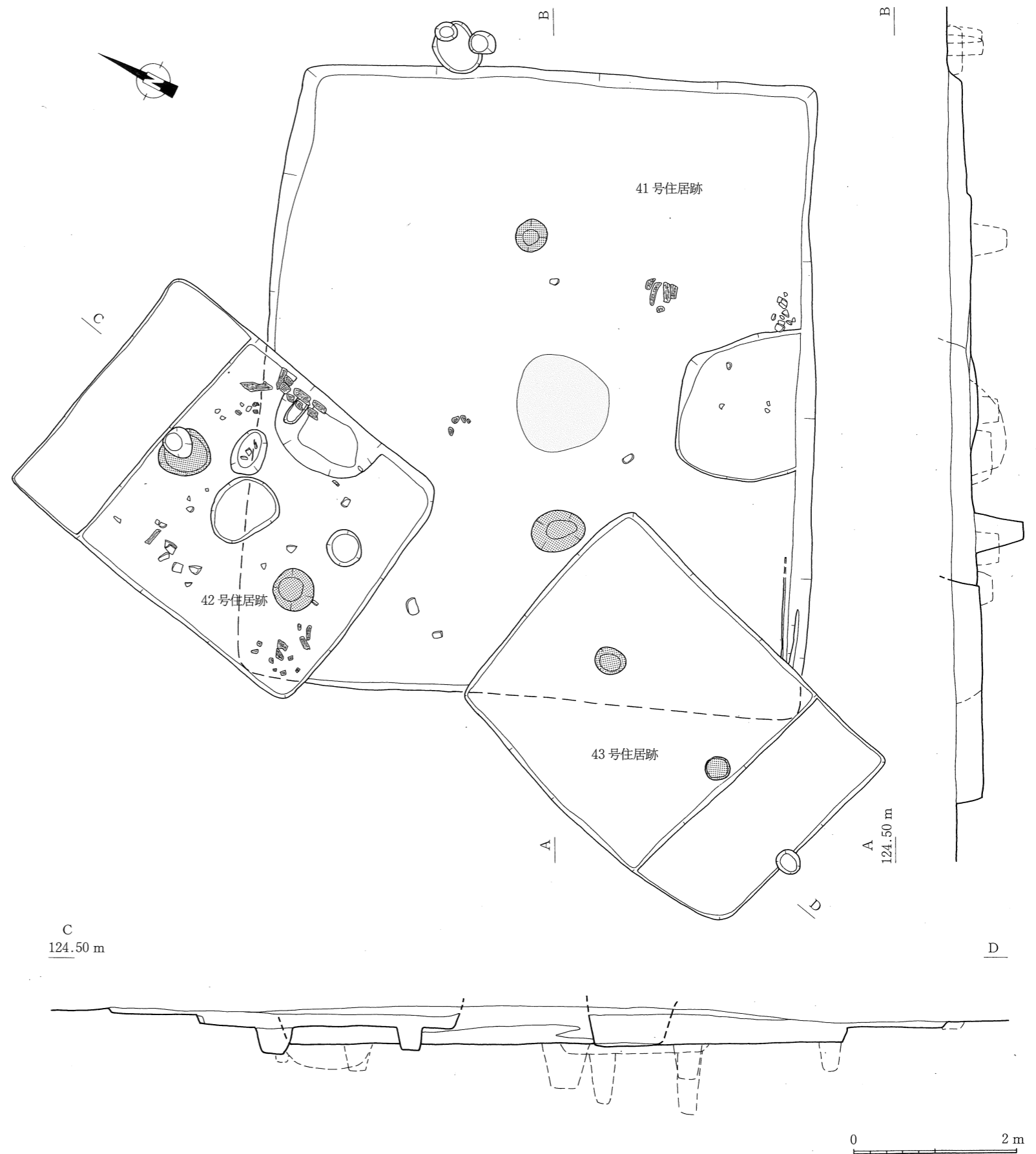
40号住居跡はB-2区の中央からやや東、39号住居跡の南東に位置し、39号住居跡によって西コーナーの一部を切られている。規模は東西7.1m、南北6.2m、検出面からの深さは10～15cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Wを示す。西壁に沿って幅約1.5m、高さ5cm前後のベッド状遺構を壁面と並行に施す。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.5m、深さ8cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色している。支柱穴は4本で、径50cm、深さ40～50cm前後、支柱穴間は2.7～2.9mでやや歪な方形を呈している。

遺物の出土は無く、当住居跡の時期は不明である。



第68図 40号住居跡実測図（1/60）





第 69 图 41 ~ 43 号住居跡実測図 (1 / 60)

41～43号住居跡（第69図）

41～43号住居跡はB-2区のほぼ中央に位置する。41号住居跡の西コーナーに42号住居跡が、南コーナーに43号住居跡がそれぞれ構築されている。

41号住居跡は南・西コーナーを42・43号住居跡に切られている。規模は東西7.6m、南北6.6m、検出面からの深さは15～25cmで、平面形は長方形を呈した比較的大型の住居跡である。主軸方位はN-26°-Wを示す。東壁に沿って幅約1.3m、高さ5cm前後のベッド状遺構を壁面に並行しながら施す。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径1.1m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、中央部分の床面は径0.5m程が赤変化し、炉跡中には焼土層と炭層が堆積していた。炉跡北側には掻き出したと考えられる焼土・炭が堆積している。南壁中程に1.5×1.8m、深さ20cm前後の土坑をもち、土坑内の東・西壁寄りにはそれぞれ小型の柱痕が検出された。主柱穴は2本で、径40～50cm、深さ30～40cm前後、主柱穴間は3.5mである。

遺物の出土は少なく、実測できたのは2点だけである。254の壺は炉跡とベッド状遺構の間から出土した。また、255の壺は南側土坑の東側一帯で破片で出土した。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉頃を中心とした時期と思われる。

42号住居跡は41号住居跡の西コーナー上に位置する。規模は東西3.3m、南北4.3m、検出面からの深さは10cm前後で、平面形は長方形を呈した小型の住居跡である。主軸方位はN-15°-Eを示す。北壁に沿って幅約1.0m、高さ8cm前後のベッド状遺構を壁面に並行しながら施す。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.7×0.9m、深さ10cm前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡をもち、中央部分が赤変化し、炉跡中には焼土層と炭層が堆積していた。南西コーナーと東壁沿いに炭化木が出土している。東壁中程に0.8×1.3m、深さ30cm前後の土坑をもち、主柱穴は2本で、径50cm、深さ30cm前後、主柱穴間は2.1mである。

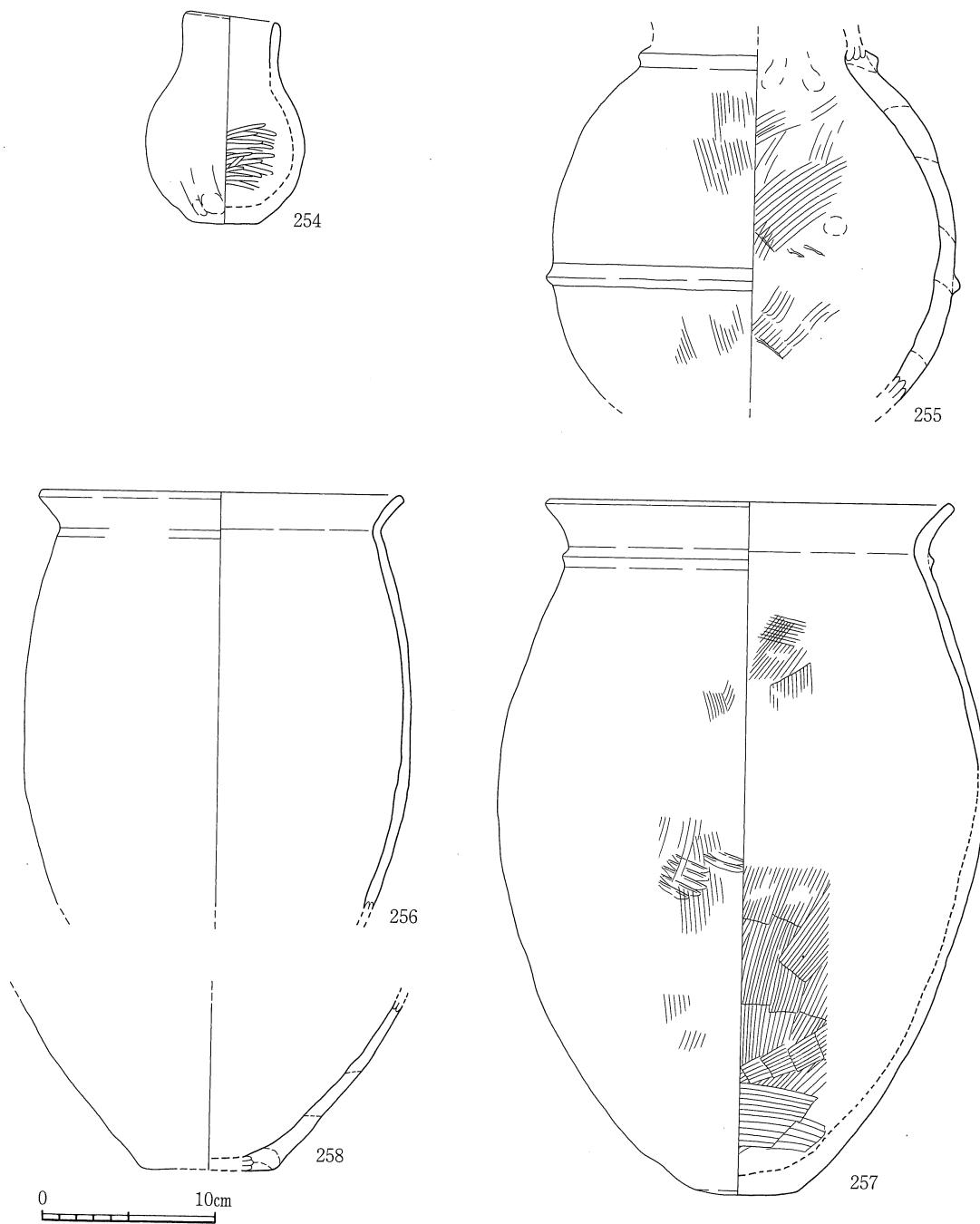
住居跡に伴う遺物は無く、256～258の甕はいずれも埋土上層からの出土である。このため当住居跡の時期は、切り合い等からみて弥生時代後期中葉以降である。

43号住居跡は41号住居跡の南コーナー上に位置する。規模は東西3.1m、南北4.4m、検出面からの深さは20cm前後で、平面形は長方形を呈した小型の住居跡である。主軸方位はN-18°-Eを示す。南壁に沿って幅約1.1m、高さ15cm前後のベッド状遺構が壁面と並行しながら巡る。壁溝は付設されていない。炉跡は検出されなかった。主柱穴は2本で、径35cm、深さ25cm前後、主柱穴間は1.9mである。

遺物の出土は無く、時期は確定できないが、42号住居跡とほぼ同時期と思われる。

表56 41・42号住居跡出土土器観察表

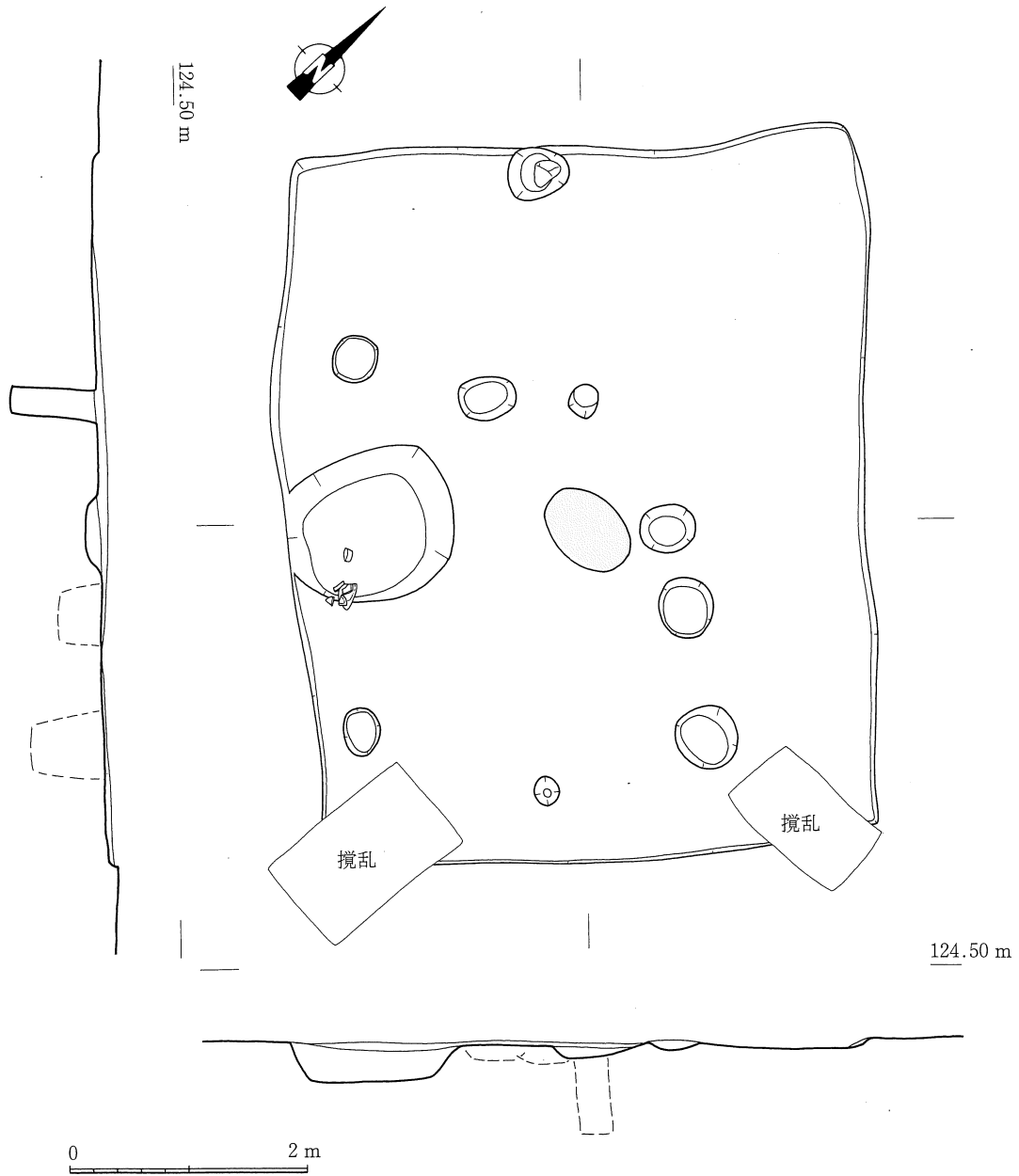
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
254	壺	5.1	—	赤色粒子、 石英、角閃石	灰白色		粘土積上げ	不明	ミガキ	すず付着	41号住居跡
		1.9～12.3									
		4.1									
255	壺	—	—	角閃石 多、 白色粒子 少、 赤色粒子 少、 石英 やや多	外面 淡黄色 内面 黄灰色	普通	粘土積上げ	ハケ痕	ハケ ナデ		ニヶ所に一条 三角突帯あり 41号住居跡
		—									
		—									
256	甕	(21.4)	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 長石 多	黒灰色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 体部 不明	口縁 ヨコナデ 体部 不明		42号住居跡
		—									
		—									
257	甕	(24.0)	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 黒色粒子 少	淡黄褐色	良好 黒斑	タタキ成 形	口縁 ヨコナデ 平行タタキ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	赤変一 二次加熱あ り	42号住居跡
		40.6									
		6.8～7.0									
258	甕	—	—	石英 多、 角閃石 少、 白色粒子 少	灰褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明		42号住居跡
		9.8									
		(7.4)									



第 70 图 41·42 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 4)

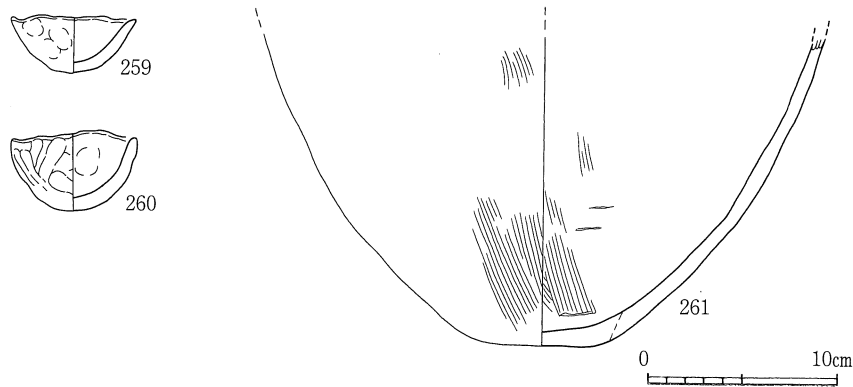
44号住居跡 (第71図)

44号住居跡はB-2区の東端に位置する。規模は長軸6.0m、短軸4.85m、検出面からの深さは5cm前後で残りは悪く、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-47°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝等は付設されていない。住居跡内中央には0.6×0.8m、深さ10cm前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、上面に焼土層と炭層が堆積していた。炉跡北側には掻き出したと考えられる多量の焼土が堆積している。南西壁中程には径1.3m、深さ20cm前後の土坑をもつ。支柱穴は2本と思われるが、南側柱穴は建物5の柱穴により、消滅している。柱穴の径は30cmで深さ60cmである。支柱穴間は2m前後であろう。



第71図 44号住居跡実測図 (1/60)

遺物は数点出土した。259の手捏ね埴は南コーナーの柱穴と壁の間から、260の手捏ね埴は土坑の西側から、261の甕の底部は土坑の南壁そばから出土している。出土遺物からみた当住居跡の時期は底部1点では断定できないが、おおむね弥生時代後期中葉～後葉頃と思われる。



第 72 図 44 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 4)

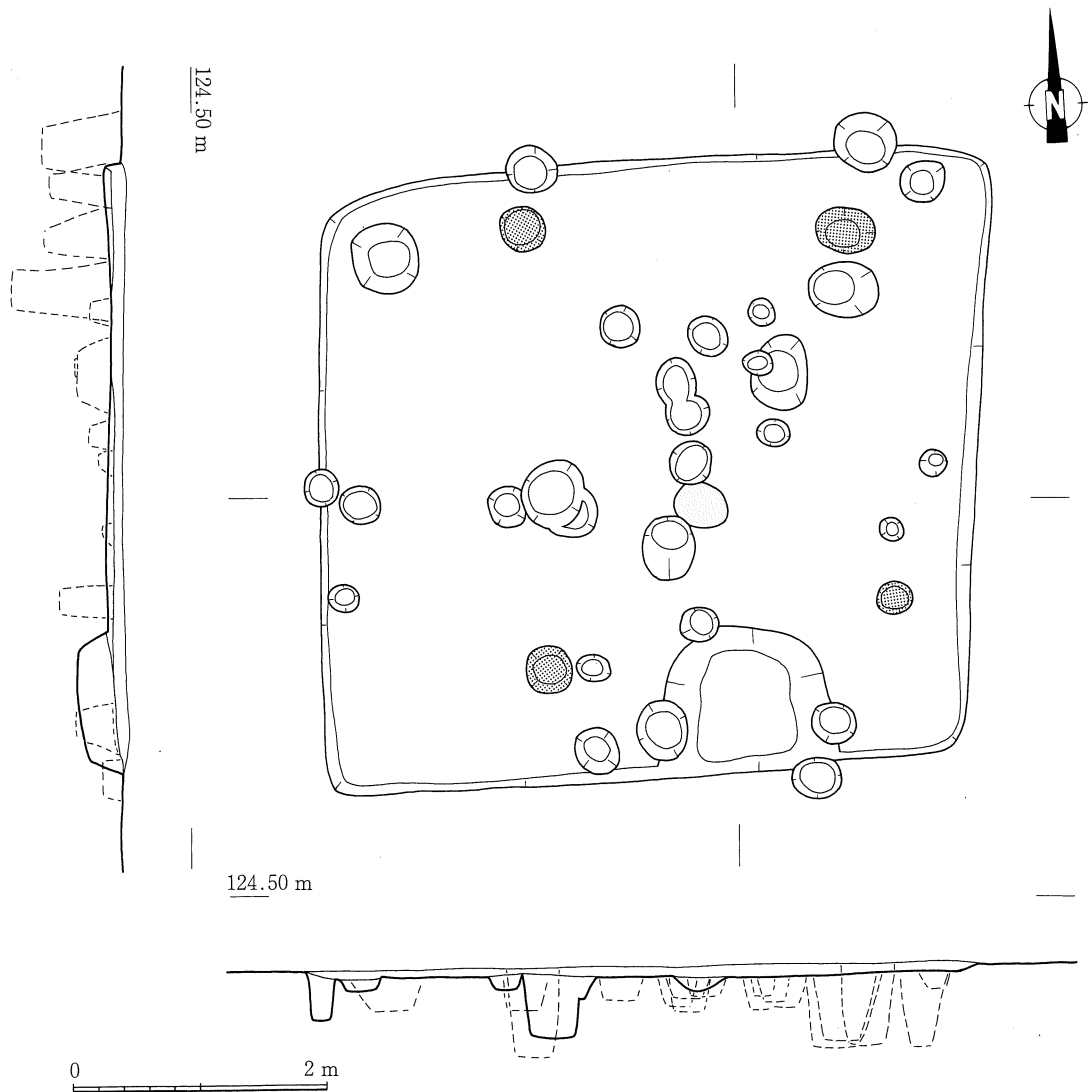
表 57 44 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
259	埴	6.4~6.6	2.9~3.1	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	橙色	良好	指成形	ナデ	ナデ	すず付着	
		—									
		—									
260	埴	5.9~6.1	3.8~4.1	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 少	黄褐色	良好	指成形	ナデ	ナデ	すず付着	
		—									
		—									
261	甕	—	16.5 (7.4)	角閃石、 石英、 赤色粒子	外面 灰褐色・赤色 内面 黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		
		—									
		—									

45号住居跡（第73図）

45号住居跡はB-2区の東端、44号住居跡の南1m程に位置する。規模は東西5.1m、南北4.9m、検出面からの深さは2~10cmで、平面形はほぼ方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや東寄りに径0.4m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化していた。南壁やや東寄りに径1.2m、深さ40cm前後の土坑をもつ。主柱穴は推定であるが4本で、径30~40cm、深さ30~50cm前後、主柱穴間は2.8~3.5mである。当住居跡は炉跡・土坑・主柱穴が全体に中央から東側へずれていることから、西壁沿いにベッド状遺構を付設していた可能性がある。

遺物は出土していないため住居跡の時期は不明である。



第73図 45号住居跡実測図（1/60）

46・47号住居跡（第74図）

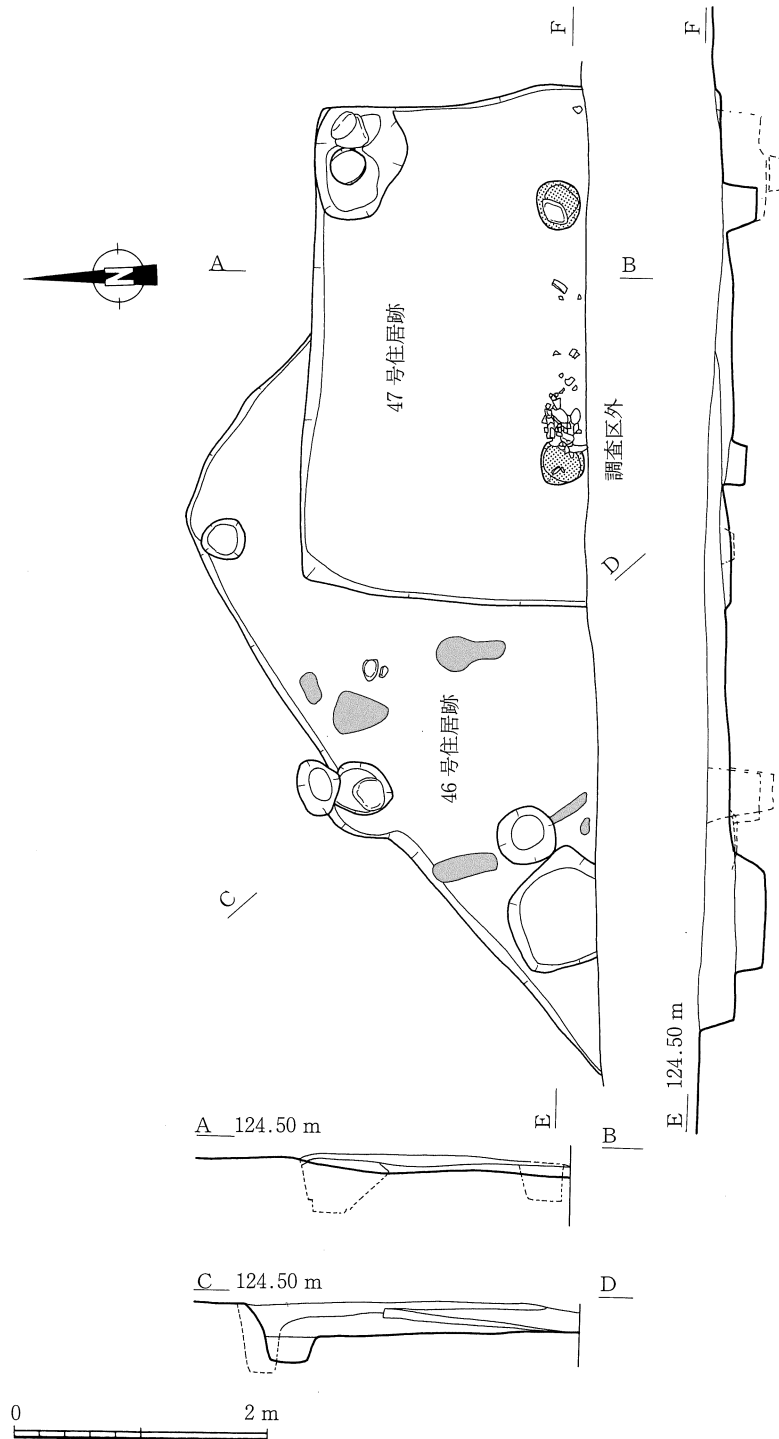
46・47号住居跡はB-2区の南東、調査区の南端に位置する。2軒とも南半分は調査区外のため、未調査である。

46号住居跡は南側半分は調査区外、東側は47号住居跡に切られている。規模は東西 $5.3 + \alpha$  m、南北 $2.4 + \alpha$  m、検出面からの深さは15～25cmで、平面形は方形或いは長方形を呈している。主軸方位はN-37°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は現状では確認できなかった。炉跡は調査区外であり、支柱穴も不明である。床面からは数カ所で炭層が検出された。

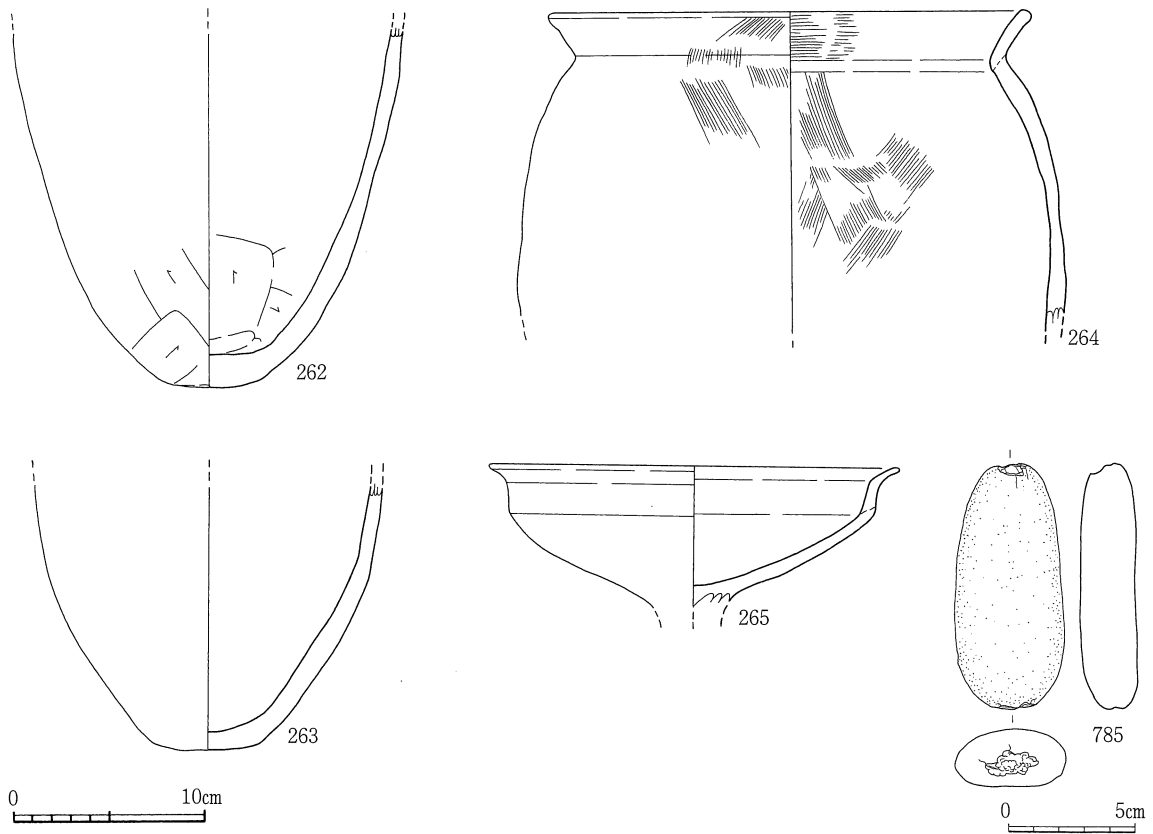
遺物は262の甕の下半部と785の敲き石が出土した。いずれも最下層からの出土で、当住居跡に伴う遺物であろうと考える。当住居跡は262の甕の底部からみて、弥生時代後期後葉を中心とした時期と思われる。

47号住居跡は46号住居跡の東側に位置する。規模は東西4.0 m、南北 $2.2 + \alpha$  m、検出面からの深さは10cm前後で、平面形は方形或いは長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は現状では確認できなかった。炉跡は調査区外と考える。支柱穴は2本が住居跡の中央付近で検出された。径40cm、深さ30cm前後、支柱穴間は2.0 mである。

47号住居跡の出土遺物は263・264の甕と265の高坏の坏部である。いずれも中央付近からの出土で、確認されてはいないものの炉跡の周辺からと考える。当住居跡の時期は46号住居跡と同様、弥生時代後期後葉を中心とした時期と考えたい。



第74図 46・47号住居跡実測図（1/60）



第 75 図 46・47 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

表 58 46・47 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
262	甕	—	—	砂粒 荒、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	灰白色 浅黄橙色	不良	粘土積上 げ	ケズリ	ケズリ		46 号住居跡
		(3.6)	—								
263	甕	—	(15.1)	角閃石 少、 白色粒子 多	橙色	良好	粘土積上 げ	不明	不明		47 号住居跡
		(5.6)	—								
264	甕	25.8	—	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	褐色	良好	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケナデ		47 号住居跡
		16.2	—								
265	高坏	(22.0)	—	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	橙色	良好	粘土積上 げ	不明	不明		47 号住居跡
		(7.5)	—								

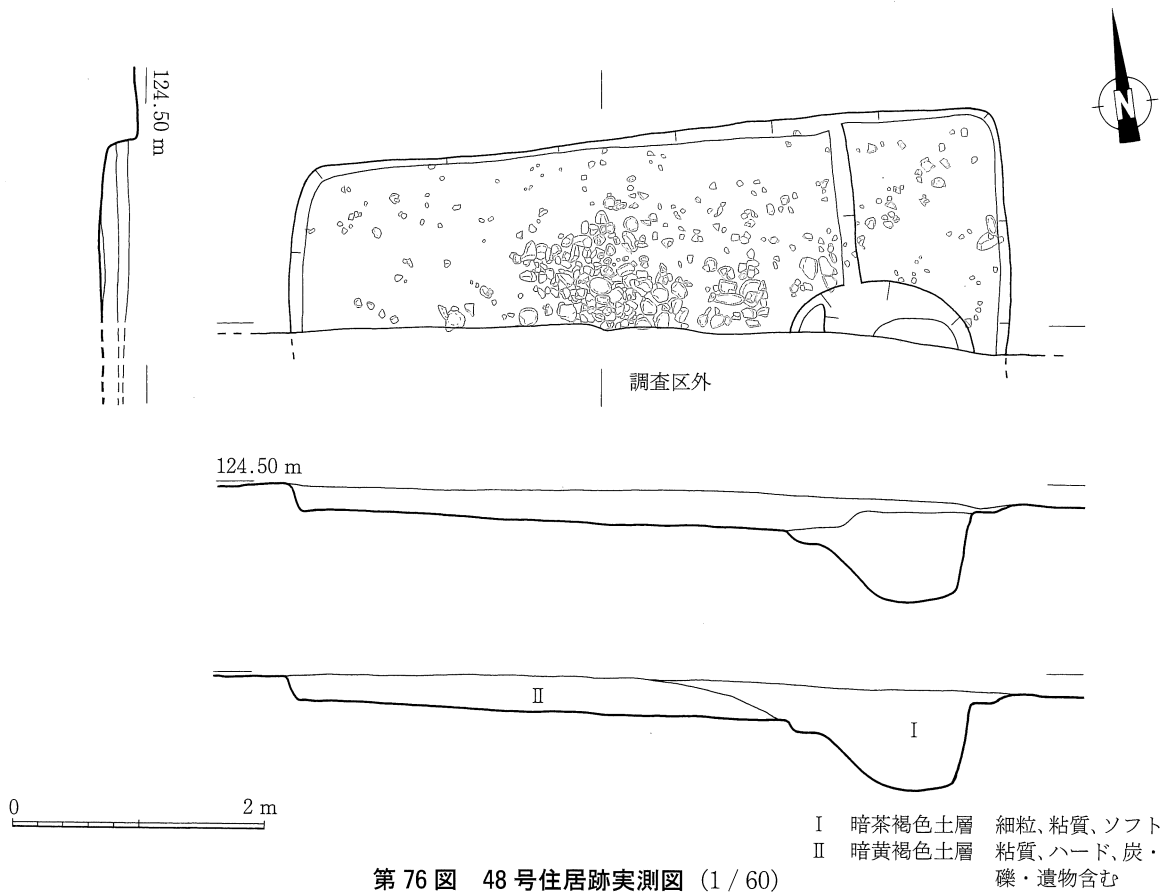
表 59 46 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
785	敲石	不明	94	41	22	121.8	

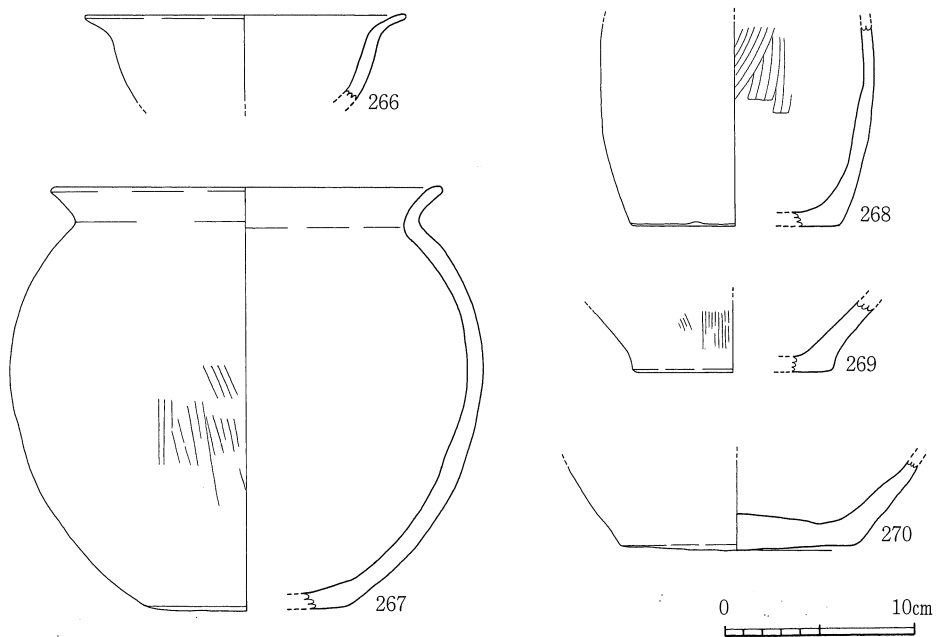


48号住居跡（第76図）

48号住居跡はB-3区の南西端、調査区の南端に位置し、全体の2/3が調査区外である。規模は東西5.72m、南北1.9+αm、検出面からの深さは約20cmで、平面形は方形或いは長方形を呈している。主軸方位はN-2°-Wを示す。東壁に沿って幅1.1m、高さ10cm前後のベッド状遺構が壁面に



第76図 48号住居跡実測図（1/60）



第77図 48号住居跡出土遺物実測図（1/4）

沿って施されている。壁溝は現状では確認できなかった。炉跡は調査区外であり、支柱穴も不明である。

当住居跡からは中央付近を中心としてほぼ全域から多量の礫が出土した。径10～15cm前後で住居跡破棄後に投げ込まれた可能性をもつ。土器片は礫間から多量に出土している。266の鉢と268の甕は中央部分の礫中から、267の甕は床とベッド状遺構の境付近から、269・270の甕底部は、西壁から1m程東側の床面直上から出土している。当住居跡の構築時期は出土遺物からみて、弥生時代後期初頭～前葉を中心とした時期と思われる。

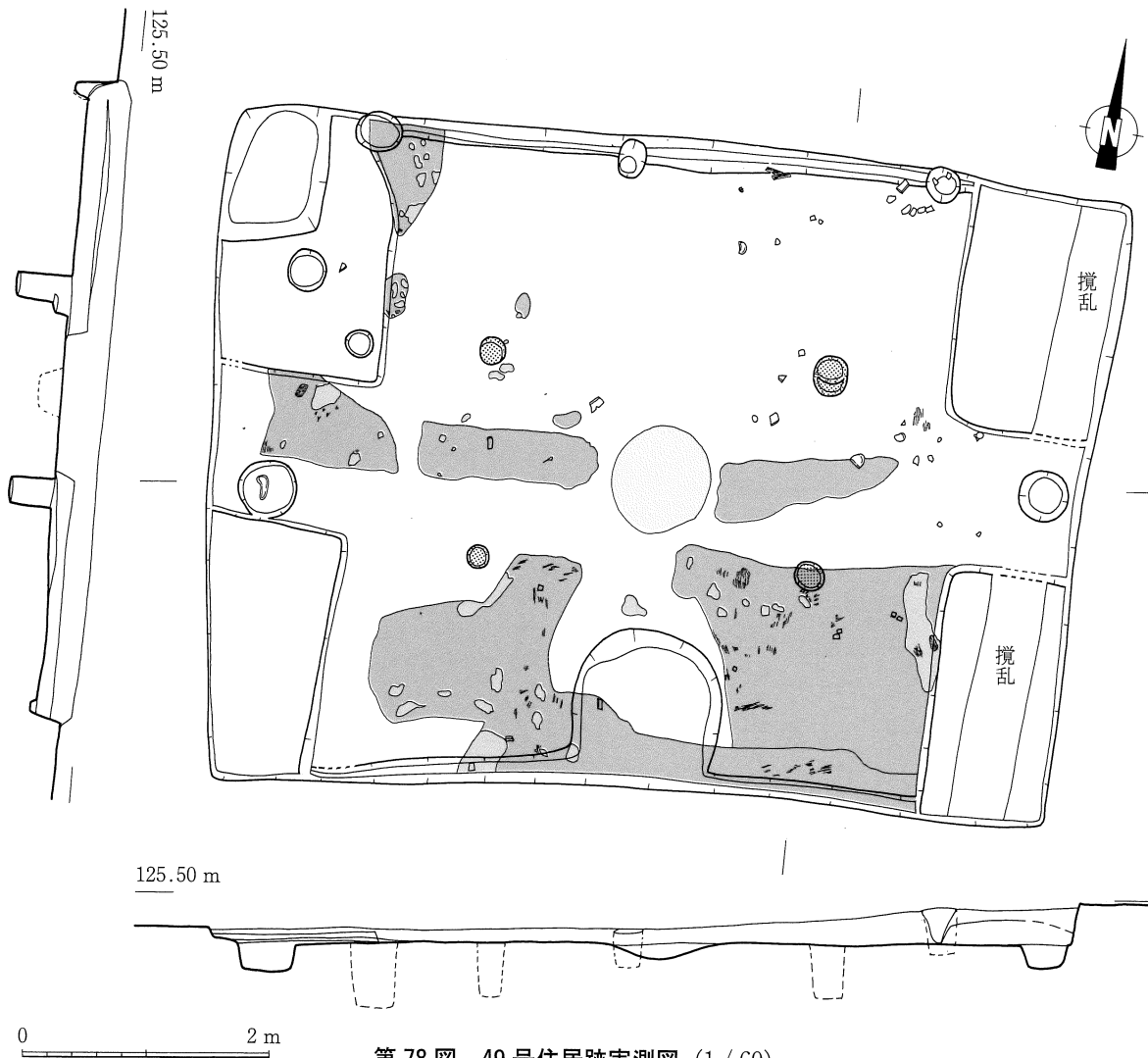
表 60 48号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
266	鉢	(17.0)	角閃石 少、 赤色粒子 多	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									
267	甕	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 非常 に多	淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	不明	タテハケ目 ナデ			
		—									
		(11.2)									
268	甕	(22.8)	砂粒 多、 角閃石、 赤色粒子	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケナデ	口縁 ヨコナデ ナデ			
		22.4									
		(10.1)									
269	甕	—	角閃石 少、 長石 少、 白色粒子 微	外面 淡黄色 内面 浅黄橙 色	普通 黒斑		ハケ目	不明			
		—									
		(10.2)									
270	甕	—	角閃石 少、 長石、 白色粒子	黄橙色	普通 黒斑		ナデ	ナデ			
		—									
		12.4									

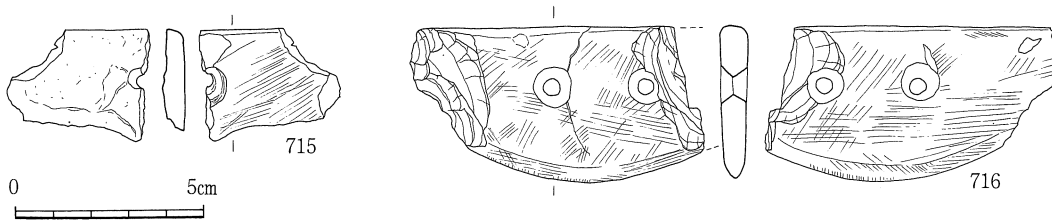
#### 49号住居跡（第78図）

49号住居跡はB-3区の南西隅、48号住居跡の北1.5mに位置する。規模は東西7.08m、南北5.18m、検出面からの深さは10～30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-9°-Wを示す。各四隅コーナーにそれぞれ2.0×1.0～1.4m、高さ10～15cm前後のベッド状遺構を付設している。北壁と南壁にはベッド状遺構間に幅20cm、深さ5～8cmの壁溝をもつ。住居跡内中央には径0.9m、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、上面に焼土層と炭層が堆積していた。南壁中程には1.2×1.3m、深さ20cm前後の隅丸方形の土坑をもつ。床面には多量の焼土・炭層が堆積しており、焼失住居の可能性をもつ。支柱穴は4本で、径30cm、深さ30～40cm前後、支柱穴間は東西間2.7m、南北間1.6mである。

遺物は土器片が10数点出土したが、いずれも小破片のため実測不能であった。土器片以外には石包丁2点が出土した。715は炉跡の北側から、716は埋土中出土である。このため、当住居跡の時期は明確ではない。



第 78 図 49 号住居跡実測図 (1 / 60)



第 79 図 49 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 2)

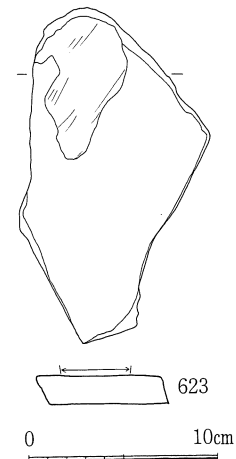
表 61 49 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
715	石包丁	粘板岩	(30)	(36)	6	7.6	全面剥離
716	石包丁	粘板岩	41	(72)	7	32.6	

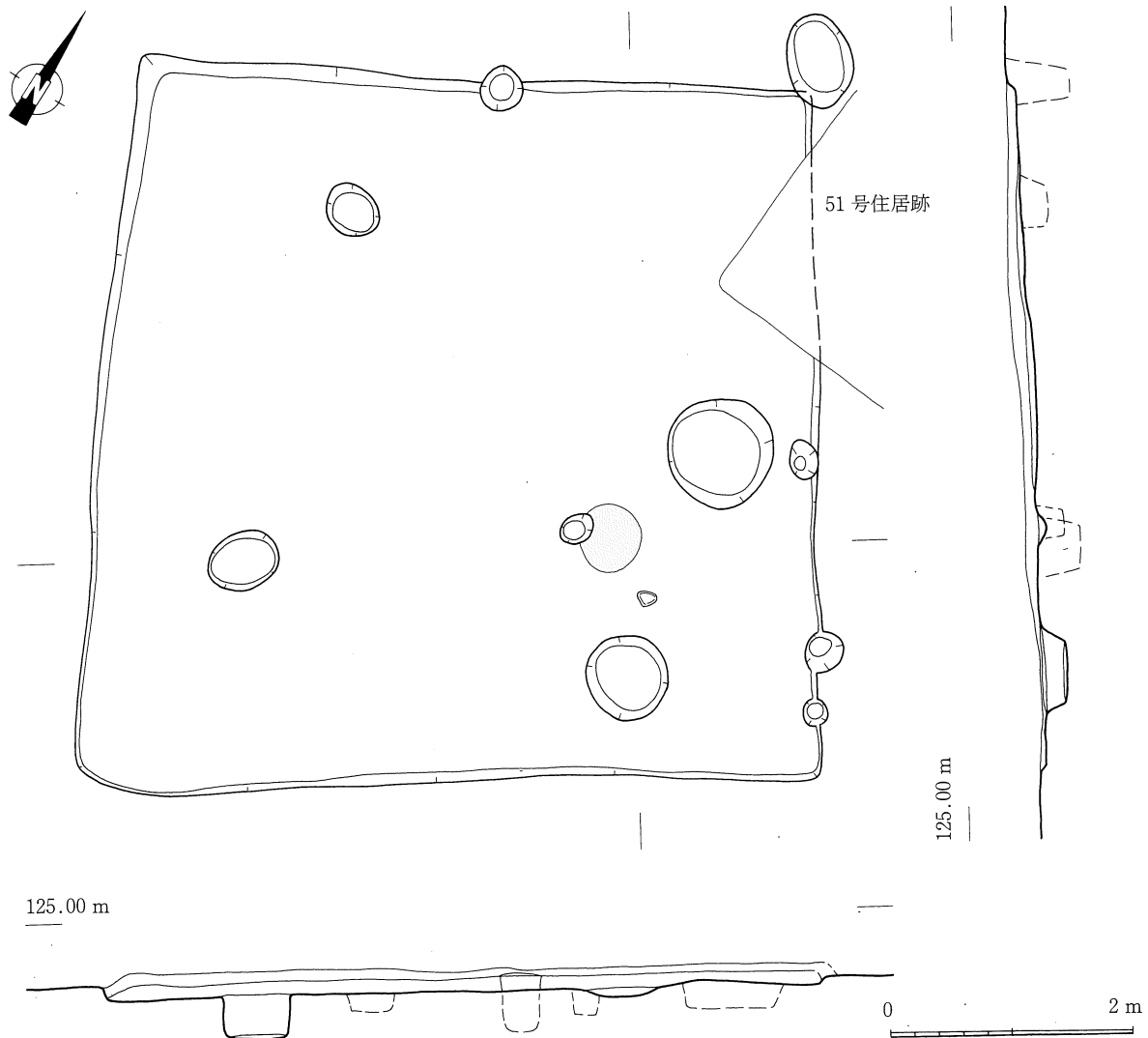
50号住居跡（第81図）

50号住居跡はB-3区の南西、49号住居跡の北東1m程に位置する。北側コーナーを51号住居跡に切られている。規模は長軸5.9m、短軸5.7m、検出面からの深さは5~10cmで、平面形はやや歪な方形を呈している。主軸方位はN-35°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央から東寄りに径0.55m、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化していた。炉跡北側には掻き出したと考えられる多量の焼土が堆積している。柱穴は床面から数個検出されたが、いずれも主軸からずれるため、支柱穴と断定することはできなかった。

遺物は土器小破片数点と砥石1点（623）が出土しただけである。このため、出土遺物では当住居跡の時期は確定できない。



第80図 50号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第81図 50号住居跡実測図（1/60）

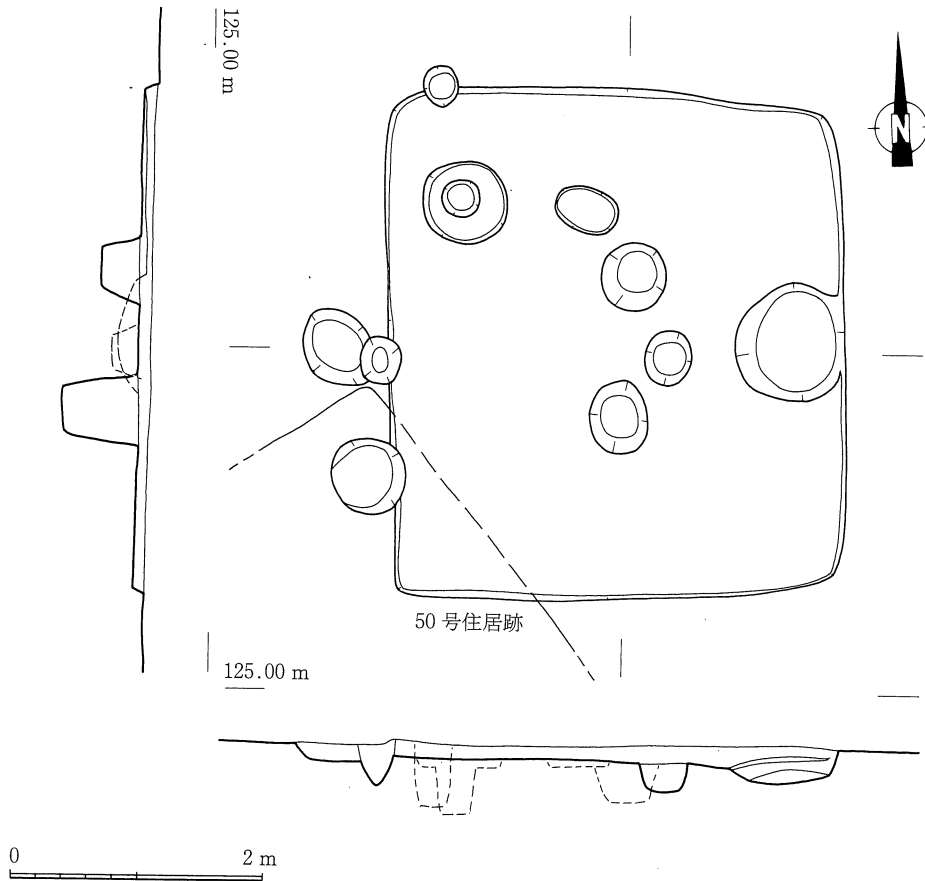
表 62 50号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
632	砥石	硬質頁岩	132	72	11	146.7	

### 51号住居跡（第82図）

51号住居跡はB-3区の南西、50号住居跡の北側コーナー上に位置する。規模は東西3.62m、南北4.0mの小型で、検出面からの深さは5~10cm、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。炉跡・支柱穴は確認されなかったため、住居跡ではない可能性もある。

遺物は出土していないため、時期不明である。

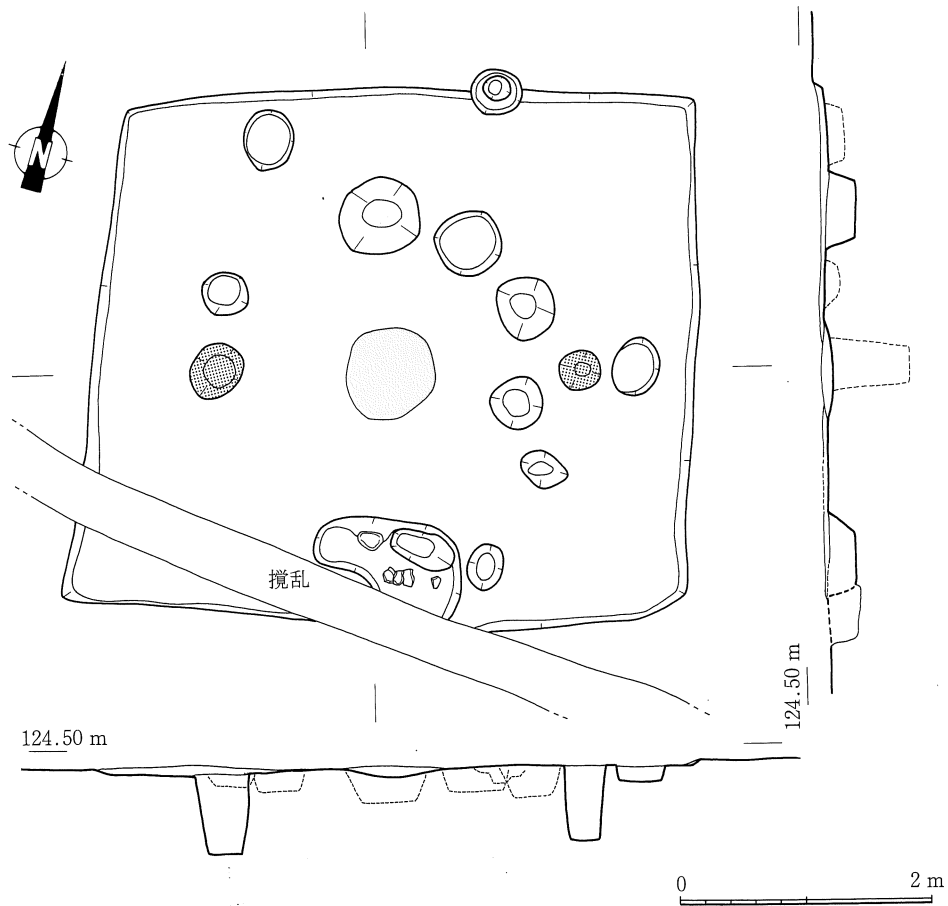


第82図 51号住居跡実測図 (1/60)

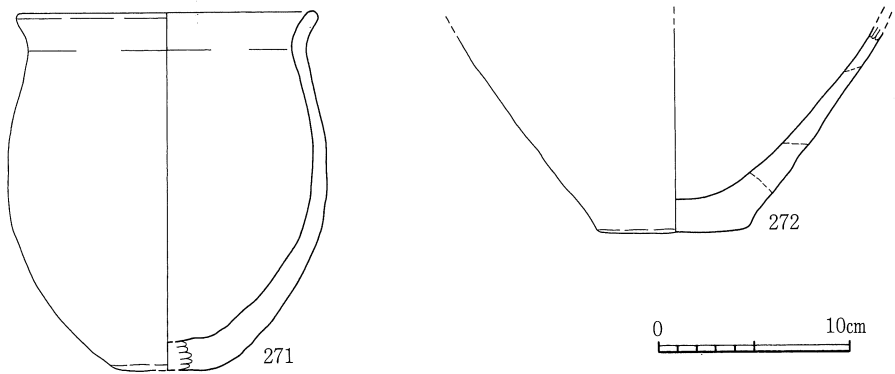
### 52号住居跡（第83図）

52号住居跡はB-3区の北西端、37号住居跡の東側コーナーとほぼ接する。一部を畑管によって切られていて、残りは悪い。規模は東西4.8m、南北4.2m、検出面からの深さは5cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-16°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.7m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、炉跡内には焼土層と炭層が堆積していた。南壁中程に径0.8×1.2m、深さ20cm前後の土坑をもつ。支柱穴は2本で、径40cm、深さ60cm前後、支柱穴間は2.9mである。

遺物はいずれも南側土坑上層からの出土である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉頃と思われる。



第 83 図 52 号住居跡実測図 (1 / 60)



第 84 図 52 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 4)

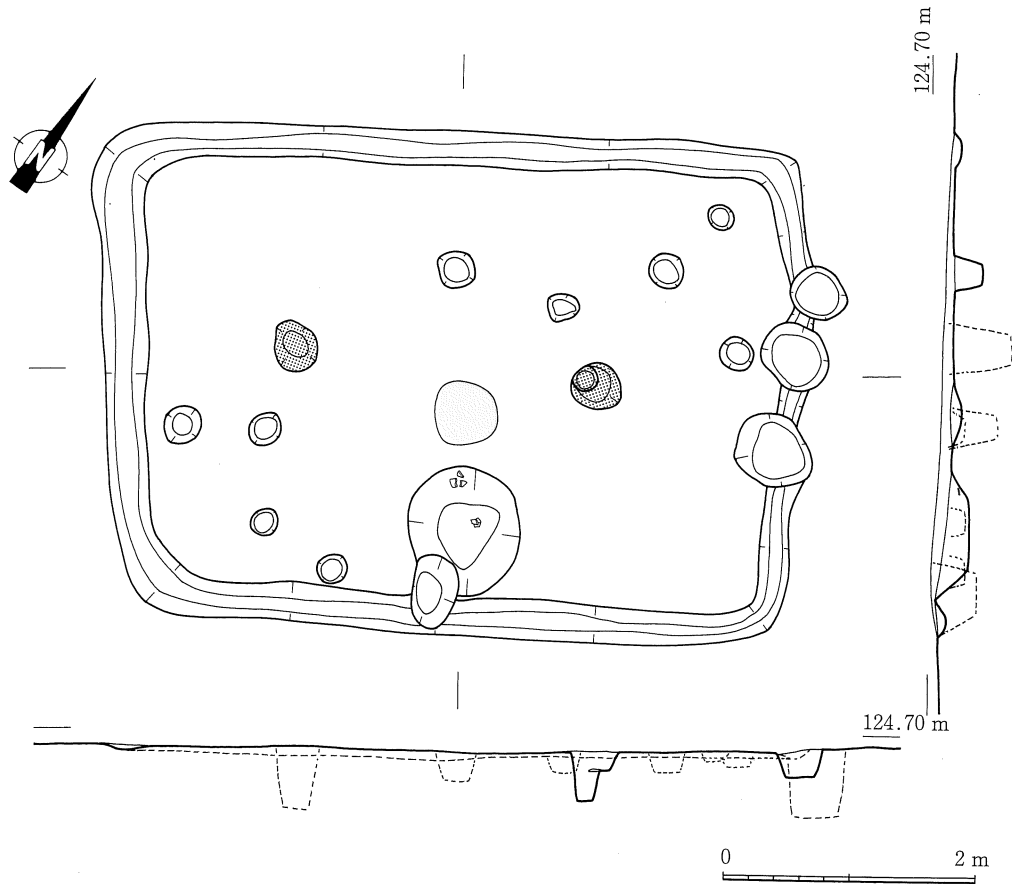
表 63 52 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
271	甕	(16.2)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 少	黒茶褐色	良好	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ ナデ	口縁 ヨコナデ ナデ			
		19.0									
		(5.0)									
272	甕	—	角閃石 多、 白色粒子、 石英、砂粒 荒	橙色	普通	粘土積上 げ	不明	不明			
		—									
		8.0									

53号住居跡（第85図）

53号住居跡はB-3区の北西端、52号住居跡の東約1mに位置する。規模は東西5.6m、南北4.0m、検出面からの深さは5cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-57°-Eを示す。各壁に沿って幅約25cm、深さ10cm前後の壁溝が巡る。住居跡内中央には径0.5m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化していた。南壁中程に径0.9m、深さ30cm前後の土坑をもつ。この土坑床のほぼ全面に小礫を敷き詰めていた。支柱穴は2本で、径40cm、深さ40～50cm前後、支柱穴間は2.4mである。

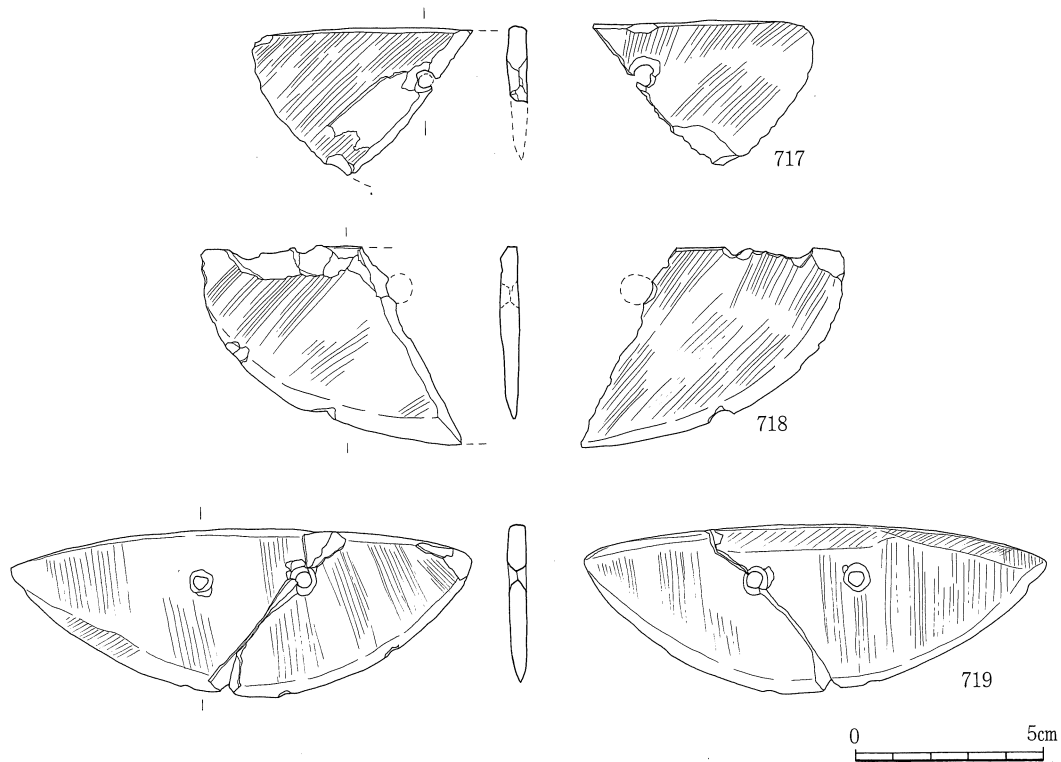
遺物は土坑内から土器片数点が出土したが、いずれも小破片であった。また、東側コーナー付近から石包丁3点（717～719）が一括して出土した。これら以外の遺物の出土は無いため、当住居跡の時期は明確ではない。



第85図 53号住居跡実測図（1/60）

表64 53号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
717	石包丁	粘板岩	39	(56)	5	11.6	
718	石包丁	結晶片岩	48	(50)	5	19.0	
719	石包丁	結晶片岩	122	44	4	26.7	

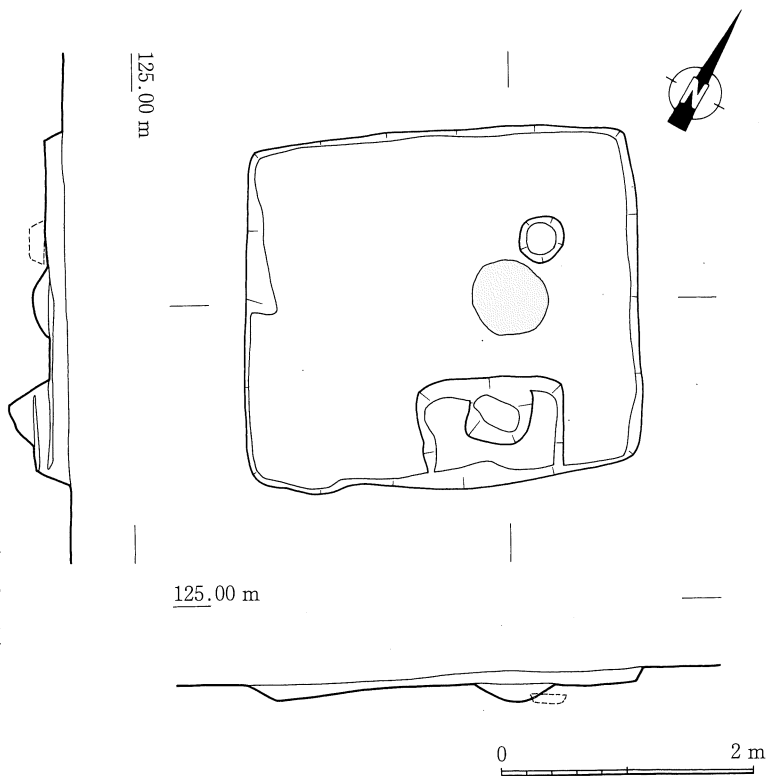


第 86 図 53 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 2)

54 号住居跡 (第 87 図)

54 号住居跡は B-3 区の北西、53 号住居跡の北 1 m 付近に位置する。規模は東西 3.1 m、南北 2.8 m でやや小型の住居跡である。検出面からの深さは約 10 cm で、平面形は長方形を呈している。主軸方位は N-30°-W を示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや東寄りには径 0.6 m、深さ 15 cm 前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部には焼土と炭が堆積していた。南壁中程に 0.8 × 1.1 m、深さ 20 cm 前後の土坑をもち、内部に径 0.5 m、深さ 20 cm 前後の柱穴が検出された。住居跡内からは柱穴 2 本の検出だけであった。主柱穴は不明である。

遺物は出土していない。このため当住居跡の明確な時期は不明である。

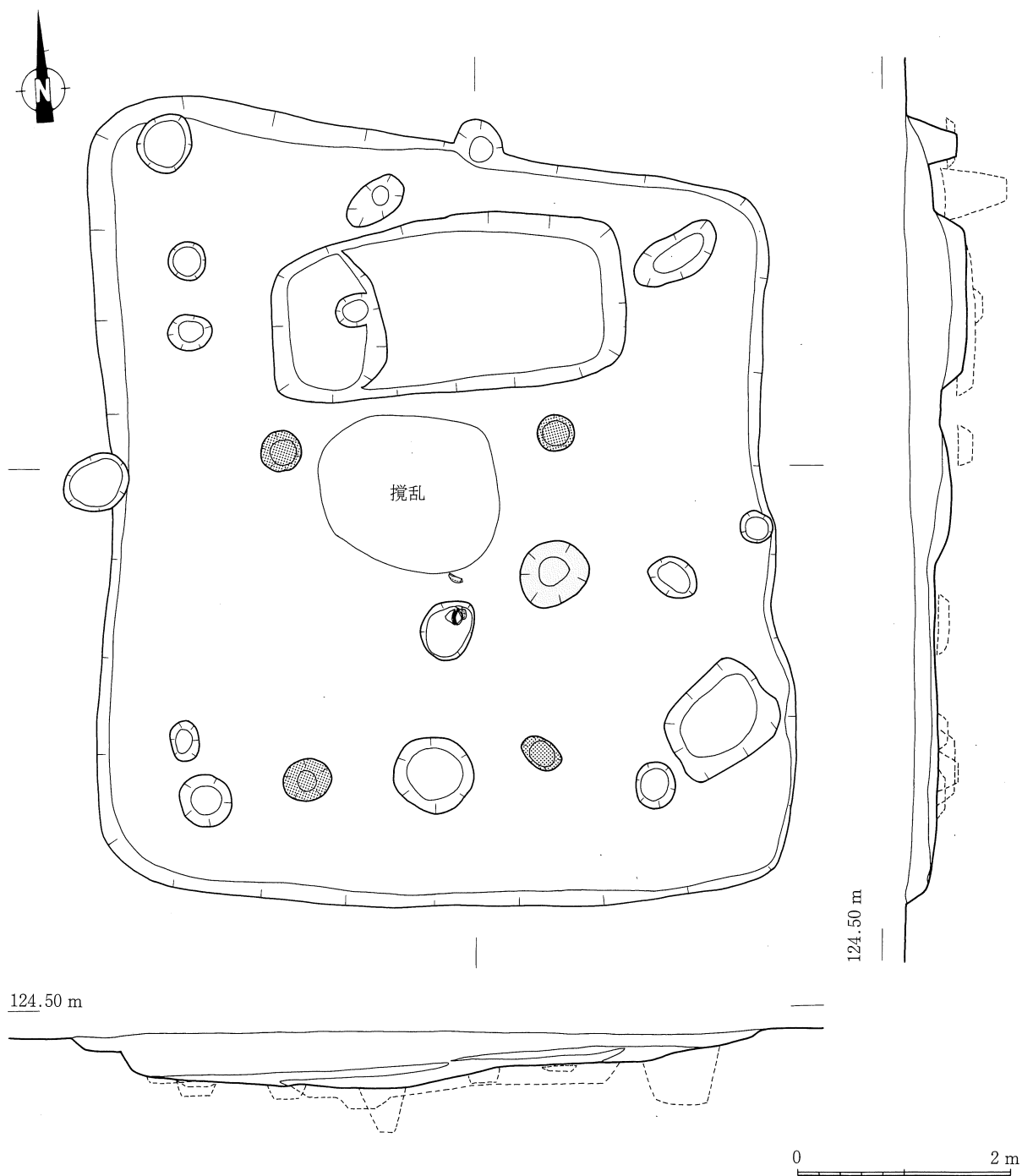


第 87 図 54 号住居跡実測図 (1 / 60)



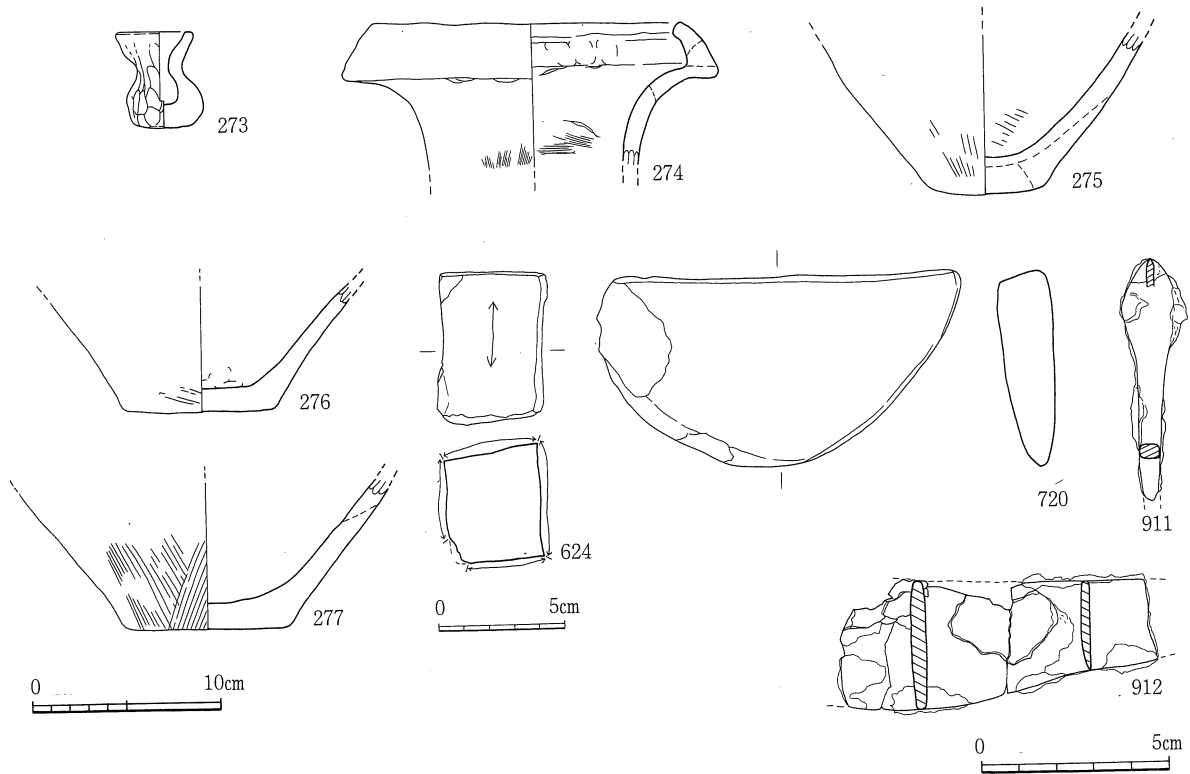
55号住居跡（第88図）

55号住居跡はB-2・3両区の北方向、54号住居跡の西2m付近に位置する。規模は東西6.2m、南北7.1m、検出面からの深さは20cmで、平面形はやや歪な長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや東寄りに径0.6m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。床面は赤変色し、内部に焼土と炭が堆積していた。炉跡周辺には掻き出したと思われる多量の焼土・炭層が堆積している。中央部分には攪乱を受けている。また、住居跡内北側には1.6×3.3m、深さ20cm前後の土坑がみられる。当住居跡廃絶後に構築されたもので、遺物等の出土は無く、時期は不明である。主柱穴は4本で径40cm、深さ20～40cm前後、主柱穴間は東西間2.6m、南北間3.0m前後である。



第88図 55号住居跡実測図（1/60）

遺物は中央付近を中心にかかなりの量が出土した。住居跡床面から幾分浮いて出土していたため、廃絶後の破棄遺物の可能性もある。720は石包丁未成品であり、砥石(624)とともに出土している。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期前葉～中葉頃と思われる。



第 89 図 55 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

表 65 55 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
273	壺	—	—	角閃石 少、 石英 少	淡黄色		手づくね	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	所々にすす 附着	
		5.1	—								
		2.3	—								
274	壺	16.2	—	角閃石 少、 石英 少、 赤色粒子 少、 砂粒 荒	淡黄色	普通	粘土積上 げ	口縁 指おさ え後ヨコナデ 不明	口縁 指おさ え後ヨコナデ 不明		
		—	—								
		—	—								
275	甕	—	—	石英 多、 砂粒 荒、 赤色粒子 多	外面 明赤 褐色・淡黄色 内面 淡黄色	普通	粘土積上 げ	不明	不明		
		(5.2)	—								
276	甕	—	—	角閃石 少、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	外面 橙色 内面 褐色	良好	粘土積上 げ	不明	不明		
		—	—								
		—	—								
277	甕	—	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	外面 黄褐 色 内面 褐色	良好	粘土積上 げ	ハケ目	ケズリ後ナデ		
		—	—								
		(8.6)	—								

表 66 55 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
624	砥石	硬質頁岩	61	41	45	(135.8)	
720	石包丁	砂岩	95	50	14	64.6	

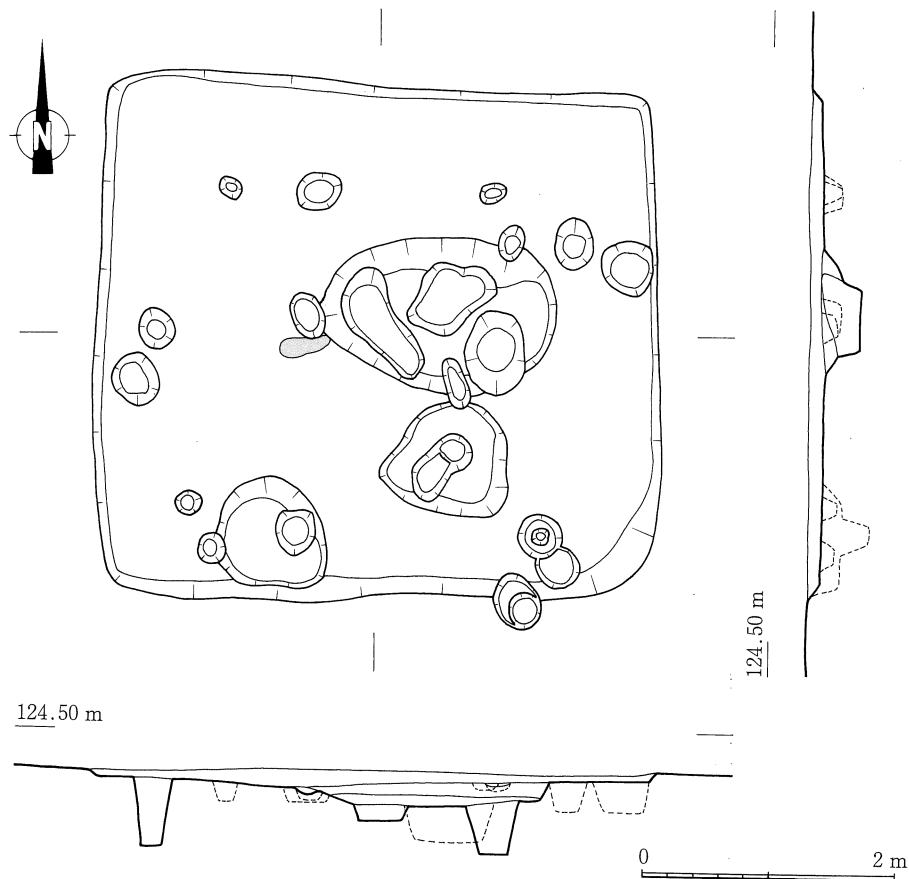
表 67 55 号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長(cm)	頭部長(cm)	刃幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	備考
911	鉄鏃	(6.3)	2.6	—	0.7	0.2	
912	不明鉄器	(8.4)	—	—	—	—	

### 56号住居跡（第90図）

56号住居跡はB-3区の北西端、55号住居跡の東3m付近に位置する。規模は東西4.46m、南北4.0m、検出面からの深さは7~10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はほぼ磁北を示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。炉跡は確認されなかったが、中央付近に焼土ブロックと楕円形の土坑が確認されたため、消滅した可能性がある。支柱穴は不明である。

遺物は床面から数点出土したが、いずれも小破片で当住居跡の時期を決定できる様な資料ではなかった。

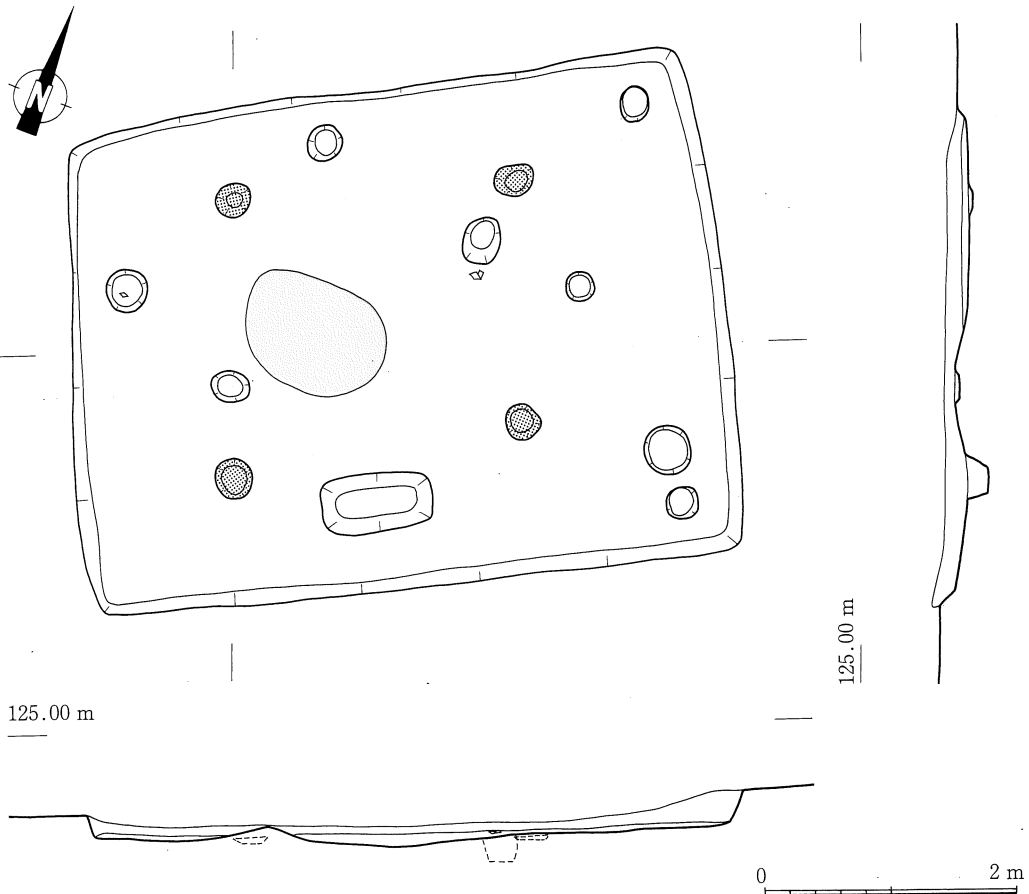


第90図 56号住居跡実測図（1/60）

### 57号住居跡（第91図）

57号住居跡はB-3区の中央からやや北寄りに位置する。規模は東西5.2m、南北3.9m、検出面からの深さは10~30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-21°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや西寄りには径0.8m、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化し、内部には焼土層と炭層が堆積していた。炉跡西側まで炭層が広がっている。南壁寄り中央付近に0.5×0.9m、深さ15cm前後の土坑が位置するが、当住居跡に伴うか不明である。支柱穴は4本で、径30cm、深さ10~25cm前後、支柱穴間は東西2.3m、南北が1.9mと2.2mである。

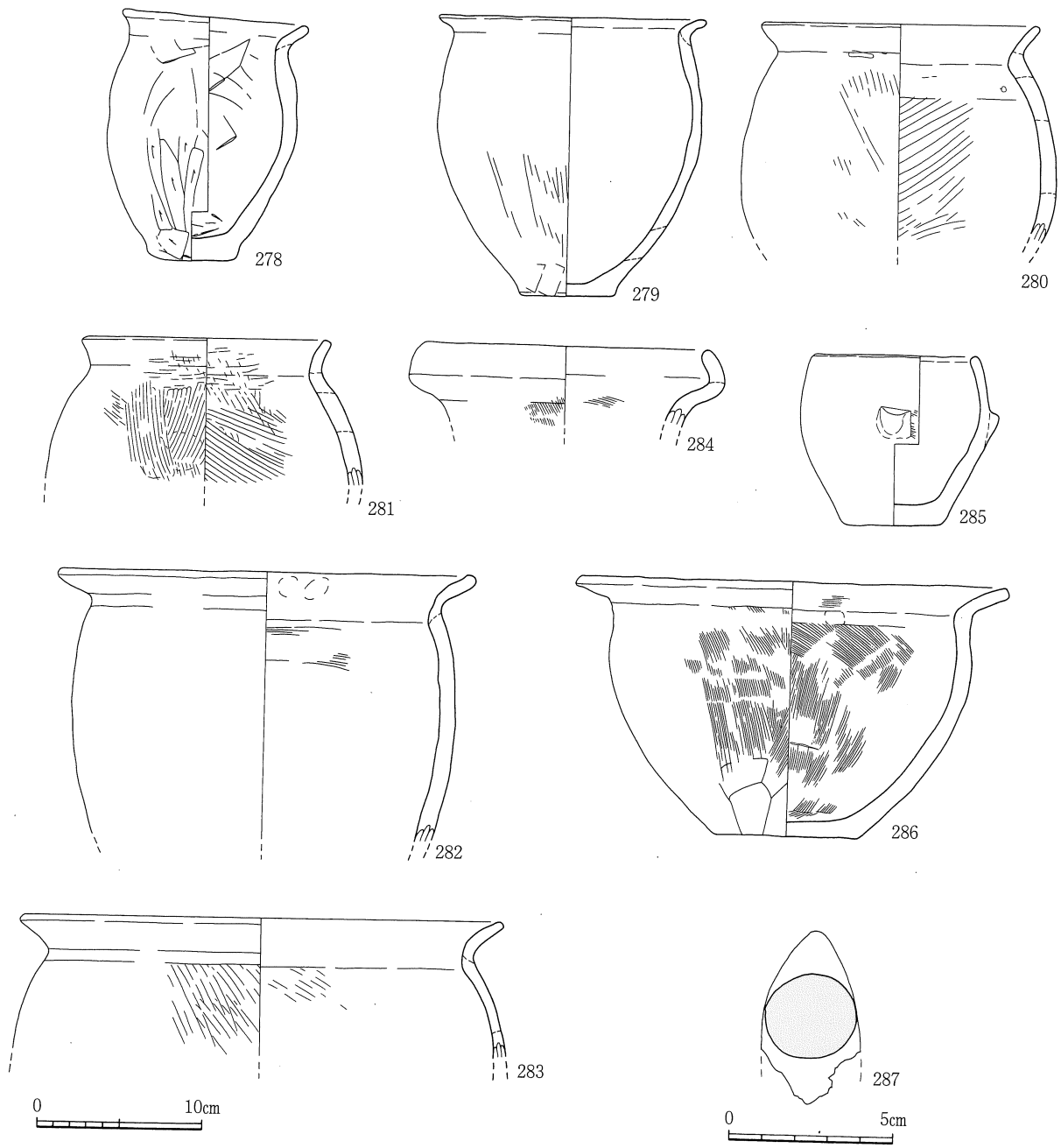
遺物は中央付近で比較的多量の土器片が出土したが、ほとんどが浮いた状態であり、当住居跡に伴う遺物は少ない。281の甕は床面付近からの出土で外面調整はタタキの後ハケ調整である。出土遺物からみた当住居跡の時期は明確ではないが弥生時代後期後葉頃と思われる。



第 91 図 57 号住居跡実測図 (1 / 60)

表 68 57 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
278	壺	10.8	石英 多、 白色粒子 少	浅黄色 暗灰黄色	普通	粘土積上げ	ケズリ後ハケ	ケズリ後ハケ	すす付着		
		14.3 ~ 15.2									
		5.4									
279	壺	(15.8)	角閃石 少、 赤色粒子 少、 石英 多、 白色粒子 多	外面 橙色 内面 褐色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		17.0									
		(5.8)									
280	壺	(16.4)	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 やや多	黒褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケ目			
		—									
		—									
281	壺	(14.2)	角閃石 やや多、 石英 やや多、 赤色粒子 やや多	橙色	普通	粘土積上げ	口縁 ハケ後 ヨコナデ ハケ目	口縁 ハケ後 ヨコナデ ハケ目			
		—									
		—									
282	甕	(24.6)	角閃石 少、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	黄褐色	普通	粘土積上げ	ケズリ後丁寧 なヨコナデ	ハケ後ヨコナ デ			
		—									
		—									
283	甕	(29.2)	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多	暗褐色	普通	粘土積上げ	ハケ目 ヨコナデ	ハケ痕			
		—									
		—									
284	壺	(17.2)	角閃石 多、 石英 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ ヨコナデ	ヨコナデ			風化著しい
		—									
		—									
285	壺	(9.4)	角閃石 少、 石英 多、 金雲母 少、 赤色粒子 少	暗灰黄色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		10.4									
		(5.6)									
286	鉢	(25.8)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	橙色	良好	粘土積上げ	口縁 ハケ後 ヨコナデ ケズリ後ハ ケ・ナデ	口縁 ハケ後 ヨコナデ ケズリ後ハケ			
		15.5									
		(9.0)									



第 92 図 57 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

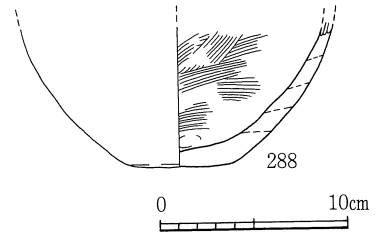
表 69 57 号住居跡出土土製品計測表

番号	器種	焼成	残存	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備考
287	投弾	良好	1/3欠	—	3.0	28.0	

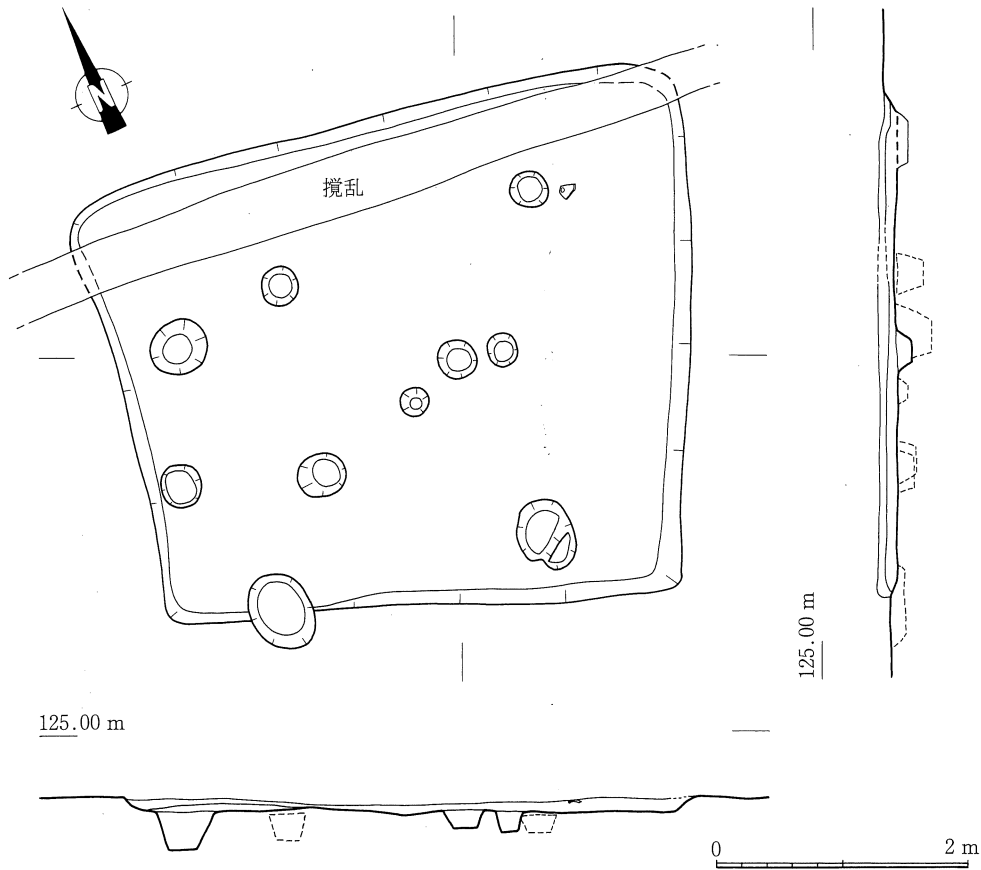
58号住居跡（第94図）

58号住居跡はB-3区の中央、57号住居跡の南2m付近に位置する。北側を東西に貫く畑管によって切られている。規模は東西4.1～4.8m、南北3.5～4.0m、検出面からの深さは5～10cmで、平面形は不定台形を呈している。主軸方位はN-24°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内からは炉跡と思われる掘り込みは検出できなかった。柱穴は数個検出したがいずれも主軸に乗っておらず、主柱穴を確定することはできなかった。

遺物は埋土中から土器数点が出土したがいずれも小破片であり、実測可能な土器は288の甕の下半分であった。この土器からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉～後葉頃と思われる。



第93図 58号住居跡出土遺物  
実測図（1/4）



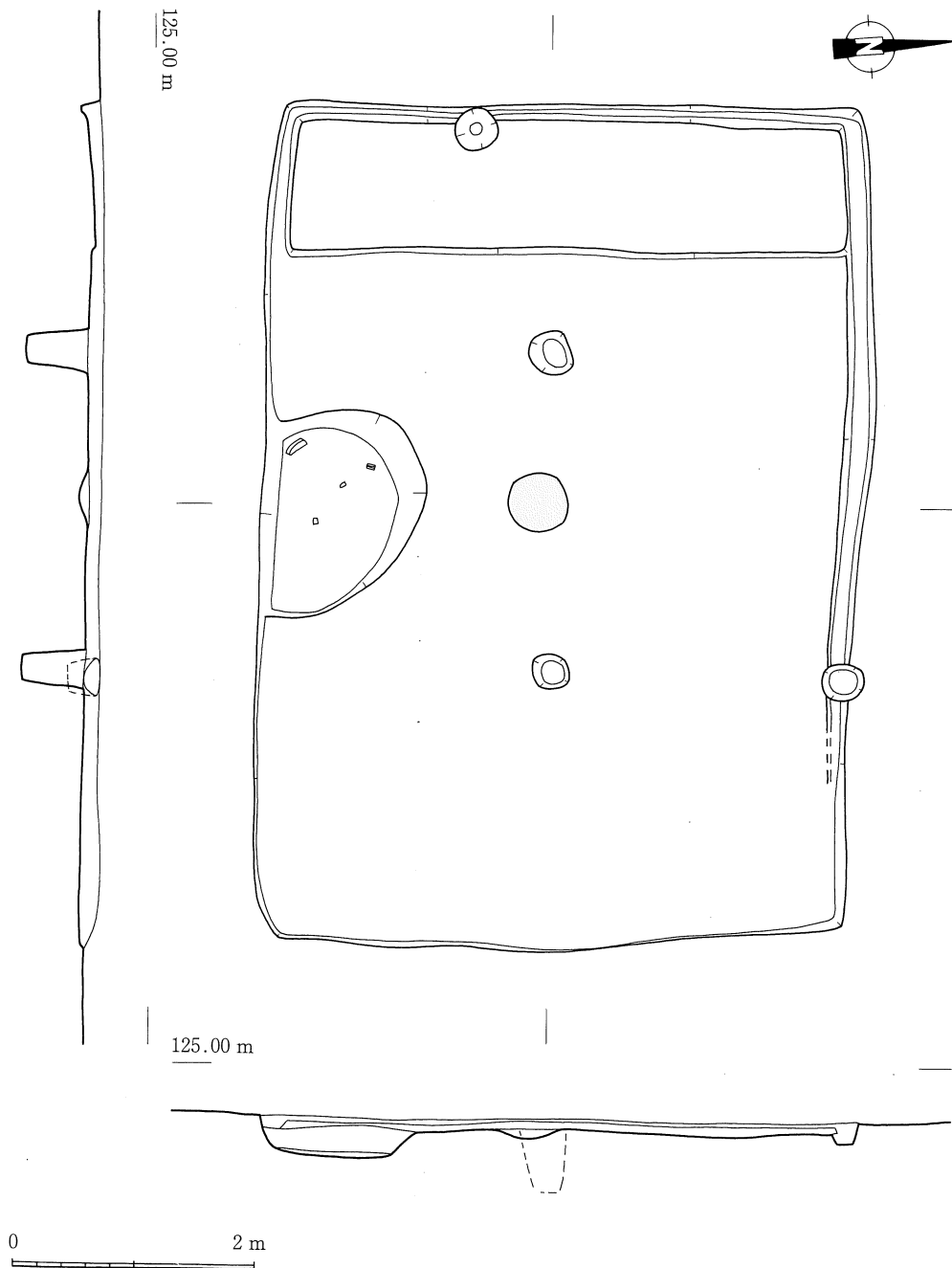
第94図 58号住居跡実測図（1/60）

表70 58号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
288	甕	—	—	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 少 赤色粒子 やや多	褐色	良好	粘土積上 げ	不明	ハケ目		
		—	—								
		5.5	—								

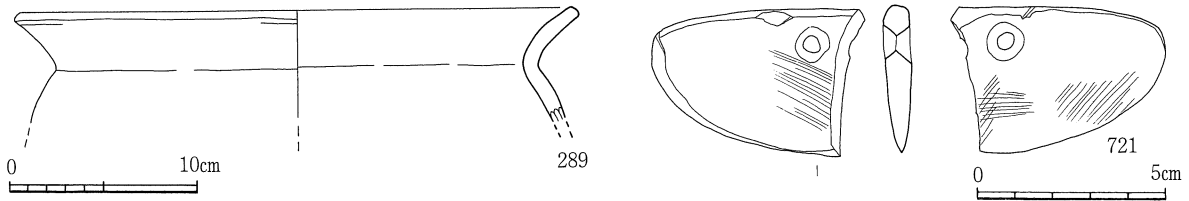
59号住居跡（第95図）

59号住居跡はB-3区の中央、58号住居跡の南1m付近に位置する。規模は東西7.0m、南北4.9m、検出面からの深さは5~15cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-6°-Eを示す。西壁に沿って幅約1.05m、高さ5cm前後のベッド状遺構が壁面と並行して施されている。ベッド状遺構の周囲と北壁の一部で幅0.2m、深さ8cm前後の壁溝が巡る。住居跡内中央には径0.5m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部に焼土層と炭層が堆積していた。南壁中程に径1.5m、深さ20cm前後の半円形の土坑をもつ。支柱穴は2本で、径40cm、深さ55cm前後、支柱穴間は2.6mである。



第95図 59号住居跡実測図（1/60）

住居跡内からの遺物の出土はほとんど無く、実測可能な遺物は土器1点(289)・石包丁1点(721)で、いずれも南側土坑からの出土である。出土遺物からみた当住居跡の時期は明確ではないが、およそ弥生時代後期前葉頃と思われる。



第96図 59号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

表71 59号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
289	甕	29.4	角閃石 少、 白色粒子 少、 赤色粒子 少、 石英 多	浅黄橙色 明褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									

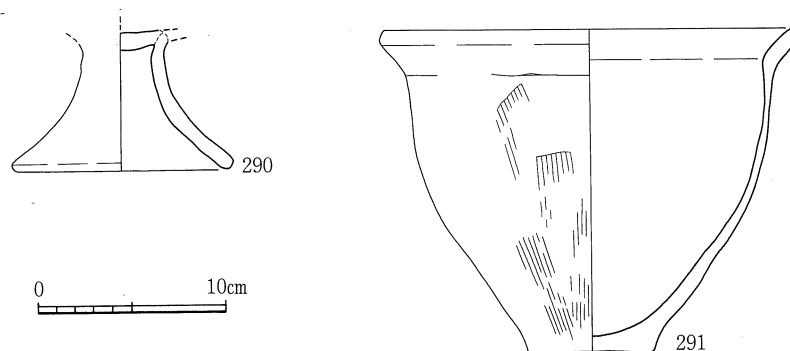
表72 59号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
721	石包丁	粘板岩	(50)	38	7	17.6	

#### 60号住居跡(第98図)

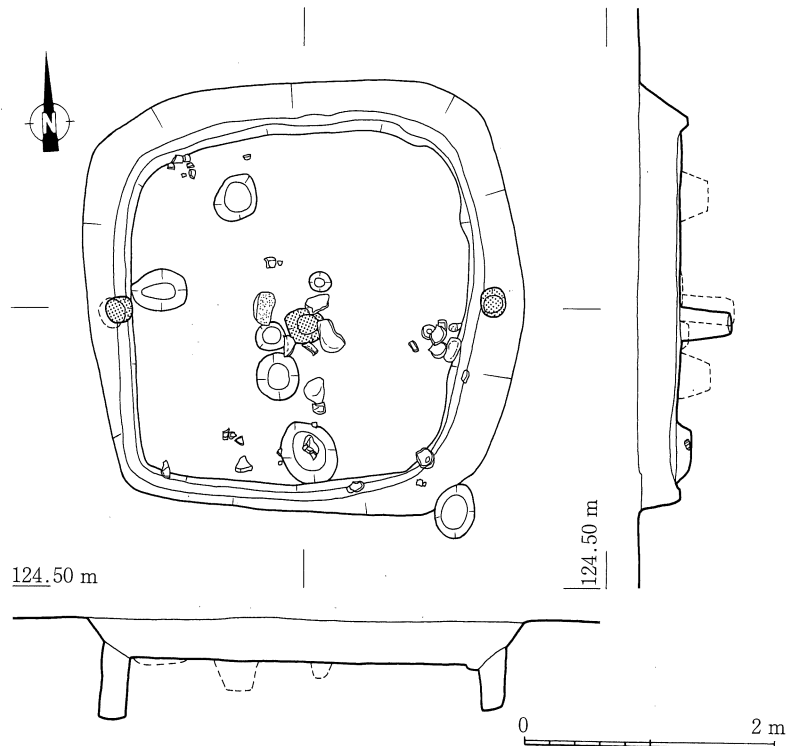
60号住居跡はB-3区の中央、59号住居跡の東2.5m付近に位置し、61号住居跡の北東コーナーを切っている。規模は東西3.4m、南北3.4m、検出面からの深さは30cmで、平面形は方形を呈した小型の竪穴である。主軸方位はN-3°-Wを示す。ベッド状遺構は付設されていない。壁溝は幅0.2~0.5m、深さ5cm前後で全周する。炉跡は検出されていない。中央に径35cm、深さ40cmの主柱穴と思われる柱穴が位置する。また、東西の壁中程に径20cm、深さ50cm前後の柱穴がそれぞれ位置する。これらの柱穴は掘り形の方が僅かに内側に向けられており、主柱穴の補助的役割をもつと思われる。

遺物は中央の主柱穴周辺と東壁中程から表面が赤変した礫数個と、290の台付き鉢の脚部が出土している。また、南壁側と北西コーナー付近で十数個の土器片が出土している。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後頃と思われる。



第97図 60号住居跡出土遺物実測図 (1/4)





第 98 図 60 号住居跡実測図 (1 / 60)

表 73 60 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
290	高坏	—	—	砂粒 多、 角閃石 多、 長石 多、 赤色粒子 少	黄褐色	良好	円盤充填	不明	ヨコナデ		
		11.8	底径								
		(22.4)									
291	鉢	(22.4)	—	砂粒 少、 角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	黄褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ 丁寧なナデ		
		—	—								
		6.7	—								

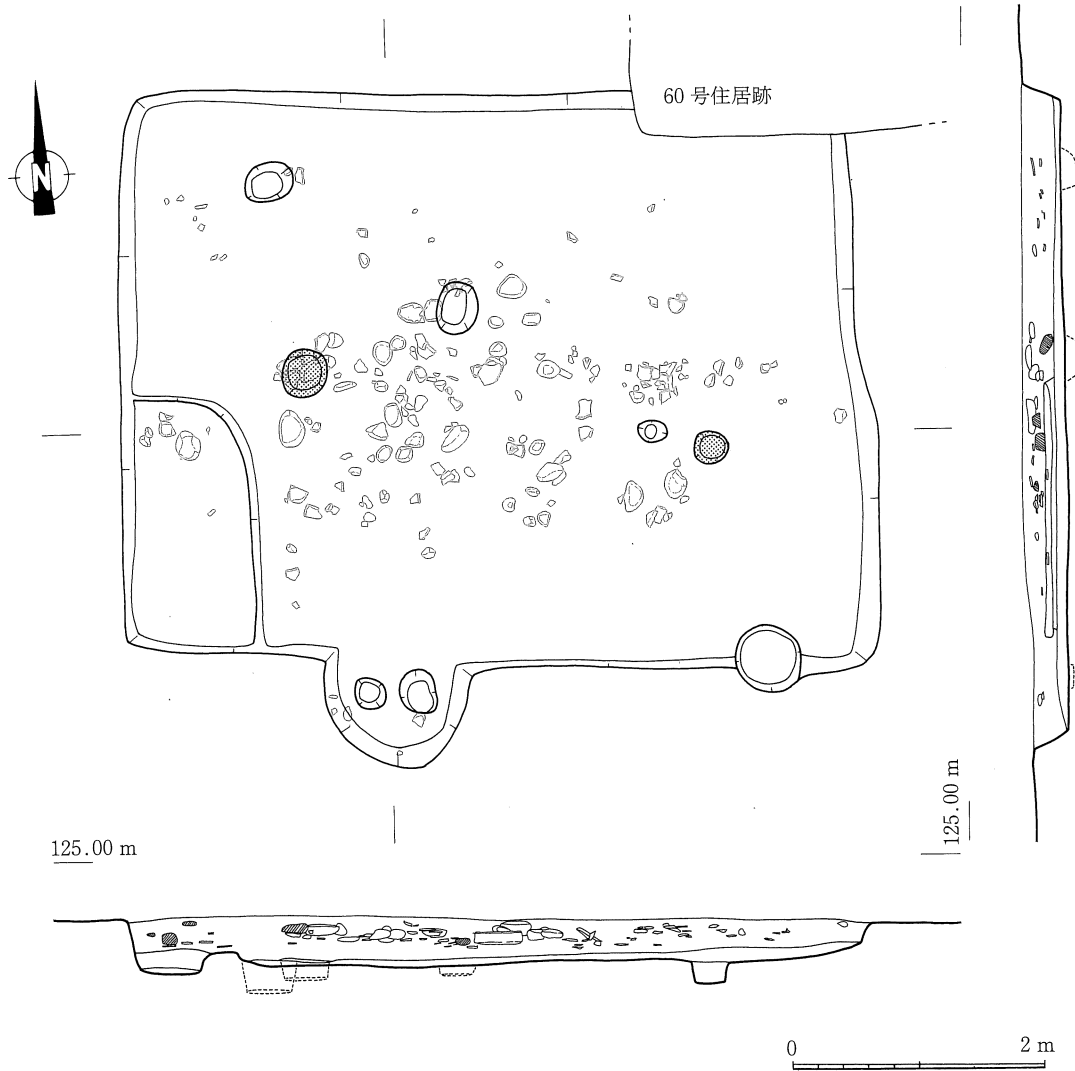
61 号住居跡 (第 99 図)

61 号住居跡は B-3 区の中央からやや南に位置し、北東コーナーを 60 号住居跡に切られている。また、西壁付近に掘立柱建物跡が位置する。規模は東西 5.9 m、南北 4.5 m、検出面からの深さは 20 ~ 30cm で、平面形は長方形を呈している。主軸方位は N-3°-E を示す。南西コーナー部分に幅 0.9 m、長さ 1.6 m、高さ 10cm 前後のベッド状遺構を付設している。壁溝は付設されていない。炉跡は確認できなかった。主柱穴は 2 本と考えられるが、主軸にはのっていないため断定できない。径は 30cm、深さ 20cm 前後、主柱穴間は 3.3 m である。

遺物は住居跡中央付近を中心に径 20 ~ 30cm 前後の扁平礫とともに比較的多量の土器片が出土している。しかし、ほとんどが床面から 10cm 前後浮いて出土したため、住居跡廃絶後の破棄遺物と考えられる。このため、当住居跡の時期は明確ではないが、切り合い関係や出土遺物等からみて弥生時代後期前葉 ~ 中葉前後と思われる。第 100 図の遺物は 292 と 295 が中央やや北から並んで出土、293 の壺の口縁は南東側から、胴部下半は中央付近から出土した。破棄遺物の時期は概ね弥生時代後期前半 ~ 中葉であろうと思われる。

61号住居跡南側遺構（第101図）

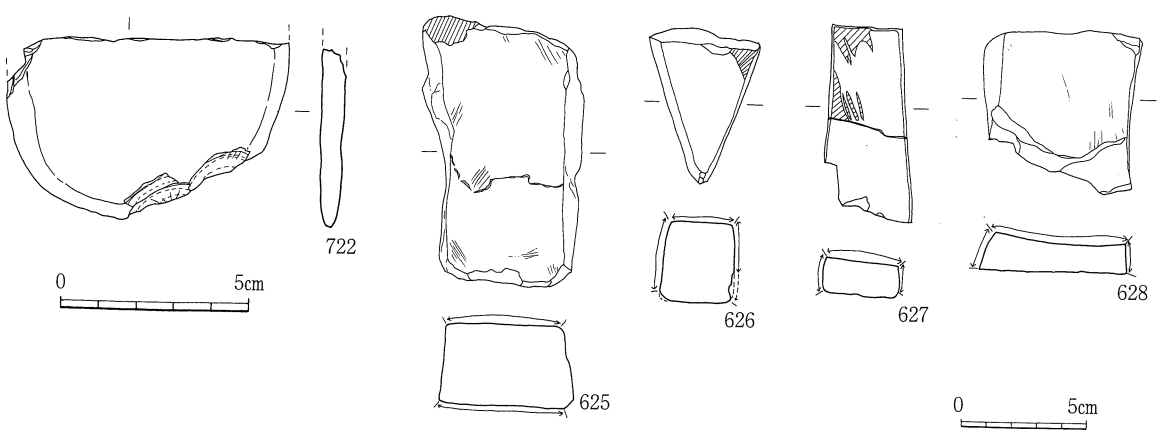
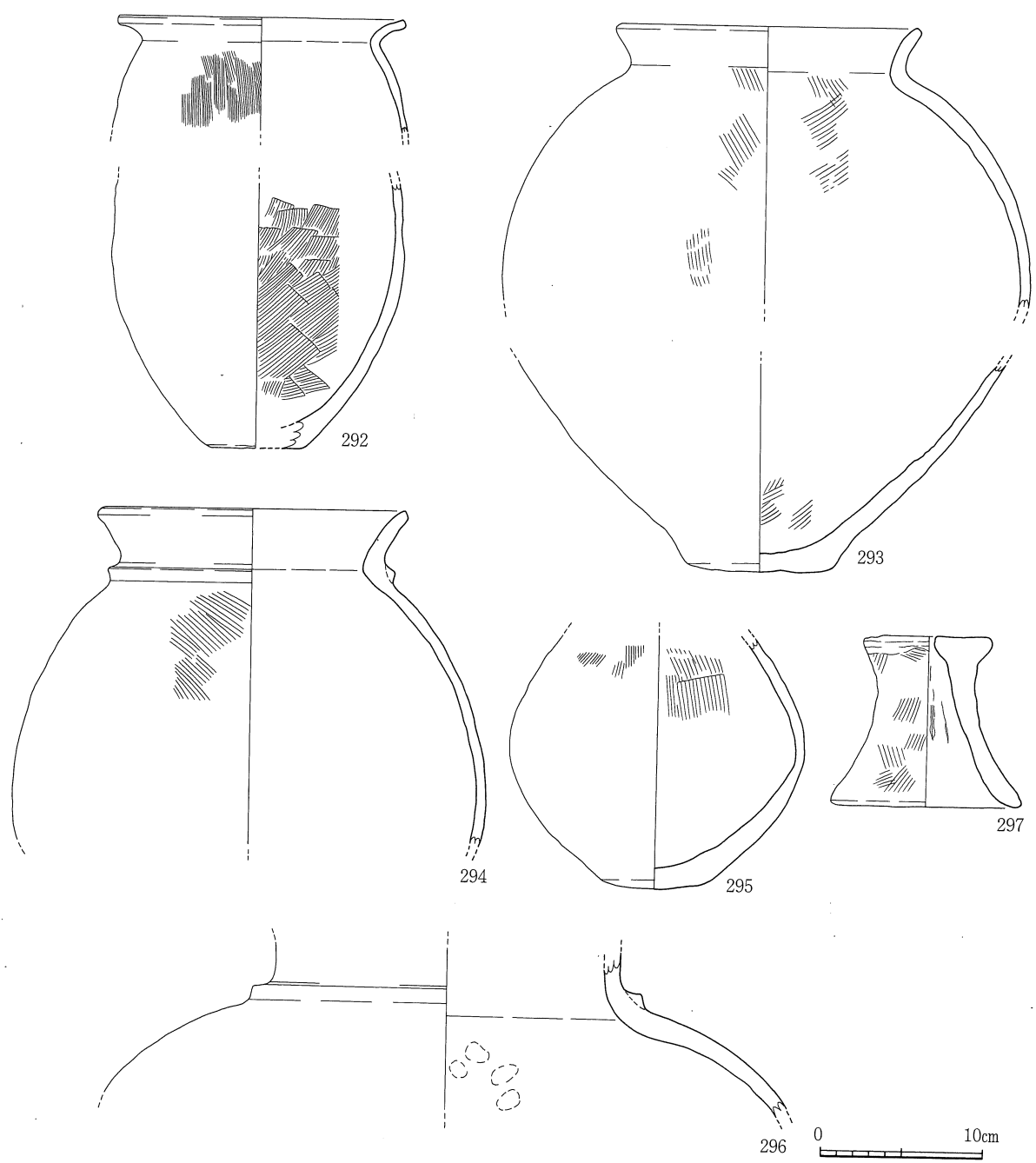
柱穴は61号住居跡南東コーナー付近の南壁上に、住居跡を切り込んで位置する。柱穴の規模は径52cm、深さ45cmでほぼ垂直に掘り込んでいる。床面はフラットである。床面上には短辺27cm、長辺31cm前後、高さ10cm前後のほぼ三角形をした扁平河原石を敷いている。この石の上に胴部下半を打ち欠いた甕が、東方向に傾いて乗っている。柱穴内には甕の底部破片等の出土はなく、故意的に打ち欠いて埋置したものである。この甕の時期は弥生時代終末頃であろう。



第99図 61号住居跡実測図（1/60）

表74 61号住居跡出土石器計測表

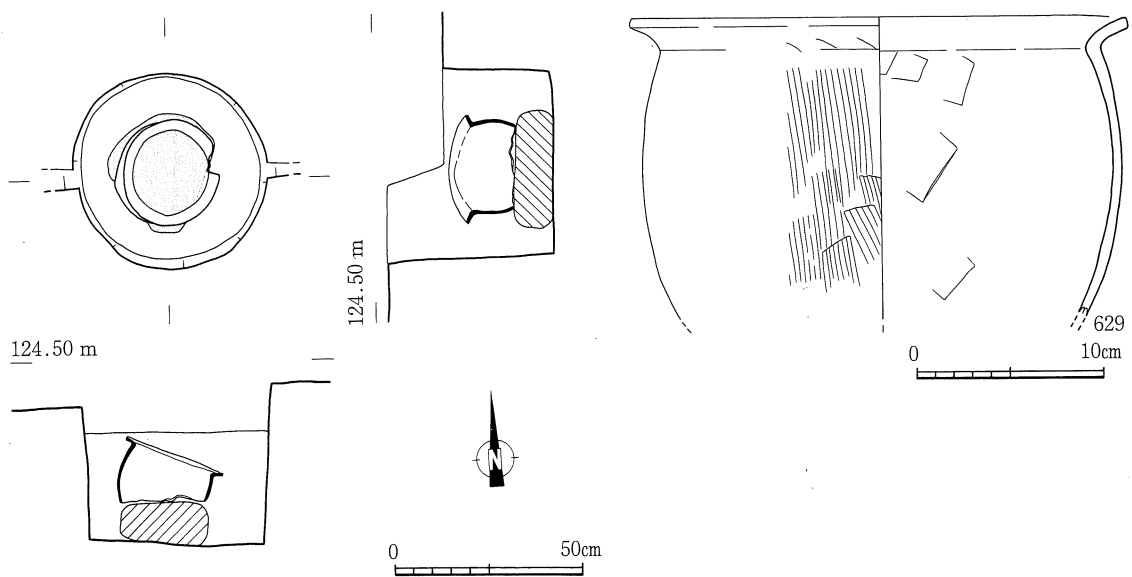
番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
722	石包丁	結晶片岩	73	(47)	6	38.8	
625	砥石	硬質頁岩	101	63	32	336.6	
626	砥石	硬質頁岩	(61)	(44)	(32)	(96.0)	
627	砥石	硬質頁岩	77	31	14	64.9	
628	砥石	硬質頁岩	64	59	15	83.1	



第 100 图 61 号住居跡出土遺物実測図 (1/4 · 1/2 · 1/3)

表 75 61号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
292	甕	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 多	外面 淡黄褐色 内面 黒灰色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	不明 (剥離)	ヨコハケ目		
		—	—								
		6.2	—								
293	壺	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 乳白色粒子 少、 金雲母 微、 長石 少	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ タテハケ目		
		ほぼ 33.6前後	—								
		9.0	—								
294	壺	(19.0)	—	砂粒 非常に多、 角閃石 多、 角閃石 少	淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ		一条三角突帯
		—	—								
		—	—								
295	壺	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 多、 長石 少	淡黄灰白色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	タテハケ目	タテハケ目		
		—	—								
		(6.6)	—								
296	壺	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 角閃石 少、 長石 少	淡黄白色	やや不良	粘土積上げ	不明 (剥離)	ナデ		一条三角突帯
		—	—								
		—	—								
297	支脚	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 長石 少	淡黄褐色	良好		タテハケ目	ナデ		
		—	—								
		(11.8)	—								



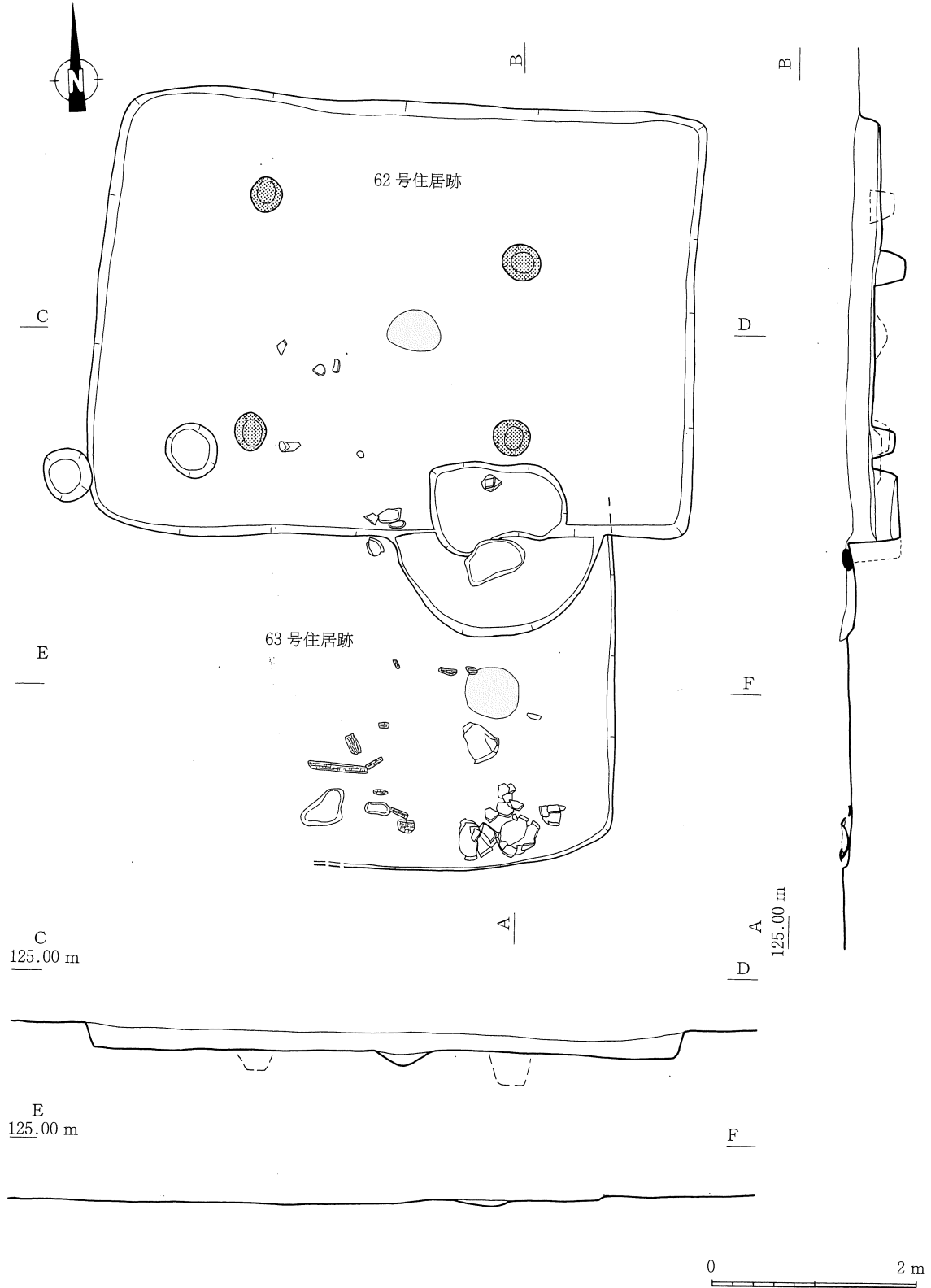
第 101 図 61号住居跡南側遺構及び出土遺物実測図 (1/20・1/4)

表 76 61号住居跡南側遺構出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
298	甕	26.6 ~ 27.0	—	砂粒 少、 長石 少、 角閃石 少	外面 黒褐色 内面 明黄褐色	良好	粘土帯積 み上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ヘラナデ	すず付着一 二次加熱あり	南柱穴
		—	—								
		—	—								

62・63号住居跡（第102図）

62・63号住居跡はB-3区の中央からやや南東寄り、60号住居跡の東側4m付近に位置する。63号住居跡が先行し、62号住居跡が63号住居跡の北側部分を切って構築している。

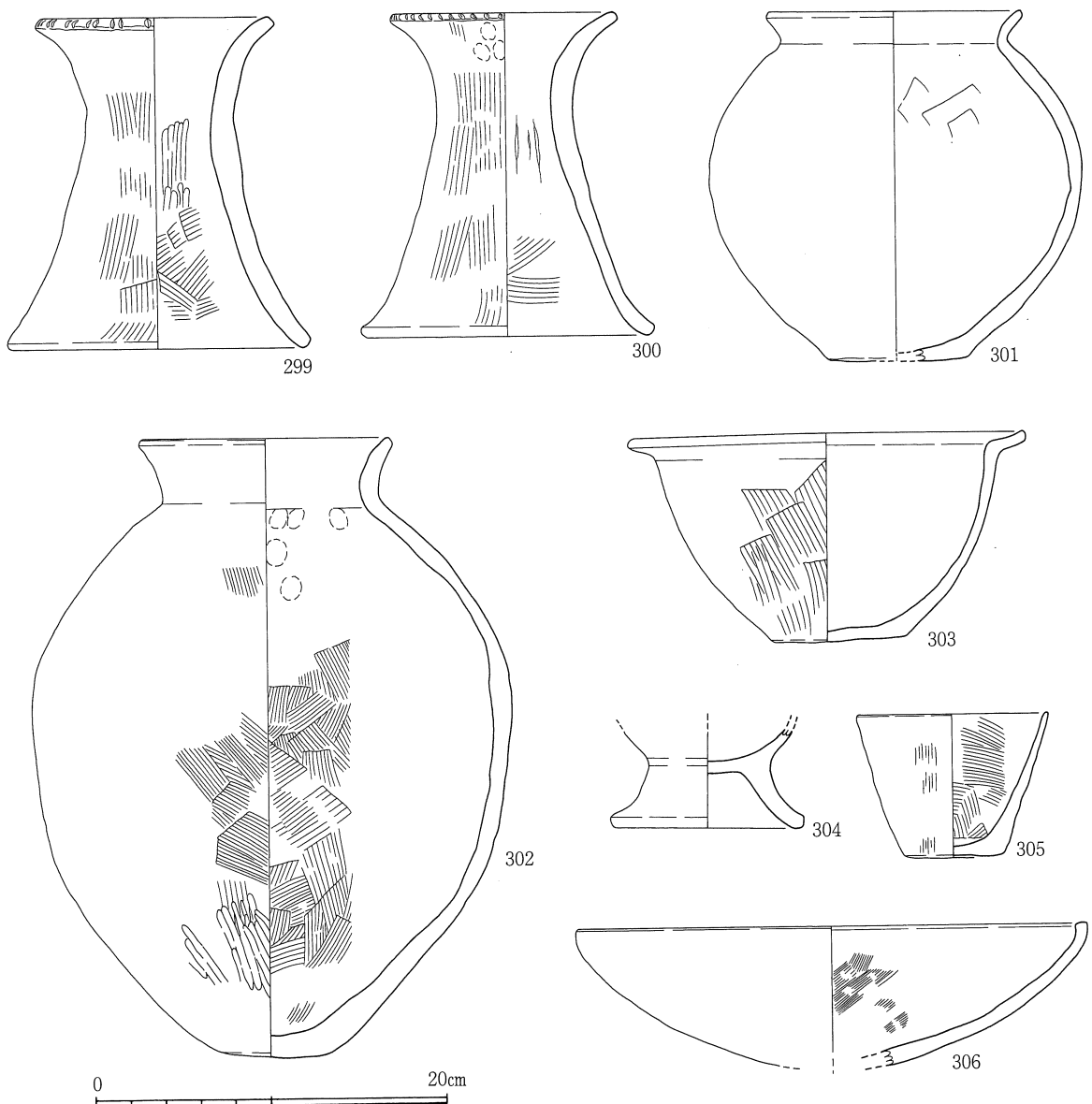


第102図 62・63号住居跡実測図（1/60）

62号住居跡の規模は東西5.86m、南北4.2m、検出面からの深さは20～30cmで、平面形は長方形を呈し、主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.4～0.5m、深さ15cm前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化、内部には焼土層と炭層が堆積していた。炉跡東側には掻き出したと思われる多量の焼土・炭が堆積している。南壁東側には径0.7×1.3m、深さ30cm前後の土坑をもつ。この土坑の外側には1.0×2.0m、深さ10cm前後の半円形の張出し部をもつ。支柱穴は4本で、径40cm、深さ20～30cm前後、支柱穴間は東西間が2.6m、南北間が西側2.3m、東側1.8mのやや歪んだ柱穴配置である。

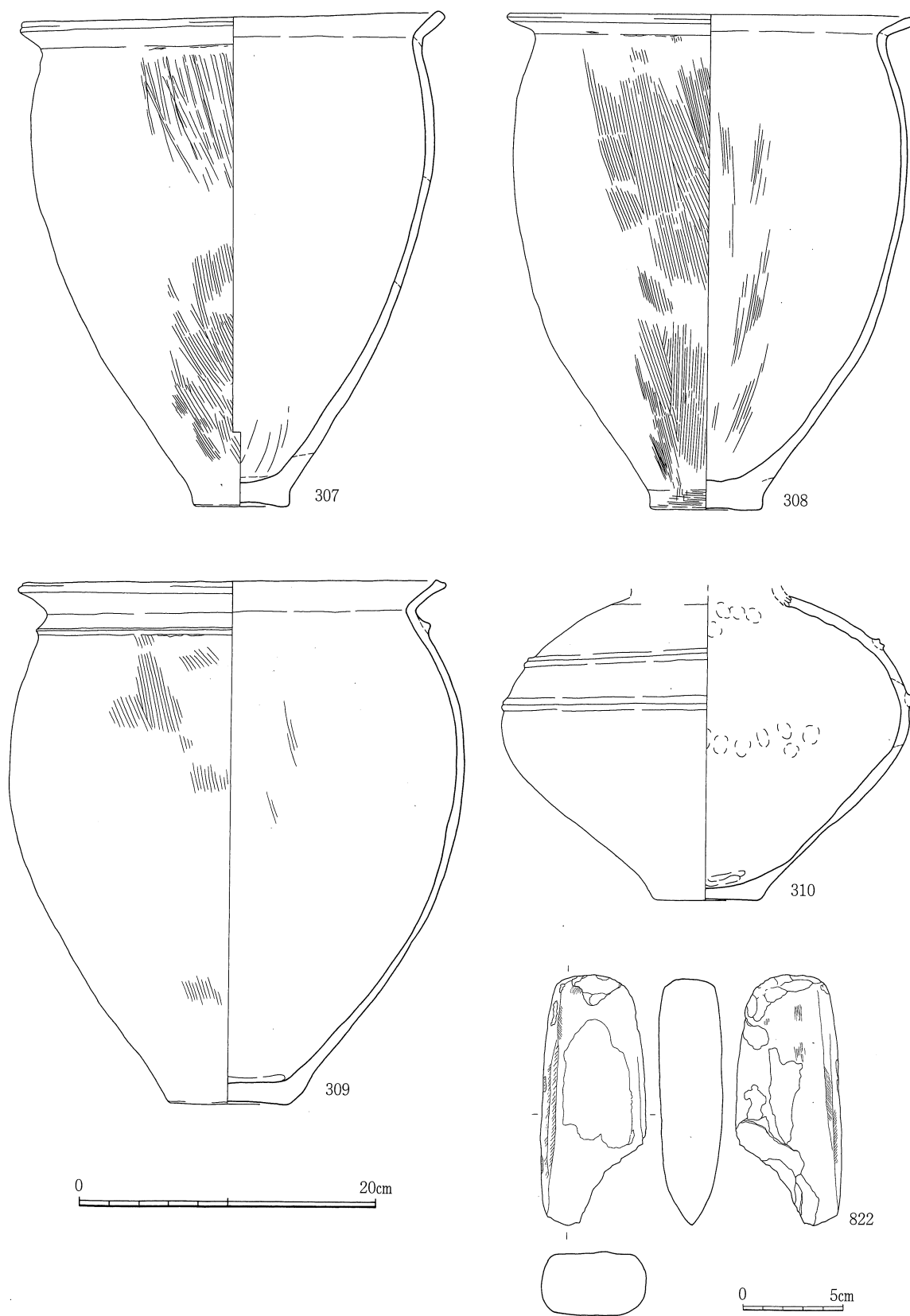
遺物は埋土中や土坑から10点程が出土した。299・300・302・304・306は埋土中からの出土で当住居跡には伴わない可能性をもつ。301の壺は土坑東側の南壁寄り出土、303の鉢は301の南側・住居跡外の南壁沿いで出土、305の塊は土坑内から出土した。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉頃と思われる。

63号住居跡は62号住居跡の南側に位置する。62号住居跡に切られ、また、西側は残りが悪く消滅している。規模は残存で東西3+αm、南北3.2+αm、検出面からの深さは0～3cmで、非常に残りが悪い。平面形は方形或いは長方形を呈し、主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・



第103図 62号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

壁溝等は確認されていない。住居跡内中央から東寄りに径0.5 m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化、内部には焼土層と炭層が堆積していた。炉跡西側には炭化木が確認された。主柱穴は不明である。



第104図 63号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

遺物は炉跡南と東南コーナー西側から出土した。308 の甕が炉跡南側出土、307・309 の甕と 310 の壺がコーナー西側から一括して出土した。いずれも残りがよくほぼ完形に近い。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代中期後半～後期前半頃と思われる。

表 77 62号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
299	器台	(13.4)	砂粒 少、 長石 多、 角閃石 少、 石英 少	明黄褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	ハケ目	赤変 二次加熱あり		
		18.9									
		19.2									
300	器台	(13.0)	砂粒 少、 角閃石 多、 黒曜石 少、 石英、 長石 非常に多	明黄褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	ナデ ハケ目	赤変 二次加熱あり		
		18.4									
		(16.8)									
301	壺	(14.6)	砂粒 非常に多、 角閃石 多、 長石 多、 赤色粒子 多	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ナデ			
		19.9									
		—									
302	壺	14.5	砂粒 少、 長石 多、 角閃石 多	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	ハケ目 ミガキ	ハケ目			
		—									
		6.0～6.5									
303	鉢	22.7	砂粒 多、 長石 多、 角閃石 少	淡黄白色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ナデ	黒変～赤変 —二次加熱あり		
		11.9									
		7.8									
304	脚付き鉢	—	砂粒 少、 長石 非常に多、 角閃石 多、 赤色粒子 少	淡黄赤褐色	良好		ヨコナデ	ヨコナデ	外面 赤変 内面 黒変 —二次加熱あり	坏部剥離顕著	
		—									
		11.0									
305	埴	(11.0)	砂粒 少、 赤色粒子 少、 長石 多、 角閃石 多、 灰色粒子 少	明黄褐色	良好		タテハケ目	ヨコハケ目			
		—									
		5.8									
306	高坏	(29.2)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 少	淡黄褐色	良好 黒斑		不明	ハケ目			
		—									
		—									

表 78 63号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
307	甕	27.9	角閃石 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	灰白色 赤橙色 黒色		粘土積上げ	ハケ目	ケズリ後ナデ			
		32.5～33.2									
		6.4									
308	甕	(26.8)	角閃石 少、 白色粒子 多	灰白色 暗灰黄色 混合	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明			
		33.3									
		(7.2)									
309	甕	27.7	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多	橙色 黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ハケ?	すず付着		
		34.9～35.2									
		7.8									
310	壺	—	角閃石 やや多、 白色粒子 多、 石英 少、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	不明		二ヶ所にM字型 突帯あり	
		—									
		7.1									

表 79 63号住居跡出土石器計測表

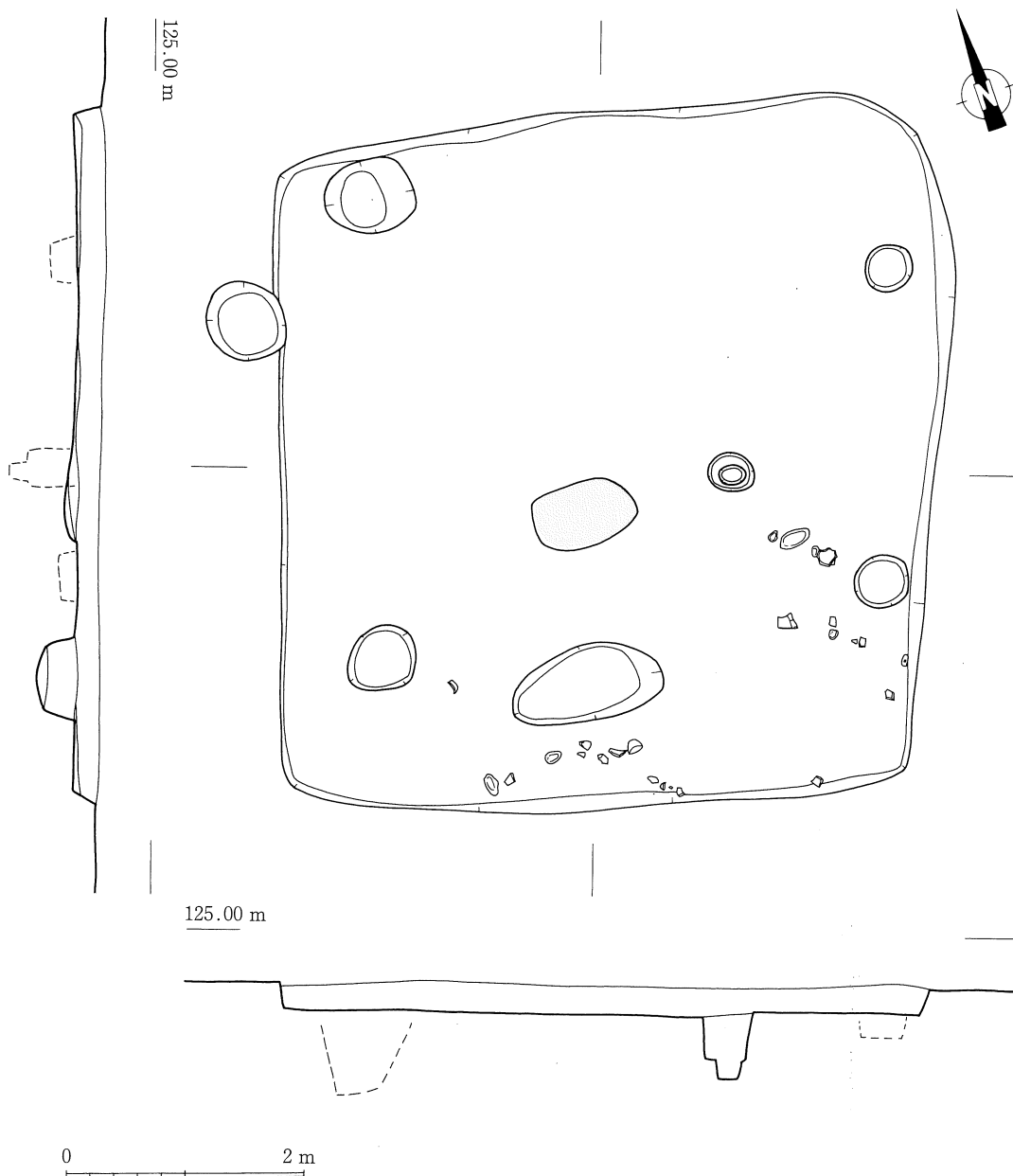
番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
822	蛤刃石斧	頁岩質砂岩	125	53	33	365.9	



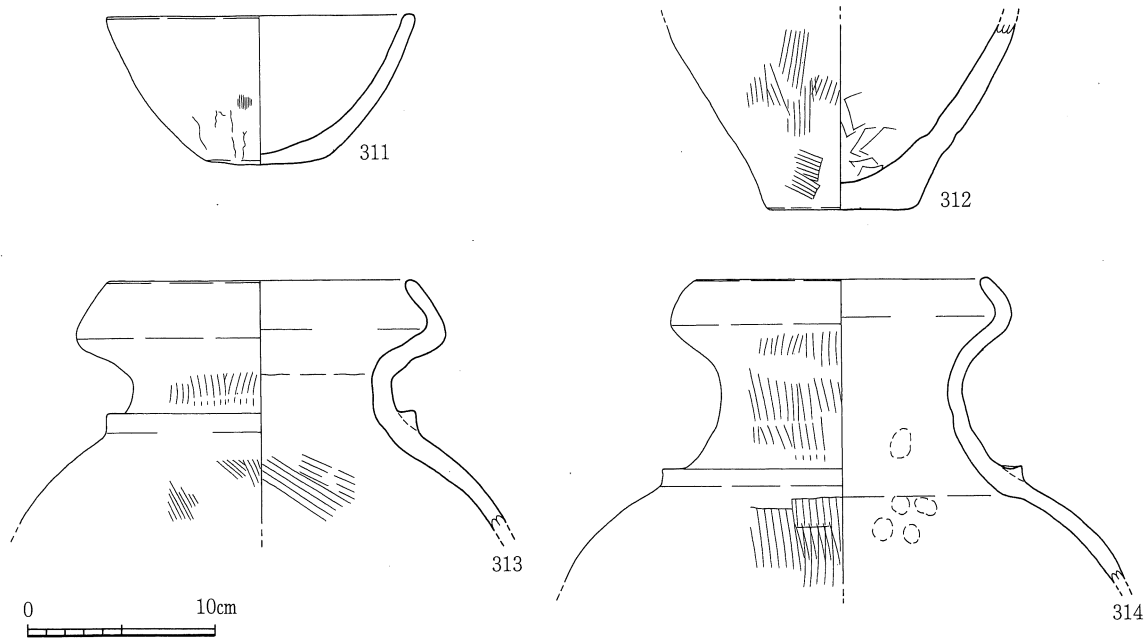
64号住居跡（第105図）

64号住居跡はB-3区の東側、62号住居跡から約4.5m東に位置する。規模は東西5.45m、南北5.85m、検出面からの深さは20cmで、平面形はやや歪な長方形を呈している。主軸方位はN-20°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.55×0.85m、深さ10cm前後の楕円形をしたレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部に焼土層と炭層が堆積していた。住居跡内の各壁側からは柱穴4本を検出したが、いずれも側壁に近く支柱穴とは成りえないと考える。また、炉跡東側で柱穴1本を検出したが、西側は検出できなかった。このため支柱穴は不明である。

遺物は南東コーナー北側と、南壁中程付近で十数点の土器片が出土した。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期前葉頃と思われる。



第105図 64号住居跡実測図（1/60）



第106図 64号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

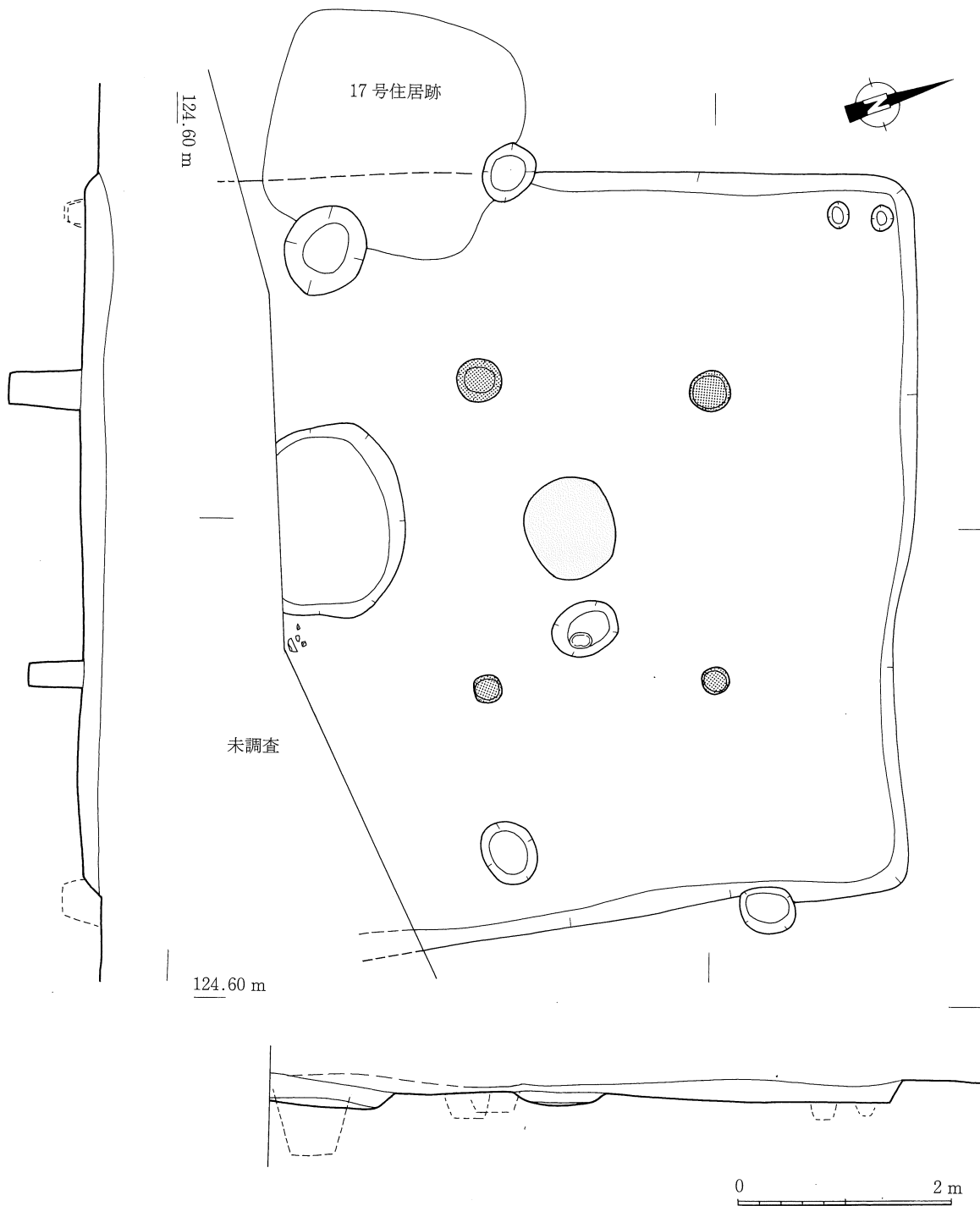
表80 64号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
311	鉢	16.4	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 石英 多	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タデハケ目	口縁 ヨコナデ 不明 (剥離)		
		6.0~6.8									
		—									
312	甕	—	—	砂粒 少、 角閃石 少、 長石 少、 石英 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	ヘラナデ		
		8.0									
		—									
313	壺	(16.4)	—	砂粒 少、 角閃石 少、 長石 多、 赤色粒子 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケナデ		
		—									
		—									
314	壺	(15.6)	—	砂粒 非常に多、 石英 多	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ヨコハケ	口縁 ヨコナデ 不明 (剥離)		一条三角突帯
		—									
		—									

65号住居跡 (第107図)

65号住居跡はB-3区の南側に位置する。西壁の南側部分を51号土坑に切られている。また、南壁部分は市道付け替え道下のため、一部未調査である。規模は東西6.4m、南北6.3+αm、検出面からの深さは約20cmで、平面形はほぼ方形を呈していると思われる。主軸方位はN-19°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.9m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部に焼土層と炭層が堆積していた。南壁中程と考えられる位置に径1.7m程、深さ15cm前後の土坑をもつ。支柱穴は4本で、径30~50cm、深さ30~50cm前後、支柱穴間は東西間2.8m、南北間2.2mである。

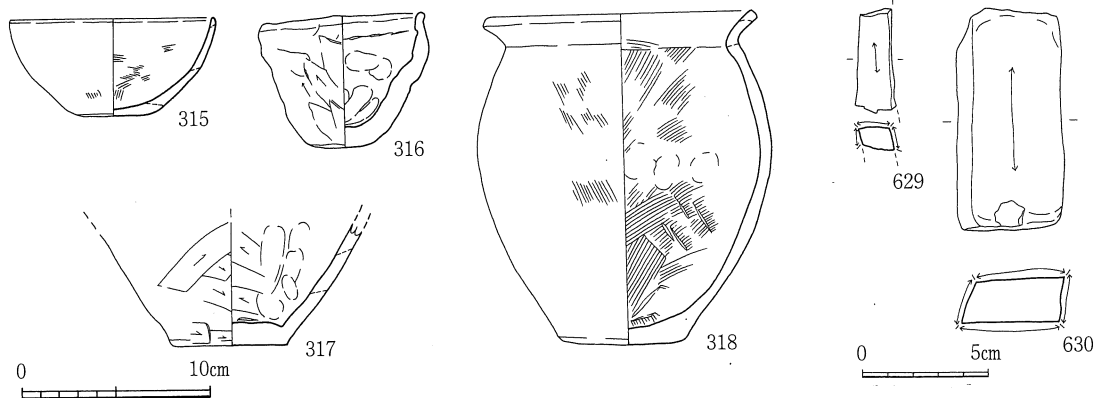
遺物は南側土坑・柱穴等から僅かながら出土した。315の鉢は17号土坑の側から、316の手握ね土器は南側土坑内から、317の甕底部は南西の支柱穴内から、318の甕は南側土坑の上面からそれぞれ出土した。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後頃と思われる。



第 107 図 65 号住居跡実測図 (1 / 60)

表 81 65 号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
629	砥石	頁岩質砂岩	40	12	(9)	(9.4)	
630	砥石	硬質頁岩	88	41	17	112.1	



第 108 図 65 号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

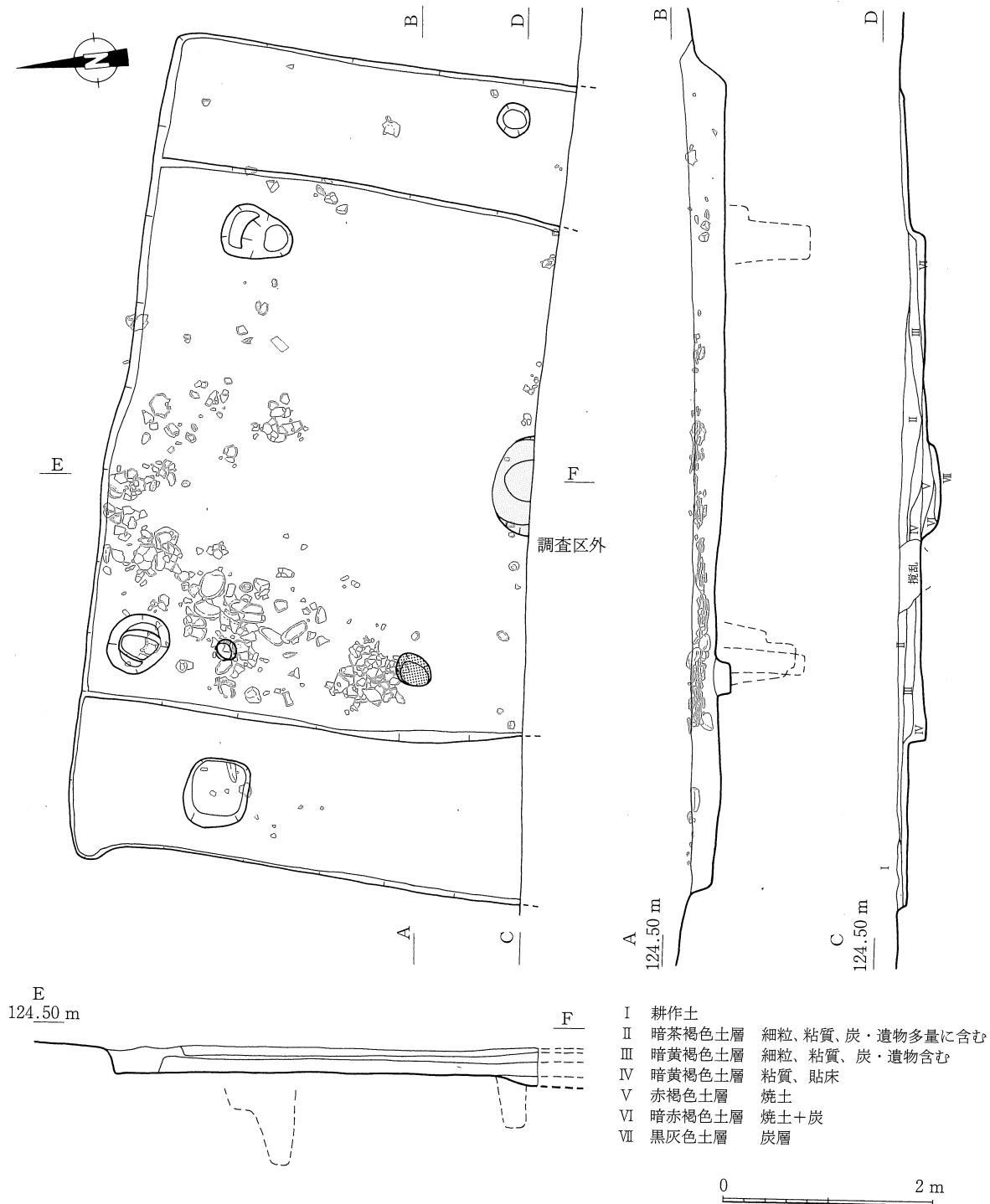
表 82 65 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
315	鉢	11.0	角閃石 少、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	ハケ?			
		5.2									
		4.0									
316	碗	8.3	角閃石 微、 石英 多、 赤色粒子 少	灰黄褐色		手握ね	ケズリ後ナデ	ナデ			
		7.1									
		3.3									
317	甕	—	角閃石 少、 赤色粒子 多、 白色粒子 少、 石英 多	外面 黄褐色 内面 褐色	良好	粘土積上げ	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ			
		—									
		6.1~6.2									
318	甕	14.1	角閃石 少、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	外面 褐色 内面 橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目			
		17.6									
		6.7									

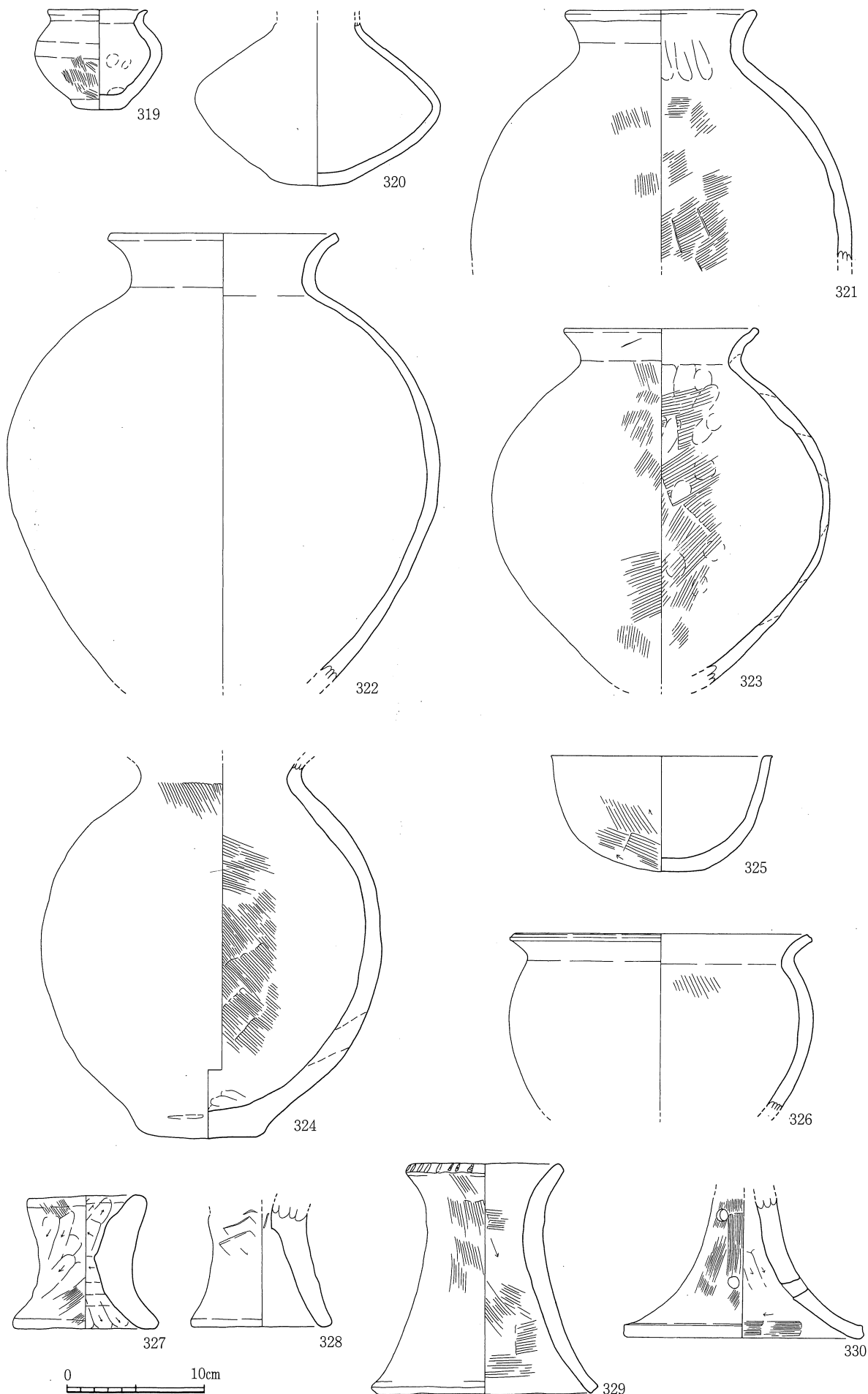
66 号住居跡 (第 109 図)

66 号住居跡は B-3 区と C-3 区の間位置する。南側の一部は調査区外のため未調査である。規模は東西 7.7 m、南北 4.2 + α m、検出面からの深さは 20cm 前後で、平面形は方形或いは長方形を呈していると思われる。主軸方位は N-10°-E を示す。東壁と西壁に沿って幅約 1.2~1.3 m、高さ 10cm 前後のベッド状遺構を壁面と並行しながら施す。壁溝は付設されていない。住居跡内南側壁沿いに径 0.9 m、深さ 10cm 前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化し、内部には焼土と炭が堆積していた。床面は暗黄褐色粘質土 (第 IV 層) で 5~10cm の張床を行っている。支柱穴は 4 本と思われるが、南側の 2 本は調査区外であり、北東の支柱穴は試掘調査の際、重機による掘りすぎのため、既に消滅していた。最終的には北西の支柱穴 1 本の検出であった。径は 30cm、深さ 20cm 前後である。

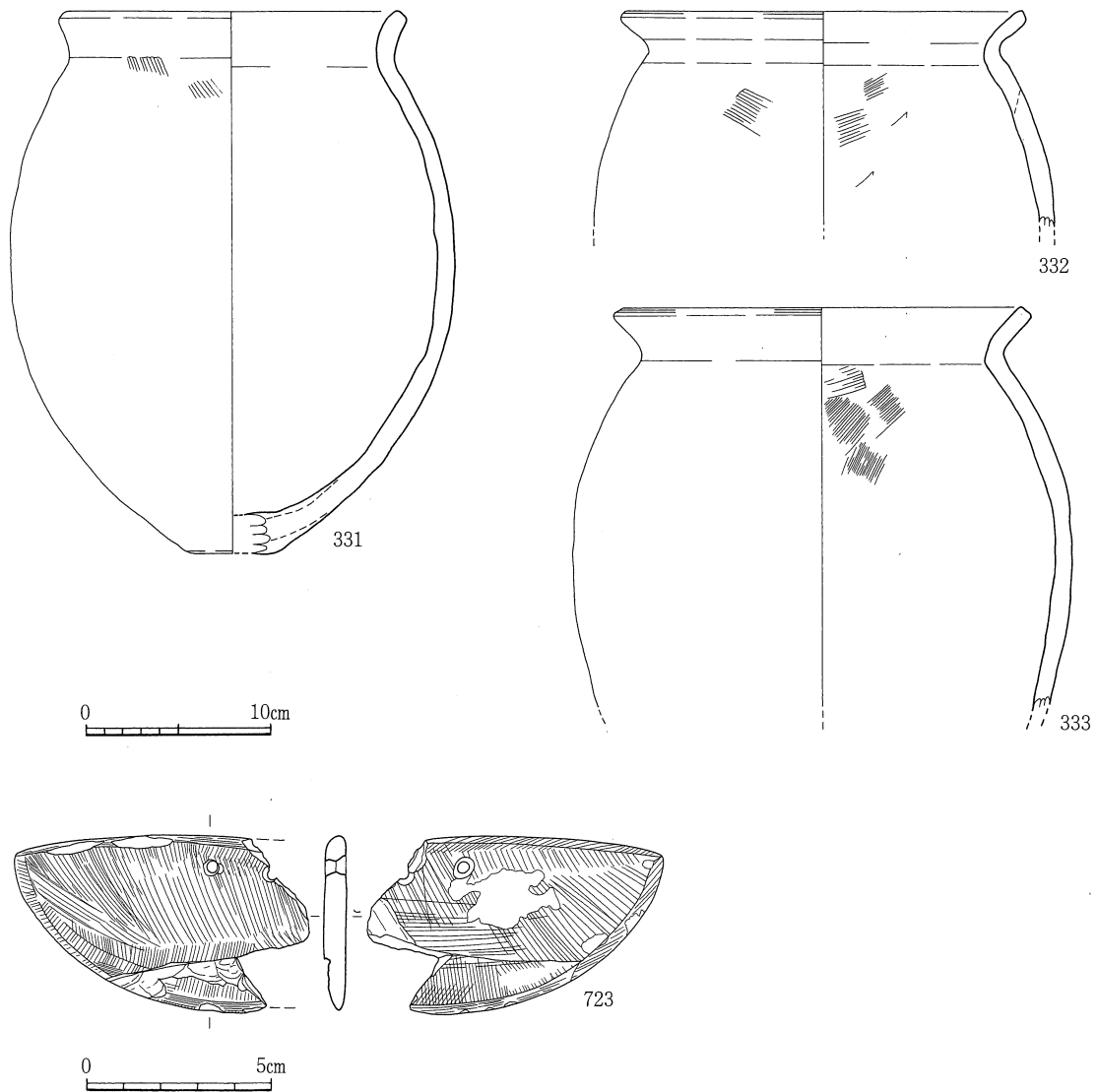
遺物は北東側の床部分で多量の土器・礫が一括して出土している。当住居跡に伴うものか、破棄遺物かの判断はできなかったが、個別別では比較的まとまって出土していた。これらの遺物は第 II・III 層からの出土である。また、炉跡周辺からも土器片等が少なからず出土している。これらは第 III 層を中心とした出土である。出土遺物からみた当住居跡の時期は、破棄遺物の存在を考えれば明確ではないが、おおよそ弥生時代後期後葉頃と思われる。



第 109 図 66 号住居跡実測図 (1 / 60)



第110图 66号住居跡出土遺物実測図1 (1/4)



第 111 図 66 号住居跡出土遺物実測図 2 (1/4・1/2)

表 83 66 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
319	壺	(7.3)	石英 多、 角閃石 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	黄橙色	良好 黒斑	粘土積上 げ	タテミガキ	不明		剥離頭著	
		7.3									
		3.3~3.5									
320	壺	—	角閃石 多、 石英 少、 長石 少、 赤色粒子 少	橙色	良好	粘土積上 げ	不明	不明			
		11.9									
		5.3									
321	壺	14.0	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多、 石英 多	褐色	良好	粘土積上 げ	ハケ目	ハケ目			
		—									
		—									
322	壺	17.0	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 微、 石英 微	明褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	不明	不明			
		32.6									
		—									
323	壺	14.4	角閃石 少、 金雲母 微、 赤色粒子 多	浅黄橙色	良好	粘土積上 げ	ハケ	ハケ 指おさえ			
		25.9									
		—									
324	壺	—	角閃石 多、 金雲母 微、 石英 少	浅黄橙色		粘土積上 げ	ハケ目	ハケ目			
		27.3									
		9.6									

325	鉢	(16.1)	角閃石 多、 長石 多、 石英 少、 赤色粒子 やや多	赤橙色 橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明		
		8.5	白色粒子 やや多							
		6.9	白色粒子 やや多							
326	壺	22.2	白色粒子 多、 角閃石 やや多、 赤色粒子 少	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	ハケ目		
		—								
		—								
327	支脚	8.6	角閃石 少、 赤色粒子 少、 石英 多、 白色粒子 多	橙色	良好	筒状のものを絞って作成	指おさえ ハケナデ	指ナデ ケズリ		
		9.6～10.1								
		10.3								
328	支脚	—	角閃石 多、 石英 少、 白色粒子 多	橙色	良好			ケズリ後ナデ	ケズリ	
		9.6								
		10.3								
329	器台	11.6	角閃石 多、 石英 やや多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	明褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		刻目あり
		16.8～16.9								
		16.6								
330	高坏	—	角閃石 やや多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少、 石英 少	橙色	良好		ハケ目	ハケ目		穿孔あり
		10.3								
		17.6								
331	壺	(18.8)	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明		
		(29.3)								
		—								
332	甕	22.0	白色粒子 多、 角閃石 少	明褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
333	甕	22.6	角閃石 多、 白色粒子 少、 石英 やや多	外面 褐色 内面 橙色	良好 黒斑	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		
		—								
		—								

表 84 66号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
723	石包丁	粘板岩	(72)	47	6	30.1	

#### 67～69号住居跡（第112図）

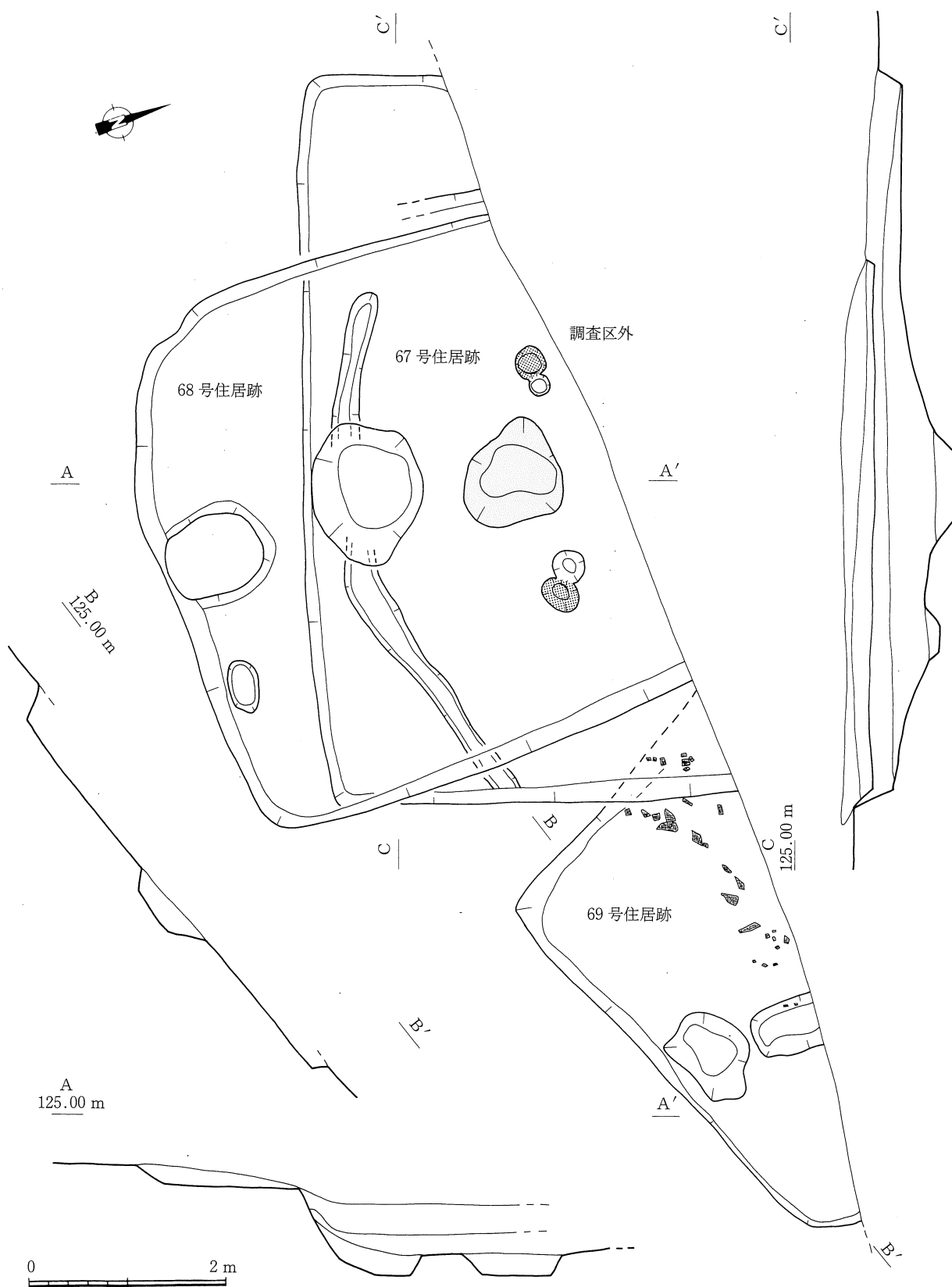
67～69号住居跡はB-3・4両区にまたがり、調査区内の北端に位置する。3軒とも住居跡北側部分は調査区外のため未調査である。前後関係は69号住居跡が先行し、その次に67号住居跡が、最後に68号住居跡が構築されている。

67号住居跡は北半分が調査区外である。規模は東西7.5m、南北4.1+αm、検出面からの深さは40～50cmで、68号住居跡に切られているが、遺構自体の深度が深いため上面は破壊されているものの、下部施設の残りは比較的良好である。平面形は長方形を呈していたと思われる。主軸方位はN-20°-Eを示す。西壁に沿ってベッド状遺構の痕跡が見受けられた。現状では幅1m、高さ2cm前後である。壁溝は検出されていない。住居跡内中央付近には径0.9m、深さ20cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部には焼土と炭が堆積していた。炉跡周辺には焼土・炭が堆積している。南壁中程に径1.2m、深さ25cm前後の土坑をもつ。支柱穴は2本と思われ、径30cm、深さ40cm前後、支柱穴間は2.5mである。

当住居跡は68号住居跡床面より20cm以上深いため、多量の遺物が削平されずに残っていた。しかし出土遺物の大半は当住居跡廃絶後の破棄遺物であり、住居跡全面に堆積している。当住居跡に伴



うと思われる遺物は、345・347・349・351・358・365の土器で、いずれも炉跡の周囲から出土している。炉跡周辺の出土遺物からみた当住居跡の時期は、弥生時代後期中葉頃を中心とした時期であろう。



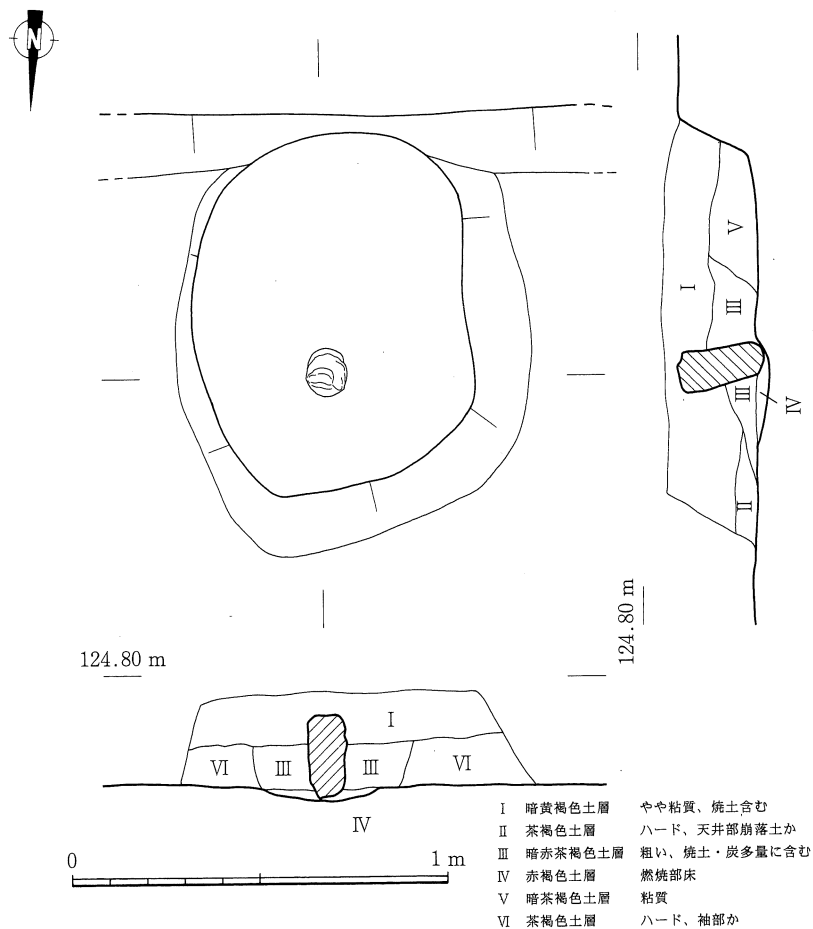
第112図 67～69号住居跡実測図 (1/60)

68号住居跡は北側部分が67号住居跡と重なっていたため、床面及び壁面を明確に追うことができなかった。規模は東西5.5m、南北5.0 + α m、検出面からの深さは約20cmである。平面形は方形或いは長方形を呈していたと思われる。主軸方位はほぼ磁北を示す。ベッド状遺構・壁溝は検出できなかった。南壁中程にはカマドが位置する。床面には焼土・炭層が堆積しているが、原形は留めていない。カマド基盤床は掘り込んでいないと思われ、床面の一部が赤変色していた。燃焼室中央から石製の支脚が出土した。床の焼土化の様相からみて、支脚は元位置を保っていると考えられる。主柱穴は切り合い等から見つけ出せなかった。

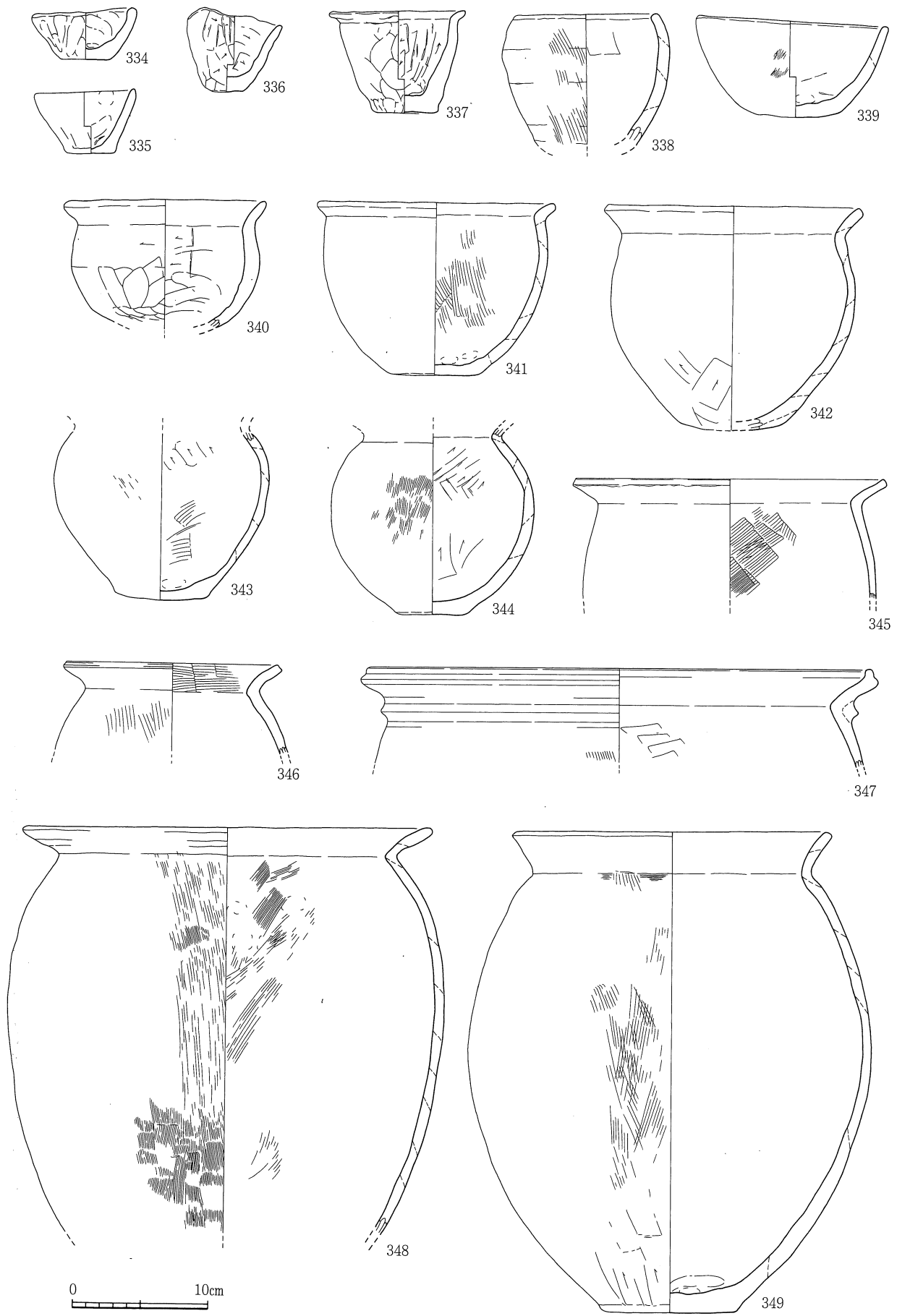
出土遺物は369～371の須恵器坏蓋と埴、372の小型壺、640の砥石である。坏蓋は器高が低く、中央に扁平な擬宝珠をもち、かえりが消失している。坏身は高台がハの字形で底部端に位置し、接地面は平らである。砥石は当住居跡に伴うものではない。出土遺物からみた当住居跡の時期は8世紀中頃、奈良時代の住居跡と思われる。

69号住居跡は北側の大半が調査区外であり、さらに西側は67号住居跡に切られている。規模は東西4.5m、南北長は不明、検出面からの深さは約40cmである。平面形は方形或いは長方形を呈していたと思われる。主軸方位はN-25°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は検出されていない。炉跡は調査区外に位置すると思われるが、検出できなかったが、住居跡床面には多量の炭層が検出された。南壁中程には径0.7m、深さ20cm前後の土坑をもつ。主柱穴は調査区内では検出できなかった。

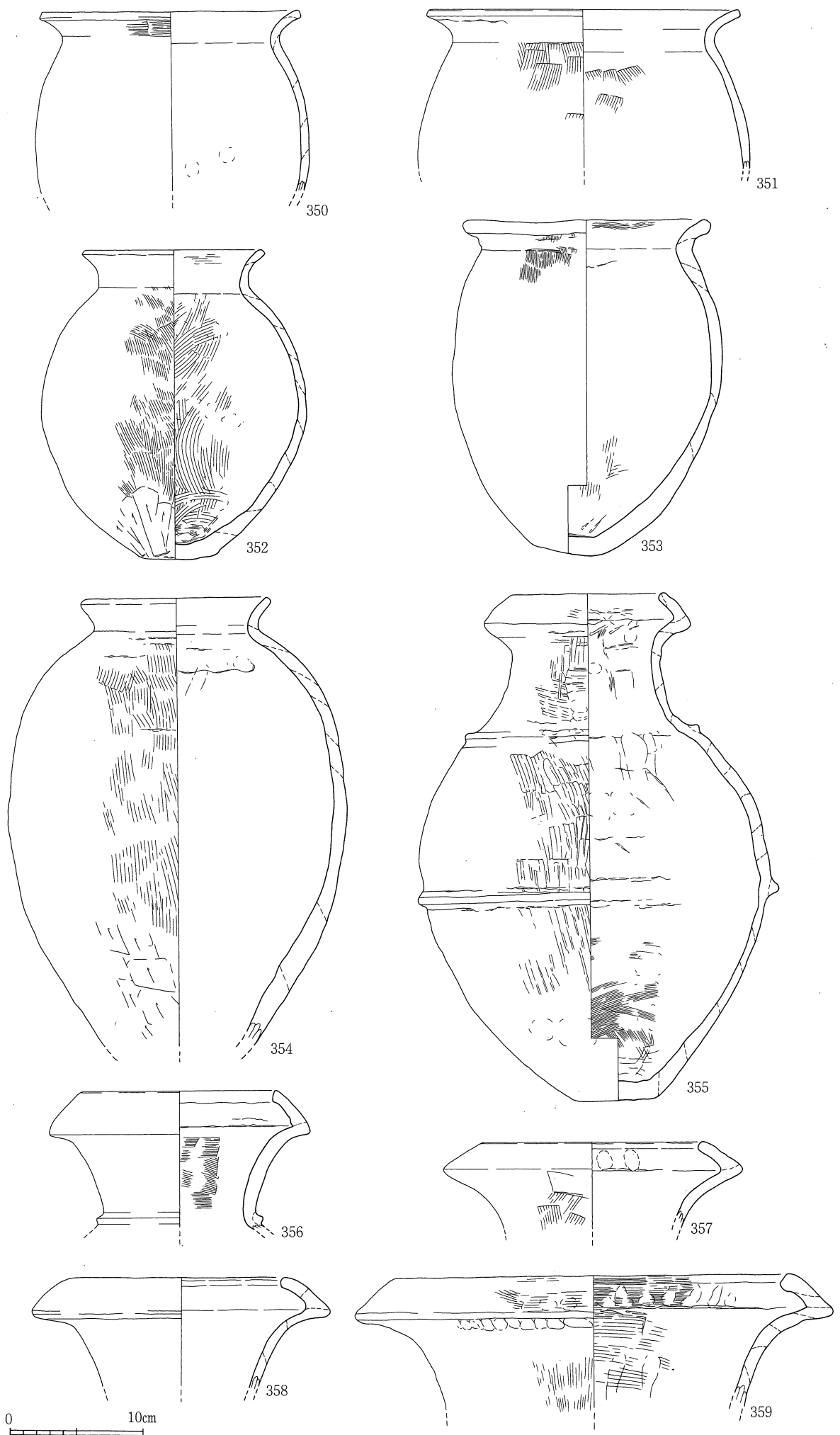
遺物は炉跡の周辺南側と思われる場所から数点出土した。373の蓋と374・375の甕の下半部分である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。



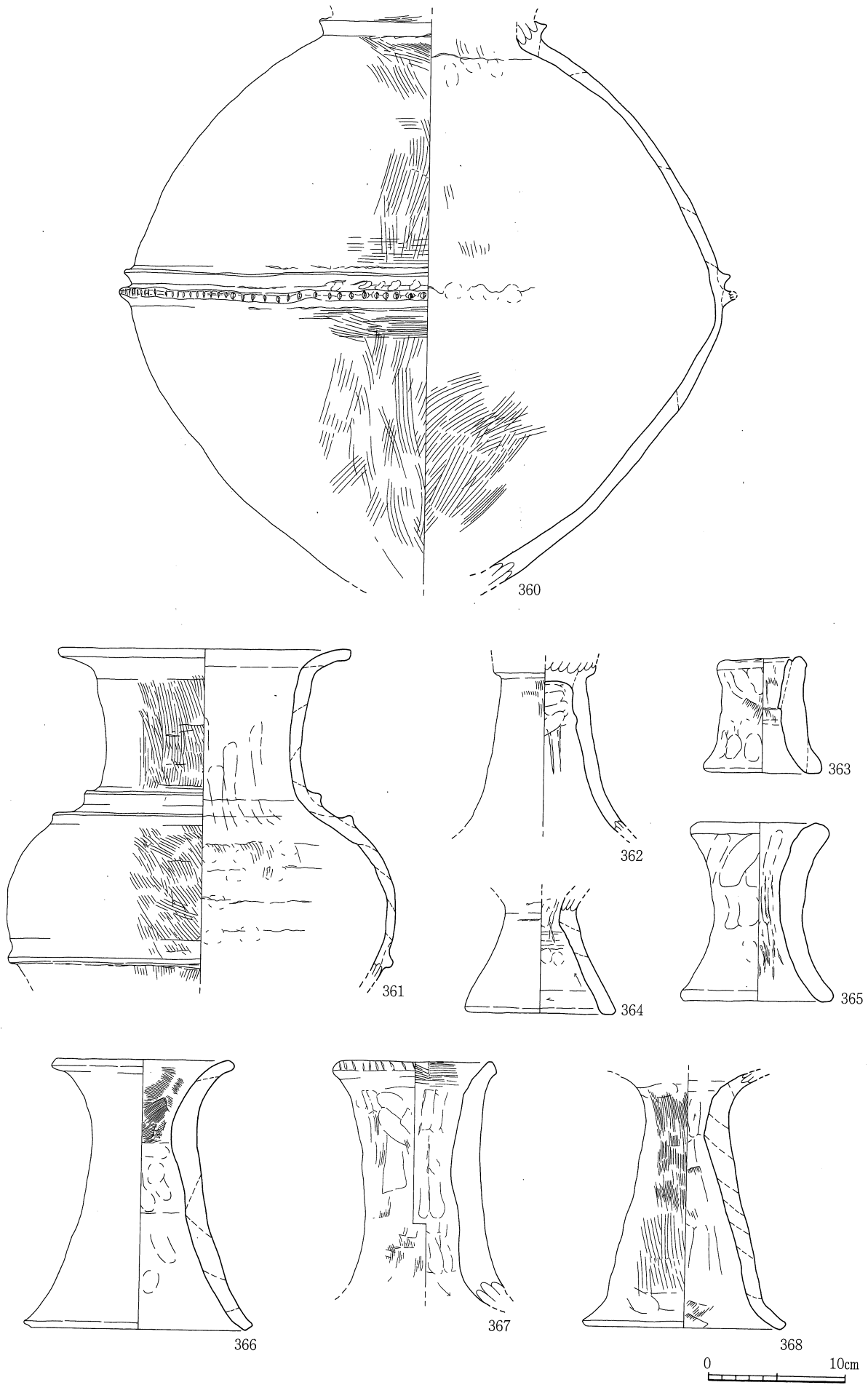
第113図 68号住居跡カマド実測図 (1/20)



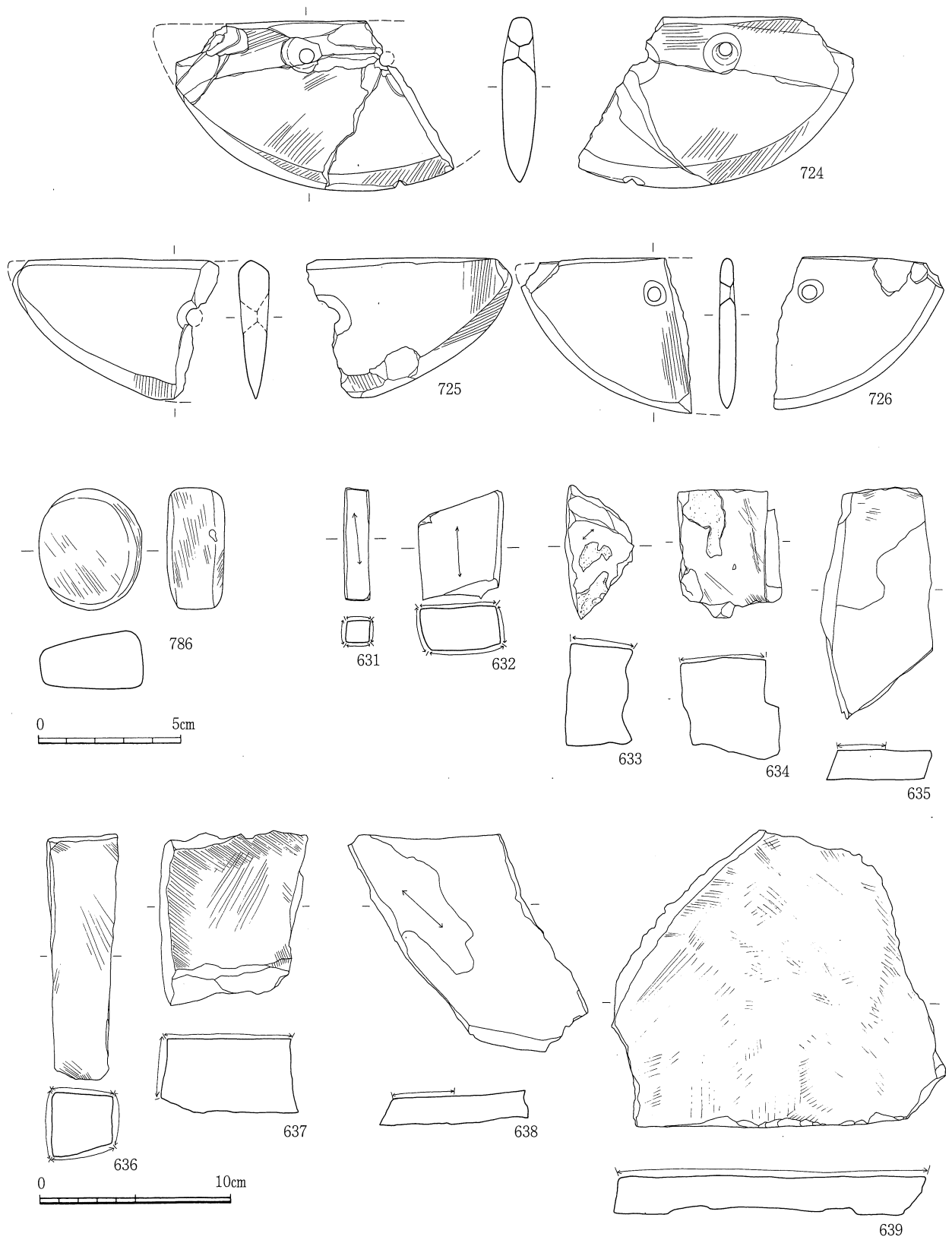
第 114 图 67 号住居跡出土遺物実測图 1 (1 / 4)



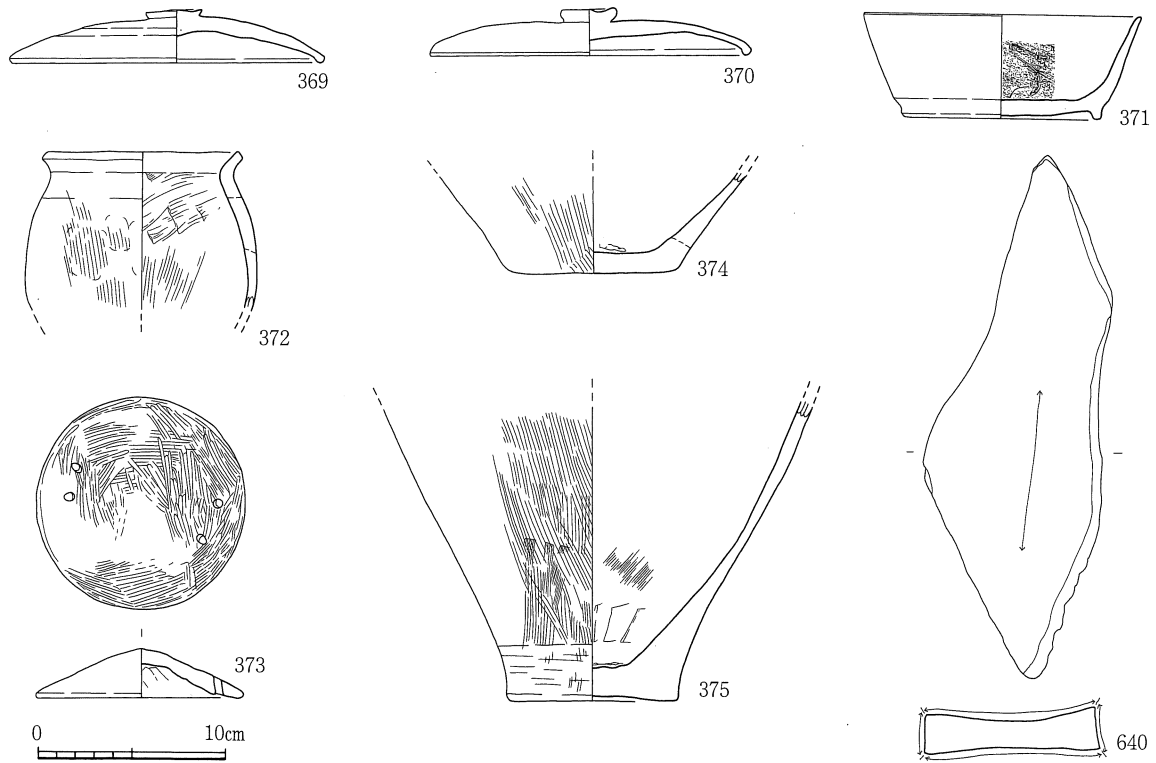
第115图 67号住居跡出土遺物実測図2 (1/4)



第116图 67号住居跡出土遺物実測図3 (1/4)



第 117 图 67 号住居跡出土遺物実測図 4 (1 / 2 · 1 / 3)



第 118 図 68・69 号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

表 85 67 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
334	碗	6.5	3.3~3.8 3.7	角閃石 少、 石英 少	黄橙色	普通	手づくね	指ナデ	指ナデ		
335	壺	9.6	7.4~7.6 4.6	石英 多、 金雲母 多	黄橙色	良好	手づくね	ケズリ ナデ	ケズリ 工具痕		熊本阿蘇 の土器?
336	壺	6.7	5.0~6.1 2.4	茶色砂粒	褐色 暗褐色 混合	普通	手づくね	粗いケズリ	粗いケズリ		
337	鉢	6.8	4.3~4.7 3.4~3.6	茶色砂粒	黄褐色	普通	手づくね	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ		
338	壺	12.4	9.6 —	角閃石 微、 石英 多、 金雲母 微	橙色	良好	粘土積上 げ	ハケ	ハケ		
339	碗	13.3	6.8~7.4 6.9	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 やや多	灰白色	普通	粘土積上 げ	ハケ	ケズリ後ナデ		
340	鉢	14.2	— —	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	黄橙色	普通	粘土積上 げ	ケズリ後ナデ	ケズリ		
341	鉢	(17.0)	12.7 6.4	金雲母 多、 石英 多、 赤色粒子 少	橙色	良好	粘土積上 げ	粗いナデ	ハケ		
342	鉢	(18.6)	(16.5) —	赤色粒子 多、 石英 多、 角閃石 少、 砂粒 粗	黄橙色	良好	粘土積上 げ	不明	不明		
343	壺	—	— 6.9	角閃石 少、 白色粒子 多、 石英 多	黄褐色	良好	粘土積上 げ	不明	不明		
344	壺	—	— (5.4)	赤色粒子 多、 石英 やや多、 角閃石 やや多	黄橙色	良好	粘土積上 げ	ハケ	ケズリ		歪みあり

345	甕	(13.2)	砂粒 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	灰褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ナメハケ目		
		—								
		—								
346	甕	(16.2)	砂粒 多、 灰色粒子 少、 長石 少、 角閃石 多、 赤色粒子 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケナデ	口縁 ヨコハケ 目 タテハケ目		
		—								
		—								
347	甕	(39.4)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 長石 多、 角閃石 少	黒灰色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ハケナデ		
		—								
		—								
348	甕	(29.6)	角閃石 多、 石英 やや多、 赤色粒子 多	灰白色 暗褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ痕		風化顕著
		—								
		—								
349	甕	(22.8)	角閃石 少、 石英 多	灰褐色 暗褐色 混合	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明		全面風化 顕著
		35.6								
		10.0								
350	壺	(19.4)	角閃石 多、 石英 多	褐灰色	普通	粘土積上げ	ハケ? 不明	不明		
		—								
		—								
351	甕	(23.6)	砂粒 少、 角閃石 少、 赤色粒子 少	淡黄灰褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ タテハケ目		
		—								
		—								
352	甕	13.2	石英 多、 角閃石 多、 赤色粒子 少	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目 ケズリ	ハケ目		
		23.3								
		5.8								
353	甕	(17.2)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	外面 明赤褐色 浅黄褐色 内面 浅黄褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		
		24.5 ~ 25.3								
		5.0								
354	甕	(13.6)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目 ケズリ後ナデ	丁寧な ナデ		
		—								
		—								
355	壺	11.4	角閃石 少、 石英 少、 赤色粒子 少	浅黄褐色	良好		タタキ ケズリ後ハケ	粗い指ナデ ハケ目		
		38.2								
		6.3								
356	壺	(14.4)	砂粒 非常に多、 赤色粒子 多、 長石 少、 石英 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	ヨコハケ目		
		—								
		—								
357	壺	(16.6)	砂粒 多、 角閃石 少、 長石 少	淡黄白色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ 不明		
		—								
		—								
358	壺	15.5	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多	灰白色	不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—								
		—								
359	壺	(29.9)	角閃石 少、 石英 少、 赤色粒子 多	灰白色	良好	粘土積上げ	ハケ	ハケ		
		—								
		—								
360	壺	—	角閃石 多、 石英 やや多	淡黄色	普通	粘土積上げ	ハケ目 ケズリ後ナデ	ハケ痕 指痕		刻目の三角 突帯あり
		—								
		—								
361	壺	(21.4)	角閃石 多、石 英 多、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ナデ		一条三角 突帯三個 あり
		—								
		—								
362	高坏	12.0 ?	角閃石 少、 石英 多、 赤色粒子 少	灰白色	普通	粘土積上げ	不明	指ナデ		全面剥離
		—								
		—								
363	支脚	4.6	角閃石 やや多、 石英 やや多、 赤色粒子 やや多	浅黄褐色	良好	粘土積上げ	指おさえ	粗いナデ ハケ痕		
		8.2 ~ 8.6								
		8.7								
364	器台	—	角閃石 多、 石英 やや多、 白色粒子 多	黄橙色	良好	粘土積上げ	不明	指ナデ		
		—								
		11.1 ~ 11.4								
365	器台	8.6	角閃石 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少、 石英 多	黄橙色	良好	粘土積上げ	ケズリ後ナデ ヨコナデ	工具痕 ヨコナデ		
		13.1								
		11.3								
366	器台	12.4	石英 多、 角閃石 少、 赤色粒子 多	灰白色 浅黄褐色	良好	粘土積上げ	不明	ナデ		
		19.8								
		16.8								
367	器台	—	角閃石 少、 石英 多、 白色粒子 多	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	ナデ		
		—								
		9.9								
368	器台	—	石英 多、 金雲母 微、 赤色粒子 やや多	橙色 浅黄褐色 混合	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ 粗いナデ		
		13.7								
		15.0								



表 86 67号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
724	石包丁	結晶片岩	(78)	59	12	62.6	
725	石包丁	粘板岩	(70)	(48)	11	37.4	
726	石包丁	硬質頁岩	(52)	52	5	25.4	
786	磨石	安山岩	41	35	17	44.6	
631	砥石	硬質頁岩	58	13	11	17.5	全面使用
632	砥石	硬質頁岩	55	43	22	97.4	
633	砥石	硬質頁岩	66	35	52	112.7	
634	砥石	硬質頁岩	67	52	50	198.1	
635	砥石	硬質頁岩	118	55	15	163.7	
636	砥石	硬質頁岩	128	31	34	265.0	
637	砥石	硬質頁岩	85	72	38	378.1	
638	砥石	硬質頁岩	110	78	15	265.4	
639	砥石	硬質頁岩	155	163	19	750.7	

表 87 68号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
369	蓋	16.8	石英、 角閃石 若干、 斜長石 若干、 白色細粒 若干	黄灰色	良好		ナデ	ナデ			須恵器
		2.9									
		—									
370	蓋	17.1	石英、 角閃石、 白色細粒 若干	黄灰色	良好		ナデ	ナデ			須恵器
		2.4									
		—									
371	壺	14.8	石英 多量、 角閃石	浅黄橙色	良好		ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 一定方向ナデ			須恵器
		5.5									
		10.5									
372	壺	(10.0)	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 角閃石 普通、 石英 普通	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ	ハケ			土師器
		—									
		—									

表 88 68号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
640	砥石	硬質頁岩	269	93	23	548.6	

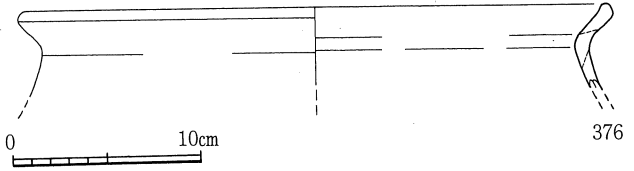
表 89 69号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
373	蓋	11.1	白色粒子 多、 石英 やや多、 角閃石 やや多	黒褐色	良好	ミガキ	細かいケズリ	すず付着			
		2.6									
		—									
374	甕	—	石英 多、 白色粒子 多	灰白色	普通	粘土積上げ	ハケ	不明			
		—									
		8.6~8.9									
375	甕	—	角閃石 少、 白色粒子 多	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ケズリ後ナデ			
		—									
		8.8									

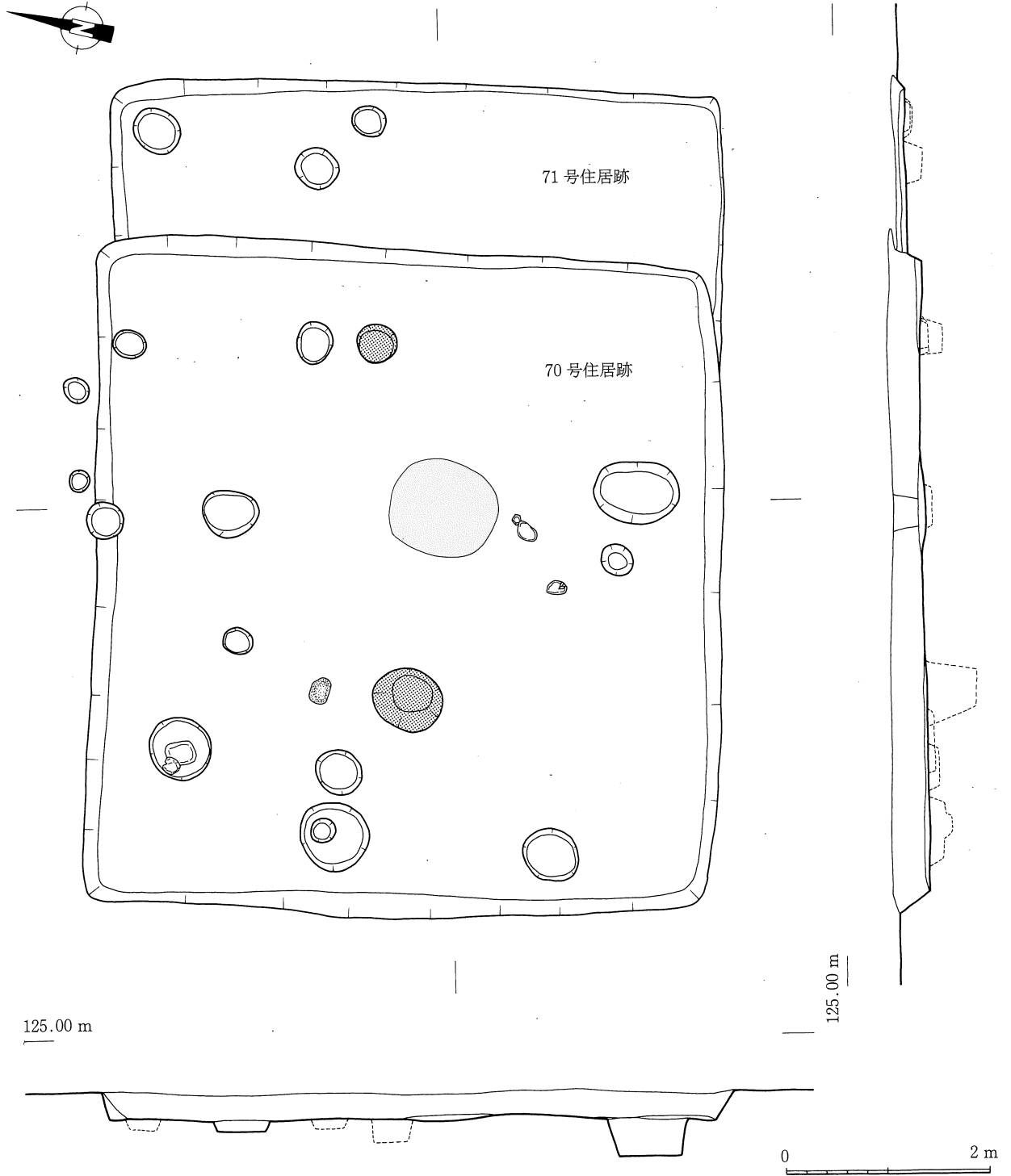
70・71号住居跡（第120図）

70・71号住居跡はB-3区の北東寄りに位置する。71号住居跡が先行し、その後に70号住居跡が重なる様に構築されている。

70号住居跡の規模は東西6.5m、南北6.1m、検出面からの深さは約30cmで、平面形は長方形



第119図 70号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第120図 70・71号住居跡実測図（1/60）

を呈している。主軸方位はN-12°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや東寄りに径1.0 m、深さ5 cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部に焼土と炭が堆積していた。主柱穴は2本で、径40～50cm、深さ30～50cm前後、主柱穴間は3.4 mである。

遺物は炉跡から甕の口縁部破片1点(376)が出土したが、当住居跡に伴うものか流れ込み遺物かは不明である。この土器は小破片であり、復元口径は30.6cmである。内外面とも風化が著しく、時期の特定は難しいが、おおよそ弥生時代後期後葉～終末頃の土器と思われる。

71号住居跡は70号住居跡に切られ、東側の一部分が残るだけである。規模は東西長が不明、南北6.0 m、検出面からの深さは10cmである。平面形は方形或いは長方形を呈していたと考える。主軸方位はN-12°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝・土坑・主柱穴は確認できなかった。

当住居跡に伴う遺物は出土していない。

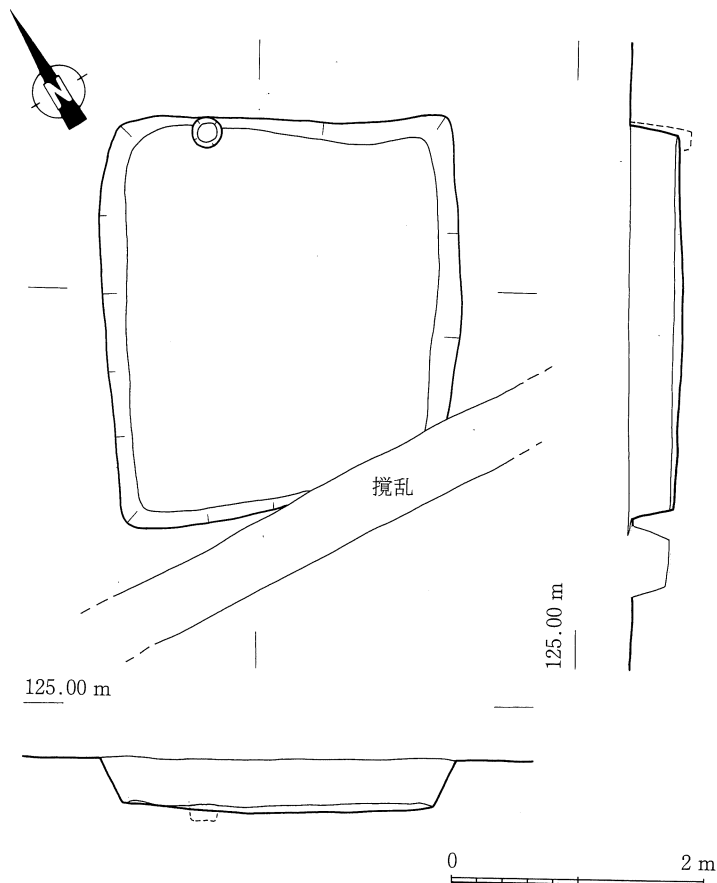
表 90 70号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
376	甕	30.6		角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	外面 褐色 内面 浅黄 橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		
		—									
		—									

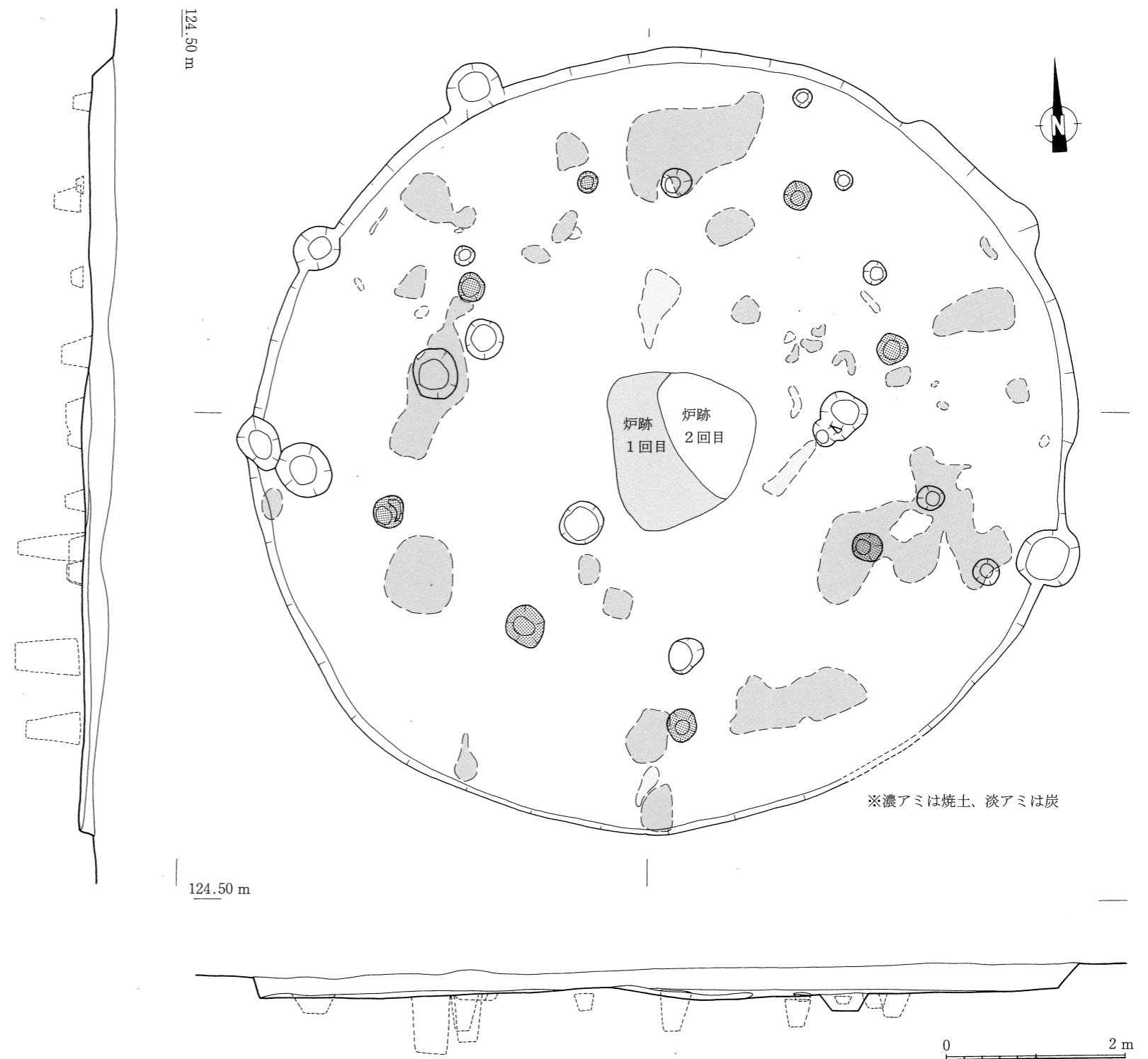
72号住居跡 (第121図)

72号住居跡はB-3区の東方向、70・71号住居跡の南1.5 m付近に位置する。南コーナー一帯を畑管によって切られている。規模は長軸3.1 m、短軸2.8 m、検出面からの深さは約40cmで、小型の竪穴である。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-31°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内からは炉跡・主柱穴と考えられる施設の検出はない。

遺物の出土はなく、当住居跡の時期は不明である。



第121図 72号住居跡実測図 (1/60)



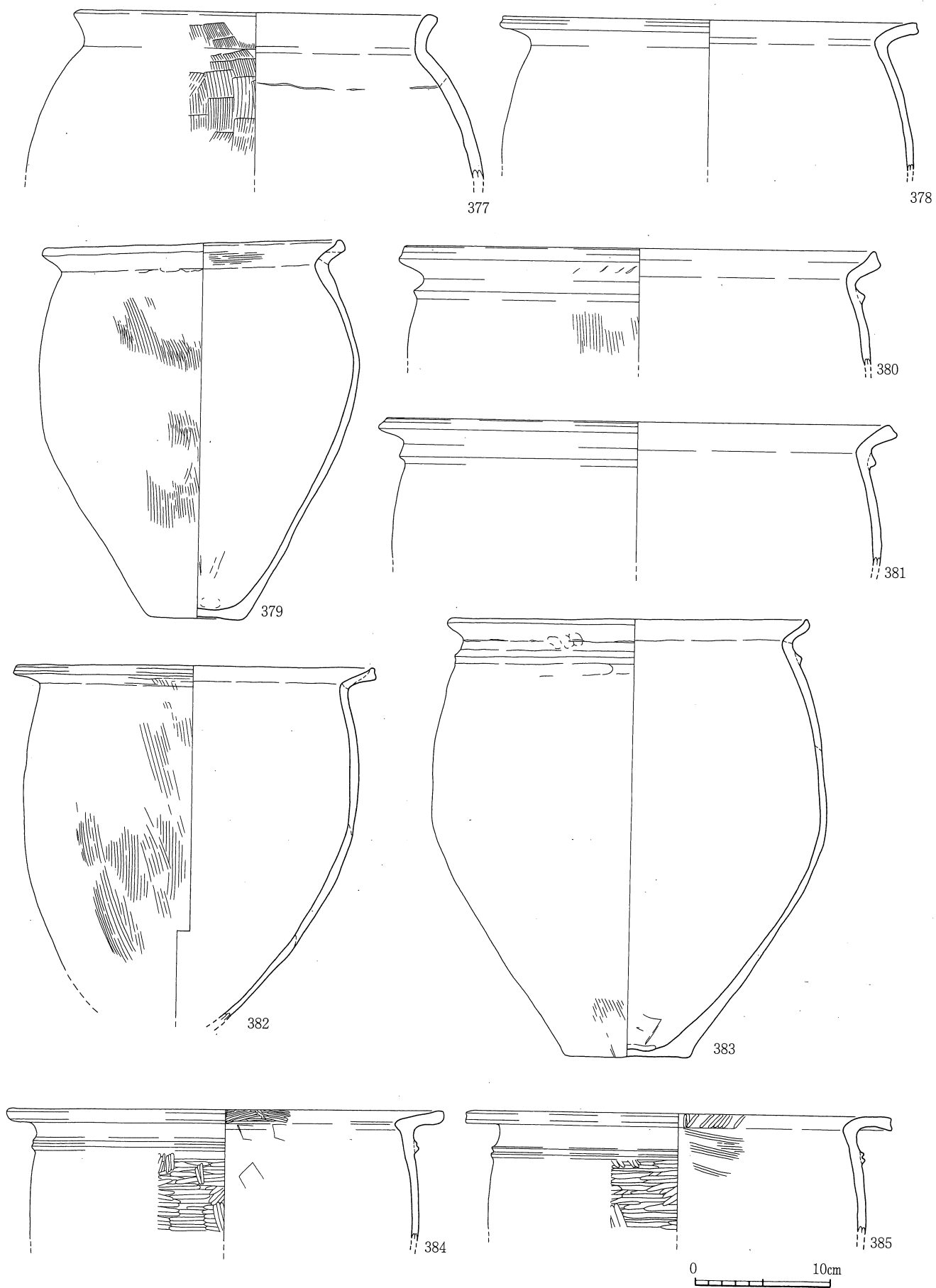
第122図 73号住居跡実測図 (1/60)

73号住居跡（第122図）

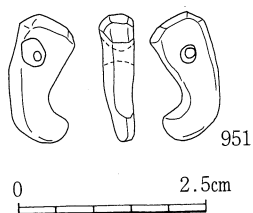
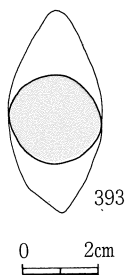
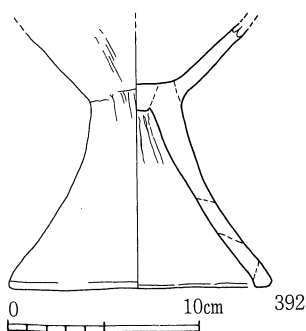
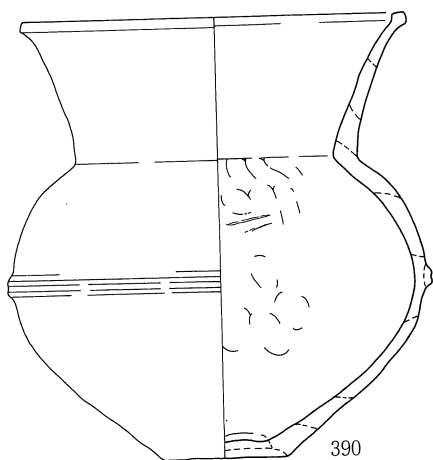
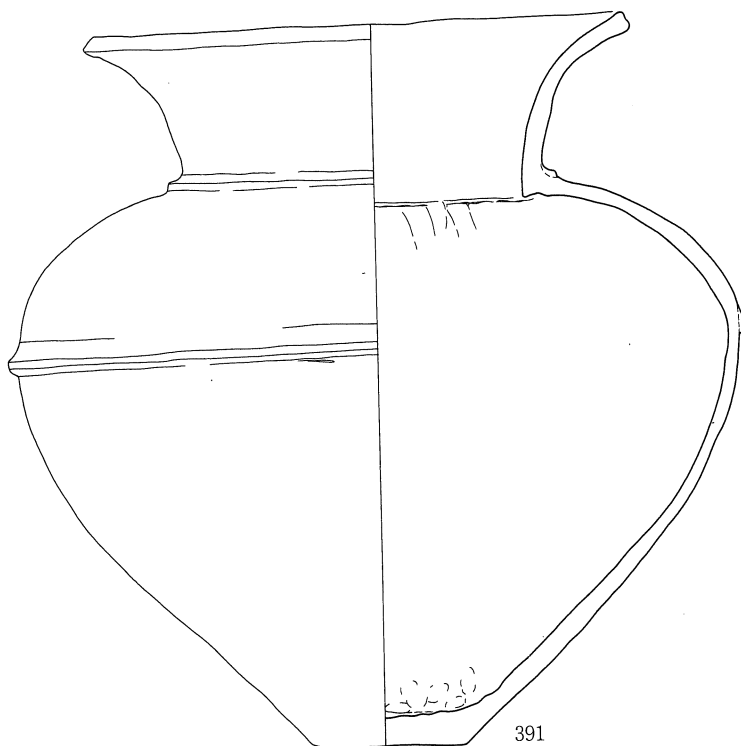
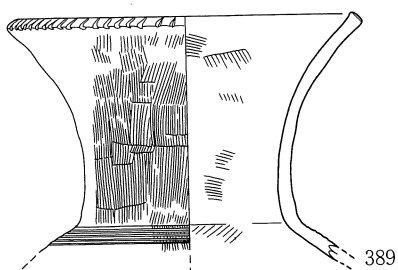
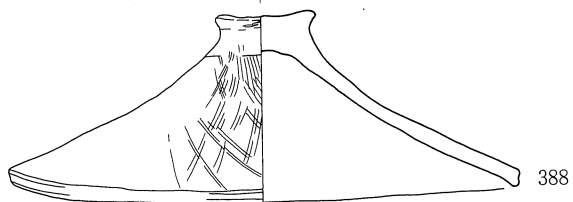
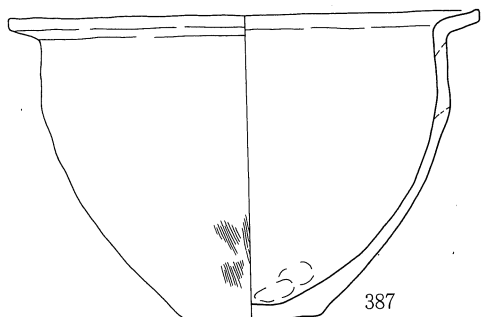
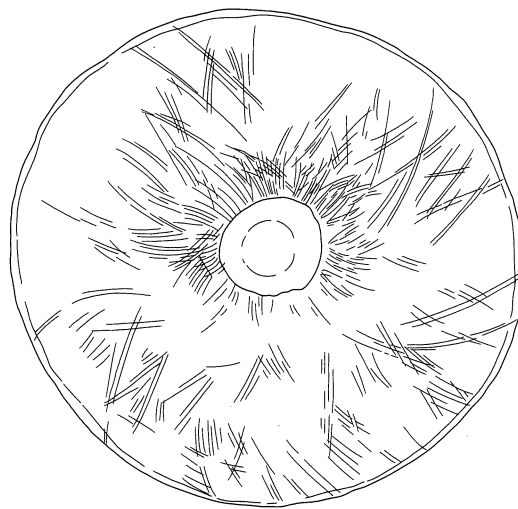
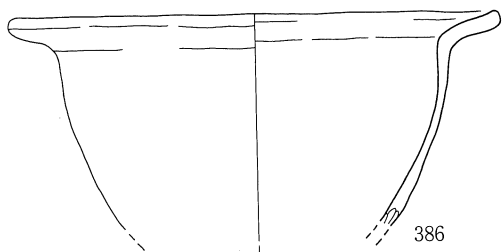
26号住居跡はB-3区の北東方向に位置する。規模は東西9.3m、南北8.8m、検出面からの深さは15～30cmでやや大型の円形住居跡である。住居跡内中央には径1.7m、深さ30cm前後の不定形をしたレンズ状の炉跡をもち、内部には焼土と炭が堆積している。炉跡は造り替えが行われている。住居跡内には多量の焼土・炭が堆積していて、焼失住居の可能性をもつ。主柱穴は8本で、ほぼ同心円状に配置されている。径は30～50cm、深さ40～70cm前後、主柱穴間は2.0～2.6mである。

表 91 73号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
377	甕		(27.4)	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 赤色粒子多	茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ナデ		
			—								
			—								
378	甕		(31.4)	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 赤色粒子少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ナデ		
			—								
			—								
379	甕		21.8	角閃石多、 金雲母少、 石英多	明赤褐色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ケズリ		
			27.7～28.7								
			6.6								
380	甕		36.0	砂粒多、 角閃石少、 長石少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ 丁寧なナデ	外面にすす 付着一 二次加熱あり	一条の三 角突帯あ り
			—								
			—								
381	甕		(39.0)	砂粒多、 角閃石少、 長石少	淡黄灰白 色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ナデ	すす付着一 二次加熱あ り	一条の三 角突帯あ り
			—								
			—								
382	甕		27.3	角閃石多、 石英多、 赤色粒子やや多	灰白色	普通	粘土積上げ	ハケ目	不明	すす付着	形が変形 している
			—								
			—								
383	甕		26.7	角閃石少、 赤色粒子少	灰白色		粘土積上げ	不明	不明	すす	一条の三 角突帯あ り
			32.8～33.1								
			(9.4)								
384	甕		(32.8)	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 石英少	赤褐色	良好		口縁 ヨコナデ ヨコミガキ	口縁 ミガキ ヘラナデ		
			—								
			—								
385	甕		(32.0)	砂粒多、 長石少、 黒色粒子多、 金雲母非常に多	赤褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ヨコミガキ	口縁 ヨコナ デ・ヨコミガキ ハケ目		搬入品？ 一条のM 字突帯
			—								
			—								
386	鉢		(26.2)	角閃石多	橙色 赤褐色 混合	普通	粘土積上げ	不明	不明		
			—								
			—								
387	鉢		(25.2)	角閃石多、 赤色粒子少、 石英少、 白色粒子多	灰白色	普通	粘土積上げ	ハケ痕	不明	すす付着	
			16.2								
			(7.4)								
388	蓋		26.4～27.4	角閃石多、 白色粒子多、 石英少	浅黄橙色 一部橙色	良好		ハケ 模様風	不明	すす付着	
			10.0～10.2								
			—								
389	壺		(19.0)	砂粒非常に多、 赤色粒子多、 角閃石少、 長石少、 石英少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ハケ目		
			—								
			—								
390	壺		(19.2)	角閃石やや多、 白色粒子少、 石英多	灰白色	普通	粘土積上げ	不明	指ナデ 工具痕		M字突帯 あり
			23.5								
			(6.6)								
391	壺		(28.1)	角閃石多、 石英多、 赤色粒子少	灰白色 浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明	すす付着	二ヶ所に 一条三角 突帯あり
			38.1～38.9								
			(8.2)								
392	高坏		—	石英多、 角閃石多	浅黄橙色 橙色	普通	円盤充填	ハケ目	不明		しぼり痕
			13.8								
			14.0								



第 123 图 73 号住居跡出土遺物実測图 1 (1 / 4)



第124图 73号住居跡出土遺物実測図2 (1/4・1/2・実大)

遺物は炉跡を中心に比較的多量の土器が出土した。甕 (377～385) や、鉢 (386・387)、壺 (389～391)、壺の蓋 (388) 等である。また、埋土中からは碧玉製の勾玉 (951) が1点出土した。この勾玉は縄文時代晩期頃のものと思われる。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。

表 92 73号住居跡出土土製品計測表

番号	器種	焼成	残存	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備考
393	投弾	良好	完形	5.4	2.5	28.9	

表 93 73号住居跡出土玉類計測表

番号	器種	材質	残存	色調	長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
951	勾玉	—	完形	暗緑色	1.7	0.7	0.1×0.1	0.8	

#### 74～76号住居跡 (第125図)

74～76号住居跡はB-3・4区の境中央付近に位置する。74号住居跡が先行し、75・76号住居跡が構築されている。75・76号住居跡の前後関係は不明である。

74号住居跡は東が72号住居跡、北は73号住居跡とはほぼ接し、南を75号住居跡、東を76号住居跡に切られている。規模は東西9.3m、南北8.8m、検出面からの深さは15～30cmのやや変形した円形住居跡である。壁溝は付設されていない。炉跡は検出できなかった。床面のほぼ全面に暗褐色の張床を行っている。支柱穴は9本と思われ、径40cm、深さ40～50cm前後である。

遺物は第126図の727・728の石包丁と801の紡錘車、853の石鏃である。いずれも埋土中からの出土で当住居跡に伴うかどうかは不明である。土器の出土がなかったため、当住居跡の明確な時期は不明であるが、周辺の状態や形態からみておおよそ弥生時代中期後半頃と思われる。

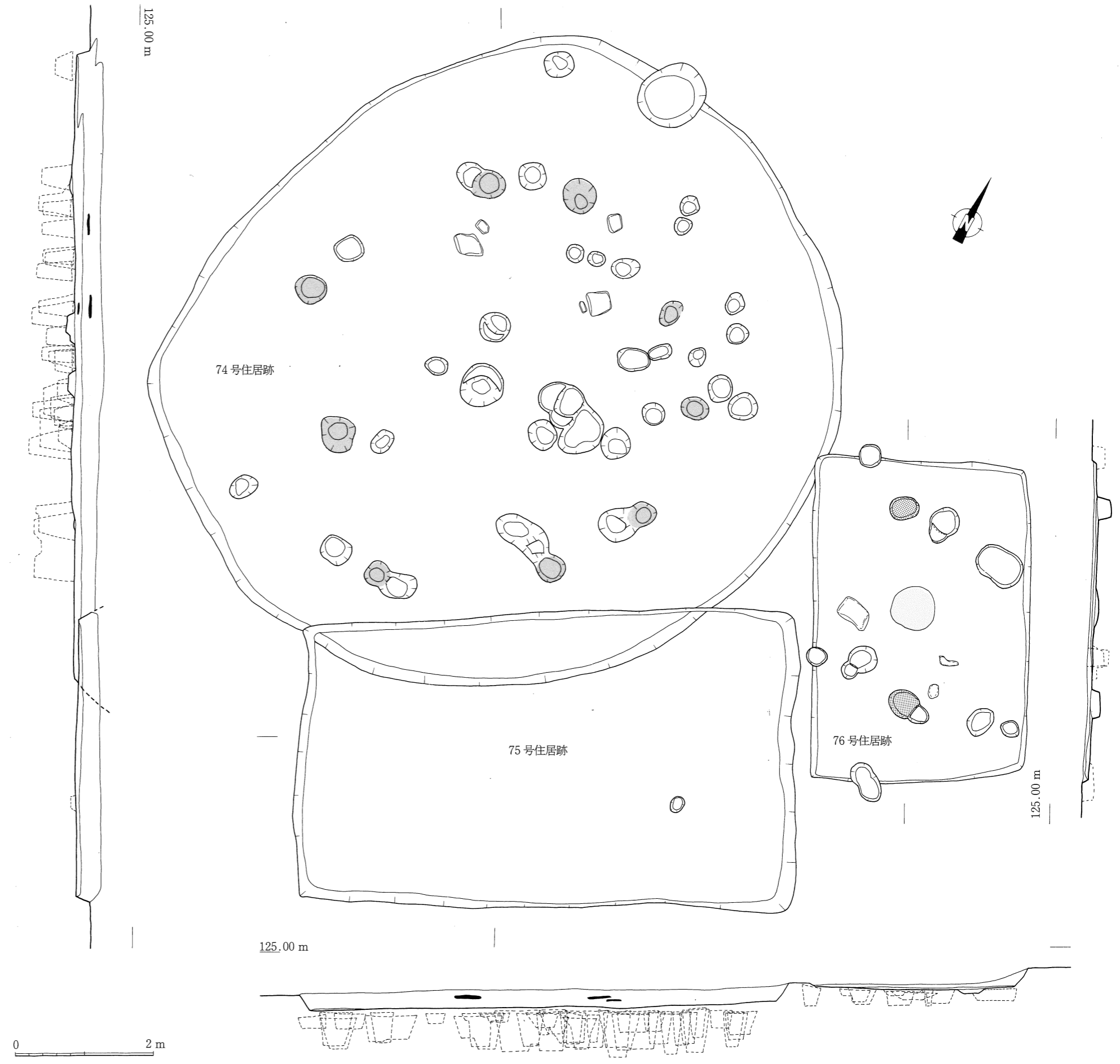
75号住居跡は74号住居跡の南東に位置する。規模は東西6.95m、南北4.25m、検出面からの深さは20～30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-27°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内は後世の攪乱が激しく、炉跡や支柱穴の確認はできなかった。

遺物は394～399の土器、729の石包丁、952のガラス小玉である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期終末前後頃と思われる。

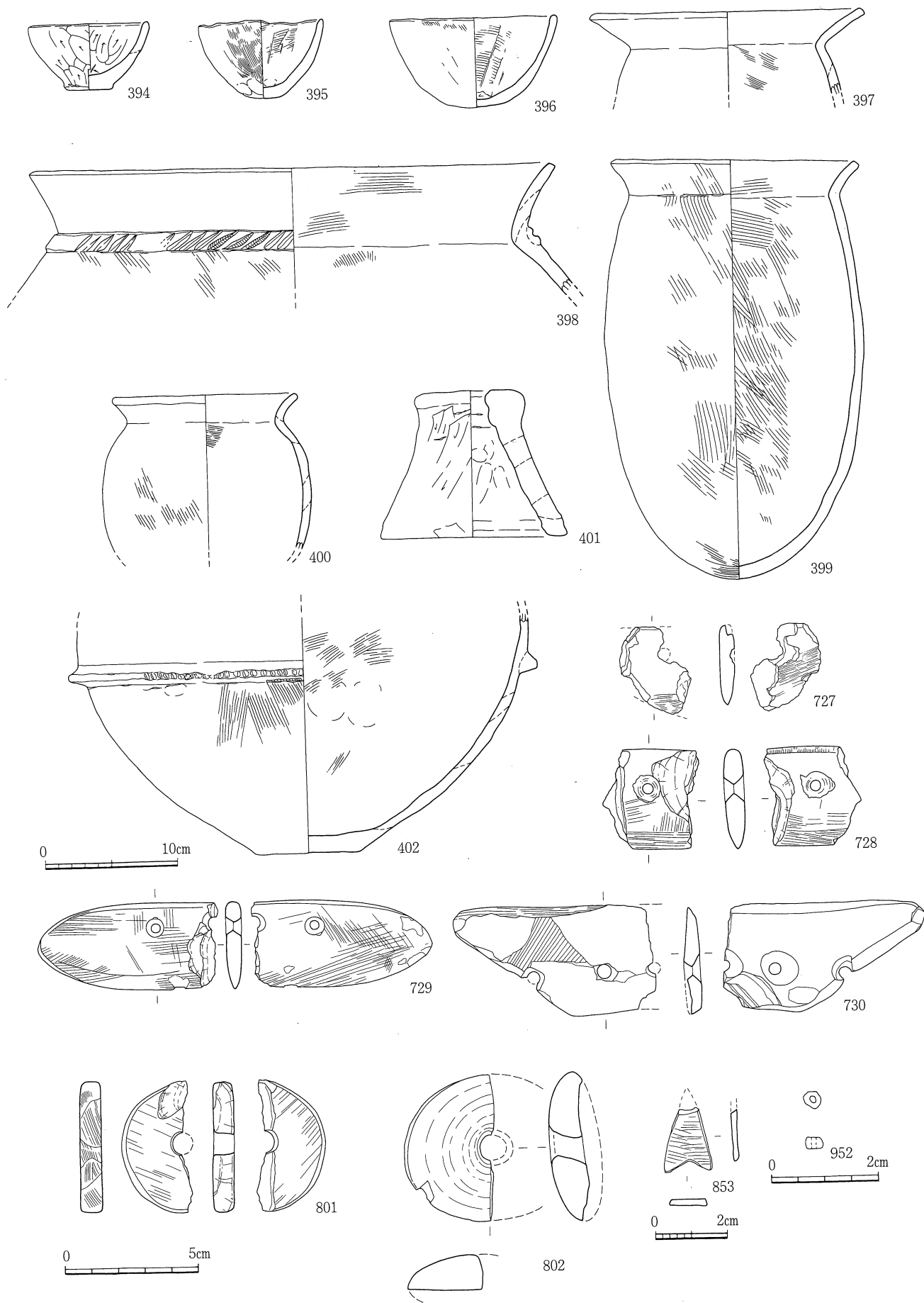
76号住居跡は74号住居跡の東に位置する。規模は東西3.1m、南北4.7m、検出面からの深さは5～12cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-22°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.6m、深さ10cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色し、内部に焼土と炭が堆積していた。炉跡西側には掻き出したと考えられる焼土が堆積している。支柱穴は2本で、径40cm、深さ20cm前後、支柱穴間は2.8mである。

遺物は炉跡周辺から礫とともに土器片10数点が出土した。出土遺物は400～402の土器、730の石包丁、802の紡錘車である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期中葉前後頃と思われる。





第125图 74~76号住居跡实测图 (1/60)



第126图 74~76号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2・2/3・実大)

表 94 74号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
727	石包丁	粘板岩	(25)	30	6	3.6	
728	石包丁	結晶片岩	(32)	37	7	11.1	
番号	器種	残存	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
801	紡錘車	1/2欠	5.0	0.9	—	10.6	全面研磨
番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
853	磨製石鏃	結晶片岩	20	14	2	0.7	未製品? 先端欠損

表 95 75号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
394	埴	8.4	赤色粒子 多、 白色粒子 多、 石英 多	褐色	普通	手づくね	ケズリーナデ	指ナデ			
		4.9~5.0									
		3.4									
395	埴	9.1	赤色粒子 少、 石英 少、 主に茶色の砂粒	灰白色	不良	手づくね	ハケ目	ハケ目		底部 成形痕あり	
		5.1~5.9									
		2.9									
396	埴	(12.6)	石英 多、 角閃石 多	淡黄色	普通	粘土積上げ	不明	ハケ目			
		—									
		—									
397	甕	(20.0)	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	ハケ痕			
		—									
		—									
398	壺	(39.8)	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明		全面風化顯著 刻目突帯あり	
		—									
		—									
399	甕	(17.8)	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目	すす付着		
		31.4									
		—									

表 96 75号住居跡出土石器計測表

号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
729	石包丁	粘板岩	(67)	33	6	19.9	

表 97 75号住居跡出土玉類計測表

番号	器種	材質	残存	色調	長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
952	小玉	ガラス	完形	—	0.3	0.3	0.1×0.1	—	

表 98 76号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
400	壺	(13.4)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	灰白色	普通	粘土積上げ	不明	不明	すす付着		
		—									
		—									
401	支脚	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	浅黄橙色	良好	粘土積上げ	ケズリ	ケズリ後ナデ			
		11.1									
		(14.0)									
402	壺	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ痕	ハケ痕		刻目の突帯あり	
		—									
		(8.0)									

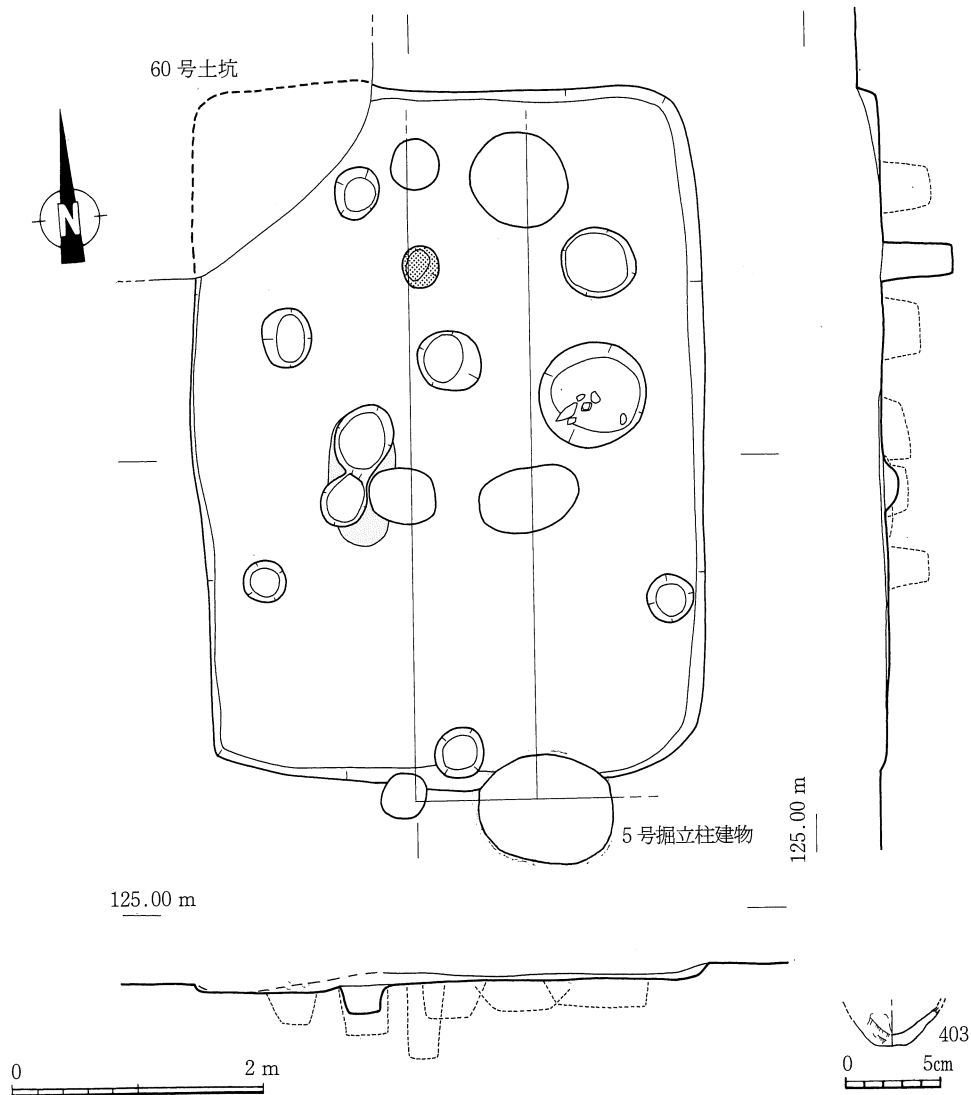
表 99 76号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
730	石包丁	粘板岩	(73)	41	6	27.0	
番号	器種	残存	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
802	紡錘車	1/2欠	5.5	—	—	—	表面磨き

77号住居跡（第127図）

77号住居跡はB-4区の西端、76号住居跡の北1.5m付近に位置する。北西コーナーを60号土坑に切れ、住居跡内には掘立柱建物跡の柱痕が位置する。規模は東西4.1m、南北5.4m、検出面からの深さは5~10cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央からやや西側で炉跡が検出されたが、柱痕によって掘り込まれている。現状で径0.6×1.1m、深さ8cm前後のレンズ状で、床面は赤変化し、内部に焼土が堆積していた。支柱穴は2本と思われるが、南側の1本は不明である。1本は径30cm、深さ56cmである。

遺物は10数点出土したが、いずれも小破片で実測できたのは403の手捏ね土器1点である。当住居跡の時期は土器からは判断が難しく、全体の様相から弥生時代後期としておく。



第127図 77号住居跡及び出土遺物実測図 (1/60・1/4)

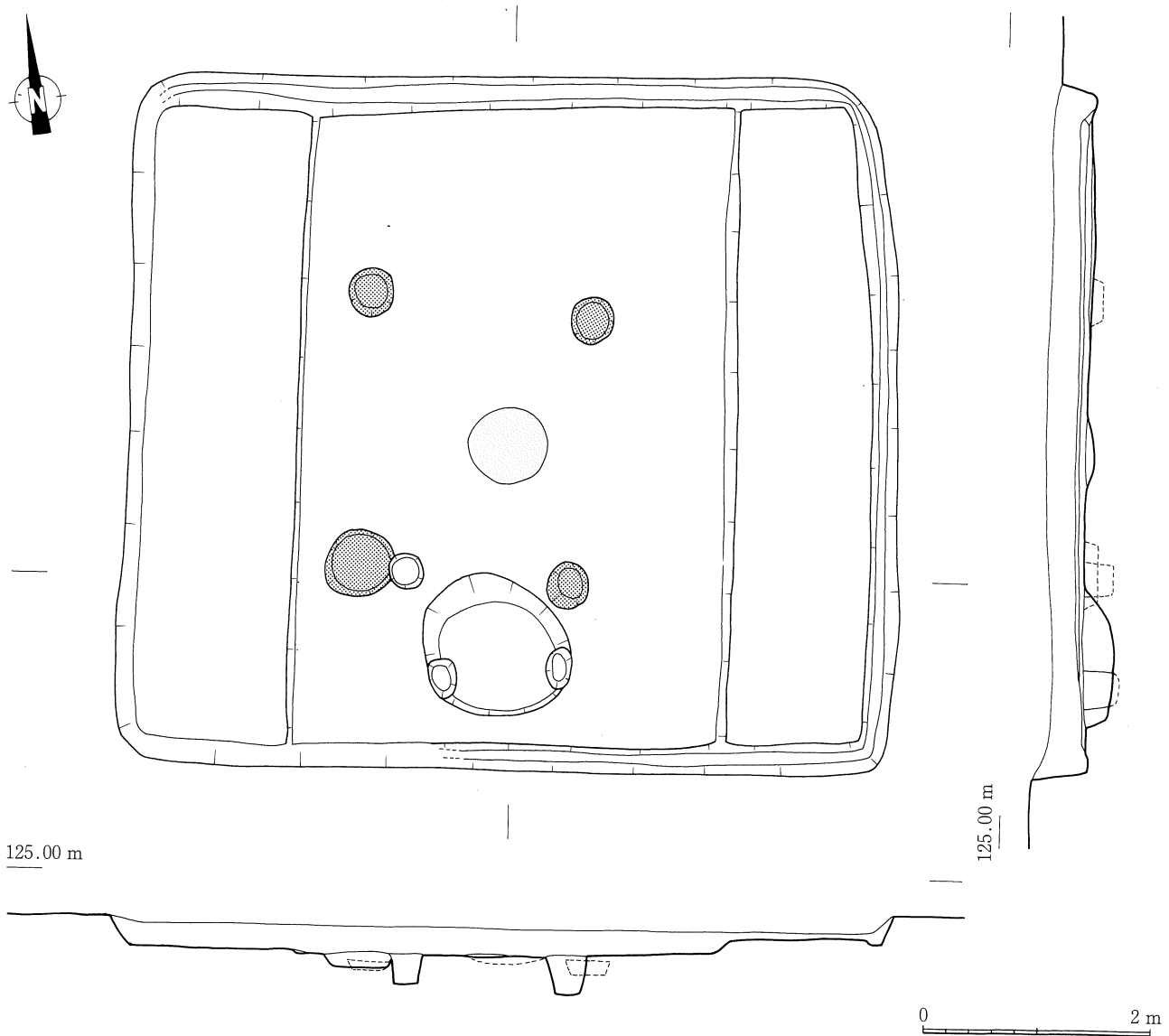
表100 77号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
403	埴	—	—	角閃石、 砂粒粗、 赤色粒子	灰白色	普通	手づくね	ハケ?	不明		
		—	—								
		2.2~2.3	—								

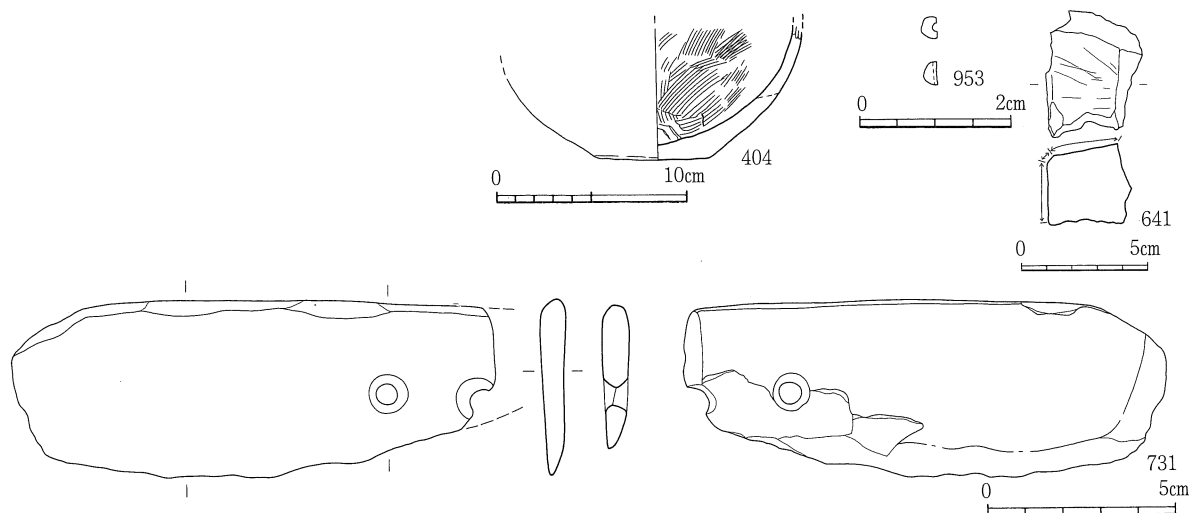
78号住居跡（第128図）

78号住居跡はB-4区の北西方向、77号住居跡の東4m付近に位置する。規模は東西6.7m、南北6.1m、検出面からの深さは30～50cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-8°-Eを示す。東壁と西壁に沿って幅約1.2～1.3m、高さ5～10cm前後のベッド状遺構が壁面と並行して施されている。また、幅20cm、深さ5～10cmの壁溝が、西壁と南壁の一部を除いて全周する。住居跡内中央には径0.7m、深さ5cm前後のレンズ状の炉跡をもつ。床面は赤変色し、内部に焼土が堆積していた。南壁中程に径1.3m、深さ30cm前後の土坑をもつ。土坑内の東西両壁には径30cm前後の柱穴が検出された。主柱穴は4本で、径40～55cm、深さ20～30cm前後、主柱穴間は東西1.9m、南北2.3mである。

遺物は埋土中から数点出土した。壺底部片(404)、ガラス小玉片(953)、砥石(641)、石包丁(731)各1点である。出土遺物が少ないため、明確な時期は判断できないが、おおよそ当住居跡の時期は弥生時代後期中葉頃と思われる。



第128図 78号住居跡実測図（1/60）



第129図 78号住居跡出土遺物実測図 (1/4・実大・1/3・1/2)

表101 78号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
404	鉢	—	—	石英 少、 角閃石 多、 赤色粒子 多	浅黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	ハケ		
		—	—								
		5.4~6.2	—								

表102 78号住居跡出土玉類計測表

番号	器種	材質	残存	色調	長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
953	小玉	—	1/2欠	—	—	0.3	0.1×0.1	—	

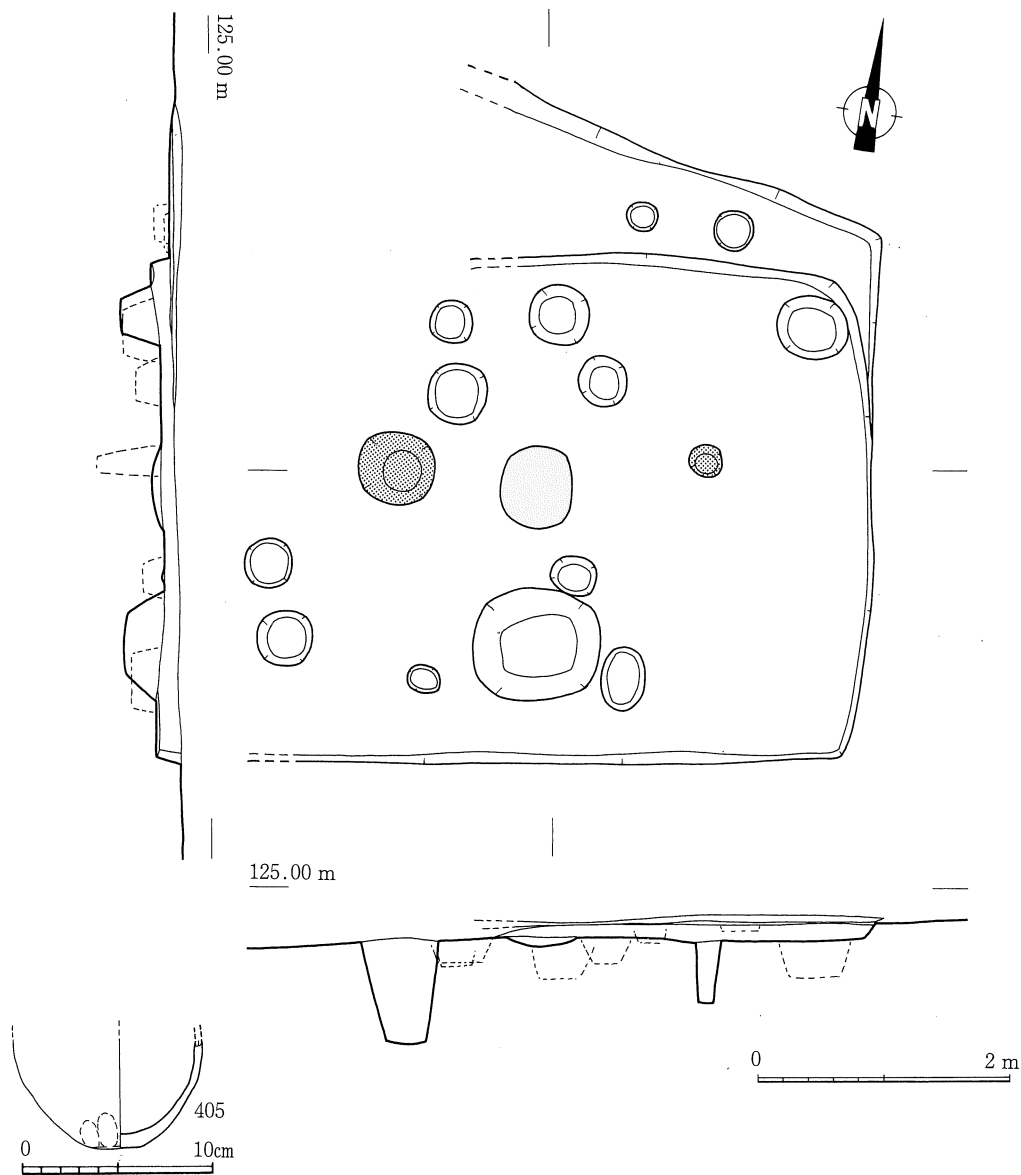
表103 788号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
641	砥石	硬質頁岩	42	33	31	59.1	
731	石包丁	安山岩	(129)	46	6	63.6	

### 79号住居跡 (第130図)

79号住居跡はB-4区中央からやや北方向、78号住居跡の北東6m付近に位置する。西側はすでに消滅している。規模は東西4+αm、南北4.0m、検出面からの深さは5~20cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-10°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.6m、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化し、内部には炭が堆積している。炉跡周辺には焼土と炭が堆積している。南壁寄り中央付近に径0.9×1.0m、深さ30cm前後の隅丸方形の土坑をもち、主柱穴は2本で、東側主柱穴は径30cmで深さ70cm、西側主柱穴は径50cm、深さ80cmである。主柱穴間は2.4mである。

遺物は埋土中から1点出土した。405の坑下半部で、底部が僅かながら凸レンズ状になる。当住居跡に伴うかは不明である。出土遺物の時期は明確ではないが弥生時代後期中葉頃と思われる。



第130図 79号住居跡および出土遺物実測図 (1/60・1/4)

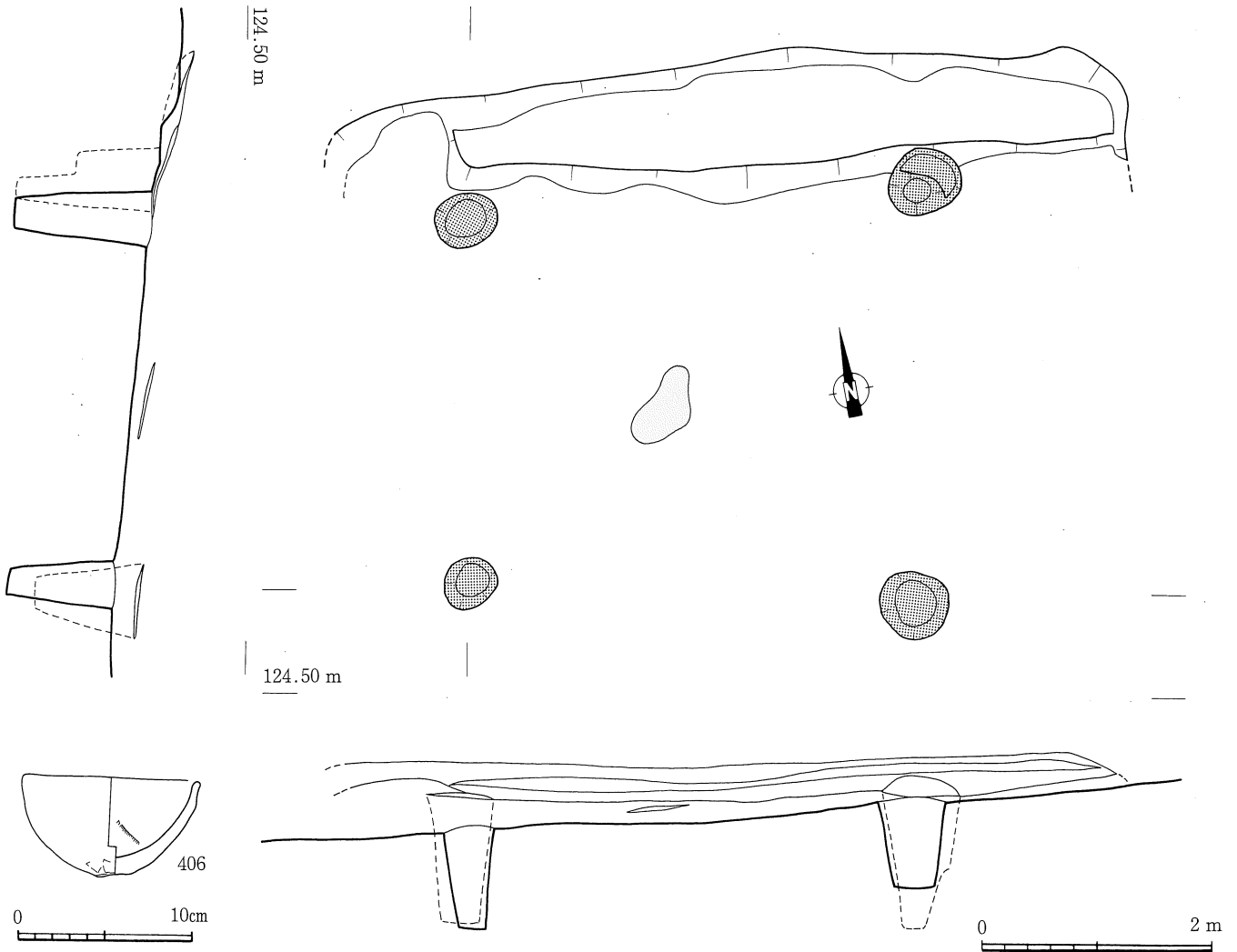
表104 79号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
405	埴			砂粒多、 長石少、 角閃石少	黒茶褐色	やや不良	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ 不明	口縁 ヨコナ デ 不明		平底
		5.7									
		2.6									

80号住居跡（第131図）

80号住居跡はB-4区の西端に位置する。南側に81号住居跡、東に71号土坑がある。当住居跡は残りが非常に悪く、北壁と炉跡・柱穴を残すだけである。規模は東西4.7m前後、南北は不明、深さはほとんどない。平面形は方形あるいは長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居跡内中央と思われる地点には径0.55m、深さ6cm前後のレンズ状の炉跡が残り、床面は赤変色している。支柱穴は4本で、径40cm、深さ50~70cm前後、支柱穴間は2.3~2.8mである。

遺物は北西コーナー付近から1点出土した。406の塊で土圧で押しつぶされた状態で出土した。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期後葉頃と思われる。



第131図 80号住居跡及び出土遺物実測図（1/60・1/4）

表105 80号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
406	塊	(9.8)		石英、 角閃石 多	外面 灰白 色 内面 浅黄 橙色	不良	粘土積上 げ	不明	不明	すず付着	
		5.5~5.7									
		1.9~2.1									



### 81～83号住居跡（第132図）

81～83号住居跡はB-4区の西端付近に位置する。まず、81号住居跡が先行し、その後、82号住居跡が、さらに83号住居跡がそれぞれ北から南方向へと順に構築されている。81・82号住居跡は円形住居跡である。

81号住居跡は3軒中では一番北に位置する。北側を80号住居跡に、南側部分を82号住居跡に切られている。規模は径7.7m前後の円形住居跡で、検出面からの深さは20cm程度である。壁面に沿って幅25～40cm、深さ10～20cmの壁溝が巡る。住居跡のほぼ中央にあたる位置で、検出段階では82号住居跡の床面にあたる部分から被熱を受けた場所を検出した。この場所が81号住居跡の炉跡と考えられるが、82号住居跡によって削平・攪乱を受けているため残りはよくない。主柱穴は6本で、径40cm、深さ40～60cm前後である。主柱穴間は2.0～2.8mである。

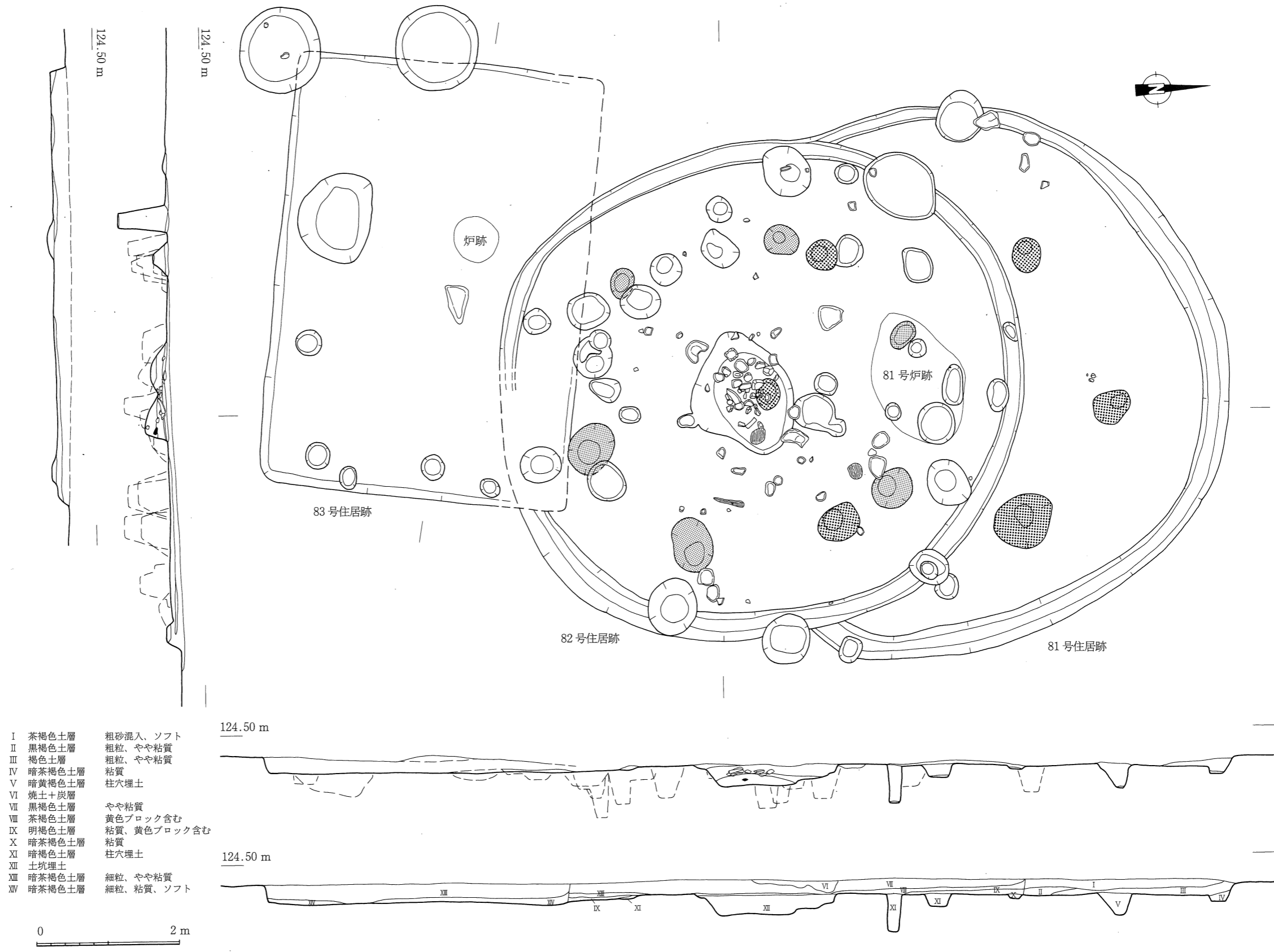
遺物は数点出土したが、実測できたのは407の壺口縁部の1点だけである。住居跡の形態と出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。

82号住居跡は3軒中では中央に位置し、深度は浅いが全体の残りは比較的良い。規模は径6.9～7.3m前後の円形住居跡で、検出面からの深さは2～10cmである。壁面に沿って幅30cm、深さ10cm前後の壁溝が巡る。住居跡内中央には径1.5m前後の不定形をした炉跡を検出した。深さ20cm前後で、内部には焼土と炭に混じって径10cm前後の礫が多量に出土した。また、炉跡東側からは焼土・炭層が数カ所で検出された。主柱穴は6本で、径50～60cm、深さ60～70cm前後、主柱穴間は2.2～2.8mである。

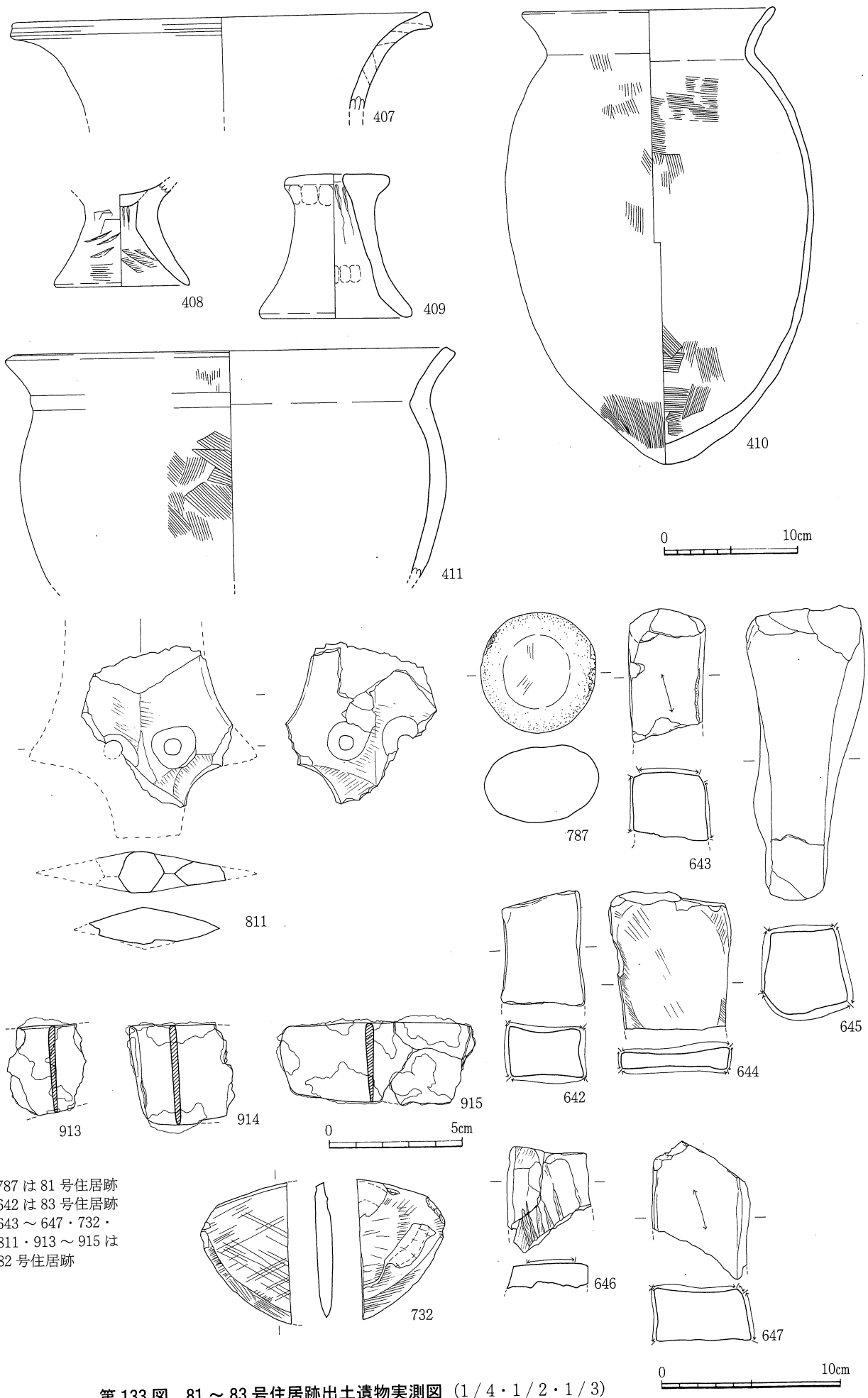
遺物は住居跡床面から弥生土器破片10数点が出土したが、小破片で実測不可能であった。また、石戈の一部や砥石、鉄鎌等が出土しているが、いずれも埋土中からの検出のため、当住居跡に伴う遺物かどうかは不明である。当住居跡の時期は切り合い関係や形態から考えて、弥生時代中期後半頃と推測する。

83号住居跡は3軒中では一番南に位置する。北壁部分は82号住居跡の掘りすぎによって壁面の検出がうまくできなかった。規模は東西6.1m、南北4.4m、検出面からの深さは15～20cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-10°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は施されていない。住居跡内中央には径0.6m、深さ10cm前後のレンズ状をした炉跡をもつ。床面は赤変化し、内部には焼土・炭が堆積していた。南壁寄りの中央付近に1.0×1.3m、深さ20cm前後の不定形土坑をもつ。主柱穴は2本と思われるが、検出できなかった。

遺物は住居跡内から土器数点と砥石1点(642)が出土した。出土土器は高坏(408)・支脚(409)・甕(410)・壺(411)である。いずれも埋土中からの出土であり、当住居跡に伴うかは確認できなかった。当住居跡の時期は確定できないが、出土土器の時期は、弥生時代後期後終末頃と推測する。



第132図 81～83号住居跡実測図 (1/60)



787 は 81 号住居跡  
 642 は 83 号住居跡  
 643 ~ 647 · 732 ·  
 811 · 913 ~ 915 は  
 82 号住居跡

第 133 図 81 ~ 83 号住居跡出土遺物実測図 (1/4 · 1/2 · 1/3)

表 106 81号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
407	壺	(30.2)	角閃石 多、 赤色粒子 多	黄橙色	普通	粘土積上げ	不明	不明			
		—									
		—									

表 107 81号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
787	磨石	砂岩	67	64	41	209.7	

表 108 82号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
811	石戈	頁岩	55	53	13	44.4	
643	砥石	頁岩質砂岩	70	41	36	192.0	
644	砥石	硬質頁岩	(78)	60	12	(85.1)	
645	砥石	頁岩質砂岩	162	64	46	524.1	
646	砥石	硬質頁岩	60	47	13	39.6	
647	砥石	硬質頁岩	(56)	54	29	(157.8)	
732	石包丁	石材不明	(33)	53	6	—	

表 109 82号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎幅 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
913	鎌	(2.9)	—	3.2	—	0.2	
914	鎌	(3.6)	—	3.7	—	0.3	
915	鎌	(7.3)	—	3.0	—	0.3	

表 110 83号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
408	高坏	(10.8~11.6)	砂粒 非常に多、 長石 少、 赤色粒子 多、 黒色粒子 多、 角閃石 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	不明	ナデ	赤変一 二次加熱 あり		
		10.8									
		—									
409	支脚	—	砂粒 少、 長石 多、 角閃石 少、 石英 少	淡黄赤褐色	良好	連続成形+円盤 充填	タタキ後ハケ	ヨコハケ目	黒変~赤 変一二次 加熱あり		
		—									
		10.2									
410	甕	(19.2)	砂粒 非常に多、 長石 多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 石英 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ ハケ目	口縁 ヨコナ デ タテ・ヨコの ハケ目			
		34.2									
		—									
411	壺	(34.0)	砂粒 非常に多、 黒曜石 少、 赤色粒子 多、 角閃石 少、 長石 少	灰褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ ハケ目	口縁 ヨコナ デ 不明	赤変一 二次加熱 あり?		
		—									
		—									

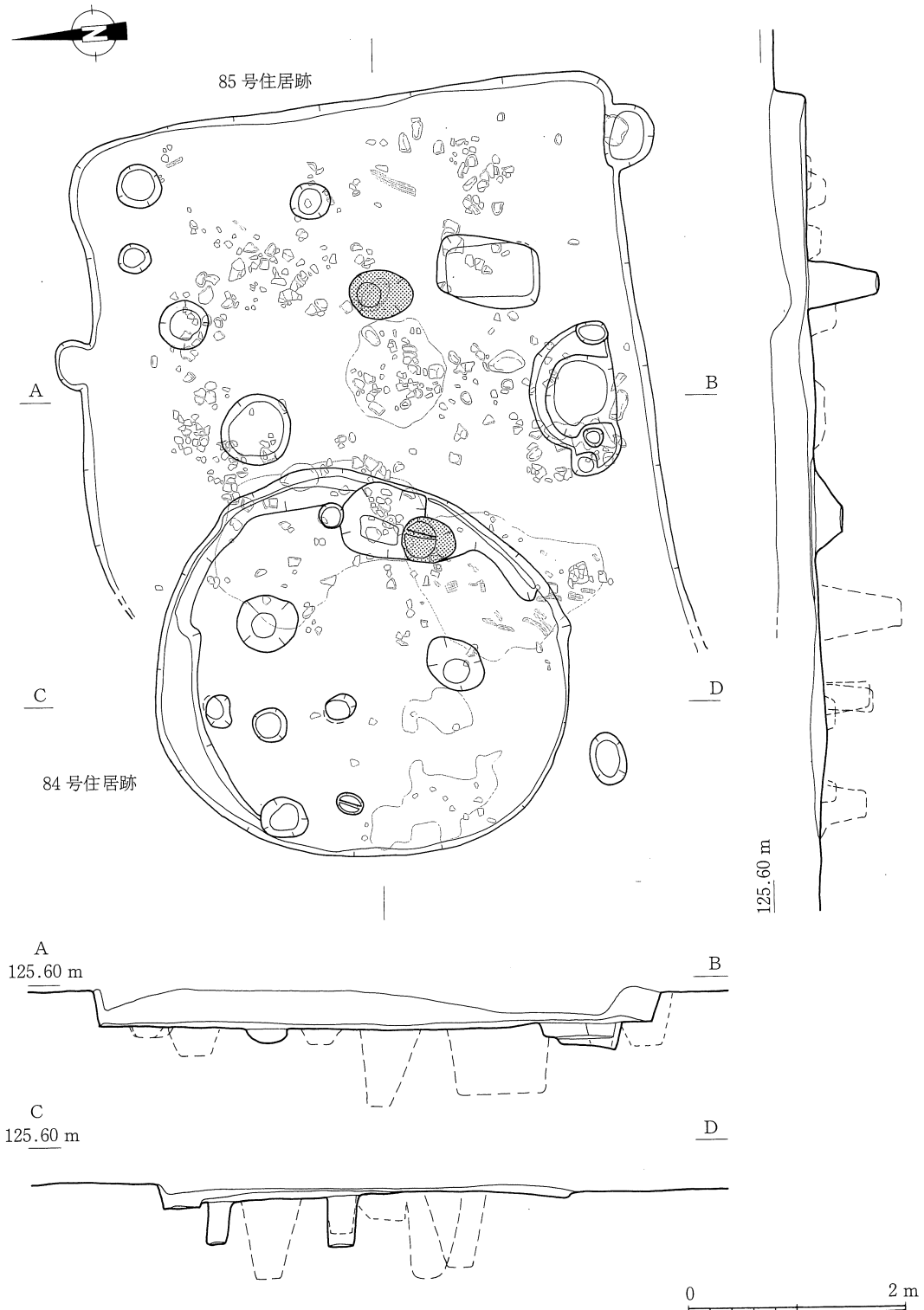
表 111 83号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
642	砥石	頁岩質砂岩	(64)	41	28	(152.8)	

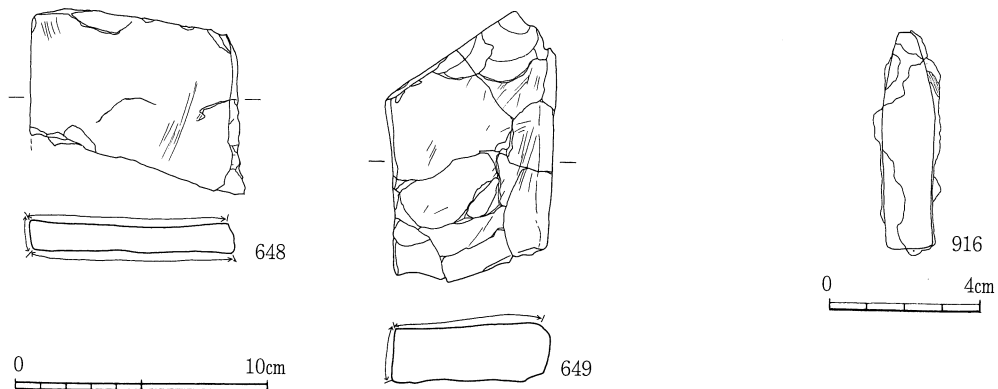
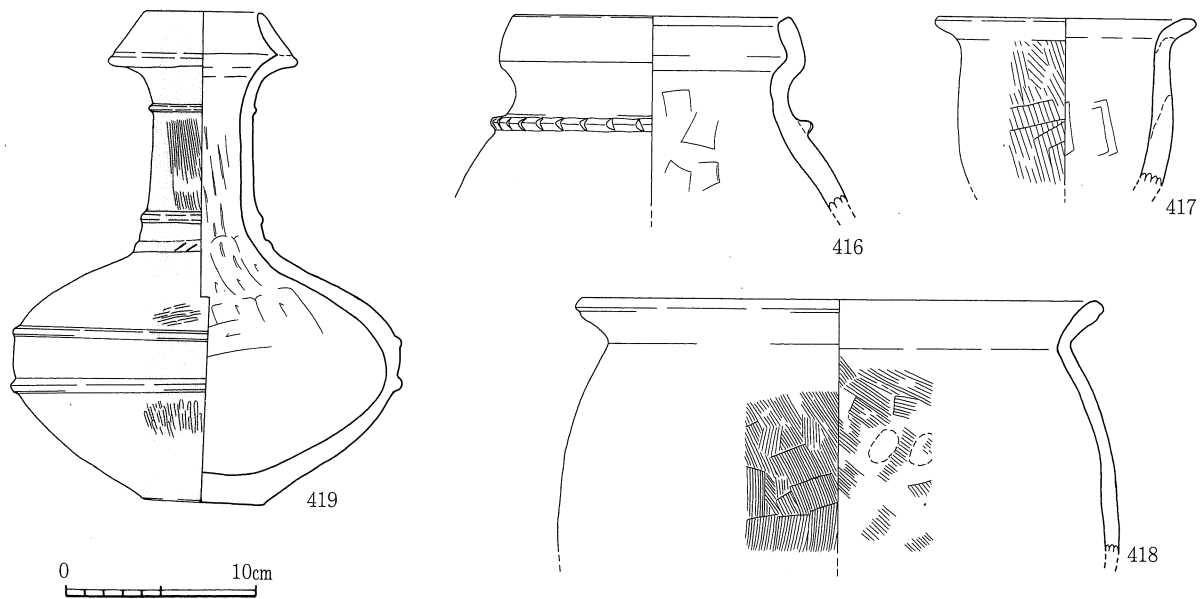
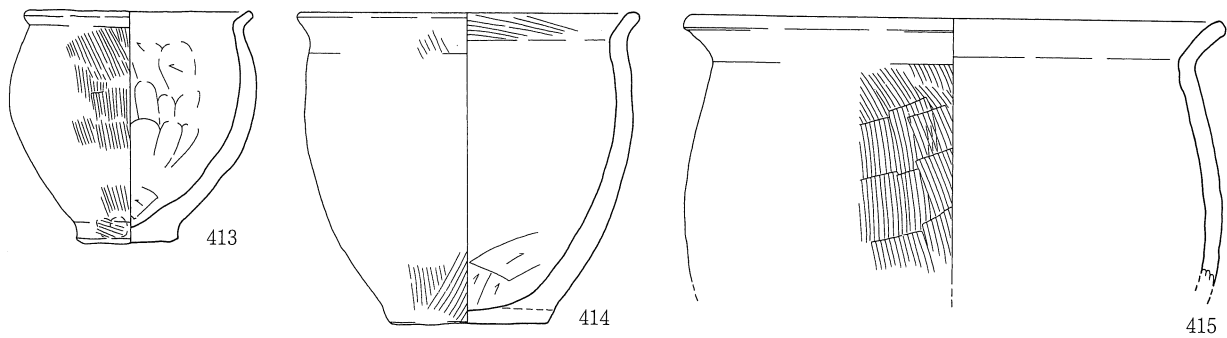
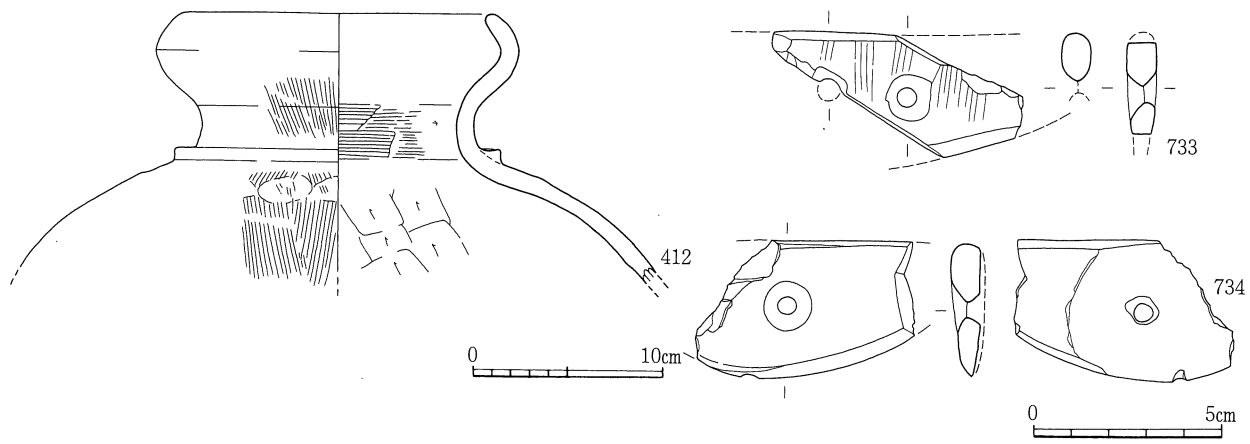
84・85号住居跡（第134図）

84・85号住居跡はB-4区の南西隅、83号住居跡の南1m付近に位置する。84号住居跡が西に位置し、その東側上部に84号住居跡を切って85号住居跡が位置する。85号住居跡は深度が浅いため、84号住居跡は床面をほぼ原形のまま残している。

84号住居跡は85号住居跡に切られているが、深度が深いため比較的残りがよい。規模は径3.55～3.8mの小型の円形住居跡で、検出面からの深さは5～10cmである。北西から南東にかけて壁面に沿って、幅20～30cm、深さ8cm程度の壁溝が巡る。炉跡・支柱穴は確認できなかった。



第134図 84・85号住居跡実測図 (1/60)



第 135 图 84·85 号住居跡出土遺物実測図 (1/4·1/2·1/3)

遺物は焼土層および埋土中から土器小破片が出土した。当住居跡に伴うと思われるのは412の壺上半部である。土器からみた当住居跡の時期は、弥生時代中期後半～後期初頭頃と思われる。

85号住居跡は西側が削平によって削り取られ、西壁は検出されなかった。規模は東西5.2 + α m、南北5.15 m、検出面からの深さは20～30cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-4°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。明確な炉跡は確認できなかったが、中央部で焼土に覆われたレンズ状に窪んだ浅い掘り込みが確認された。南壁中程には0.8 × 1.1 m、深さ20cm前後の土坑をもつ。支柱穴は2本で、径50cm、深さ70cm前後、支柱穴間は2.4 mである。

遺物は住居跡内から多量に出土したが、いずれも小破片であり、一部流れ込みの可能性をもつ。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭頃と思われる。

表 112 84号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
412	壺	(16.6)	—	角閃石 やや多、 石英 やや多、 赤色粒子 少	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ケズリ		
		13.7									
		—									

表 113 84号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
733	石包丁	粘板岩	(25)	(47)	7	(18.9)	
734	石包丁	結晶片岩	(59)	37	(8)	(21.0)	

表 114 85号住居跡出土土器観察表

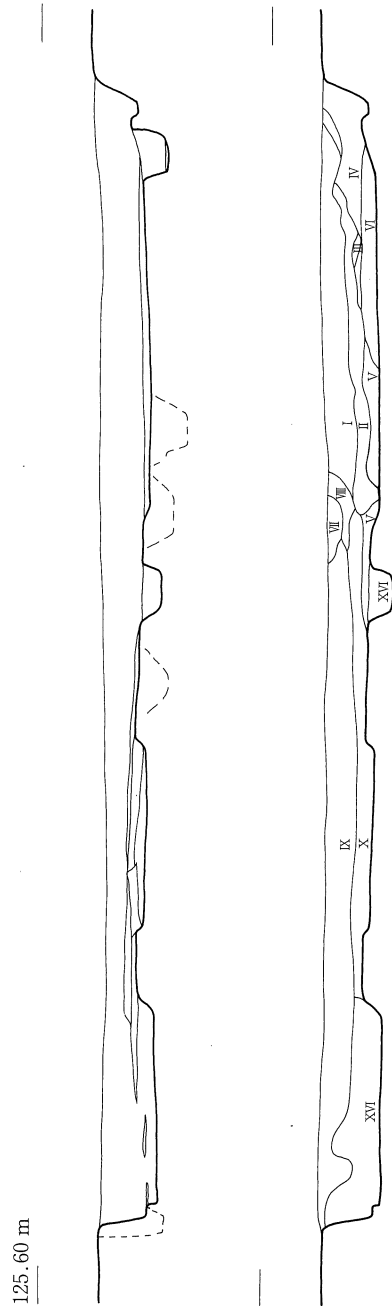
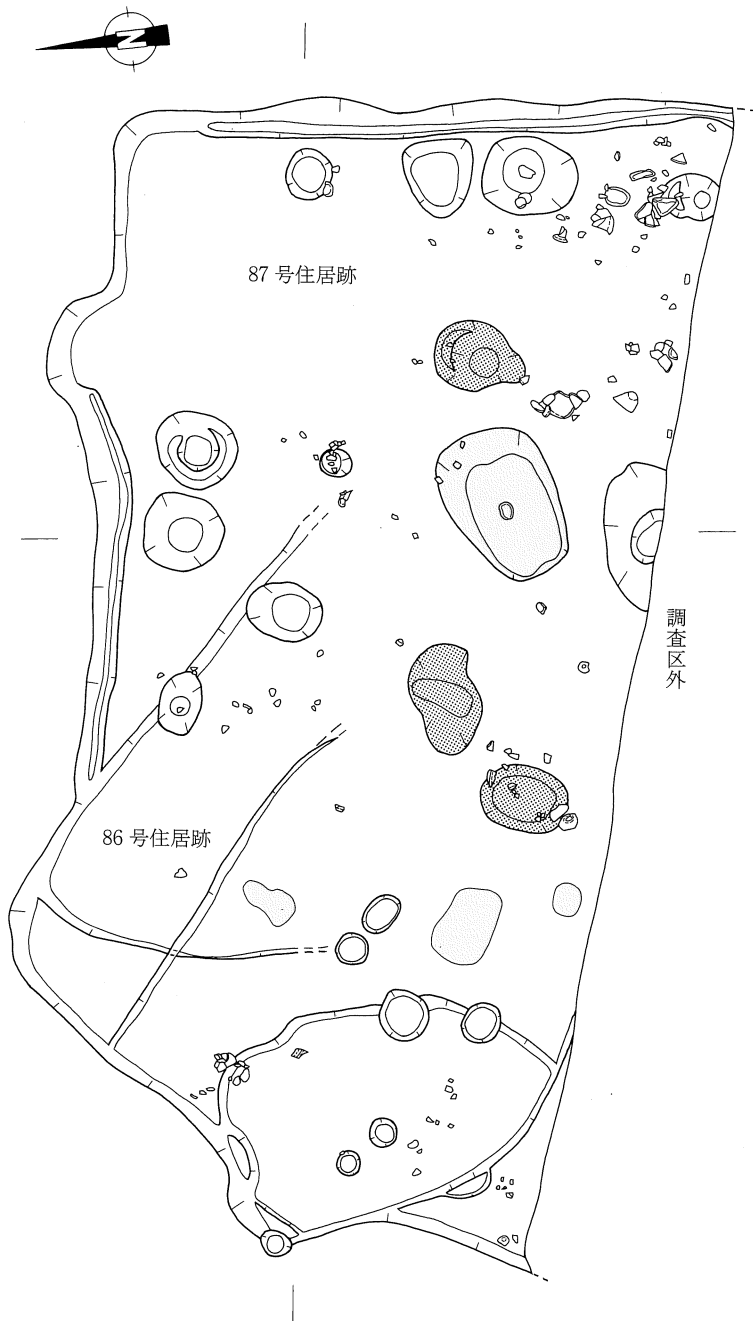
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
413	壺	11.9～12.3	—	角閃石 少、 石英 多、 赤色粒子 微	橙色 暗褐色 混合	良好	粘土積上げ	ハケ	指ナデ		
		12.3～12.5									
		4.7									
414	壺	18.4	—	角閃石 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ後ハケ ハケ残存	口縁 ヨコナ デ後ハケ ケズリ残存		
		16.7									
		8.2									
415	甕	(29.0)	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少、 角閃石 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ タテハケ目	口縁 ヨコナ デ ナデ		
		—									
		—									
416	壺	(15.0)	—	砂粒 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少、 角閃石 少、 長石 少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ ヨコナデ	口縁 ヨコナ デ ハケナデ		刻目の三角突 帯あり
		—									
		—									
417	甕	(14.0)	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多	茶褐色	良好	粘土積上げ (内傾接合)	口縁 ヨコナ デ タテハケ目	口縁 ヨコナ デ ヘラナデ		
		—									
		—									
418	甕	(28.2)	—	砂粒 多、 長石 多、 角閃石 少	茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ タテハケ目	口縁 ヨコナ デ 斜めのハケ目		
		—									
		—									
419	壺	(6.2)	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	外面 赤色 内面 黒褐 色	良好	粘土積上げ	不明	不明		丹塗り
		26.2									
		6.2									

表 115 85号住居跡出土石器計測表

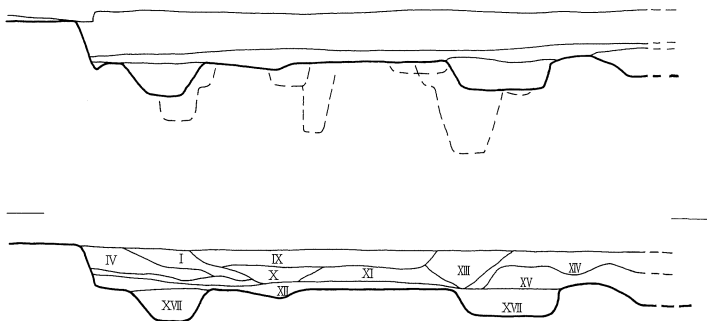
番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
648	砥石	硬質頁岩	63	83	11	(121.8)	
649	砥石	硬質頁岩	99	68	22	236.8	

表 116 85号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎幅 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
916	鈍	(5.8)	—	1.4	—	—	木質片付着



125.60 m



- |      |             |              |
|------|-------------|--------------|
| I    | 暗茶褐色土層      | 粗粒、流込み埋土     |
| II   | 黒褐色土層       | やや粘質、炭・遺物含む  |
| III  | 黄褐色土層       | 粘質、地山土の堆積    |
| IV   | 暗黒褐色土層      | 粘質、炭・遺物含む    |
| V    | 暗黄褐色土層      | 粘質、遺物含む      |
| VI   | 黄褐色土層+黒褐色土層 | 粘質、ハード、貼床部分  |
| VII  | 暗黒褐色土層      | 粗粒           |
| VIII | 茶褐色土層       | 粗粒、ハード       |
| IX   | 黒褐色土層       | やや粗粒、遺物含む    |
| X    | 暗茶褐色土層      | 細粒、粘質、炭・遺物含む |
| XI   | 黄褐色土層       | ハード、礫混入      |
| XII  | 黒褐色土層       | ソフト、炭・遺物含む   |
| XIII | 暗茶褐色土層      | 粗粒、ハード、炭含む   |
| XIV  | 暗茶褐色土層      | 粗粒、黄褐色ブロック含む |
| XV   | 暗茶褐色土層      | 細粒、ソフト、遺物含む  |
| XVI  | 黒褐色土層       | 粘質、土坑埋土      |
| XVII | 黒褐色土層       | 粘質、柱穴埋土      |

0 2 m

第 136 図 86・87 号住居跡実測図 (1/60)



86・87号住居跡（第136図）

86・87号住居跡はC-4区の北側、調査区の南端に位置し、両住居跡の南側は調査区外である。87号住居跡が先行する。

86号住居跡は87号住居跡の西に位置する。87号住居跡を切って構築されているが、調査時に切り合いが判りずらかったため、壁の大部分を掘り抜いている。また、南側部分は調査区外のため、未調査である。規模は長軸・短軸とも不明、検出面からの深さは約30cmである。平面形は方形あるいは長方形を呈すと考える。主軸方位はN-38°-Eを示す。北壁に沿って幅1.1m、高さ10cm前後のベッド状遺構を付設している。壁溝は検出されなかった。住居跡中央付近に0.4×0.7m、深さ5cm程の楕円形をした浅いレンズ状の窪みを確認した。炉跡と考えられる。西壁中程では1.5×2.5m、深さ50cm前後の不定形土坑を検出した。土坑上部からは椎の実が多量に出土した。支柱穴は2本で、西側の支柱穴は土坑によって削平されていると思われる。

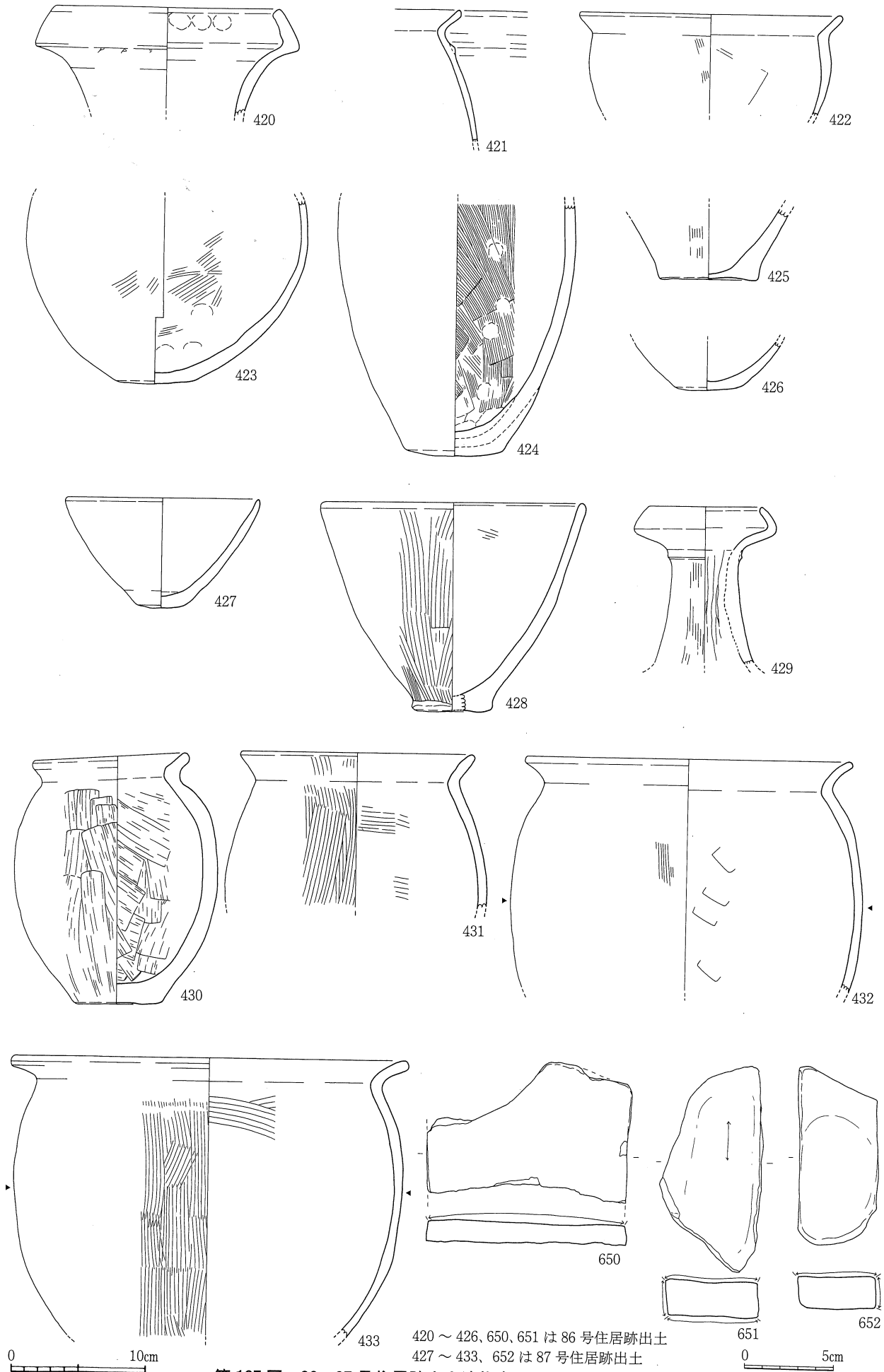
遺物は床や埋土中から比較的多く出土した。出土遺物は第137図の420～426の土器と650・651の砥石である。当住居跡の時期は、弥生時代後期中葉～後葉頃と思われる。

87号住居跡は86号住居跡に西側を切られ、南側は調査区外である。規模は東西4.48m前後、南北は不明である。検出面からの深さは25～35cmで、平面形は方形あるいは長方形を呈していると考えられる。主軸方位はN-10°-Wを示す。部分的に消滅しているが、幅25cm、深さ10cm前後の壁溝が施されている。86号住居跡によって一部破壊を受けているが、住居跡中央付近で炉跡を検出した。炉使用時の大きさは不明で、深さは約20cmである。内部には焼土と炭が堆積していた。支柱穴は2本で、炉跡を挟んで東西に位置する。径50cm、深さ50～70cm前後、支柱穴間は2.6mである。

遺物は炉跡を中心に東側で比較的多量に出土した。出土遺物は第137図の427～433の土器と652の砥石である。当住居跡の時期は、86号住居跡とほぼ同様に弥生時代後期中葉～後葉頃と思われる。

表 117 86号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
420	壺	(16.8)	角閃石 多、 長石 多、 石英 少、 赤色粒子、 小礫 多	外面 黄橙 内面 浅黄 橙色	普通	粘土積上げ	ナデ	ヨコナデ		刺突文あり	
		—									
		—									
421	甕	—	角閃石 少、 砂粒 多、 長石 少	灰白色	やや不良 黒斑	粘土積上げ		平滑なナデ			
		—									
		—									
422	鉢	19.6	角閃石 少、 砂粒 多、 長石	淡黄褐色 黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナ デ タテハケ	口縁 ヨコナ デ ヘラ状工具による 平滑なナデ			
		—									
		—									
423	壺	—	角閃石 少、 長石、 砂粒 多、 白色粒子	外面 橙色 内面 黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目 ナデ			
		—									
		5.8									
424	甕	—	角閃石、 長石 多、 白色粒子、 赤色粒子、 砂粒 多	黄橙色	普通 黒斑	粘土積上げ		タテハケ			
		—									
		7.2～7.6									
425	甕	—	角閃石、 長石	浅黄橙色	やや不良		タテナデ ヨコナデ	ナデ			
		—									
		7.5									
426	壺	—	角閃石 多、 長石 多、 赤色粒子、 小礫 多	浅黄橙色	普通 黒斑		不明	不明			
		—									
		4.8～5.0									



第137図 86・87号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

表 118 86号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
650	砥石	硬質頁岩	(70)	112	12	(153.9)	
651	砥石	頁岩質砂岩	115	57	21	203.7	

表 119 87号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
427	鉢	(14.4)	角閃石、 長石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 多	外面 浅黄 橙色 内面 橙色	やや不良 黒斑			不明	不明		
		8.3									
		3.4									
428	鉢	(19.6)	角閃石 少、 砂粒 多、 白色粒子 多	橙色	普通 黒斑	粘土積上 げ		口縁 ナデ タテハケ	ヨコナデ ハ ケ目 平滑なナデ		
		15.8									
		(5.6)									
429	壺	8.5	角閃石、石英、 長石 多、 白色粒子、 小礫 多	外面 浅黄 橙色・橙色 内面 橙色	やや不良	粘土積上 げ		タテハケ			絞り痕あり
		—									
		—									
430	壺	11.2	角閃石、 砂粒 多、 長石	外面 浅黄 橙色 内面 橙色	普通 黒斑	粘土積上 げ		口縁 ヨコナ デ タテハケ目	口縁 ヨコナ デ タテハケ ナナメハケ		非常に厚く重 い
		18.6									
		6.8									
431	甕	17.4	角閃石 少、 長石 少、 小礫 多、 白色粒子 多、 砂粒	橙色	やや不良	粘土積上 げ		口縁 ナデ タテハケ	口縁 ナデ ヨコハケ		
		—									
		—									
432	甕	(24.4)	石英 非常に多、 砂粒 多	外面 橙 色～黄橙色 内面 淡黄 色～黄橙色	やや不良 黒斑	粘土積上 げ		口縁 ヨコナ デ タテハケ	口縁 ヨコナ デ ヘラナデ		
		—									
		—									
433	壺	30.1	砂粒 多、 角閃石 多、 灰色粒子 少	淡黄褐色	良好	粘土積上 げ		口縁 ヨコナ デ タテハケ	口縁 ヨコナ デ ヨコハケ		赤変一 2次加熱 あり
		—									
		—									

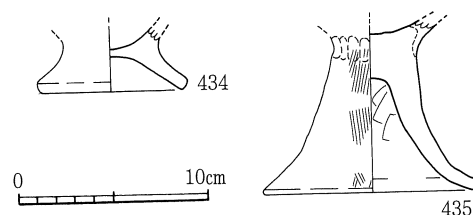
表 120 87号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
652	砥石	千枚岩	97	44	18	148.8	

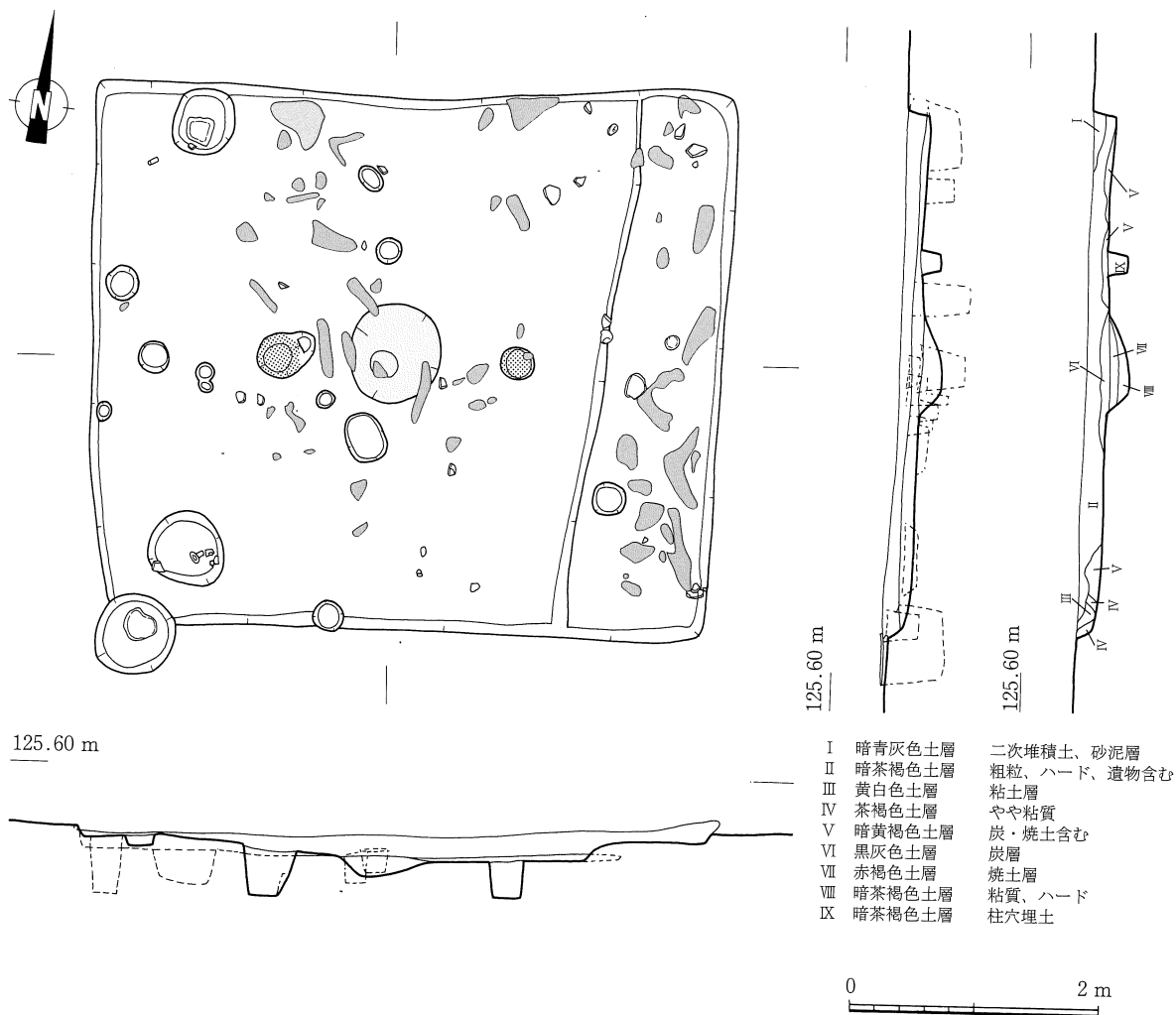
88号住居跡 (第 139 図)

88号住居跡はB-4区の南側、86・87号住居跡の北東2.5m付近に位置する。規模は東西5.04m、南北4.17m、検出面からの深さは10～20cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-7°-Wを示す。東壁に沿って幅約1.0m、高さ5～10cm前後のベッド状遺構を施している。壁溝は付設されていない。住居跡内中央には径0.7m、深さ15cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変化、内部には焼土と炭が堆積していた。床面のほぼ全域から炭化木が検出された。消失住居の可能性をもつ。支柱穴は2本で、径30cm、深さ30～40cm前後、支柱穴間は1.3mである。

遺物は南西コーナー付近に位置する柱穴内から数点の土器が出土した。434の脚付鉢脚部と435の高坏脚部である。出土遺物からみた当住居跡の時期は明確ではないが、おおよそ弥生時代後期中葉～後葉頃と思われる。



第 138 図 88号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第 139 図 88 号住居跡実測図 (1 / 60)

表 121 88 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
434	脚付鉢	—	—	砂粒 多、 角閃石 多、 石英 非常に多、 赤色粒子 少	暗褐色	やや不良	円盤充填?	ヨコナデ	ナデ		
		(7.6)	—								
435	高坏	—	—	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 多、 長石 多、 金色粒子 少	淡黄褐色	良好	分割成形	タテハケ	タテハケ		
		11.2 ~ 11.7	—								

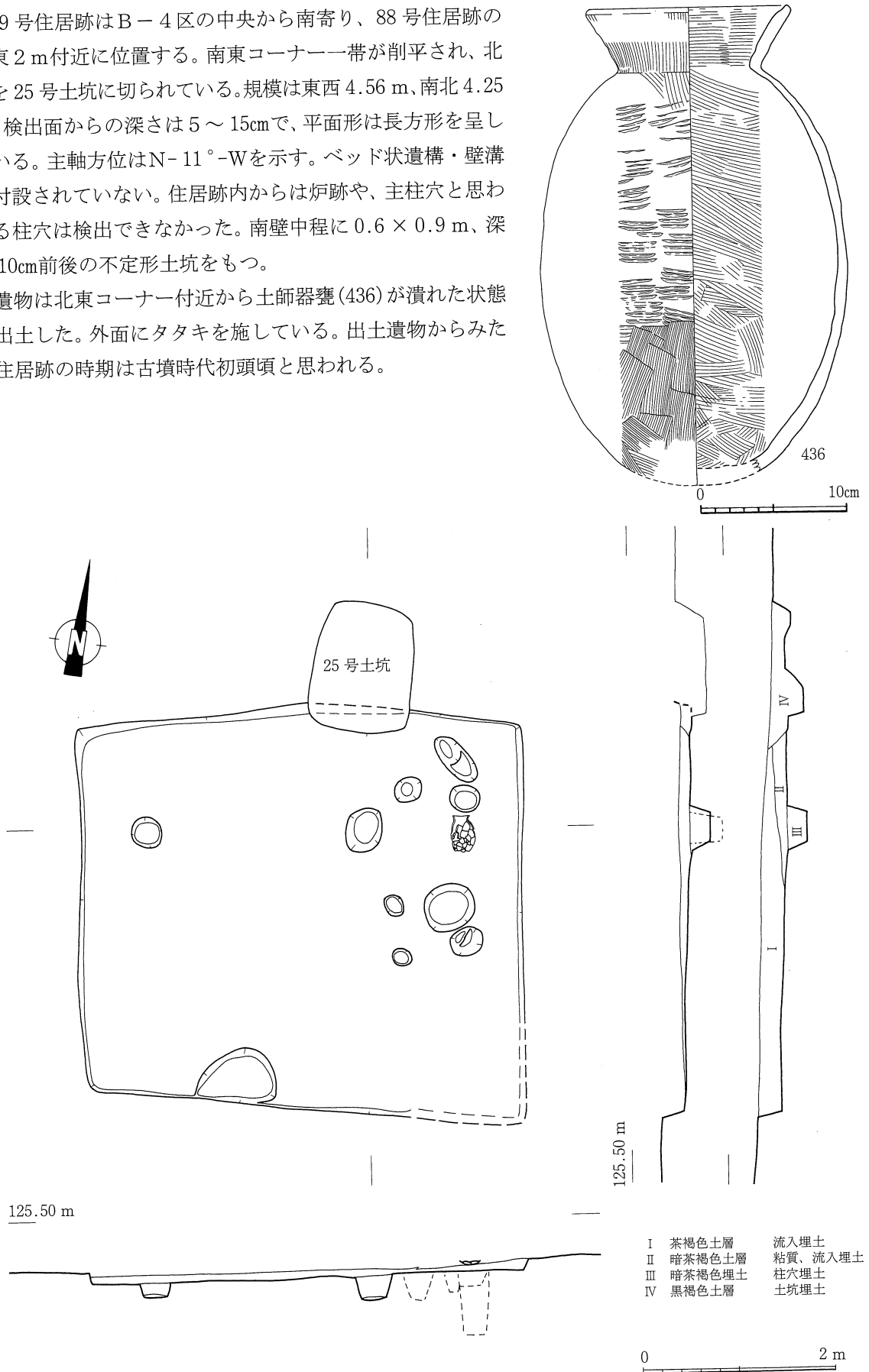
表 122 89 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
436	甕	(14.3)	—	砂粒 多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	暗茶褐色	良好	タタキ成 形	平行タタキ から タテハケ目	ヨコハケ目		
		33.2	—								
		—	—								

89号住居跡（第140図）

89号住居跡はB-4区の中央から南寄り、88号住居跡の北東2m付近に位置する。南東コーナー一帯が削平され、北壁を25号土坑に切られている。規模は東西4.56m、南北4.25m、検出面からの深さは5~15cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-11°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。住居跡内からは炉跡や、主柱穴と思われる柱穴は検出できなかった。南壁中程に0.6×0.9m、深さ10cm前後の不定形土坑をもつ。

遺物は北東コーナー付近から土師器甕(436)が潰れた状態で出土した。外面にタタキを施している。出土遺物からみた当住居跡の時期は古墳時代初頭頃と思われる。

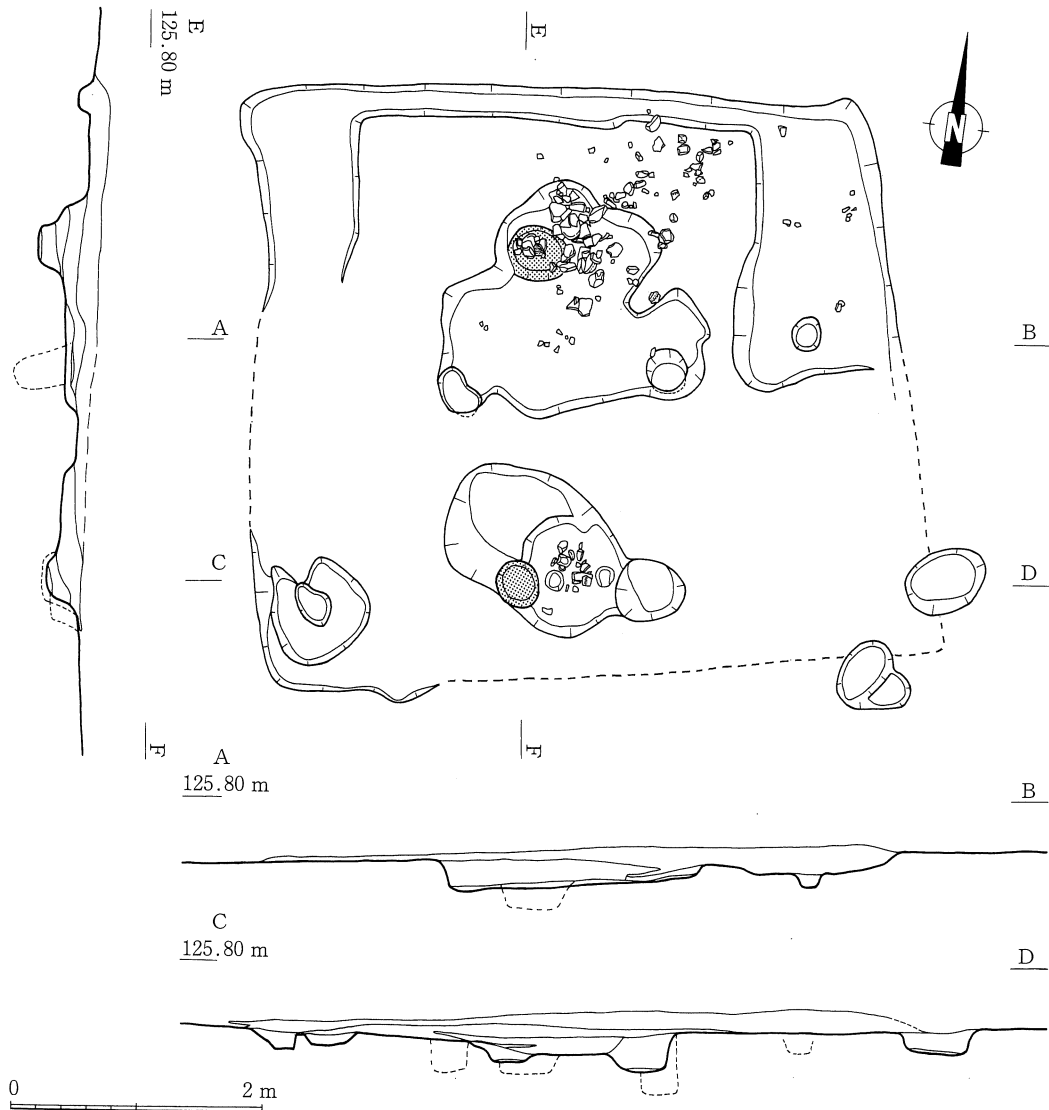


第140図 89号住居跡及び出土遺物実測図 (1/4・1/60)

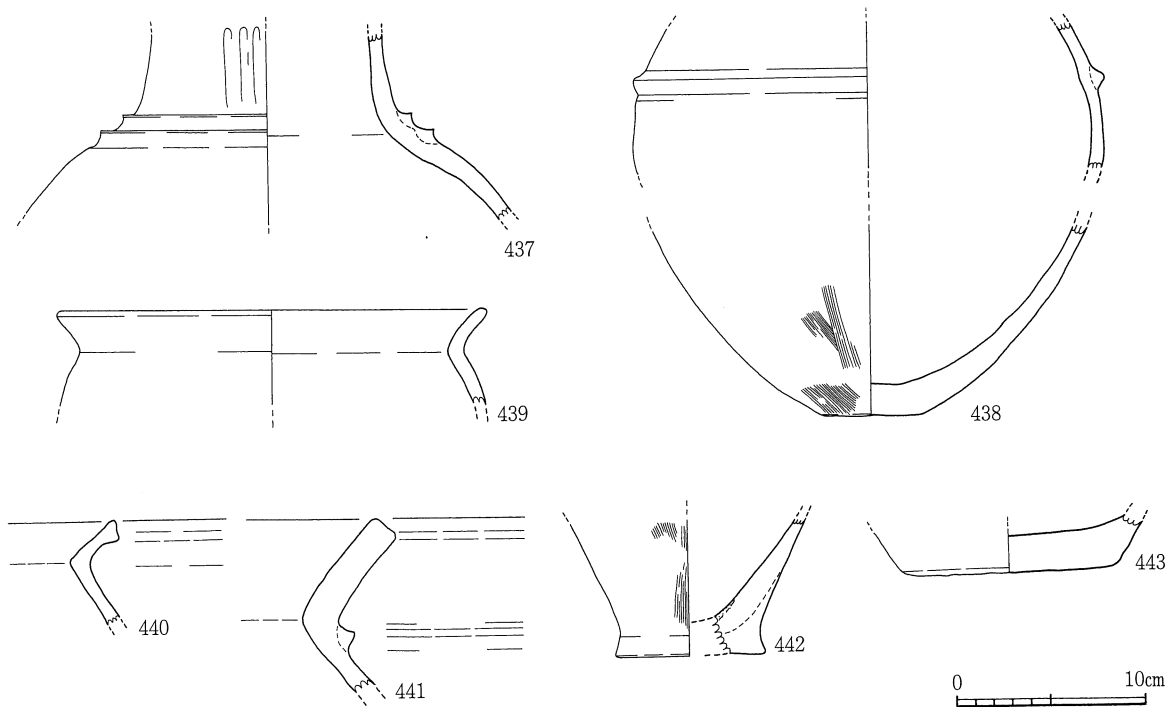
90号住居跡（第141図）

90号住居跡はB-4区の南端、88号住居跡の東6m付近に位置する。南側部分は後世の攪乱を受けていて、南西コーナーと住居跡内土坑等の下部施設が残るだけである。規模は東西5.1m、南北4.76m、検出面からの深さは残存部分で10～15cm、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。内部も攪乱を受け、炉跡は検出できなかった。主柱穴は2本で、径40～50cm、深さ30cm前後、主柱穴間は2.7mである。

遺物は北側の残存部分と土坑内を中心に出土したが、北側部分は大部分が一括で破棄された状態で床面から浮いて出土した。土坑内からは438の壺と442の甕底部が出土した。時期は弥生時代中期後半頃と思われる、当住居跡に伴う土坑ではないと考える。他は北側からの出土であるが、弥生時代前期末～中期初頭頃の437の壺や、後期の甕など時期が一定していない。このため、当住居跡の時期は、弥生時代後期中葉前後頃かそれ以降と思われる。



第141図 90号住居跡実測図 (1/60)



第 142 図 90 号住居跡出土遺物実測図 (1 / 4)

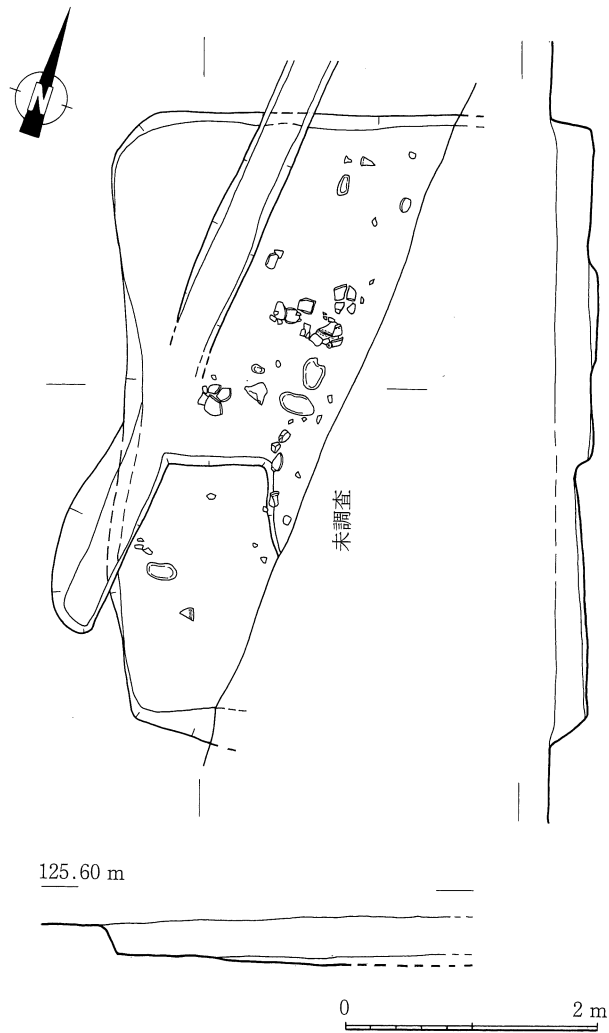
表 123 90 号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
437	壺	—	—	白色粒子多、 角閃石多、 赤色粒子微、 砂粒少	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ		不明		頸部に三角突帯 2 個あり
		—	—								
		—	—								
438	壺	—	—	砂粒多、 赤色粒子、 角閃石、 石英	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	タテハケ目	不明		装飾—一条三角突帯あり
		—	5.2								
		(22.8)	—								
439	甕	—	—	砂粒多、 角閃石	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—	—								
		—	—								
440	甕	—	—	小礫多、 赤色粒子少、 角閃石、 石英多	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	不明		
		—	—								
		—	—								
441	甕	—	—	砂粒多、 石英	淡黄褐色	やや不良	粘土積上げ	不明	ハケ目?		
		—	—								
		—	—								
442	鉢	—	—	砂粒多、 長石多、 赤色粒子少	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	不明		
		—	(8.0)								
		—	—								
443	甕	—	—	角閃石、 肌色粒子	淡黄褐色	不良		不明	不明		
		—	—								
		(11.6)	—								

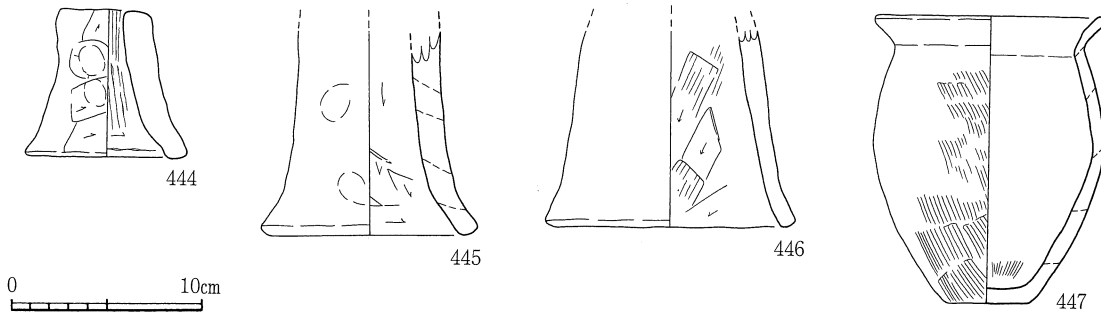
91号住居跡（第143図）

91号住居跡はB-4区の南東方向、90号住居跡の東1.5m付近に位置する。東側の大半は農道下のため未調査である。また、住居跡内部を南北に現代溝が走る。規模は東西2.6+αm、南北4.83m、検出面からの深さは25cm前後で、平面形は方形あるいは長方形を呈している。主軸方位はN-20°-Wを示す。南西コーナーから西壁に沿って幅約1.1m、長さ2.0m、高さ10cm前後のベッド状遺構が施されている。壁溝は検出されていない。住居跡の調査範囲が微少のため、炉跡や支柱穴等は検出できなかった。

遺物は床面から比較的多く出土した。炉跡の周辺に位置すると思われる。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期前葉頃と思われる。



第143図 91号住居跡実測図（1/60）



第144図 91号住居跡出土遺物実測図（1/4）

表124 91号住居跡出土土器観察表

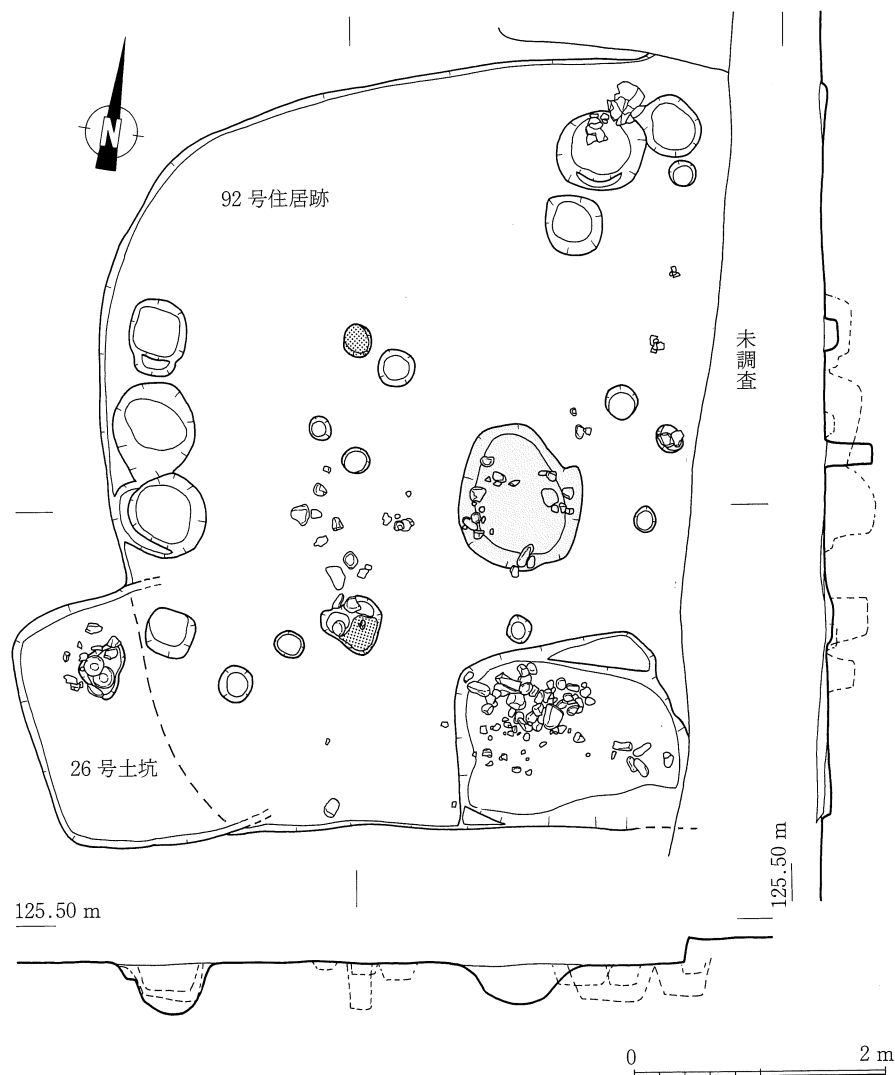
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
444	支脚	—	—	角閃石 微、 灰色粒子、 砂粒 多	淡黄色	良好	指成形	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
		7.8	8.6								
445	器台	—	—	角閃石 少、 石英 少	褐色	良好	粘土積上げ	ケズリ	ケズリ		
		10.8	(11.6)								
446	器台	—	—	角閃石 少、 石英 多、 赤色粒子 多	淡黄色	不良	指成形	不明（剥離）	ケズリ		
		10.4	13.4								
447	甕	(12.2)	—	角閃石、 石英、 赤色粒子	外面 浅黄 橙色 内面 暗褐	色	粘土積上げ	ハケ目	不明		
		15.2	—								
		4.4	—								



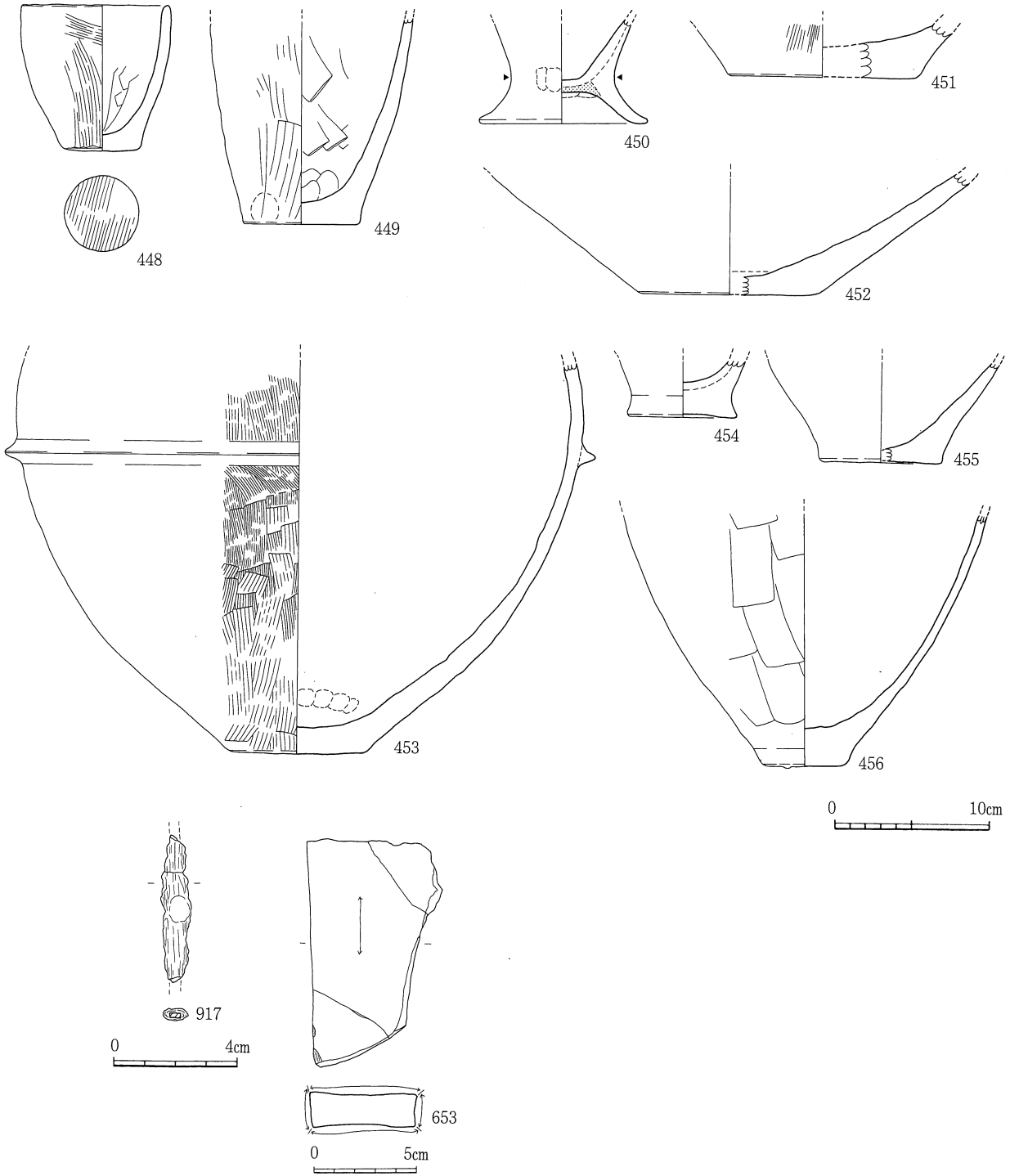
92号住居跡（第145図）

92号住居跡はB-4区の中央からやや南東方向、91号住居跡の北5m付近に位置する。東側の一部は農道下のため未調査である。南西コーナー北側は26号土坑によって切られている。規模は東西 $4.7 + \alpha$  m、南北5.81 m、検出面からの深さは3~6 cmで残りは悪い。平面形は長方形と思われるが円形住居跡の可能性もある。主軸方位はN-9°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は検出されていない。住居跡内中央には径1.0 m、深さ30cm前後のレンズ状の炉跡をもち、床面は赤変色している。内部には焼土と炭に混じって径10cm前後の礫が検出された。南壁中程には $1.4 \times 1.7$  m、深さ35cm前後の土坑をもつ。内部には多量の礫が充填されている。支柱穴は4本と思われ、西側の2本は検出できた。径30cm、深さ20cm前後、支柱穴間は2.4 mである。

遺物は炉跡内とその周辺を中心に出土している。448の鉢は北壁側から、449の鉢は南壁寄りの26号土坑側からで、両方とも床面から5cm程度浮いていた。450の脚付鉢脚部と451・452の壺底部は炉跡西側から出土したが、壺2点は床面からやや浮いていた。453の壺は北壁沿いからの出土であるが、床面から20cm程浮いていたため流れ込み遺物であると判断した。454・455の甕底部と917の鉄鏝片は炉跡内から、456の甕は北壁側の柱穴内出土である。出土遺物からみた当住居跡の時期は弥生時代後期初頭~前葉頃と思われる。



第145図 92号住居跡実測図（1/60）



第 146 图 92 号住居跡出土遺物実測図 (1/4 · 1/2 / 1/3)

表 125 92号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
448	鉢		9.5	砂粒多、 長石少、 角閃石多、 白色粒子多	茶褐色	やや不良 黒斑		口縁 ヨコナ デ タテハケ目	口縁 ヨコナ デ ヘラナデ		
			9.6								
			4.8~5.0								
449	鉢		—	砂粒 赤色粒子、 角閃石、 灰色粒子	淡黄褐色	やや不良 黒斑	粘土積上 げ	タテハケ目	ヘラナデ		
			—								
			7.3~7.7								
450	台付鉢		—	砂粒多、 赤色粒子少、 角閃石少、 長石少	外面 赤褐色 内面 暗茶 褐色	やや不良		ヨコナデ	ナデ	赤変(薄褐色) —強い二次加 熱を受ける	
			—								
			—								
451	甕		—	砂粒多、 石英多、 角閃石少、 赤色粒子少、 金雲母	淡黄褐色	不良		タテハケ目	不明		
			—								
			(12.4)								
452	壺		—	砂粒多、 長石多、 角閃石多、 白色粒子多	淡黄褐色	やや不良	粘土積上 げ	不明	不明		
			—								
			(11.8)								
453	壺		—	砂粒多、 角閃石多、 赤色粒子少、 石英少、 灰色粒子少、 長石少	淡黄褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	タテハケ目	不明		一条三角突帯 あり
			—								
			8.8~9.4								
454	甕		—	角閃石多、 長石多、 砂粒少	外面 淡黄 褐色 内面 暗褐色	良好		不明	不明	一部赤変 —二次加 熱あり	
			—								
			7.1								
455	甕		—	砂粒多、 角閃石多、 長石多、 白色粒子少	外面 赤褐 色 内面 暗褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	不明	不明	赤変—二 次加熱あ り	
			—								
			(7.8)								
456	甕		—	砂粒多、 角閃石多、 白色粒子多、 長石多	茶褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	ヘラナデ?	ナデ	赤変~黒変 —二次加 熱をうける	
			—								
			(5.6~5.9)								

表 126 92号住居跡出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎幅 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
917	鉄鏃	—	—	—	—	—	全体に木質付着

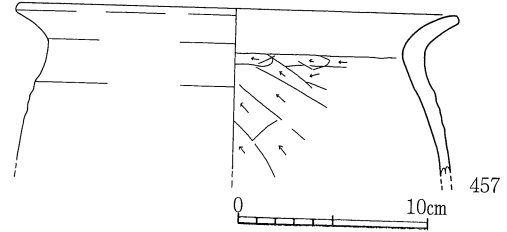
表 127 92号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
653	砥石	硬質頁岩	111	65	17	177.6	

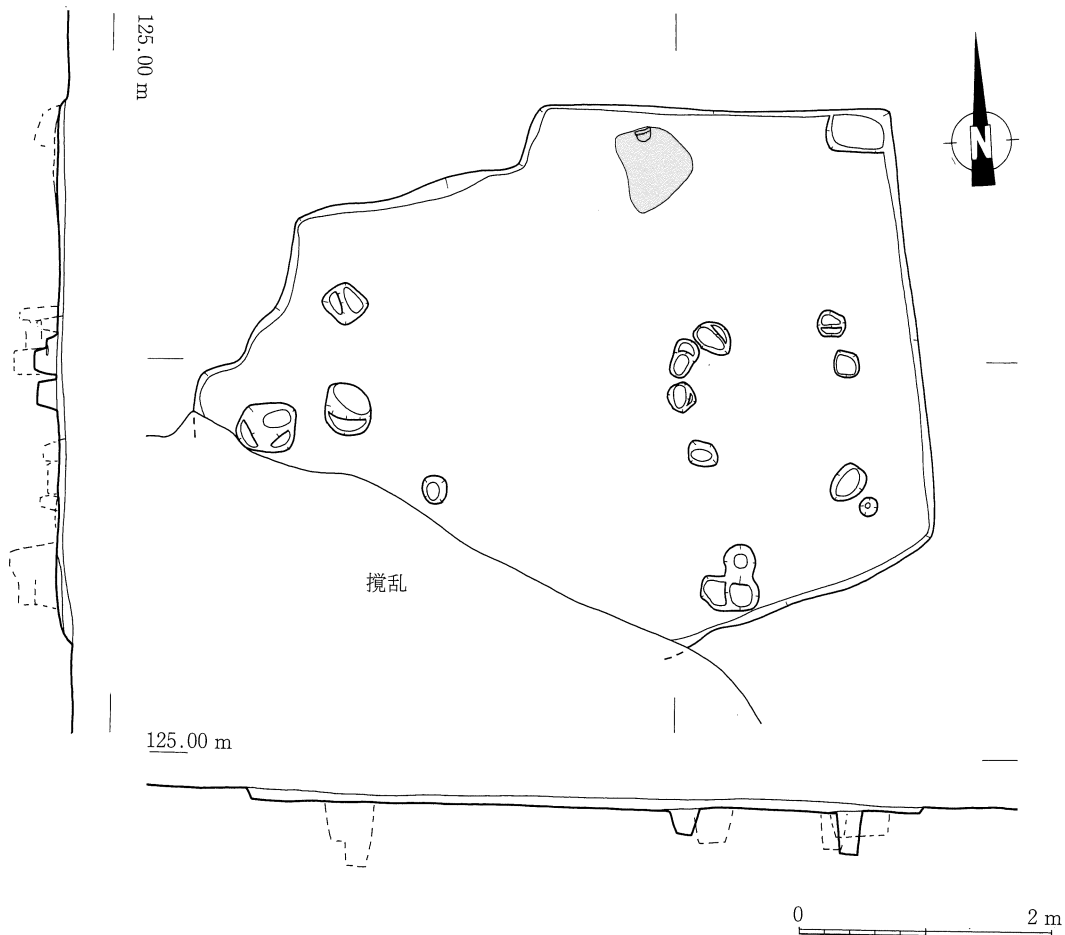
93号住居跡（第148図）

93号住居跡はA-2区の北東寄りに位置する。この地区は農道の迂回路部分である。西側部分は攪乱を受けていて、残りは良くない。規模は東西2.9m前後、南北3.5m前後、検出面からの深さは6cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。ベッド状遺構・壁溝は付設されていない。炉跡は検出されなかったが、北壁中程に焼土層の堆積がみられた。支柱穴は不明である。

遺物は焼土層中から457の土師器粗製甕1点が出土した。当住居跡の時期は古墳時代初頭頃と思われる。



第147図 93号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第148図 93号住居跡実測図（1/60）

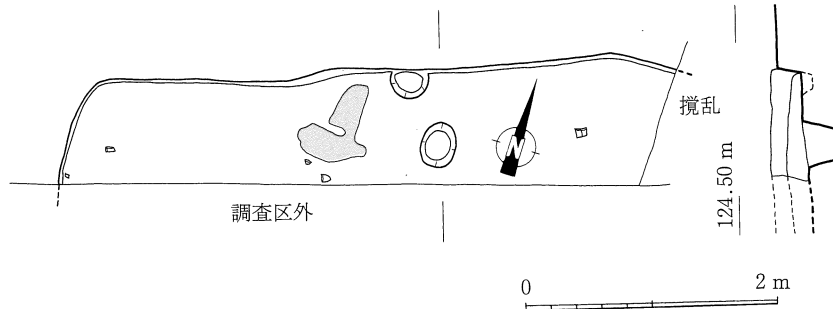
表128 93号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
457	甕	(23.6)		砂粒 多、 長石 非常に多、 角閃石 多、 白色粒子 多	明黄褐色	良好	粘土積上 げ	口縁 ヨコナ デ	口縁 ヨコナ デ		
		—						ナデ	ヘラケズリ		
		—									

94号住居跡（第149図）

94号住居跡はA-4区の北西端に位置する。この地区も93号住居跡同様に農道の迂回路部分である。検出した住居跡は北側の一部分で、南側は調査区外、東側は攪乱を受けている。規模は東西4.7m +  $\alpha$ 、南北は不明である。検出面からの深さは約20cmで、平面形は方形あるいは長方形を呈していると思われる。主軸方位はN-18°-Wを示す。炉跡・支柱穴は確認できなかったが、中央付近で焼土層と柱穴1本を検出した。

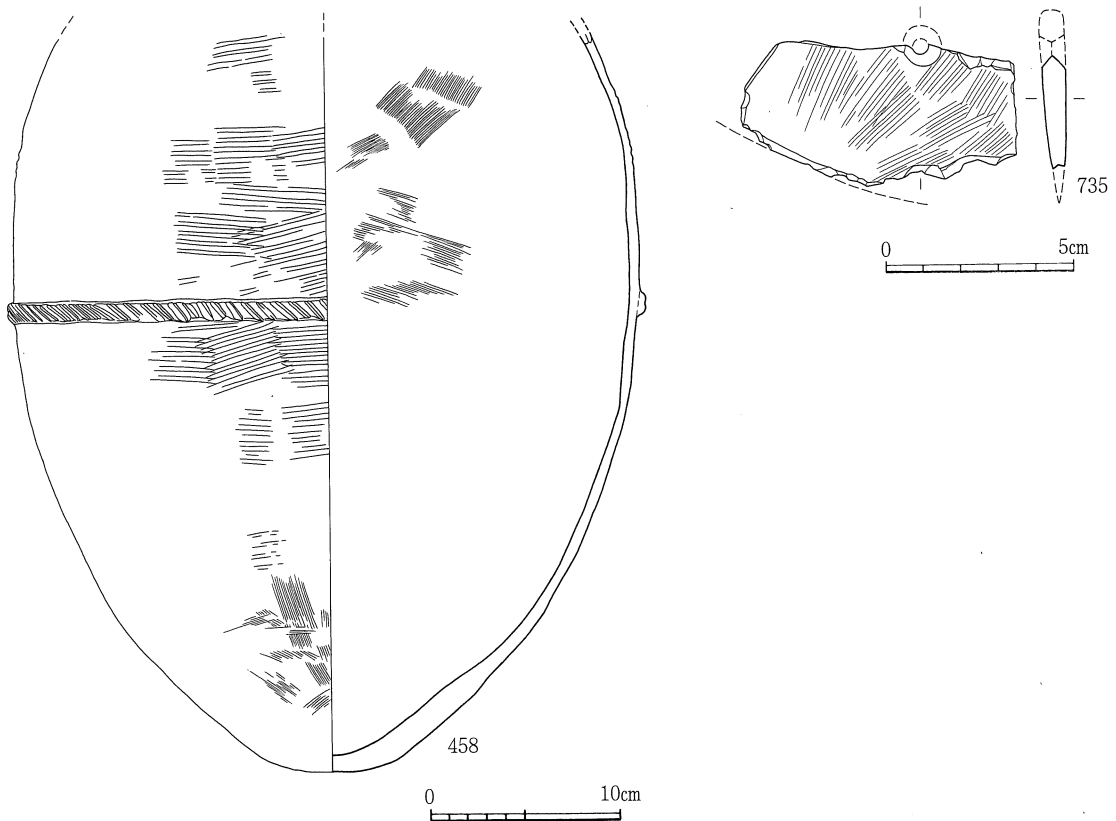
遺物は数点出土したが、いずれも小破片で時期の判定はできなかった。



第149図 94号住居跡実測図 (1/60)

95号住居跡（第151図）

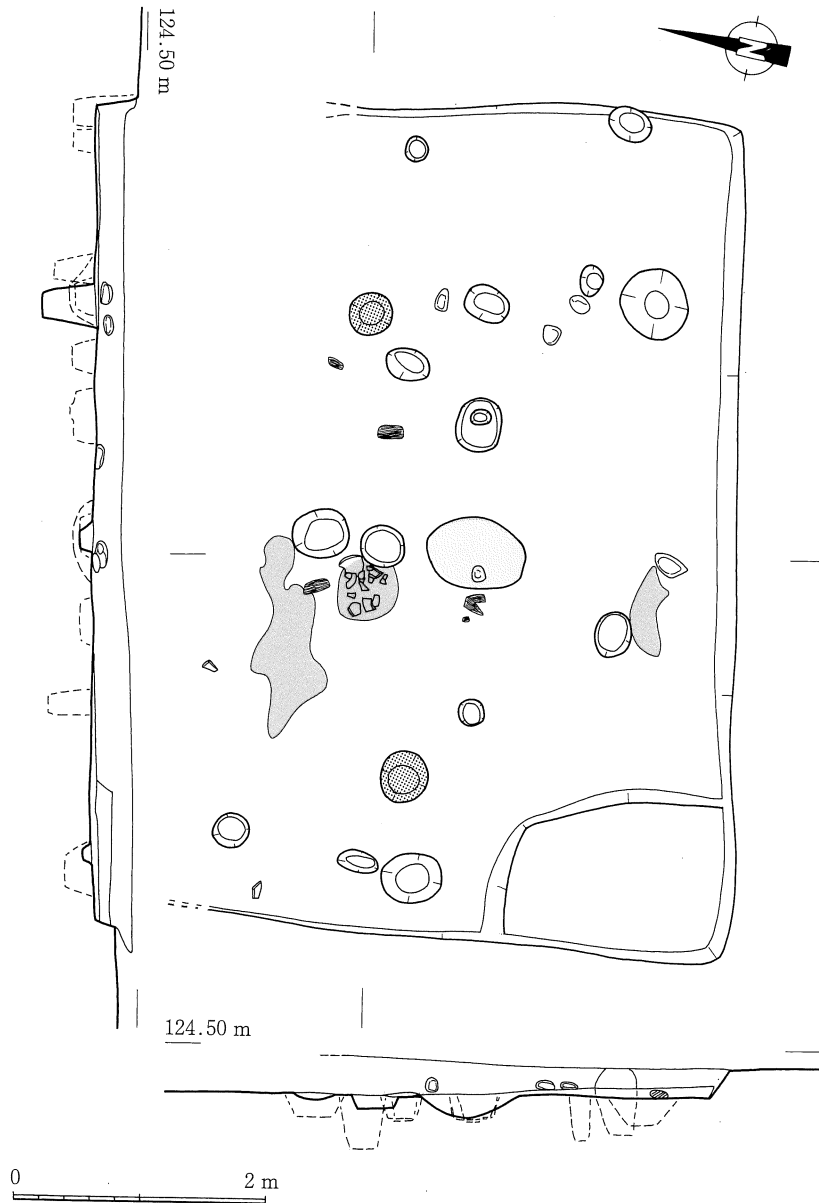
95号住居跡はA-4区の北東端に位置する。93・94号住居跡同様に農道の迂回路部分である。北側部分は攪乱と路線外のため不明である。規模は東西6.5m、南北4.2 +  $\alpha$ m、検出面からの深さは約10~20cmで、平面形は方形あるいは長方形を呈している。主軸方位はN-12°-Wを示す。ベッド状遺構・壁溝は確認されていない。住居跡中央付近で0.6 × 0.8mのやや楕円形をしたレンズ状



第150図 95号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

の炉跡を検出した。床面は赤変化し、内部には焼土・炭が堆積している。炉跡の北側2ヶ所で土器片を含む焼土層が検出された。支柱穴は2本で、径40cm、深さ30～40cm、支柱穴間は3.7mである。

遺物は先述したように焼土層内から458の壺と、南東コーナーからやや西寄り出土した735の石包丁である。壺は外面にタタキ調整を施している。胴部には刻目を施した断面台形の突帯が巡る。当住居跡の時期は弥生時代後期後葉～終末頃と思われる。



第151図 95号住居跡実測図 (1/60)

表129 95号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
458	壺	—	39.0	角閃石多、 白色粒子多	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ後タタキ	ハケ		
		—						底径			

表130 95号住居跡出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
735	砥石	頁岩	(73)	(36)	6	21.6	

## b) 土坑

調査区からは46基の土坑を検出・調査を行った。

### 1号土坑 (第152図)

1号土坑はB-1区北東端、10号住居跡の北1mに位置する。規模は東西1.3m、南北1.62m、検出面からの深さは25cm前後の不定形土坑である。主軸方位はN-9°-Eを示す。

出土遺物はなく、時期不明である。

### 2号土坑 (第152図)

2号土坑はB-1区の東端やや北寄りに位置し、9号住居跡の東壁を切って構築されている。規模は径1.85m前後の円形土坑である。検出面からの深さは1.2mで中央部分に径40cm、深さ20cm前後の柱穴をもつ。埋土は4層確認された。

遺物はI・II層を中心に弥生土器片が出土したが、当土坑に伴うと思われる遺物は出土していない。切り合い関係からみて当土坑の時期は弥生時代後期中葉以降であろう。

### 3号土坑 (第152図)

3号土坑はB-1区東端、15号住居跡の西コーナーを切って構築されている。規模は東西0.85m、南北1.27m、検出面からの深さは0.75mで、内法は1.0×0.7m、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-8°-Wを示す。床面直上の埋土は焼土層+炭層である。

遺物は埋土中から弥生土器片が出土したが、当土坑に伴うものではなく、15号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期中葉以降と思われる。

### 4号土坑 (第153図)

4号土坑はB-1区中央付近、3号住居跡の東壁を切って構築されている。規模は東西2.17m、南北1.1m、検出面からの深さは0.35mで、平面形は隅丸長方形を呈している。長軸の主軸方位はN-58°-Wを示す。床面の内法は0.9×1.9mで、東から西に向って緩やかに下降する。土層観察の結果、埋土は4層確認でき、東側から流れ込んでいる。埋土中には焼土や炭層を含んでいる。

遺物は埋土中から弥生土器片が出土したが、当土坑に伴うものではなく、3号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期初頭以降と思われる。

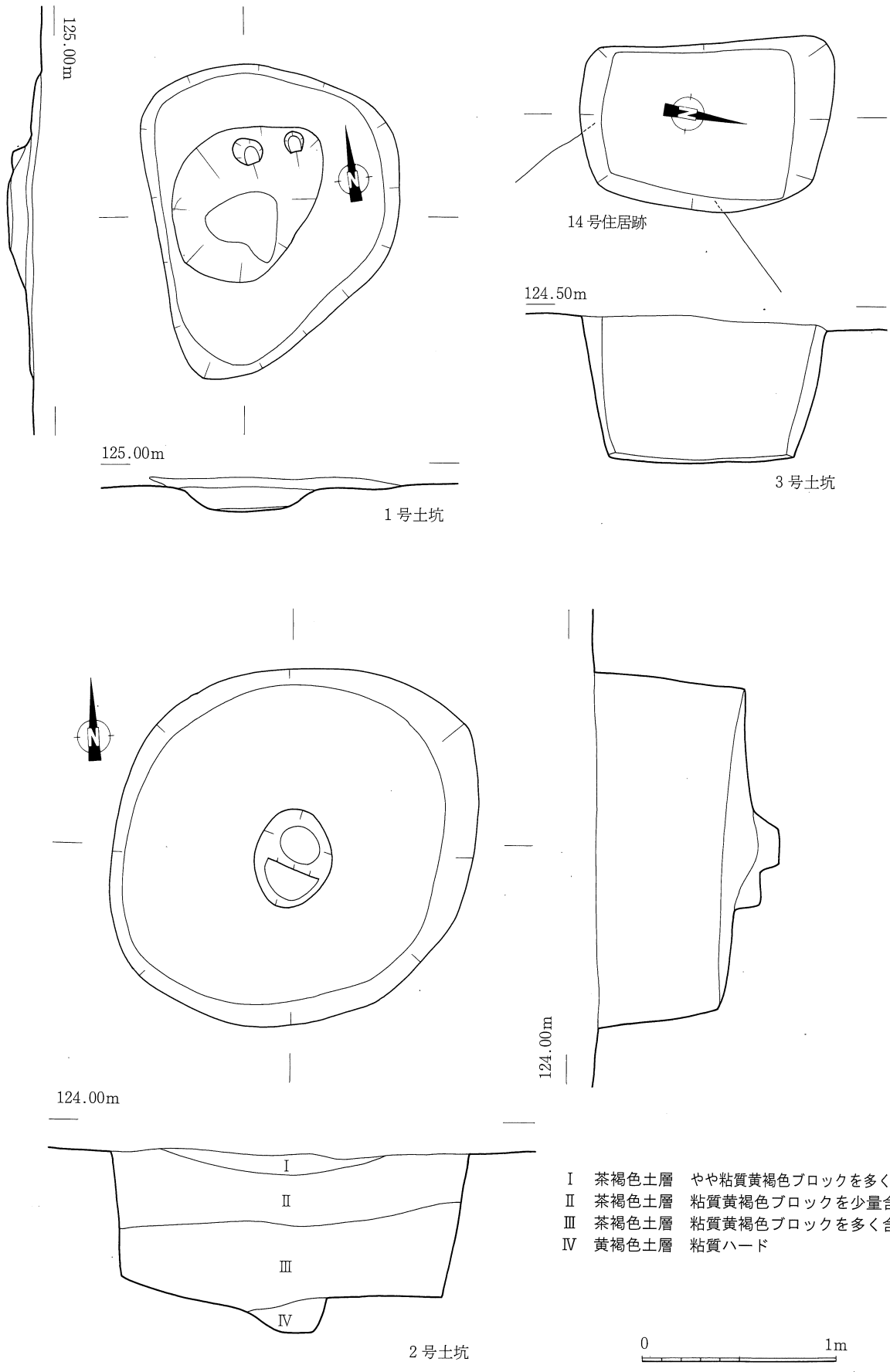
### 5号土坑 (第153図)

5号土坑はB-1区中央付近、3号住居跡の中央、炉跡を切って構築されている。4号土坑の西0.6m付近に位置する。規模は東西1.45m、南北1.85m、検出面からの深さは0.30mで、平面形は楕円形を呈している。長軸の主軸方位はN-3°-Eを示す。土層観察の結果、埋土は東側から流れ込んでいる。

遺物は埋土中から弥生土器片が出土したが、当土坑に伴うものではなく、3号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期初頭以降と思われる。

### 6号土坑 (第153図)

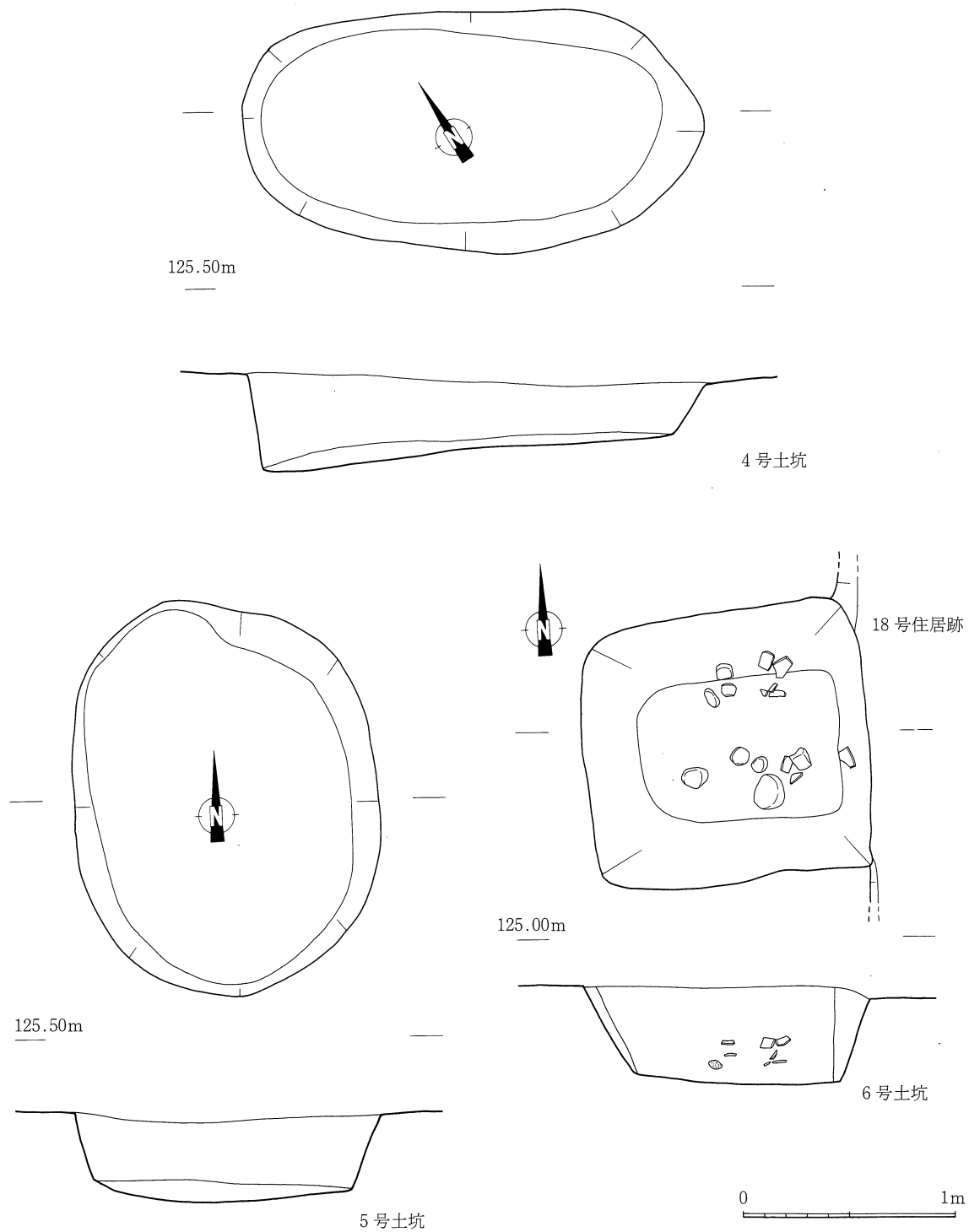
6号土坑はB-1区の東端やや南側に位置し、18号住居跡の西壁南側部分を切って構築されている。規模は東西1.35m、南北1.3m、検出面からの深さは0.4mで、平面形はほぼ方形を呈している。内法は0.65×0.95mである。主軸方位はN-3°-Eを示す。土坑内からは径10～20cm前後の礫10



第 152 図 1～3号土坑実測図 (1/30)



点程度と弥生土器片数点が出土したが、細片のため、土器の時期は不明である。18号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期中葉以降と思われる。

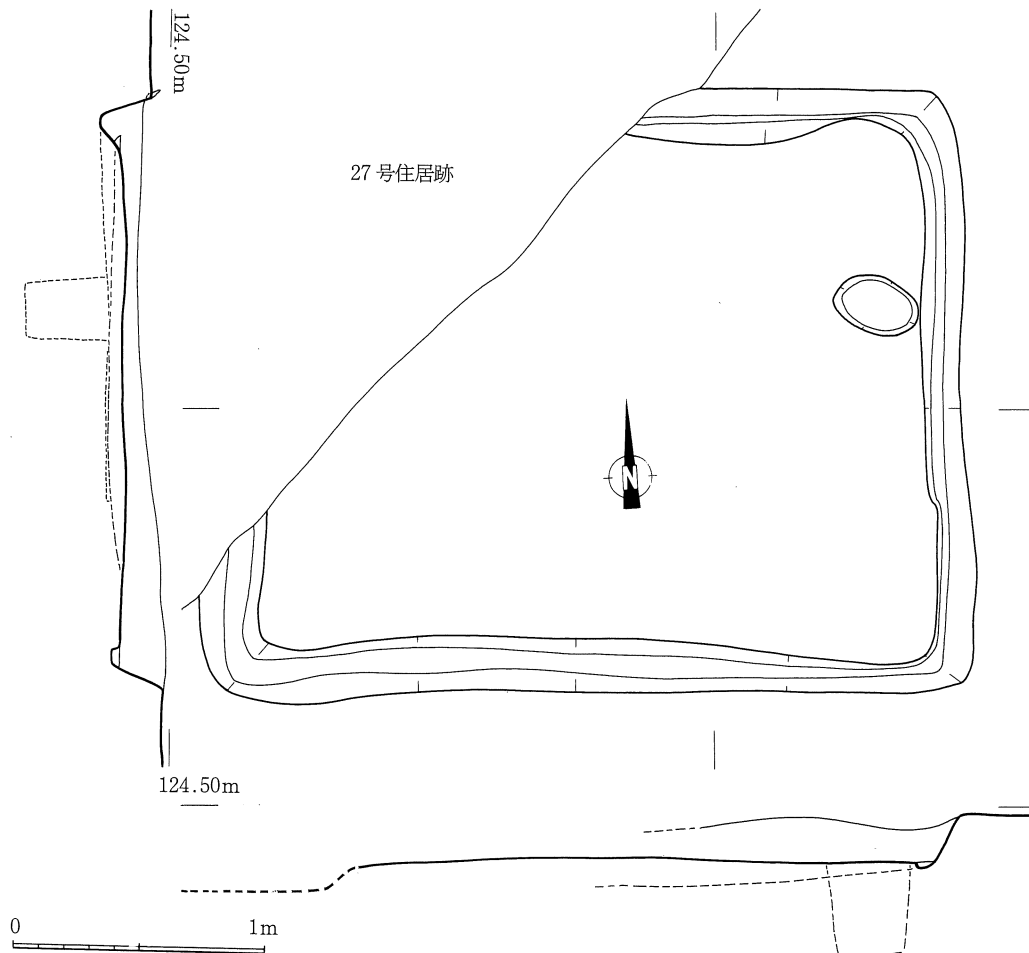


第 153 図 4～6号土坑実測図 (1 / 30)

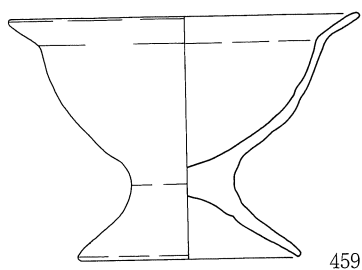
7号土坑（第154図）

7号土坑はB-2区の南西端に位置し、北西コーナー部分を23号住居跡に切られている。規模は東西3.05m、南北2.35m、検出面からの深さは15cmで、平面形は長方形を呈している。主軸方位はほぼ磁北である。壁に沿って幅20cm、深さ5cm前後の壁溝が巡らされている。床面中央やや北寄りで焼土層が確認された。また、床面には張床を行った形跡があり、東壁北寄りで柱穴1個が出土した。壁溝や張床を施していることから、当土坑は小型住居跡の可能性もある。

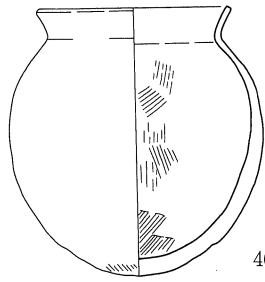
遺物は土坑内から多量に出土した。南東コーナー付近を中心に、床面から5～10cm前後浮いている。当土坑に伴うものではなく、土坑破棄後の投げ込み遺物と思われる。459の台付鉢と460の小型甕は土師器である。461の小型壺と462～467の甕は弥生時代後期後葉前後の時期と思われる。周辺の23号住居跡や27号住居跡の破棄遺物の可能性が考えられる。当土坑の時期は切り合い関係から弥生時代後期後葉前後の時期であろう。



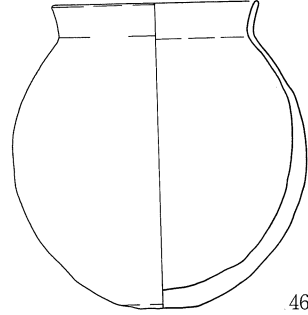
第154図 7号土坑実測図 (1/30)



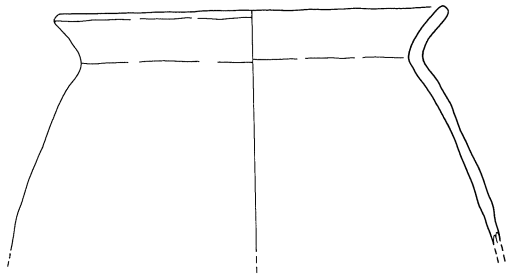
459



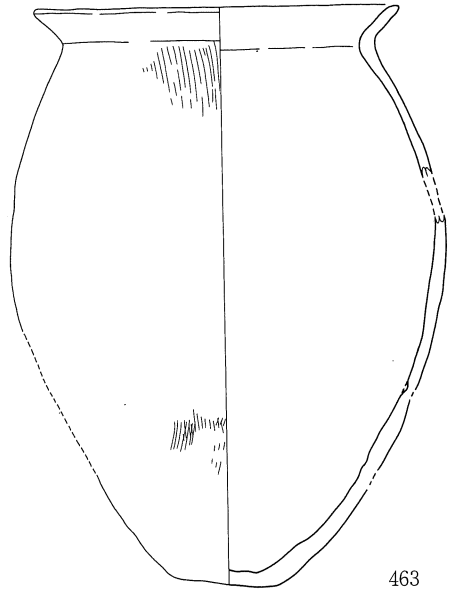
460



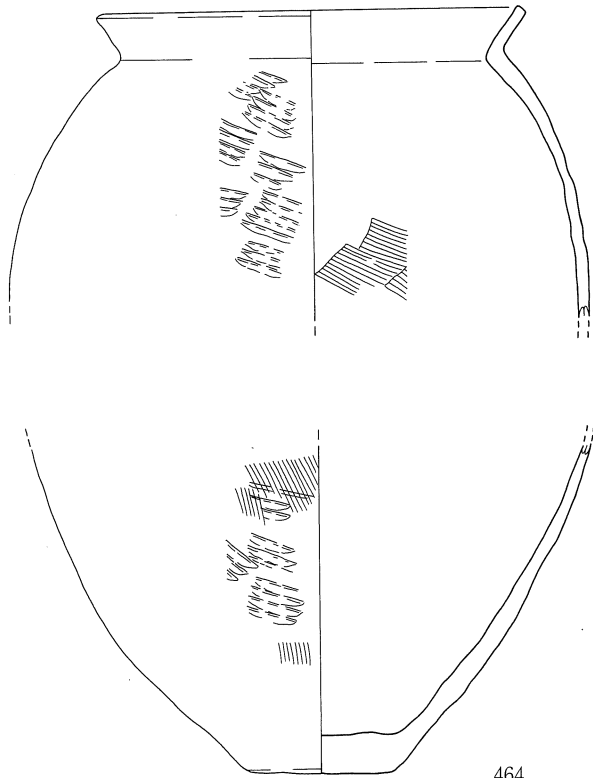
461



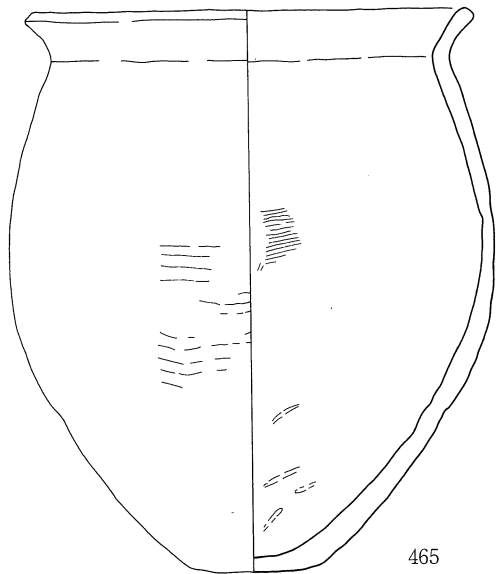
462



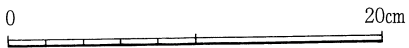
463



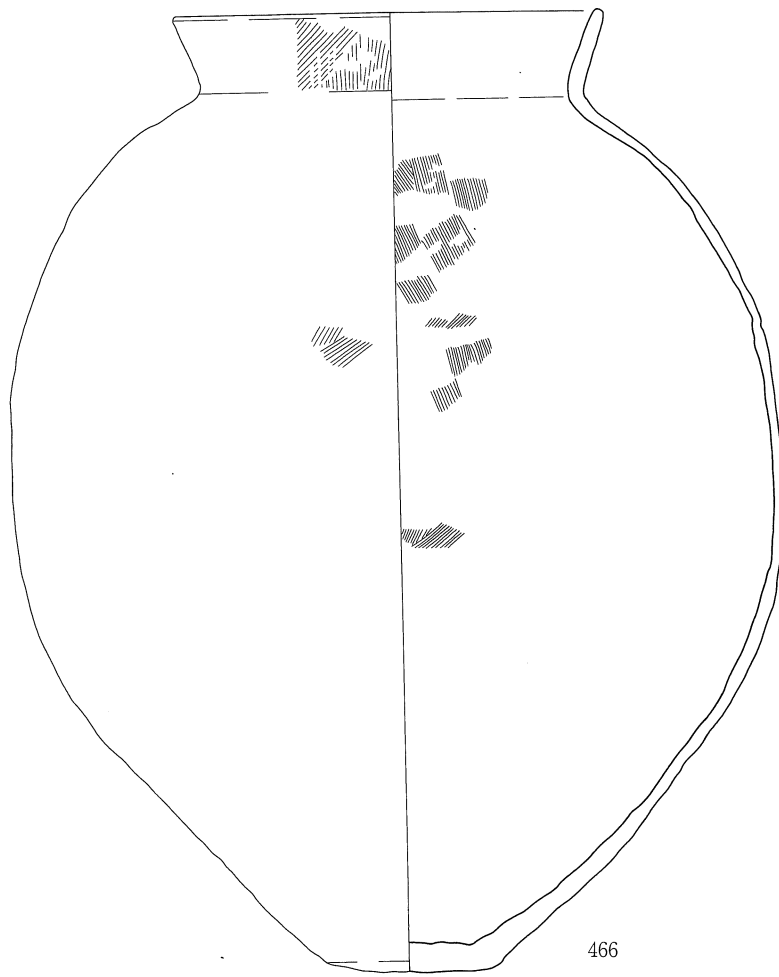
464



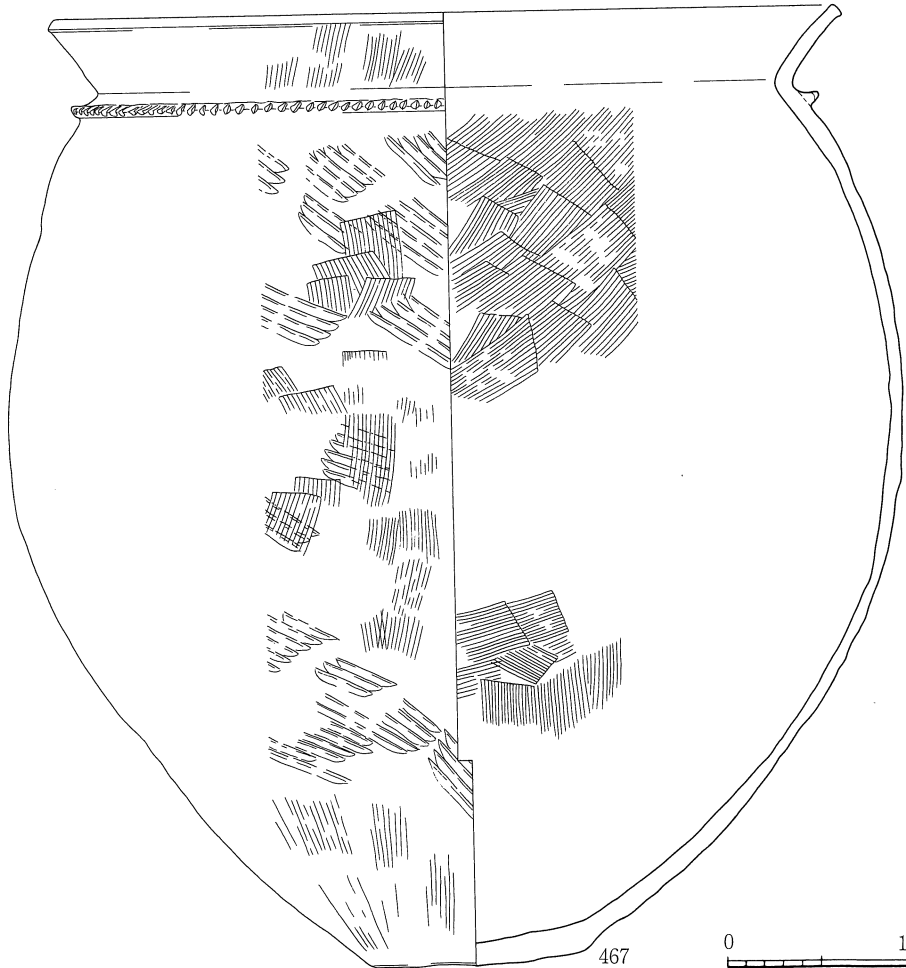
465



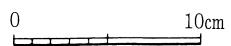
第 155 图 7 号土坑出土遗物实测图 1 (1 / 4)



466



467



第 156 图 7 号土坑出土遗物实测图 2 (1/4)

表 131 7号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
459	台付鉢	(18.8)	砂粒 非常に多 白色粒子 非常 に多、 黒曜石 微、 角閃石 少、 長石 少、	赤褐色	良好	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ナデ	赤変～黒変 一二次加熱 あり		
		12.9									
		(12.0)									
460	小甕	(10.4)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 多	黄褐色	良好	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ 不明	ハケ目	赤変一二次 加熱あり		
		(14.3)									
		—									
461	小壺	(11.0)	砂粒 非常に多、 角閃石 多、 長石 多、 橙色粒子 少	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ 不明			
		16.2									
		—									
462	甕	(21.0)	白色粒子、 灰色粒子、 角閃石	淡黄色	良好	粘土積上 げ					
		—									
		—									
463	壺	19.5	赤褐色粒子、 灰色粒子、 長石、 石英、 角閃石 少		良好	粘土積上 げ	一部ハケ目残り 不明	不明			
		—									
		—									
464	甕	22.5～22.8	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 多	赤褐色	良好 黒斑	タタキ成 形	口縁 ヨコナデ 平行タタキ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ヨコハケ目	赤変一二次 加熱あり		
		—									
		8.0									
465	甕	(23.8)	白色粒子、 灰色粒子、 角閃石 やや多	褐色～ 灰褐色	普通	粘土積上 げ	不明	ハケ目 ナデ			
		—									
		—									
466	甕	22.9	砂粒 多、 白色粒子 非常 に多、 角閃石 少、 赤色粒子 少	淡黄灰褐 色	良好 黒斑	粘土積上 げ	不明	タテハケ目			
		50.0									
		—									
467	甕	42.2	砂粒 多、 長石 少、 石英 少、 角閃石 多、 黒曜石 少、 灰色褐色	黄褐色	良好 黒斑	タタキ成 形	口縁 ヨコナデ タテハケ目 平行タタキ	口縁 タテハケ 目 ヨコハケ目	タタキの痕 跡残るのが 特徴		
		50.9									
		11.6									

8・9号土坑 (第 157 図)

8・9号土坑はA-2区南端中央付近、調査区の北壁沿いに位置する。8号土坑が先行する。

8号土坑の規模は東西1.3+αm、南北1.2m、検出面からの深さは30cm前後の長方形の土坑である。主軸方位はN-3°-Eを示す。

出土遺物はなく、時期不明である。

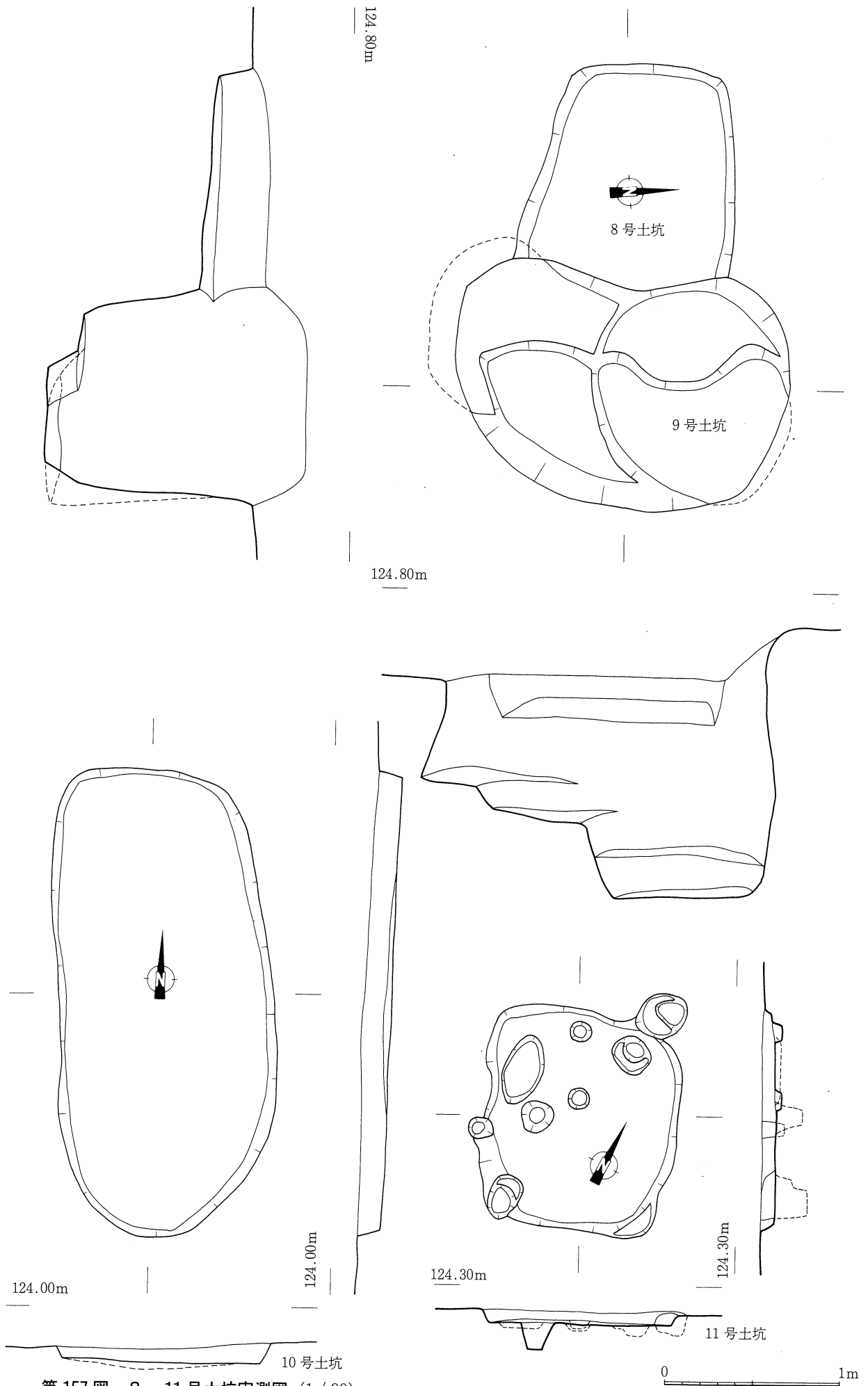
9号土坑は8号土坑の東側に位置する。2基の土坑が切り合っている可能性があるが、断面観察の下手際で確認できなかった。規模は東西1.35m、南北1.9m、検出面からの深さは1.55m前後の不定形の土坑である。主軸方位はN-15°-Eを示す。

遺物は埋土中から弥生土器が出土したが当土坑に伴うものではなく、土坑の時期は不明である。

10号土坑 (第 157 図)

10号土坑はB-2区の北東端、30号住居跡の1.5m南東に位置する。規模は外法0.6×1.4m、内法0.55×1.3m、検出面からの深さ10cm前後の浅い土坑である。平面形は隅丸長方形である。主軸方位はN-4°-Eを示す。

遺物は埋土中から弥生土器数点が出土したが、小破片のため時期の判定はできなかった。このため土坑の時期は不明である。

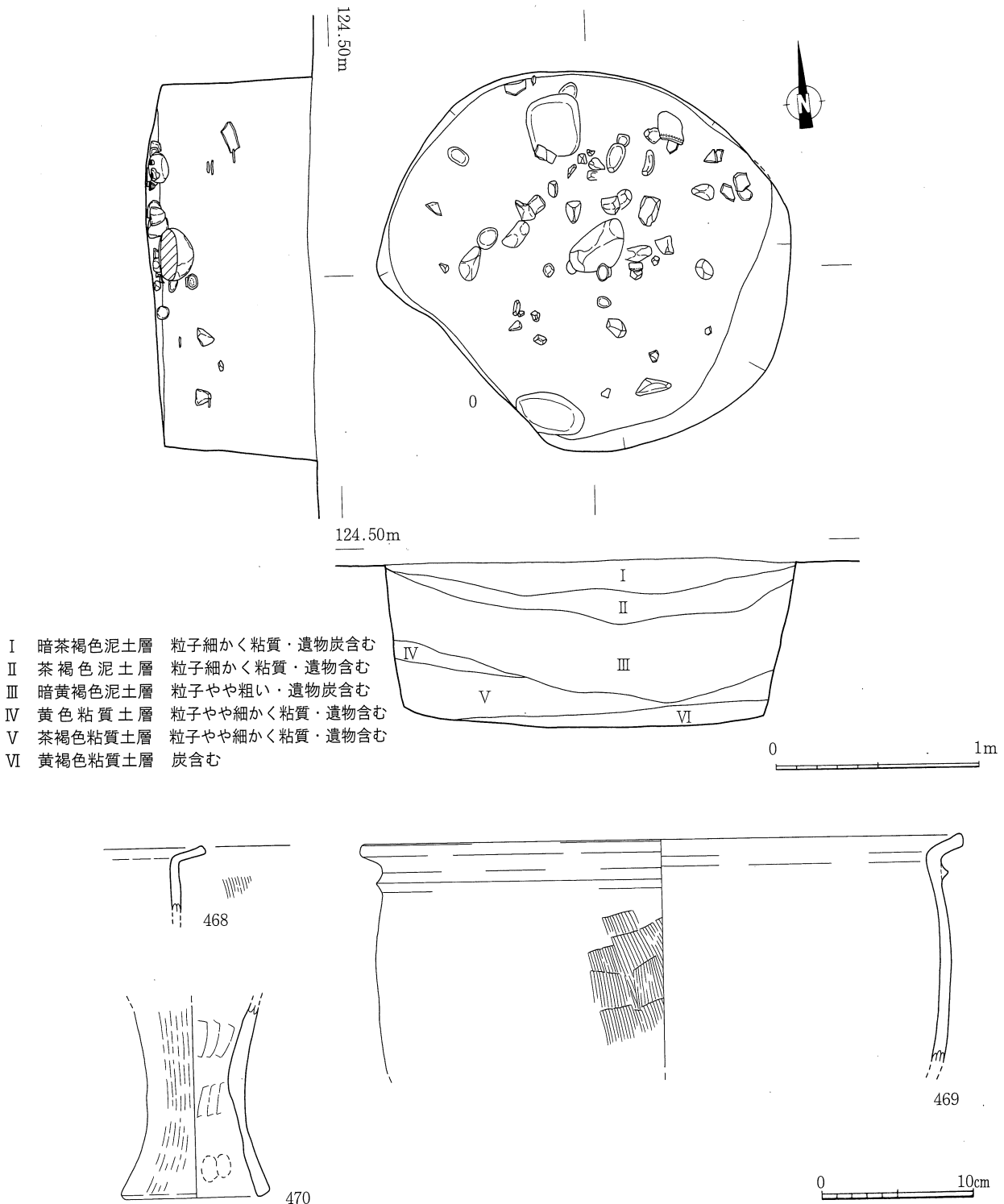


第 157 图 8~11 号土坑实测图 (1 / 30)

11号土坑 (第157図)

11号土坑はB-2区南東方向に位置し、45号住居跡の北東コーナーにはほぼ接している。規模は東西1.1m、南北1.25m、検出面からの深さは約10cmである。平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-16°-Wを示す。

土坑内から弥生土器数点が出土したが、小破片のため時期は不明である。このため、当土坑の時期は不明である。



第158図 12号土坑および出土遺物実測図 (1/30・1/4)

12号土坑（第158図）

12号土坑はB-2区南東端、46・47号住居跡の北0.5m付近に位置する。規模は径1.8～2.1mのほぼ円形をした土坑で、検出面からの深さは約0.8mである。土層観察の結果、埋土は6層確認できた。上部の削平および崩落のため明確ではないが、弥生時代中期の貯蔵穴と思われる。

遺物はI～IV層を中心に出土したがこれらの土器は流れ込みと思われる。V・VI層からは数点の土器と礫が出土した。468・469は甕の口縁から胴部にかけての一部で、469は器台の下半分である。これらの土器からみて当土坑の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。

表132 12号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
		底径									
468	甕	—	—	砂粒少、 長石多、 角閃石少	灰褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	ナデ	すす付着一 二次加熱あり	
		—	—								
		—	—								
469	甕	(40.0)	—	砂粒少、 長石多、 角閃石少、 赤色粒子少	外面 茶 褐色 内面 黒 灰色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ナデ		
		—	—								
		—	—								
470	器台	—	—	砂粒少、 石英少、 角閃石多、 白色粒子少、 長石多	淡黄褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	ヘラナデ	赤変一二次 加熱あり	下部の方 に指圧痕 あり
		—	—								
		9.6～10.0	—								

13号土坑（第159図）

13号土坑はB-3区南西端に位置し、48号住居跡の北東コーナーにはほぼ接している。規模は東西2.7m、南北1.25m、検出面からの深さは約1.15mである。平面形は不定長方形を呈している。長軸の主軸方位はN-59°-Wを示す。

遺物は弥生土器1点が出土したが、小破片であり、流れ込み遺物のため、当土坑に伴う遺物は出土していない。このため、土坑の時期は不明である。

14号土坑（第159図）

14号土坑はB-3区南端に位置し、南側は調査区外である。規模は東西1.55m、南北1.3+αm、検出面からの深さは30cm前後である。平面形は隅丸長方形を呈していると考えられる。長軸の主軸方位はN-18°-Eを示す。

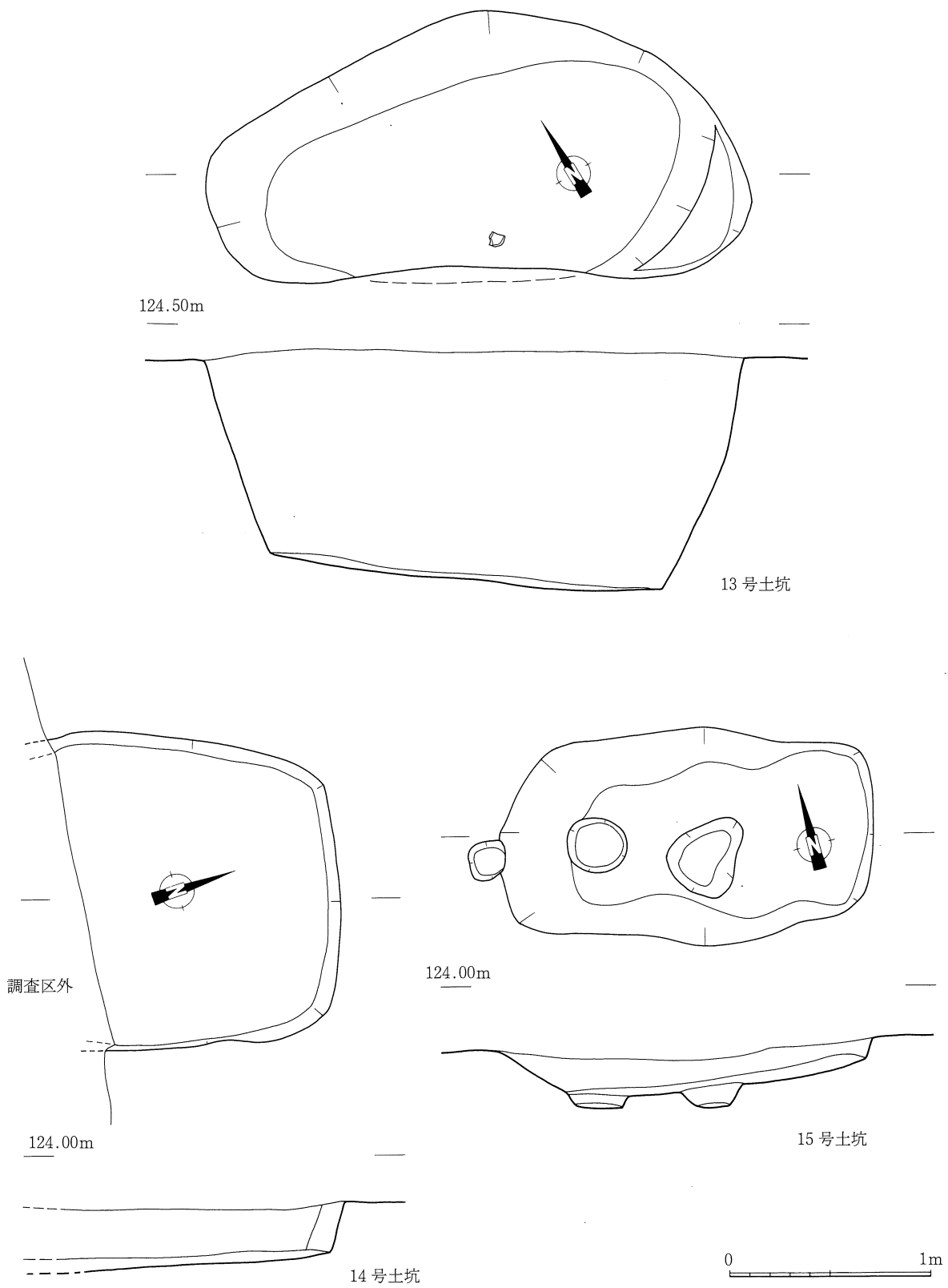
遺物は埋土中から弥生土器数点が出土したが、流れ込み遺物であり、当土坑に伴う遺物は出土していない。このため、土坑の時期は不明である。

15号土坑（第159図）

15号土坑はB-3区南端、14号土坑の北西0.5m付近に位置する。規模は東西1.9m、南北1.0m、検出面からの深さは20cm前後である。平面形は隅丸長方形を呈している。主軸方位はN-13°-Eを示す。

遺物の出土はなく、土坑の時期は不明である。





第 159 图 13 ~ 15 号土坑实测图 (1 / 30)

#### 16号土坑（第160図）

16号土坑はB-3区の南側に位置する。規模は長軸2.8m、短軸2.55m、検出面からの深さは約30cmである。平面形は長方形を呈している。長軸の主軸方位はN-43°-Eを示す。北東壁沿いで柱穴が検出されたが、当土坑に伴う柱穴ではない。

遺物は埋土中から高坏脚部や磨石等が出土したが、上層からの出土であり、破棄遺物とみられ、当土坑に伴う遺物ではない。このため、土坑の時期は不明である。

#### 17号土坑（第160図）

17号土坑はB-3区南側に位置し、65号住居跡の南西コーナーを切っている。規模は2.25m前後のほぼ方形の土坑で、検出面からの深さは20～30cmである。主軸方位はN-35°-Eを示す。

遺物は埋土中から弥生土器数点が出土したが、流れ込み遺物のため、当土坑に伴うものではない。時期は65号住居跡との切り合い関係から弥生時代後期中葉以降である。

#### 18号土坑（第161図）

18号土坑はB-3区北西方向、57号住居跡の西3m付近に位置する。規模は上面が径1m前後の円形で、床面が径1.7mの円形でフラスコ状に広がる。弥生時代中期頃の貯蔵穴と考える。検出面からの深さは約80cmである。

遺物は埋土中から弥生土器数点が出土したが、流れ込み遺物のため、当土坑に伴うものではない。時期は形態等から弥生時代中期の貯蔵穴と考える。

#### 19号土坑（第161図）

19号土坑はB-3区の北側に位置する。規模は長軸2.5m、短軸1.2m、検出面からの深さは約40cmの不定形土坑である。長軸の主軸方位はN-38°-Wを示す。

遺物は遺構検出時に上面から多量の弥生土器が一括して出土したが、調査の結果、土坑廃絶後の一括破棄遺物であることが判明した。当土坑に伴うと思われる遺物は出土していないため、時期は不明である。

#### 20号土坑（第162図）

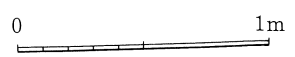
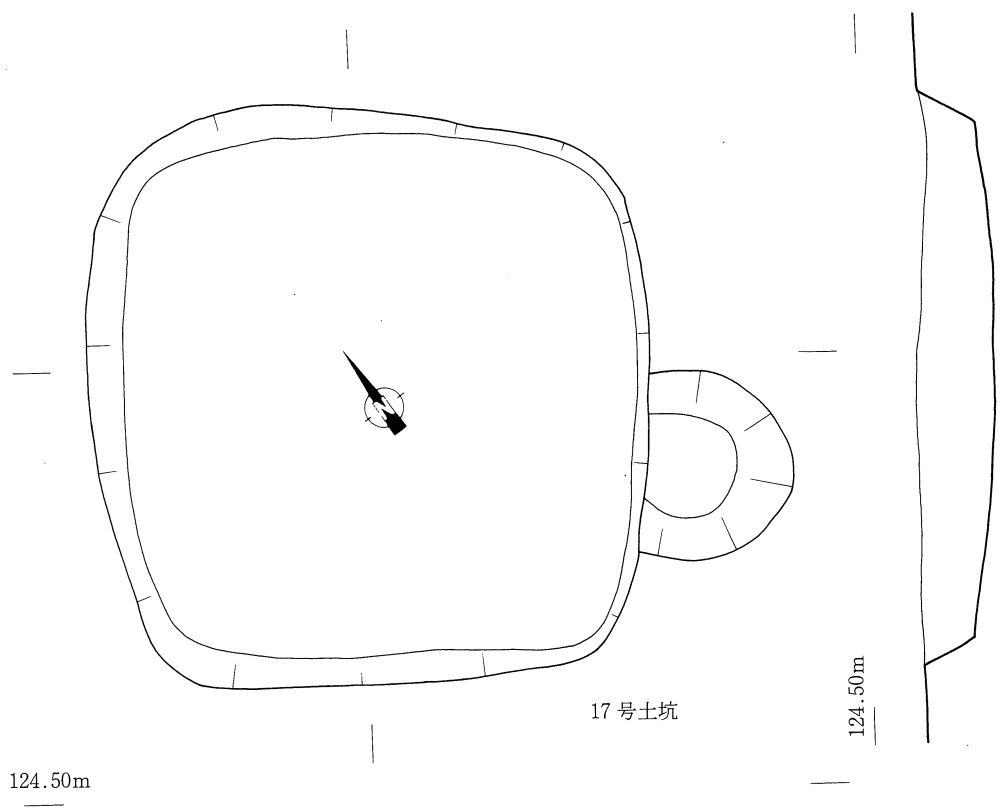
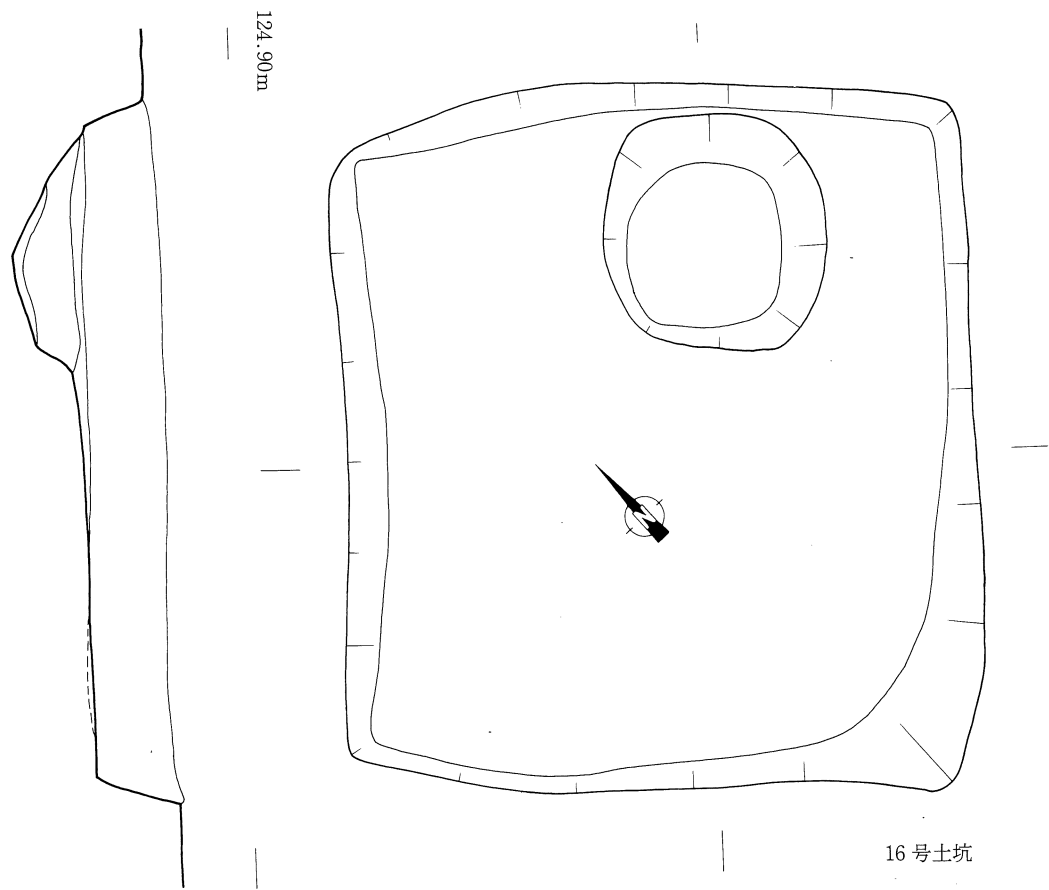
16号土坑はB-3区の北側、調査区北壁寄りに位置する。規模は東西2.65m、南北2.0m、検出面からの深さは20～30cm、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。

遺物は埋土中から弥生土器数点が出土したがいずれも流れ込み遺物であり、当土坑に伴う遺物ではない。このため、土坑の時期は不明である。

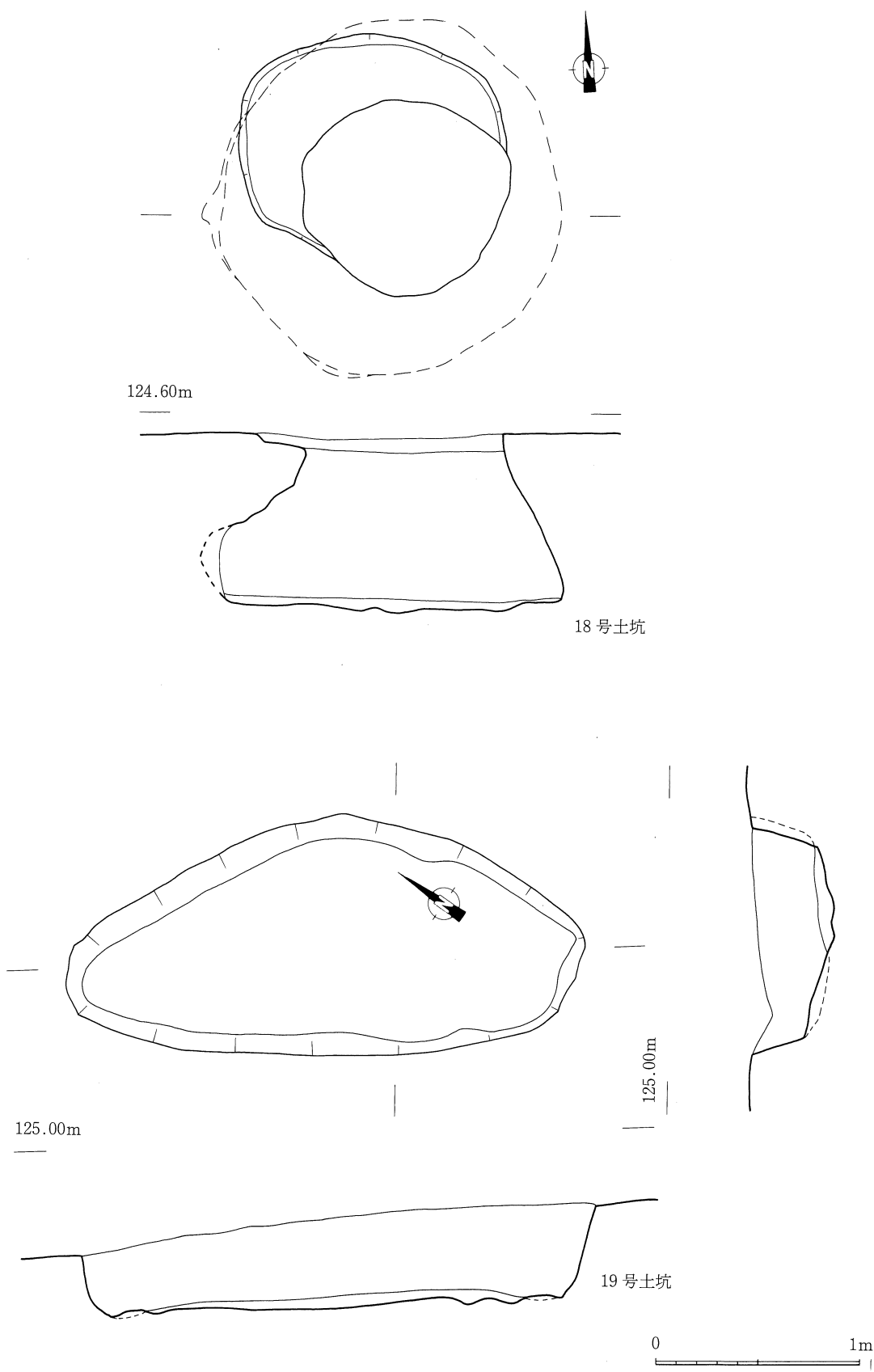
#### 21号土坑（第162図）

21号土坑はB-3区の北東、20号土坑の東4m付近に位置する。規模は東西2.9m、南北2.15m、検出面からの深さは約20cmである。平面形は長方形を呈している。長軸の主軸方位はN-8°-Wを示す。北東壁沿いで柱穴が検出されたが、当土坑に伴う柱穴ではない。

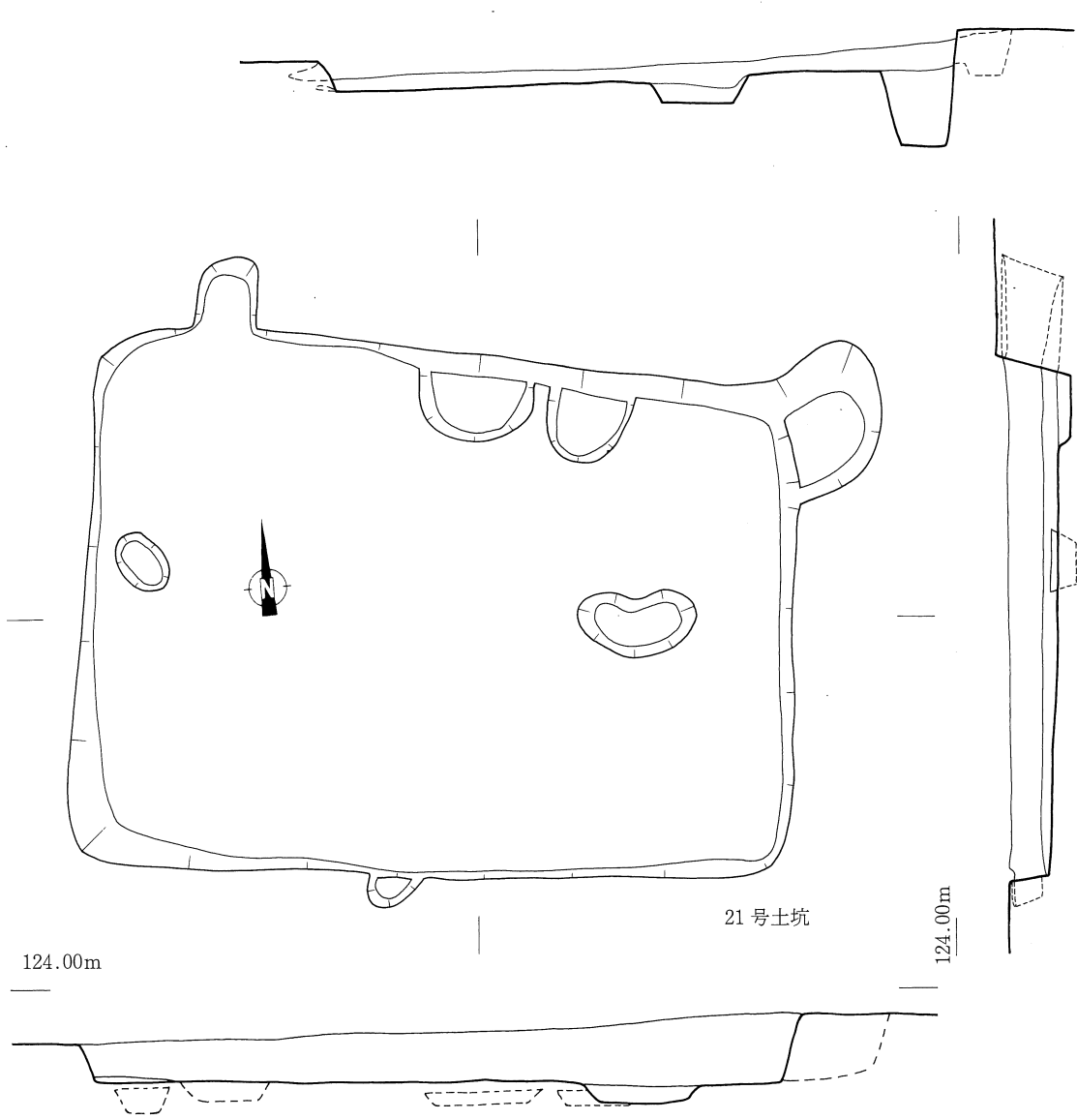
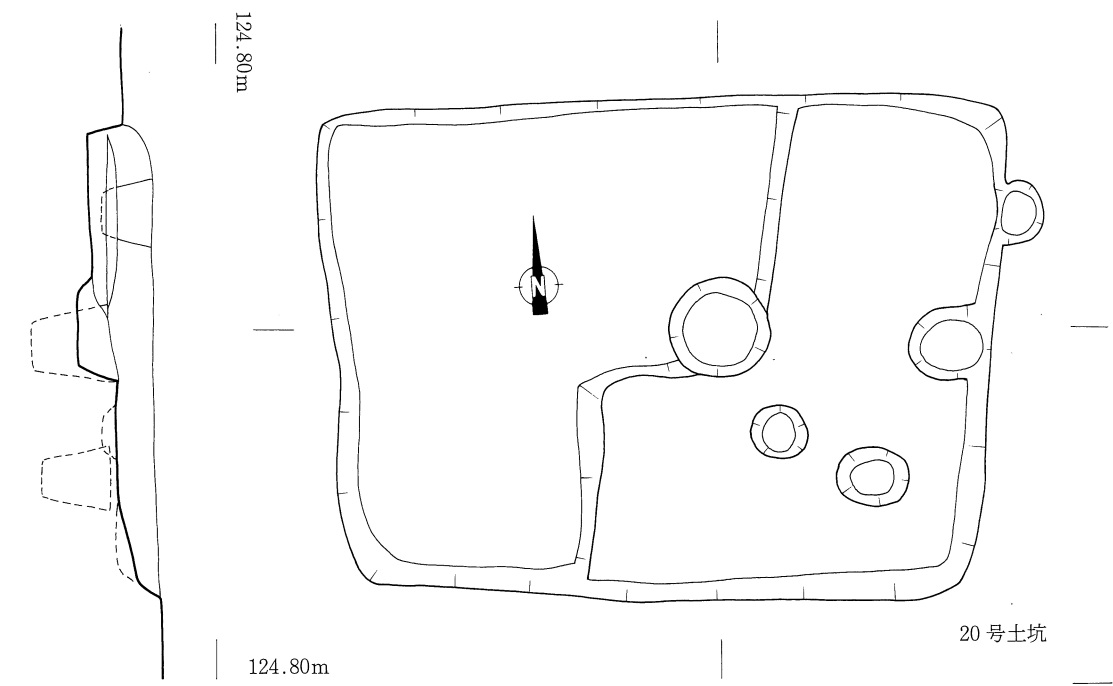
遺物は埋土中から高坏脚部や磨石等が出土したが、上層からの出土であり、破棄遺物とみられ、当土坑に伴う遺物ではない。このため、土坑の時期は不明である。



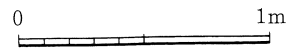
第160图 16·17号土坑实测图 (1/30)



第 161 图 18·19 号土坑实测图 (1 / 30)



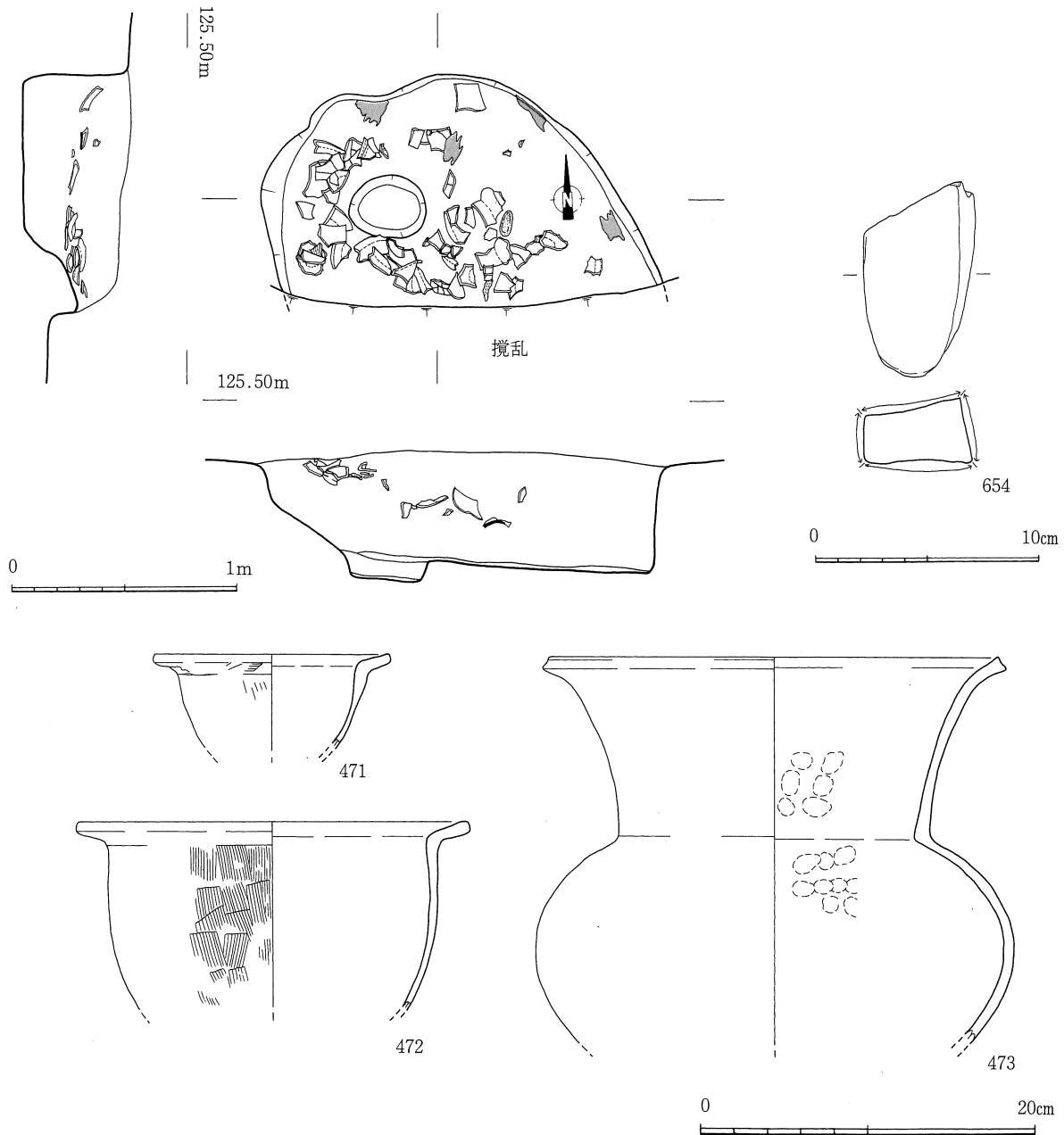
第 162 图 20·21 号土坑实测图 (1 / 30)



22号土坑（第163図）

22号土坑はB-4区西側、80号住居跡の北3mに位置する。南側部分は畑管によって消滅している。規模は東西約3.4m、南北2.1+αm、検出面からの深さは45cm前後の不定形土坑である。

遺物は土坑の上面から中間部分にかけて出土しているため、いずれも土坑廃絶後の破棄あるいは流れ込み遺物と思われる。出土遺物は471・472の鉢と473の壺で、土器の時期は概ね弥生時代中期後半頃と考えるが、土坑に伴う遺物は出土していないため時期は不明である。



第163図 22号土坑および出土遺物実測図（1/30・1/3・1/4）

表133 22号土坑出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
654	砥石	硬質頁岩	79	49	28	155.0	

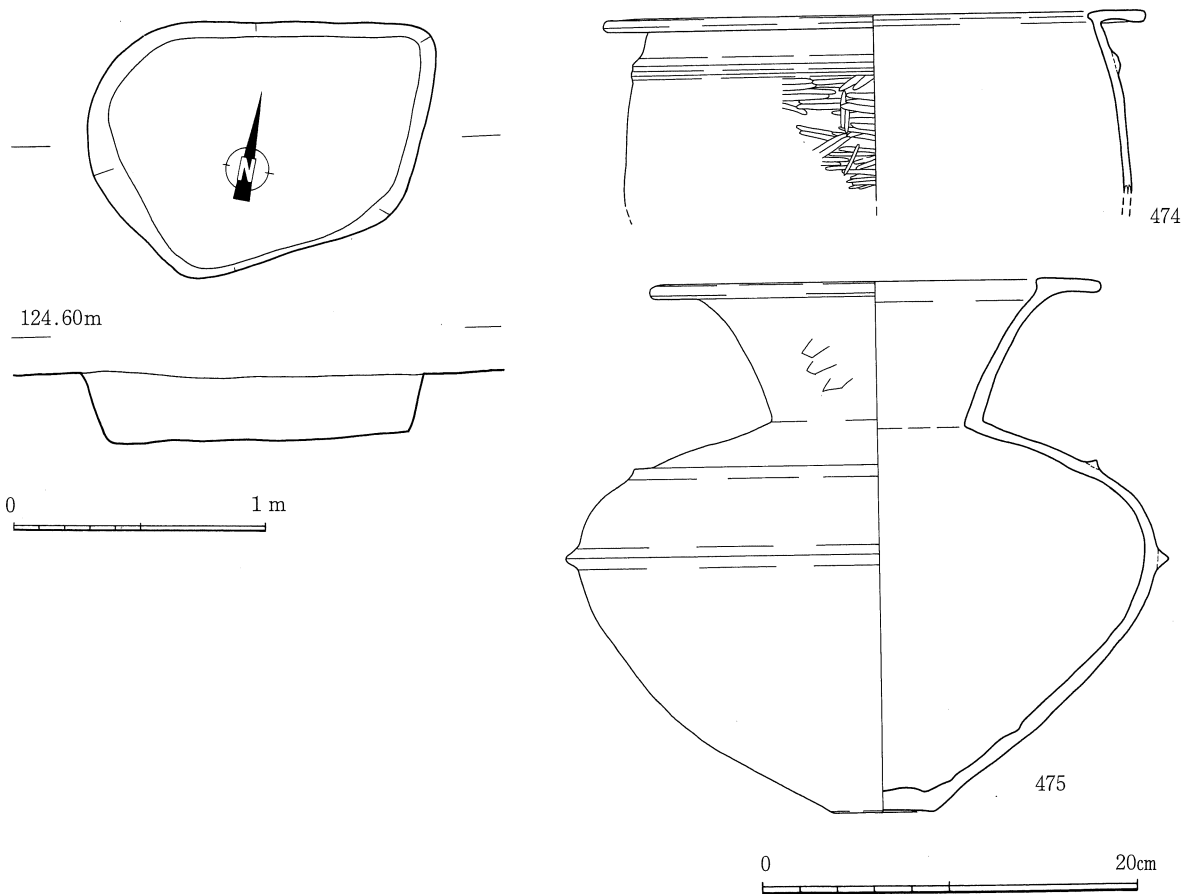
表 134 22号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
		底径									
471	鉢	14.2	砂粒多、赤色粒子多、角閃石少、長石少	赤褐色	良好黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデハケ目	口縁 ヨコナデナデ	赤変一二次加熱あり		
		—									
		—									
472	鉢	(23.6)	砂粒多、赤色粒子少、角閃石多、長石少	黒茶褐色	良好黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデタテハケ目	口縁 ヨコナデナデ			
		—									
		—									
473	壺	(17.8)	砂粒少、角閃石少、長石少、赤色粒子少	明黄褐色	良好黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ丁寧なナデ	口縁 ヨコナデナデ		下部の表面は円形に剥離しているものが多い	
		—									
		—									

23号土坑 (第164図)

23号土坑はB-4区南西隅、85号住居跡の南1m付近に位置する。規模は東西約1.35m、南北0.9m、検出面からの深さは25cm前後の不定長方形土坑である。主軸方位はN-13°-Wを示す。

遺物は北東コーナー付近から弥生土器2個体分が出土した。474の須玖式甕と475の壺であるが、いずれも床面から15~20cm程度浮いていたため破棄遺物と考える。土器の時期は22号土坑と同様、概ね弥生時代中期後半頃と考えるが、土坑に伴う土器は出土していないため土坑の時期は不明である。



第164図 23号土坑および出土遺物実測図 (1/30・1/4)

表 135 23号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
474	甕	28.8	砂粒 少、 角閃石 少				粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ ヨコミガキ	口縁 ヨコナデ 不明		・一条のM字 突帯あり ・口縁部と外 側全面丹塗り
		—									
		—									
475	壺	(24.2)	砂粒 非常に多、 長石 少、 赤色粒子 多、 角閃石 少	淡黄褐色	良好 黒斑		粘土積上 げ	口縁 ヨコナデ ナデ・ヨコナデ	口縁 ヨコナデ 一部ナデ 不明		
		—									
		5.5									

24号土坑 (第165図)

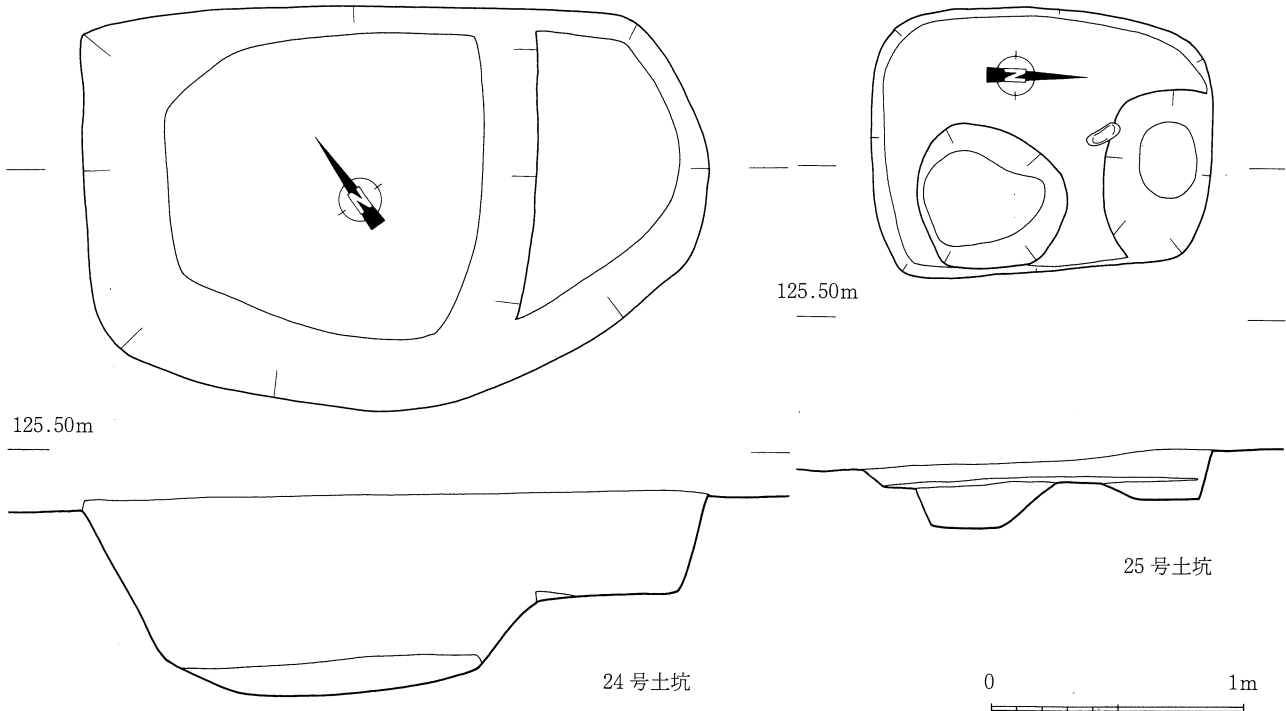
24号土坑はB-4区の南側、88号住居跡の東1mに位置する。規模は長軸約2.5m、短軸1.55m、検出面からの深さは最大で70cmの不定形土坑である。主軸方位はN-35°-Eを示す。南東側は幅50cm程度の一段高い部分をもつ。埋土は2層確認できた。下層は南東の平坦部に堆積していて、その後、一度に上層が堆積している。

遺物は埋土中から土器数点が出土したが土坑に伴う遺物ではなく、時期は不明である。

25号土坑 (第165図)

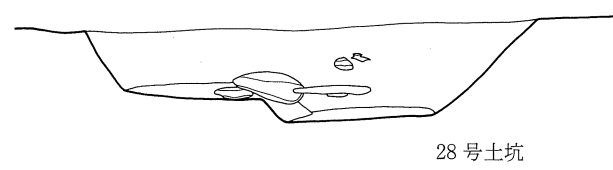
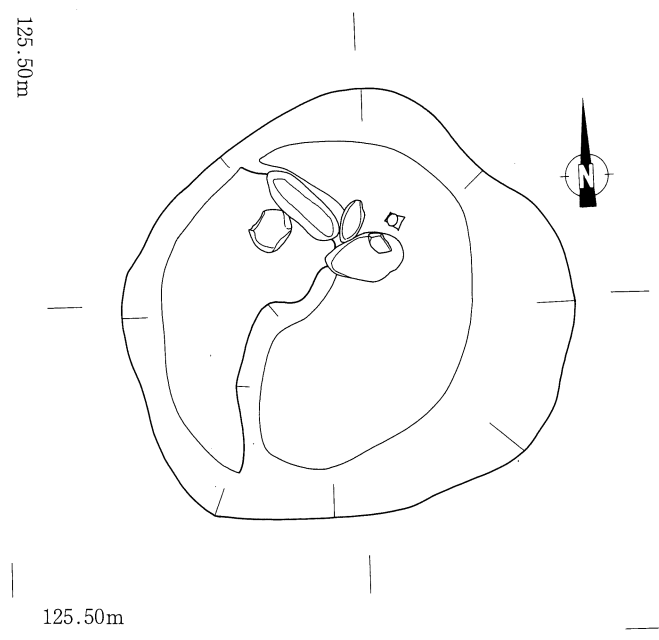
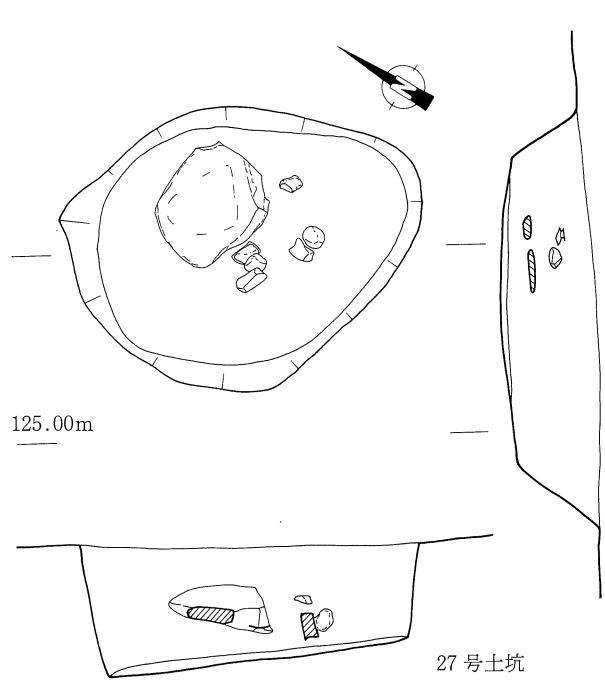
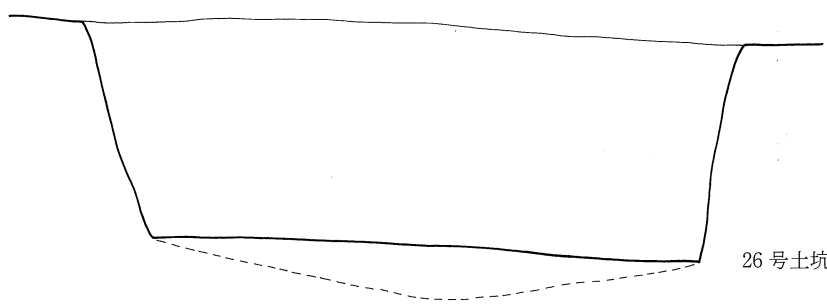
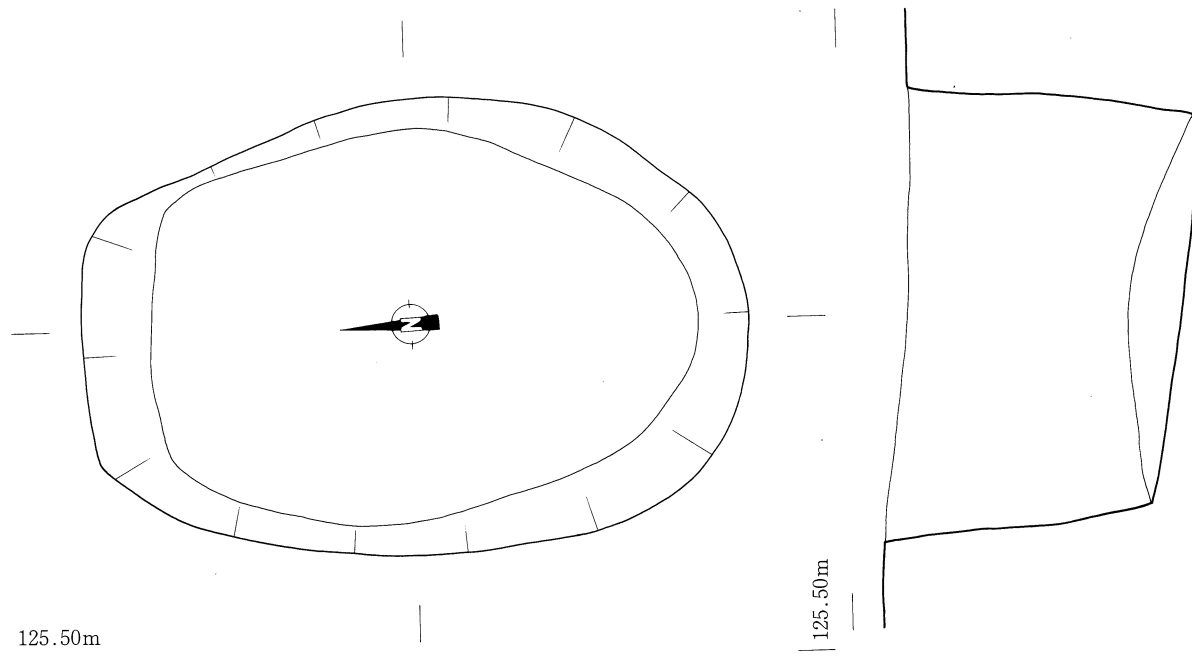
25号土坑はB-4区中央からやや南東寄り、89号住居跡の北壁中程上に位置する。規模は東西1.05m、南北1.35m、検出面からの深さは10cm前後の隅丸長方形である。柱穴2本が検出されたが、土坑に伴うものではない。

遺物の出土はなく、土坑の時期は不明である。



第165図 24・25号土坑実測図 (1/30)





第166图 26~28号土坑实测图 (1/30)

26号土坑（第166図）

26号土坑はB-4区の東端中央付近に位置する。規模は東西1.8m、南北2.66m、検出面からの深さは50～60cmである。平面形は楕円形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。

当土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である

27号土坑（第166図）

27号土坑はB-4区の南北端中央付近に位置する。規模は長軸1.15m、短軸2.0m、検出面からの深さは40～55cmの不定形土坑である。主軸方位はN-35°-Eを示す。

大型の河原石と10cm前後の礫数点が出土した。土器は数点出土したが、時期は判別できない。

28号土坑（第166図）

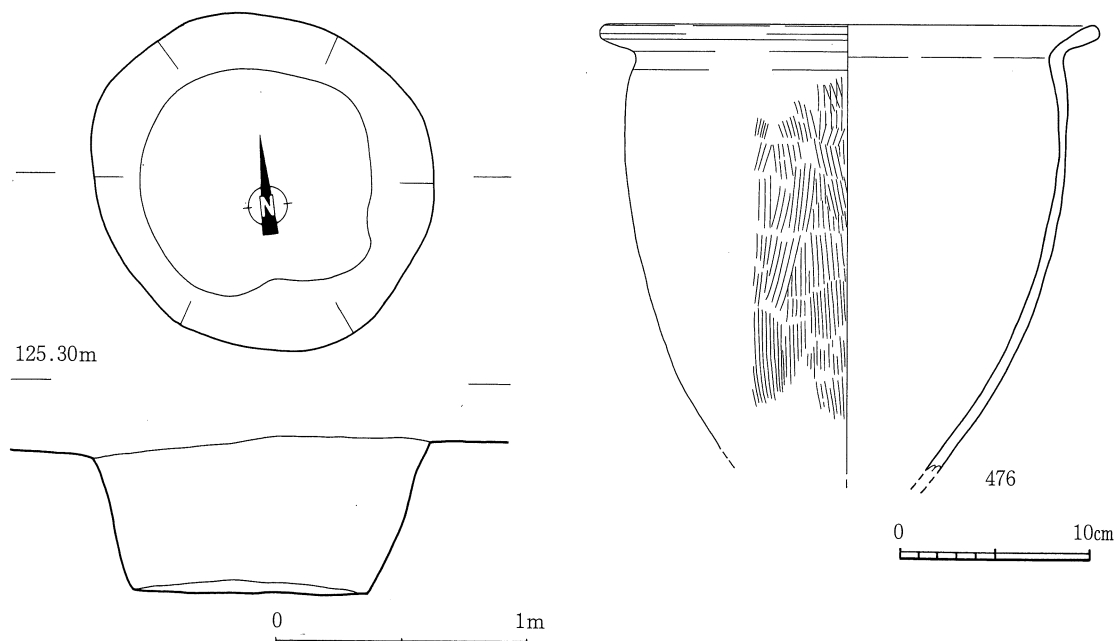
28号土坑はB-4区の中央からやや北東に位置する。規模は東西1.8m、南北1.7m、検出面からの深さは25～35cmで楕円形をした土坑である。主軸方位はN-3°-Eを示す。

遺物は15～30cm前後の礫が数点出土しただけで、土坑に伴う土器はなく、時期は不明である。

29号土坑（第167図）

29号土坑はB-4区の北東寄り、28号土坑の北東0.5m付近に位置する。規模は径1.3m、検出面からの深さは50～60cmの円形土坑である。弥生時代中期の貯蔵穴の可能性をもつ。

土坑内からは10～30cm前後の多量の礫と土器破片数点が出土した。実測可能な土器片は476の甕1点であった。土器からみた土坑の時期は弥生時代中期後半頃と思われる。



第167号 29号土坑および出土遺物実測図（1/30・1/4）

表136 29号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
476	甕	26.5		砂粒 非常に多 長石 多、 角閃石 多、 赤色粒子 多、 黒曜石 少、 白色粒子 多、 石英 少、	黒茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ 平滑なナデ		
		—									
		—									

30号土坑（第168図）

30号土坑はB-5区の北西端に位置する。規模は東西2.7m、南北3.4m、検出面からの深さは約20cmで楕円形をした土坑である。主軸方位はN-21°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

31号土坑（第168図）

31号土坑はB-5区の北東、30号土坑の南東4.5m付近に位置する。規模は東西0.5m、南北1.2m、検出面からの深さは5cm前後、平面形は隅丸長方形で残りはよくない。主軸方位はN-23°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

32号土坑（第168図）

32号土坑はB-5区西端のやや南側に位置する。規模は東西0.8m、南北1.3m、検出面からの深さは約40cmと比較的残りはよい。平面形は不定長方形をした土坑である。主軸方位はN-19°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

33号土坑（第169図）

33号土坑はB-5区西端のやや南側、32号土坑の東1.5m付近に位置する。規模は東西2.1m、南北1.75m、検出面からの深さは15～25cmの不定形な土坑である。主軸方位はN-3°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

34号土坑（第169図）

34号土坑はB-5区西端のやや南側、33号土坑の南側に位置し、ほぼ接している。規模は東西2.2m、南北1.6m、検出面からの深さは35cm前後で不定方形をした土坑である。主軸方位はN-3°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

35号土坑（第170図）

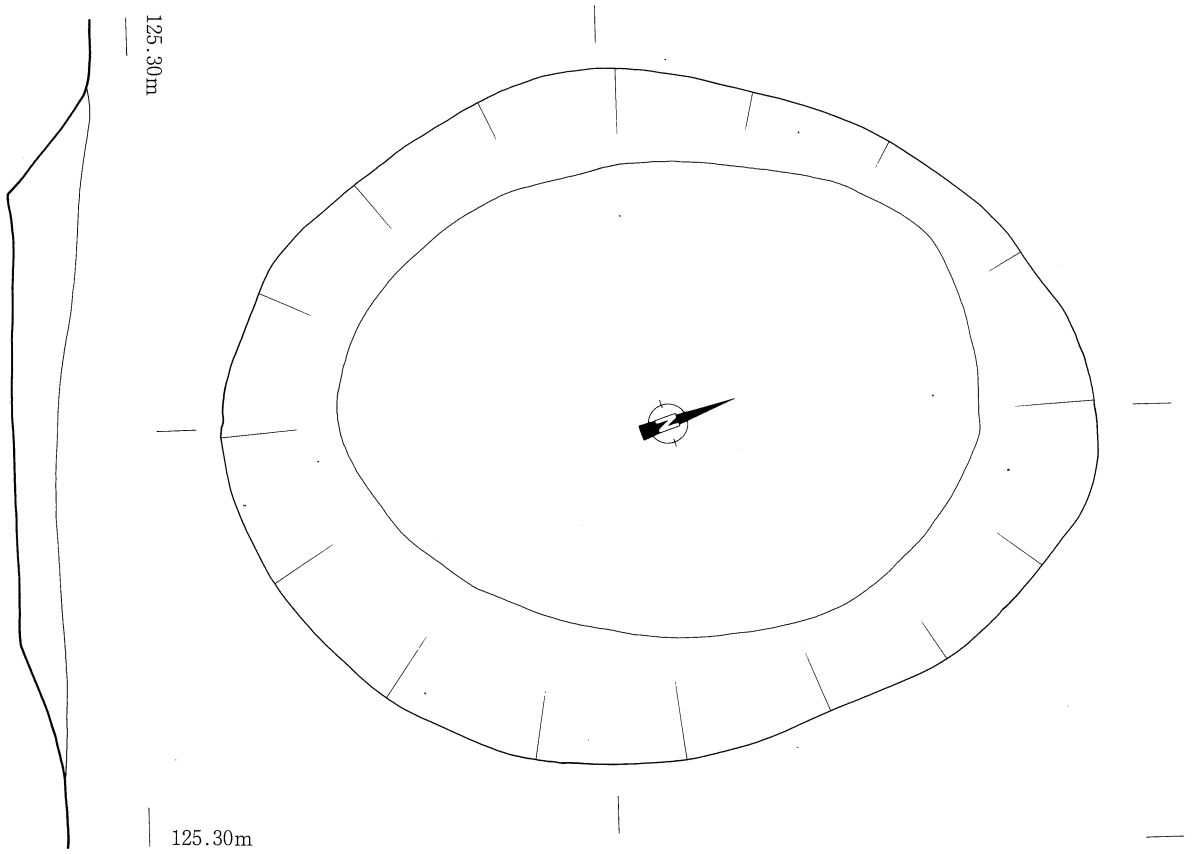
35号土坑はB-4・5区の南側境に位置する。規模は東西1.7m、南北2.65m、検出面からの深さは10cm前後、平面形は長方形である。主軸方位はN-8°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

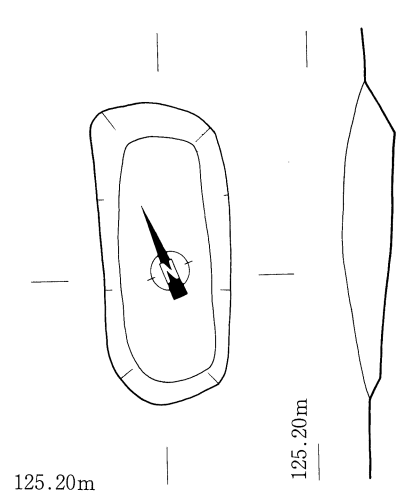
36号土坑（第173図）

36号土坑はB-5区の中央からやや南西、33・34号土坑の東4m付近に位置する。規模は最大で東西5.05m、南北7.0mで北側部分が広く、南側に向かって狭まる不定形の土坑である。残りは悪く、検出面からの深さは数cmである。主軸方位はN-3°-Eを示す。土坑の様相などからみて、祭祀遺構の可能性もある。

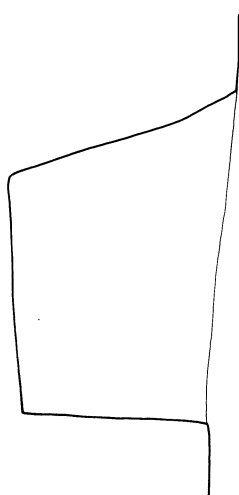
土坑内のほぼ全面にわたり、径5～30cm前後の礫が敷き詰められている様な状態で出土している。この礫群の間から弥生土器片が出土しているが、そのほとんどが小破片であり、時期の特定はできなかった。



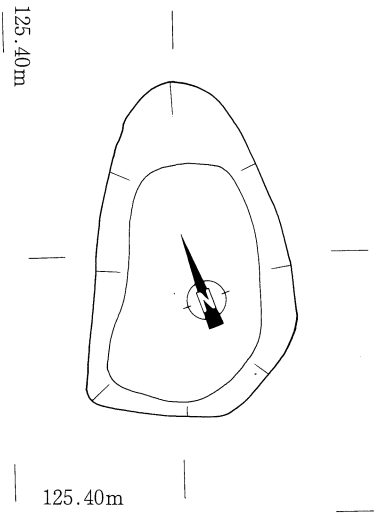
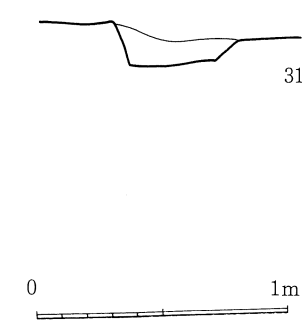
30号土坑



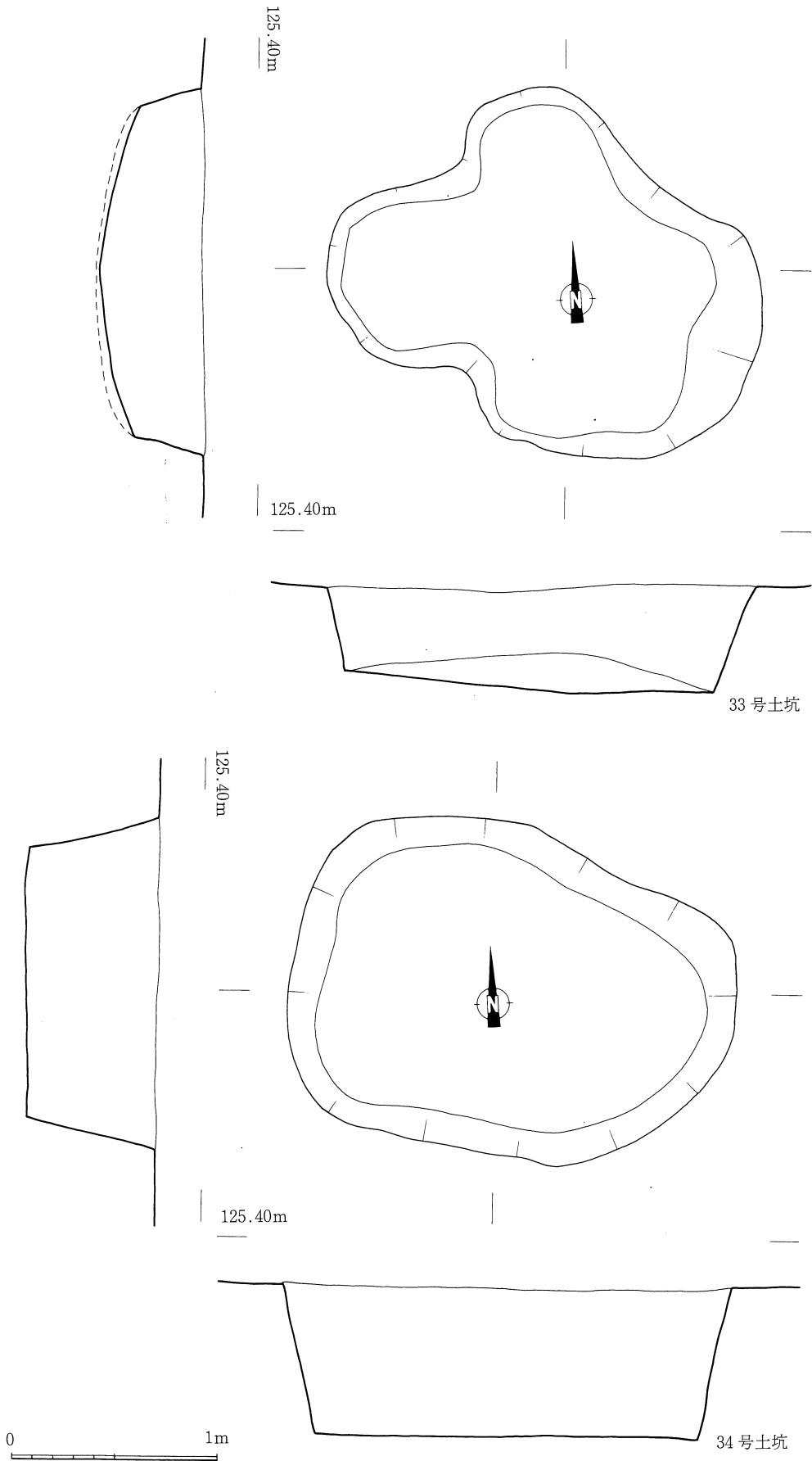
31号土坑



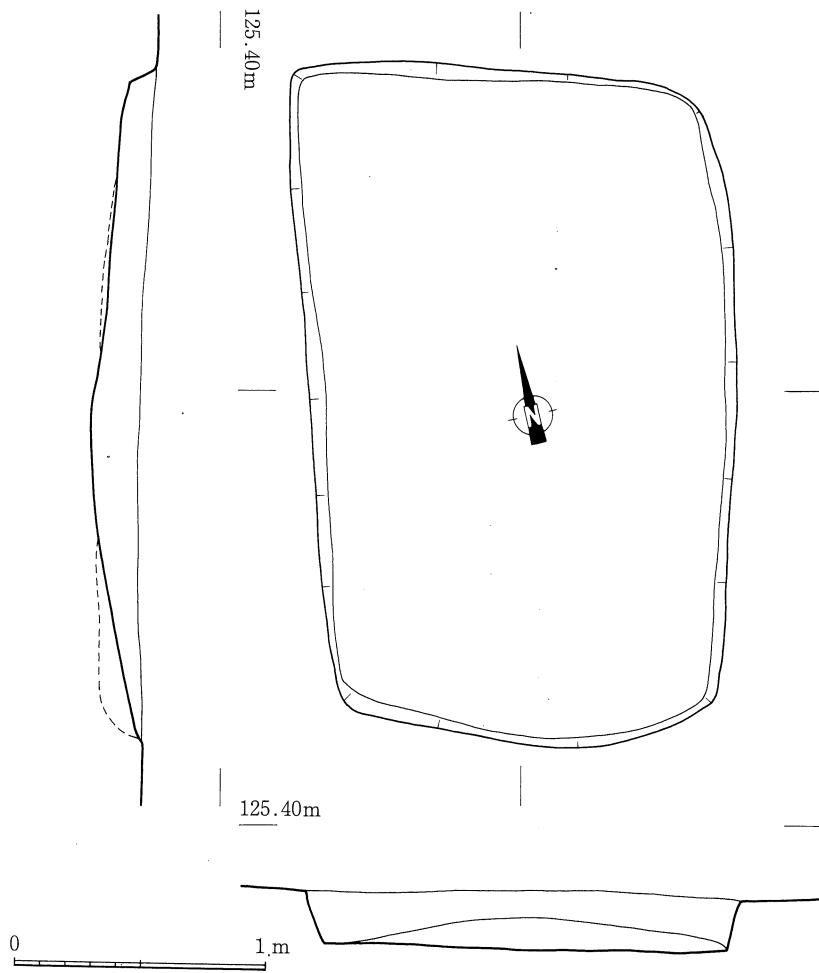
32号土坑



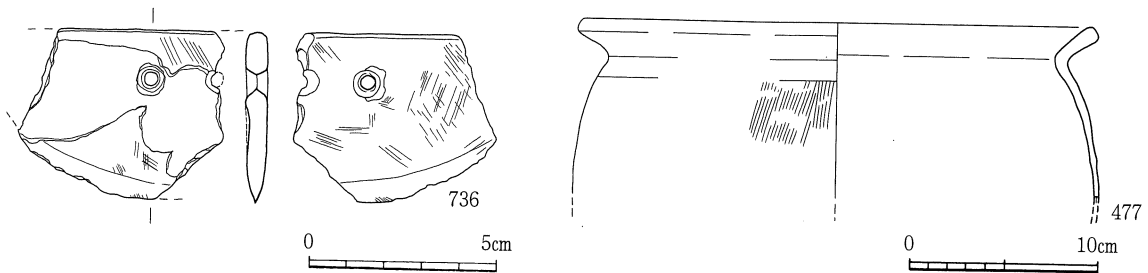
第 168 图 30 ~ 32 号土坑实测图 (1 / 30)



第 169 图 33·34 号土坑实测图 (1 / 30)



第170図 36号土坑実測図 (1/30)



第171図 36号土坑出土遺物実測図 (1/2)

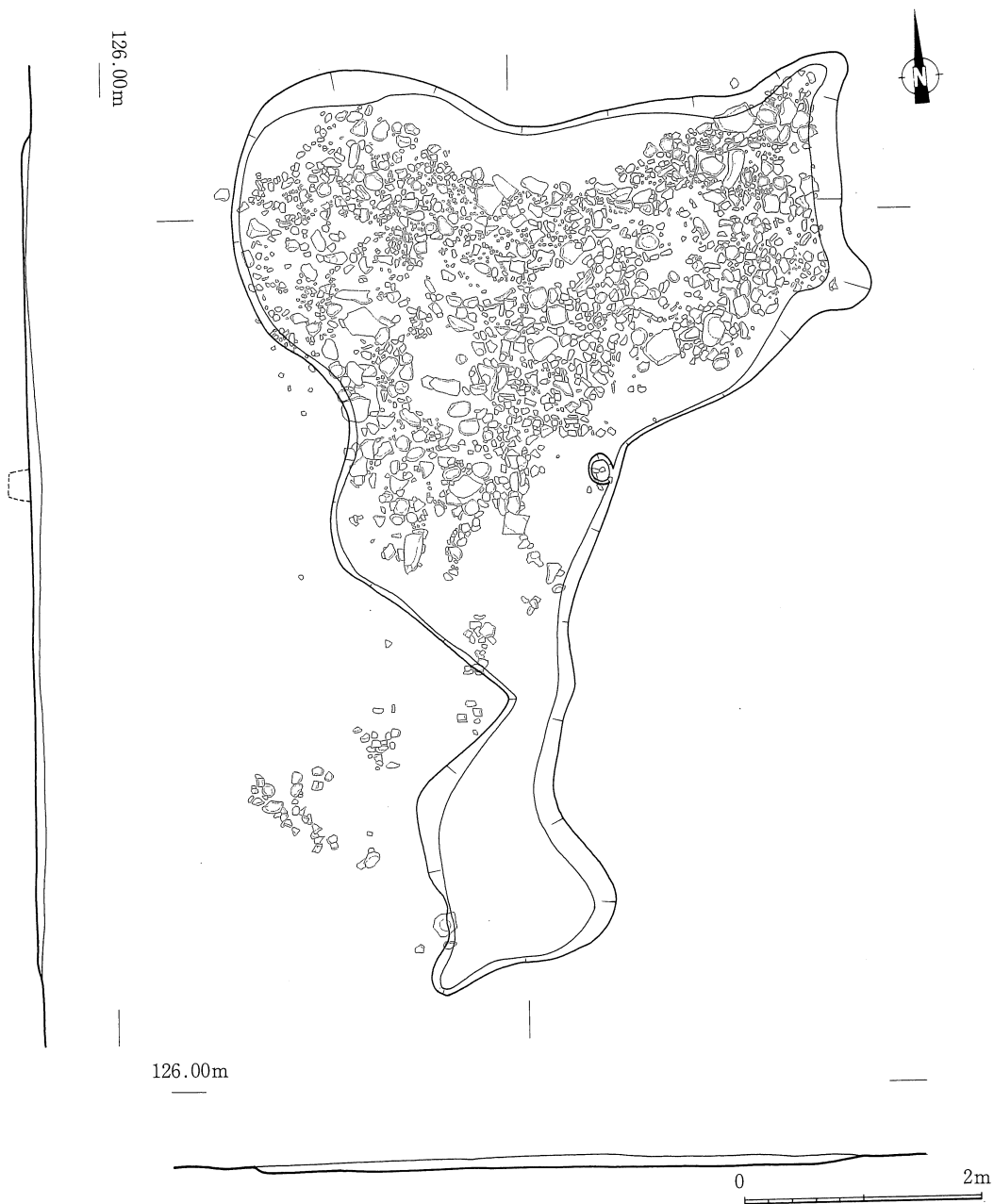
第172図 42号土坑出土遺物実測図 (1/4)

表137 36号土坑出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
736	石包丁	粘板岩	(54)	45	6	19.1	

表138 42号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
477	甕	(78.8)		砂粒多、 黒色粒子少、 角閃石少、 長石少、 石英少	茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ	口縁 ヨコナデ		
		—	—					タテハケ目	ナデ		
		—	—								

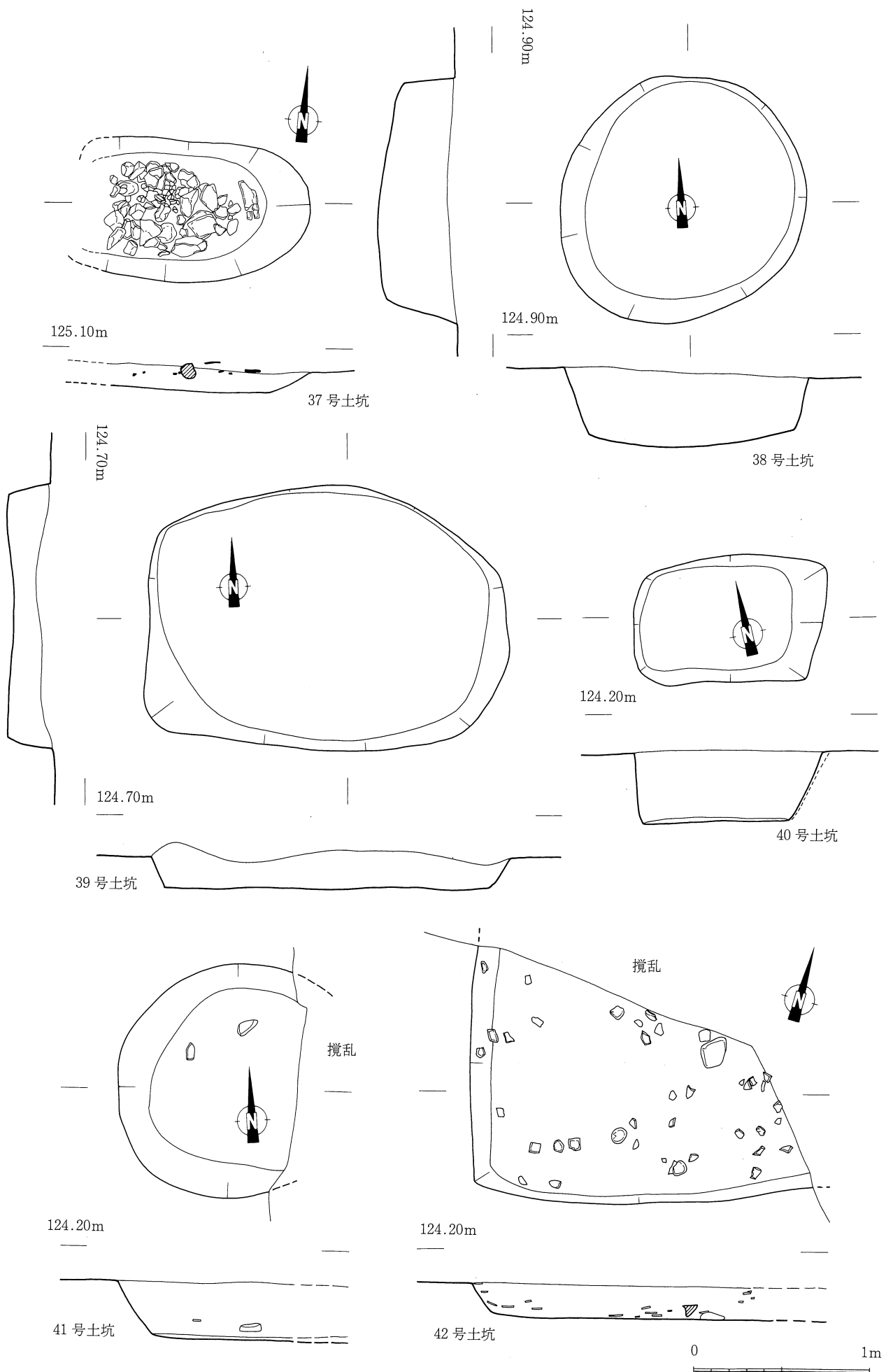


第 173 図 36 号土坑実測図 (1 / 60)

37 号土坑 (第 174 図)

37 号土坑は B-5 区の南東側、調査区の東端に位置する。西側の一部は攪乱によって消滅している。規模は東西  $1.2 + \alpha$  m、南北 0.8m、検出面からの深さは約 10cm で隅丸長方形をした土坑である。主軸方位は  $N-6^{\circ}-W$  を示す。

土坑内には 5 ~ 20cm 前後の礫が敷き詰められた状態で出土した。礫群中からは数点の弥生土器が出土したが、いずれも胴部あるいは小破片であり、遺物からみた土坑の時期は弥生時代後期頃と思われる。



第174图 37~42号土坑实测图 (1/30)



#### 38号土坑（第174図）

38号土坑はC-5区の北東端、調査区南東端に位置する。規模は径1.4m前後、検出面からの深さは約40cmの円形土坑である。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### 39号土坑（第174図）

39号土坑は調査区南東端、38号土坑の北東1.5m付近に位置する。規模は東西2.05m、南北1.5m、検出面からの深さは約20cmで、平面形は隅丸長方形を呈している。主軸方位はN-3°-Eを示す。

土坑内からは数点の弥生土器が出土したが、いずれも小破片や胴部であり、時期決定はできなかった。

#### 40号土坑（第174図）

40～46号土坑は本調査区の北20m付近に位置する農道付け替え部分で検出された遺構である。

40号土坑はA-2区北東方向に位置する。規模は東西1.1m、南北0.7m、検出面からの深さは約40cmで、平面形は長方形である。主軸方位はN-12°-Eを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### 41号土坑（第174図）

41号土坑はA-2区東側中央付近、42号土坑の南東5m付近に位置する。東側半分は後世の攪乱により消滅している。規模は東西1.05m、南北1.3m、検出面からの深さは約30cmで、平面形は円形あるいは楕円形であったと考えられる。主軸方位はN-3°-Eを示す。

土坑内からは弥生土器片1点と石1点が出土したが、時期判定はできなかった。

#### 42号土坑（第174図）

42号土坑はA-2区東側中央付近、41号土坑の東3m付近に位置する。北側部分は後世の攪乱により消滅している。規模は不明であるが、検出面からの深さは約20cmで、平面形は方形あるいは長方形を呈していたと考える。主軸方位はN-18°-Wを示す。

土坑内からは比較的多量の礫・土器が出土したが、土器のほとんどが小破片で、復元できたものは第172図に図示した甕(477)上部1点だけであった。この土器からみた土坑の時期は弥生時代中期後半前後頃と思われる。

#### 43・44号土坑（第175図）

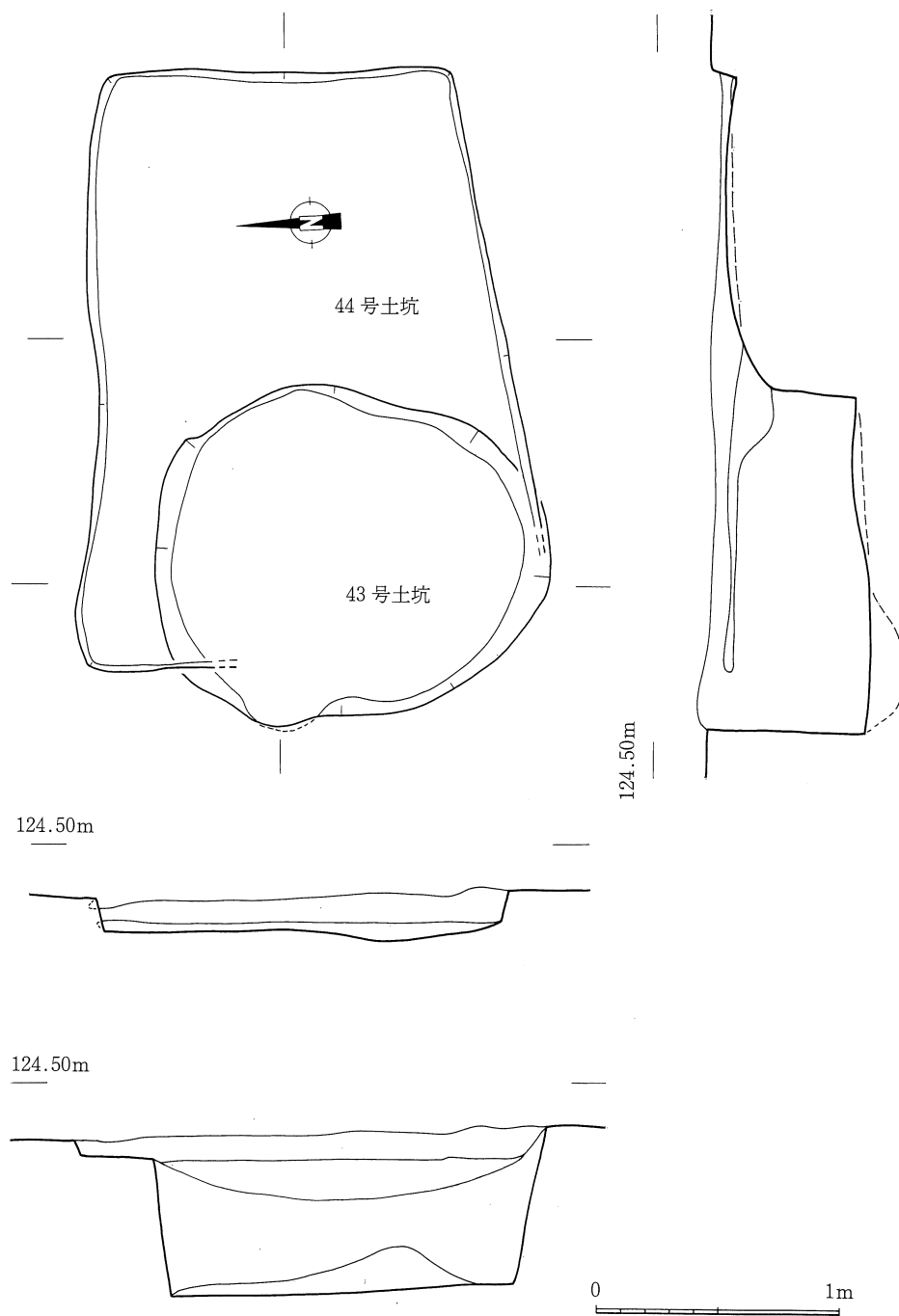
43・44号土坑はA-3区の中央からやや西寄りに位置する。前後関係は43号土坑が先行すると考えられ、これを切るかたちで東側に44号土坑が構築されているが、44号土坑の西壁を検出することはできなかった。

43号土坑の規模は東西2.7m、南北3.2m、検出面からの深さは約80cmで、平面形は楕円形である。貯蔵穴の可能性をもつ。貯蔵穴であれば時期は弥生時代中期の遺構であろう。

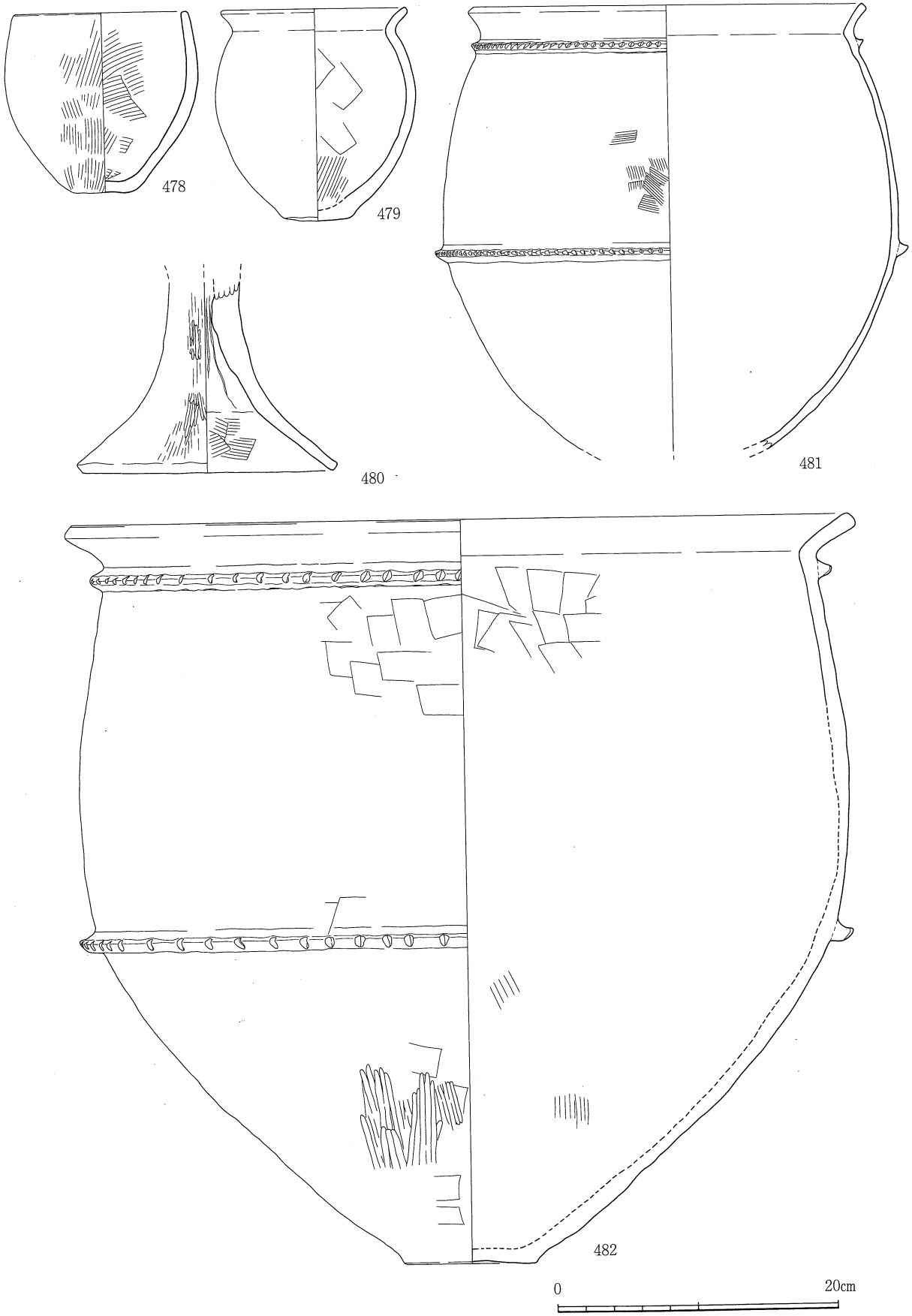
44号土坑の規模は東西4.9m、南北3.4m、検出面からの深さは20cm前後で、平面形は長方形である。主軸方位はほぼ磁北である。

遺物は遺構全面から多量に出土したが、そのほとんどが最上層からの出土であり、土坑破棄後の廃棄遺物である。出土遺物の時期も弥生時代後期前半から古墳時代初頭の土師器までさまざまであ

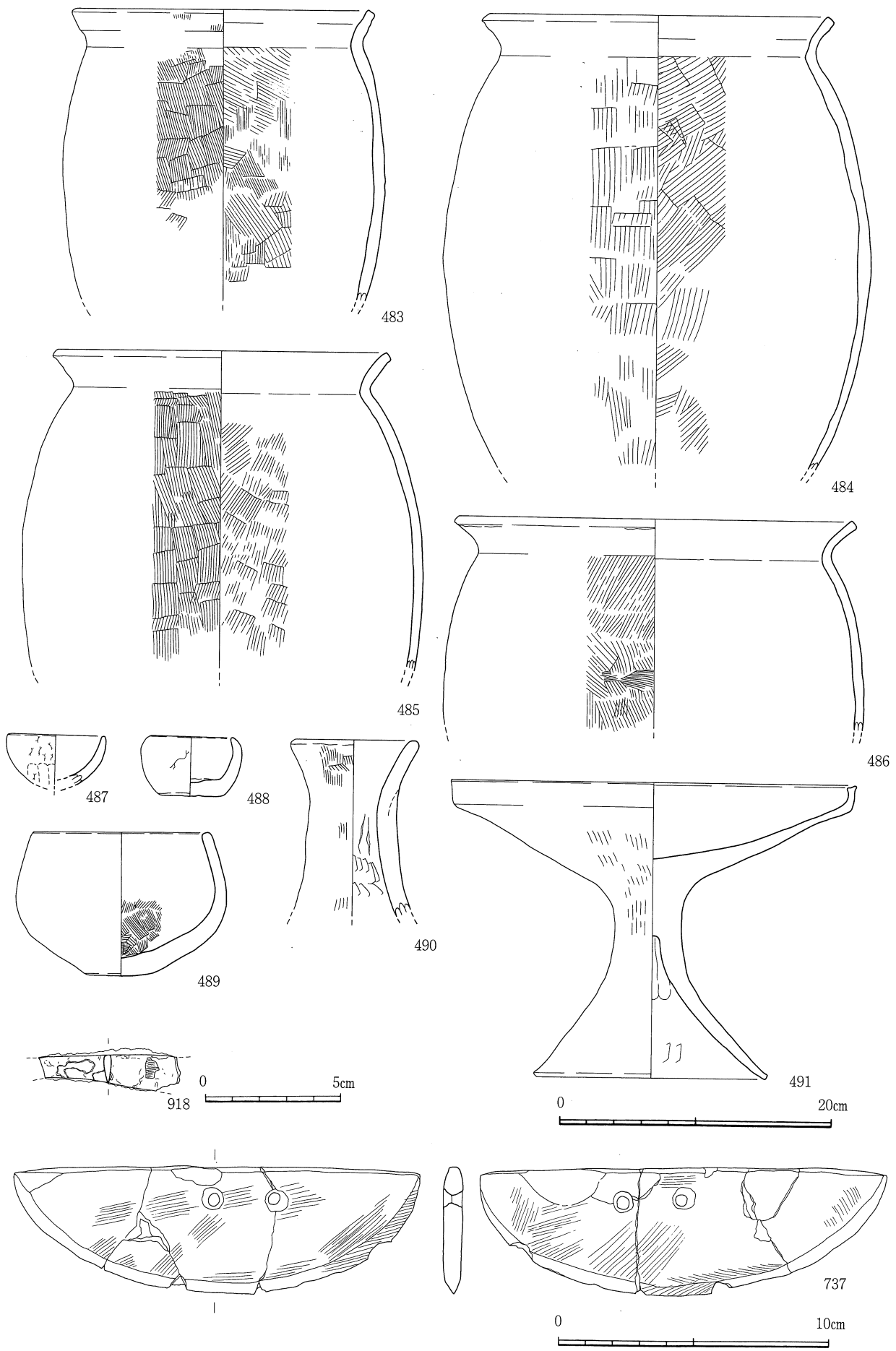
る。この最上層は両土坑の全面に 10～30cmの厚さで堆積している。478～480・483～485・918 は 43号土坑上層からの出土、481・482・486 は 43・44号両土坑出土の接合遺物、487～491・737 は 44号土坑上層からの出土遺物である。483～486 は土師器の甕で古墳時代初頭頃と考えられる。出土遺物からみた土坑の時期は不明であるが、43号土坑は貯蔵穴と考えれば弥生時代中期頃と考えられる。44号土坑はそれ以降の時期であるが、正確な時期は不明である。



第 175 図 43・44 号土坑実測図 (1 / 30)



第176图 43·44号土坑出土遗物实测图1 (1/4)



第177图 43~44号土坑出土遗物实测图2 (1/4·1/2)

表 139 43・44 号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
478	鉢	(22.4)	砂粒 少、 角閃石 少、 赤色粒子 少、 長石 少	茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ヨコハケ目			
		12.7									
		4.4									
479	甕	13.2	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 多	明黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ 不明	口縁 ヨコナデ ハケナデ・ハケ 目			
		—									
		(5.0)									
480	高坏	—	砂粒 多、 長石 多、 角閃石 多、 白色粒子 少、 赤色粒子 少	明黄褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ナデ・ヨコハケ 目			
		—									
		18.6									
481	甕	(28.2)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少	淡黄白色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ 不明			
		—									
		—									
482	甕	(56.0)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少	淡黄白色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケナデ・ミガ キ	口縁 ヨコナデ ハケ目		一条三角突帯 の刻目あり	
		53.0									
		(9.3)									
483	甕	22.4	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 多、 白色粒子 少	黒茶褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ハケ目	すず付着一 二次加熱あり		
		—									
		—									
484	甕	(26.0)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 少	茶褐色	良好 黒斑	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ 斜めのハケ目	すず付着一 二次加熱あり		
		—									
		—									
485	甕	(24.8)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 多	黒茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ 斜めのハケ目			
		—									
		—									
486	甕	(29.8)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 多、 白色粒子 少	茶褐色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコナデ ハケ目	口縁 ヨコナデ ナデ			
		—									
		—									
487	鉢	(5.8)	砂粒 多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 長石 少	淡黄白色	良好 黒斑	粘土積上げ?	ナデ	ヨコナデ		表面にひび割 れあり	
		4.4									
		(5.0)									
488	碗?	(7.2)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 少、 長石 多、 石英 少	明黄褐色	良好	手づくね	ナデ	ナデ		指圧痕あり 表面に小さい ひび割れが多い	
		—									
		—									
489	鉢	(13.0)	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 非常に多、 白色粒子 少	黄褐色	良好 黒斑	粘土積上げ?	ナデ	ハケ目		内底にレン状 ハケ	
		10.6									
		5.0~5.6									
490	支脚	—	砂粒 多、 赤色粒子 少、 角閃石 多、 長石 少、 白色粒子 多、 灰色粒子	黄褐色	良好	粘土積上げ	タテハケ目	ヘラナデ ヨコナデ	赤変一 二次加熱あり	絞り痕あり	
		—									
		9.4									
491	高坏	(30.0)	砂粒 非常に多、 赤色粒子 多、 角閃石 多、 長石 多	淡黄褐色	良好	連続成 形+円盤 充填	口縁 ヨコナデ タテハケ目	口縁 ヨコナデ ヘラナデ			
		21.8									
		(17.4)									

表 140 43号土坑出土鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎径 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
918	刀子	5.2	—	—	0.9	—	木質片付着

表 141 44号土坑出土土器計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
737	石包丁	粘板岩	150	46	7	52.2	

45号土坑 (第178図)

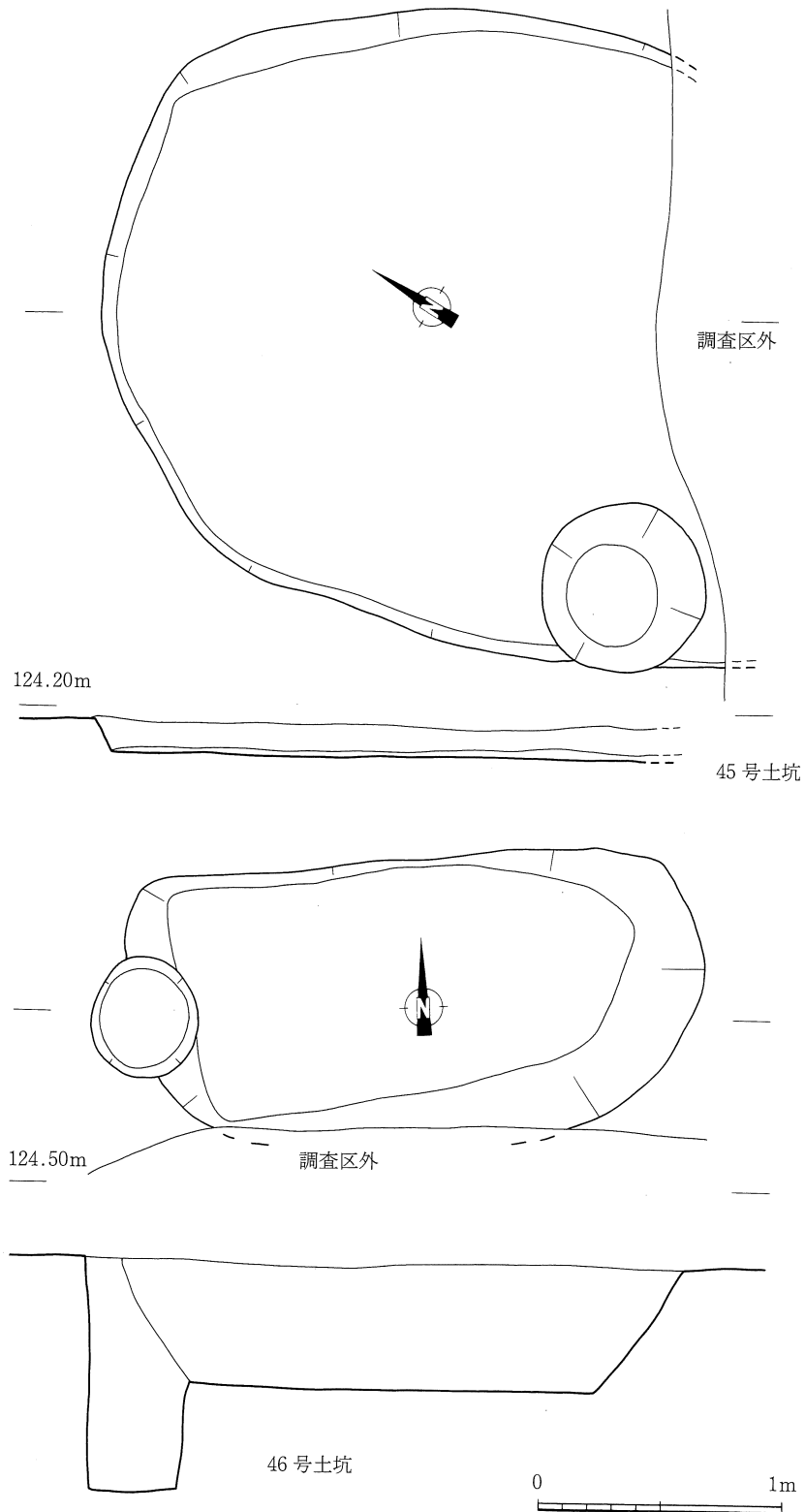
45号土坑はA-3区の北東方向に位置する。南東部分は調査区外である。規模は東西約2.5m、南北2.35 +  $\alpha$  m、検出面からの深さは約15cmで、平面形は隅丸長方形を呈していたと考える。主軸方位はN-32°-Wを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。

46号土坑 (第178図)

46号土坑はA-4区の北側中央付近に位置する。規模は東西2.35m、南北1.05m、検出面からの深さは約50cmで、平面形は隅丸長方形を呈している。主軸方位はN-32°-Wを示す。

土坑に伴う遺物の出土はなく、時期は不明である。



第178図 45・46号土坑実測図 (1/30)

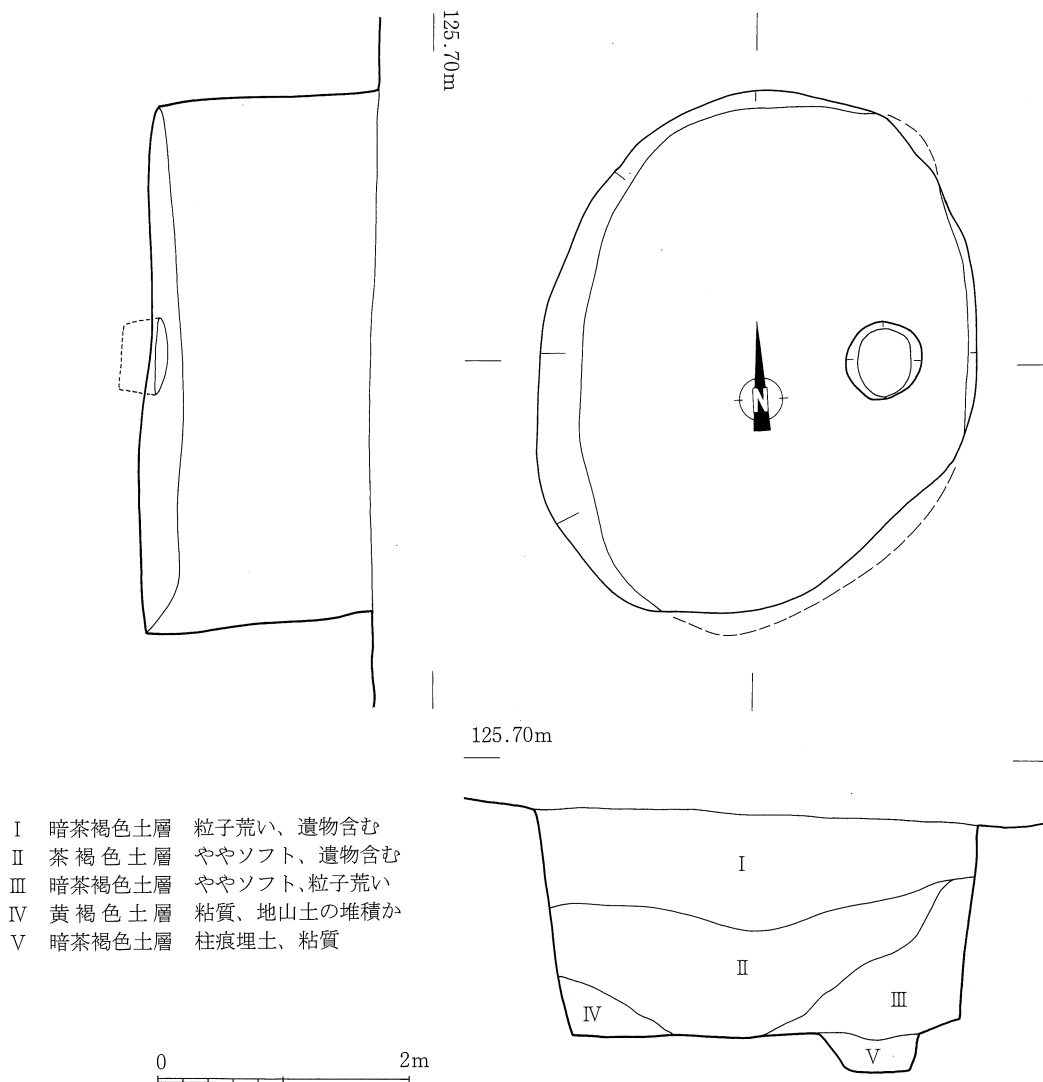
C) 粘土採掘坑

調査区からは粘土採掘坑と思われる土坑 10 基を検出・調査を行った。

51 号採掘坑 (第 179 図)

51 号採掘坑は B-1 区の南側、調査区の南西端方向に位置する。規模は東西 3.5m、南北 4.1m、検出面からの深さは 1.8m で平面形は楕円形である。南東壁面は内湾している。土坑床面東側部分で径 0.6m、深さ 30cm 前後の柱穴 1 基を検出した。床面は比較的平坦で、床面や壁面の掘り込みはみられない。このため、壁面崩落の可能性も考えれば、貯蔵穴の可能性もある。埋土は柱穴埋土も含めて 5 層確認できた。

土坑内からは弥生土器が 10 数点出土しているが、いずれも I・II 層からの出土で床面出土の土器はない。このため土坑の時期は不明である。

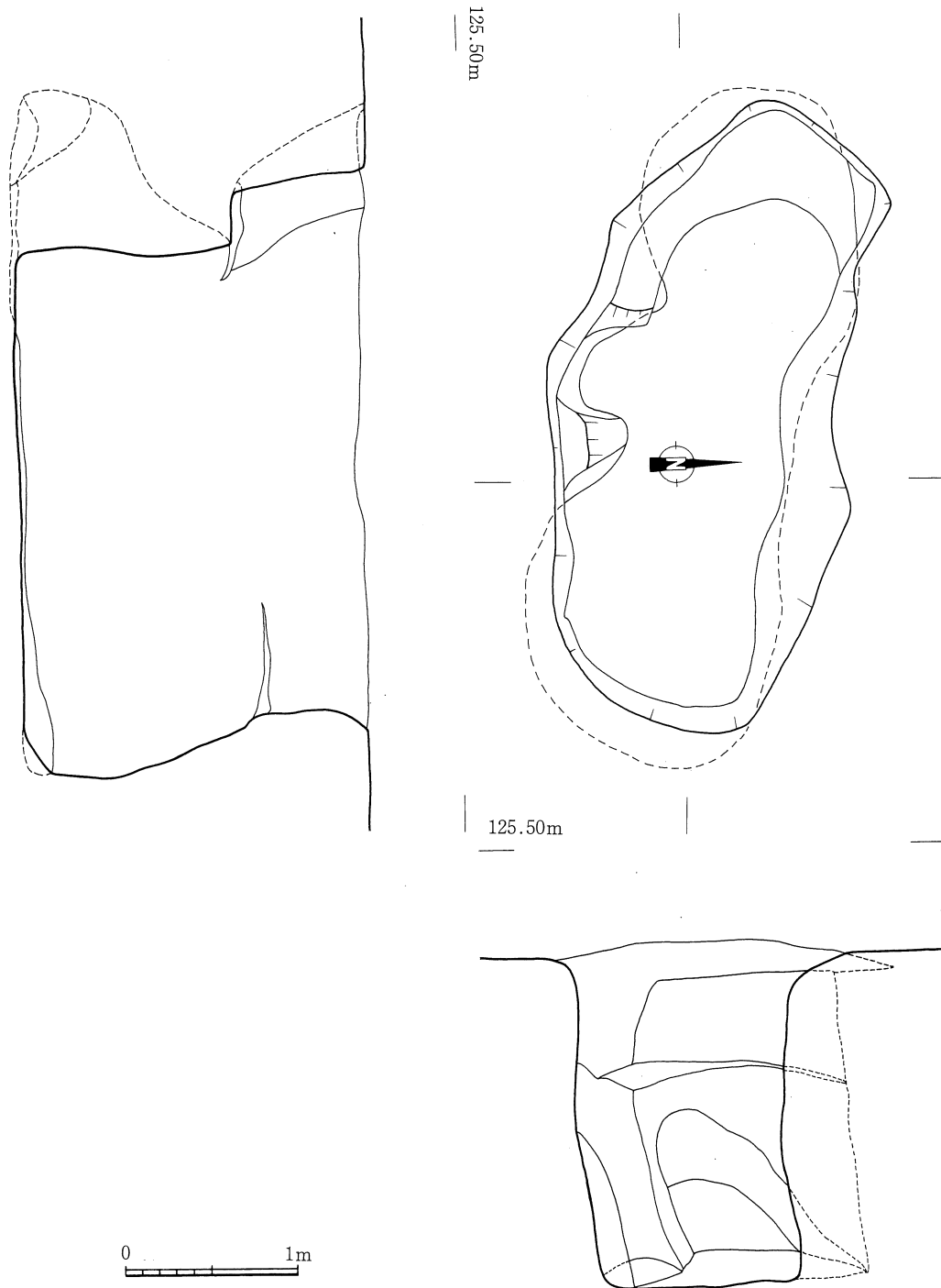


第 179 図 51 号採掘坑実測図 (1 / 60)

52号採掘坑（第180図）

52号採掘坑はB-1区の南東方向、21号住居跡の南西2.5m付近に位置する。規模は上面で東西3.55m、南北0.85m、床面最大で東西4.0m、南北0.65mである。検出面からの深さは2.0mで平面形はやや歪な隅丸長方形である。主軸方位はN-3°-Eを示す。床面は比較的平坦であるが、壁面は凹凸が激しく、東壁や西壁は内側に掘り込まれている。

土坑に伴う遺物の出土はなく、土坑の時期は不明である。



第180図 52号採掘坑実測図（1/40）



53号採掘坑 (第181図)

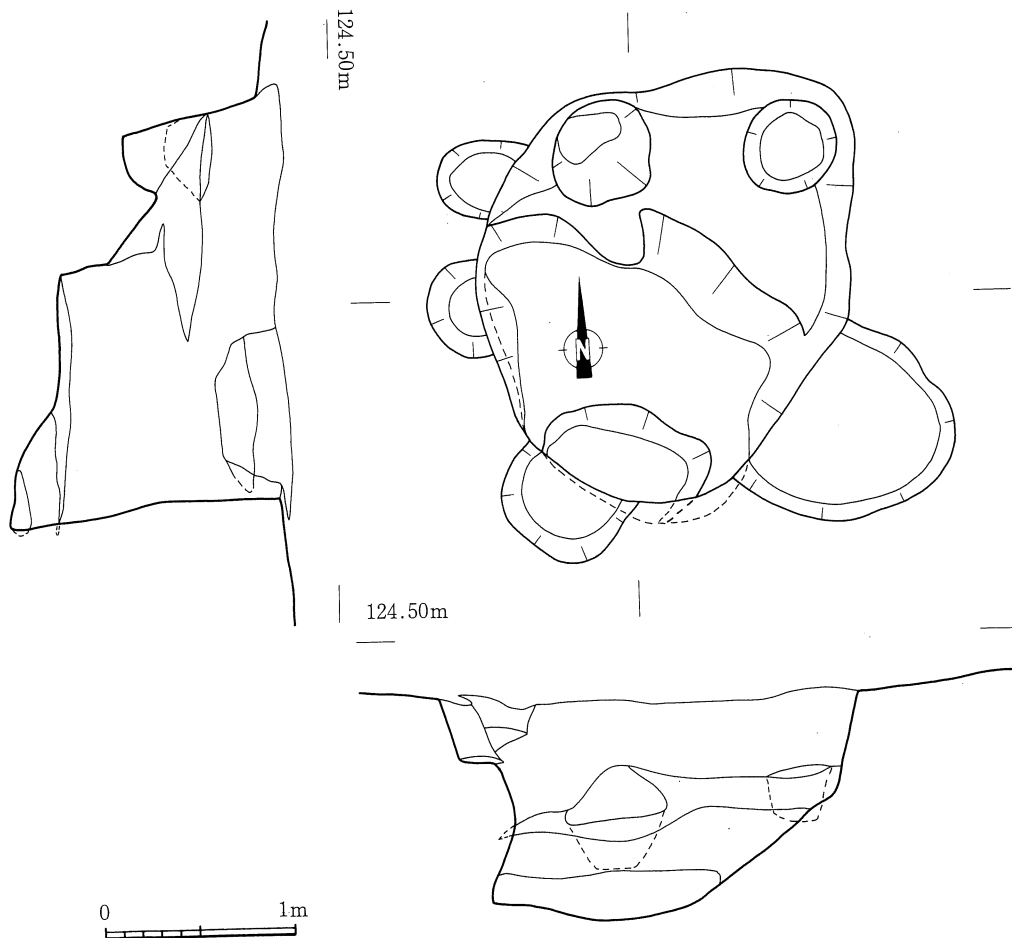
53号採掘坑はB-2区の北端中央、8・9号土坑の南1m付近に位置し、調査区の北壁沿いにあたる。周辺の柱穴は53号土坑に切られている。規模は上面で東西2.0m、南北2.15m、検出面からの深さは0.6~1.5mである。平面形は不定形である。主軸方位はN-3°-Eを示す。床面は全体を約70cm掘り下げて、その後南側をさらに80cm程度掘り進めている。この掘り込み部分で粘土を採掘したと思われる。南側壁面は内湾気味に掘り込まれている。壁面は凹凸が激しい。

土坑に伴う遺物の出土はなく、土坑の時期は不明である。

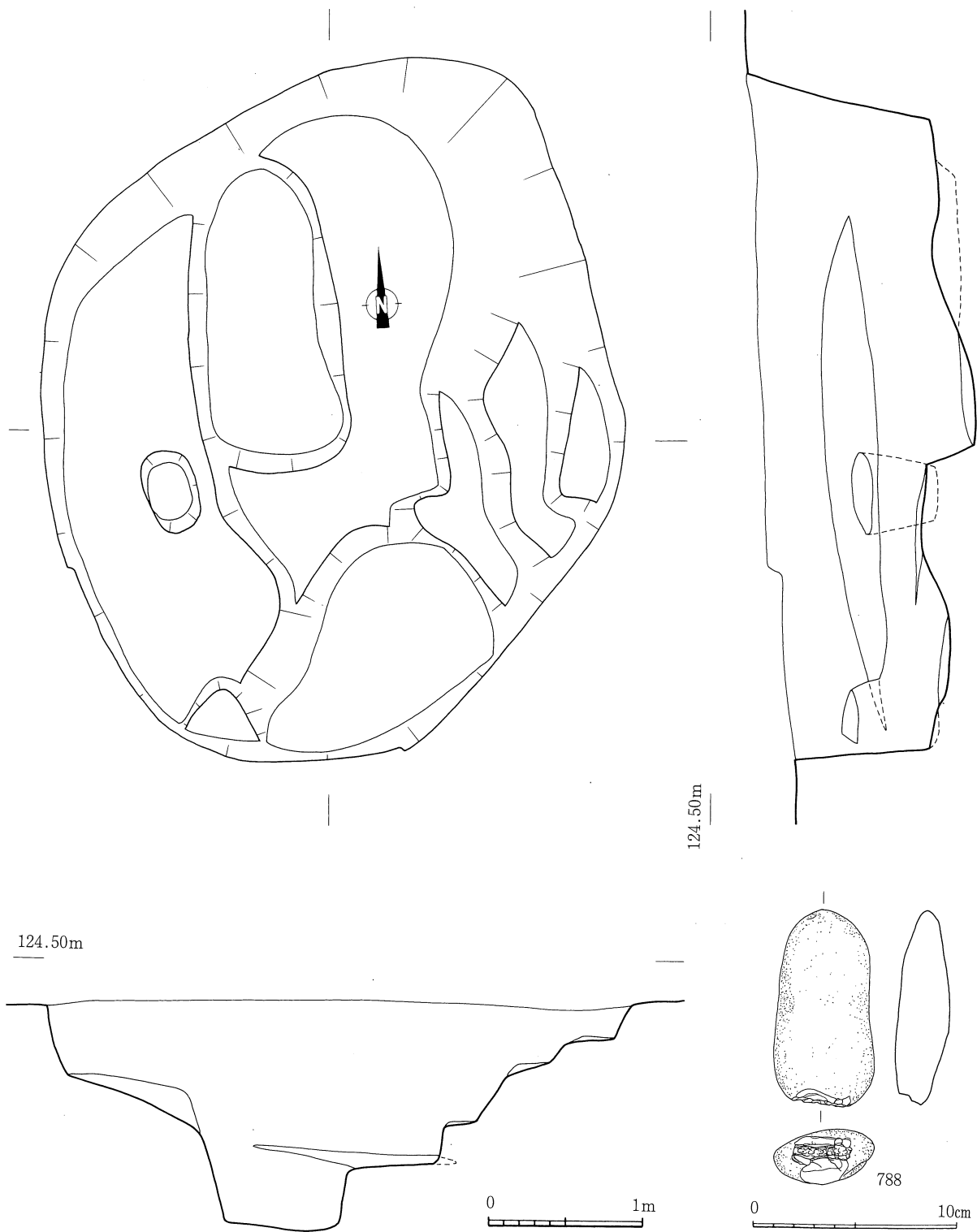
54号採掘坑 (第182図)

54号採掘坑はB-2区の北端中央、28号住居跡の北東コーナー部分に位置する。規模は上面で東西3.8m、南北4.5m、検出面からの深さは最深部で1.45mである。平面形は不定形である。主軸方位はN-3°-Eを示す。床面は全体を約80cm掘り下げて、その後南側部分と北東部分をさらに50~70cm程度掘り進めている。これらの掘り込みから粘土を採掘したと思われる。壁面は凹凸が激しく、東壁には階段状の掘り込み部分が見られる。

土坑内からは埋土中から敲石(788)1点が出土したが、土坑に伴う土器の出土はない。土坑の時期は28号住居跡との切り合い関係からみて、弥生時代後期中葉頃か、それ以降であろう。



第181図 53号採掘坑実測図 (1/40)



第 182 図 54 号採掘坑および出土遺物実測図 (1/40・1/3)

表 142 54 号採掘坑出土石器計測表

番号	器種	石 材	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
788	敲石	安山岩	9.3	4.9	2.3	173.9	

55号採掘坑（第183図）

55号採掘坑はB-2区の北端中央、28号住居跡の南東コーナー部分に位置する。53・54号採掘坑とは南北にほぼ一直線上に並ぶ。規模は上面で東西の中央部分が3.0m、南北4.6m、検出面からの深さは最深部で1.3mである。平面形は不定形である。主軸方位はN-3°-Eを示す。壁面は凹凸が激しく、北壁は内側に掘り込まれている。壁面北東部分には階段状の掘り込み部分がみられる。

土坑内からは埋土中から小型の鉢（492）1点と、砥石（655・656）が出土したが、土坑に伴う遺物ではない。土坑の時期は54号土坑と同様に、28号住居跡との切り合い関係からみて、弥生時代後期中葉頃か、それ以降であろう。

表143 55号採掘坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
492	鉢		8.7	砂粒 非常に多、 角閃石 少、 赤色粒子 多、 長石 少	淡黄褐色	良好 黒斑	?	ナデ	ナデ		全体に小さいひび割れが目立つ
			8.3								
			3.2								

表144 55号採掘坑出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
655	砥石	硬質頁岩	79	7	15	100.9	
656	砥石	硬質頁岩	133	54	21	244.2	

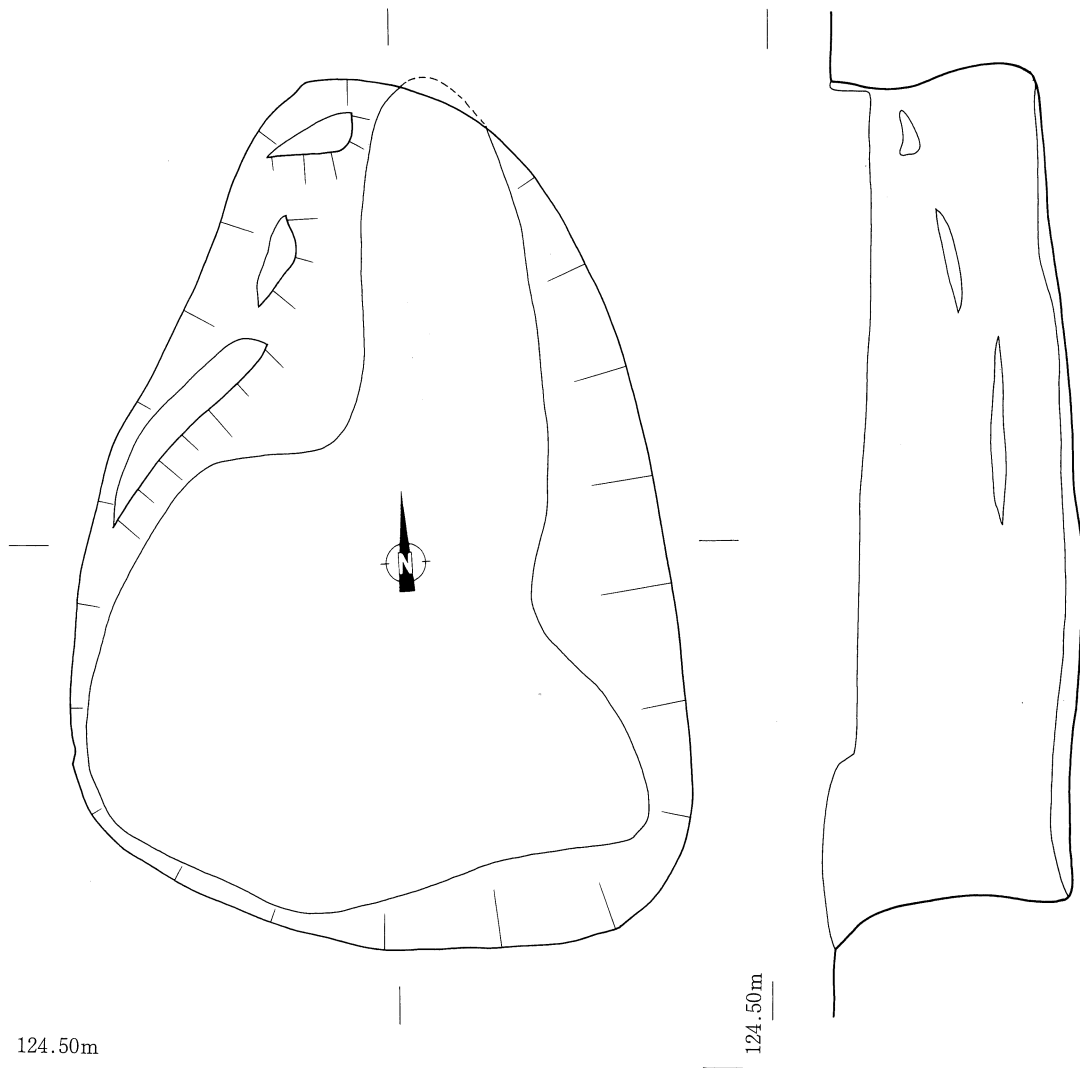
56号採掘坑（第184図）

56号採掘坑はB-2区の中央からやや北東寄り、32号住居跡の南コーナー部分に位置する。55号採掘坑の東3.5m付近にあたる。規模は上面で東西2.8m、南北2.6m、検出面からの深さは1.3mである。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-28°-Wを示す。壁面は凹凸が激しく、南東側の壁は奥に、床面は40cm程度深く掘り込まれている。この部分は粘土を採掘した掘り込みと思われる。また、北側床面と壁との境には幅20cm、深さ10cm前後の溝状の掘り込みがみられる。

土坑内からは土器片10数点が出土したが、ほとんどが小破片であった。復元・実測できた遺物は壺の口縁部（493）と、甕（494）であった。壺は頸部に刻目をもつ断面台形の突帯が巡り、甕の外表面には叩き調整がみられる。この2点も流れ込みの可能性もあるが、32号住居跡との切り合い関係等から考えて、弥生時代後期後葉～終末頃と思われる。

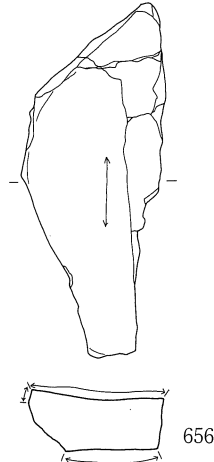
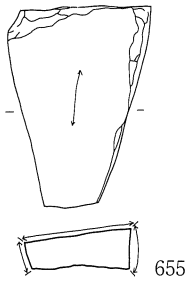
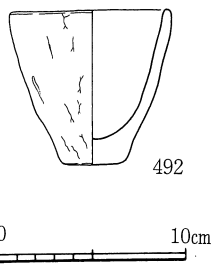
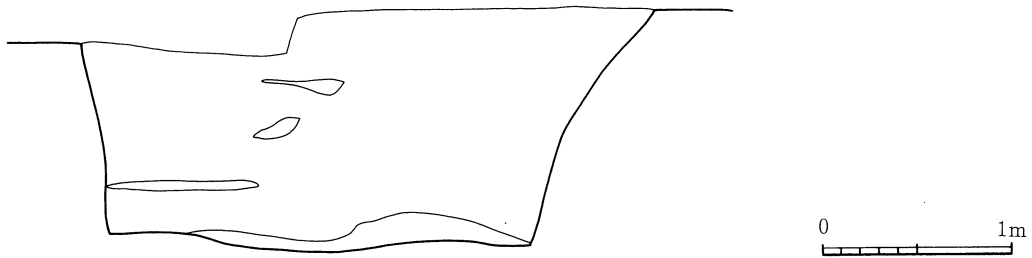
表145 56号採掘坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
493	壺		(27.0)	砂粒 多、 角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子 少	淡黄灰色	良好	粘土積上げ	口縁 ヨコハケ目 タテハケ目	口縁 ヨコナデ 斜めのハケ目		一条の刻目突帯
			—								
			—								
494	甕		(14.6)	砂粒 多、 角閃石 少、 長石 少、 赤色粒子 少	黒茶褐色	良好	粘土積上げ	平行タタキ	ハケ目		
			—								
			—								

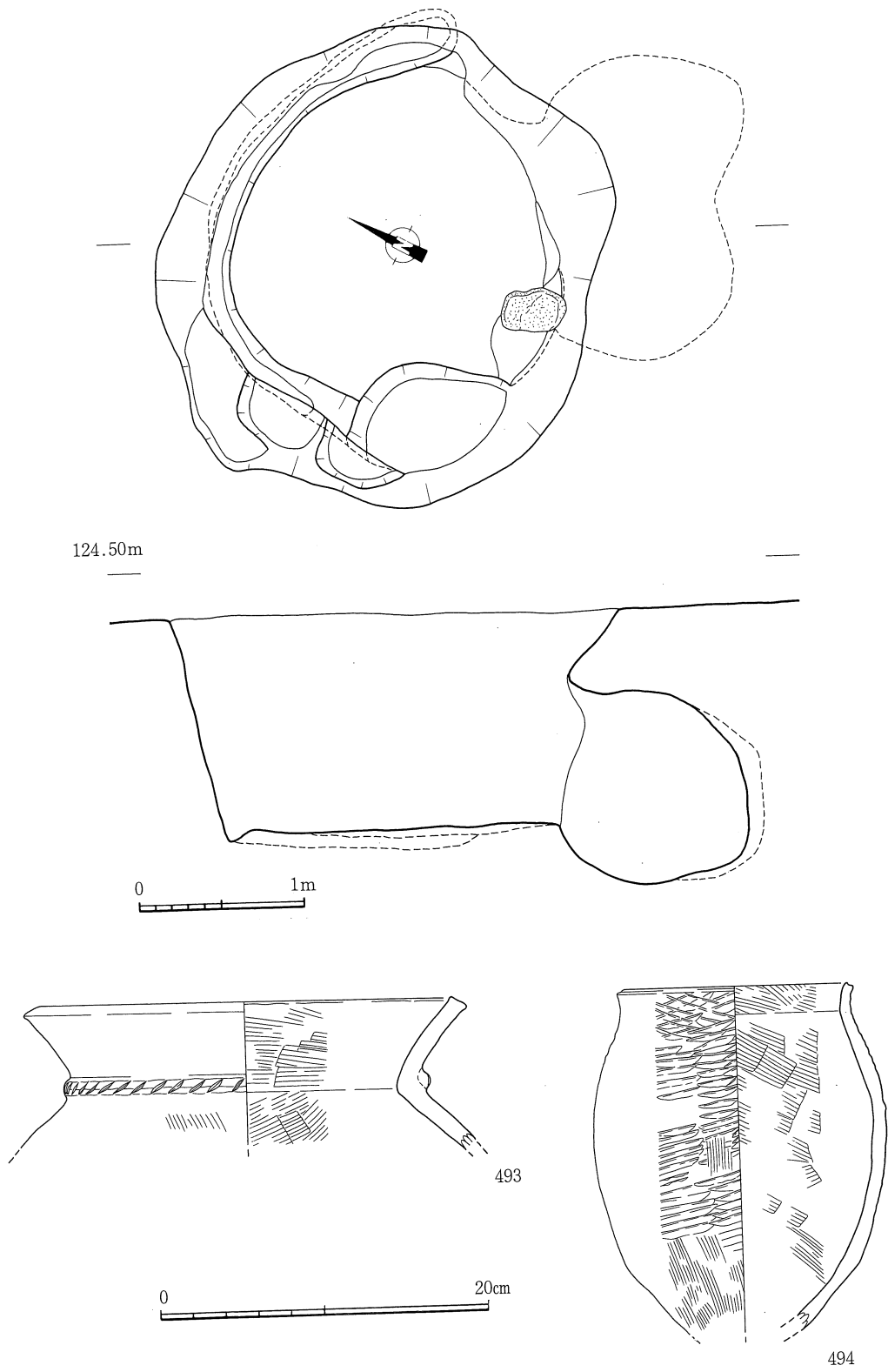


124.50m

124.50m



第 183 図 55 号探掘坑および出土遺物実測図 (1/40・1/4・1/3)



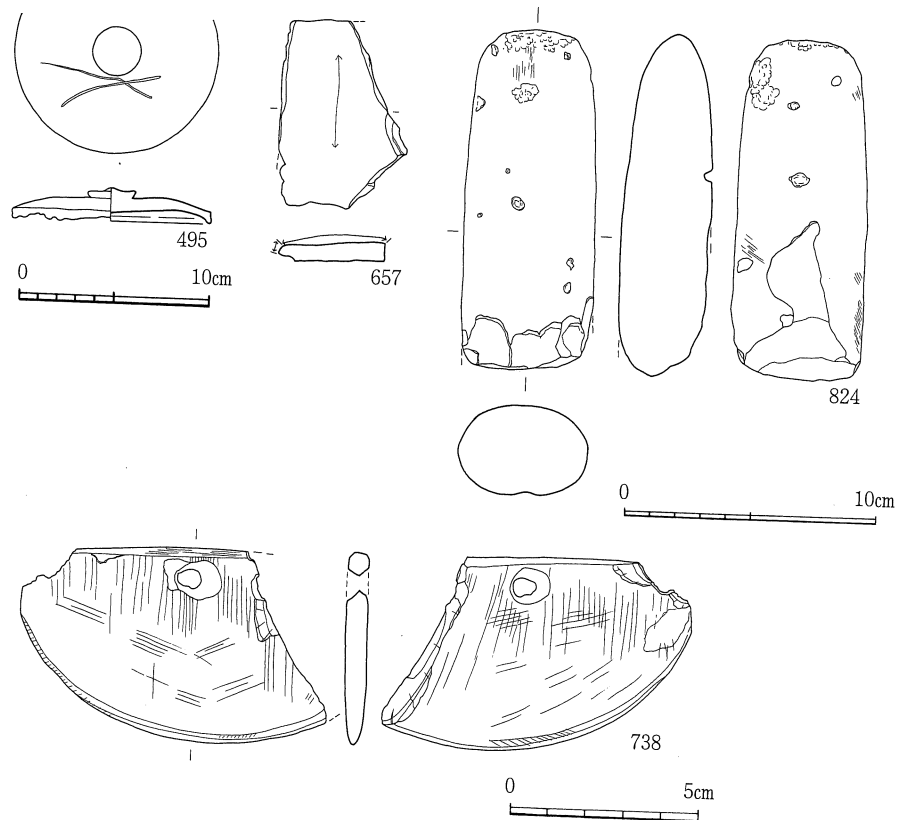
第184图 56号採掘坑及び出土遺物実測図 (1/40・1/4)

57号採掘坑（第186図）

57号採掘坑はB-2区の南端中央、調査区の南壁沿いに位置する。4基の土坑が複雑に切り合っている。57-a土坑は4基中最大の大きさで規模は東西約7.2m、南北約2.5mである。平面形はやや歪な長方形である。掘り形は何段にも掘り込まれている。57-b土坑は57-a土坑の南西側に位置し、土層観察の結果、57-a土坑より先行すると思われる。規模は東西1.8m、南北1.4m、検出面からの深さは1.1mで、平面形は楕円形である。壁面は東側方向に掘り込まれている。57-c土坑は57-a土坑の南東端に位置し、規模は2.5mのほぼ円形土坑である。検出面からの深さは1.6mである。57-d土坑は57-a土坑の北東端に位置し、長軸約2m、短軸1.6m、検出面からの深さは約2.0mで、平面形はやや歪な隅丸長方形である。壁面は北東側方向に掘り込まれている。

土坑内からは第185図で示した須恵器1点と石器3点が出土したが、埋土中からは多量の弥生土器片が出土している。

495の須恵器坏蓋は57-d土坑出土でほぼ完形品であるが、出土位置は土坑の全面に堆積しているI層からの出土であり、当土坑には伴わない。657の砥石は57-b土坑中層からの出土である。824の磨製石斧は57-a土坑の最下層からの出土、738の石包丁は57-d土坑からの出土である。出土遺物からみた土坑の時期は不明であるが、粘土採掘坑の分布状況等からみて、弥生時代後半の土坑ではないかと思われる。



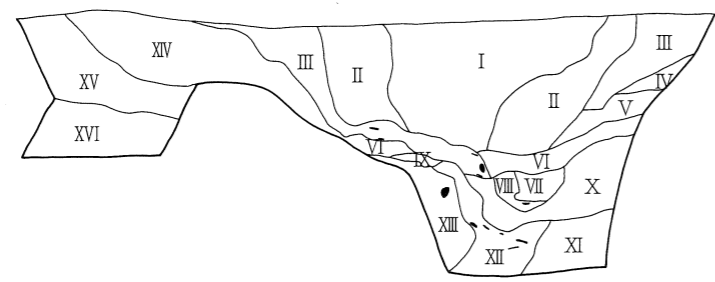
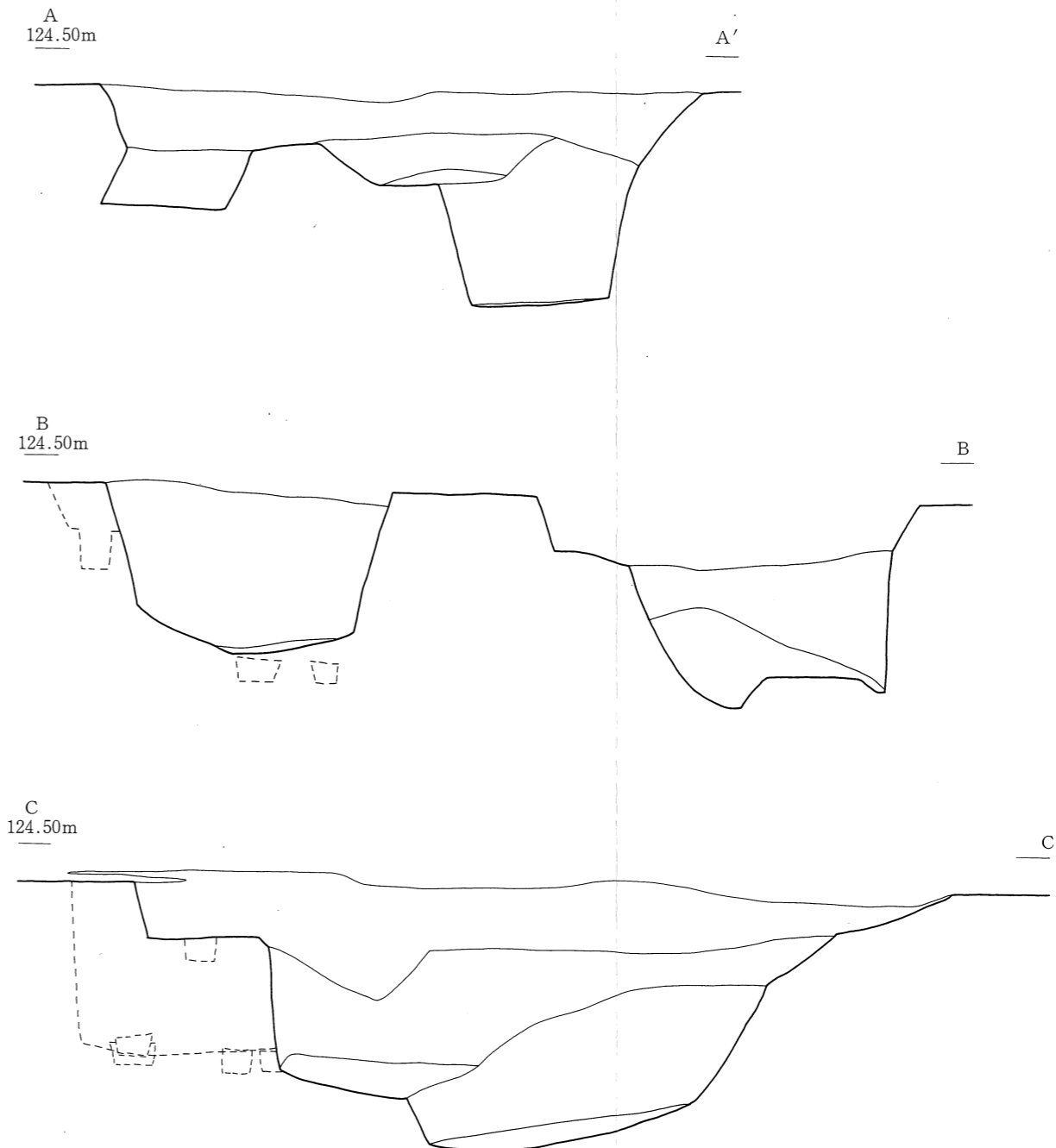
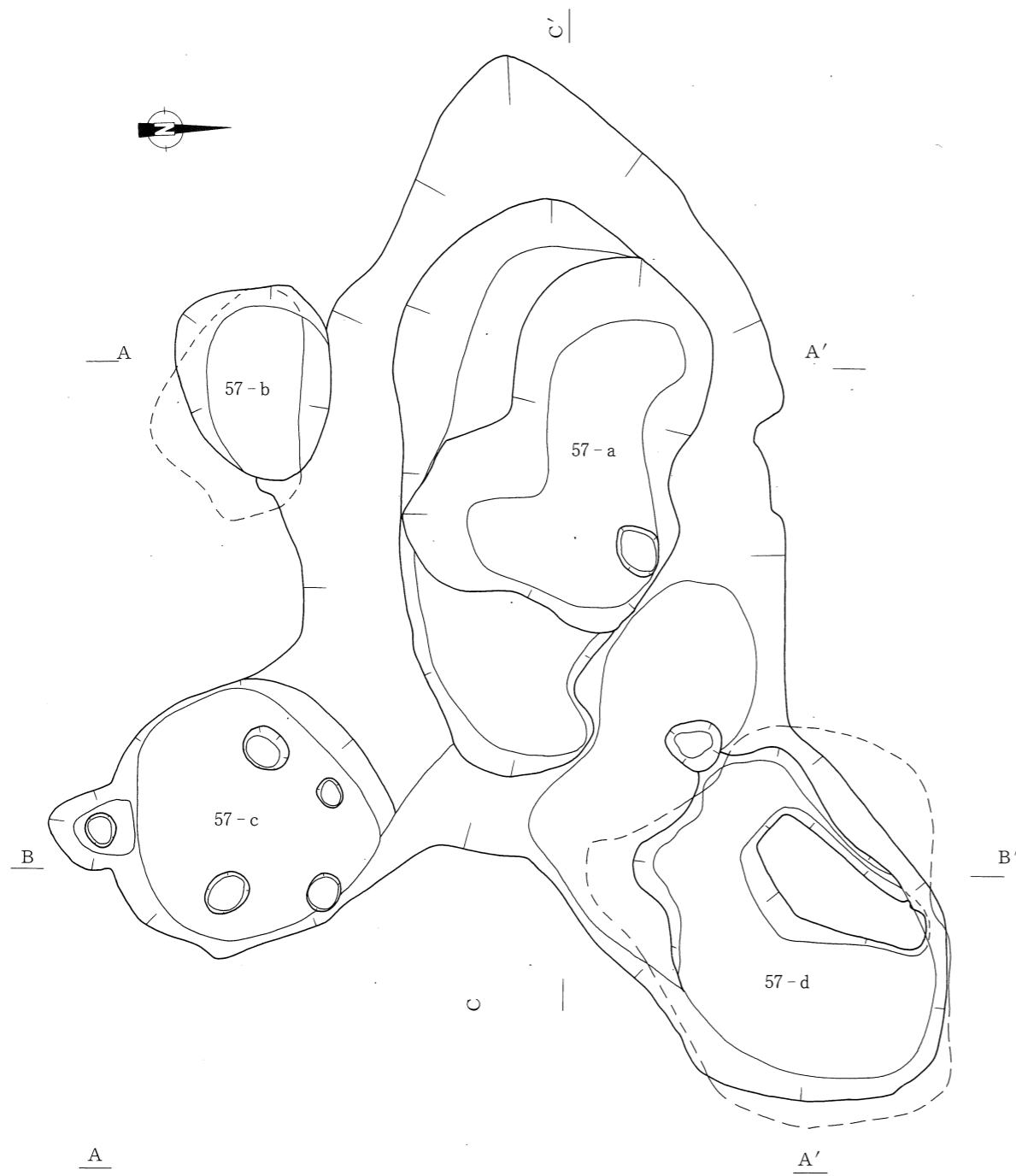
第185図 57号採掘坑出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

表146 57号採掘坑出土土器観察表

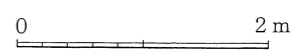
番号	器種	口径 法量 器高 底径	胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
							外面	内面		
495	蓋	10.6	石英粒 微、 白色細粒 多	灰色	良好					口縁部はほ ぼ欠失人為 的に打ち欠 いている
		1.8								
		-								

表147 57号採掘坑出土石器計測表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
657	砥石	硬質砂岩	(73)	51	7	(42.2)	
824	磨製石斧	安山岩	125	51	35	453.4	
738	石包丁	硬質砂岩	(67)	51	6	29.5	



- |      |        |                           |
|------|--------|---------------------------|
| I    | 暗茶褐色土層 | 最終流れ込み埋土、粘土               |
| II   | 茶褐色土層  | やや粘質、粒子粗い、遺物・炭含む          |
| III  | 黒褐色土層  | 粘質、粒子細かい、遺物・炭含む           |
| IV   | 暗黄褐色土層 | やや粘質、ハード、わずかに地山土含む        |
| V    | 茶褐色土層  | 粘質、粒子細かい、II層よりややソフト       |
| VI   | 暗黒褐色土層 | 粘質、ソフト、遺物・炭含む             |
| VII  | 暗茶褐色土層 | 粘質、粒子細かい、炭含む              |
| VIII | 暗黄色土層  | 粘質、ソフト、粒子細かい、遺物・炭含む       |
| IX   | 黄色土層   | 粘質、粒子細かい、ブロック状(地山土の堆積)    |
| X    | 明黒褐色土層 | ややソフト、粒子やや粗い、VI層より明るい     |
| XI   | 暗茶褐色土層 | ソフト、粒子やや粗い                |
| XII  | 暗黒褐色土層 | 粘質、ソフト、粒子細かい、黄色ブロックわずかに含む |
| XIII | 暗茶褐色土層 | 粘質、ソフト、粒子細かい、黄色ブロック多量に含む  |
| XIV  | 暗黄褐色土層 | ややソフト、粒子細かい、炭含む           |
| XV   | 黄褐色土層  | ややソフト、粒子細かい、炭含む           |
| XVI  | 黄色土層   | 地山土(掘り過ぎか)                |

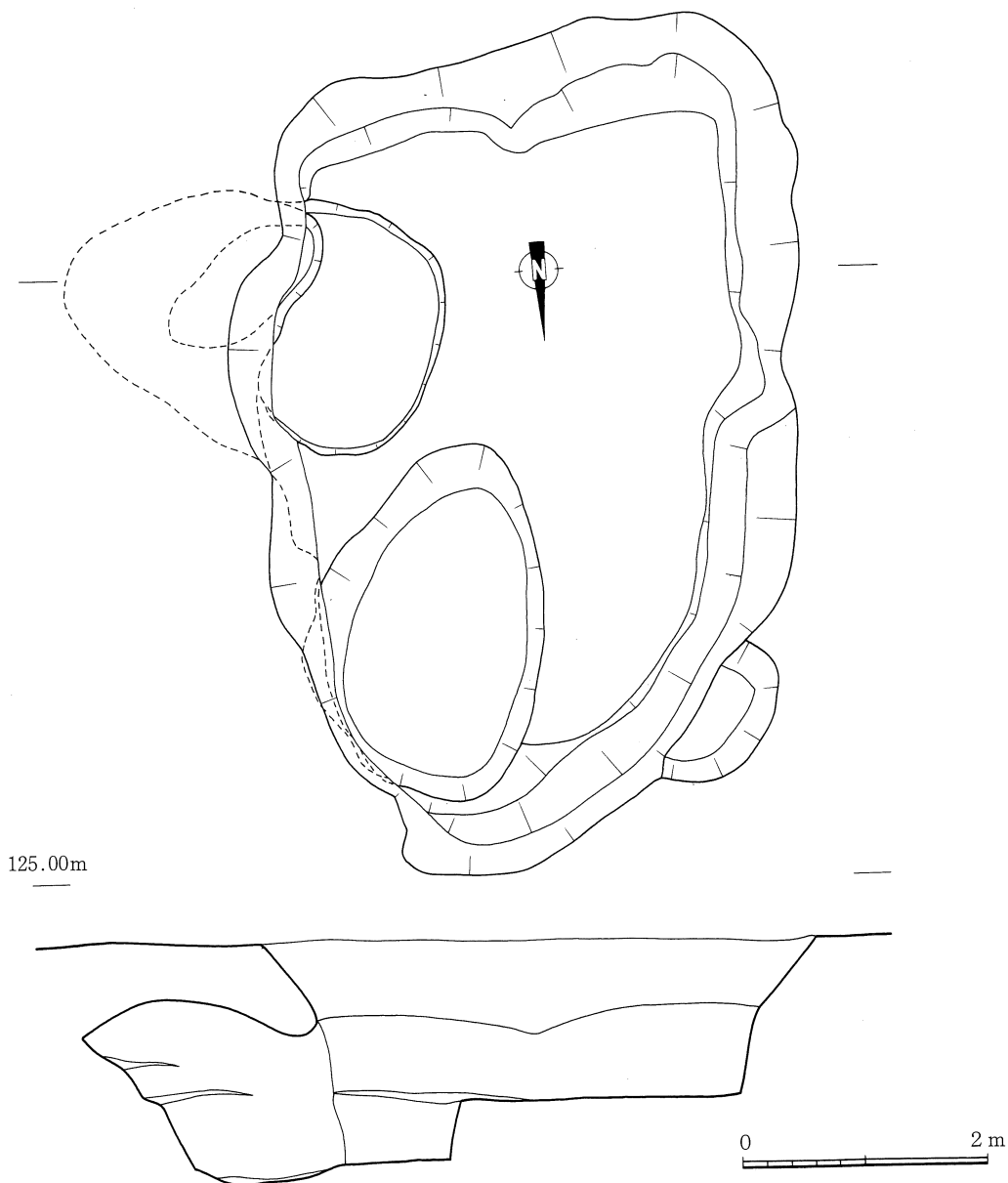


第186図 57号採掘坑実測図 (1/60)

58号採掘坑（第187図）

58号採掘坑はB-3区の南西方向、50号住居跡の南東側に位置する。規模は上面で東西4.6m、南北6.3m、検出面からの深さは最深で1.8m、平面形はやや歪な隅丸方形で、主軸方位はN-3°-Eを示す。壁・床面は凹凸が激しく、壁面のいたる所に粘土採掘用の掘り込みがみられる。この土坑は、まず縦穴を掘った後、横方向に掘削して粘土を採掘したと思われる。また、床面や壁面の掘削状況からみて、最低3回（ヶ所）の採掘が認められる。当土坑周辺の地山土は赤褐色ローム層でこの層に遺構は掘り込まれている。厚さは20cm前後である。この下層に3~20cm前後の礫を中心とした層が30cm前後堆積している。さらにその下に軟質の凝灰岩質の黄白色の地盤が出土する。この層に部分的に白色粘土層が存在する。この部分を採掘したと思われる。

埋土中からは弥生土器が多数出土したが、土坑に伴うものではないため時期は不明である。ただ、北側壁面上端と、南側の床面から50cm前後上面に堆積する埋土中から龍泉窯系青磁碗の破片が出土したことから、中世以降の採掘坑の可能性もある。



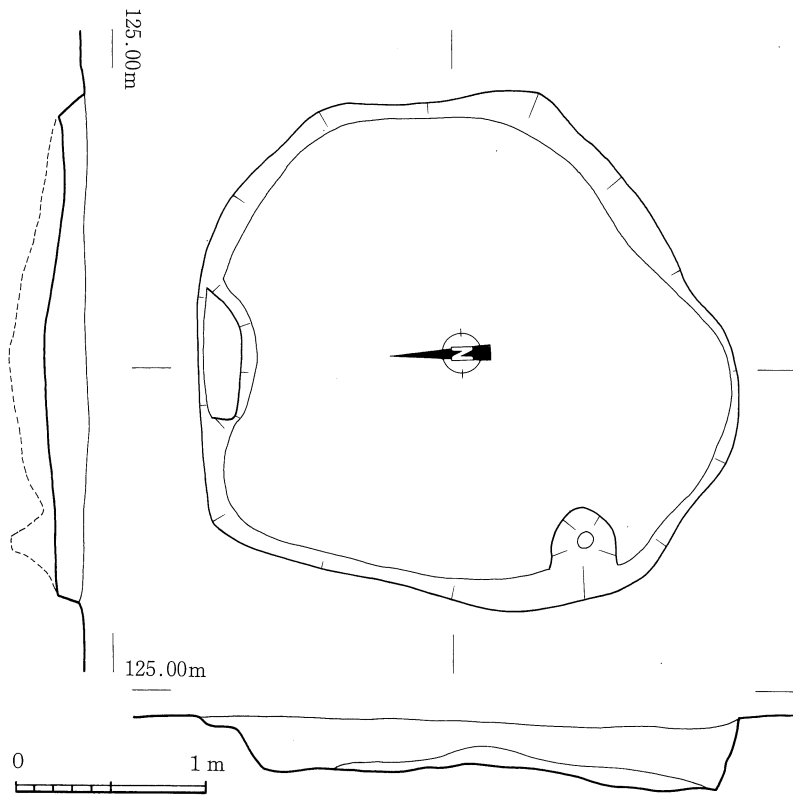
第187図 58号採掘坑実測図（1/60）



59号採掘坑（第188図）

59号採掘坑はB-3・4区中央部分、77号住居跡の北東コーナー部分に位置する。規模は上面で東西5.3m前後、南北5.6m前後、検出面からの深さは0.1~0.8mである。平面形はほぼ円形である。床面は凹凸が激しく、中央部分に粘土が露出していて、周囲の良質の粘土を採掘したと思われる。

土坑内からは土器片10数点が出土したが、ほとんどが小破片であり、時期を決定できる資料はなかった。このため時期は不明である。

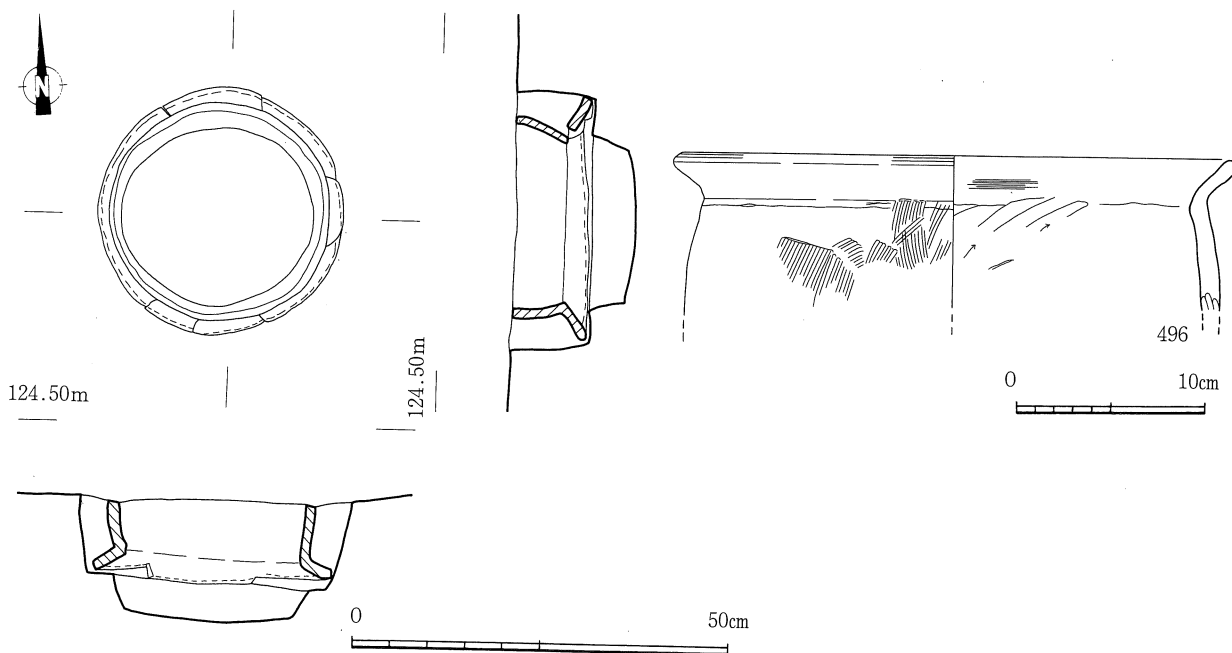


第188図 59号採掘坑実測図（1/40）

d) 埋甕遺構（第189図）

埋甕遺構はB-3区西端中央、52号住居跡の南3m付近に位置する。2段掘りの遺構で、規模は1段目は径35cm、深さ10cmで平面形は円形である。2段目は1段目の中央に径25cm、深さ6cmの円形の掘り込みを行っている。この遺構の1段目の掘り込みに甕の口縁から胴部の一部を逆にして埋置している。胴部下半は打ち欠いていて存在しない。埋葬等の行為をもつものと思われる。

甕の時期は弥生時代後期前葉頃と思われる。



第189図 埋甕遺構及び出土遺物実測図（1/10・1/4）

表 148 埋甕遺構出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
496	甕	29.1	—	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ヘラナデ		
		—									
		—									

e) 石棺・石蓋土坑墓

当調査区内では調査区東側の部分に墓が比較的集中しており、いわゆる墓域として活用したと考えられる。以下、順次石棺墓・土坑墓・甕棺墓等について記載する。

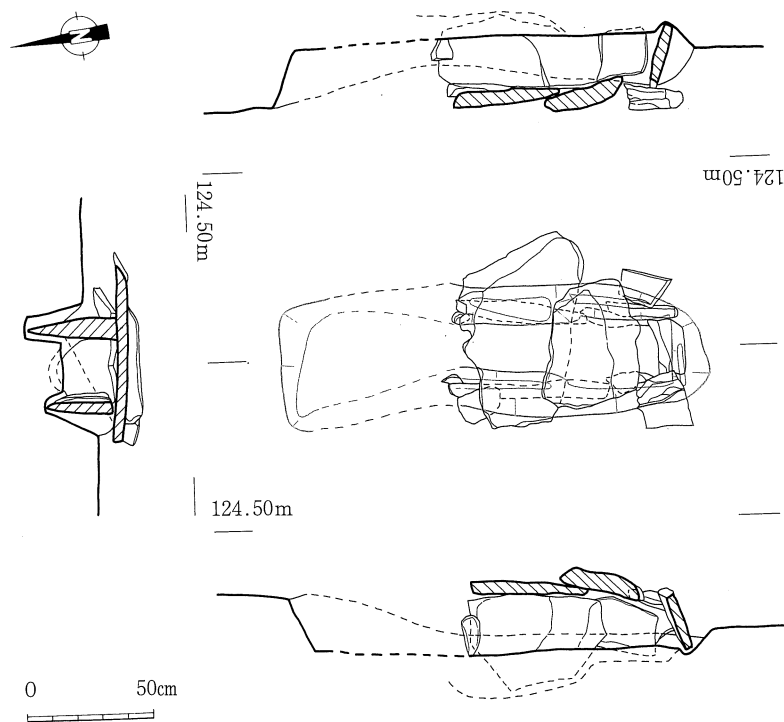
石棺墓は路線内から4基と農道迂回路から1基検出された。石蓋土坑墓は1基検出された。

1号墓 (第190図)

1号墓はB-2区東方向、37号住居跡の西壁中程に位置する。住居跡が先行する。また、1号墓の中央から北側付近を東西に畑管が貫通していて、墓坑の一部が消滅している。

主体部は箱式石棺墓である。棺内は流入土で覆われていた。墓坑は南北に長い隅丸方形を呈し、規模は南北1.69m、東西0.56m、深さは北側で28cm、南側部分で10cm前後である。主軸方位はN-9°-Eを示す。墓坑上面での標高は124.35mである。蓋石は北側部分で2枚検出された。北側部分は削平に合い墓坑掘り方部分が残るだけである。石棺の板石は南側部分が抜き取られていて、検出時には東側壁3枚、西側壁3枚、南側の小口1枚が確認された。床面は平坦に仕上げているが、玉砂利、粘土目張り・枕、赤色顔料等の施設は確認されなかった。頭位は蓋石の重なり等からみて北側と考える。石材は安山岩板石が使用されている。

人骨・副葬品等の遺物の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期や石棺墓の形態からみて弥生時代後期後半頃の時期と思われる。



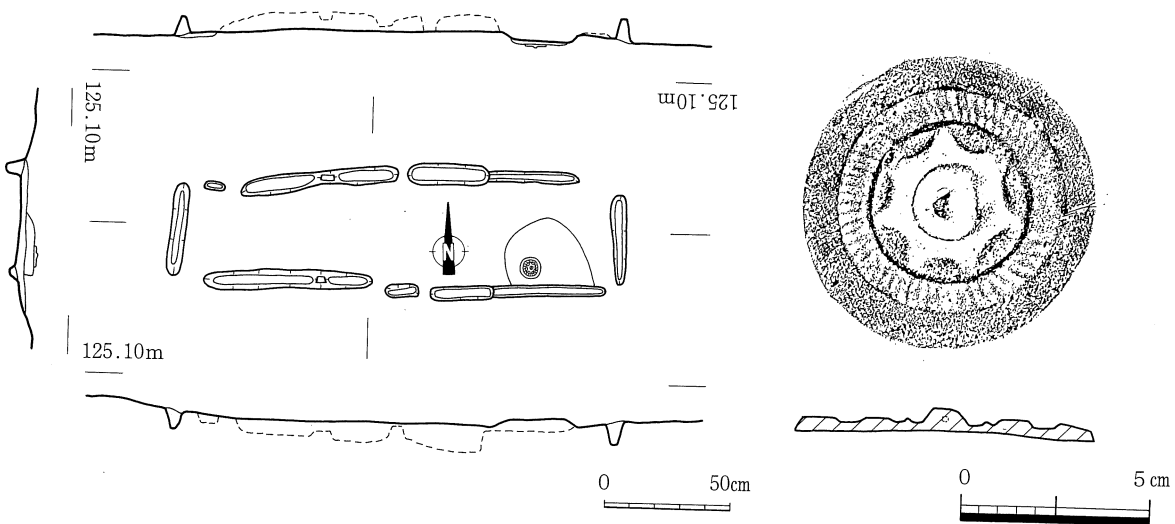
第190図 1号墓実測図 (1/30)

## 2号墓 (第191図)

2号墓はB-4区北東端、調査区北壁端に位置する。この地域は調査区内では墓域の北西端にあたる。

主体部は箱式石棺墓であるが、地力促進事業による天地返しにあったために残りは非常に悪く、棺材は周囲に散在していて、わずかに石棺墓であったことを示す小口および側壁の抜き取り痕が確認できるだけである。墓坑は東西に長い長方形を呈し、規模は東西1.81m、南北0.5mである。主軸方位は長軸でE-11°-Sを示す。標高は125.10mである。床面は東側部分のごく一部が残っているだけで他は削平を受けていた。残存部分は周囲より5cm程度高まっている。この部分には径1cm前後の小砂利が敷かれ、さらに赤色顔料の使用が認められたことから、当石棺墓の床には全面に赤色顔料を塗布していたと思われる。棺材の石材は安山岩板石が使用されている。

副葬品は東側のわずかな床残存部分から完形の小型仿製鏡1面が出土した。径8.0cmで、広縁一櫛歯文帯一一重圈線一七弧文一鈕という文様構成である。高倉洋彰氏の小型内行花文仿製鏡Ⅱbに分類される。青緑色を呈する銅質の良くない北部九州製である。表面には布等にくるんでいたと思われる布の繊維が確認されている。この鏡は埋葬者の左肩から頭位部分に置かれていたと思われることから、頭位は石棺の形態や副葬品から考えて東方向であろう。これ以外の副葬品の出土はなかった。石棺の時期は鏡の時期からみて弥生時代後期後半から終末頃と考える。



第191図 2号墓実測図 (1/30)

第192図 2号墓出土遺物実測図(1/2)

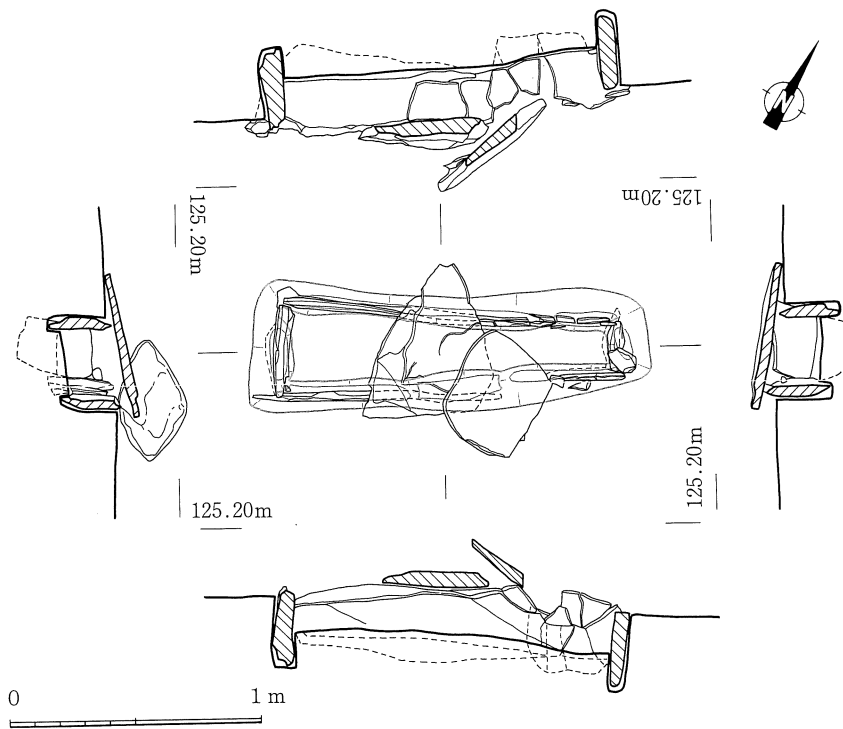
## 3号墓 (第193図)

3号墓はB-3区北東方向、2号墓の南南東8m付近に位置する。3号墓も2号墓と同様に天地返しに合っているが蓋石の一部が残っていて、2号墓より残りはよい。

主体部は箱式石棺墓である。棺内は流入土で覆われていた。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.48m、短軸は北東側が0.19m、南西側が0.35m、深さは20~30cmである。主軸方位はN-58°-Eを示す。墓坑上面での標高は124.95mである。蓋石は中央部分で2枚検出された。また、3号墓の南西部分には当墓の蓋石と思われる板石2枚が検出された。側壁は南側が大型の板石1枚と小型の板石2枚を使用して南側壁としている。北側は大型の板石1枚と小型の板石1枚を使用して北側壁としている。大型の石は両側壁とも南西部分に使用している。両小口には比較的厚みの厚い板石を使用している。南西側小口と床面の境には粘土目張りが一部残存していた。石材は安山岩である。床面は比較的平坦に仕上げているが、玉砂利、赤色顔料等の施設は確認されなかった。頭位

は石棺の形態から南西ではないかと思われる。

人骨・副葬品等の遺物の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期や石棺墓の形態からみて弥生時代後期後半頃の時期と思われる。

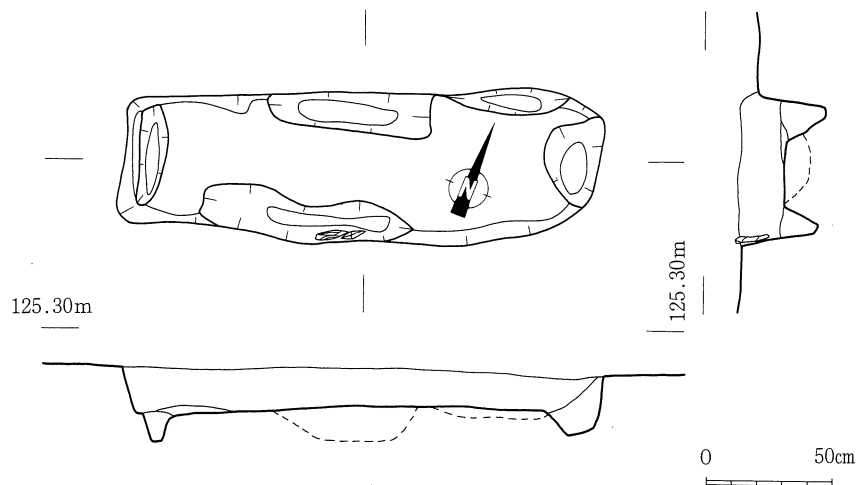


第193図 3号墓実測図 (1/30)

4号墓 (第194図)

4号墓はB-3区北東方向、3号墓の南東5.5m付近に位置する。当地区も天地返しに合っていて周囲に蓋石や側壁等の棺材が散在している。このため残りはよくない。

主体部は箱式石棺墓であるが蓋石・側壁等の棺材は既になく、わずかに石棺墓であったことを示す小口および側壁石の抜き取り痕が確認できるだけである。棺内は流入土で覆われていた。平面形態は長方形を呈し、規模は東西1.89m、南北0.58m、検出面からの深さは15cm前後である。長軸主



第194図 4号墓実測図 (1/30)

軸方位はN-69°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.05mである。蓋石は元位置を保つものではなく、周囲に散乱していた。側壁は南側中央部分に小型の板石片2枚が残っているだけで、他は存在しない。石材は安山岩製である。両小口は抜き取り痕が確認できただけで石材は存在しない。床面は削平により凹凸が激しく、かろうじて中央の一部分が原形を留めている。この部分からは人骨の一部が出土した。また、床面は粘土を敷いていた痕跡が確認された。頭位は人骨の出土状況からみて東方向ではないかと思われる。

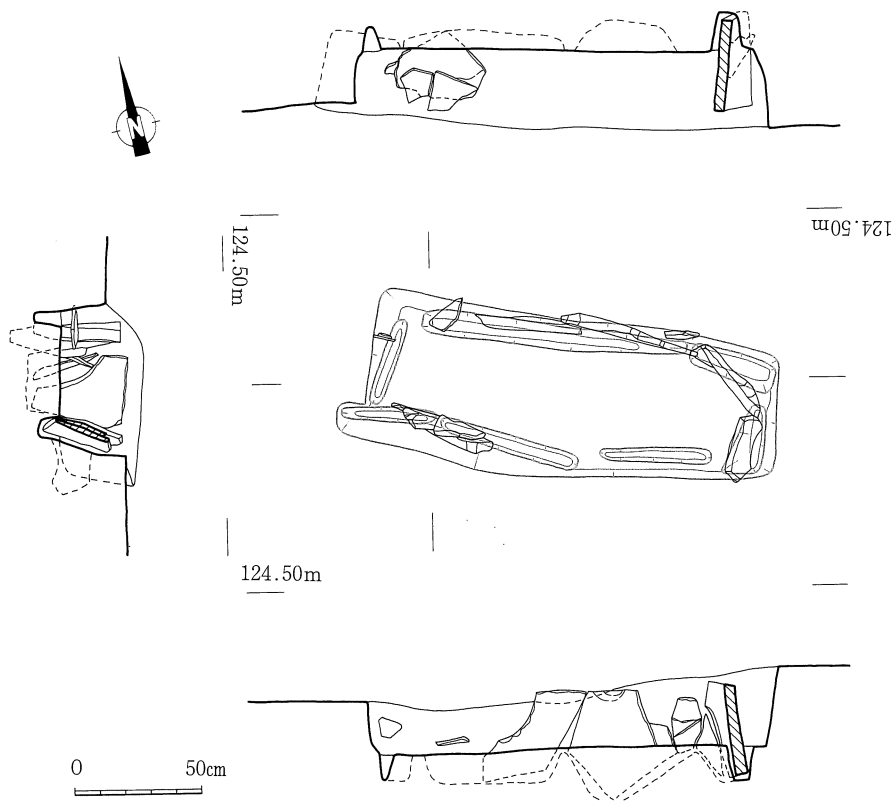
人骨の一部が出土した以外は副葬品の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期や石棺墓の形態からみて弥生時代後期後半頃の時期と思われる。

#### 5号墓 (第195図)

5号墓は農道取付部のA-4区北西端に位置する。地形的には台地の北東端にあたる。農地の開発にあったと思われ、周囲に蓋石や側壁等の棺材が散在していて、残りはよくない。

主体部は箱式石棺墓である。棺内は流入土で覆われていた。平面形態は長方形を呈し、規模は東西1.53m、南北0.63m、検出面からの深さは35cm前後である。長軸主軸方位はN-77°-Wを示す。墓坑上面での標高は東側で124.2mである。蓋石は元位置を保つものではなく、石棺墓の北西に散乱していた。南側壁は西側に小型の板石1枚が残っているだけで、他は存在しない。北側壁は中央から東部分が比較的残っていた。小口は東側部分が内側に傾いていたものの板石2枚が確認でき比較的残りはよかった。西側部分は抜き取り痕が確認できただけで石材は存在しない。棺材は安山岩板石である。床面は平坦に仕上げているが、玉砂利、粘土目張り、赤色顔料等の施設は確認されなかった。頭位は石棺墓の形態からみて東方向ではないかと思われる。

人骨・副葬品の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期や石棺墓の形態からみて弥生時代後期後半頃の時期と思われる。



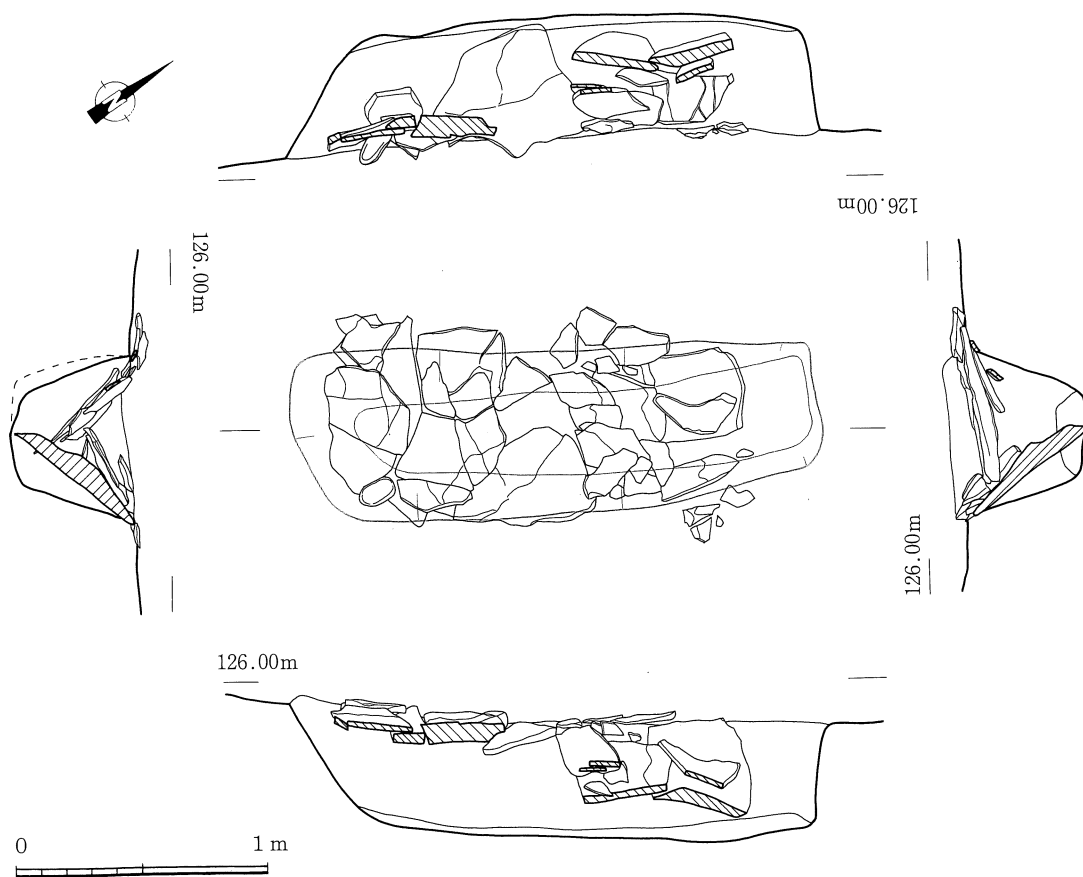
第195図 5号墓実測図 (1/30)

### 6号墓 (第 196 図)

6号墓はB-5区の中央からやや南側に位置する。地形的には台地の東端にあたり、墓域のほぼ中央部分である。

6号墓は石蓋土坑墓で、土壌の掘り込みは確認できなかった。周囲の削平がかなり進んでいて土壌も削平された可能性もある。墓坑内は流入土で覆われている。墓坑の平面形態はやや歪な長方形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸0.66m、検出面からの深さは45cm前後である。長軸主軸方位はN-55°-Wを示す。墓坑上面での標高は南西側で125.4mである。蓋石は北東部分が一部墓坑内に落ち込んでいるものの比較的残りはよい。また、蓋石には幅50cm前後の板石を中心に使用し、周囲を小型の板石で補填するように北東部分から南西方向へと順に覆っている。石材は安山岩板石である。墓坑内の内法は長軸1.8m、短軸0.35mであるが、南西部分は蓋石の覆い状況や幅、小口の様子からみて、崩落した可能性があり、元来は1.5m前後ではなかったかと思われる。床面は平坦に仕上げているが、玉砂利、粘土目張り、赤色顔料の塗布等の施設は確認されなかった。頭位は石棺墓の形態からみて北東方向と思われる。

人骨・副葬品の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期や石棺墓の形態からみて弥生時代後期後半頃の時期と思われる。



第 196 図 6号墓実測図 (1 / 30)

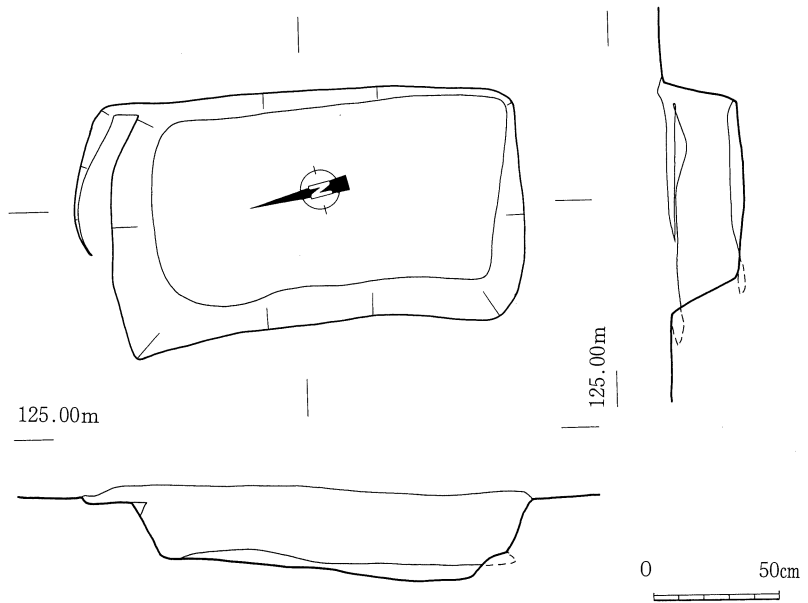
f) 土坑墓

土坑墓は調査区内で14基検出されたが、先述した土坑中にも土坑墓の可能性をもつ遺構もあり、実際は14基以上の土坑墓が存在したことが十分考えられる。これらの土坑墓は全て調査区東側の墓域と考えている地域から検出された。

11号墓 (第197図)

11号墓はB-4区の北側中央に位置し、墓域のほぼ西端部分である。墓坑の平面形態は長方形を呈し、規模は東西1.63m、南北0.93m、検出面からの深さは30cm前後である。内法は1.37×0.7m、長軸主軸方位はN-13°-Eを示す。墓坑上面での標高は南西側で124.8mである。床面は南側が比較的深く掘られている。礫床等の施設は認められない。頭位は北方向と思われるが確定できない。

埋土中から弥生土器多数が出土したが、当土坑墓に伴うものではない。また、人骨・副葬品の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃の時期と思われる。

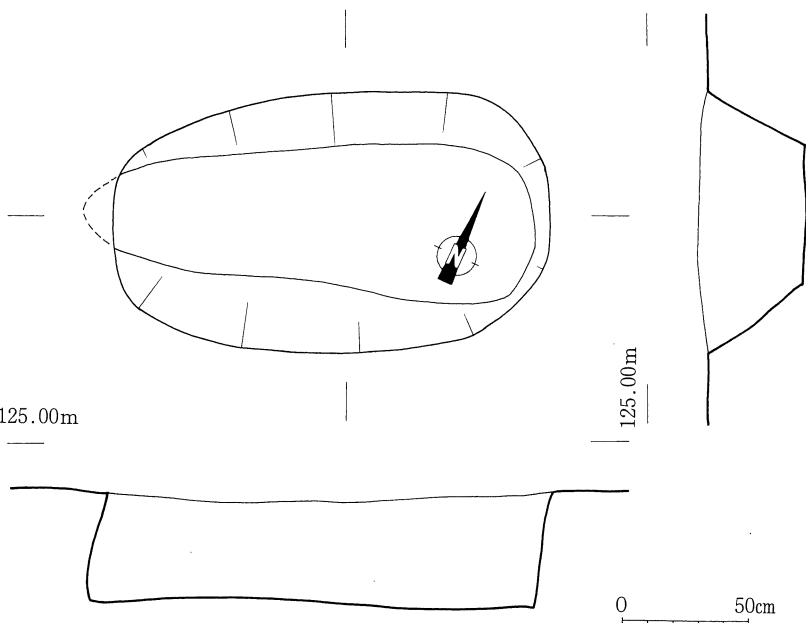


第197図 11号墓実測図 (1/30)

12号墓 (第198図)

12号墓はB-4区の北東端に位置し、墓域のやや西側である。周辺には13～16号墓、2・3号石棺墓が位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西1.75m、南北1.05m、検出面からの深さは20cm前後である。内法は1.75×0.55mで南西部分は内側に掘り込んでいる。長軸主軸方位はN-66°-Eを示す。墓坑上面での標高は124.9mである。床面は比較的平坦である。礫床等の施設は認められない。頭位は墓坑の形態から北東方向と思われるが確定できない。

埋土中から弥生土器多数が出土したが、当土坑墓に伴うものではない。また、人骨・副葬品の出土はないが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃の時期と思われる。



第198図 12号墓実測図 (1/30)

13・14号墓（第199図）

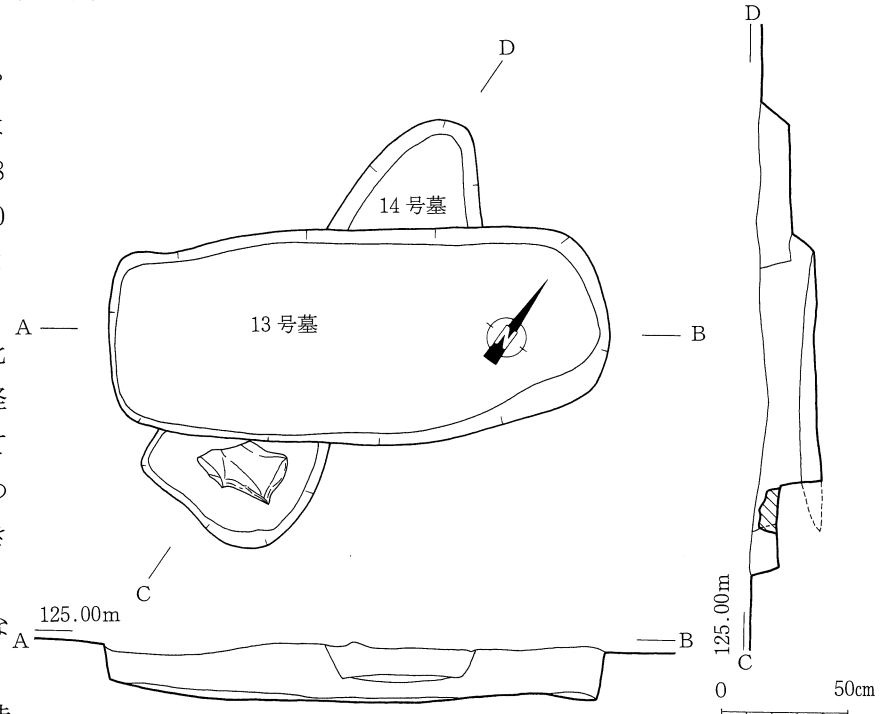
13・14号墓はB-4区の北東端に位置し、12号墓の東側コーナーとほぼ接する。14号墓が先行し、13号墓は14号墓の中央部分を横切って構築されている。

13号墓の平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.99m、短軸0.84m、検出面からの深さは20cm前後である。内法は1.92×0.75m、長軸主軸方位はN-55°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.0mである。床面は比較的平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は確定できない

人骨・副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

14号墓の平面形態はやや歪な長方形を呈し、規模は東西0.65m前後、南北1.88m、検出面からの深さは10cm前後である。内法は1.75×0.5m、長軸主軸方位はほぼ磁北である。墓床面は比較的平坦で、南側部分で径30cm前後の角礫が出土している。礫床等の施設は認められない。頭位は確定できない。

人骨・副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

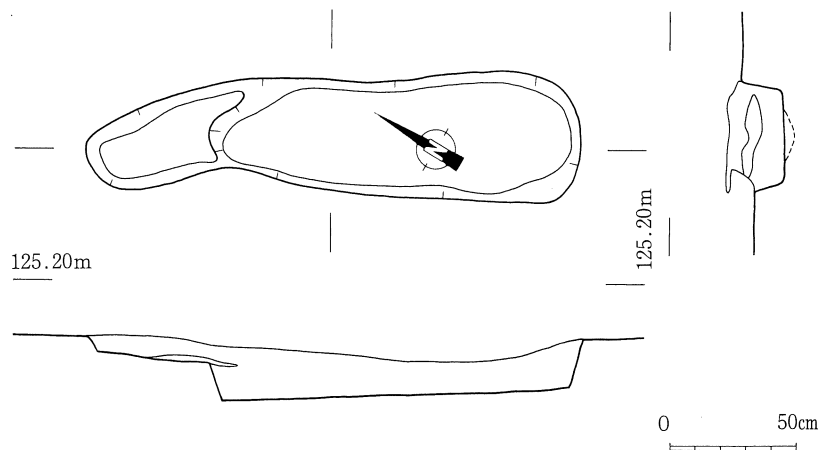


第199図 13・14号墓実測図（1/30）

15号墓（第200図）

15号墓はB-4区の北東端、13号墓の北東1m付近に位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈し、北側部分は一部攪乱を受けている。規模は東西0.48m、南北1.08m、検出面からの深さは20cm前後である。内法は0.37×1.37mである。長軸主軸方位はN-30°-Wを示す。墓坑上面での標高は125.0mである。床面は比較的平坦で北側がやや低い。礫床等の施設は認められない。頭位は墓坑の形態から北方向と思われるが確定できない。

人骨・副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。



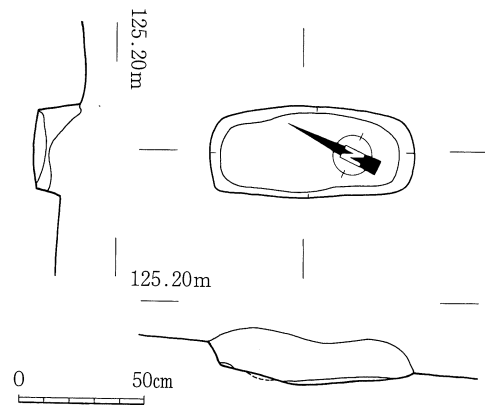
第200図 15号墓実測図（1/30）



16号墓 (第201図)

16号墓はB-4区の北東端、15号墓の北東1m付近に位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西0.35m、南北0.8m、検出面からの深さは約15cmで小型の墓坑である。内法は0.31×0.71mである。長軸主軸方位はN-27°-Wを示す。墓坑上面での標高は125.05mである。床面は凹凸がみられ、南側がやや低い。礫床等の施設は認められない。頭位は確定できない。

副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

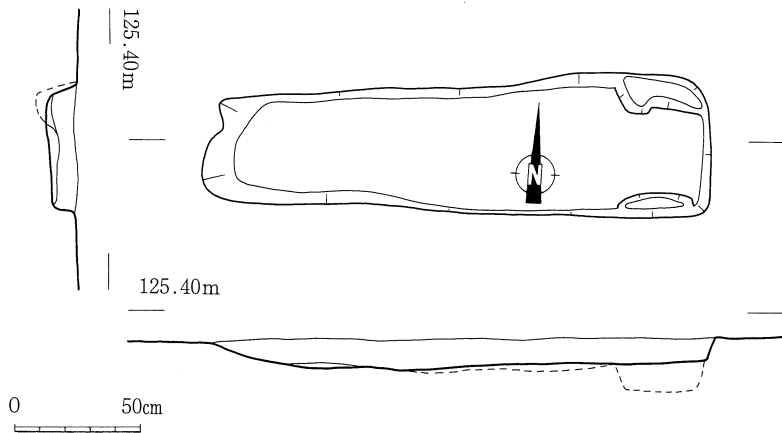


第201図 16号墓実測図 (1/30)

17号墓 (第202図)

17号墓はB-4区の北東端からやや南側、4号墓の北東2m付近に位置する。墓坑の平面形態は長方形を呈している。規模は東西2.01m、南北0.49m、検出面からの深さは10cm前後である。内法は1.85×0.43mで、長軸主軸方位はN-84°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.3mである。床面は平坦で、西側部分から径10cm前後の礫が数点出土した。礫床等の施設は認められない。頭位は確定できない。

副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

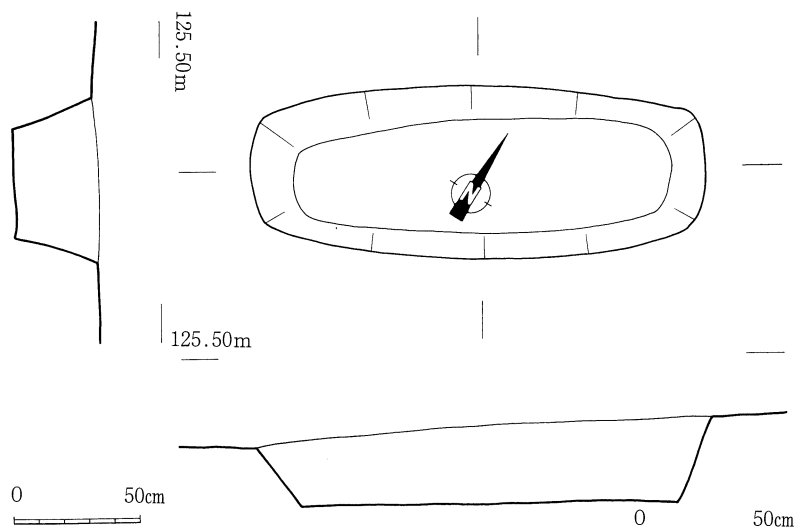


第202図 17号墓実測図 (1/30)

18号墓 (第203図)

18号墓はB-4区の東端中央に位置する。規模は長軸1.85m、短軸0.68m、深さは30cm前後で、内法は1.5×0.45mである。主軸方位はN-58°-Eを示す。標高は125.35mである。床面は平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は確定できない。

副葬品の出土はなく、時期は不明であるが、調査区の他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

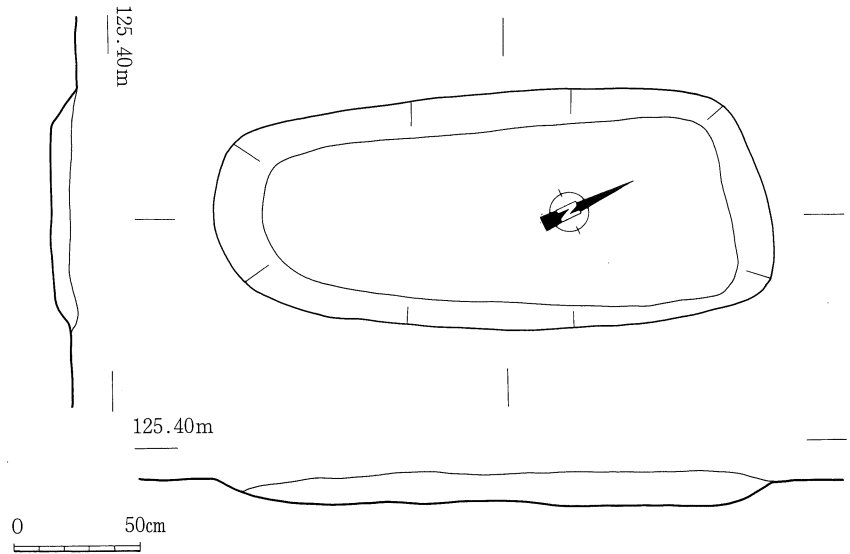


第203図 18号墓実測図 (1/30)

19号墓 (第204図)

19号墓はB-5区の中央からやや西寄り、墓域のほぼ中央にあたる。周辺には20・21号墓が位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西0.93m、南北2.2m、検出面からの深さは約10cmである。内法は0.65×1.85mで北側部分が広く造られている。長軸主軸方位はN-25°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.25mである。床面はわずかに凹凸がみられる。礫床等の施設は認められない。頭位は墓の形態からみて北方向と思われるが、確定できない。

副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

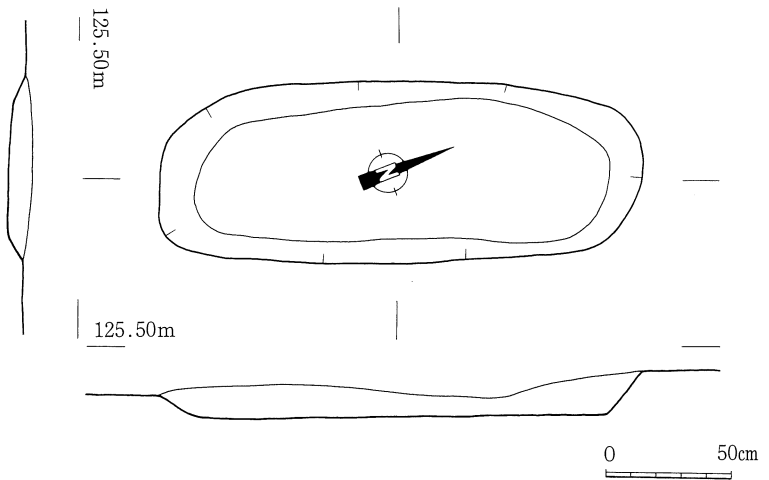


第204図 19号墓実測図 (1/30)

20号墓 (第205図)

20号墓はB-5区の中央からやや西寄り、墓域のほぼ中央に位置し、19号墓の北東0.5m付近にあたる。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西0.7m、南北1.9m、検出面からの深さは8cm前後である。内法は0.53×1.65mである。長軸主軸方位はN-21°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.3mである。床面はほぼ平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は土坑墓の形態からみて北方向と思われるが、断定はできない。

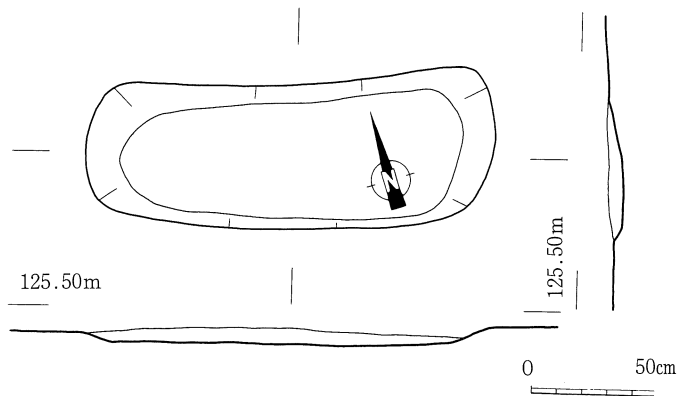
副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。



第205図 20号墓実測図 (1/30)

21号墓 (第206図)

21号墓はB-5区の中央からやや西寄り、墓域のほぼ中央に位置し、20号墓の西0.3m付近にあたる。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西1.65m、南北0.55m、検出面からの深さは約5cmである。内法は1.35×0.45mで東側部分がやや広く造られている。長軸主軸方位



第206図 21号墓実測図 (1/30)

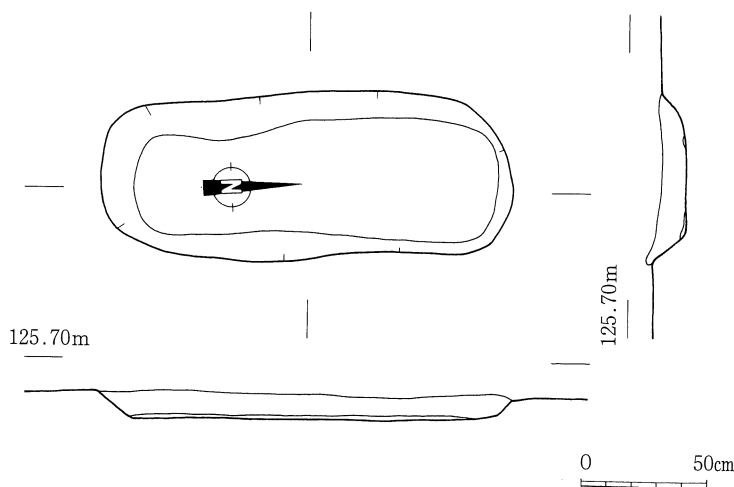
はN-72°-Wを示す。墓坑上面での標高は125.35mである。床面はほぼ平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は土坑墓の形態からみて東方向と思われるが、断定はできない。

副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

#### 22号墓 (第207図)

22号墓はB-5区の南西方向、36号土坑の西1m付近に位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西0.65m、南北1.64m、検出面からの深さは約10cmである。内法は0.42×1.45mで北側部分がやや広く造られている。長軸主軸方位はN-3°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.6mである。床面はほぼ平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は土坑墓の形態からみて北方向と思われるが、断定はできない。

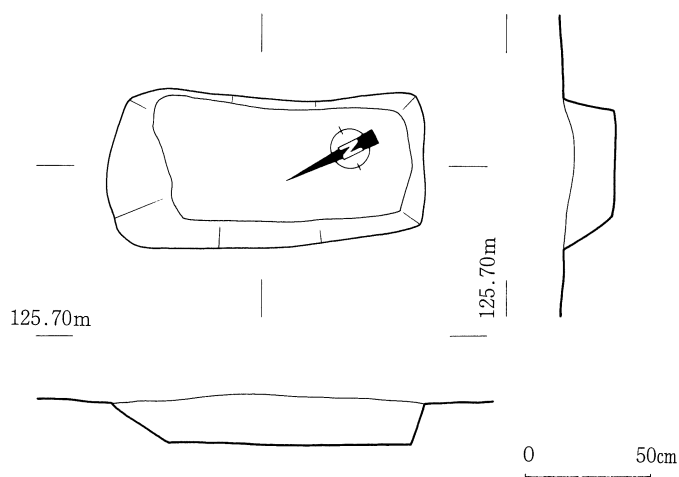
副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。



第207図 22号墓実測図 (1/30)

23号墓 (第208図) 22号墓はB-5区の南西方向、22号土坑の南2m付近に位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西0.6m、南北1.25m、検出面からの深さは約20cmである。内法は0.45×1.0mで、北側部分がやや広く造られている。長軸主軸方位はN-26°-Eを示す。墓坑上面での標高は125.5mである。床面はほぼ平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は土坑墓の形態からみて北方向と思われるが、断定はできない。

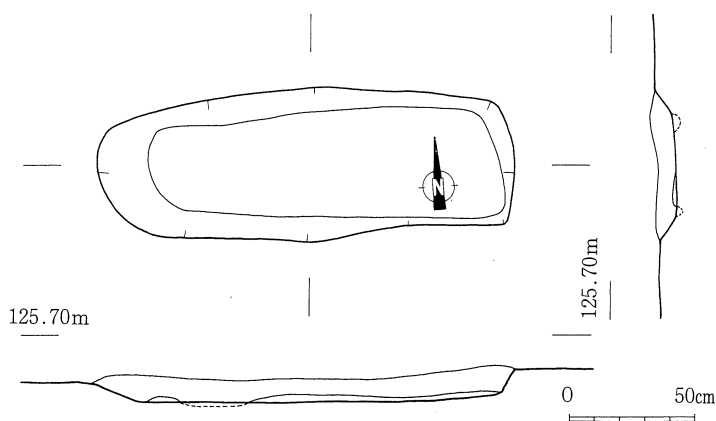
副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。



第208図 23号墓実測図 (1/30)

#### 24号墓 (第209図)

24号墓はB-5区の南西方向、23号土坑の東0.5m付近に位置する。墓坑の平面形態は隅丸長方形を呈している。規模は東西1.65m、南北0.6m、検出面からの深さは約10cmである。内法は1.4×0.4m



第209図 24号墓実測図 (1/30)

で、東側部分がやや広く造られている。長軸主軸方位はN-87°-Wを示す。墓坑上面での標高は125.5mである。床面はほぼ平坦で、礫床等の施設は認められない。頭位は土坑墓の形態からみて東方向と思われるが、断定はできない。

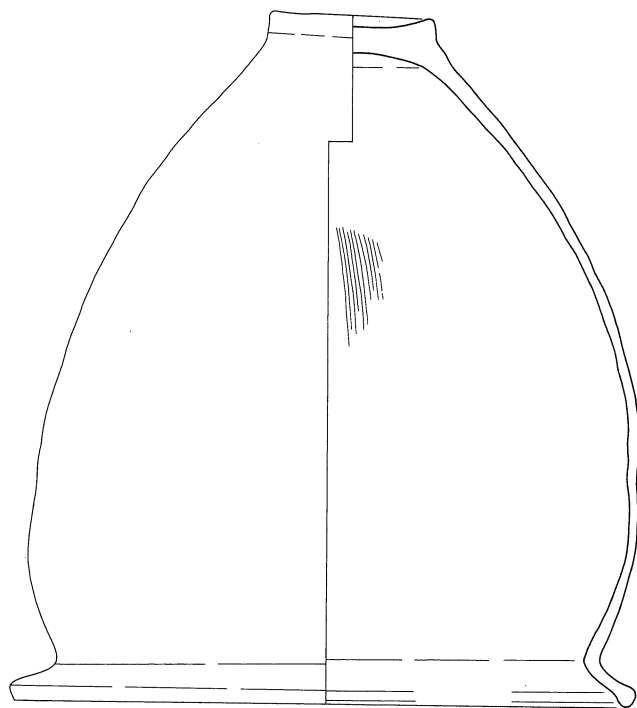
副葬品の出土はないが、他の遺構の展開時期等からみて弥生時代後期頃かと思われる。

### g) 甕棺(壺棺)墓

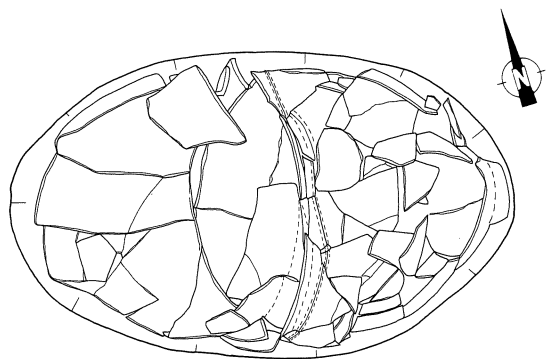
甕棺(壺棺)墓は調査区内で15基検出されたが、墓域内からの検出は6基であった。他は住居跡周辺からの検出で、規則性はみられなかった。いずれも小児用甕棺墓であった。

#### 1号甕棺墓 (第210図)

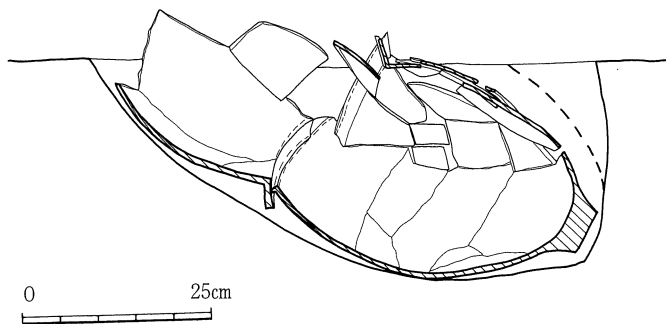
1号甕棺墓はB-1区南東端に位置する。北東から南東にかけて21~27号住居跡が取り囲んでいる。墓坑上部は削平を受けていて存在しない。墓坑掘り方は西から東方向に掘り進め、約40°の緩やかな傾斜で床面に至る。東壁はや湾曲しながらほぼ垂直に立ち上がる。規模は東西0.67m、南北0.41m、検出面からの深さは東壁側で最深となり0.27mである。平面形態は楕円形である。長軸主軸方位はN-75°-Wを示す。



497

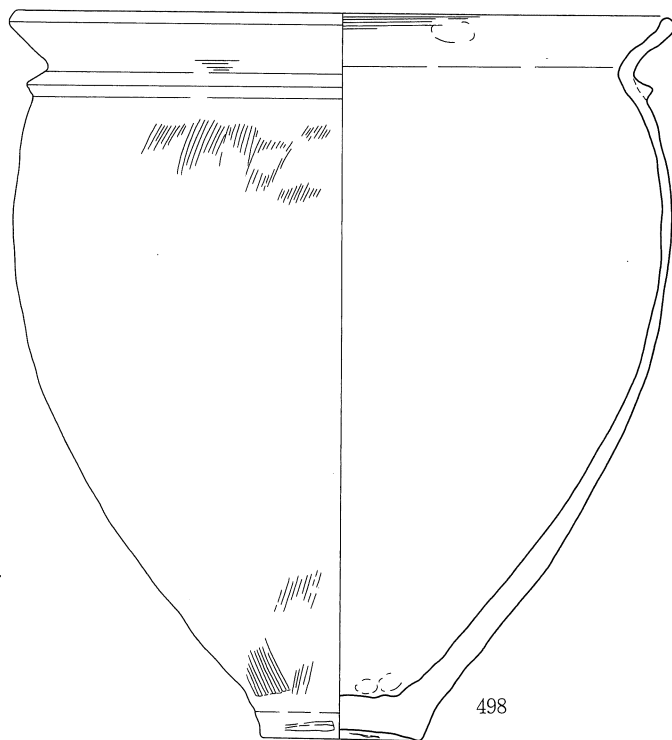


124.80m



0 25cm

第210図 1号甕棺墓実測図 (1/10)



498

0 10cm

第211図 1号甕棺墓出土遺物実測図 (1/4)

甕棺墓は上下2個の甕を使用し、合口甕棺墓としている。内部は流入土で覆われていた。埋置角度は29°である。上甕は底部から胴部上面にかけて破壊され内部に転落している。「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げている。底部は上底で、器高は36.6cmである。下甕は上面部分が潰れているがほぼ完形であった。「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げ、頸部に断面三角の貼付け突帯をもつ。底部は上底で、器高は38.9cmである。上下甕とも日常使用されていた甕の転用と考える。時期は弥生時代中期後半頃と考える。

表 149 1号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
497	甕		32.4	石英 多、 白色粒子 多、 角閃石 少	橙色 暗褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明		1号甕棺墓 上甕
			36.6								
			8.8								
498	甕		35.4	赤色粒子 少、 白色粒子 多、 角閃石 やや多	外面 黄橙色 内面 黒色・ 黒褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明		1号甕棺墓 下甕
			38.9								
			8.5								

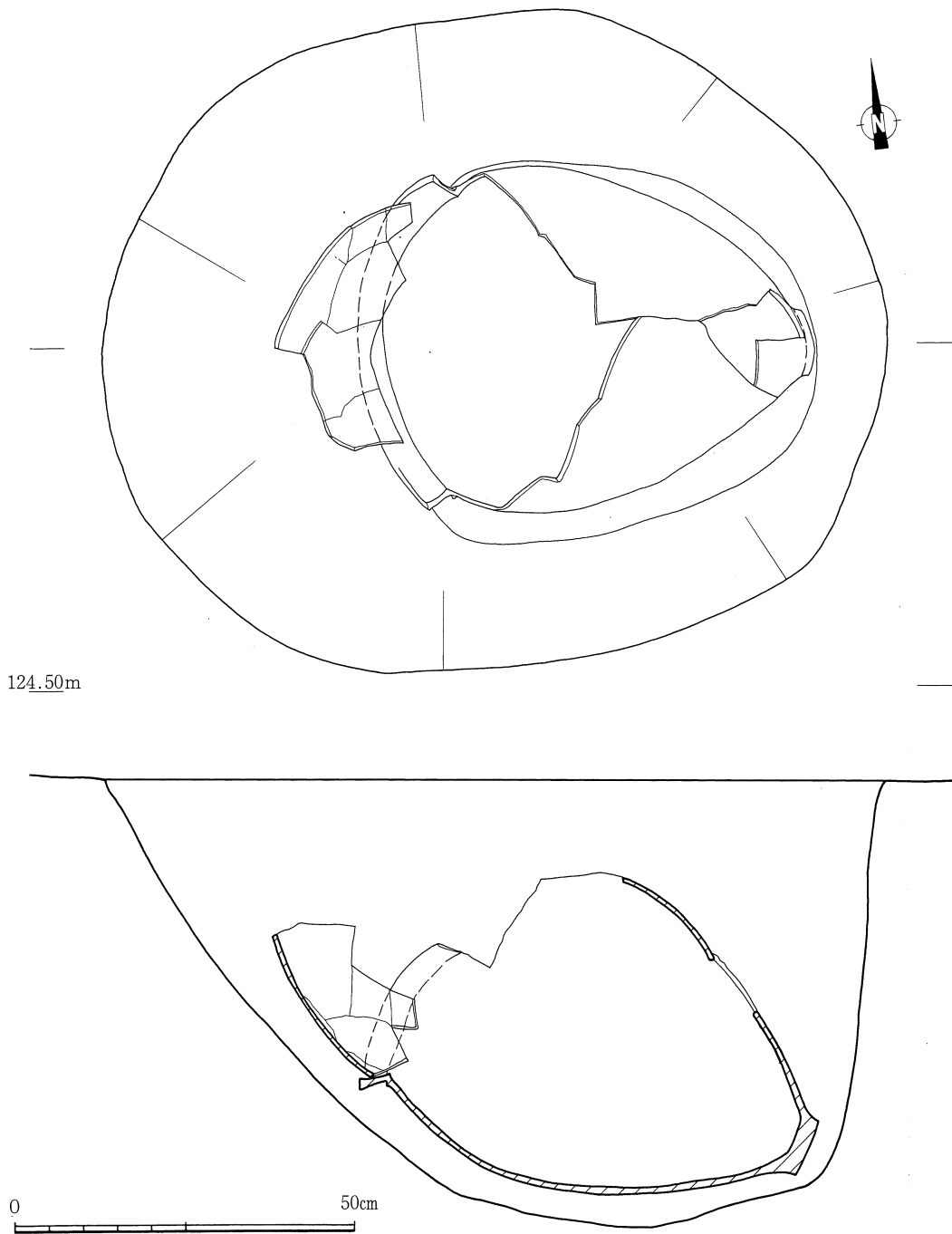
### 2号甕棺墓 (第212図)

2号甕棺墓はB-1区南東端、1号甕棺墓の南東2.5mに位置する。東側1mで26号住居跡の北東コーナーにあたる。墓坑上部はわずかながら削平を受けていたと思われる。上下甕とも一部土圧によって潰れている。墓坑掘り方は西から東方向に約60°の傾斜で掘り進め、床面に至る。東壁はやや湾曲しながら約92°の傾斜で立ち上がる。規模は東西1.14m、南北0.95mと比較的大きく掘り込んでいる。検出面からの深さは墓坑の中央やや東寄りで最深となり0.65mである。墓坑の平面形態は楕円形である。長軸主軸方位はN-85°-Wを示す。

甕棺墓は壺・甕を使用し、合口甕棺墓としている。内部は流入土で覆われていた。甕棺墓の埋置角度は27°である。上甕は壺の転用で、底部から胴部上面部分が潰れ、内部に転落している。口縁部は打ち欠いていて存在しない。胴部には断面台形の貼付け突帯4条が巡る。下甕は上面部分が潰れているがほぼ完形に復元できた。「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げ、頸部に断面三角の貼付け突帯をもつ。底部は平底で、器高は61.4cmと比較的大型である。上壺・下甕とも日常使用されていた甕の転用と考える。時期は弥生時代中期後半頃と考える。

表 150 2号甕棺墓出土土器観察表

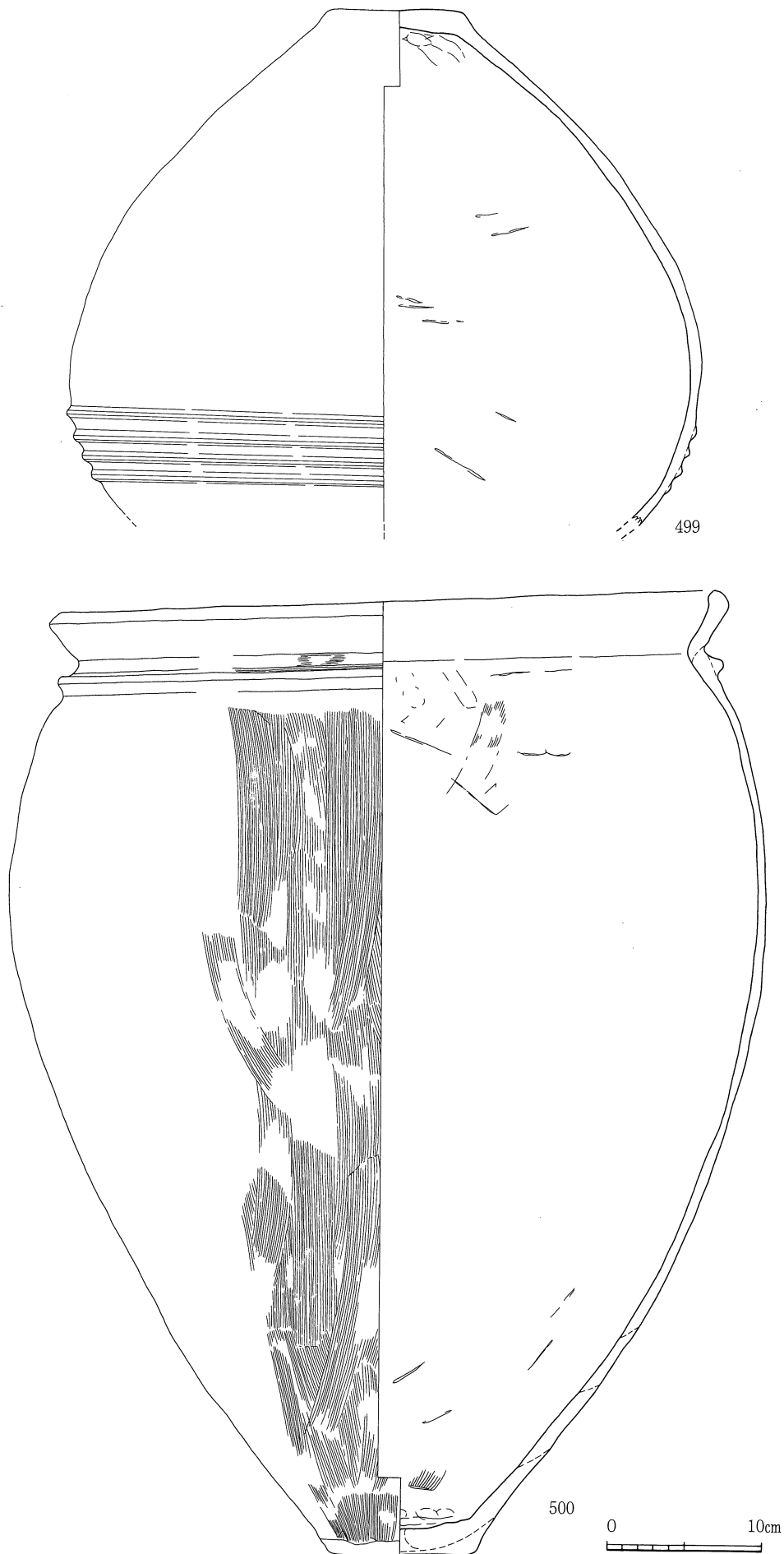
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
499	壺		—	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 多	外面 黄 橙色 内面 黄 褐色	良好	粘土積上げ	不明	ヘラナデ	すず附着	2号甕棺墓 上壺 四つの突帯あり 全面風化著しい
			—								
			8.4								
500	甕		42.2	角閃石 少、 石英 やや多、 白色粒子 多	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	丁寧なナデ		2号甕棺墓 下甕
			61.4								
			9.6								



第 212 図 2号甕棺墓実測図 (1 / 10)

### 3号甕棺墓 (第 214 図)

3号甕棺墓はB-3区西端中央に位置する。甕棺墓の周囲4~10m範囲には住居跡の確認がなく、何らかの意味合いをもつものと思われる。墓坑上部はわずかながら削平を受けていたと思われるが、甕棺墓には影響していない。上下甕とも一部土圧によって潰れている。掘り方は全体を約35cm下方へ掘り込み、土壌としている。北側部分には検出面から約15cm下方に幅約20cmの平坦面をもつ。その後、中央から南側部分にかけて北方向から南方向に約40°の傾斜で掘り進め、墓坑を構築している。南側部分は内側に大きく湾曲して掘り込んでいる。土壌の規模は東西0.61m、南北1.0mで、平面形態は楕円形である。土壌の検出面での標高は124.4mである。墓坑の規模は東西が



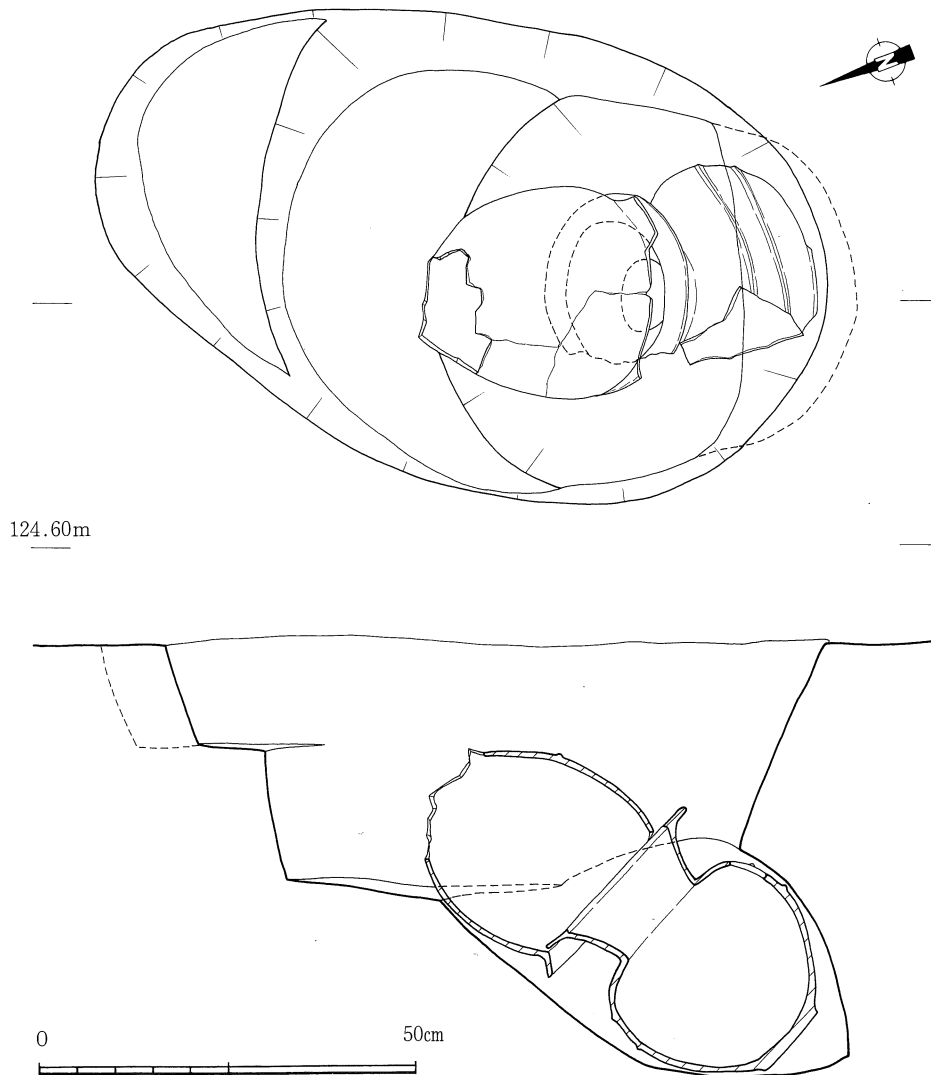
第 213 图 2 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

0.5m、南北0.4m（内法0.55m）、土壌床面からの深さは0.23mである。墓坑の平面形態は不定形な円形である。土壌掘り方と甕棺墓の主軸は一致してなく、土壌の主軸がやや北に振れる。甕棺墓の長軸主軸方位はN-12°-Eを示す。

甕棺墓は甕・壺を使用し、合口甕棺墓としている。内部は流入土で覆われていた。甕棺墓の埋置角度は42°である。上甕は底部と口縁の一部が土圧で潰れ、内部に転落している。上甕は「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げ、底部は平底で、器高は31.1cmである。下甕は壺の転用で、口縁と胴部の一部が土圧で潰れていた。胴部には断面三角形の貼付け突帯2条が巡る。上甕・下壺とも日常使用されていた甕の転用と考える。時期は弥生時代中期後半頃と考える。

表 151 3号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
501	甕	26.15	角閃石 多、 石英 やや多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	外面 黒褐色 内面 黒褐色 黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ナデ・ヘラ痕		3号甕棺墓 上甕	
		31.1									
		9.2									
502	壺	26.5	角閃石、 白色粒子 多、 石英 多、 赤色粒子 少	黄橙色 黒褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	丁寧なナデ		3号甕棺墓 下壺 一条三角突帯が 二つあり	
		31.6									
		8.1									



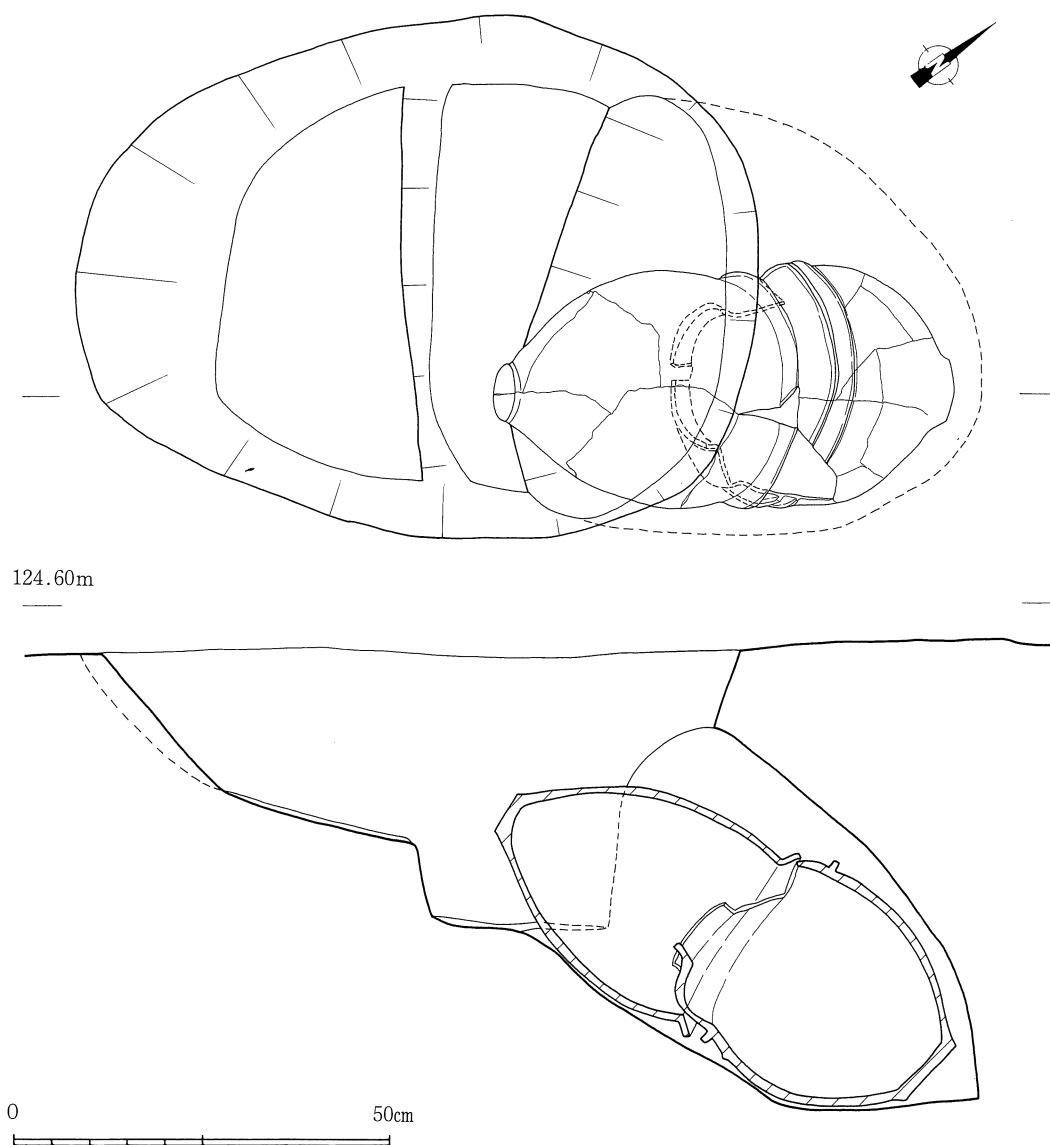
第 214 図 3号甕棺墓実測図 (1 / 10)



#### 4号甕棺墓（第215図）

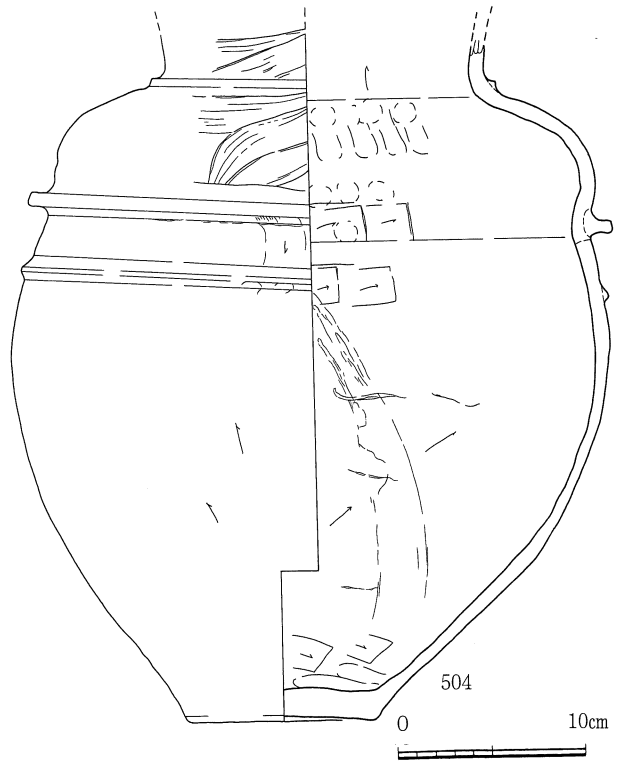
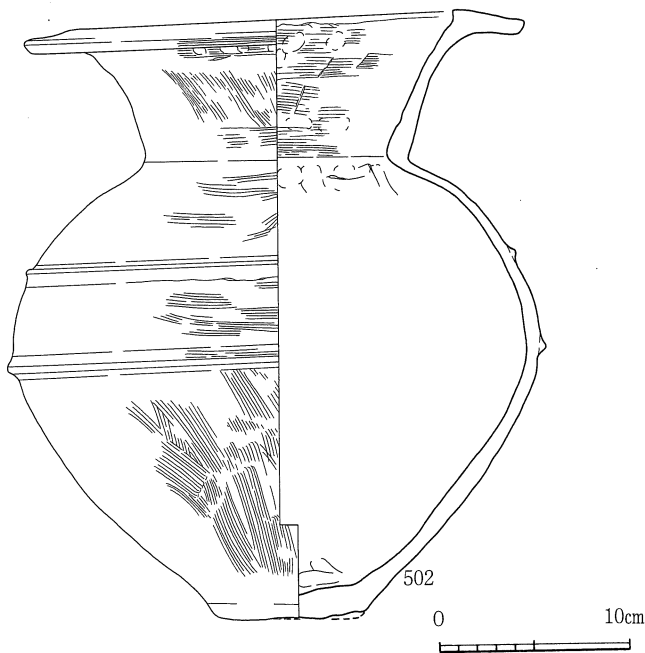
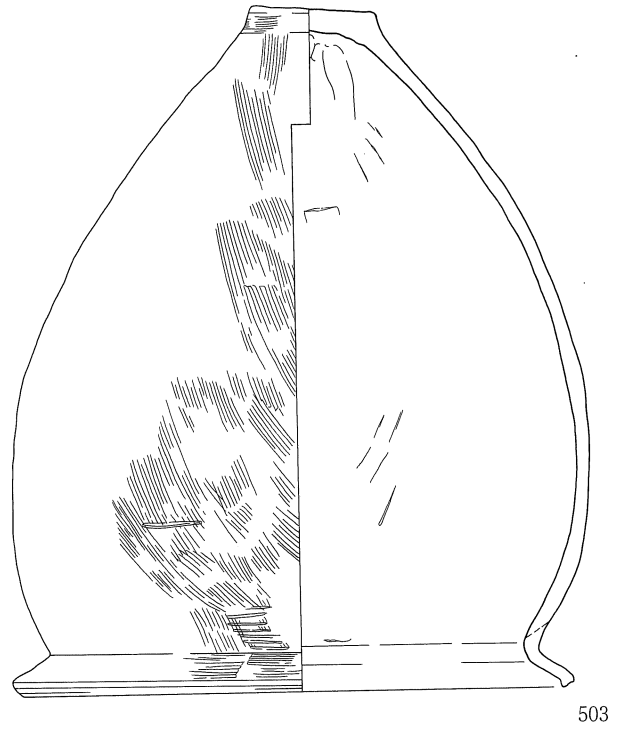
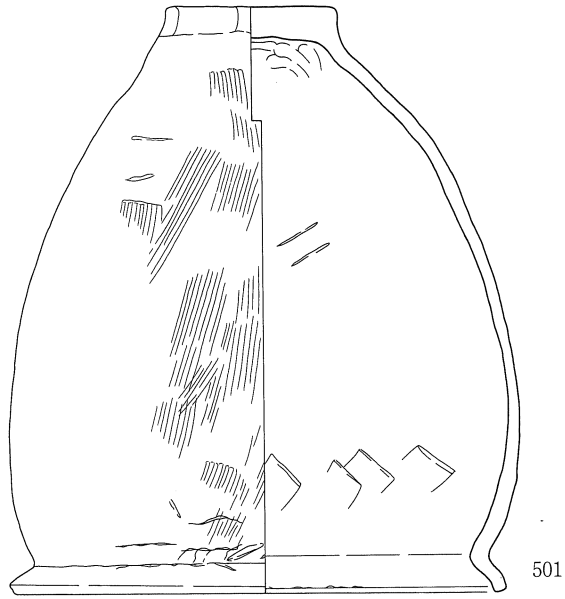
4号甕棺墓はB-3区西端中央、3号甕棺墓の西1m付近にほぼ並行して位置する。墓坑上部はわずかながら削平を受けていたと思われるが、甕棺墓には影響していない。甕棺の埋置方向は南北が逆であるが、土壌・墓坑の掘り方は3号甕棺墓と同様の形態をとっており、2基の甕棺墓は何らかの関係があると考えられる。掘り方は全体を約35cm下方へ掘り込み、土壌としている。南側部分には検出面から約25cm下方に幅約25cm、長さ50cm前後の半円形の平坦面をもつ。その後、中央から北北東側部分に向けて、南方向から約35°の傾斜で掘り進め、墓坑を構築している。北側部分は内側に大きく湾曲して掘り込んでいる。土壌の規模は東西0.68m、南北0.9mで、平面形態は楕円形である。土壌の検出面の標高は124.55mである。墓坑の規模は東西0.56m、南北0.6m（内法0.26m）、土壌床面からの深さは0.24mである。墓坑の平面形態は不定形な半円形である。土壌掘り方と甕棺墓の主軸は一致してなく、土壌および墓坑の掘り方が北西方向にややずれている。甕棺墓の長軸主軸方位はS-34°-Wを示す。

甕棺墓は甕・壺を使用し、合口甕棺墓としている。下甕内部の一部に埋土が流入していた。甕棺墓の埋置角度は36°である。上甕は「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げ、底部は平底で、器高は36.0cmである。下甕は壺の転用で、口縁部を打ち欠いている。胴部には断面台形と、断面三角



第215図 4号甕棺墓実測図（1/10）

形の貼付け突帯各1条が巡る。底部は平底である。  
また、口縁部から頸部にかけて赤色顔料が塗布され  
ている。上壺・下甕とも日常使用されていた甕の転  
用と考える。時期は弥生時代中期後半頃と考える。



第 216 図 3号甕棺墓出土遺物実測図 (1/4)

第 217 図 4号甕棺墓出土遺物実測図 (1/4)

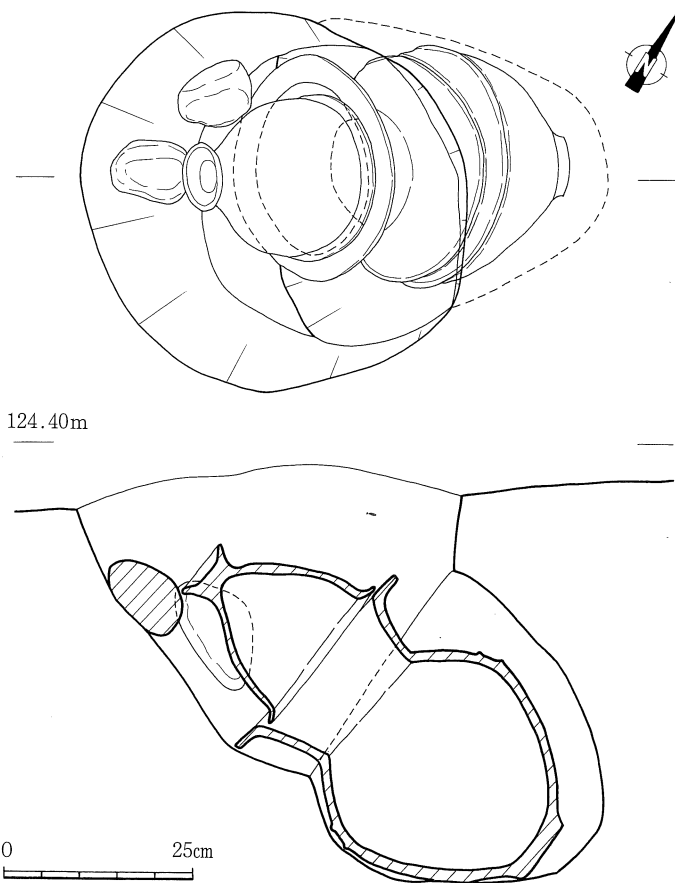
表 152 4号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
503	甕	28.6	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 微、 白色粒子 微、 金雲母 微	黄橙色	良好	粘土積上 げ	ハケ目	ハケ後ナデ?	すず付着	4号甕棺墓 上甕 風化著しく残 りわずか	
		36.0									
		6.5									
504	壺	—	石英 やや多、 白色粒子、 赤色粒子 多、 金雲母 微	赤色 黄橙色	良好	粘土積上 げ	ナデ	指ナデ		4号甕棺墓 下壺	
		—									
		9.8									

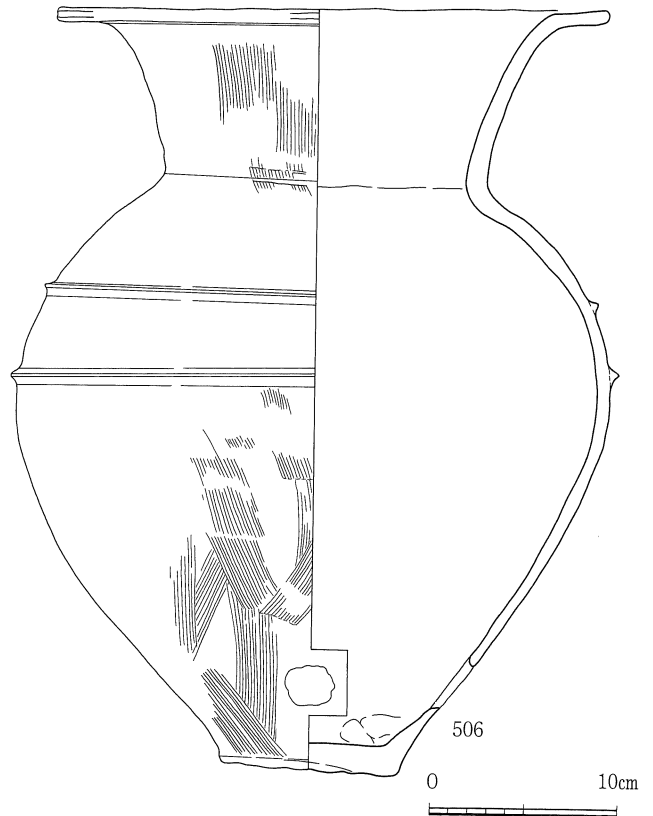
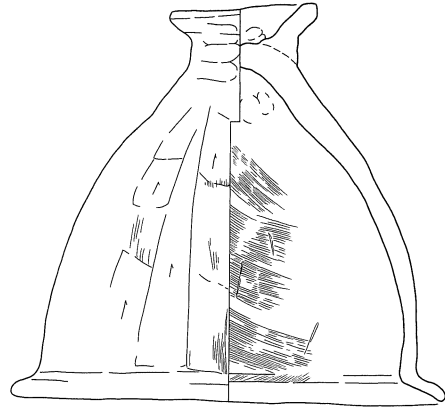
5号甕(壺)棺墓 (第 218 図)

5号甕(壺)棺墓はB-3区中央からやや南寄り、16号土坑の北西1m付近の西壁沿いに位置する。墓坑上部はわずかながら削平を受けていたと思われるが、甕棺墓には影響していない。掘り方は全体を約40cm下方へ掘り込み、土壇としている。その後、中央から北東方向に向けて、南西方向から下甕(壺)の形態に合わせて湾曲しながら掘り進め、墓坑を構築している。土壇南西壁には上甕(鉢)が傾かないように、径10cm前後の円礫2個を斜面に据え、鉢の脚部を固定している。北東側は内側に大きく湾曲して掘り込んでいる。土壇の規模は径0.5m前後の円形で、検出面の標高は124.35mである。墓坑は径0.3m前後で楕円形に掘り込んでいる。土壇床面からの深さは0.11mである。甕棺墓の長軸主軸方位はW-31°-Sを示す。

甕棺墓は鉢・壺を利用し、甕棺墓の埋置角度は37°である。上甕は脚付鉢、下甕は壺である。壺の胴部には断面三角形の貼付け突帯2条が巡り、底部は平底である。また、胴部下方には外部から打ち欠いた穿孔がみられる。時期は弥生時代中期中葉～後半頃と考える。



第 218 図 5号甕棺墓実測図 (1/10)



第 219 図 5号甕棺墓出土物実測図 (1/4)

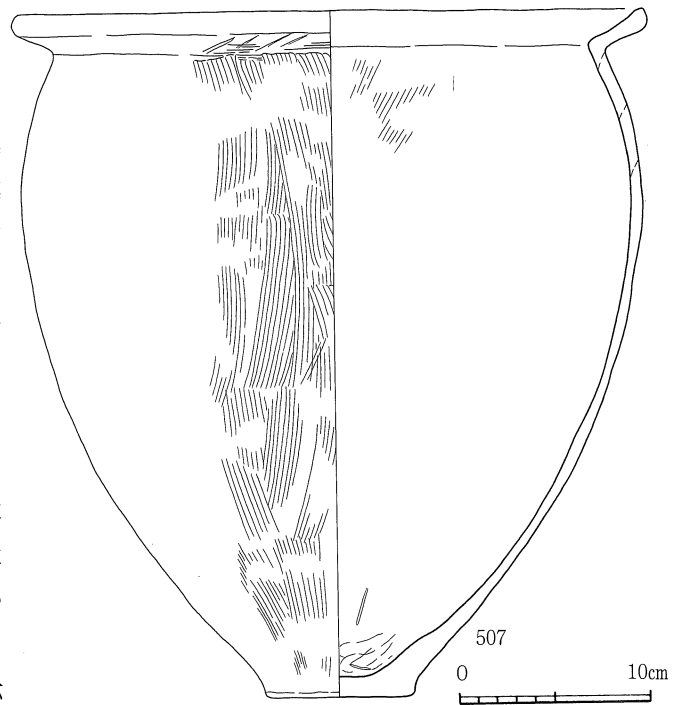
表 153 5号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
505	鉢	23.2	角閃石 やや多、赤色粒子 少、石英 多、白色粒子 多	外面 赤褐色・黒褐色・明黄褐色 内面 浅黄橙色	良好 黒斑	粘土積上げ	ケズリ 指ナデ	ハケ目 ナデ		5号甕棺墓 上鉢	
		20.6									
		7.8									
506	壺	29.3	角閃石、石英 多、赤色粒子、白色粒子 少	浅黄橙色	良好 黒斑	粘土積上げ	ハケ目 ヨコナデ	指おさえ ナデ		5号甕棺墓 下壺 外から内側に打ち欠 穿孔	
		40.0									
		9.7									

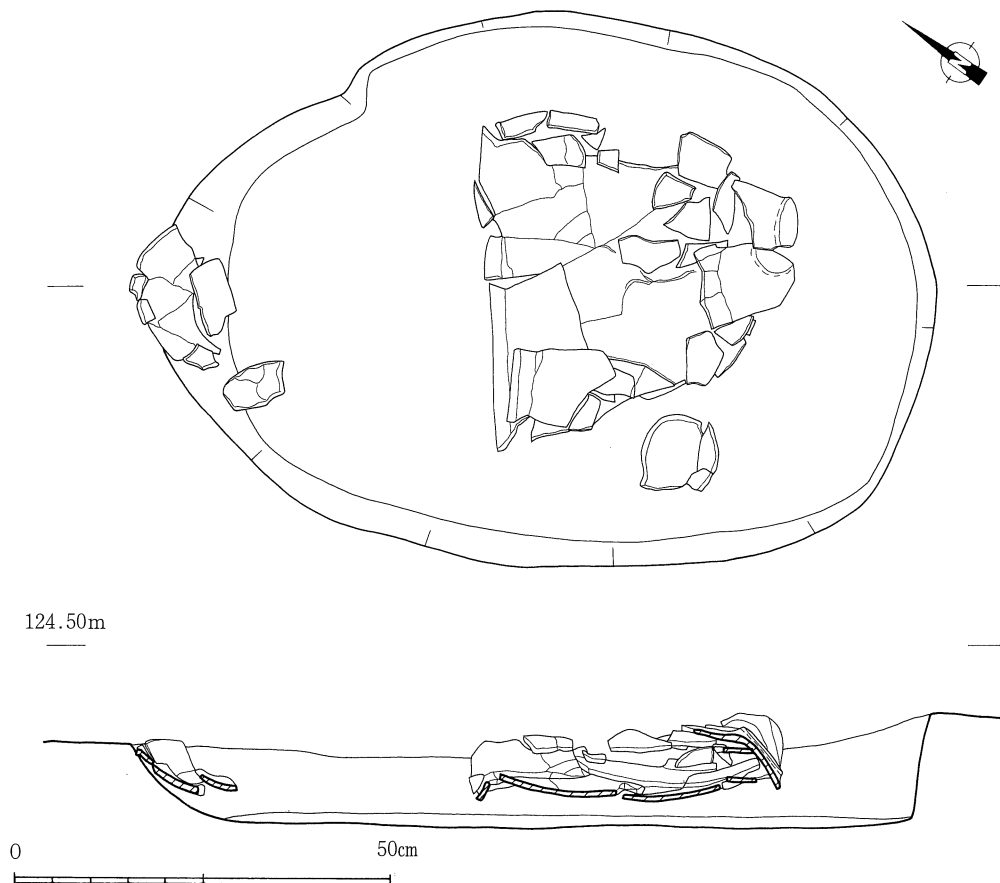
6号甕棺墓（第221図）

6号甕棺墓はB-3区の北東、73号住居跡の南東壁上に位置し、住居跡が先行する。墓坑上部は削平を受け、残りは非常に悪い。墓坑の規模は東西0.73m、南北1.05m、検出面からの深さは13cmで、標高は124.4mである。平面形態は楕円形である。甕棺墓の長軸主軸方位はN-35°-Wを示す。

甕棺墓は甕2個体を使用し、合口甕棺墓としている。下甕はほぼ全体が残っているが、土圧によって潰れた状態で出土した。下甕は「く」の字に外反し、底部は平底で、器高は36.4cmである。上甕は墓坑北側部分で胴部の一部が残っているだけであった。このため、当甕棺墓の埋置角度は不明である。時期は弥生時代中期後半頃と考える。



第220図 6号甕棺墓出土遺物実測図(1/4)



第221図 6号甕棺墓実測図(1/10)

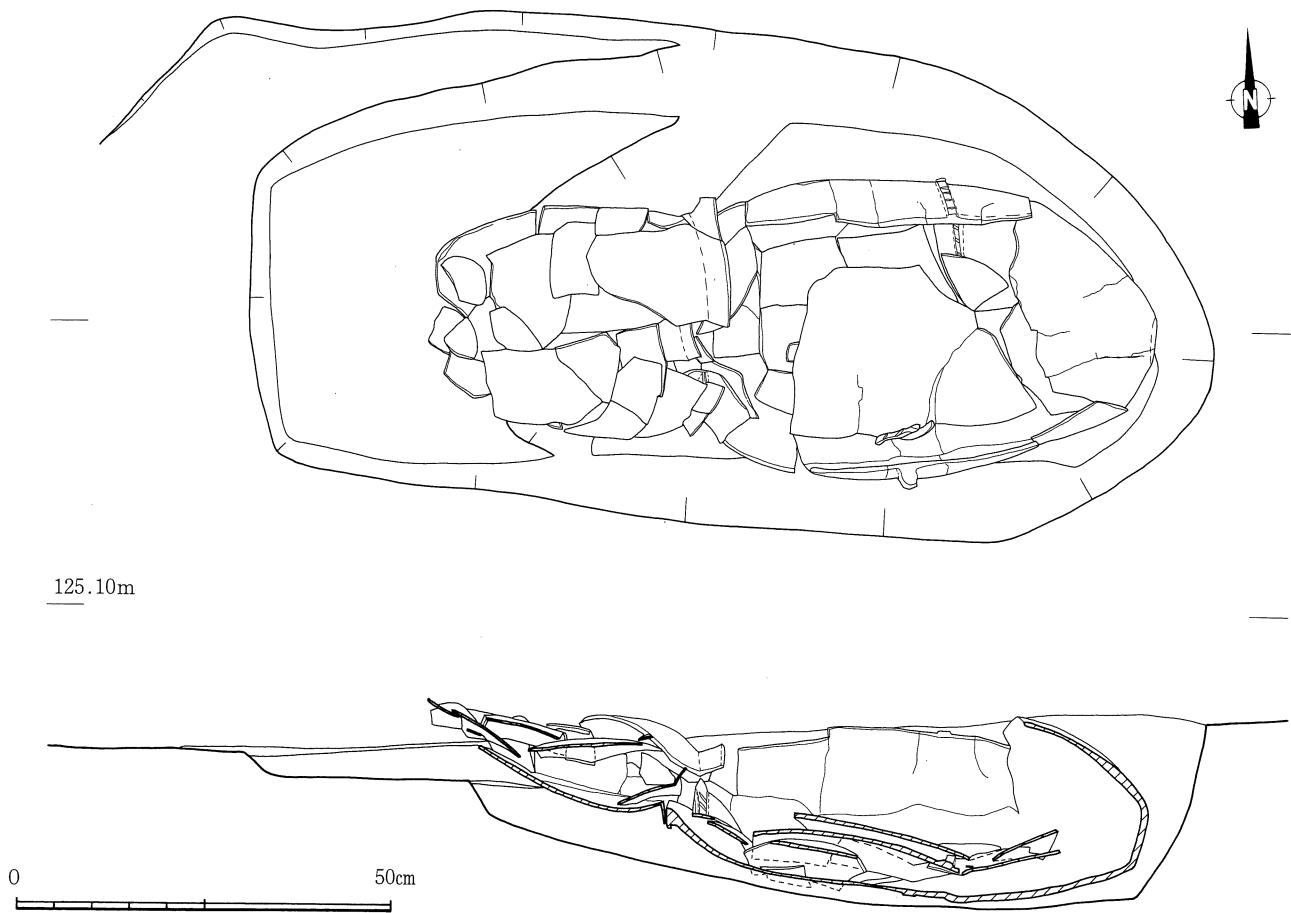
表154 6号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
507	甕	(33.2)	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多	外面 橙色 黒褐色 内面 黄褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ ナデ?		6号甕棺墓 下甕	
		36.4									
		8.0									

7号甕棺墓（第222図）

7号甕棺墓はC-4区北端、86号住居跡の西甕棺墓の西1m付近に位置する。墓坑上部は削平を受け、残りは悪い。掘り方は西側の上甕下半部分が乗る部分を一段高くして掘り下げている二段掘りである。墓坑の規模は東西1.28m、南北0.65mで、平面形態は西側がコーナーをもち、東側はコーナーを持たない隅丸の不定形な掘り方である。土壌の検出面の標高は124.45mで、深さは最深で0.25mである。甕棺墓の長軸主軸方位はN-88°-Wを示す。

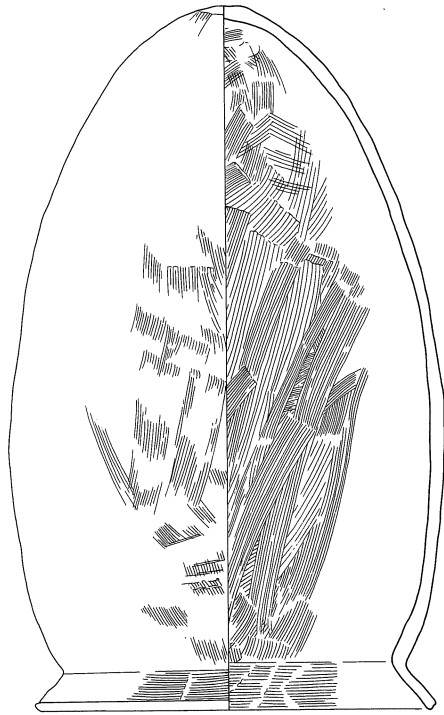
甕棺墓は甕2個を使用しての合口甕棺墓である。上下甕とも土圧によって陥没し、内部には埋土が流入していた。甕棺墓の埋置角度は16°でほぼ寝せ棺である。上甕は底部にわずかではあるが平底の様相を残している。器高は37.6cmである。下甕は口縁部分を打ち欠いて使用している。頸部と胴部中央には断面台形の刻み目突帯を巡らせ、胴部外面は叩きの痕跡がみられる。底部はわずかながら平底の様相を呈している。7号甕棺墓の時期は弥生時代後期後半頃と考える。



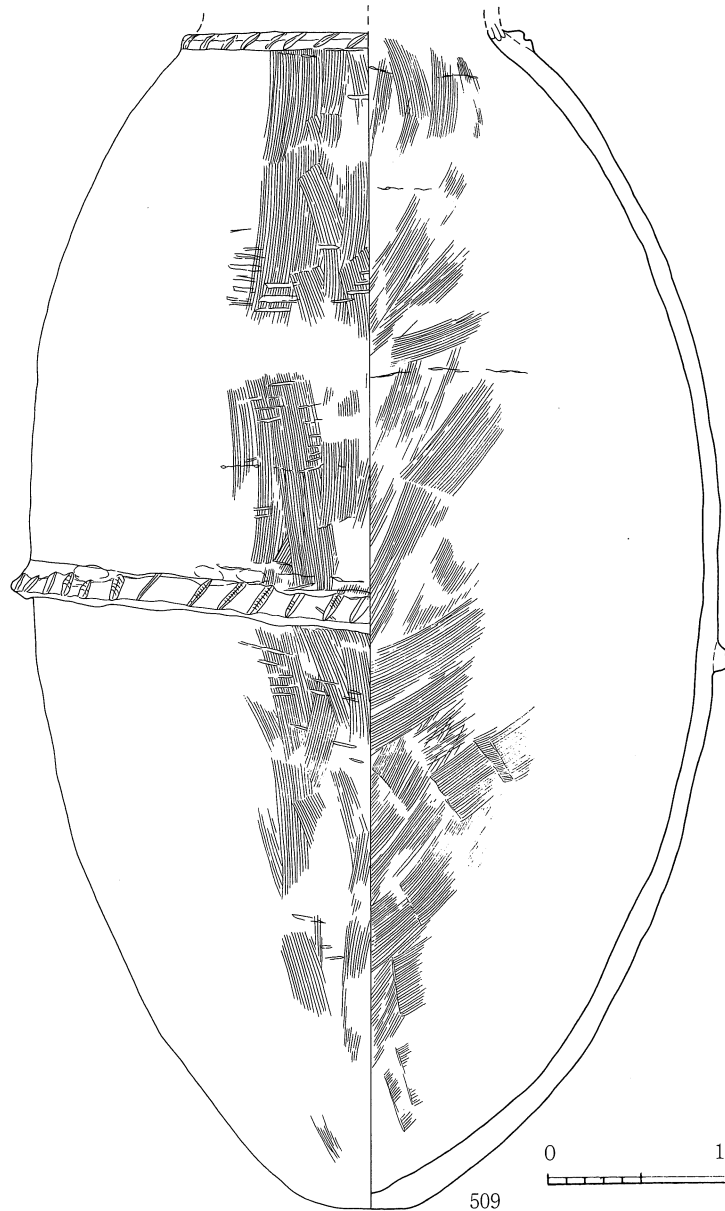
第222図 7号甕棺墓実測図（1/10）

表155 7号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
508	甕	20.7	37.6	角閃石 やや多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多、 石英 少	橙色 黒色 黒褐色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目		7号甕棺墓 上甕
		2.4									
		—									
509	甕	—	62.8	角閃石 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 少	外面 橙色 内面 黄橙色	良好	粘土積上げ	タタキ後ハケ 目	ハケ		7号甕棺墓 下甕 刻目突帯あり
		5.5									
		—									



508



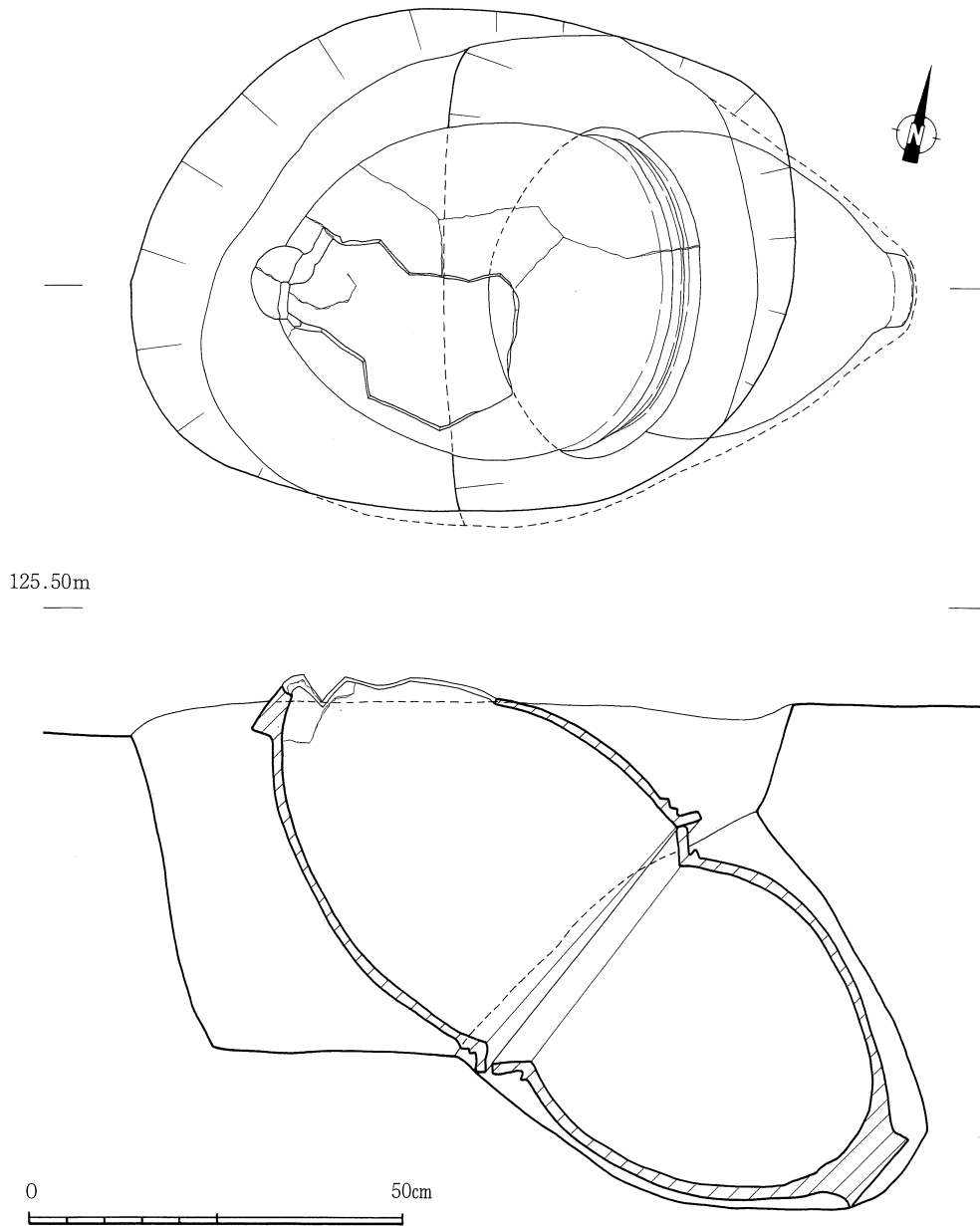
509

第 223 图 7 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)  
- 243 -

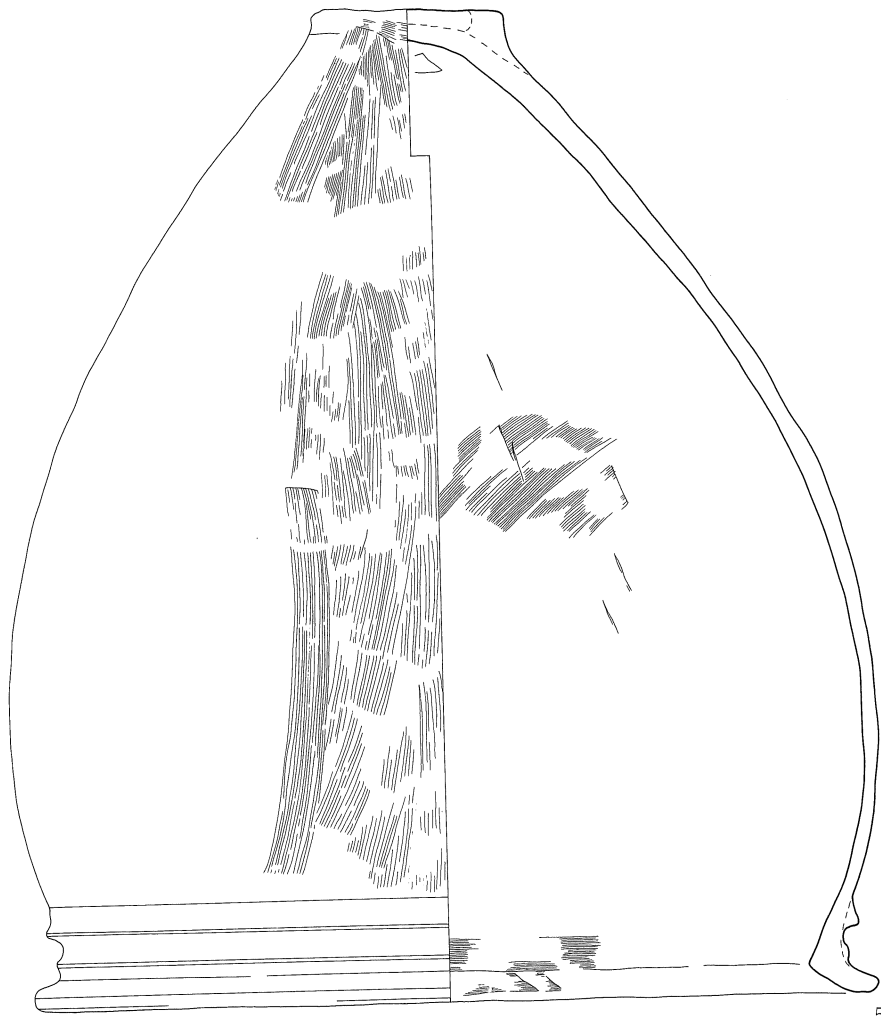
### 8号甕棺墓（第224図）

8号甕棺墓はB-4区南端中央に位置する。墓坑上部は削平を受け、上甕の一部が削平を受けている。掘り方は全体を約40cm下方へ掘り下げ、土壌を構築している。土壌の規模は東西0.88m、南北0.67m、検出面の標高は125.35mで、平面形態はやや歪な楕円形である。その後、土壌床面東側部分をさらに東側方向へ傾斜角 $40^\circ$ 前後で下方へ掘り込んで墓坑を構築している。東側部分は内側に大きく湾曲している。墓坑の規模は東西が0.63m、西側端が0.6mで、平面形態は角の無い三角形に近い。土壌床面からの深さは約20cmである。甕棺墓の主軸方位はW- $13^\circ$ -Sを示す。

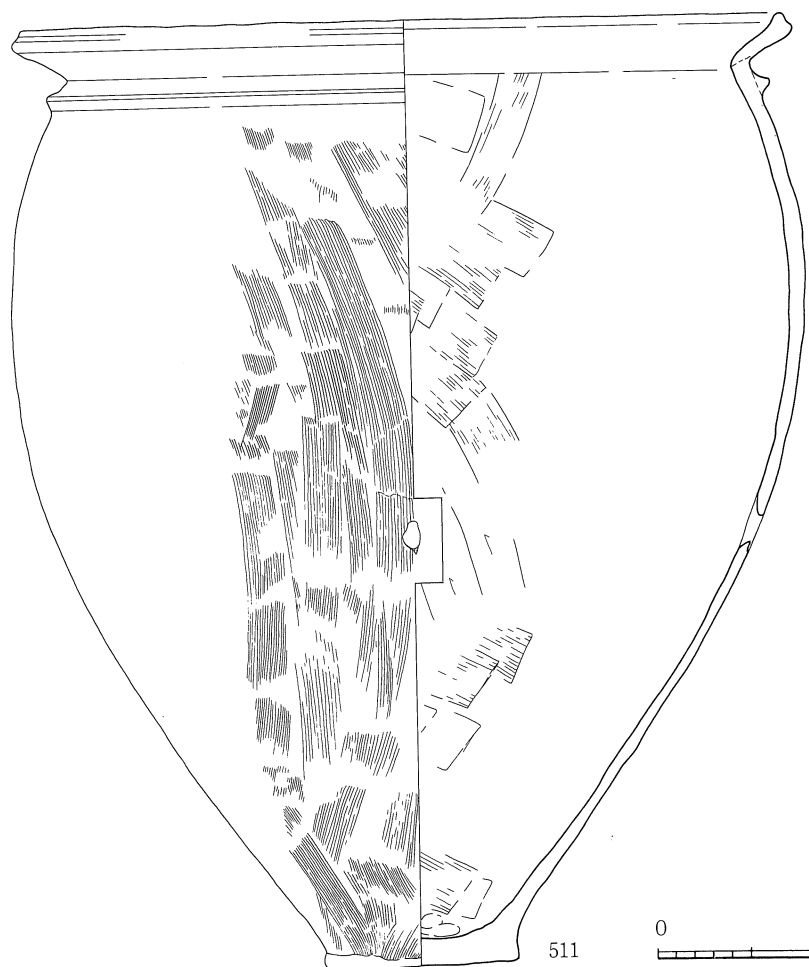
甕棺墓は甕2個を使用しての合口甕棺墓である。上甕は削平によって底部から胴部の一部が破壊され、甕棺内部に転落していた。甕棺墓の埋置角度は $39^\circ$ である。上甕は口縁部が外反し、頸部には断面三角形の貼付け突帯2条が巡り、底部は平底である。器高は52.4cmと比較的大型の甕である。下甕は「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げ、底部は平底、頸部には断面三角形の貼付け突帯1条が巡る。また、胴部中央に外側から打ち欠いた穿孔がみられる。器高は50.6cmと比較的大型の甕である。器高は37.6cmである。8号甕棺墓の時期は弥生時代中期後半頃と考える。



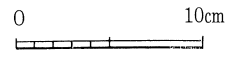
第224図 8号甕棺墓実測図（1/10）



510



511



第 225 图 8 号甕棺墓出土遗物实测图 (1 / 4)



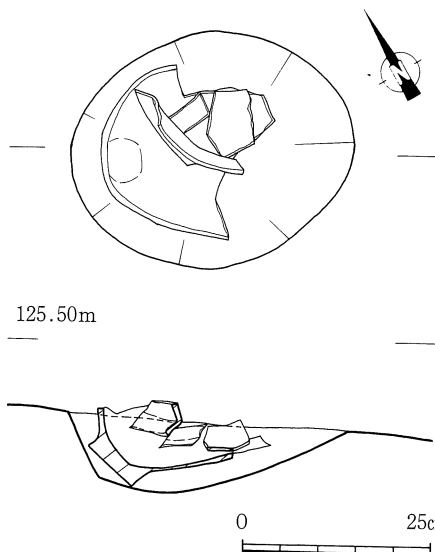
表 156 8号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
510	甕		45.0	石英 微、 角閃石 少、 赤色粒子 少		良好	粘土積上	タタキ ハケ	ハケ少々		8号甕棺墓 上甕
			52.4								
			10.3								
511	甕		40.5	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 多	外面 浅黄橙 色・黒褐色・ 橙色 内面 浅黄橙 色	良好	粘土積上 げ 後 タタ キ	ハケ目	粗いハケ 指圧痕	すす付着	8号甕棺墓 下甕 打欠穿孔
			50.6								
			10.3								

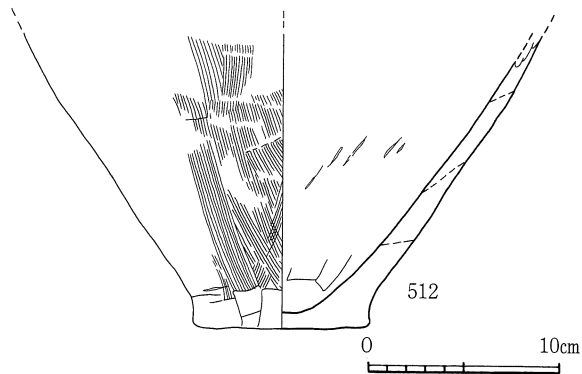
9号甕棺墓 (第 226 図)

9号甕棺墓はB-4区南端中央、8号甕棺墓の東0.5m付近に位置する。墓坑のほとんどが削平を受け、残りは非常に悪い。残存での墓坑掘り方は径0.3×0.8mの楕円形で、検出面での標高は124.45mで、深さは西側が最深で10cmである。甕棺墓の主軸方位はE-30°-Sを示す。

甕棺墓は墓坑内に甕の胴部下半が残るだけで、他は削平のため既に無い。このため、単棺墓か合口甕棺墓かの判断はできない。残存する甕から計測すると甕棺墓の埋置角度は45°である。下甕の底部は平底である。9号甕棺墓の時期は底部だけのため判断が難しいが、おおよそ弥生時代中期後半～後期前半頃と考える。



第 226 図 9号甕棺墓実測図 (1/10)



第 227 図 9号甕棺墓出土遺物実測図(1/4)

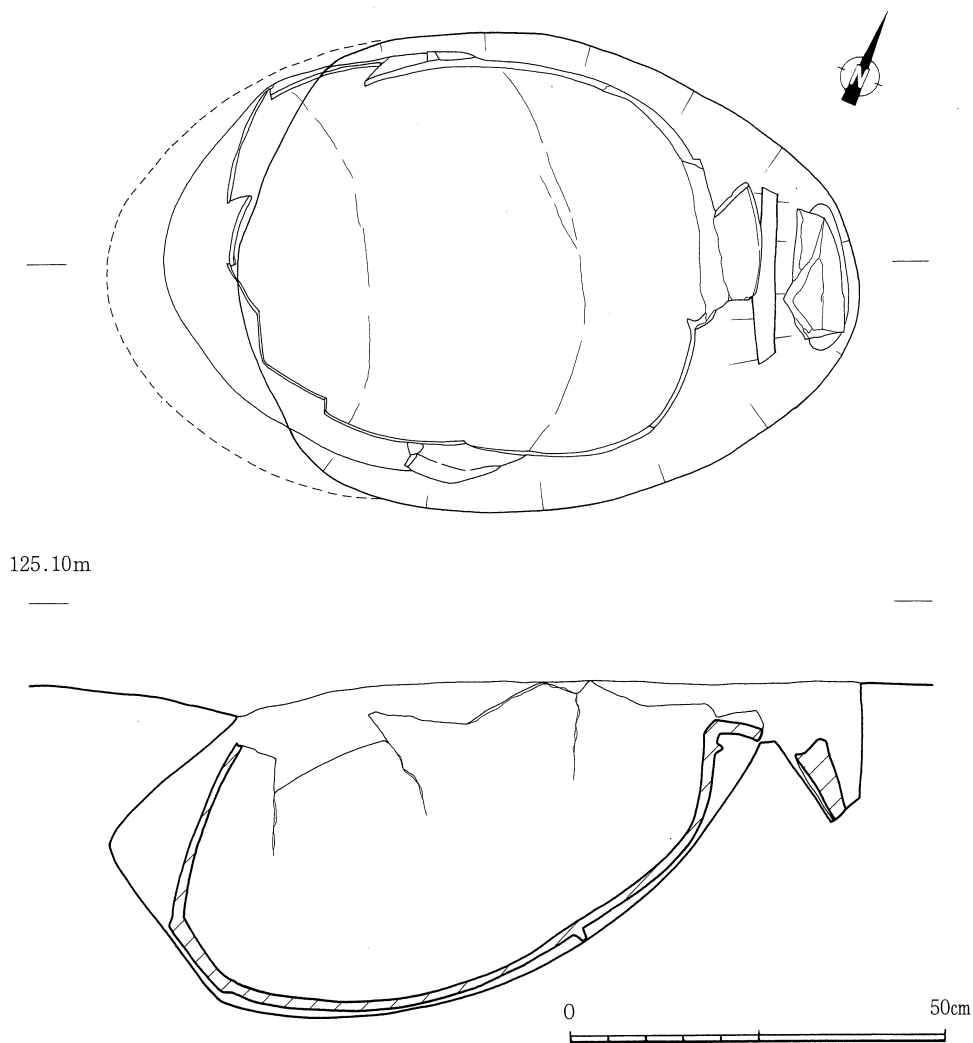
表 157 9号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
512	甕		—	角閃石 多、 石英 多、 白色粒子 少	黄褐色	良好	粘土積上 げ	ハケ	ヘラナデ		9号甕棺墓 下甕
			—								
			9.0								

### 10号甕(壺)棺墓 (第228図)

10号甕(壺)棺墓はB-4区北東寄りに位置する。いわゆる墓域の西側にあたり、周囲には北西3mに3号石棺墓、南南東3mに4号石棺墓、東1.5mに17号土坑墓が存在する。墓坑上部は削平を受け、上甕の一部が削平を受けている。掘り方は北東から南西方向へと緩やかな傾斜をつけながら掘り進め、南西部分は内側が大きく湾曲している。墓坑の規模は東西0.82m(内法0.86m)、南北0.63m、検出面の標高は125.0m、深さは最深で43cmである。墓坑の掘り込みは甕がきれいに収まるように掘り込まれている。特に、底部は壁面と、胴部の張りは床面の湾曲具合と同じカーブを描き、ほぼ密着している。平面形態は楕円形である。また、掘り方北東部分は現存で深さ20cmの掘り込みを確認した。この掘り込み内からは幅15cm、厚さ5cm程度の安山岩板石の破片が出土した。このことから当甕棺墓は合口甕棺墓ではなく、板石で蓋をした単棺である。甕棺墓の主軸方位はN-67°-Eを示す。

甕(壺)棺墓は壺による単棺である。削平によって底部から胴部の一部が破壊され、1/3が消滅している。甕(壺)棺墓の埋置角度は35°である。壺は口唇部に刻目を施している。頸部には断面三角形の貼付け突帯が巡り、胴部中央にも断面台形の突帯を有している。底部はわずかにレンズ状である。器高は79.5cmと大型の壺である。甕の底部付近からは大腿骨と思われる骨の一部が出土したが、残りは非常に悪かった。10号甕(壺)棺墓の時期は弥生時代中期後半頃と考える。



第228図 10号甕棺墓実測図 (1/10)



第 229 図 10 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

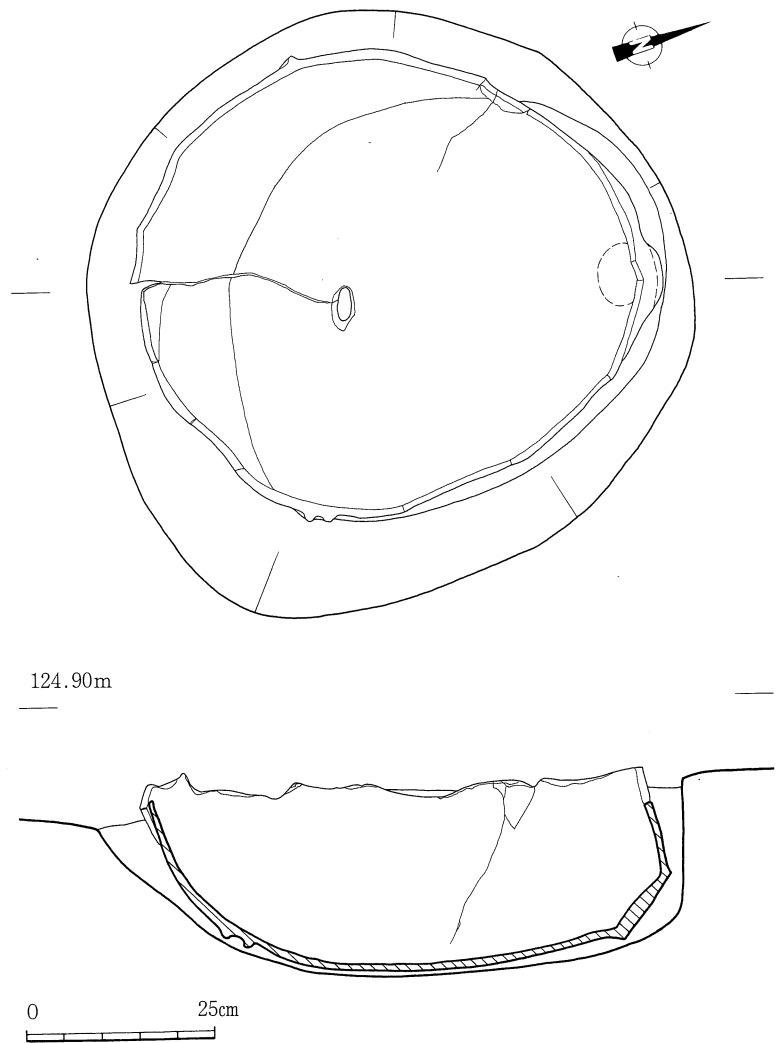
表 158 10 号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
513	甕		35.0	角閃石 少、 石英 少	橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ハケ目	すず付着	10号甕棺墓
			79.5								
			9.3								

### 11号甕(壺)棺墓 (第230図)

11号甕(壺)棺墓はB-5区の中央付近に位置し、墓域の東端にあたる。墓坑上部は削平を受け、甕(壺)棺の半分が削平を受けている。墓坑の規模は径0.8m前後で、平面形態はほぼ円形である。検出面の標高は124.8mで、最深部は中央で25cmである。南側壁部分は緩やかに傾斜し、北壁部分はほぼ垂直に立ち上がる。甕棺墓の主軸方位はS-17°-Wを示す。

甕(壺)棺墓は壺1個体が検出されただけで、単棺墓か合口甕棺墓かの判断はできない。壺は削平によって胴部から口縁部の一部が破壊され、1/3が消滅している。甕(壺)棺墓の埋置角度は37°である。壺は口縁部から頸部にかけて削平され既にない。胴部最大径部分には断面三角形の貼付け突帯2条が巡り、底部は平底である。また、胴部中央に外側から打ち欠いた穿孔が認められる。11号甕(壺)棺墓の時期は弥生時代中期後半頃と考える。

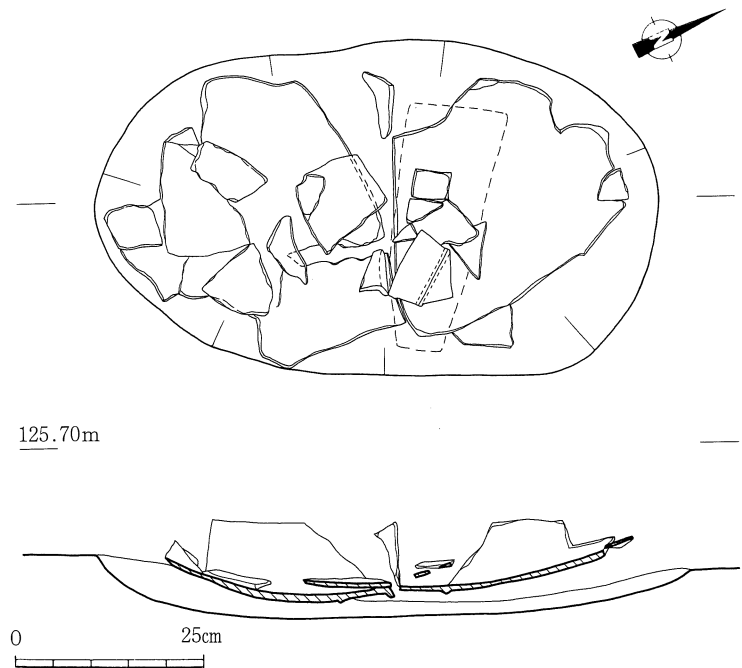


第230図 11号甕棺墓実測図 (1/10)

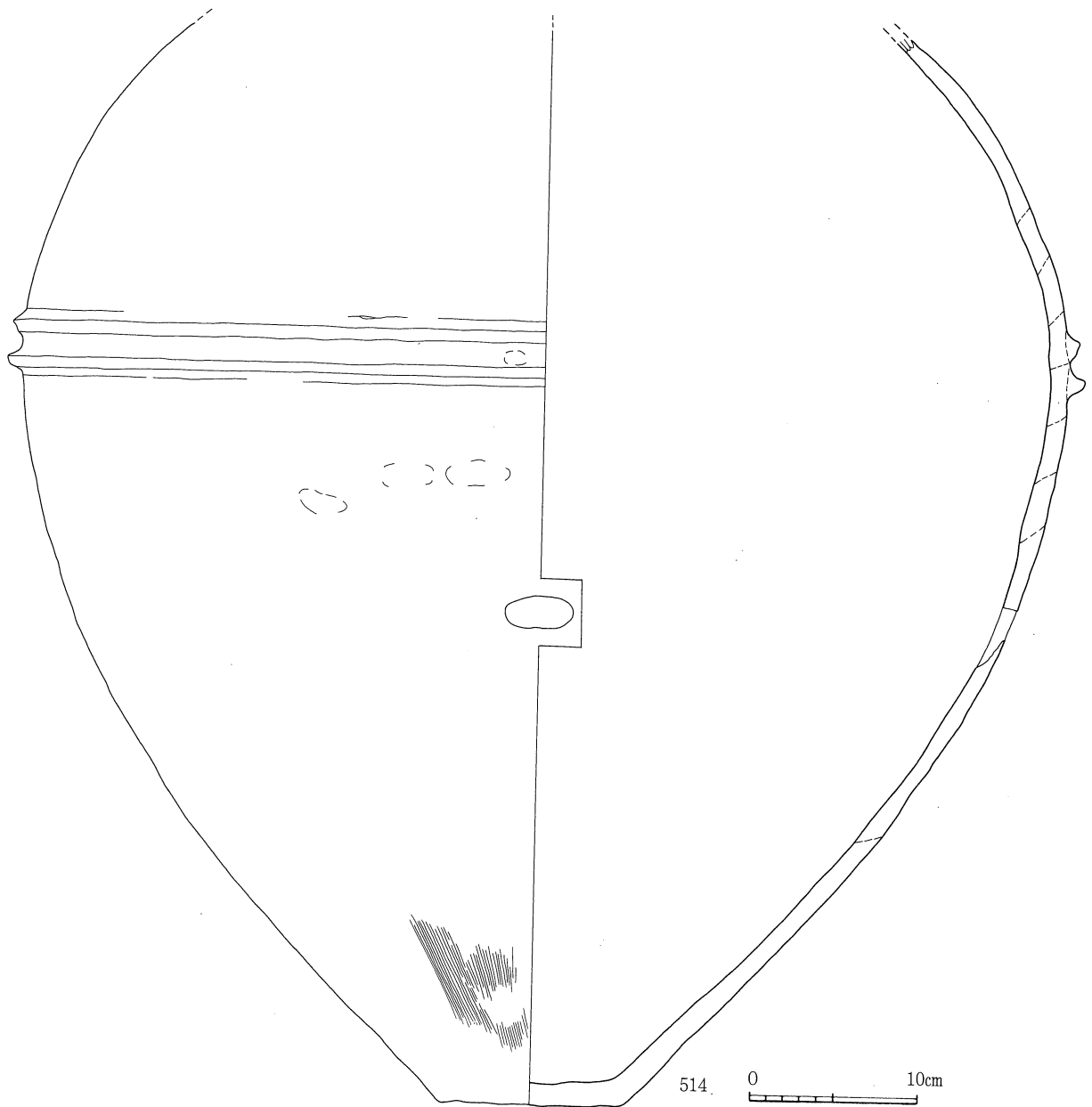
### 12号甕棺墓 (第231図)

12号甕棺墓はB-5区南西寄りに位置する。墓域のほぼ中央付近にあたり、周辺には北側に13・14号土坑墓が存在する。墓坑の大半が削平を受けていて、墓坑床面に接する甕の口縁から胴部の一部が残るだけである。現存する墓坑掘り方の規模は東西0.44m、南北0.8m、検出面の標高は125.55mで、深さは8cm程である。平面形態は長方形に近い楕円形でレンズ状に掘り込んでいる。甕棺墓の主軸方位はN-26°-Eを示す。

甕棺墓は甕2個を使用したの合口甕棺墓である。上下甕とも残りは悪く、全体のごく一部を残すだけであ



第231図 12号甕棺墓実測図 (1/10)



第 232 図 11 号壺棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

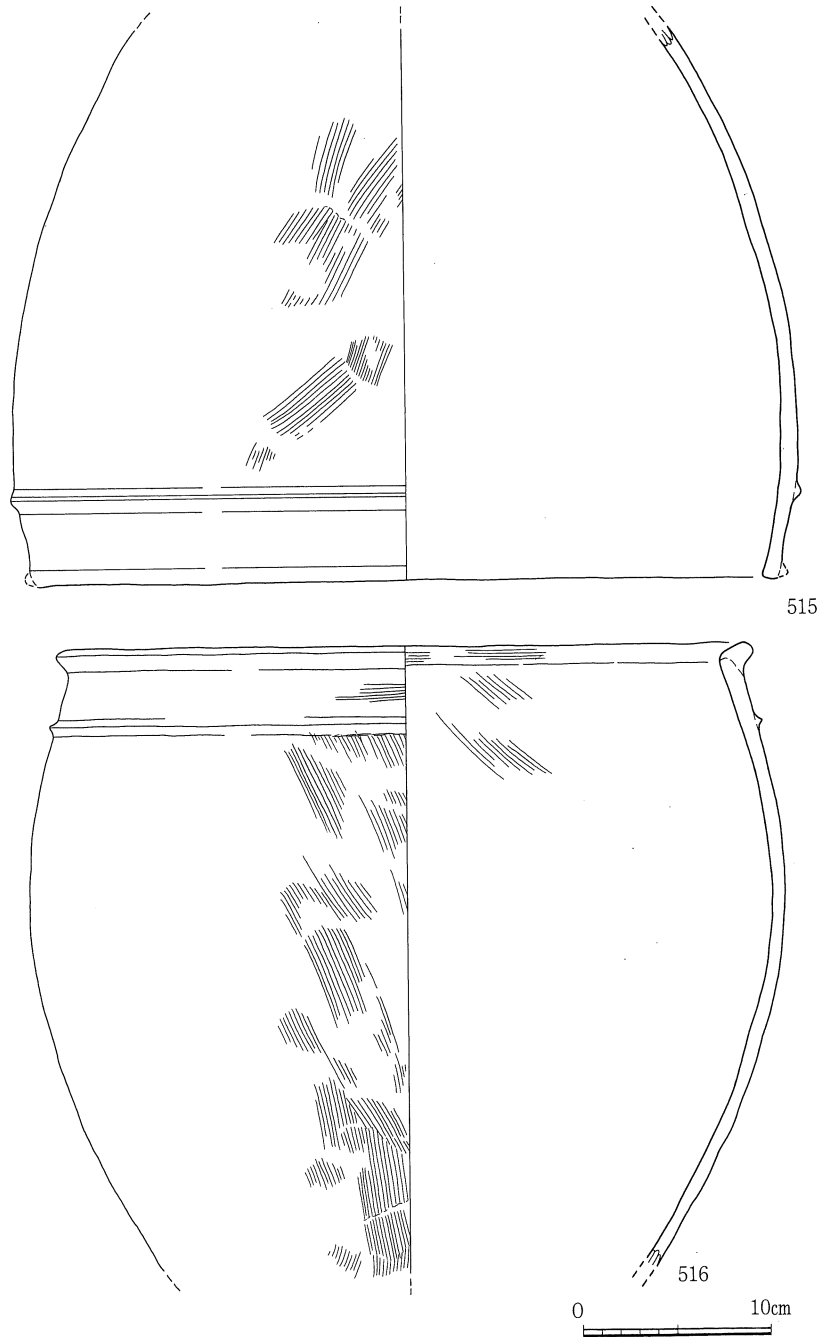
表 159 11 号壺棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
514	壺	—	11.0	角閃石 多、 石英 多、 赤色粒子 多、 白色粒子 多	外面 黄橙 内面 灰褐色	良好	粘土積上げ	不明	不明		11 号壺棺墓 穿孔
		—									
		—									

表 160 12 号壺棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
515	甕	(39.6)	—	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少、 石英 少	外面 褐色 内面 黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	ナデ		12 号壺棺墓 上甕
		—									
		—									
516	甕	(36.2)	—	角閃石 多、 白色粒子 多、 赤色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上げ	ハケ目	不明		12 号壺棺墓 下甕 三角突帯
		—									
		—									

る。甕棺墓の現存状況からみて、ほぼ寝せ棺である。上甕の下部からは比較的多量の青灰色粘土が検出された。上甕の高さ調整と、合せ口部の目張りを行っていた粘土であろう。上甕は口縁がわずかに内傾し、口縁外端部に粘土紐を巡らせて肥厚させ、さらに口縁部やや下位に断面三角形の突帯を巡らしている。いわゆる亀ノ甲タイプの土器である。下甕は口縁部を断面「コ」の字状に肥厚させ、さらに口縁部やや下位に断面三角形の突帯を巡らしている。12号甕棺墓の時期は上下甕の型式からみて弥生時代中期初頭頃と考える。

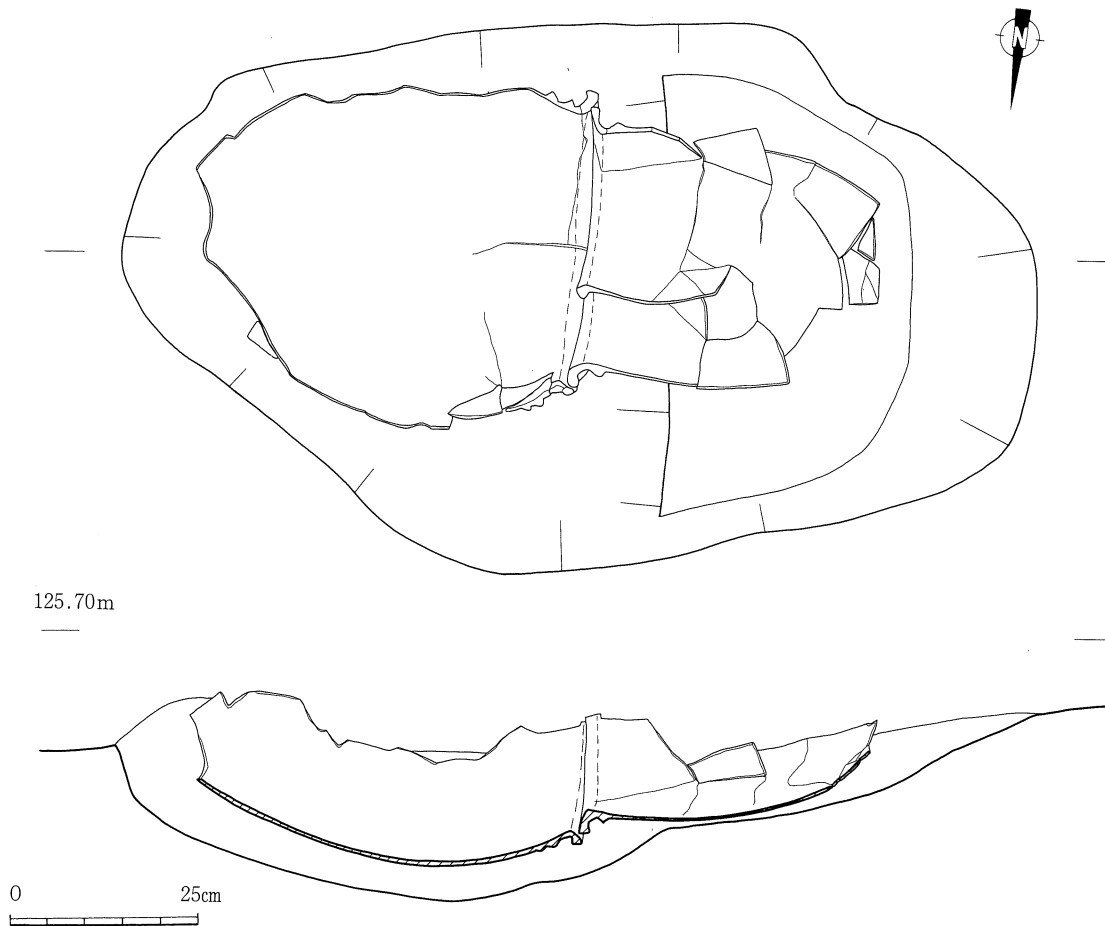


第 233 図 12 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

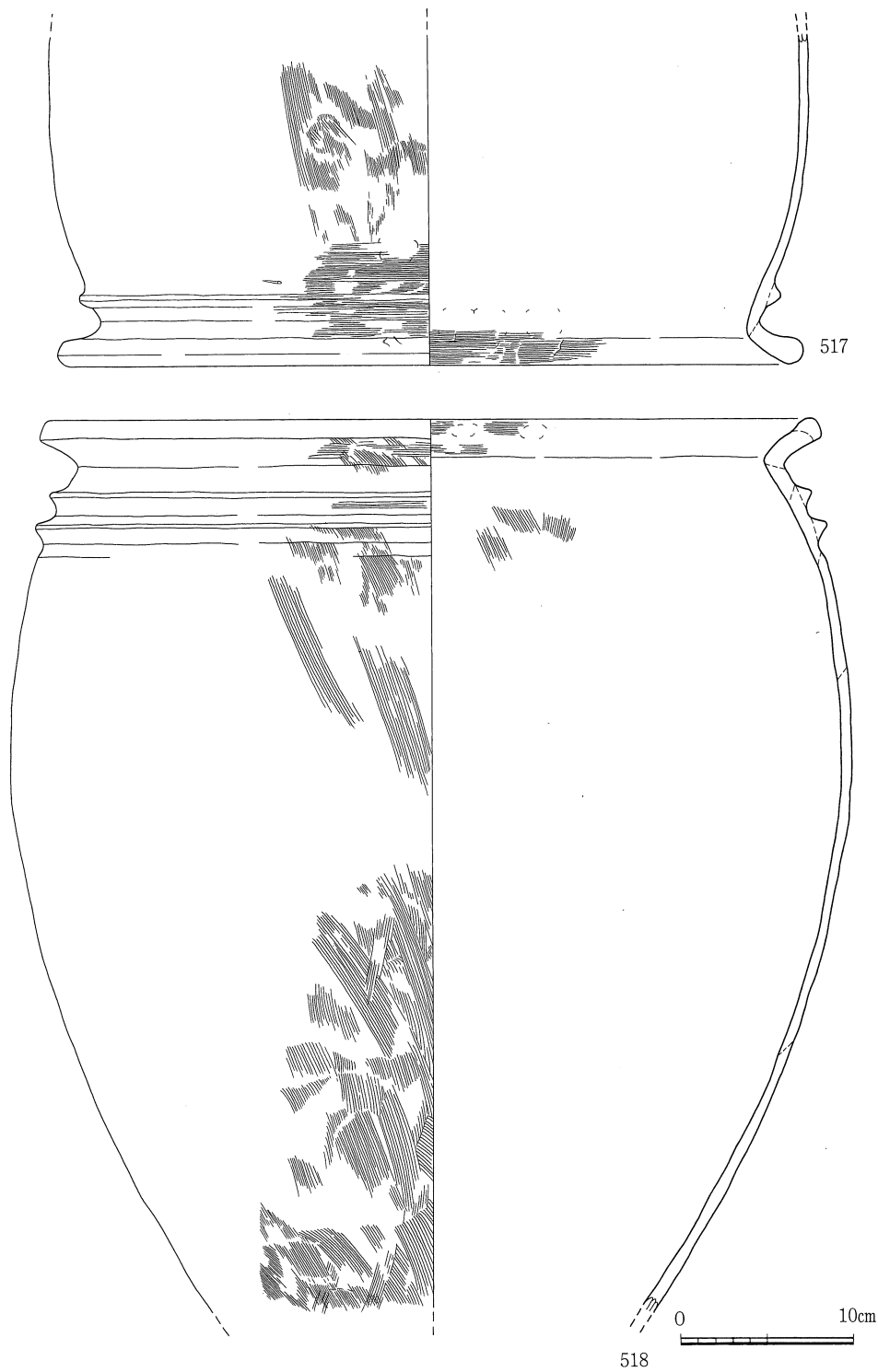
### 13号甕棺墓（第234図）

13号甕棺墓はB-5区南端の西寄りに位置する。墓域の中央付近にあたり、北西5.5m付近には12号甕棺墓が存在する。墓坑の大半が削平を受けていて、墓坑床面に接する甕の口縁から胴部の一部が残るだけである。墓坑の掘り方は上甕と下甕で深さを違えている。現存する墓坑の規模は東西1.22m、南北0.7m、検出面の標高は125.6m、深さは西側上甕部で15cm、東側下甕部で25cmである。墓坑の掘り込みは上甕部分はほぼ密着する様に掘り込まれている。下甕部分の掘り方は甕より5cm程深く掘り込んでいて、埋土を補填している。平面形態は不定形な楕円形で、床面はレンズ状に掘り込まれている。甕棺墓の主軸方位はW-7°-Sを示す。

甕棺墓は甕2個を合わせた合口甕棺墓である。上下甕とも残りは悪く、全体のごく一部を残すだけである。甕棺墓の現存状況からみて、ほぼ寝せ棺である。上甕は口縁部が大きく外反し、頸部直下に断面三角形の突帯1条が巡る。下甕は「く」の字に外反した口縁端部をやや跳ね上げ、頸部直下に断面三角形の突帯2条が巡る。上下甕とも底部は消滅している。13号甕棺墓の時期は弥生時代中期後半頃と考える。



第234図 13号甕棺墓実測図（1/10）



第 235 図 13 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

表 161 13 号甕棺墓出土土器観察表

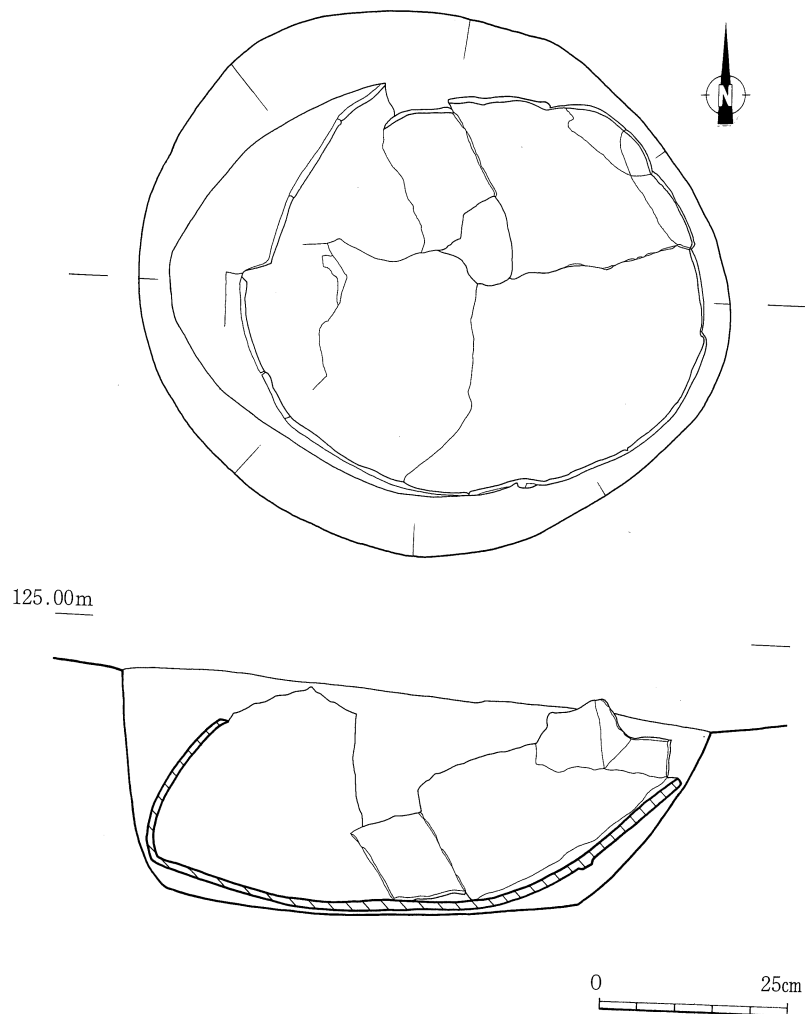
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
517	甕	(41.4)	角閃石 多、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	黄橙色	良好	粘土積上 げ	ハケ目	ハケ後ナデ		13 号甕棺墓 上甕	
		—									
		—									
518	甕	(44.4)	角閃石 多、 赤色粒子 多	灰白色 黄橙色 黒褐色	良好	粘土積上 げ	ハケ目	ハケ目		13 号甕棺墓 下甕	
		51.5									
		—									



14号甕(壺) 棺墓 (第 236 図)

14号甕(壺)棺墓はB-5区東端、墓域の東端に位置する。墓坑の上部は削平を受けているため、甕の上部も削平を受け消滅している。口縁の一部は甕棺内に落下していた。現存する墓坑掘り方の規模は東西0.78m、南北0.72m、検出面の標高は124.9m、深さは最深で30cmである。平面形態は円形である。墓坑の掘り込みは壺の底部が位置する西壁部分が約80°の角度で、急傾斜に掘り込んでいる。他の壁面は約45°の比較的緩やかな傾斜でやや湾曲しながら掘り込んでいる。胴部中央付近が床面と密着している。甕(壺)棺墓の主軸方位はN-83°-Wを示す。

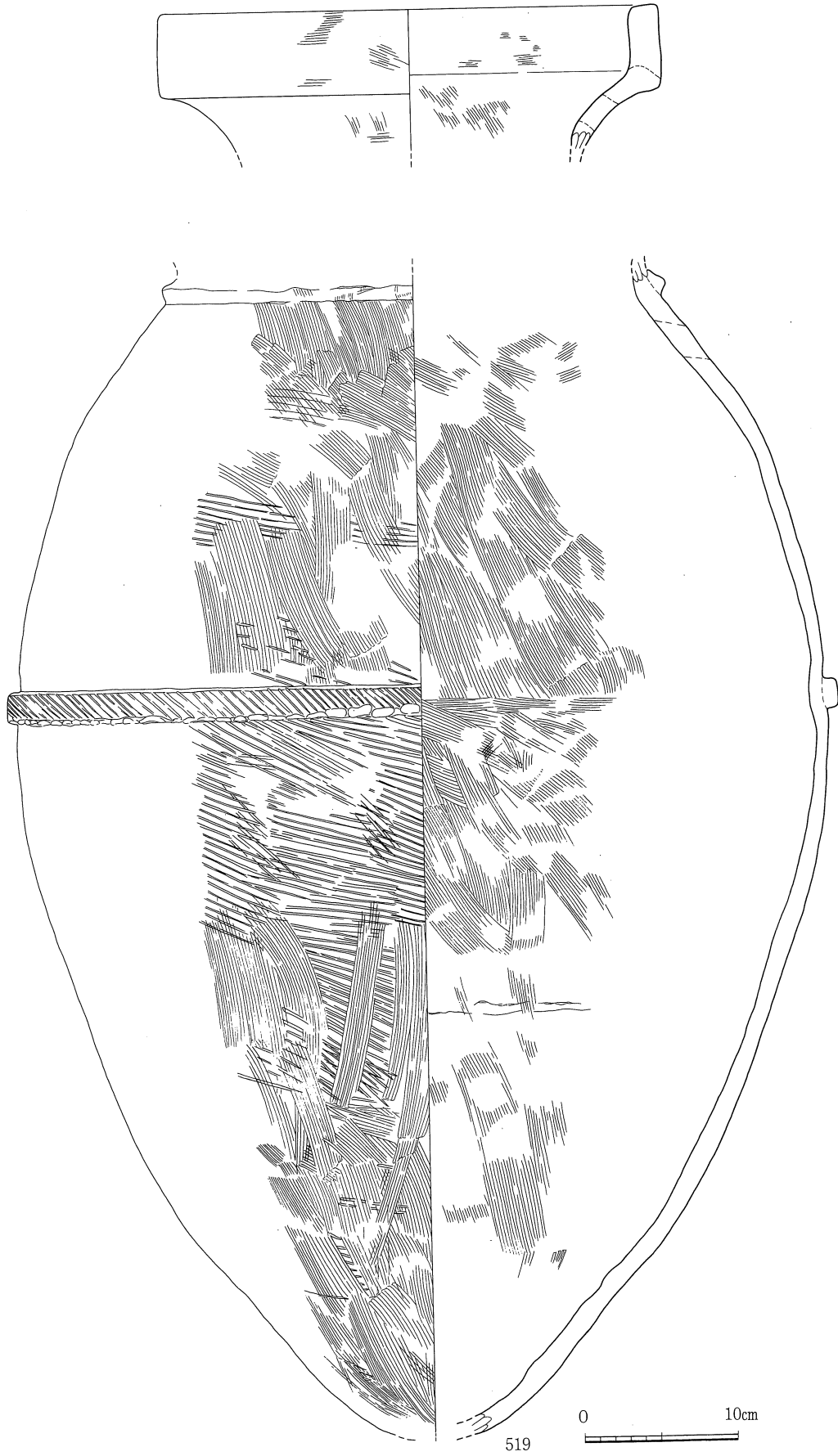
甕(壺)棺墓は掘り方の形態からみて単棺墓で、壺の埋置角は14°前後とほぼ寝せ棺状態である。出土した壺は口縁部と胴部の接合点が見つからず器高は不明である。口縁は複合口縁で胴部中央に刻み目を施した断面台形の突帯が巡る。底部は丸底と考えられる。また、胴部外面の器面調整にはタタキ痕がみられる。14号甕(壺)棺墓の時期は弥生時代後期後半頃と考える。



第 236 図 14号甕棺墓実測図 (1/10)

表 162 14号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
519	甕		32.6	角閃石 少、 白色粒子 多	橙色	良好	粘土積上げ	タタキ後ハケ	タタキ後ハケ		14号甕棺墓
			(85.7)								
			—								

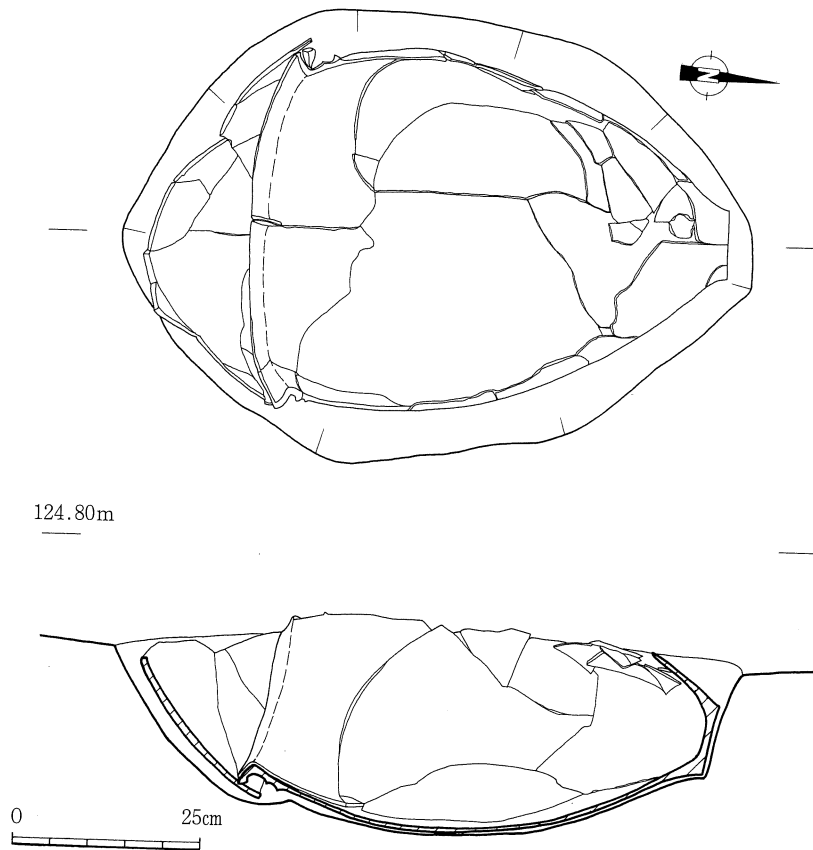


第 237 图 14 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 / 4)

15号甕棺墓 (第 238 図)

15号甕棺墓はB-5区東端からやや南寄り、墓域の東端に位置し、2m東は羽野横穴墓群の立地する急斜面である。14号甕棺墓は北西8m付近、18号土坑墓は西7m付近に構築されている。墓坑の上部は削平を受けているため、甕の上部も削平を受け消滅している。現存する墓坑掘り方の規模は東西0.58m、南北0.83m、検出面の標高は124.65m、深さは最深で24cmである。平面形態は楕円形である。墓坑の掘り込みは下甕の底部が位置する北壁部分が約80°の角度で、急傾斜に掘り込んでいる。他の壁面は約55°の比較的緩やかな傾斜でやや湾曲しながら掘り込んでいる。南壁部分は上甕を埋置するため、床面を数cm深く掘り下げていて、わずかな段差がみられる。床面は甕棺のカーブに合せ、湾曲して掘り込まれている。甕(壺)棺墓の主軸方位はS-2°-Eを示す。

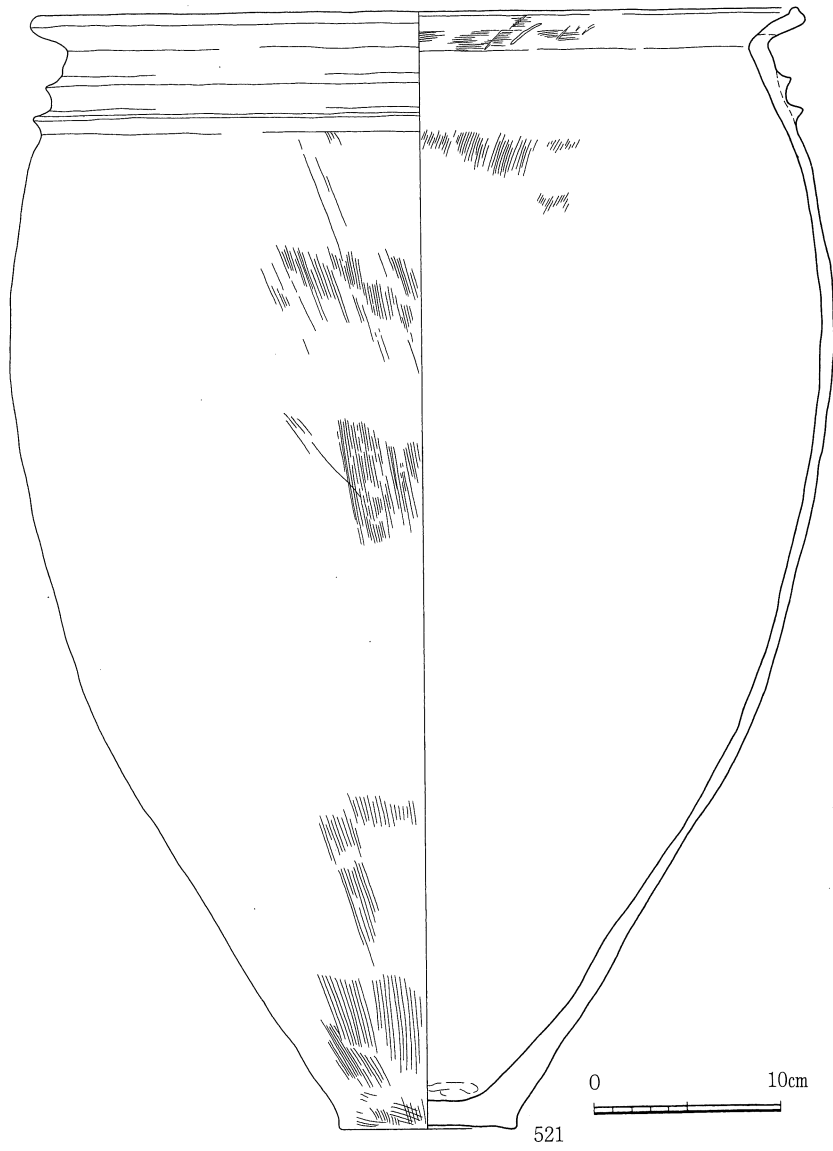
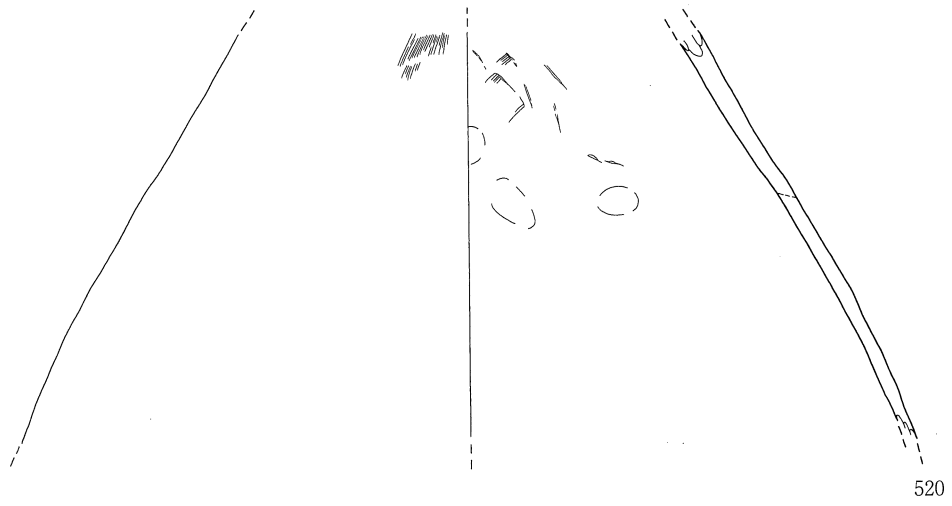
甕棺墓は壺と甕を使用した合口甕棺墓で、埋置角は12°とほぼ寝せ棺状態である。上甕は壺の転用で、胴部最大径部から下半部分を使用している。底部は削平によって消滅している。下甕は「く」の字に外反した口縁端部を跳ね上げている。底部はやや上底気味で、頸部に二条の断面三角形の突帯をもつ。15号甕棺墓の時期は弥生時代中期後半頃と考える。



第 238 図 15号甕棺墓実測図 (1/10)

表 163 15号甕棺墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高 底径					外面	内面		
520	甕	—	—	角閃石 多、 砂閃粒 少	灰白色 浅黄橙色	?	粘土積上げ	ハケ目	ハケナデ		15号甕棺墓 上甕
521	甕	(40.6)	—	角閃石 多、 石英 少、 赤色粒子 少、 白色粒子 少	灰白色	?	粘土積上げ	ハケ目	不明	すず付着	15号甕棺墓 下甕
		59.6	—								
		(9.4)	—								



第 239 图 15 号甕棺墓出土遗物实测图 (1 / 10)

## B. 古代

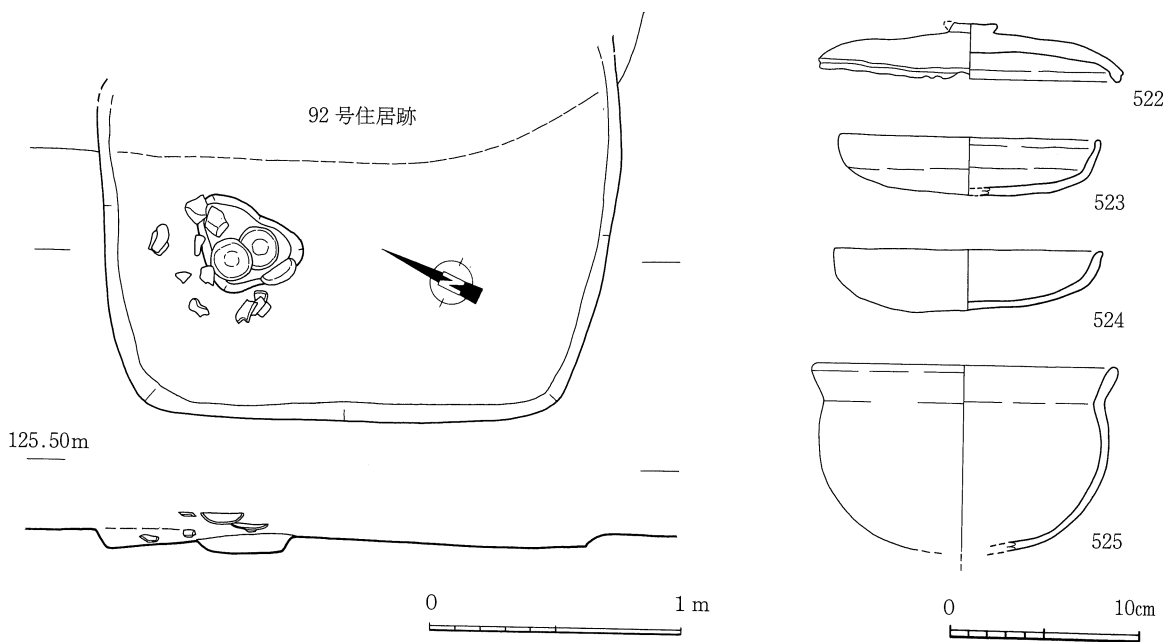
古代の遺構としては土坑2基、掘立柱建物跡9棟を検出した。

### a) 土坑

#### 61号土坑 (第240図)

61号土坑はB-4区の南東方向に位置し、92号住居跡の上に構築されている。規模は東西1.5 + α m、南北2.0 m、検出面からの深さは5~10 cmである。平面形は長方形を呈していたと思われるが、東壁は住居跡調査中の不手際で確認できなかった。主軸方位はN-24°-Wを示す。

遺物は土坑北側部分から一括して出土した。522は須恵器坏蓋で、天井部中央に断面方形の突帯状のつまみをもち、端部は故意的に打ち欠いている。523・524は土師器坏身、525は土師器碗である。出土遺物からみた土坑の時期は8世紀中頃、奈良時代と思われる。



第240図 61号土坑及び出土遺物実測図 (1/30・1/4)

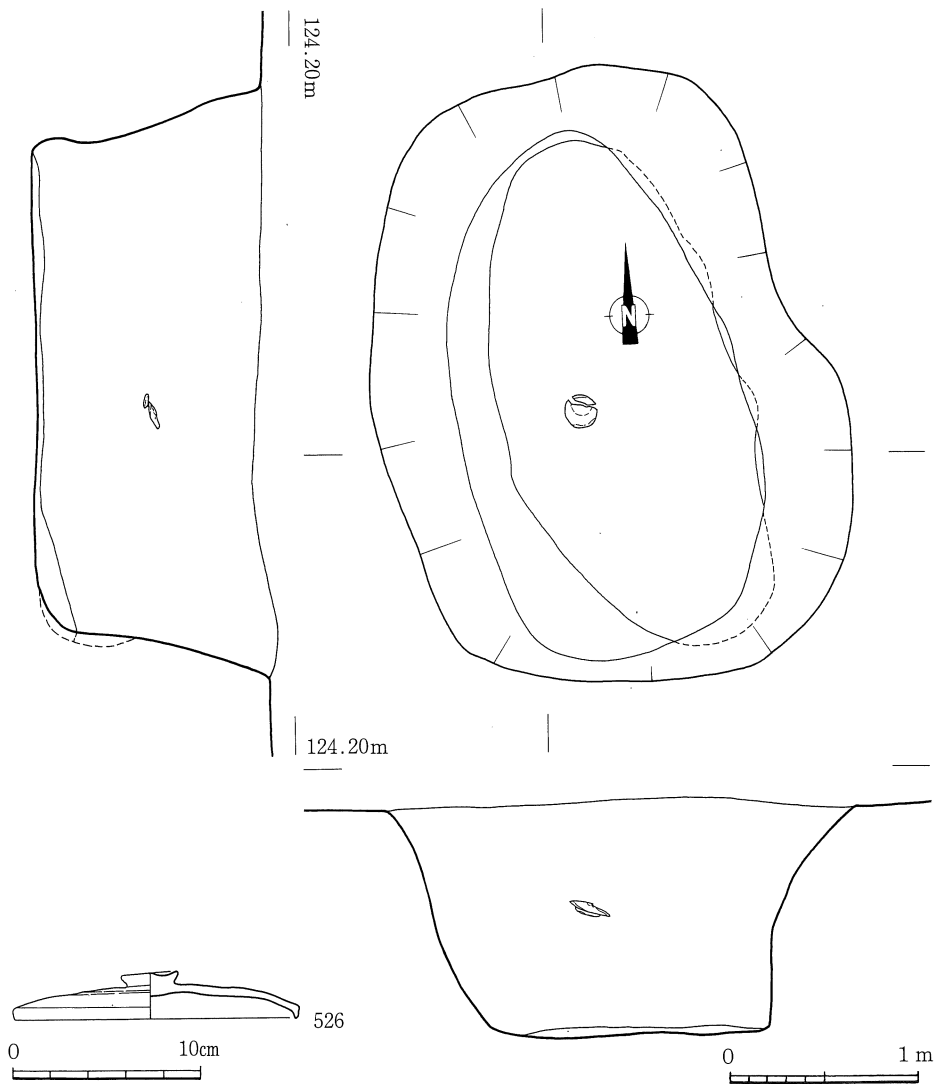
表164 61号土坑出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
522	坏蓋	16.0	2.9	角閃石、 白色細粒	灰色	良好		ナデ	ナデ		つまみ端部は 2/3欠損 (人為的に) 須恵器
		—									
		—									
523	坏身	14.0	3.1	赤褐色粒子、 雲母	橙色	良好		ナデ 一部ハケ目	ナデ		土師器
		—									
		—									
524	坏身	14.3	3.2	斜長石粒、 赤色粒子	橙色	良好		ナデ 一部ハケ目	ナデ		土師器
		—									
		—									
525	碗	(16.6)	—	砂粒 少、 一精粘土使用 赤色粒子 少	明茶褐色	やや不良 黒斑	粘土積上 げ	口縁 ヨコナ デ	口縁 ヨコナ デ		土師器
		—						ナデ	ナデ		
		—						ナデ	ナデ		

62号土坑（第241図）

62号土坑はB-2区中央からやや西側に位置する。周囲には17・20・41～43号住居跡が存在する。規模は上面で東西2.3m、南北3.2m、検出面からの深さは1.2mで、内法は1.5×2.8mである。平面形はやや歪な隅丸長方形である。壁面は中央付近で一段段差をもち、床面は比較的平坦である。主軸方位はN-3°-Eを示す。

土坑内からは多量の弥生土器小片が出土したが、この土器群は埋土中に含まれていたもので、当土坑に伴うものではない。弥生土器以外に土坑中央部の床面から50cm程度上部から須恵器坏蓋(526)の完形品1点が出土した。この土器が時期を決定するものとする。坏蓋は天井部中央に扁平な擬宝珠様つまみを付し、器高は低い。内面にはかえりがみられず、端部を内方へ屈曲させている。この土坑の時期は8世紀中頃、奈良時代と思われる。



第241図 62号土坑及び出土遺物実測図（1/40・1/4）

表165 62号土坑出土土器観察表

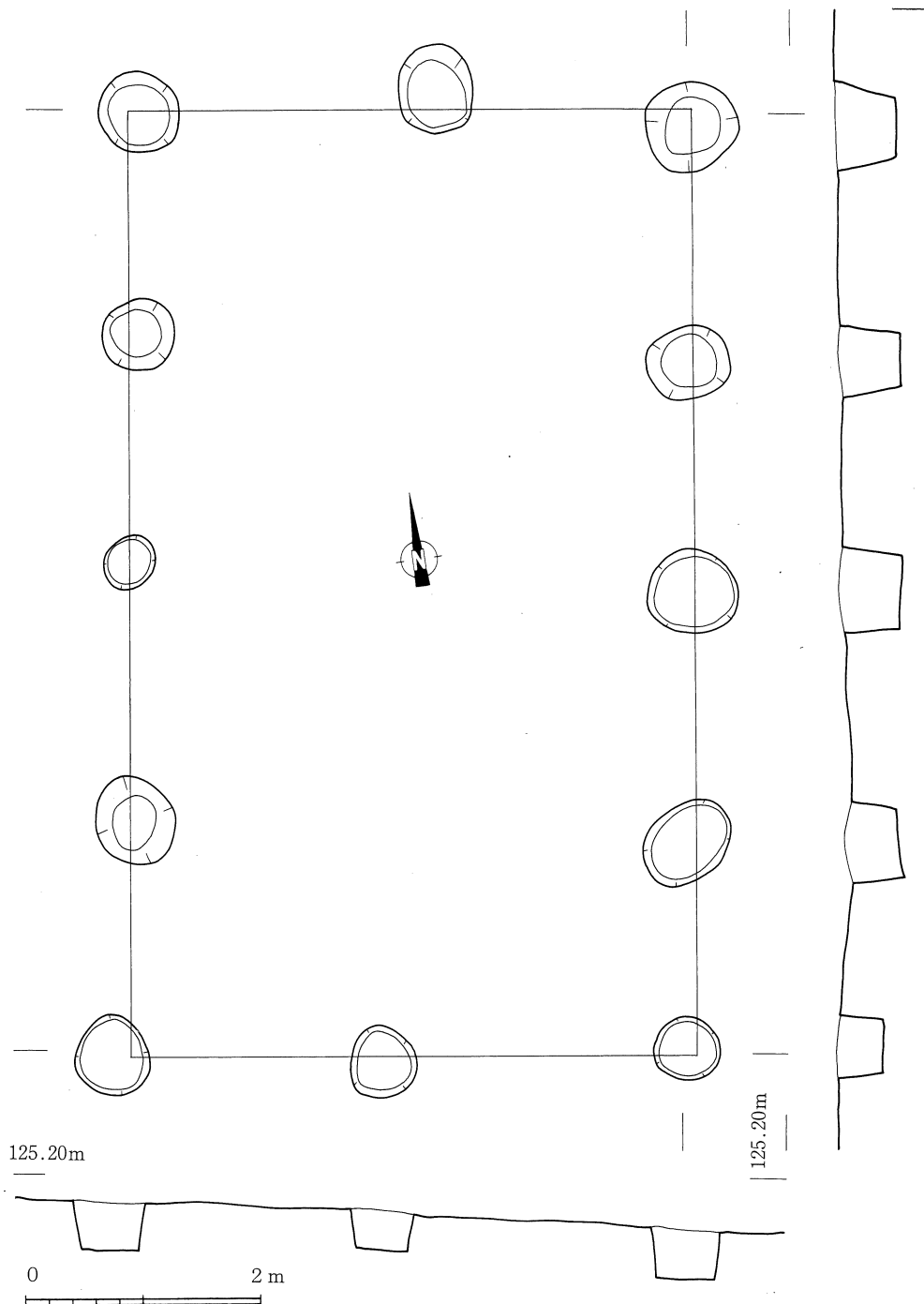
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
526	蓋		15.1	石英粒 微、 白色細粒 多	灰色	良好		回転ナデ	回転ナデ 丁寧なナデ		須恵器
			2.4								
			-								

b) 掘立柱建物跡

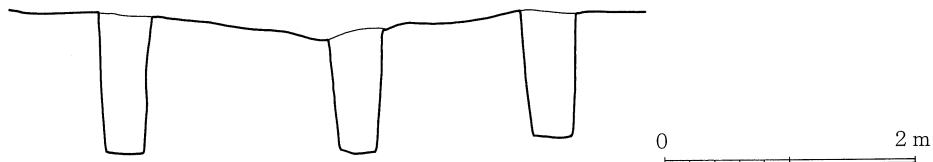
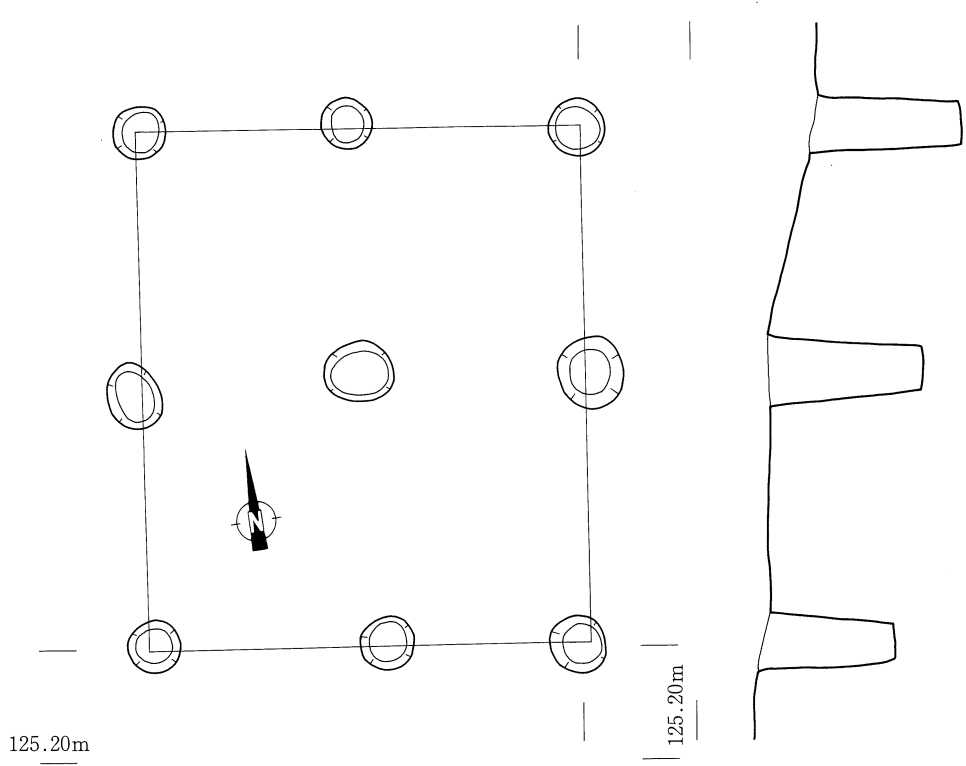
掘立柱建物跡は先述したように9棟が検出された。弥生時代の柱穴痕と比較するとやや大型であるが、調査区内では多数のやや大型の柱穴が検出されているため、他にも建物跡は数棟は存在すると思われる。数棟の建物跡の柱穴内からは須恵器坏が数点出土したが、整理の過程で不明遺物となり、図示できなかった。掘立柱建物跡の時期は、出土遺物でみるかぎりでは8世紀代・奈良時代の時期で、先述した61・62号土坑と同時期と考える。

建物1 (第242図)

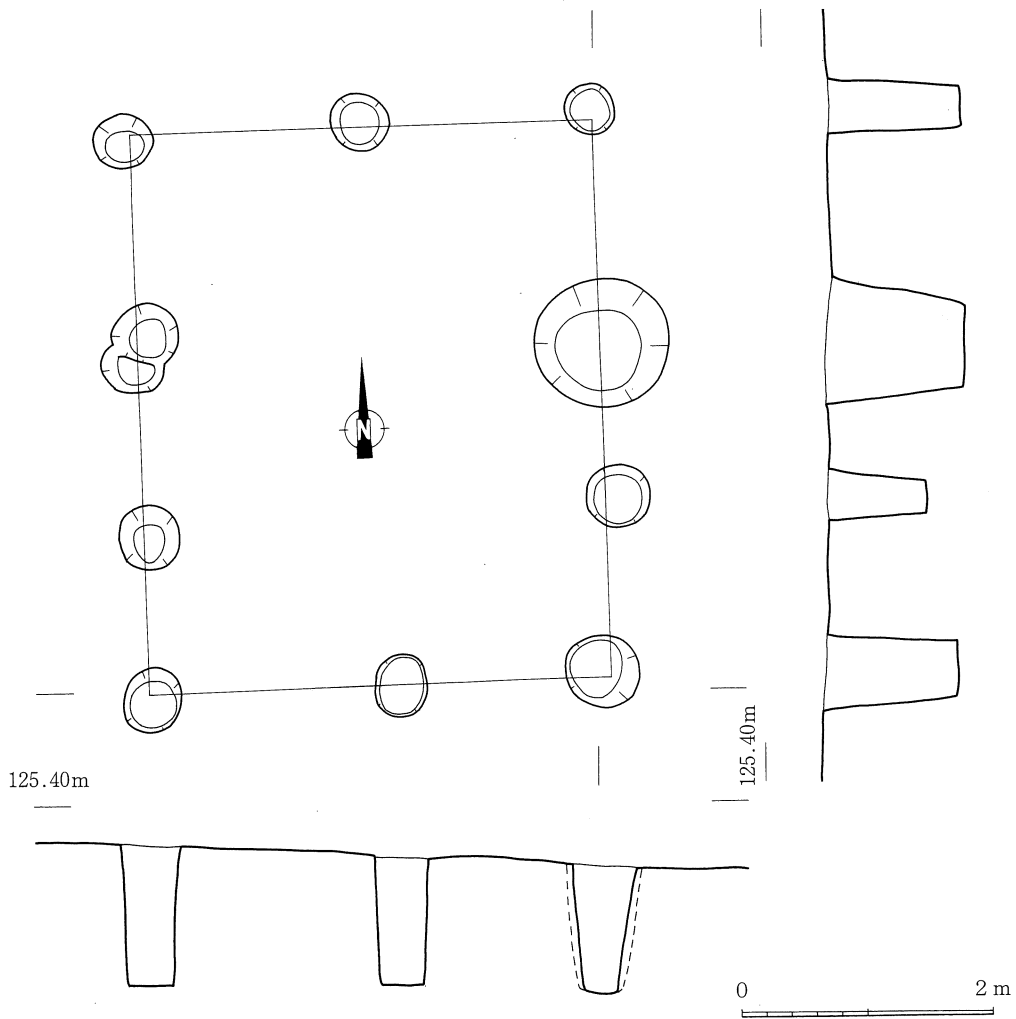
建物1はB-1区の北東端、調査区の北端に位置し、10号住居跡と1号土坑の上に構築されている。主軸をN-9°-Eにとる南北棟で、桁行4間、梁行2間の建物である。地形的には北西方向か



第242図 建物1実測図 (1/60)



第 243 图 建物 2 実測図 (1 / 60)



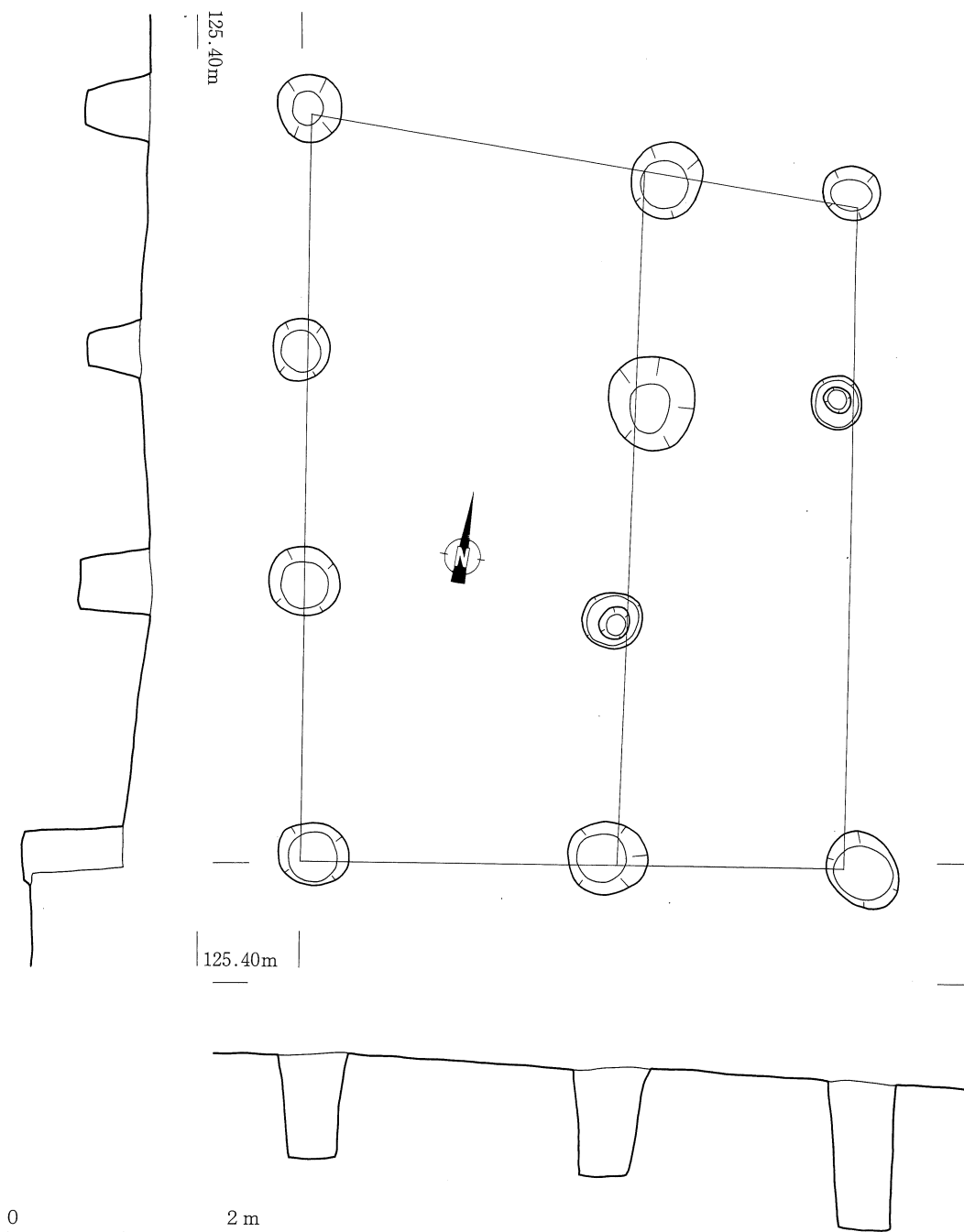
第 244 图 建物 3 実測図 (1 / 60)



ら南東方向へ緩やかに下降する。規模は桁間7.9m、梁間4.8mである。柱間は桁行で1.8～2.0m、梁行で2.6m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径50～80cm、確認面からの深さは40～50cmである。

建物2 (第243図)

建物2はB-1区の東端からやや北寄りに位置し、8・9号住居跡上に構築されている。主軸をN-8°-Eにとる総柱の2×2間の建物である。地形的には北方向から南方向へ緩やかに上昇する。規模は桁間4.1m、梁間3.5m、柱間は桁行で2.0～2.2m、梁行で1.6～1.8mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径45～55cm、確認面からの深さは50～65cmである。



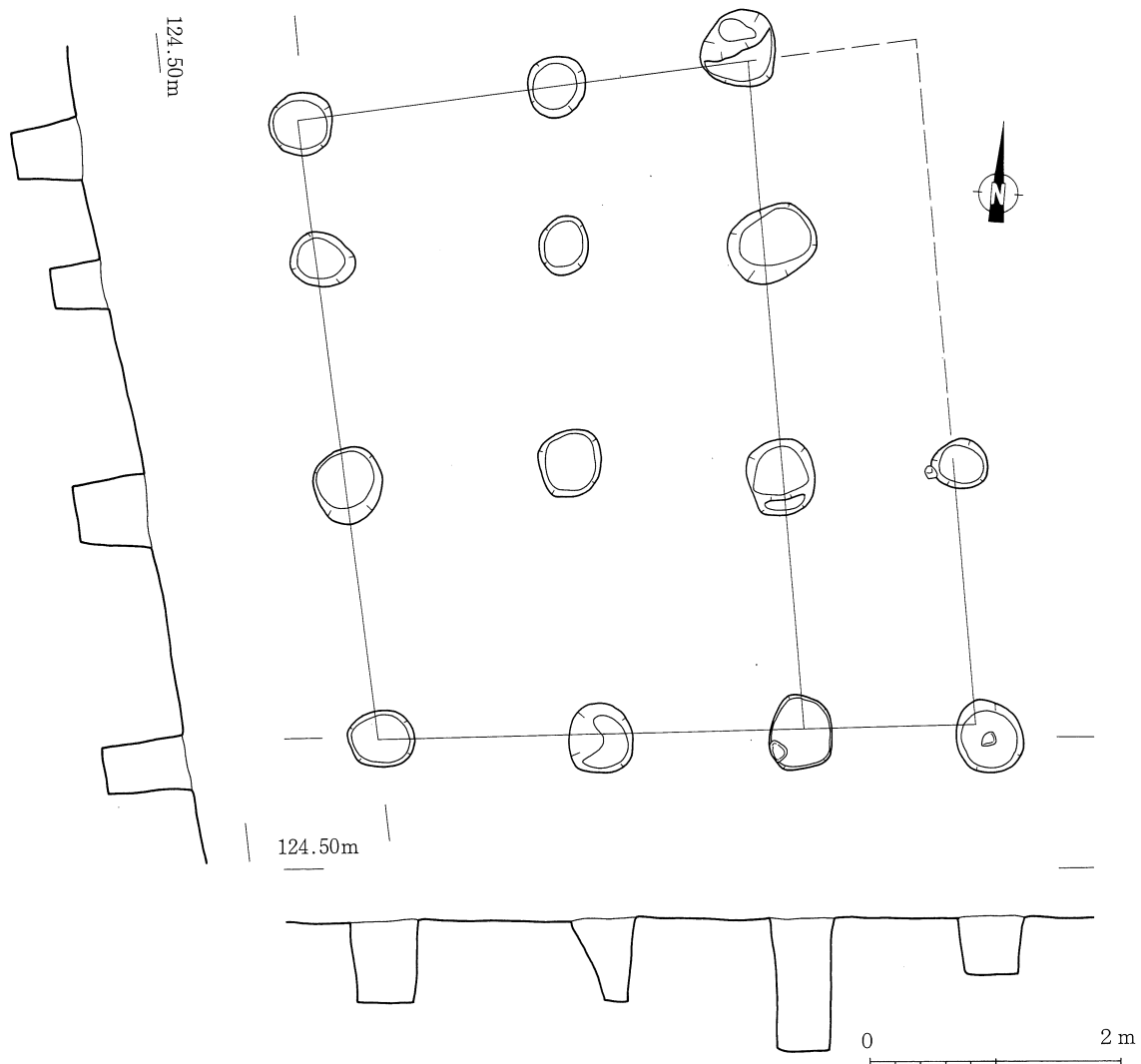
第245図 建物4実測図 (1/60)

建物3 (第244図)

建物3はB-1区の中央から南寄りに位置する。主軸をN-2°-Eにとる南北棟で、桁行3間、梁行2間の建物である。地形的には西方向がやや高い。規模は桁間4.5m、梁間3.6m、柱間は桁行で2.0~2.2m、梁行で1.7~2.0mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、東側桁の柱穴1個が攪乱により従前より大きく掘り込まれている。径は40~60cm、確認面から深さは45~55cmである。

建物4 (第245図)

建物5はC-1区の北端で、北梁部分がB-1区内に位置する。建物3は北4m付近にある。主軸をN-3°-Wにとる南北棟の建物で、東側に廂をもつ。桁行は3間、梁行は2間である。地形的には北西から南東に向かって緩やかに下降する。廂部分の柱穴1個が確認できなかった。規模は桁間の西側が6.2m、東側が5.8mで、梁間は南側が2.6m、北側が3.1m、廂間は5.6mである。柱間は桁行で1.8~2.1m、梁行で南が2.5m、北が3.0mである。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径は50~70cm、確認面から深さは30~55cmである。東側桁の柱穴1個と廂の柱穴1個から柱痕の掘り方が確認された。柱痕の径は桁の柱穴が30cmで、廂の柱穴が20cmである。



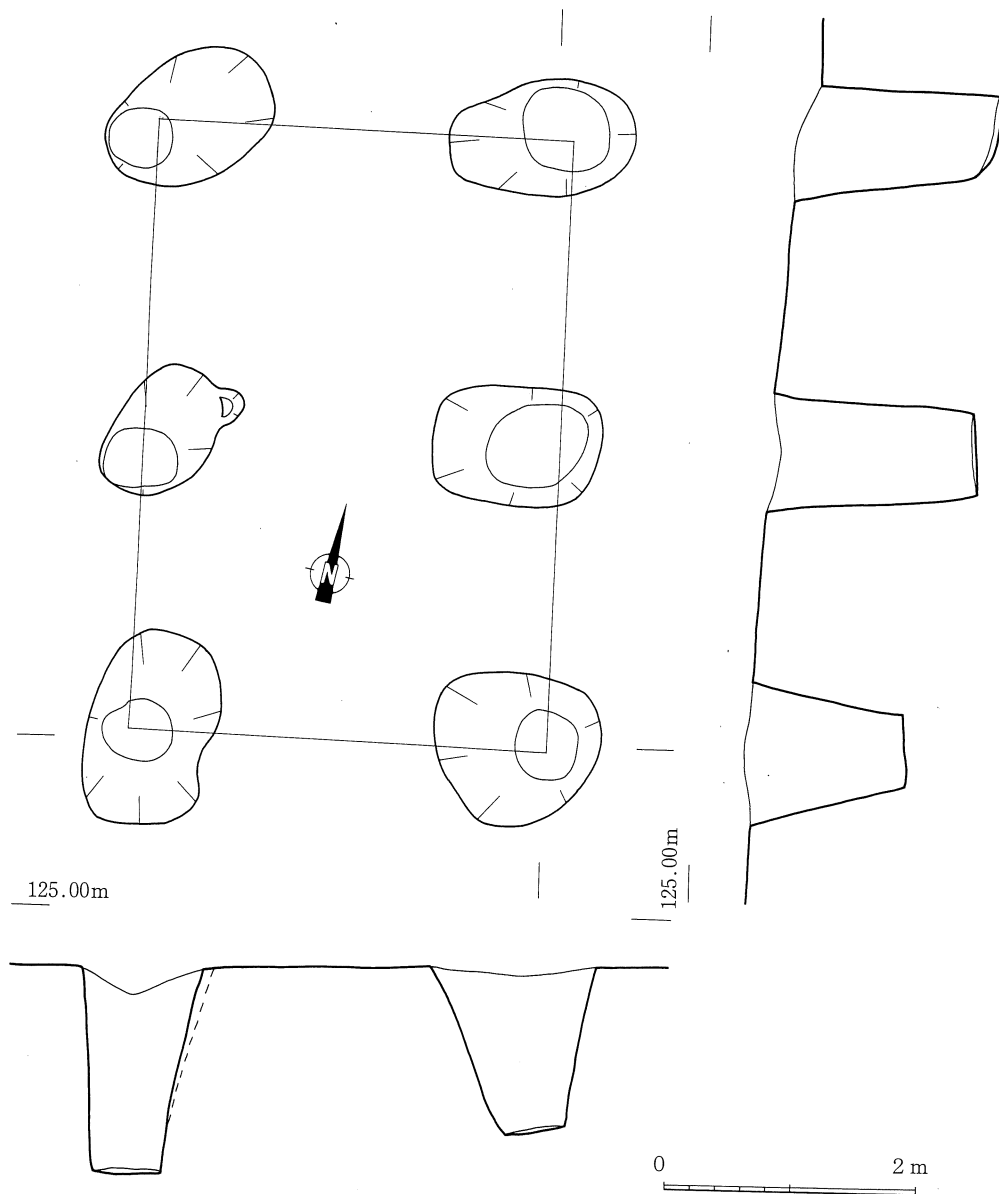
第246図 建物5実測図 (1/60)

建物5 (第246図)

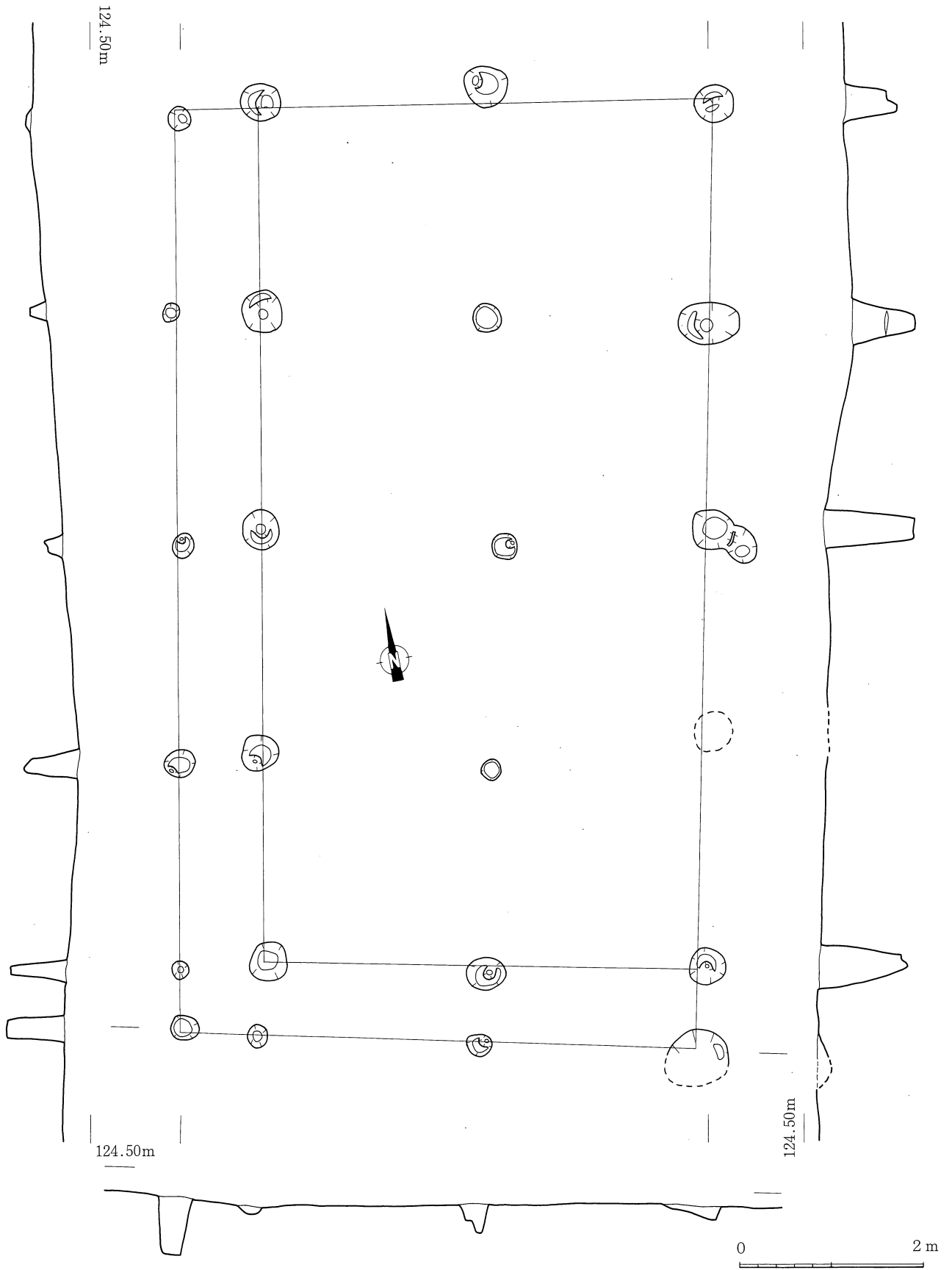
建物5はB-2区の北東端に近い場所に位置し、31・33・34号住居跡上に構築されている。主軸をN-3°-Wにとる南北棟の総柱建物で、南東側に軒跡と思われる柱穴2個が確認された。桁行は3間、梁行は2間である。地形的には北側が低い。規模は桁間の西側が5.0m、東側が5.5mで、梁間は3.5mである。柱間は桁行で北側柱穴間が1.2m前後、南側柱穴間が1.8~2.0mである。梁後の柱間は1.8m前後である。軒間は2.2mであった。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径は40~60cm、確認面からの深さは20~50cmである。

建物6 (第247図)

建物6はB-2区東端のやや南側に位置し、44号住居跡上に構築されている。主軸をN-12°-Wにとる南北棟の建物である。桁行は2間、梁行は1間である。地形的には南側から北側に向けて緩やかに下降する地形である。規模は桁間が4.9m、梁間は3.3mである。柱間は桁行で2.4m前後、梁行で3.4mである。柱穴は他の掘立柱建物跡と比較するとかなり大きく、柱穴掘り方は楕円形か隅丸長方形である。径は0.9×1.5m前後、確認面からの深さは70~90cmである。



第247図 建物6実測図 (1/60)



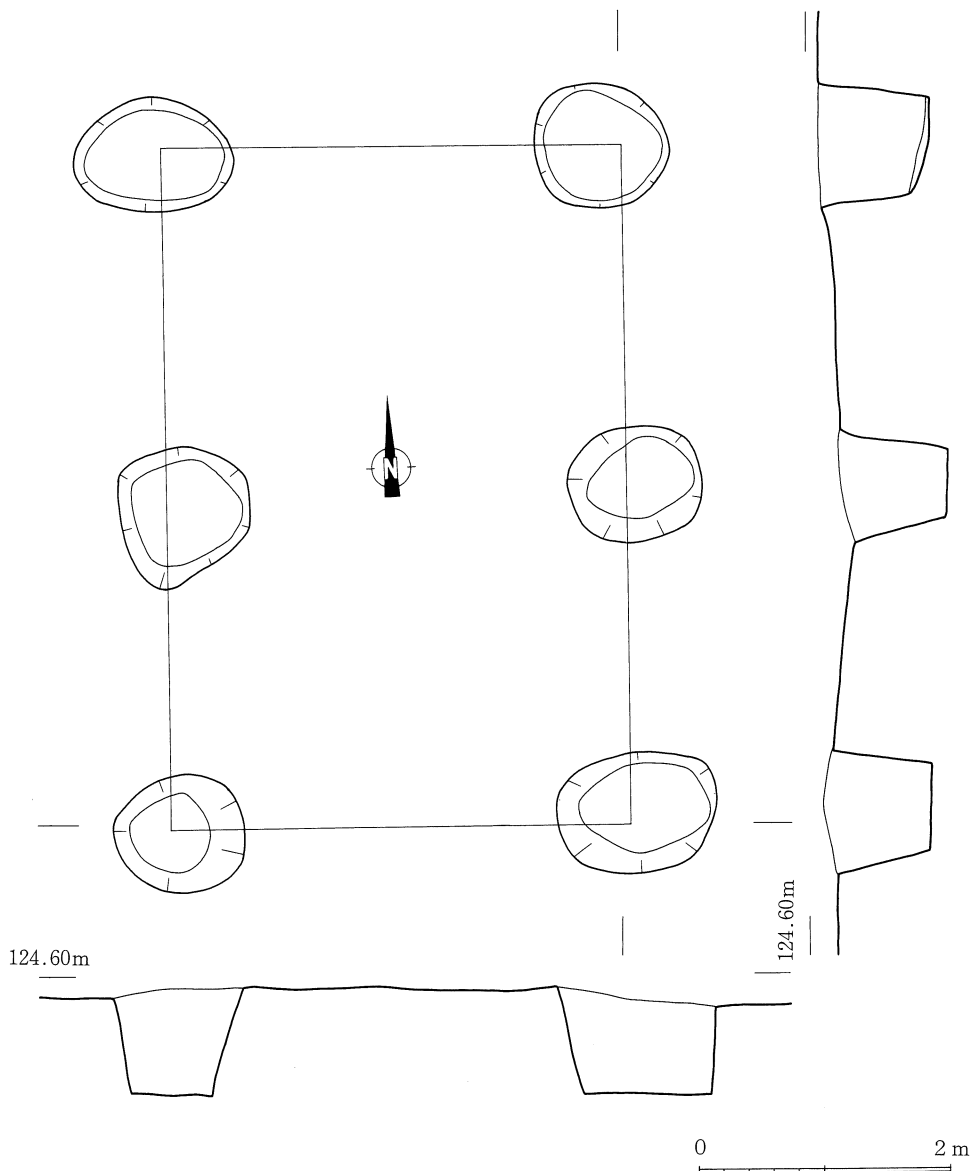
第 248 图 建物 7 実測図 (1 / 60)

建物7 (第248図)

建物7はB-3区の北東方向に位置し、柱穴の一部が53号住居跡上にかかっている。主軸をN-12°-Eにとる南北棟の総柱建物で、南と西側にそれぞれ廂をもつ。桁行は4間、梁行は2間である。地形的には南側から北側に向けて緩やかに下降する地形である。規模は桁間が9.2m、梁間が4.9m、廂間は南側で5.8m、西側で9.8mである。柱間は桁行で2.3~2.5m、梁行が2.4m前後である。廂間は2.1~2.5mで、南西コーナー部分だけが0.7m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、総柱中央部分と廂部分の柱穴の径は他と比較するとやや小型である。径は建物部分が40~50cm、中央と廂部分が20~30cmである。確認面からの深さは建物部分が30~60cm、中央と廂部分が5~20cmと、主要柱穴以外は浅い掘り込みとなっている。

建物8 (第249図)

建物8はB-3区の中央からやや南側に位置し、柱穴の一部が61号住居跡上にかかっている。主軸をN-3°-Eにとる南北棟の建物である。桁行は2間、梁行は1間である。地形的には北側がやや高い。規模は桁間が5.4m、梁間は3.7mである。柱間は桁行で2.7m前後、梁行で3.7mである。

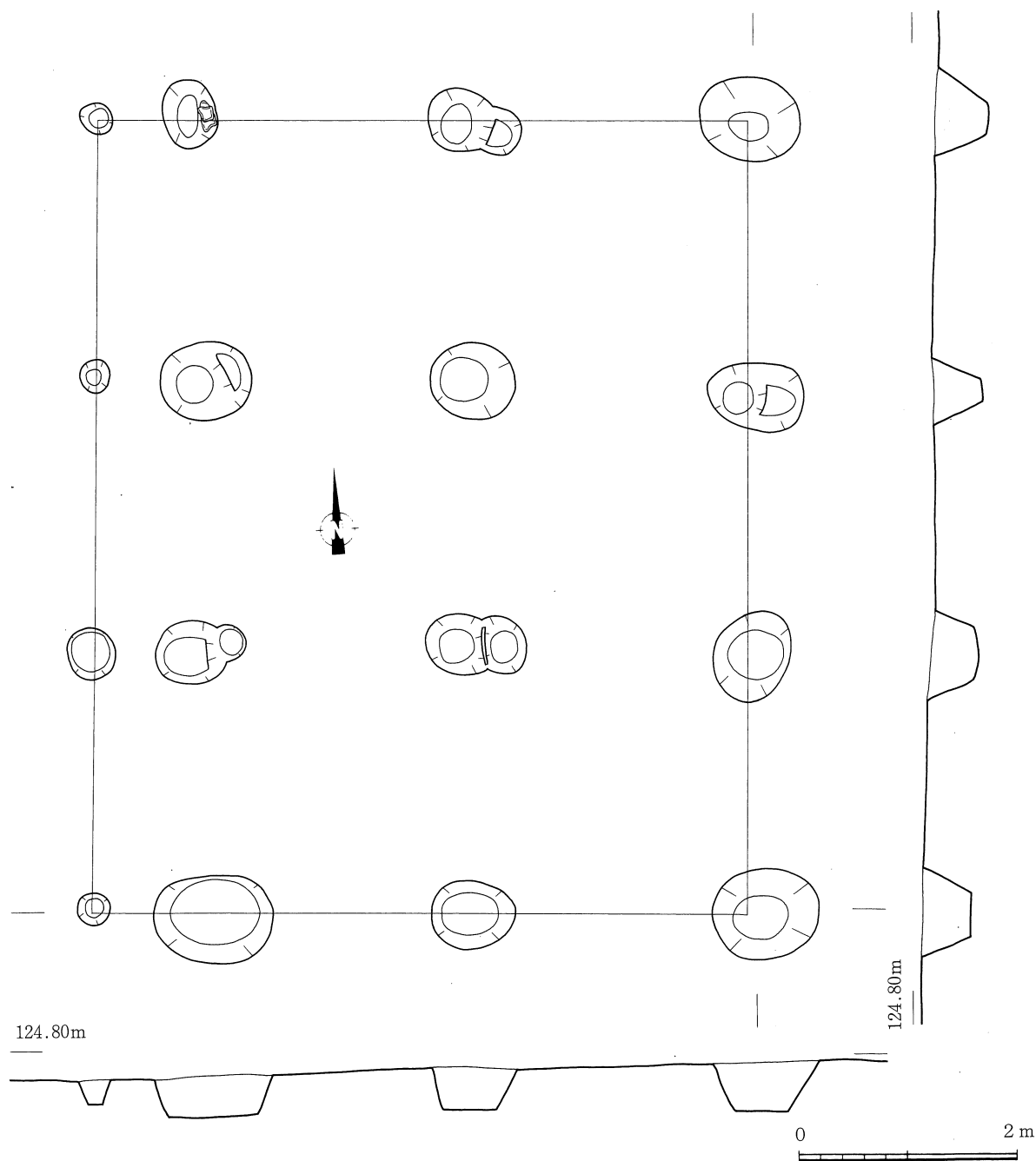


第249図 建物8実測図 (1/60)

柱穴は他の掘立柱建物跡より大きく、柱穴掘り方は円形である。径は1.0～1.2m、確認面からの深さは40～50cmである。西側に位置する3個の柱穴からは土層観察の結果、柱痕の痕跡が認められた。柱痕の径はいずれも径20～30cmと比較的大型の柱を使用していたことが確認できた。

建物9 (第250図)

建物9はB-4区の北西端に位置し、柱穴の一部が77・78号住居跡上にかかっている。主軸をN-3°-Eにとる南北棟の総柱建物で、西側に廂をもつ。桁行は3間、梁行は2間である。地形的にはほぼ平坦である。規模は桁間が7.3m、梁間が5.1m、廂間は7.2mである。柱間は桁行で2.5m、梁行が2.5～2.7mである。廂間は2.5m前後である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径は建物部分が60～90cm、廂部分が30cm前後である。確認面からの深さは建物部分が30～50cm、廂部分が20～30cmである。



第250図 建物9実測図 (1/60)

### C. 中世

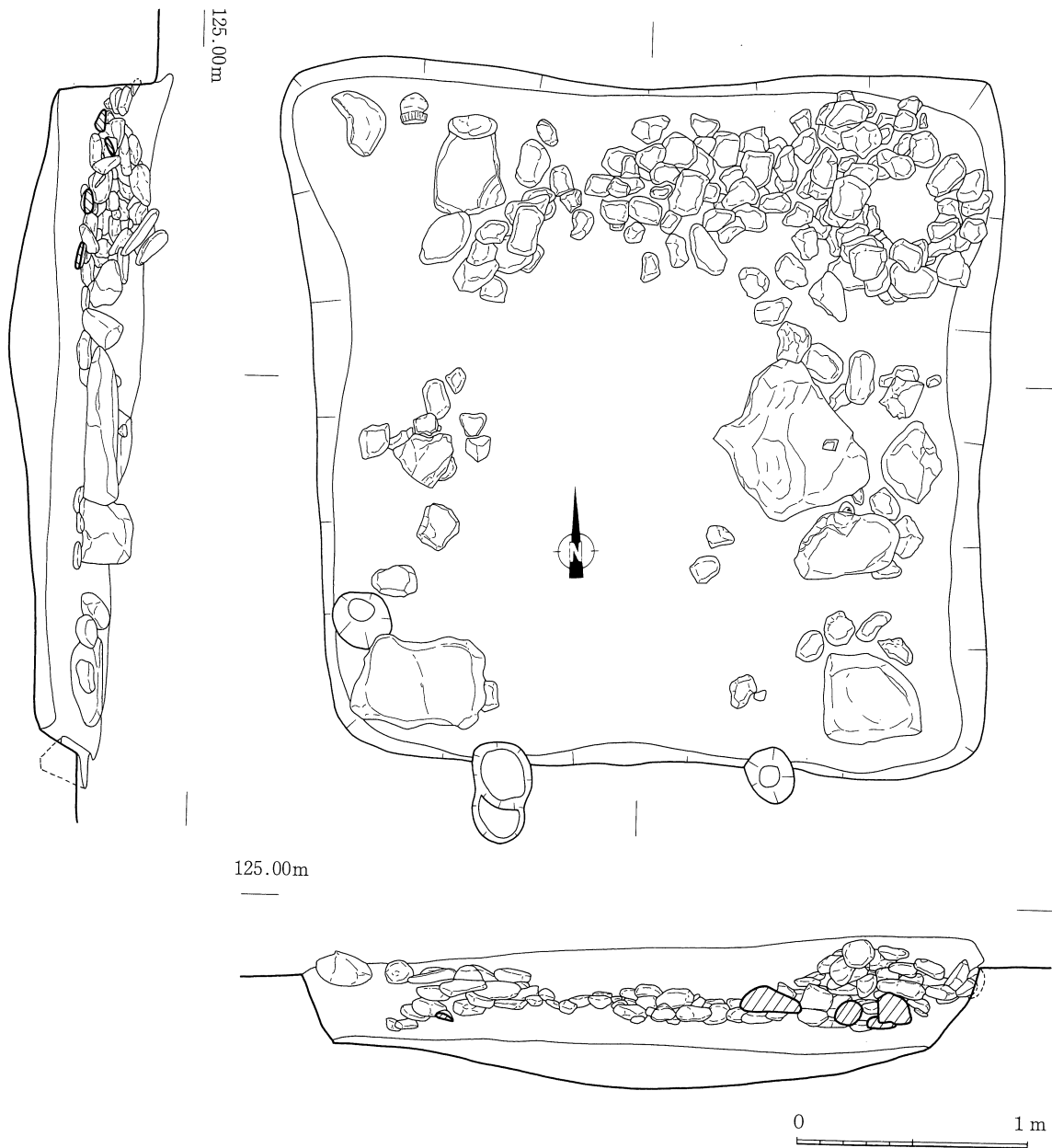
中世遺構としては土坑 2 基、墓 1 基を検出、調査した。

#### a) 土坑

##### 71 号土坑 (第 251 図)

71 号土坑は B-4 区中央からやや西、80 号住居跡の東 1.5m 付近に位置する。規模は東西 2.9m、南北 2.9m 前後、検出面からの深さは 20 ~ 60cm で、中央部分がレンズ状に窪んでいる。平面形は方形で、主軸方位はほぼ磁北である。土坑からは、南西コーナーと東壁周辺で径 50cm 前後の大型角礫数個と、北壁側で径 20cm 前後の礫数 10 個が出土した。これらの礫群は床面から 10cm 前後浮いているため土坑廃棄後に投げ込まれたと思われる。床面からは柱穴等の施設は検出されなかった。

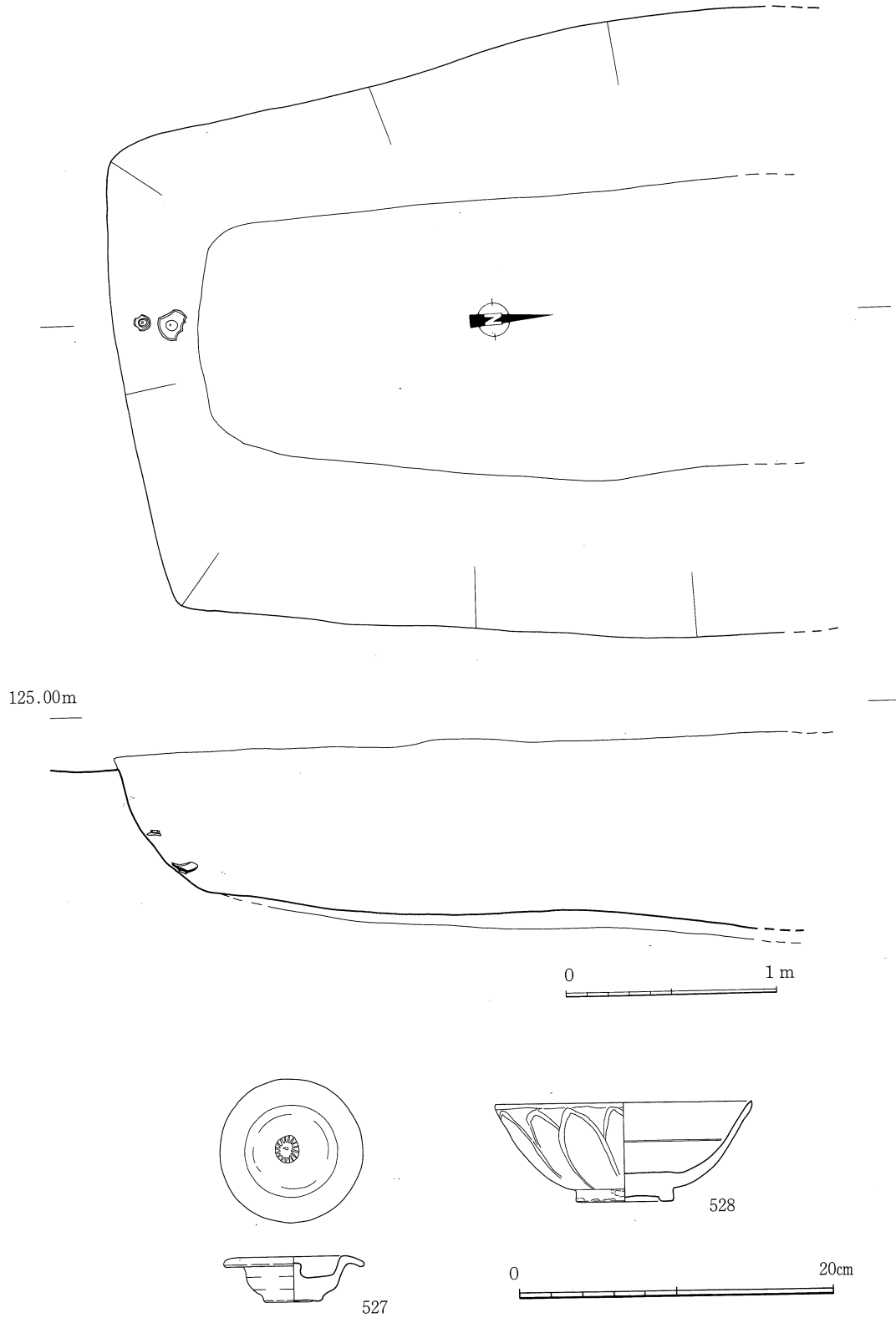
埋土中からは多量の弥生土器小破片が出土したが、土坑に伴うものではない。土器片以外には五輪塔の空輪部が出土している。この空輪部からみて当土坑の時期は中世と考える。



第 251 図 71 号土坑実測図 (1 / 30)

72号土坑（第252図）

72号土坑はB-5区中央からやや北側、11号甕棺墓の西1.0m付近に位置する。調査区の東端にあたり、数mで山田原台地東側斜面である。北側部分は後世の水溜めのため破壊されている。規模は東西2.6m、南北 $2.9 + \alpha$ m、検出面からの深さは80cm前後である。平面形は長方形で、主軸方位はほぼ磁北である。



第252図 72号土坑及び出土遺物実測図（1/30・1/4）



遺物は南側壁面上から関西系陶器の土瓶の蓋(527)と、龍泉窯系青磁碗(528)が出土した。青磁碗は外面に鏝を持たない蓮弁を有する。太宰府編年でI-5類に属するもので、12世紀中頃以降と考える。

表 166 72号土坑出土土器観察表

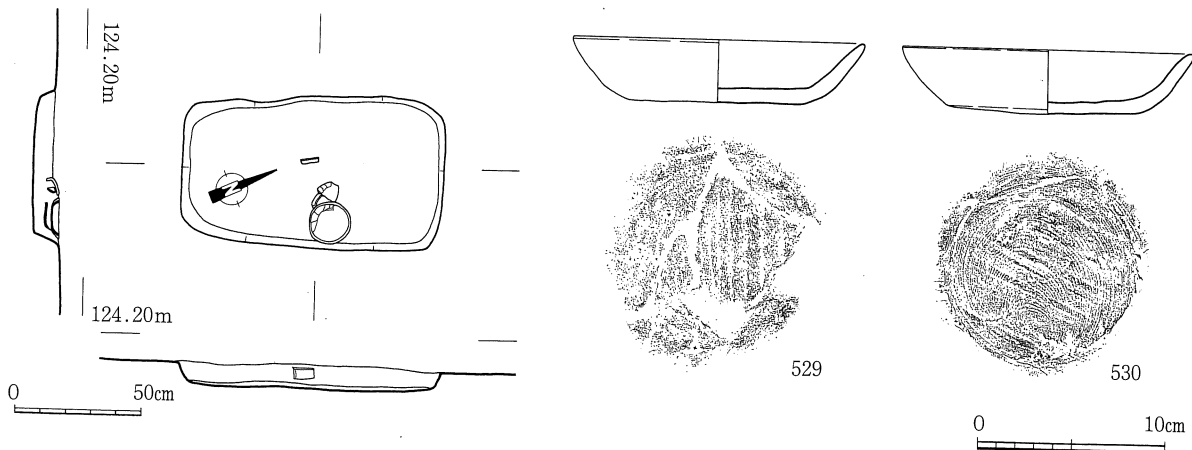
番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
527	蓋		9.0	砂粒少 -精粘土使用	黒褐色	良好	ロクロ成形 回転糸切り	鉄釉			
			2.85								
			3.7								
528	碗		16.4	灰白色 釉薬 オリーブ黄色							龍泉窯系 蓮文弁
			6.3								
			6.1								

b) 中世墓

31号墓 (第253図)

31号墓は土坑墓でB-2区中央に位置する。周囲を17・29・39・42号住居跡に囲まれている。規模は東西0.6m、南北1.04mで、内法は0.55×1.0mである。検出面での標高は124.1mで、土坑墓の深さは10cmである。長軸主軸方位はN-23°-Eを示す。

墓坑内からは土師器坏2点(529・530)と、5×7cm・厚さ1~2前後の青銅製の帯飾りと思われる青銅器1点が出土したが、残りが非常に悪く、小破片でしか取り上げられなかった。土師器坏は2点とも底部糸切りである。出土遺物からみた31号墓の時期は12世紀代と思われる。



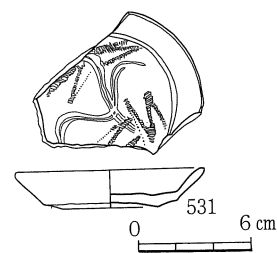
第 253 図 31号墓及び出土遺物実測図 (1/30・1/4)

表 167 31号墓出土土器観察表

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
529	坏		15.5	赤褐色 多量、 角閃石、 白色粒子 少	浅黄橙色	良好		ナデ 回転糸切り	ナデ		
			3.5								
			10.6								
530	坏		15.6	角閃石、 赤褐色	橙色	良好		ナデ	ナデ		板状圧痕あり
			3.3								
			9.0								

c) 中世遺物 (第 254 図)

531 の同安窯系青磁皿は 7 号土坑上に堆積している包含層と考  
える層から出土した。外面底部は施釉後、釉を掻き取っている。  
内面には画花文と櫛目を施している。外面は無文である。口径  
10.1cm、器高 2.0cm で胎土は灰白色、釉薬は黄色の強い飴色ガラ  
ス質である。



第 254 図 中世遺物実測図(1/4)

表 168 中世土器観察

番号	器種	口径		胎土	色調	焼成	成形	調整		使用痕	備考
		法量	器高					外面	内面		
531	皿		10.1		灰白色 釉色 灰オリーブ色						同安窯系
			5.1								
			2.0								

D. 一括遺物

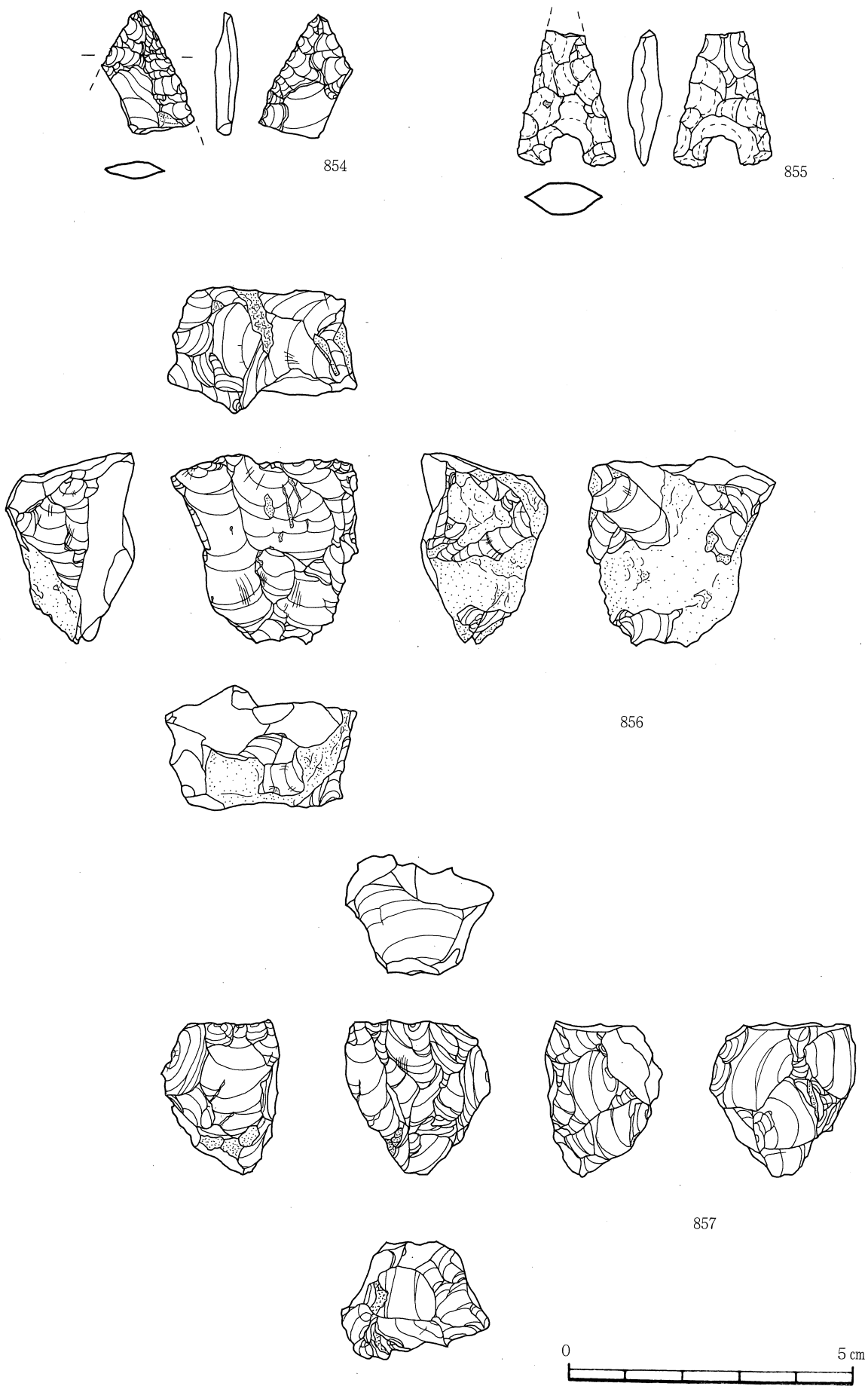
後追遺跡では遺構検出作業中に多量の一括遺物が出土している。また、遺構内からは明らかに時  
期差の異なる遺物の混入をみたり、埋土中から遺構には伴わない遺物も数多く出土している。遺物  
の時期は旧石器時代から中世の磁器まで幅広く出土している。これらの遺物を一括して図示する。

表 169 石器計測表

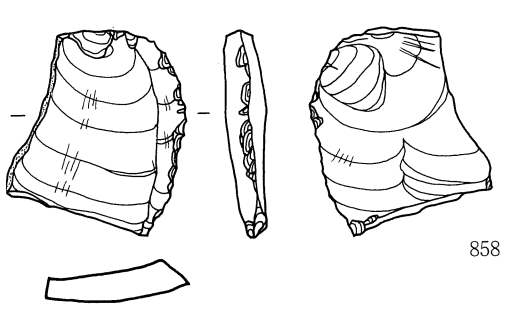
番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
854	石鏃	黒曜石	22	13	3	1.1	脚部欠損
855	石鏃	黒色緻密安山岩	24	16	6	1.9	先端欠損
856	石核	黒曜石	33	33	23	21.2	
857	石核	黒曜石	27	26	20	12.8	
858	サイドスレイパー	黒曜石	27	24	6	3.0	欠損部分あり
859	サイドスレイパー	黒曜石	45	19	8	5.9	欠損部分あり
860	スクレイパー	黒曜石	37	21	5	3.4	
861	サイドスレイパー	黒曜石	47	29	11	9.7	
862	スクレイパー	黒曜石	35	15	5	2.5	
863	エンドスレイパー	黒曜石	32	30	12	6.3	
864	スクレイパー	黒曜石	20	22	15	5.8	
865	スクレイパー	サヌカイト	75	68	19	88.6	
866	剥片石器	黒曜石	21	21	8	2.2	使用痕剥片
867	剥片石器	黒曜石	22	20	5	1.0	使用痕剥片
868	剥片石器	黒曜石	26	14	3	1.0	使用痕剥片
869	スクレイパー	黒曜石	19	23	8	3.8	
870	剥片石器	黒曜石	34	16	6	2.8	
871	剥片石器	黒曜石	28	30	7	4.8	二次加工剥片
872	剥片石器	黒曜石	33	19	8	3.3	二次加工剥片
873	剥片石器	黒曜石	26	24	7	2.8	二次加工剥片
874	剥片石器	黒曜石	36	25	9	4.8	二次加工剥片
875	スクレイパー	黒曜石	24	29	9	5.3	
876	スクレイパー	黒曜石	31	31	7	4.4	

表 170 石斧計測表

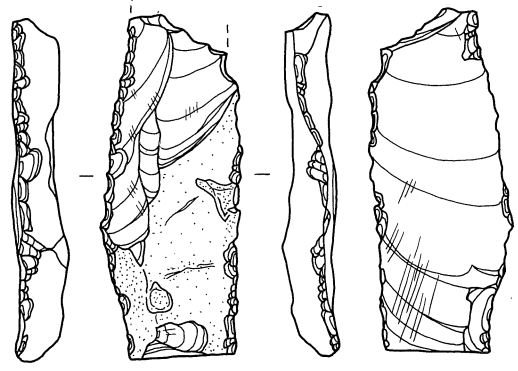
番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
825	磨製石斧	緑泥片岩	(61)	(42)	14	44.8	
826	磨製石斧	結晶片岩	(111)	46	23	194.0	
827	磨製石斧	頁岩質砂岩	(59)	67	38	197.9	
828	扁平打製石斧	輝石安山岩	76	78	15	104.0	
829	磨製石斧	砂岩	(67)	(75)	44	329.3	
830	扁平打製石斧	結晶片岩	105	75	20	213.4	
831	扁平打製石斧	輝石安山岩	128	71	19	201.3	
832	扁平打製石斧	輝石安山岩	112	99	19	233.6	
833	扁平打製石斧	輝石安山岩	125	60	15	114.2	
834	扁平打製石斧	輝石安山岩	105	87	28	314.2	
835	扁平打製石斧	輝石安山岩	143	68	20	210.3	



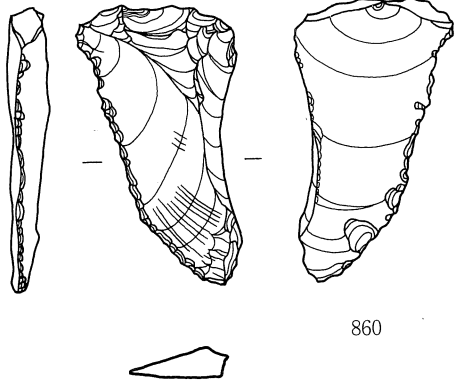
第 255 图 石器实测图 1 (实大)



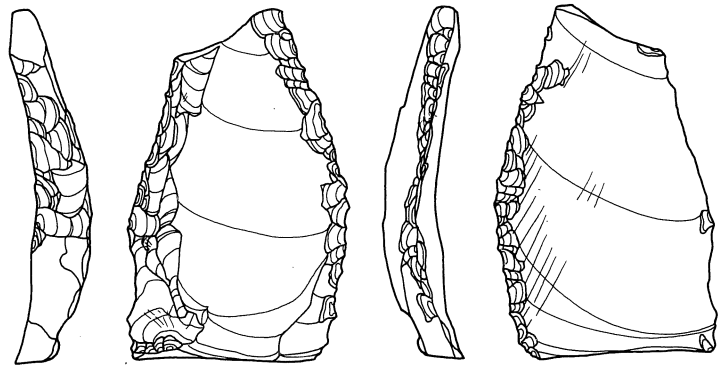
858



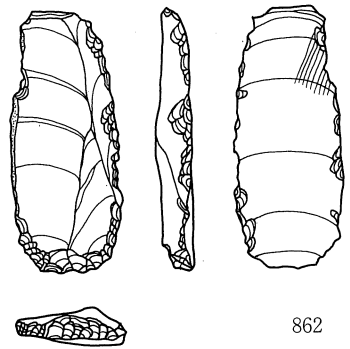
859



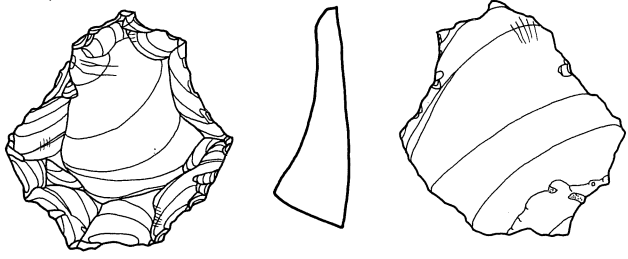
860



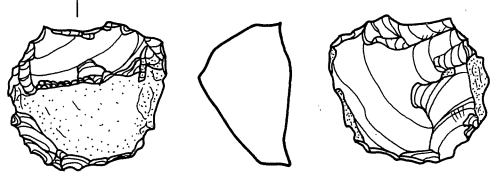
861



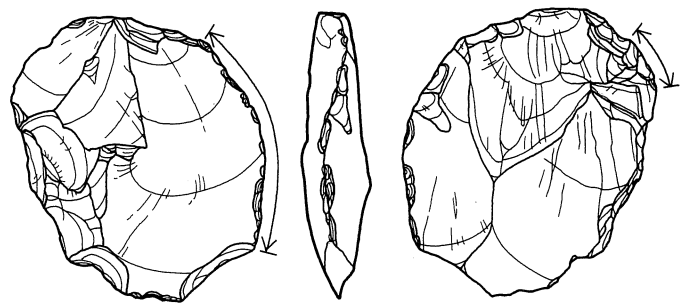
862



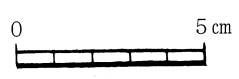
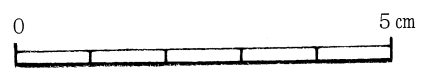
863



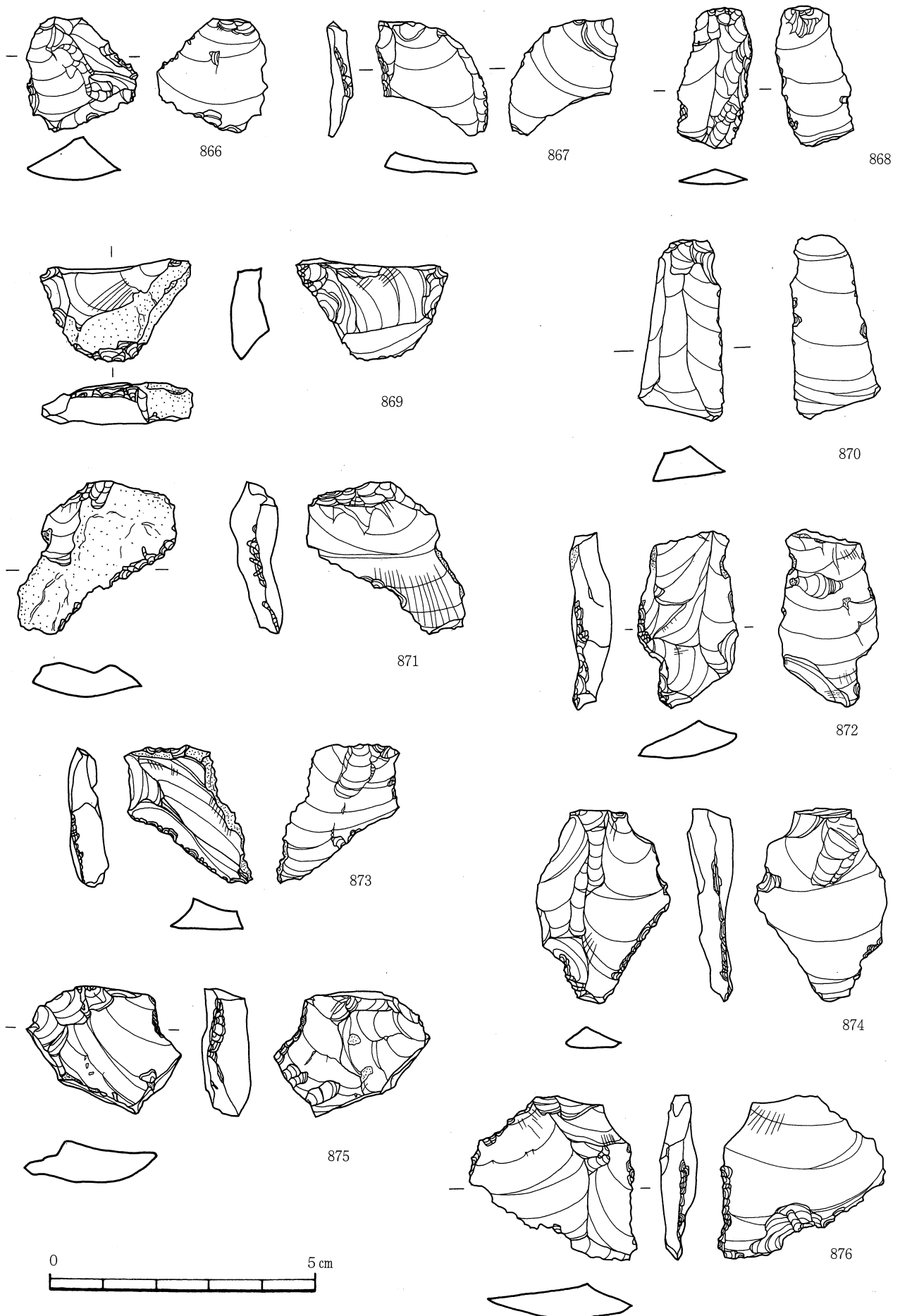
864



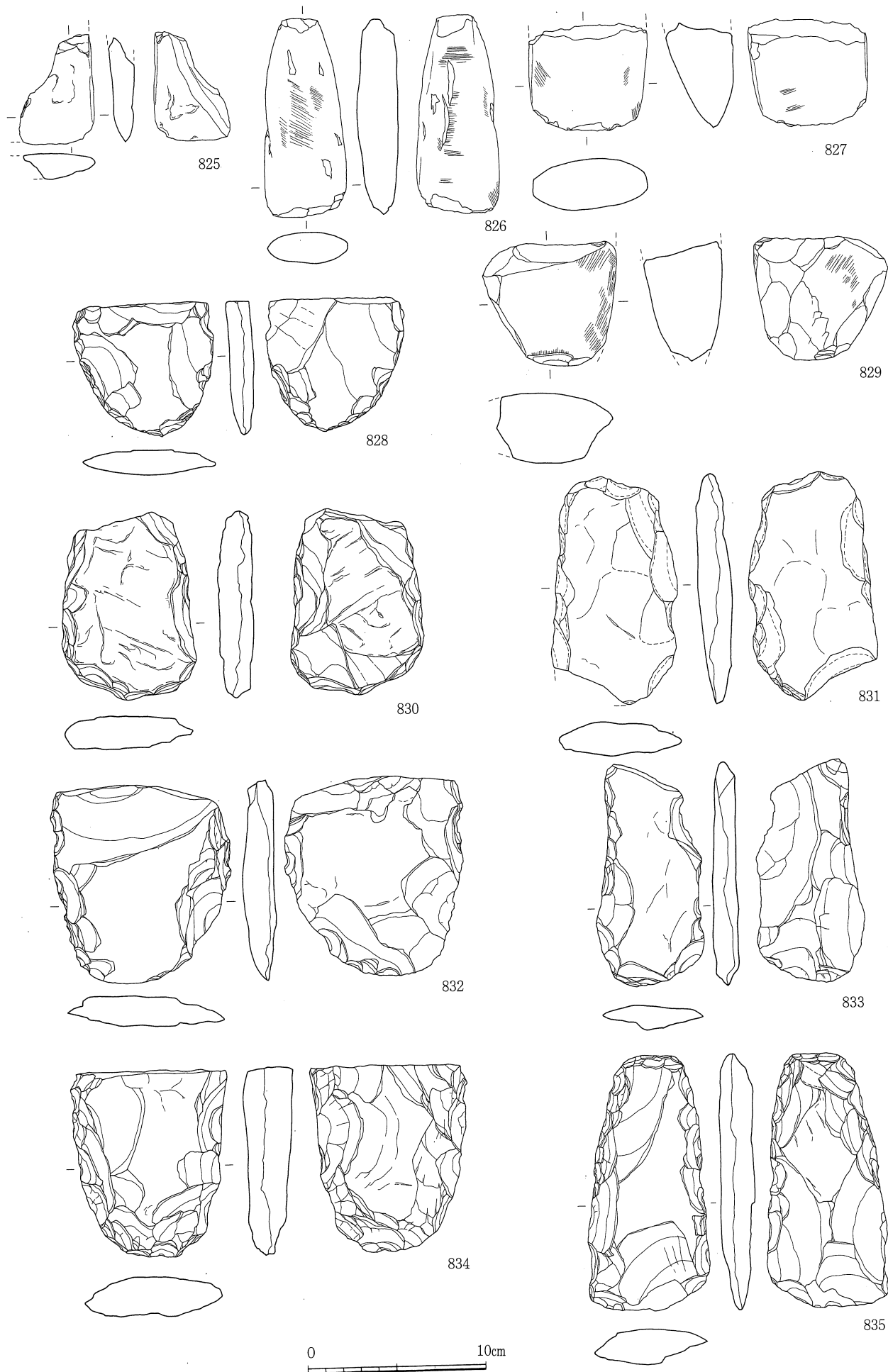
865



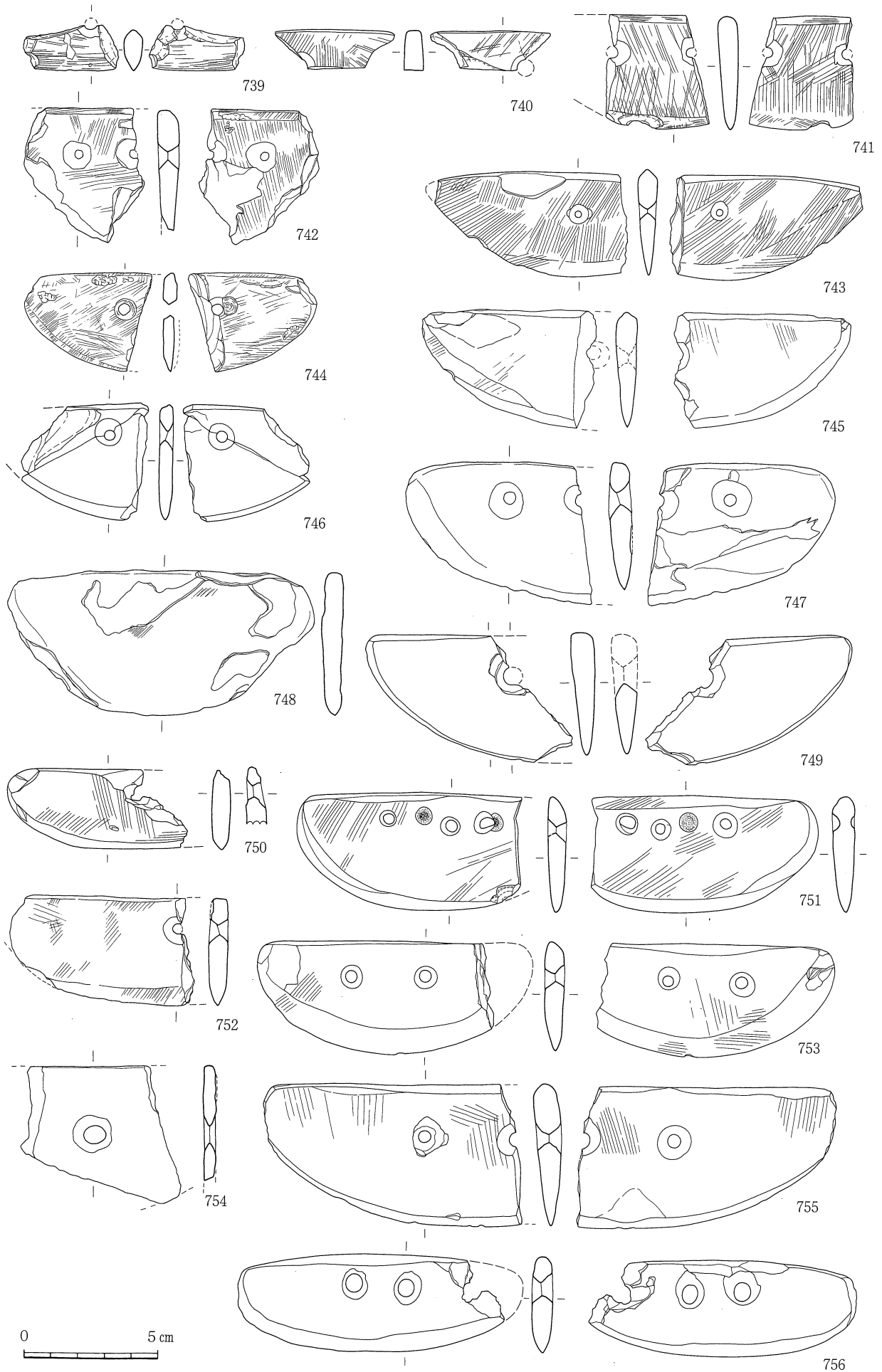
第 256 图 石器实测图 2 (实大 · 1/2)



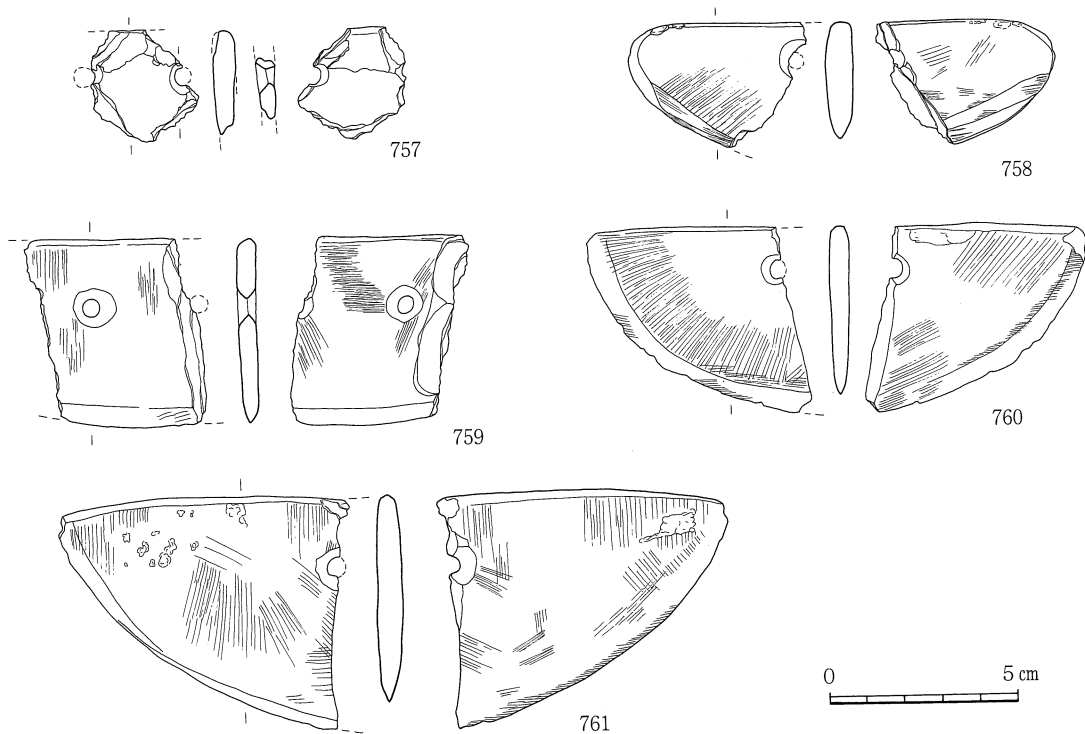
第 257 图 石器实测图 3 (实大)



第 258 图 石斧实测图 (1 / 3)



第 259 图 石包丁实测图 1 (1/2)

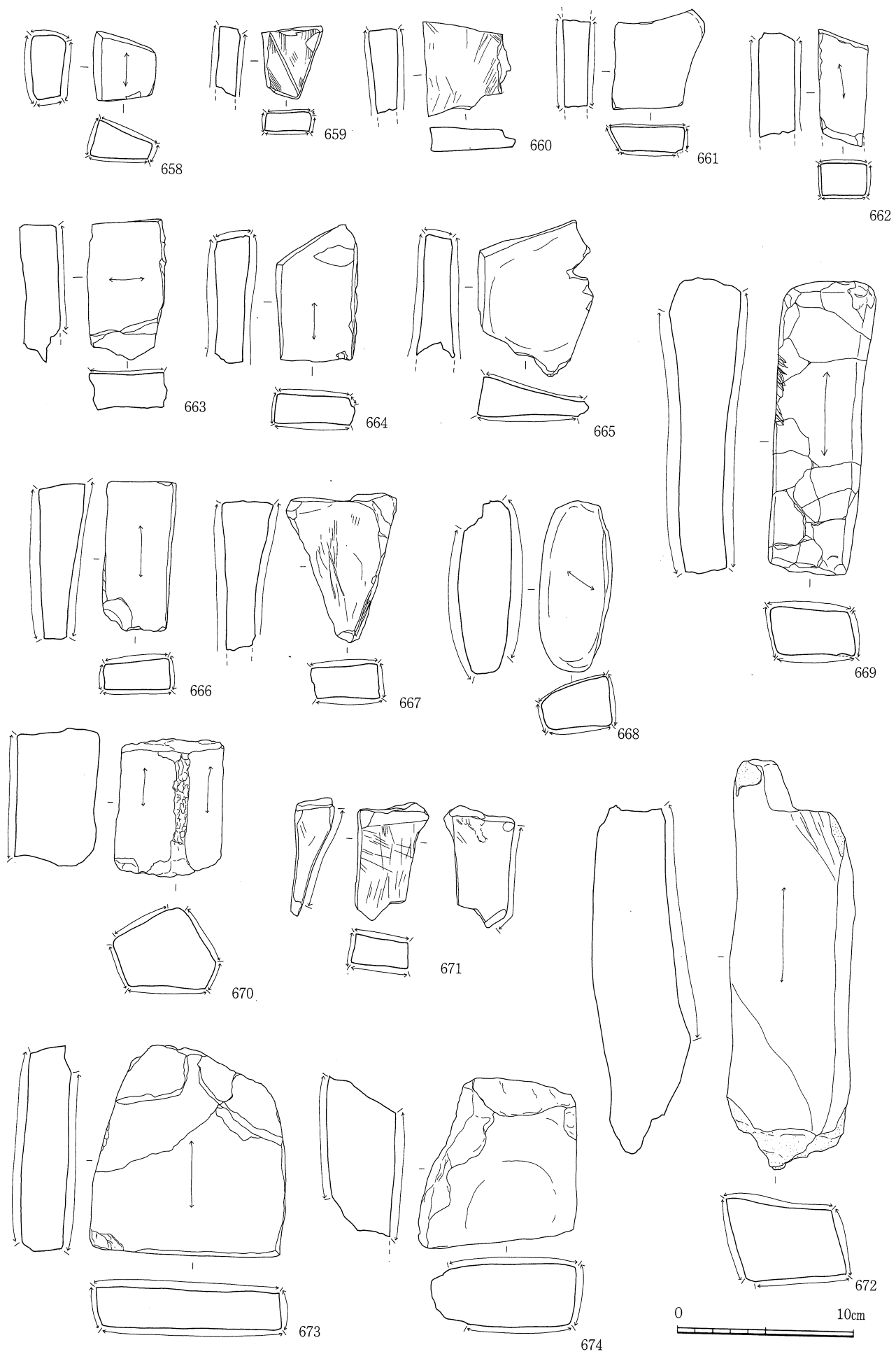


第 260 図 石包丁実測図 2 (1 / 2)

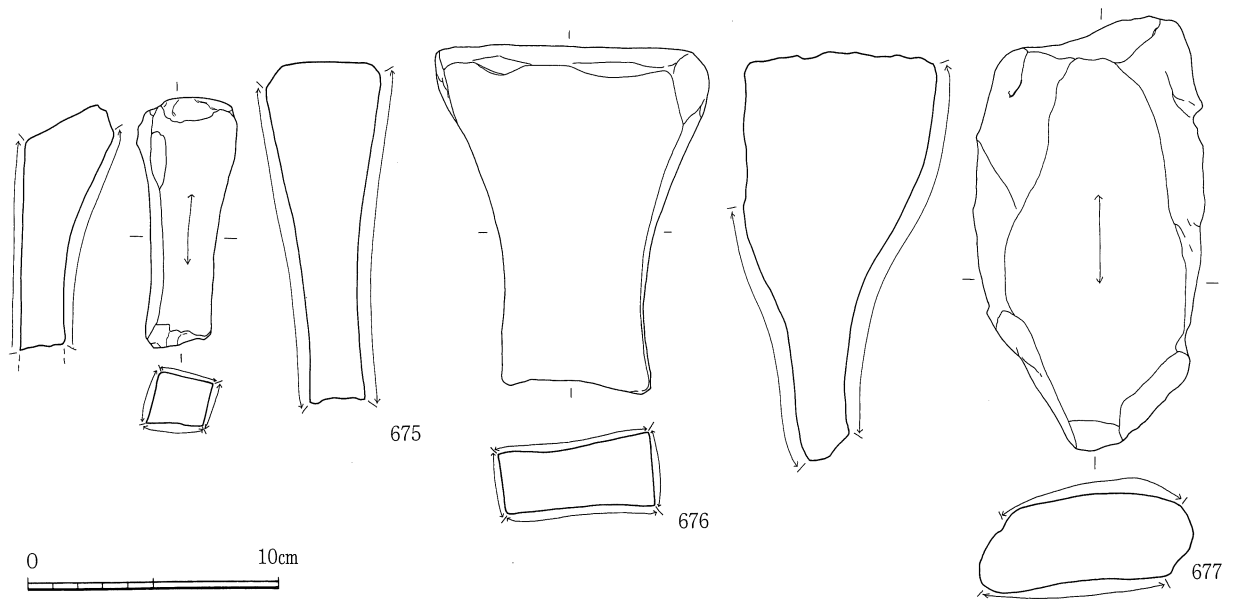
表 171 石包丁計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
739	石包丁	粘板岩	(35)	(17)	7	5.5	
740	石包丁	粘板岩	(44)	(15)	7	6.1	
741	石包丁	粘板岩	(39)	43	7	18.8	
742	石包丁	粘板岩	(45)	(50)	8	23.8	
743	石包丁	粘板岩	(72)	39	6	23.4	
744	石包丁	粘板岩	(48)	37	5	13.2	
745	石包丁	硬質砂岩	(66)	43	8	25.9	
746	石包丁	結晶片岩	(48)	43	5	15.0	
747	石包丁	結晶片岩	(70)	53	8	39.9	
748	石包丁	結晶片岩	115	54	7	88.3	未製品
749	石包丁	結晶片岩	(77)	(46)	9	28.5	
750	石包丁	結晶片岩	(68)	30	7	17.4	
751	石包丁	頁岩質砂岩	(83)	43	7	35.7	穿孔途中の孔あり 未製品?
752	石包丁	粘板岩	(69)	40	7	28.7	
753	石包丁	粘板岩	(89)	41	7	45.8	
754	石包丁	安山岩	(60)	(52)	4	24.4	
755	石包丁	粘板岩	(97)	53	8	56.3	
756	石包丁	粘板岩	(10)	36	8	36.6	
757	石包丁	粘板岩	(29)	(28)	6	6.4	
758	石包丁	結晶片岩	(46)	(32)	(6)	14.3	
759	石包丁	粘板岩	(50)	40	5	21.4	
760	石包丁	粘板岩	(57)	51	5	20.1	
761	石包丁	粘板岩	75	61	8	49.0	





第 261 图 砥石実測图 1 (1 / 3)



第 262 図 砥石実測図 2 (1 / 3)

表 172 砥石計測表

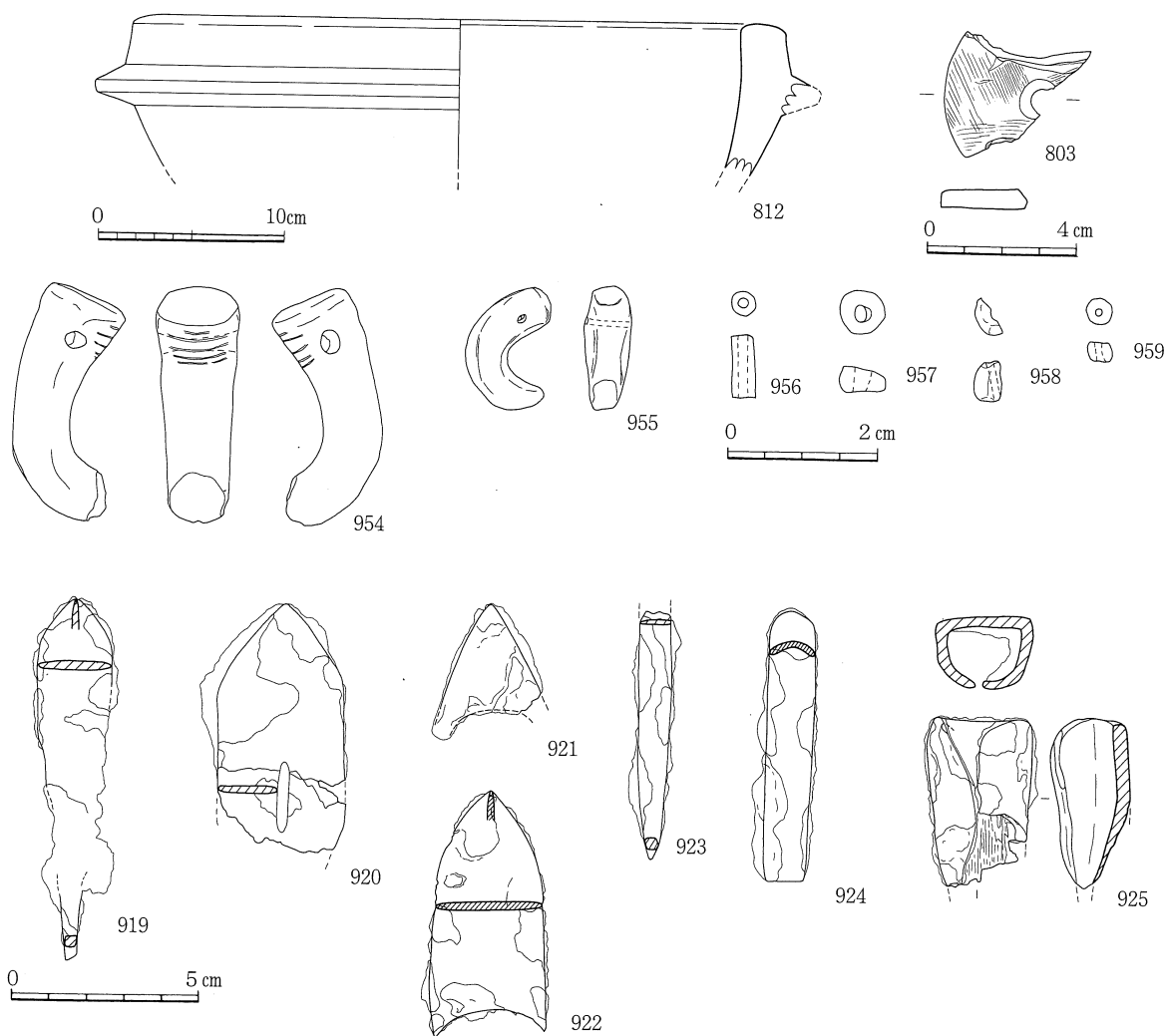
番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
658	砥石	硬質砂岩	40	35	20	34.1	全面使用
659	砥石	硬質砂岩	39	34	10	22.2	
660	砥石	硬質頁岩	54	48	14	50.7	
661	砥石	硬質頁岩	53	42	14	(75.2)	
662	砥石	硬質頁岩	(59)	26	18	(56.4)	
663	砥石	硬質頁岩	78	44	19	(106.9)	
664	砥石	硬質頁岩	76	45	15	76.5	
665	砥石	硬質頁岩	(83)	(63)	23	127.9	
666	砥石	硬質頁岩	74	37	17	125.9	
667	砥石	硬質頁岩	81	62	17	125.1	
668	砥石	硬質頁岩	96	41	28	175.0	
669	砥石	硬質頁岩	167	50	26	417.9	
670	砥石	硬質頁岩	78	58	45	317.9	
671	砥石	硬質頁岩	64	37	20	50.4	
672	砥石	頁岩質砂岩	226	68	45	1075.7	
673	砥石	頁岩質砂岩	118	106	24	478.0	
674	砥石	硬質頁岩	95	(88)	36	(428.6)	
675	砥石	頁岩質砂岩	98	39	20	94.7	
676	砥石	硬質頁岩	132	108	26	706.6	
677	砥石	頁岩質砂岩	167	90	34	1185.7	

表 173 石鍋計測表

番号	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
812	石鍋	滑石	—	—	—	592.4	

表 174 紡錘車計測表

番号	器種	残存	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
803	紡錘車	2 / 3 欠	—	0.5	—	6.9	全面研磨



第 263 図 石・鉄製品、玉類実測図 (1/4・1/2・実大)

表 175 土製勾玉観察表

番号	器種	胎土	色調	焼成	残存	長径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	備考
954	勾玉	石英 多、長石 少、 砂粒 多、角閃石、 赤色粒子 少	明褐色	良好	ほぼ完形	5.7	2.4	0.4 × 0.3	穿孔途中
955	勾玉	石英、 角閃石 少、 長石 少	暗褐色	良好	完形	3.1	1.2	0.1 × 0.1	

表 176 玉類計測表

番号	器種	材質	残存	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
956	管玉	?	完形	暗緑色	0.8	0.3	0.1 × 0.1	0.1	
957	小玉	ガラス	完形	—	0.6	0.6	0.2 × 0.2	0.1	
958	小玉	ガラス	1/2欠	—	—	0.7	—	0.1	
959	小玉	ガラス	完形	—	0.3	0.3	0.1 × 0.1	0.1	

表 177 鉄器計測表

番号	器種	全長 (cm)	頭部長 (cm)	刃幅 (cm)	茎径 (cm)	刃部厚 (cm)	備考
919	鉄鏃	(9.6)	4.2	2.0	—	0.2	
920	鉄鏃	(6.6)	—	3.4	—	0.2	
921	鉄鏃	(3.5)	2.8	—	—	—	
922	鉄鏃	(6.0)	—	3.1	—	0.5	
923	鉄鏃	(6.6)	—	0.9	—	0.1	
924	鈍	(7.2)	—	1.2	—	0.2	
925	鉄斧	(4.4)	—	—	—	—	柄の木質残存

## IV. まとめ

### 遺構

後迫遺跡の調査では生活遺構として竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、粘土採掘坑等が、祭祀遺構としては小児用甕・壺棺墓、石棺・石蓋蓋土坑・土坑墓が検出された。検出遺構からみた時期区分は、弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで、8世紀中頃、12世紀代の3期に分かれる。出土遺物からみると表採ではあるが旧石器時代から当地区での生活の営みが窺える。旧石器～縄文時代の遺構はおそらく弥生時代以降の開発か、近代の土地区画事業によって消滅させられたものとする。また、古墳時代以降は日田市内では台地上に集落が展開する遺跡は少なく、盆地内低丘陵地で集落の営みを開始していくことからみて、後迫遺跡も同様であろう。古代の掘立柱建物跡は当時の何らかの施設の跡と思われるが、遺物・遺構とも少なく、明確な答えではない。

竪穴住居跡は弥生時代中期後半の時期と弥生時代後期中葉～後葉を中心とした2時期に大別されるが、ほとんどの住居跡は弥生時代後期中葉から古墳時代初頭までで、中期後半の住居跡は63・69・73・74・82・84号住居跡の6軒である。他にカマドを持つ8世紀中頃の住居跡(68号住居跡)1軒が検出されている。土坑・粘土採掘坑は遺構に伴う遺物の出土がほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期後半、後期初頭～前葉頃、中葉～後葉頃の遺構がみられる。他に奈良時代の土坑2基、中世の土坑2基が検出されている。甕・壺棺墓は弥生時代中期後半を主体とした時期で、1基(14号甕棺墓)が弥生時代後期後半～終末の時期である。石棺・石蓋土坑墓等はほぼ弥生時代後期後半前後と思われるが、31号墓は12世紀代の中世墓である。掘立柱建物跡は奈良時代の遺構である。

後迫遺跡の立地する山田原台地上の弥生時代の大規模な生活遺跡分布状況をみると、後迫遺跡の立地する山田原台地上には西約1.2kmに小迫辻原遺跡<sup>註1</sup>が位置し、弥生時代前期後半～中期初頭を中心とした竪穴住居跡・土坑等が検出されている。さらに同台地の西1.7kmには朝日宮ノ原遺跡<sup>註2</sup>が位置し、弥生時代中期後半～後期初頭の住居跡・土坑・甕棺墓等が検出されている。後迫遺跡では後期中葉～後葉を中心とした住居跡や土坑等が検出されている。山田原台地は広大なうえ、3遺跡の調査面積を合計しても数%にも満たず、さらに他の遺跡も多数存在するが、これら3遺跡の生活遺構の変遷を考えていけば山田原台地上の弥生人の生活の流れが追えるのではないだろうか。無論この3遺跡以外にも周辺には大集落遺跡が多数存在する。後迫遺跡から日田盆地を挟んで約2km南東側の台地上に佐寺原遺跡<sup>註3</sup>が立地している。当遺跡は台地の一部分の調査ではあったが、弥生時代前期末から後期中頃までの竪穴住居跡と甕・壺棺墓等が検出されている。また、後迫遺跡から盆地を挟んで1.5km南西の吹上原台地上に吹上遺跡<sup>註4</sup>が立地する。当遺跡は弥生時代前期後半～後期終末にかけての拠点型の大集落遺跡と考えられている。

次に祭祀遺構であるが、調査区内では生活遺構と祭祀遺構の明確な分けが行われていることが特徴である。しかし、集落の規模からみれば東側の墓域もごく小規模なものである。周辺の墓地遺構としては谷を挟んで0.8km西側に草場第二遺跡<sup>註5</sup>が立地し、時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓群である。ただ草場第二遺跡の西数百mに小迫辻原遺跡が位置することからみて、この遺跡周辺の墳墓群と考えることが妥当であろう。また、後迫遺跡の西0.2kmに草場遺跡<sup>註6</sup>が位置し、昭和31年の調査においては2基の箱式石棺墓と、後漢鏡である方格規矩鏡片が出土している。大型の成人用甕棺墓の出土も確認されたことから、当遺跡周辺が後迫遺跡の墓域の可能性をもつであろう。或いは後迫遺跡は南側に広く展開しているため、未調査区に墓地群が展開する可能性もある。いずれにしても今後の調査で次第に明らかにされるであろう。

## 遺物

後迫遺跡からは多量の遺物が出土している。時期的には旧石器時代から中世に至るまでの石器・土器である。旧石器～縄文時代の石器は検出遺構上面の包含層や遺構埋土中から散発的に出土しており、遺構の検出はない。確認された遺構は弥生・古代・中世の時期で、主に弥生時代の遺構が大半を占める。それと伴に出土遺物のほとんどが弥生土器である。また、遺構上面に堆積していた表土・埋土中からも多量の弥生土器が出土している。これらの一括遺物は調査区の西側高台に展開していた遺構群が、昭和40年代の土地区画改良事業によって整地され、今回の調査区一帯に押し込まれた結果であろう。土器意外では石包丁・砥石・鉄鎌等の農耕具の出土量が非常に多い。このことは当遺跡が農耕を主流とした集落跡であったと言えよう。また、耕作地は東側斜面下に広がる沖積地であろう。

土器・石器以外に注目すべき遺物として、2号墓(箱式石棺墓)から小型内行花文仿製鏡が出土した。日田市内で弥生時代～古墳時代初頭の遺構からの鏡の出土例は5例目である。1点は先述した草場遺跡出土の後漢時代の方格規矩鏡片、1点は草場第二遺跡の方形周溝墓内表土中から出土した内行花文仿製鏡片、1点は小迫辻原遺跡土坑内出土の鏡片で、後漢時代の雲雷文内行花文鏡片、1点は徳瀬遺跡石棺墓内出土の位至公鏡片である。小迫辻原遺跡以外の4点はいずれも墓に伴うと思われる遺物である。後迫遺跡出土の内行花文鏡は、仿製鏡ではあるが完形品としての出土は初めてである。また、調査区から100m程度南側の畑地において天地返しを行った地点があり、石棺材とともに鉄剣が出土している。このことから墓域は調査区内に留まらず、さらに南側方向へも展開していた事が判る。出土遺物も今回の調査では仿製鏡1点だけであったが、今後の調査結果によっては他の遺物の出土も考えられ、明確な時期も明らかになっていくであろう。

今後、この地域は徐々に周辺の開発等によって遺跡の全容が次第に明らかにされていくであろう。このことでさらに後迫遺跡の集落の展開や墓域との関係等、今後の新たな展開に期待したい。

- 註1. 田中裕介他『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 大分県教育委員会 1999
- 註2. 土居和幸「朝日宮ノ原遺跡(D地区)」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ 日田市教育委員会 1989
- 註3. 松本康弘『佐寺原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
- 註4. 村上久和『吹上遺跡』Ⅰ・Ⅱ 日田市教育委員会 1980・1981  
土居和幸「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ 日田市教育委員会 1986・1987・1991  
土居和幸『吹上遺跡—6次調査の概要—』 日田市教育委員会 1995
- 註5. 高橋徹他『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 1989
- 註6. 土居和幸他「第Ⅰ編 第二章弥生時代 第二節 2後期の遺跡」『日田市史』 日田市 1991
- 註7. 行時志郎「徳瀬遺跡」『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1995  
稲村博文『徳瀬遺跡』大分県文化財調査報告書第94輯 大分県教育委員会 1996

## 参考文献

- 高倉洋彰「弥生時代小型仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号 日本考古学会 1972  
速水信也他『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第27集 小郡市教育委員会 1985  
折尾学他『原遺跡第一次の調査』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第492集 福岡市教育委員会 1996  
速水信也『小郡中尾遺跡2』小郡市文化財調査報告書第110集 小郡市教育委員会 1996  
吉田博嗣『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯 大分県教育委員会 1997  
小池史哲他『高取五反田遺跡Ⅰ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 福岡県教育委員会 1998  
速水信也『大崎中ノ前遺跡2』小郡市文化財調査報告書第123集 小郡市教育委員会 1998  
坂本嘉弘『陣ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第9集 玖珠町教育委員会 1999